

源頼朝

吉川英治

青空文庫

雪千丈

一

「^{すけ}佐どの」

「佐どのうっ」

「おおういつ」

すさぶ吹雪ふぶきの白い闇にかたまり合つて、にわか立ち止まった主従七騎の影は、口々でここう呼ばわりながら、佐殿のすがたを血眼ちまなこでさがし始めた。

「見えぬ」

「お見えなさらぬ」

「^{たそがれどき}つい黄昏時、^{しのはらつつみ}篠原堤へかかる頃まではたしかに、われらの中にお在わしたものを」

暗然と、求める術すべを失つた眼は、ただむなしく、十方を掃いてゆく白魔の暴威にばかり

奪われてしまう。

「……もしや敵の手に」

誰も皆、ひとつ憂いに囚われて、一瞬ほどは、眉にも睫毛にも、兜の緒にも鞍つぼにも、雪の降り積るにまかせたまま、駒首寄せて声もなかった。

平治元年の十二月だった。

きのう二十七日の朝から、京都に大乱の起つたらしい事は、この近江の国にもはや知れ渡っていた。四明ヶ岳や逢坂の山の彼方に、終日、黒煙が立ちのぼって見えたので、四年前の保元の乱の時よりも、こんどの合戦は大きかったにちがいないと、湖畔の駅路や宿々では伝え合っていたところへ、

（——六波羅殿のお布令ぞ。源氏の与党と見たら、捕えて突き出せ。義朝の一族と見かけたら道を通すな）

と、平家の武士や、宿場の沙汰人たちが布令て来たので、戦争の結果も、さてはと知れ、人や追討ちに係り合うて憂き目を見るなど云い合わせたように、二十八日の夕ともなれば、どこの宿場でも野辺の部落でも、かたく戸閉して、櫓火の明りすらも洩らしている家はなかった。

「……ぜひもない」

やがて。

さまのかみよしとも

左馬頭義朝は、無然と、諦めの声をもらした。佐殿の父である。

年ごろ三十七、八。この中でも、眉目のすぐれていることや、黒桃花毛くろつぎげと名のある名馬に跨またがつて鞍負けせぬ骨づくりなど、一目にもそれと知れよう。諸国の源氏の長者であり、六条河原の合戦にやぶれる最後までは、まだ千余の兵や、旗本の一族に守られて、

(この君なくば)

と、頼みに仰がれていた人だった。

都を落ちる時は、それでも同勢三、四十人は連れていたが、人目立つため、暇いとまをやつて別れたり、討たれたり……、深傷ふかでのため落伍する者もあつたりして——勢多せたを越え渡つた頃には、父子と主従、わずか八騎となつていた。

かえり

顧みて今、義朝のまわりを見まわせば、十九歳という長男の悪源太義平あくげんたよしひら、まだ十六の

次男朝長ともながの骨肉たち。

郎党では金王丸こんのうまる、鎌田兵衛正清かまたのひょうえまさきよ、平賀義信ひらがよしのぶなどであつたが、このうちにいたはずの義朝の三男で、ことし十三歳になる右兵衛うひょうえのすけ佐頼朝のすがたが、いつのまにか見失

われてしまったのであった。

生捕られでもしたか。

雪にでも埋うずもれ去ったか。

気丈な公達きんたちとは郎党たちも信じているが、何といつてもまだ十三といつては身なりも

小さい。それにまた、義朝にとつては、嫡男義平よりも次男の朝長よりも、最愛な御子であつたものを——と人々はこのまま千丈の雪に埋もれようとも、探し出さないうちは前にも進めぬ心地で果てなく立ち迷うていた。

すると義朝は、

「もうよい。先へ急ごう。わしが子だ、生きるものなら独りでも生きて行こう。死ぬものなら死ぬ、ぜひもない」

云いすてて、心づよくも、黒桃花くろつぎげの手綱たづなを持ち直し、伊吹の麓を見て歩みだした。

二

——捨てて行け。

義朝の一語には、誰も彼も、意外な気もちに打たれた。

常日頃は、子に甘すぎる頭こゝろのとの殿よと云われる父親であつたのに。

わけて佐殿すけどのは、目の中へ入れても痛くないほどな可愛がりようで、こんどの合戦に際しても源家重代の「源太ヶ産衣うぶぎ」という鎧よろいと、「髯切ひげきり」の太刀たちの二品をば、嫡男の義平にも次男の朝長にも与えずに、

(初陣ういじんなれば——)

と、わずか十三にしかならぬ三男の佐殿に譲られたほどな愛し方であつたのである。

その御曹司おんぞうしのことゆえ、さだめし義朝が先になつて、

(後へもどろう)

とか、

(手分けして尋ねよ)

とか、狂おしいばかりな下知をなさるかと思ひのほか、吹きすさぶ雪より冷たく、

——捨てて行け!

と、自身もう先へ駒を急がせているのである。郎党たちは、その姿に、なおさら眼を熱くしてしまつたのであつた。

頭殿——義朝の心は推しはかるに難くない。

六条河原にはたくさんな一族や味方の兵を死なして落ちて来た敗軍の将である。わが子の生命だからとて、それと変る立騒ぎを見せる理由はすこしもない。

なおまた、今、頭殿の胸をいっぱいしに占めているのは、ひとり右兵衛佐頼朝やそのほかにもある子等の事などではなく、源氏全体のこの頽勢を、

(どう盛り返すか)

の画策であった。大きな責任感と、やわかこのままには、と思い募る無念さであった。

ひとまず西美濃の海道筋にあたる青墓あおはかの宿まで辿り着こう。宿場の長者で大炊おおひという

者の娘は、延寿えんじゆといつて、さる年頃目をかけた女性で、自分とのあいだには、夜叉やしやという女の子まで生なした仲である。尋ねて行けば親どもも、すげなくは扱うまい。

そして、それからだ。

長男の義平は、東山道の源氏を催して攻めのぼれ。次男朝長は、信州路へ下つて、甲斐源氏をよび集めるがよい。自分は坂東一帯の同族を召集して、東海道からふたたび西する。

三道から一挙都を衝つこう。

あの清盛、重盛しげもりの父子おやこなどにも、きよう自分たちの歩んだ千丈の雪と敗軍のみじめな

道とを、踏ませてやらねば心の濟むものではない。武門の長者として生ける面目があるものではない。鬼神ともなれ。

頭ここのどの殿の胸は、それらの事で、燃えきつておられるのだ。だから形ぎようてう相もまったく日頃のものではない。心のうちを推し計るも、余りに傷いたましく涙ぐましい。

「……………」

郎党たちは、そう分っているだけに、何と慰めることばも知らず、黙々と、黒桃花くわつつきげの尾や馬蹄に煙けぶる粉こなゆき雪の旋つむじかぜ風かぶとに、兜まえたての前立をうつ向けがちに従って行つたが、そのうちに一ノ郎党、鎌田兵衛正清が、

「殿つ。——殿つ」

と、前なる無言の人を呼びかけて、そして云うには、あなた様のお胸は知らず、正清としてはどうにも諦あきらめきれぬ、一足お先へ行つて下さい、自分ひとり駈け戻つて、佐殿すけどののご生死を見届けて追いつきます。

聞くと、義朝は、

「そうか。ムム、そうか」

吹雪の中に、駒首を向け返して、満足そうに、しかも大きく頷うなずいた。

鉄甲に鎧よろわれた氷の皮膚の下にも、やはり親の血は熱く沸たぎっているのだ。そう覺さとると、郎党の金丸もまた、鎌田正清につづいて、

「殿つ。てまえにも、ここでお暇を下さい」

と、何思つてか、突然さげんだ。

三

義朝は、しばし考えているふうであつたが、金丸がかさねて、

「おねがいです。もいちど京へ立ち戻り、かの御おんかた方達の安否をたしかめました上で、再びお後を慕い東国へ馳はせ下りますれば——」

何か、眸も燃ゆるばかり、切な情をこめて訴える声に、義朝も、

「よしつ、行け」

と、遂にゆるして、わずか四、五騎の残る面々と共に、雪けむりのうちへ遠く駈け去つてしまった。

見送つてから。

鎌田兵衛正清と金丸のふたりは、すぐ道を西へ取って返し、途々も、

「すけどの佐殿ようつ」

「佐殿はおわさずや」

と、人影は見なくても、もしや、雪の下に埋もれておりはせぬか、田にでも転び落ちておいではないかと、雪へ呼び、風へ呼び、野面へ呼び、やや二、三里も探して来た。

「兵衛どの」

「おうつ。何か」

「残念ながら佐殿のほうは、あなたへお探しを任せますぞ。ここは森山宿の追分、てまえは京へさして急ぎますれば」

別れて行きかける姿へ、

「金王。金王」

「はい」

「しばし待て。あの山陰に、小屋らしき物がある。獵師どもの獣小屋かも知れぬ。あれまで——」

兵衛正清はそう云って先に駆けた。獣小屋を窺ってみると人気はなく、土間には土を掘

つた炉穴ろあなに槽ほとの燃え残りがいぶつている。辺りの薪まきをくべ足し、腰をおろして、

「金王。おぬしは、京へ戻るといふが、都の内には、平家に降こうを乞うて、生き長らえておるような腰ぬけはいざ知らず、源氏と名のつく者は、一人だに、陽ひの映さす下は歩けぬ世となり終つたが……そうした危うさを合点で行くのか」

「元よりです。乱後まだ一日か二日、洛内の余燼よじんもいぶつておりましよう。勝ち誇つた平家の武者ばらの気も立つておりましよう。けれど十分、心して、敵の目をぬけて紛れ入まぎりつもりであります」

「そして？」

「その先の事ですか」

「されば……おぬしの仰せつかつた使命あての的は、およそ察しはついておるが」

「いや、そのお使いは頭こゝろ殿どのから仰せ出した儀ではありません。お口にだに洩らさぬだけに、お胸のうちを察して、この金王から途々みちみち何度も申しあげ、ようやく、ではとお許しが出たので参るのです」

「よくぞ気づかれた。われら源氏という者の一門は今日亡び去つても、明日あしたへながれる血は亡びぬ。その一脈のお血につながる可憐いじらしきお人や幼い方々が、まだ都には残されてお

ざつたな」

土間炉の櫓が燃えてきた。

燦^{さん}として、二人の具足や太刀金具が光を放つ。それにつけて満身の雪も滴^{てきてき}々としずくして落ちた。いや二人の涙はそれにまさるものがあつた。

「……………」

頭殿にはこんどの合戦に伴つた若武者の、男々しい子たちのほかに、まだ母の膝も離れぬ幼いのが、よその館^{やかた}に三人もいた。

その母なる人はもと九条院の雑仕女^{ぞうしめ}であつた常磐御前で、深窓の女性ではないから、平常でも世間にはつつましく、一族の晴れ事などにも余り姿を見せず、葉がくれの寒椿の花の覗^{のぞ}けば紅きがように陰住居^{かげずまい}していたが、すでに左馬頭義朝とのあいだには、ことし七ツになる今若、五歳の乙若^{おとわか}、そしてまだ乳恋うさかりの牛若と、男の子ばかり三人の和^わ子を生^こんでいたのであつた。

馬ねむり

一

長居は心がゆるさない。焚く櫓の火もあまり過ぎては、暖に馴れて、かえつて後が辛い、人目を招く懼れもある。

ふたりはやがてまた、獸小屋を捨てて騎を急がせていた。そして以前の岐れ路まで来ると、

「では、金王」

「兵衛どの」

改めて、無量の思いを、呼び交わしつつ、

「行く先のご無事を祈り申しておるぞ。常磐さま始め、おちいさい公達たちのご先途、くれぐれも頼み参らすぞ」

「心得て候」

金王は、頼もしげに、そう答えてからまた、

「この辺りにて、油断はなりません。お身様にも、心なさりませ。——少しも早く、佐

殿とお出会いなされて、先なる頭殿ここのとのを追い、つつがなく美濃路へお遁れのがあるように「
 「おお。ではまた、いつの日か、東国で会おうぞ」

「はっ。おさらば」

「さらば」

ひとり西へ。

また、辻を東へと折れた兵衛正清は、琵琶びわの湖を左に見ながら、ふたたび佐殿の影を彼方あ此方ちがし求めた。

けれど、右兵衛うひょうえのすけ佐頼朝のすがたは、ついに、朝までも見出すことができなかつた。

*

*

*

何処で父や兄や郎党たちの群むれからひとり下がったのか、頼朝は気がつかなくかつた。雪にふさがれたまま凍りついたような臉まぶたを、はつと開いて見ると、いつの間にやら父も見えない。兄や郎党たちもいなくなつたのであつた。

「さては遅れたか」

頼朝は、にわかに駒を鞭打つた。

彼の驚きと共に、駒も驚いて、突然、まっ白な旋風つむじかぜを起して狂奔きようほんした。

しかしわずか急ぐとすぐ駒は疲れた。彼も疲れた。心細さもない、愛慾もない、怖ろしさもない。

ただ睡ねむたかつた。

彼はまだ十三の童子武者であつた。源氏重代の紺こんおどし「源太ヶ産衣うぶぎ」の具足をよろい、髻ひげきり切の太刀を横たえ、逞たくましい鹿毛かげの鞍にあるために、一かどらしくは見られるが、何といつても、まだ十三歳であつた。

「……睡たい」

慾も得もなく思う。

鞍腰くらしと手綱の手は、自然、凍りついたように無意識な調子をとっているが、頭脳あたまはまつたく行く道になかつた。白い天地と同じように、頼朝の頭脳のなかも、ただ白かつた。

——白い、白い、果てなく白いものを夢みつつ揺られていた。

思うに。

彼はこんな状態を、きようは何度も繰返していたにちがいない。その間に、父義朝や家け人の群むれから迷まぐれてしまったものであろう。わずか十間か二十間も隔へだてると、もうお互いの姿も見えない白毫はくごうの霏ひ々ふん紛ふん々ふんなのだ。それに道とても、一足おくれれば、西したか、

東したか、馬蹄ひづめの痕形あとかたもないのである。

——佐すけどのうっ。

——佐殿うっ。

しきりと自分を呼ぶ気がする。頼朝ははつと眼をひらく。きれいだ！ 実にきれいなと思ふ雪ばかりである。

駈けても、人影一つない。止とどまつても、人間のおいもせぬ。白一色だ。人の気けもない世間とは、こんなにも美しいかと思ふばかりである。

頼朝はまたいつか、馬の上で、うとうと居睡いすいつてしまふのであつた。

二

元、いづれの家人けにんの成れの果てやら、森山の宿に、源内兵衛直弘げんないひょうえなおひろとよぶ怖こわらしい牢人者が住んでいた。

昼のうちこの辺りまで、六波羅ろくはらの武士が来て、宿場の長おさや、沙汰人どもをあつめ、訓示して去つたことばには、

「左馬頭さまのかみの一族、そのほか源氏の家人どもが、飢えうに糧かてを求め、矢傷やがたに薬を乞いなどし
て見えたる折は、親切顔して、小屋へ入れよ、入れ置いてすぐ、地頭じとうへ訴え出るなり、沙
汰人や地侍たちで力を協あわせ、縛からめ捕とつてつき出すもよろしい。——いづれにせよ、用捨もちす
な。匿かくうたら断罪に処するぞ。またよい落武者討ち取つて、首を証しるしに持参なせば、それ
も由ゆ々しい汝らの出世となろう。一代富貴の基もとともなるほどなご感賞にあずかるあずから
ぬも、この折だぞ」

と、あつた。

人は待まつ春とか年暮くれとかいえ、源内げんない兵衛ひょうえは秋からの布子ぬのこ一袖。洩はなたれの子、しらく
も頭の子、ひかん病やみの子、乳の出ぬ乳に泣く子と吠える女房などの住あはむ茅や屋から、こ
の布令ふれを知ると飛び出して、

「春の登あしおと音が聞えるぞ」

と、裏うら藪やぶの竹を伐きつた。

削そいだ切つ先へ油を塗り、猪追ししおい眼を光らして、昼間から諸処しよこをうろついていたが、春
の登音は眼には見えない。

夜になった。

吹雪の小やみに、時々、青い月かと思うような空明りが映す。犬のように、宿場端れをのそのそと雪沓で踏んで来ると、

——がさつ。

と、町屋の厩で物音が聞え、馬のうしろで二本の長柄刀の刃が光った。

「……だ、誰だっ？」

すくみ腰は双方でしていた。

やがて、見さだめてから、

「源内じゃあないか」

馬糧の中から出て来たのは、これも宿場の牢人どもで、きよ用の布令に、ふだんの懶惰を——蹴して、寒さも睡さも忘れている仲間だった。

「どうだ」

「なにが」

「いい首でも拾わなかったか」

「まだ、まだ」

「はて。……雁ばかり飛んでいやがる」

啣かこち合つていた時だった。

その雁の群むれが、湖畔のほうへ斜めに落ちて行くのをぼんやり眺めていると、三名のすぐうしろを、一騎の武者が、極めて静かに通つて行つた。

駅路は雪が搔ひいてある。両側とも廂ひさしへまで届きそうな雪の山だった。その雪越しに、馬上の半身だけがちらと見えたのである。

「……やつ？」

「叱しつ」

長柄ながまき刀と竹槍は、雪の山へへばりつきながら、後を尾つけた。——だが騎馬の武者は余りにも平然としていた。落武者らしい恟きよう々きようした気くばりも見えないのだ。

「何だろう、あいつ？」

「おや。居眠いみつていやがる」

かえつて三人は躊躇ためらった。

しかし、姿がゆるさない。忽然こつねんと下界へ墜おちて来た一つの星みたに見えた。それが、「源太うぶぎヶ産衣うぶぎ」や「髻ひげきり切」の燦爛さんらんとは知るよしもなかったが、何しろどこか粧よそ装おいが違ちがう。

これだ。由々しい出世のつると云われたのは。春の躰あしおと音もこれに出会う虫の知らせだ。
 ——のがすな、ぬかるな。——眼くばせし合つて、まず源内から雪の山を躍りこえて往来
 へ飛び出た。

「待てつ、公きん達」

「……………」

右兵衛佐頼朝は、がくと、愕おどろいたように振向いた。

三

見つけない男が、竹槍を向けて何か云つた。他ほかにも、長柄ながまき刀を持ったのが二人ほど、自
 分のほうを睨にらんでいる。

さすがに、遠くからである。うかと、近づいては来ないのだ。頼朝は、

「なにか」

とも云わなかった。

怖いという気もそうしない。槍や長柄刀は血ぬられたのを飽きるほど戦場で見たばかり

だからである。それを下人げにんずれが持つて踏ん張つてなどいても、蠮螋かまきりのようには見えなかつた。

「御曹司おんぞうし、耳はないのか」

「……………」

「いづれから来て、いづれへ渡らせられる。無用な事。この先とも、遁のがれる道などはない。――粥かゆなど食わそう、馬を降り召され」

「……………」

頼朝は、依然、押し黙つたまま馬をやりかけた。

「やいつ、待たぬかつ」

源内兵衛は、もうこの獲物を取つた気がした。飛びかかつて突つかけた。頼朝は駒の平ひ頸らくびへ抱きついた。駒は高く脚をあげたまま狂いながら後へ退さがった。

竹の柄は雪にすべる。どこか突いた気はしたが相手には応こたえがない。源内兵衛は焦いらつて、竹槍を投げすて、腰の野太刀をひき抜いた。そして狂い旋めぐる駒の鞍くらわきを追い廻して、

「うぬつ」

振りかぶると、馬上、

「痴しれ者ものかな」

と、頼朝は初めて口を開き、髻切の太刀の抜きぎまに、無我無心、源内兵衛の素頭すこうべを
 払った。

眼の前に起った獣けもののような絶叫と、どす黒い血の噴騰ふんとうに、頼朝自身すらびっくりした。
 はつきり眼が醒さめた心地だった。

「降りろつ」

まだ云っている。それは、長柄刀片手に、馬の口をつかんで離さない男である。

鞍腰上げて、

「下司げすつ」

と、馬額うまびたいをのぞき越しに斬り下げると、男は跳びのいたが、肘ひじから先を失って、わ
 つと転げた。

雪に拡がった血の傘は怖ろしく大きく見えた。残る一人の長柄刀はもう近寄りもし得な
 かった。その怯ひるみ面づらへ、

「寄るか！」

と、頼朝は叱って、太刀の平ひらは馬の尻を打ちたたいていた。

血を見たせいか、馬もにわかには悍氣かんきを震ふるい立って、まるで雪神でも翔かけるように、雪風を裂いて走った。

急に頼朝は怖おそくなった。

父はどうしたろう。兄は、一族たちは。

頼みの乗馬とも、翌る日は別れなければならなかった。雪に脚を折ったのだ。徒歩となれば、具足は重い。それに人目にもつくので、重代の太刀も鎧よろいも、馬と共に捨てて、身軽になつて歩いた。

二十八日の夜の頃は、もう自分でも何処どこを彷徨さまよっているのか覚えなかった。頭も寝不足でしんしんと痛い。耳も頬ほおも触ふつてみても自分のものの気がしない。父や兄達の事すら、考えられない程だった。ただふしぎに戦場の有様だけは頭脳あたまから消えなかった。眼をふさぐと、六条河原あたりから御所の間近まで焼けたその日の炎や黒煙が見えてくる。じんじんと、太刀ひびきや矢唸りも耳の底から甦よみがえつて来る。何度も足に躓つまずいた首のない胴だの、足のない屍かばねなどもありありと思ひ出される。

怖おそくない。怖いなどというそんな浅いものではない。

(戦争って、こんなものか)

と、頼朝は思うだけだった。そしてそんな幻想と思い出に取憑とりつかれながら、彼の夢は、その晩江州浅井の山里の、誰が家の小屋とも知れぬ戸もない廂ひさしの下に、柴薪しばまきや漬物桶などの間に挟まって、深々と睡り落ちていた。

世間

一

夜が明けると、その家の主あるじらしいのが、炉にくべる薪まきなやを薪納屋へ取りに来て、非常に愕おどろきに打たれた顔した。

「嬢かか。ちよつと来てみい。……いそいで。いそいで」

彼の妻も、厨くりやから出て来て、主あるじと共に首をならべて、そこをさし覗のぞくと、息も止つたように眼をみはつた。

薪の間に臥ふしていた頼朝は、夜明けも知らず睡っていた。破れ廂やぶひさしの氷柱つらら越しに、朝の光

がその寝顔にさしていた。

白^{はくぎよく} 砥^いに彫った仏像みたいにその寝顔は気品にかがやいていた。やや面長で下^{しも}膨^{ぶく}れの豊かな相^{そうぎよう}形^{かたち}である。何の屈^{くつたく}託^{たく}もないような躰^{いびき}すら聞かれた。

「どこの童^{わらわ}である？ ……。何処^{どこ}から来て、こんな所へ」

ため息つくように、やがて主^{あるじ}がつぶやくと、妻は、彼の耳^{みみ}へ口^{くち}をよせて、猫^{ねこ}や鳥^{とり}にも憚^{はばか}るようにそつと云った。

「落^{おちゆうど}人^{にん}の子^こじやろうが」

主^{あるじ}は恟^{しげよ}つと思^{おも}い当^{あた}った顔をした。黙^{もく}つてうなずくと、足のつま先^{つまさき}で歩^あむように、そこを離^{はな}れて、妻^{つま}に計^{はか}った。

「どうしよう」

「訴^うえて出^でなされ」

「かあいそうじや」

「そんな事を云うたとて、きのうも何度、平家のお侍衆^{しやくしゆ}が、触^ふれて来たことか。匿^{かくも}うたなどと疑^{うたが}われてみさつしやれ、それこそ……」

「いや、不^ふ愍^{びん}じや。わし達の仲^{なかつ}にもあの年頃^{としがら}の子があるに」

この家は、膏藥練りを業としてるので、母屋のほうでは、倅たちや男どもが、藥研の音や藥練りをしていた。

「飯を握つて、味噌など添え、あの童に与えて追ん出してやれ。山路の方角を教えてな」
 仏 心のある男とみえて、かたく妻にいつけた。

ゆり起されると共に、頼朝はそこを出なければならなかった。

生れて初めて、人に食物を恵まれた時は、さすがに涙がこぼれた。それも山へ去つてから喰べた。

浅井の北郡は山深い。彼は日が出る方へ出る方へと自然に歩いた。小平という辺で一人の尼に会つた。

「どこへ行きなさる」

「青墓へ」

「山越えで」

尼は顔を振つた。

不破の関を通るならとにかく、この雪では美濃へ山越えなど思いもよらぬ事だという。

「まあ、庵へ来なされ」

尼は、凡人ただひとの子でないものと見て、頼朝を誘いざなった。けれど、何も問わなかった。およそ一月余りも、頼朝は尼寺の天井裏に寝起きしていた。

暗くて、窮屈で、寒かった。

藁わらや菴むしろを持ちこんで、頼朝は尼がいいという日まで、じつと待っていた。その間、毎日、

毎日、そらんじる程よく聞いたのは、尼が朝暮に誦よむ法華經ほけきょうの声であった。

経文の意味は元より酌くめないが、天井裏で聞いていると、頼朝は何だか楽しくなった。

経のことばのうちには、世尊とか釈迦しやくか牟尼むに仏ぶつとかいう語が無数に唱えられるので、この

世には平家一門ばかりでなく世尊という人もいるような気がした。その人は、公明正大、

大愛無辺の心の持主で、善心さえ持てば、自分にも味方してくれる人と信じた。

「もう山も越えられよう」

尼に云われて、頼朝は天井裏を出た。

雪の下から樹々の芽は萌もえだしていた。眼が眩くらむほど春先の天地は頼朝の心に美しく映じた。十三歳、初めて母の胎内から出たように、彼は鳥の声も行く雲も、珍しそうな眼で見ながらまた、東へ東へと山路を歩いた。

二

細谷川の道を、里へ出て行く鵜匠うしやうがあつた。

鵜匠の男は、さつきから頼朝の後を怪しみながら尾つけていたが、とうとう言葉をかけた。

「和子わこ。どこへ行くのか」

「青墓へ」

頼朝は、そう答えるしか、知らなかつた。

「青墓しるべに知辺しるべでもあるのかね」

「うむ」

「何というお方か」

「行けば分るけど」

「そうか」

鵜匠は口をつぐんだ。それきり何も問わなかつた。しかし、絶えず頼朝の容ようす子すに眼をそそいでいるふうだつた。

人に油断しない事。人の表よりも肚を観ることを、そして身を警戒することを、頼朝は、

何里か黙つて歩いていている間に、自然まな習なんだ。

「公達きんたち。わしが送つてあげましょう。あなたは誰か、源氏のお子だろう」

鵜匠は、突然云い出して、頼朝の帯びている刀を、自分の携えている山芋やまいもの苞つとへ入れ代えてくれた。

「こうして、わしが持つていて上げる。あなたは女のようにじゃ。人が問うたら、女じやと答えなされ。女のように姿態しななされ。よいかの」

悪人か善人か、頼朝には判断もつかなかった。彼はただ漠ぼくとして、身の運命を、鵜匠の男に託していた。

けれど、そう恐れはしなかった。尼寺に落ちついて、我かえに回かえつた頃から、戦争の記憶は彼方になった。大きな浪をのりこえて、浪の底からばかりと顔を出した世界に、彼のたましいは面白さをすら感じていた。

(青墓へ行けば、父義朝がいる。兄たちがいる。郎党どももいる)

道が北側から山を越えて南面へ下がると、少年の心も南向きの明るさになった。時々思おもい出されるきのうまでの都での公達きんたち生活なまも、父の豪壮やうさうな館やかたも、何の未練みれんにも考えられない。こうなるのが自然で、当り前で、飢えも苦しさも、彼の心を感傷へ引きこむには足り

なかつた。

幾日か経て、青墓へ着いた。宿の長者大炊の家へ行くのだと初めて明かすと、鵜匠は非常に驚いて、

「さてこそ、あなた様は」

と頼朝の面おもてをしげしげ見直し、苞つと入りの刀を彼の手へもどすと、名も告げずに立去ってしまった。

それまで、鵜匠の肚を、疑いぶかく警戒していた頼朝は、非常にすまない顔して、

「……あ。世尊がいた」

と、つぶやいた。

やがて、大炊の門を訪れてみると、門は閉じてあつて、喪中もちゆうの忌札いみふだらしいものが貼はつてある。裏の土堀口を押入つて、召使の者に、

「義朝の子、右兵衛佐うひょうえのすけですが、父君は在おわすでしょうか」

と、たずねると、やがて奥まつた屋の内から、

「あな」

とばかりまろ転び出て来て、彼の手を取り、足を洗そそぎ、抱えるばかりにして家の内へ入れて

くれた女性がある。

大炊の娘、延寿であつた。

「おいたわしい」

と、彼女は涙にくれていたが、頼朝はこの女性が父の何であるかもよく弁えていないし、事実、そんなに悲しくなかつたので、彼は涙もこぼさなかつた。

けれど、その後で、

「お父君には、ここを去つて、尾張の方へ落ちのび給い、正月三日というに、長田忠致に計られて、敢なくお討たれ遊ばしたのみか、その御首は、都へ送られ、平家の者の手にかかつて、都の東獄の門前にある樗の木に梟けられました」

と、聞かされた時は、それまでの無表情を破つて、声をあげて慟哭した。誰がなだめても泣きやまなかつた。

三

頼朝が泣きやまないのので、延寿の父親の大炊は、わざと声を励まして、

「そればかりの事で悲嘆にくれるようでは、この先、どう生きてゆき召さるか。左馬頭さまのかみ義朝様のお子ともあろうものが」

と、叱った。

そして、

「まだまだ怨めしい事がある」

と、語った。

悲命の最期をとげたのは、頭殿こうのどのばかりではない。嫡男の悪源太義平よしひらどのも、次男の朝長どのも、もはや此世このよのお人ではない——と云い聞かせた。

頭殿は、ここへ着いて、すぐ再び尾張へ向けて立つ真際に、予ての打合せどおり、義平を木曾路へ、次男朝長を信州方面へ打立たせたが、朝長は前から悩んでいた手創てきずに耐えかねて、途中から父の許へ引返して来て、涙ながら云うには、

（もうだめです。名もない平氏の地侍などに、恥ずかしい死目に会わされるより、父上の手にかけて殺して下さい。それを楽しみに苦痛をこらえて戻って来ました）

頭殿には、それを聞くと、

（おまえも義朝の子である）

と云つて、手ずからわが子の首を斬り落したのであつた。

また、長男の義平のほうは、飛驒ひだまで入つて、彼方あちこち此方こちの郷族へ呼びかけ、一時は少数ながら軍隊の編制とまで進みかけたが、折も折、左馬頭義朝が名古屋の辺りで討たれて首を京へ上のぼされたと聞いたので、集まつた兵もたちまち四散し、身さえ危うくなつたので、（かかる上は、ただ一人でも、敵の清盛か重盛か、何れいずかに近づいて、父や一族の恨みをはらし、義朝の子らしい死に方をしよう）

と思ひ定め、密ひそかに京都へ引返して、六波羅の近傍を彷徨さまよつていたところ、たちまち平家の捕吏に発見されて、六条河原に曳き出され、可惜あたら、二十歳はたちの春を、無慚むざんにも首斬られてしまった——と語るのであつた。

泣き腫はらした臉を上げて、頼朝は夢かと疑うような面おももちで聞いていた。

もう泣いていなかった。

泣け、といつても泣きそうもない顔していた。かえつて、

「おわかりかの」

と、大炊は泣き涙はなをかむし、延寿もすすり泣いてしまう。

「源家の正しいお血すじと云つては、もはや和子わこお一方とはなつたのじゃ。都のあたりに、

常磐^{ときわ}どのの公達とか、和子とは腹ちがいのご兄弟があるそうなが、まだお乳も離れぬ幼な児ばかりと聞いておる」

つついっい涙をかんだり眼を拭いたり、しどけなく独り語っていたが、大炊がふと、寂^{じやく}として答えもせぬ頼朝の姿を改めて見直すと、何かしら今度は自分がたしなめられているように、恥ずかしい心地がした。

頼朝は、唇^{くち}をむすび、眼を一方にすえて、血の気も失せたような顔して始終聞いていたが、

「もう泣きたくありません。皆様も泣かないで下さい」

と、云った。

そして、少し頭^{つむり}が痛むと云い、その夜は早く臥床^{ふしど}へ籠ったが、翌る日になると、どうしてもこれから東国へ行くのだと云い出し、延寿や大炊がどのように引留めても、かぶりを振って、ただ一人、そこを出て行ってしまった。

「父よ！ ……。兄^{あにじゃひと}者人っ」

春もまだ浅い関ヶ原あたりの道をぼつねんと歩きながら、頼朝はうつつに時々さけんでいた。雲を仰げば雲の彼方に父やあると思われ、山を見れば山の彼方に兄やあると思われ

た。

「ない。誰もいない」

そして自分は十四になった。天下の孤である。そう意識し直すのだった。

四

尾張守 平 頼 盛 の家人弥兵衛宗清は、小侍十数名をつれて、京都へ上る途中であつた。

頼朝は、道で行き会つた。

しかし、うつつな彼は、近づくまで何の危惧も覚えなかつた。平然と真つ直ぐに歩いて来た。それだけに宗清等の一行も彼を怪しみもしなかつたが、他の旅人や百姓などが、道を避けて、わらわらと路傍に頭を伏せるのに、頼朝は、土下座する術を知らなかつた。

少し端へ寄つて、街道の樹の根方に立ってながめていた。

「はて？」

宗清は小首を傾げた。

頼朝も、彼の方を見ていた。

「藤三。藤三」

宗清が馬上から呼ぶと、供の中から丹波藤三国弘たんぱのという小侍が、

「はつ。ご用ですか」

と、側へ駈け寄った。

宗清は、鞭を指して、

「あれに佇たやすんでおる少年は、どこかで見たような気がする。引っ捕えてみい。異相の童べいご形、不審である」

と、云った。

「はつ」

と、藤三は、隼はやぶさの蒐さかるような眼をして見廻したが、宗清が指した場所には、もう何も見えなかった。

宗清は、鞍の上なので、すぐ行方を見つけ、

「あつ、並木の堤を跳びこえて、彼方へ逃げおる！ 追えッ」
にわかに、烈しく命じた。

藤三を初め、侍たちがわつと並木堤なみぎでを越えて行つた。菜畑やら麦の耕地やら土民の小屋を繞めぐつた藪やぶなどがその向うにあつた。しばらくすると、物々しい声に曳ひかれて、頼朝は引くつ縛くられて来た。溝へ落ちたり畑土へ転んだりしたとみえて、酷むごい姿に變り果はつていた。宗清は、手荒にすな、と制しながら、大地へ抛ほうり出された頼朝の上へ馬首を臨ませて、「小冠こかんじゃ者。そちはわしを見て逃げたな。わしを知っているか」と、訊ねた。

頼朝は、後ろ手に縛くられた手をしきりにもがいていた。解こうとするのではなく、手がきかないので、起ち上がれないためであつた。

「わしを起たせてくれ」

頼朝の乞いに、丹波藤三が、

「起たんでもよい。そのままにてお答え申せ」

と、云うと、

「いや、望みのようにしてやれ」

と宗清の言葉だつた。

藤三が頼朝の襟がみをつかんで、起たせてやると、頼朝は、地に摺すり剥むいて、少し血の

にじんんでいる半面を、屹きつと、宗清の面おもてに上げて正視しながら、

「馬を降りよ」

と、責めるように云った。

「——わしは、平家の地侍などに、馬上から物を云わるるような者の子ではない。問う事があるなら、馬を降りて云えつ」

虐ひしぎつけられた少年の、半なかば、物狂わしくなった叫びとも聞かれたが、宗清は何か凡ただごと事とでない感動に打たれたらしく、はつと答えぬばかり正直な態度で、すぐ鞍から跳び降りた。そしてつかつかと頼朝の側へすすみ、叮ていねい嚙かいに頭かしらを下げて、

「お名まえを仰つしやい」

と、優しく云った。

彼の郎党たちは、たちまちの間にそこらに立った町人や旅の者や女子供などの人ばかりを追い払っていた。

宗清の意外に優しい訊ね方に、頼朝はちよつと差し俯うつむ向むいていたが、やがて素直かえに回かえつた面おもてを上げて、

「わしは、左馬頭さまのかみが三男、右兵衛うひょうえのすけ佐頼朝さよりちかという者です」

と、尋常な声で答えた。

やぶ椿

一

学僧には若い人が多かつた。

わけて、この京都八坂郷やさかこうの清水寺きよみずでらは、東大寺系なので、南都の学がく生しょうり寮りょうもあり、夜になつて一所に集まると、論議や談笑で、正月の夜も変らなかつた。

「樗おうちの木を見に行つたか」

「樗おうちの木とは」

「五条の獄舎の門前かにある巨きな木だ。義朝の首がさらしてある。後からまた、子の義平の首も並んで梟かけられた」

訊かれた者は、

「いや、見ぬ」

と、眉をひそめた。

すると一人が、

「いや、おとといからもうないぞ。いつのまにか、葬ほうむったものとみえる」

「盗んだのじやろ」

「誰が？」

皆、眼をみはる。

「云うまでもない。源氏の残党がじや。朝夕、六条の館に伺候し、頭殿と仰いでいた一族
だつたら、見ていらるる事か」

「そうよな」

あわただしい時勢の変相が、一いっとき瞬、若い学生たちの心を通りすぎた。

「罰じやよ。天の刑罰だ」

抛つて投げるように、誰かがつぶや呟く。——と、その者を睨め返して、

「何でそう云うか」

と、詰問する者がある。

「——何でと問うも愚かだ。三年前の保元の乱の折に、義朝は自分の父為義を見殺しにしたじゃないか」

「あれは義朝が殺したというよりも、清盛その他の平家が殺させたのだ。朝議ですでに斬罪と決められた人だから、たとえ義朝が庇つても助かりはせぬ。強いて弓矢にかけてもとなれば、朝議へ弓引く事になる。涙をのんでむしろ子の手で処置するしかなかったのだ」

「いや、何といおうが、最初に上皇へ献策し奉つて、合戦の口火を切ったのは、義朝ではないか。敗れて、上皇には讃岐へ流され、父為義も、朝議で死罪を宣告されるような失敗をしながら、何で今日まで——」

「待ち給え」

論議の相手は手をあげて、

「君の云うのは、人道論だ。もっと大処から視てやらねば」

「何をいう、人倫の道を外して、人間のどこに誇るものがある」

「そういえば、義朝は非人道の人間に聞えるが、生涯に瑕瑾もないという事は、今みたいな治乱興亡の劇しい中にある武将には、求めても求められない無理なはなしだ。然らば……大きな声では云えないが、六波羅殿はどうだ」

「君はまた、平家方を誹すのか」

「感情でいうわけではない」

「そう聞える」

周囲は、そこへ笑いを交せて、

「もう止せ」

と云つたが、一方の雄弁家はなかなか口を噤まないで、

「いったい義朝という人は一箇の武弁に過ぎないのさ。それが政治的な葛藤を持つたりして、平家と戦うから、前の保元の時でも、ことしの平治の乱でも、手もなく敗れてしまったのだ。信西しんせい入道などから見たら義朝などはお人のよい乗せ易い人物だろうし、いわんや六波羅殿と比較したら、武力では知らぬ事、政治的な頭のほうでは、較べ者くらべものになりはしない」

平家源氏を問わず、ゆめ、うわさ話をしてはならぬ。また、大臣や長者を呼ぶに、たとえ誰が聞いていなくても、よび捨てにする法はない。謹むべき生意気沙汰であると、常々かたく学頭から訓戒されているが、若い同士が集まると、いつかそんな事は忘れていた。

「……おや?」

そのうちに一名がふと、聞き耳を翫てて、遠心的な眼をうつつにした。誰も彼も急に口をつぐんで夜寒の壁を見まわした。どこかで嬰兒の泣き声が遠くしていた。

二

嬰兒の声は、黎明の声である。きようは闇世でも、明日のある永遠の人の中へ告げている声である。

だが。

深夜ではあるし、女人はいない筈の寺院だけに、その泣き声は、妙に若い学僧たちを懷疑させた。

嬰兒を怪しむのではなく、当然それに附随している筈の者を、すぐ臆測にのぼせて、種々な疑いを描き、

「誰か、この淨地に女を隠している者があるのではないか」

などと、他人の秘密でも嗅ぎ知ったように、急に声をひそめ合うのだった。

「——見て来ましょう」

すると。隅の方からやがて立って行く一人があつた。痩せた影法師が壁にうごいて、廻廊へ出て行きかけた。

「光嚴こうげん。おい光嚴」

室内から呼び返されて、

「はい」

光嚴は、顔と半身を見せた。

いつも病身らしく黙りこくつて、灰のように無口でいる若い堂衆である。年もまだ十七、八歳でしかないので、古顔の学がく生しょうたちはすぐからかった。

「おまえ、見届けに行くのか」

「はい」

「何だって、急にそわそわして、見に行くのだ」

「でも、気になりますから」

「さては、子連れかくまの女を、寺内に匿かくまっているのは、お前だな」

「……………」

光嚴の顔いろが青くなつたように思われた。

けれど、とたんに大勢の学生たちが、声をそろえて笑ったので、

「いいえ、滅相めつそうもない事を」

と、真面目に云い訳する光厳の初心うぶらしさを、よけいおかしがるのみで、その顔いろを怪しむ者もなかった。

嬰兒あかごの声は、間もなく聞えなくなってしまうた。そして見届けに行つた光厳も、やがてすぐ帰つて来て、

「何でもありません」

と、一同へ報告した。

「何でもないとは？」

意地悪く一人が問うと、

「はい、産寧坂さんねんざかの下の陶器すえもの作りの家の老婆としよりが、夜泣き癖のある孫を負うて、子安観こやす音へ夜詣りに来ていたのでございました」

と、生真面目きまじめに答えた。

「わははは」

「あははは」

多分そんな事かも知れないという考えもあったので、よけいな心配や臆測を描いていた各 《めいめい》が、自分を嗤わらい合つて、手をたたいた。

それを機しおに、

「眠ろう」

「どれ、寝るか」

ぞろぞろ立つて大きな伽藍がらんの睡窟すいくつへ思い思いに搔消かききえると、後は三、四人の堂衆だけが残つて、喰い散らした麦煎餅むぎせんべいの欠けらを掃いたり、短檠たんけいを片づけたりしていた。

終りに、蔀しとみを下ろして、この清水寺の一つの灯も消え果てると、もう花頂山から東山一帯には、風の音を聞くだけだった。

遥かな夜霞の底に、加茂川の水だけが、薄氷でも張っているように白かった。戦いくさは熄やんだとはいえ、まだ洛内は物騒なのであろう。六条のあたりには大きな焼け野原が出来、六波羅の辺にも、いつも見える常明燈の光も見えなかつた。

「常磐とぎわさま。お開け下さい、……お案じなされますな。最前来た光厳でございます。……常磐とぎわさま」

音羽の滝も氷柱つららになつていた。木の葉かと思えば、そこらの御堂の蔀しとみや縁ひにこぼれて来

るのは白い霰あられであつた。

「お寝みですか。常磐さま。……ぜひ、まいちど起きて下さいまし。光厳こうごんです」

産寧坂の上である。音羽の山を背に負っている。光厳はあたりを怖れながら、子安觀世音の御堂の扉とをしきりに押していた。

三

「はい。……ただ今」

御堂の中で答えがした。

低い声であつた。けれども麗うるわしい女人にょにんの年ばえが、それだけでも分つた。

静かな気けはいが中でうごく。やがて御堂の扉との隙間に明りがさした。絶えて人など住んでいた例ためしのない堂宇どううなので、葺しとみは破れ、煤すすや雨漏りの荒れもひどいのに、誰が寝泊りなどしているのだろうか。

それからして、そもそも、怪しまれてよい事であつた。だから、光厳は、外たたずに佇んで、その開くのを待つ間も、気が気ではない様子であつた。

「御前様。……ぶしつけではございますが、凡の場合ではございませぬ。どうぞ、お身み装なりなど気づかないなく、早くここを開けて、お顔をかして下さいまし」

光厳せに急せかれて、

「はい、はい。今ほど」

次の返辞は哀れなばかりうろたえて聞えたので、光厳は気の毒やら濟まない思いやらに堪えかねて、

「おそれ入ります」

と、つけ加えた。

それと共に、御堂の扉が、そろりと開いた。洞窟ひらあなのような寒さと薄暗い灯揺ほゆらぎの中に、一体の観世音が天井へつかえるばかり高々と端坐していた。

けれど、一足ここに入ると、誰もすぐ遠い昔の自身を思わずにいられない甘い匂いにくるまれた。それは人肌の温かさすら感じられる母乳ちちのにおいであった。

「やつとお寝よりになりましたね」

ちようと観世音の裳もすそのあたりに、台座を屏風びょうぶのようにして、二枚のむしろが板床に展のべてある。その一枚へ坐り直した女性と対むかいあつて、光厳は、その人の懐ふところをのぞくように

して云つた。

「ええ。よいあんばいに」

常磐ときわも、わが手に抱いている寝顔を見て、嘆息ためいきのように呟いた。

明けて二歳になったばかりの牛若うしわかである。たださえ癩かんのつよい子なのに、年暮としくれの戦から夜も易々やすやす寝たことはなく、食物たべものも喰べたり喰べなかつたりなので、母乳ちちはすっかり出なくなつていた。それに衾ふすまもない夜ごとの寒さである。泣く子が無理ではないと思う。

「ああ、和子わこたちはまた、他愛たあいものう、よくお寝みでございますなあ」

光厳は、云い出す急な用向きも忘れて、もう一枚の蓆むしろをながめ、心の底から嘆くようにいった。

ことし六歳むつつの乙若おとわかと、八歳になった今若いまわかのふたりが、寒さに、ひしと抱き合つて、無心な寢息をもらしていた。それに掛けてあるのは一枚の母の上着だけであつた。

変れば変る境遇と、光厳は胸が迫ってくる。無常といふことばは自分等が説法や雑談にも、余りに云い馴れて平凡な感じしか湧かない語であるが、眼まのあたりその無常な変相に世をさまよう人を見ては、胸が傷いたまずにいられない。

この三人の和子は、人も知らぬはない、きのうまでも、源氏の人々から弓矢の棟梁、一

族の長者と仰がれて、六波羅ろくはらの清盛や小松殿の一門とも、肩をならべていた左馬頭義朝まさきの紛れない遺児わすれがたみなのである。

それにまた、母なる人も――

幼い時から九条の女院にょいんに仕えて来て、身分は低い雑仕女ぞうしめではあったが、義朝が彼女を見出すまでには、その権勢を以て、千人の美女のうちから百人を選び、百人のうちから十人を選び、十人のうちから唯ひとりの常磐を選んだと――都の辻あたりでも噂されたほど眉目みめすぐれた女性である。

十四初めて黛まゆを描き、十五すでに簾裡れんりに裳もすそを曳く――と、玉の輿こしを羨まれた彼女も、ことし二十三、はやくも両の乳に三児を抱いて、住むに家もなく、大悲の御廂みひさしにこの寒空の夜を凌しのごうとは、誰かその頃、想像でもしてみた者があろう。

光厳は、それやこれ思うと、何も云い出せなくなつて、泣きもせで自分の前に坐つている常磐の臉が、むしろ不思議にすら思えた。

四

かくては――

と、光厳は心を鬼にとり直して急に云い出した。

「常磐さま、追い立てるようですが、もはやこの御堂も安全ではなくなりました。和子様
の泣き声が、夜更よふけると、遠く本堂のほうまで聞えるのです」

「無理はありません。あのように泣き出すと、火のつくような声ですから」

「学寮の若い人達が、今夜も怪しみ合つて、危うく詮議せんぎされるところでした。――半月ほ
どは裏山の花頂堂にお匿かくまい申しあげ、そこには食物のお運びも出来ないため、おとといの
夜からは、ここへお移し申しあげましたが、人目や耳が近いだけ、裏山よりもなおここは
物騒でした」

「ご心配をかけました。ぜひもない事です。ほかへ立ち去ることにいたします」

「寔まことに……申もうし難にくいのでございますが」

「いえいえ、大晦おまつこもり日の夜からきようまでも、母子おやこ四人、六波羅の眼をのがれ、生きなが
らえて来られたのは、あなた様のお慈悲でござりました」

「なんの」

光厳は、かえつて辛そうに顔を振つて、

「法衣ころもは着ていますが、亡き父も叔父も、源氏の端はしくれでした。わけて、従兄弟にあたる金王丸こんのうまるは、童わらわの頃から六条のお館やかたに仕え、義朝様おんまえが御前おんまえ様の許へお通いなさる折は、いつもお供について行きなごいたしたものです」

「……………」

常磐のふところに抱かれています。嬰兒あかごが、ふとまた、むずかり気味に乳をさぐりかけたので、光厳は、自分の声に恟せうつとしたように、口をつぐんでしまった。

念じるように見まもつてしていると、よいあんばいに、牛若はすやすや睡ねむった。光厳は、自分の声に気をつけながら、

「——ですから、年暮くれの二十六日の朝から、ご合戦となつて、洛内の町中に、あの凄まじい焰と黒煙が立ち昇り出してからは、お館の安否と共に、御前様はどう遊ばしたか、幼い和子様たちはどう召されたやらと、夜も睡らず、昼は間まがな隙すきがな、ここから一目に見える町の煙ばかり眺めやつておりました。……するとです、ちようど大晦日おおつごもりの真夜中、従兄弟の金王丸が、和子たちを背負い、あなた様を励まして、これへ上つて見えました。……そして、父祖以来の恩返しは今する時だ。光厳頼んだぞ。自分はなお、近江路から美濃へ落ち行かれたお館やご一門の先途せんじを見届けねばならぬ身ゆえ——と、いわれた時は、人

に信じられたという欣しさと同時に、途方にも暮れましたが、僧門にいる身の悲しさ、やはり私にはこれだけの力しかございません。これ以上、自分にならない義心を持って見ても、それは遂に、御前様の身や和子様たちを、六波羅の捕吏の手柄に供えてしまうだけのものです。明日を待つのも危ないのが眼に見えております」

「わかりました。夜の明けぬうちに、そつとここを立退きます」

「……ざ、ざん念です」

遂に、光厳は、それまで泳いでいた涙をはふりこぼして、法衣の袖で、わが顔を蔽つてしまつた。

「わたくしが、病弱な弱法師でなければ、もいちど武士の子に返つて、お供をしたいとも思いますが」

病骨の体ほど、かえつて、若い血が烈しく咽び上げるらしく、光厳は、法衣の中で嗚咽していたが、また、

「みすみす、行くあて途もないあなた様やその和子たちへ、出て行けど、追わぬばかりに云わねばならない私の辛さ。……御前様、おゆるし下さい、おゆるし下されませ」

光厳はそう訴えると、男泣きに床へ泣伏したが、常磐の眸はじいっと一方の壁を見つめ

ているだけで涙も見せていなかった。氷の張りつめた池のように、その眼は泣く事すら忘れていた。

きずなぐるま
 紺車

一

二月も近い空の寒々と夕冴えした黄昏であつた。

吹き寄せられた水鳥のように、伏見の船戸の津には、小さい苦船が橋の蔭やら岸辺にかたまつていた。

旅人をのせて浪華へ通う舟もある。この里の雑穀や炭薪を京の市へ運輸する荷舟もある。鵜匠の鵜舟は繋ぎ捨てられたまま今は顧みられもせぬ。白拍子の住まっている艶いた舟は、昼は留守のようであつたが夜となれば苦の外へ紅い灯を垂れて、星のように出て来る気まぐれ男を招いていた。

こうして見ると、河の上にも春秋の運命があり、その日その日の生業なりわいも慌あわただしい。

「お世話になりました。お情けで子たちもこのように、元氣づいて参りました。墨染すみぞめと尋ねて行けば、これから訪う家も、何とか知れましょう。……お暇を」

常磐ときわは、礼をのべて、身支度をしかけた。

ここも水の上。

狭い苦舟とまぶねの内であつた。

うら若い姉きょうだい妹いの白拍子が、ひとりの病母を養うため、この舟を世帯としていた。今

朝、妹のほうが、まだ霜の白い朝まだきに、市へ買物に上がった帰り途、町屋ひきやしの廂ひきやしの蔭かげに凍えている親子四人を見かけて、

——まあ、お可哀そうに。

と、飢うえにふるえている二児の手を曳き、乳呑みを抱いて路頭の霜にうづくまつたまま、起つ力もなげな上じょうろう 臍しを励まして、ここへ連れて来たものだった。

清水寺の観音堂を出てから幾日幾夜、常磐は、われながら、

——よくぞ生きて。

と思われる日を送つて来た。そして、こういう境遇になつてみると、自分が生れながら

深窓しんそうの姫そだちや宮仕えの女でなく、幼い頃は深草の田舎で麦を踏み粃もみを搗つき、十か十一の頃には、頭かしらに籠かごを乗せて、野菜や果物を売りに、京の町々を歩いたような生活の味も過去には知っていた事が——今はかえつて倅せせに思われるのであった。

そうした賤しずの女めが。

常磐は、日頃も思う事には。

雪の日は和歌に暮れ、月の夜は香を聴き、花の昼も恋の何のと、優雅みやびやかな事ばかりを、この世の常と考えている人たちの中へ、ふと、九条の女院ぢゆうしめへ雑仕女ぞうしめとして拾ひろわれてから立ち交まじつて、その上にも、思いも望みもしていなかった源義朝などという武運の長者に愛されて、

(あれ見よ、やぶ椿が、瑠璃るりの花瓶かびんに挿いけられて、長者の几帳きちようの側に置かれた事よ)

などと、以前の友やら身寄りやらに、嫉妬しつとまじりの陰口を云われている間に、いつか頭こ殿のとのとは、三人の子を生なす身となっていたのである。

まったく、娘ごころも知らぬ間に——であった。

だから元より、和歌の道とか、香を聴き分ける事とか、そういう上じょうろう 藤ふじたちの風雅みやびも知らねば、難しい書読ふみよむ知識も持たなかつた。今の社よのなか会とはどんなふううずに渦うずまき動うずいて

いるのか、自分を又またなく愛してくれる六条の頭殿の一族と、六波羅の清盛の一門とが、どう対立し、どう葛藤かつとうし、どういう危険な状態にあったのかすら、戦の日が来るまでよく分らなかつた程である。

女の二十三。

早くも七ツを頭に三人の子を持つて、彼女は、育児の事と、頭殿の愛から見離されないように——念じるの余りに勤める朝夕の化粧としか、常日頃から思いもなく暮して来た。それが精いっぱいまいまいの毎日であつた。

今日となつて、今のわが身を顧みると、悲命な姿にはちがいないが、でも、もし自分が、幼時の貧しい辛い生活も知らない深窓の生れであつたら、疾とうにゆうべも、おとといの夜も、路頭に凍え死んでゐるか、身を投げてでもいるであらうと思われるのだった。

いやその前に、この三児を、六波羅の手へ渡して助かる気にならうも知れぬ——と、常磐は顧みて思うごとに、貧賤であつた女めわらべ童の時代にむしろ今では大きな有難さを知るのであつた。

常磐が、暇を告げると、白拍子の姉妹は、傷ましそうに、

「では、お気をつけて」

と、止めなかつた。

昼の人目を怖れている容子で、およその身の上は察しられていたからである。

抱かれたり、手をひかれたり、怖々と橋板を踏んで、宵闇の岸へ上がってゆく母子の

影を、姉妹の白い顔と並び合つて、苦の陰から見ていた病人らしい姉妹の老母が、

「お坊ツちやま。また来なされよ。尋ねる先のお家が知れなんだから——」

眼を拭い拭いいった。

「……おさらば」

常磐は、岸から舟へ、ていねいに頭を下げた。

人はみな泣いてくれる。

そのために、一碗の粥やら菓子など恵まれて来たが、なぜか常磐自身は、涙が出ない。

ただ、舟を去る時には、ふと瞼が熱くなりかけた。白拍子の姉妹の母親を見て、六条の

家から逃げて来る途中、逸れてしまった自分の母の安否が、

(何処に……)

とにわかに胸へせぐり上げて来たからであつた。

それも案外、墨染すみぞめの身寄りの家へ行つてみたら、便りの知れることかもしれぬ。彼女は、孤ひとりでそう思い励ますのだった。先に手をつないで歩いてゆく今若と乙若のふたりを後から見守りながら――

これから尋ねてゆくあての身寄りというのは、伯父伯母の家である。伯父の鳥羽藏とばぞうという者は、前は貧しい百姓であつたが、縁にすがつて、頭殿に願ひ、六条の館に召使われる身となつて、合戦の日までは、中門の牛馬舎うしぐるまをあずかり、牛飼頭うしかいがしらとして、太刀をも佩はく身となつた人である。

今では、墨染すみぞめの里に、かなりな家構えして、何不自由なく伯母も暮していると聞いていたので、頭殿からうけたご恩に対しても――と、ただ一つの身の寄る辺と頼つて来たのであつた。

「いけない」

「いやあん」

「母さま！ 乙若が」

「うそだあい」

「お出し」

「うそ。うそっ」

ふいに走り出した幼い兄弟が、何を争い始めたのか、彼方の道ばたで、取っ組みあひばかりに、大声をあげていた。

うつつな——ともすれば、うつつとなつて考えともなく考え事にとら囚われがちな彼女は、びっくりして、

「これ」

と、小走りに近づいたが、今若も乙若も、喧嘩を止めないばかりか、懐ふところの乳のみは、すぐ虫気を起しかけて、泣き出すのだった。

「おお、よしよし……よし」

こんな所へ、もし平家の侍や宿場の沙汰人さたびとでも通りかけたらと、彼女は気もそぞろに縮まる思いで、

「今若さま、これ今若さま。お兄様のくせにして、何を遊ばしますぞ。幼い弟御様をば、そのように打ったりして」

懐には、乳をふくませ、声のない歌拍子に、足をうごかしながら、たしな窺めると、

「だって。——だってね、お母あ様」

兄の今若は、一本の串柿くしがきを、弟の手から奪い取って、母の前につきつけながら、口をとが尖らして告げた。

「乙若がね、お母あ様、あそこの百姓の家に干してあったこれを……」

「どうしやったのかや」

「黙って、取って来たんですもの。人の家の物、黙って取って来れば、盗人でしょ。——お母あ様」

三

見れば乙若は、兄の今若が母へそんな告げ口をしようが、耳になどかけず、小さな口を大きく開け、串柿を横ざまに持ちこんで、他念なくむしやむしや咬みついていたのでした。

「まあ、和子さまの浅ましい……」

とは嘆いたものの、常磐は、叱る気にもなれないのみか、

——無理もなや。

とさえ可憐いとしまれて、自分という者がついていながら、この幾十日のあいだ、子達に、甘い物を胃に摂とらせてやれなかつた責めを、母の罪とさえ感じるのであつた。

事実、彼女自身さえ、「甘味」を思うと、鳩みぞ尾おちのあたりが痛むほど、それが口に欲しくなる。糖分に飢えている事がわかる。弟の行為のしを罵りながらも、兄の今若も、乙若が心のままにそれを食むさつている容子を、羨うらやましげに見惚みとれていた。

「乙若さま。お独りで喰べていないで、お兄様にも、その干柿を分けてお上げなさいませ」
常磐が云うと、

「喰べる?」

乙若はもう自分の欲望は足りた顔つきで、串を二つに折り、その半分を兄へ出した。

「いらぬ……」

「わしは源義朝の公きん達だちじゃ、盗んだ柿など誰が喰くらおう。……ねえ、お母あ様」

八歳の今若には、もう自分という者の自覚があつた。日頃の庭訓わきまも弁わえていた。

常磐は、兄弟ふたりを側へ寄せて、

「そう仰つしやらずに、今若さまも貰うてお上げなさい。——弟御様が、黙って持つて来

たのは良くない事ですけれど、和子達はまだ、物を買うという事はご存知ないのですから無理はありません。串柿を持って来た農家へ戻って、その働を払うておいでなされませ」

常磐は、髪にさしていた一本の金釵きんざいを抜いて、兄弟の手へわたした。

兄弟は、黄金こがねの釵かんざしを持って、母に教えられたとおり、そつと戻って、農家の軒下へ行つた。そして、まだ他ほかにも吊るしてある干菜かんさいや柿の縄へ、その釵かんざしを挿さして帰って来た。

「さあ和子さまたち。柿を喰べたらその代りに、こんどは仲よう歩いて賜たまもよ。もう一、二里じや。墨染の伯母さまの家まで行けば、お美味いい物もたんと下さる。夜の具ものも暖かにして下さる。もうすこしのご辛抱ごんぱうぞや」

励うまましながら、駄路うまやじの端れからは燈火ともしび一つ見えない田舎道を、母子おやこはまたたどたど歩いた。

すこし大人しくなったかと思うと、六歳むっつの乙若は歩きながら居眠いねむっていた。それを醒さまして促すと、もう歩くのは嫌だと云う。何と論さとしても、

「嫌だ。嫌だ」

と、地べたへ坐つて、泣きじやくツてしまうのである。

やや聞分けもあると、力ちからにしている今若も、まだ八歳やっつだし、生なか物心のあるだけに、

乙若よりは恐怖を知っていた。

——明日は、明日は。

と母に賺すかされて、飢え、寒さ、心細さを怵こらえて来たのも、ようやく果てしない事と、幼な心にも覺つて来たか、両の腕かひなを曲げて顔を埋めこみ、今宵はしゆくしゆく噉すすり泣いていた。

「もう、どうしようぞ……？」

子達のそうした姿を眺めると、常磐も坐つてしまいたくなくなった。ひと思いに、和子たちの喉笛を突き刺し、自分もここに死なんかと思つた。

死。

それは絶え間なく襲つて来る甘い誘惑であつた。今の彼女に、死ほど安らかですぐにも行けそうに思われる所はなかつた。そこには、恋しい頭こゝろの殿とのもいられるし——

けれど彼女は、

「否いや！」

と、何の苦もなくそんな迷いを否定し去つた。強く生きる気もちをすぐ持ち直した。乏しい母乳ちちを無理に吸われるので、乳くびが疼うずき痛むたびに、牛若の顔をのぞいても、わが

生命を、わが生命とのみは、考えられなかった。

四

ここらはもう深草村に近い。

宵を過ぎると、野良犬の声ばかりだった。一月ほど前の戦争の齎えは、まだ部落の者から醒めきれていない。

ついそこらの藪や山畑の窪には、斬り捨てられた落武者の屍がそのままになって、雪解けの昼となれば屍臭を放っている。名もない雑兵とあつては、六波羅でも片づけもしないし、首の拾い手もなかった。

「誰じゃ。門を叩くのは」

この部落では、今、物持といわれている牛飼頭の鳥羽蔵の家で、ふと、そんな声があった。

声と共に、横窓の小部が、すこし上がって、燈りが外へ流れたが、
「要らざる事を。——開けるでない、外など、見るでない」

と、召使を叱りつけた——それは老女の声音らしく慥かに、外へも聞えたのであった。

「おお」

燈りを見たので、門の辺りにさつきから佇んでいた常磐は、柴垣の外を転ばんばかり駆け巡って、

「伯母さま！……もしつ、もしつ……伯母御さまえ……今のお声は伯母御さまではございませぬか。京の常磐でござりまする。子たちをつれて、ようやくここまで、辿りついて参りました」

さけぶ間にも、乳のみの牛若までが、泣くのであった。

事々しく訪れては、近所の家の耳へも悪かろう。此家の召使たちへも憚りがある。常磐はあわてて乳をふくませ、柴垣の根に身をかがませて待っていたが、その窓も他の戸も、盲のように開かなかつた。

「今若様よ、今若様よ」

「あい」

「そんな所へ寝てしまふでない、弟御様を起してよ。——そして、お許もお睡かろうが、忪えてたも。——今に伯母御さまが家へ上げて下さるうに」

「睡かない。お母あ様、ここは誰のお家」

「母がお親しい身寄りのお方じや。よも、素気すげのうは遊ばすまい。まいちど、門の戸をたたいて訪れて見やい」

今若は、小さい手で、門の戸を手の痛くなるほど打った。

果ては、押ししたり、垣を揺すって、

「開けてたも。此家このやのお人。——開けて。開けていのう！」

と、絶叫した。

牛若が、泣きやんだので、常磐も共に、

「もしつ……伯母御さまえ。ご迷惑でも、ここばかりをお力と、辿たどり着いて参りました。

六条の常磐でござりまする。もし、もし……はやお寝みでござりまするか」

もう声も洒かれかけた。

すると、垣の横側のほうから、のっそりと近づいて来た人影がある。恟ぎよツと、口をつぐ

んでいると——

「お前どもは、どこの衆か知らんが、むだな事よ。此家の旦那さまは、京都におぎるし、お内儀には、遠国へお旅立ちで、わしら、召使の者のほかは、誰もおりはせんがな」

そう云つて、じろじろ眺め、

「こんな所で、吠えたり泣かれたりしておられては迷惑じゃ。さあ、とつと立ちなされ。

——去いんで下され。去いなねば、沙汰人へ告げて、引つ立ててもらうぞ」

「……………」

生涯忘れようとて忘れられまい——そういったような眼で——常磐はその男の顔を見、此家の戸を見つめていた。

「去りまする」

召使の男の足もとへ、彼女はしかしそう詫びて叮ていねい嚙ねいであつた。ことばも静かに取乱しはしなかつた。

「さ、和子さまよ。起つて賜たも、お眼を醒まして賜も」

ここへ来るなり睡たさに、小犬のように垣の根に眠ってしまった乙若を揺り起して、三人の母はまた、まだ遠おち方、此方こちに残る雪明りを頼りに、何処ともなく立去つた。

五

その翌朝である。

「今、戻ったぞ」

牛飼頭の鳥羽蔵は、久しぶりに家に帰って来た。

帰って来るなり、

「温かい物を腹いっぱい喰いたい。湯なども沸かせ、戦の垢を落して、酒をのむのだ。――やれやれ命拾いした事だぞ」

と、足腰を伸ばした。

彼の妻や家族たちも、主人の無事な顔を見て、

「よう、まあ達者で」

と、過ぎた正月をし直したいばかり目出度があった。

「ええ美味えぞ。四十日ぶりの酒だわい」

喉を鳴らして、鳥羽蔵は、杯を手から措かずに、

「何せい、おらの仕えているご主君がよ、目先の見えぬ馬鹿な戦をおっぱじめ、たんだ一日の間に、六条のお館は灰だし、一門は散々だし、義朝様始め、その後、縁につながる奴等は、毎日のように河原で首斬られるし――いやもう生きた空はなかった。なぜ初めか

ら平家の縁故へ、奉公しなかつたかと思つたが今さら及ぶ事ではなかつたし」

日頃、牛いじりしているせいでもあるまいが、牛の如く横着おうちやくづら面の男である。姪めいの常磐の縁故から、こんな邸を持ったり、太刀の一つも帯びる身になつた事などは、前世のよ
うに忘れ果てていた。

「そう云えばの」

似た者夫婦の牛の妻が、思い出したように告げた。

「六条の姪めいが訪ねて見えたぞよ」

「えつ、常磐が」

遽にわかに、眼をすえて、

「いつ? …… いつだ」

「ゆうべ晩おそくであつたがの」

「で。そ、そして——何処どこにいるのか」

「家の内へ入れなどしてなろうか。固く戸を閉ためてて追い払うた」

「追い払つたと」

「縁のつながりだけに、なおさら怖ろしい。留守というて、召使に追わたせたのじゃ」

「ばかつ」

「……?」

「たわけ」

「何でいのう」

「ええい、智慧のねえ奴だ。せつかく黄金こがねの蔓つるをひいて来た福運を、初春はる早々、追い払う阿呆があるか。飛んでもねえ馬鹿者ぞろいだ」

罵りながら、もう起つて、たちまち脱ぎすてた衣裳や太刀を纏まとい直し、

「ここを追われて行ったからには、大和やまとの龍門りゅうもんにいる身寄りしか、他に頼ほかつてゆく家はな
い筈だ。……乳呑みを抱いていたか、幼おきなご子を手に曳ひいていたか。よしつ、まだ遠くへは
落ちまい」

ひどい意気込みなのだ。彼の妻でさえ、その肚はらは覚さとれても、呆まどつ気にとられた程である。
深草村から大和路の方へ、彼は急ぎに急いでいた。追いつけずに見失う事よりも、無力
な常磐母子おやこが、苦もなく人手に落ちることを惧おそれてである。

鳥羽蔵の懸命が、ついに、常磐の姿を見出したのは、その夜も過ぎて翌日ひるの午近くであ
った。

路傍から少し横に這入った杉林の中の氏神の縁に、彼女は、疲れ果てた二児をなだめ、牛若に母乳ちちを与えていたところだった。

「おう、いたか。……姪よ、無事でいてくれたか」

鳥羽蔵は、そこへ駈け寄るなり、さもさも胸いっぱいいっぱいの情愛を洩らすように呼びかけ、そして、無心に母の側で遊んでいた乙若を、

「和子様も、ござったの」

と、いきなり抱き上げた。

きやつ——と乙若は叫ぶし、常磐もその不意にびっくりして、身でも斬られたような声を出した。

六

驚いたのは、悲鳴をあげた母子おやこよりも、かえって鳥羽蔵のほうだった。

「黙りなされ、黙りなされ。なんでそんなにお泣きやるか。この小父さんは、和子さまたちのお味方じゃ。和子さまたちの父君、義朝様のご家来じゃがな」

と、乙若を手から放し、母の膝へ返して、

「其女そなたもまた、俺のすがたを見て、なぜそのように顛おののくのだ」

と、宥なだめた。

常磐は、ようやく胸の動悸どとうきがおさまったように、

「墨染すみぞめの伯父さままでございましたか。わたくしはまた、六波羅の手先か、この辺の野武

士でも来て、やにわに和子さまを奪とり上げたかと、気も萎なえてしまうたのでございました」

「そうか。——いや無理もない、その子連れで、これまで落ちて来るには、さだめし容易な事ではなかったろう。何とまあ、傷いたましい……」

鳥羽蔵は、そら涙を拭くまねをして、涙はなをすすりながら、

「さてさて、嘆かわしいとも無念とも云いようはない。世も末とはこの事か。ご一門の後を追って、俺も追腹を切ろうかと一度は思ったが、何としても、何としても其女そなたや幼い和子さま方のお身が気がかりでな……」

「では、伯父様には、わたくし達を、探し歩いて——」

「探したの何のと云って、洛内洛外はおろかな事、いやもうひどい憂うれき苦勞をしたぞ。そのうちにも、お館の義朝様には、お首となつて、東獄の門前へ曝さらし物にはなるし」

「……………」

「知っているか、常磐」

「はい。伝え聞いております」

「義平様、朝長様、その他のご一門も、毎日のように、六条河原で首斬られた」

「……………」

「聞いているか」

「おりまする」

「……………常磐」

「はい」

「汝^われは、泣いてもおらぬが——悲しゆうないのか」

「悲しいなどという事は、もつと世にありふれた場合の事でございましょう。涙も忘れませんでした。ただ今の私には、この三人の和子さま方の母だという事しか考えられませぬ」

「さ。そこでだ」

鳥羽蔵は、息を撓^ためて、

「それなら、おまえの母親は、どうしているか、知っているか」

「存じませぬ」

「六波羅に捕まっているぞ」

「……………」

「夜ごと日ごと、問罪所の白洲しろすで、拷問ごうもんにかけられておるそうな。——常磐を匿かくしたに
違いあるまい。義朝と生なした子供等の行方を云えと」

「……………ほ、ほんとですか」

「嘘な筈があるか。都では隠れもない取沙汰だ。かあいそうに、あの年よりが、一枚一枚、
手足の生爪を剥はがされて、常磐の行方を云え、行方を吐ほぎけと——」

「……………」

「不愍ふびんや、あわれや、他人ひとでも人事ひとごととは思えぬに、常磐の前は一体どこにいるのか、生
きてはおらぬのか、生きているなら母御を見殺しにもすまいに——などと、都の噂は寄れ
ば触さわればじゃ」

「……………」

「え。どうする考えだな」

「……………」

「常磐」

「……………」

「常ととき。……あつ、常磐つ。おいつ、おいつ、どうした」

鳥羽蔵は、うろたえ出した。

聞くうちに顔の血の気も失せて、紙より白く見えたと思うと、常磐は、眼をふさぎ唇をかんで社の縁へ横に仆れてしまったのであった。

その胸の下になつて、牛若は泣き脅えるし、今若、乙若のふたりも、母よ母よと、抱きすがつて声も涸るるばかりだった。

七

九条の女にょいん院は、以前、常磐が雑仕女ぞうしめをしていた頃、仕えていた御所である。

そこへ、彼女と幼い子たちは、大和路から連れ戻されて来た。

伯父の鳥羽蔵の言によれば、自分が自首して出ないかぎり、六波羅に捕まっている老母は、日ごと夜ごと、地獄の責苦にひとしい拷問にかけられていようとする。——そう聞く

だに、今は身も世もなく、最後の覚悟をきめたのであった。

「所詮しよせんは、のがれぬところと、悟さとつたとみえ、常磐の前が、伯父とかいう者ともなに伴ともなわれて、御所の内へ、お縫すがりに来たそうな」

女院の召使たちは、時の大問題が、眼まのあたりに移つて来たので、物々しげに囁ささき合つたり、彼女の当てがわれている監禁の棟のぞを覗のぞき見に来たり、

「おお、嬰兒ややの泣き声なみがする」

「あれが、義朝殿とのあいだに生なした子か」

などと聞き耳そぼだを敬そぼだてた。

それよりも。

女院をはじめ、侍かしずく女官たちは、べつな意味で、ほつと心を安めた。というのは、陰に陽に、六波羅の詮議せんぎや威嚇いかくがここにも及んでいたからである。常磐さえ自首すれば、それで疑いの目も解かれるからであった。

「ようぞ、しやつた」

と鳥羽蔵は、その働きを女官から賞めそやされた。この事件に就つての、彼の懸命けんめいさはたいへんなものであった。人知れず大和路から、常磐母子おやこを京都へ連れ帰ってくるだけでも、

並たいていな気苦勞ではなかつたらうに、ここへ着いてからでも、

「見張りを厳しゆう頼むぞ。刃物など持つていたら、騙だまして取上げておいてくれ」

などと寝食も忘れた眼いろして、やがて常磐を一室に監禁して、これでよしと見定めると、

「六波羅へ行つてくる」

と、御所の者に云い残し、氣負い込んで出て行つた。

それは二月十四日の黄たそがれ昏で、その夜は六波羅問罪所で、ひと晩、彼自身が源氏の端はしくれでもあるので、取調べをうけたり口書くちがきを取られていたものとみえ、九条へは帰つて来なかつた。

九条の女院へ、彼がふたたび姿を見せたのは、その翌日の午頃ひるごろであつた。

壺の梅が、咲き匂つていた。呼び立てられて、常磐が何気なくその庭にに窺うかがうと、中門の外あたりに、六波羅の武士どもが十人以上も、何やら喚わめき立てていた。荒々しい声も交まじつて、

「早くいたせ」

とか、

「中門まで駒を入れよ」

とか、また——繩をかけるには及ぶまいの、いや縄目にかけるのと、問罪所の武士同士で、云い争っている声もする。覚悟はしていたものの、さては迎えかと、常磐は、乳のあたりを刃もので突き抜かれる思いがした。すると、後ろで、

「姪よ。さあ行こう」

部屋の口へ立った伯父の鳥羽蔵が、もう急ぎ立^せてているのだった。まるで常日頃の遊山^{ゆざん}にでも誘うようである。

「……はい」

答えたが、意志を打つても、常磐は身がふるえてしばしは起てなかった。しかし、瞬間が過ぎると落着いて、

「しばらくお待ちくださいませ」

と、几帳^{きちょう}を立てて、そこにある櫛匣^{くしげ}を寄せ、牛若を抱いたまま、化粧をしていた。

「お母あ様。どこへ行くの」

「六条のお家？」

今若も乙若も、そこへ来て、鏡の中の母をのぞいた。母が化粧する姿を見るのは、子達も、幾十日ぶりか知れないので、急にはしやぎ出したのである。

八

その間に。

院のお側近う仕える女房たちから、この日の騒ぎ事が、お耳へつぶさに聞え上げられたものであろう、九条院のお慈悲なり——とあつて、

「不愍ふびんな者よ。六波羅まで、真昼の途々を、人目に曝さらされ指さされて送らるるとは、余りにも傷いたましい。破れ輦やぐるまなど与えて牛に引かせてよ」

と、女官を通じて、特べつなお扱いが下つたので、迎えに来た問罪所の捕吏や武士どもも否み難く、

「然らば輦くるまだけはさし免ゆるすが、構えて美々しゆうは相ならん。はやはや牛を引き候え」と呶鳴ななめつていた。

常磐は、鏡をたたみ、櫛匣くしげを仕舞つて、乳呑みと、ふたりの児を、両側にひき寄せ、

「何時いつなど……」

静かに、支度のすんだ旨を外へ告げた。

女は女同士。さすがに、彼女がここの雑仕女から玉のとぼそ柩へ入って、六条の義朝に愛され
ていた盛りには、嫉ねたみそねみの陰口に暮っていた院の朋輩ほうばいたちも、

「まあ、あの和子さまたちの、可憐いしらしい」

「何も知らず、母御前ごぜと同じように化粧して」

「欣うれしそうにしているだけ、母御前の胸のうちは、どんなである」

「かあいそうに」

「見るだに胸むねが傷いたむ……」

などと、局々つぼねを出て佇たたずみ合い、柩ひつぎでも送り出すように涙を溜め、中にはすすり泣きする

者すらあつた。

そうした中に、ただひとり泣かない者は常磐のみであつた。

中門の外まで立ち出ると、待ちかまえていた武士どもが、荒々しく急きたてたが、

「それへお坐り遊ばせ」

と、子達にも教え、自分が大地へ坐つて見せて、

「——では、お慈悲のお輦くるまをいただいて参ります。女童めわらべの頃から雑仕のご奉公を申しあげ、今日という終りの日まで、お廂ひさしのご庇護ひごにあずかりました。何とも有難うぞんじまする」

母が両手をつかえたので、今若も乙若も、ふかい意味はわからないが、手について、

「さようなら」

と、御所へおわかれを告げた。

「おお、ようなされた」

起つと共に、裏門へ通じる道の岐わかれに、ぐわらぐわらと牛舎うしやの方から一輛の牛輦うしぐるまが引出されて来た。

それは半は部じとみの女房輦にようぼぐるまであつたが、余りに用い古されたので、久しく車小舎くるまごやの一隅すずへ煤すすにまみれていたものらしく、前御簾まえみすは裂け、轆ながえの塗りは剥はげ落ち、ただそれを引くべく付けられた牛ばかりが、逞たくましい飴色あめいろの若牛であつた。

常磐は、子を抱いて、破れ輦の内へ潜ひそんだ。それとばかり、武士たちは前後を護る。そして、

「急げよ」

と、牛追を、追い立てた。

鳥羽蔵は、つい先頃まで、六条殿の牛飼宿の頭かしらをしていた者だけに、まどろいと見たか、牛追の男の鞭を奪って、

「おれに貸せ」

と、自身、轆ながえのわきに付いて、びしびしと飴牛のしりを叩いた。

牛うしぐるま輦わだちの轍きしは、御所の裏門を軋きしみ出るなり、石を噛み、泥ぬかるみ濘かじを傾いで、ぐわらぐわらと揺れ進んで行くのだった。

揺るるたびに、前御簾の裂け目から、常磐の白い顔や、その膝にとり縋すがっている子達の姿がちらと見えた。

いつ聞き伝えたか、

「あれよ、常磐御前が六波羅へひかれて行く」

「六条殿のお子もか」

と、往来に群れて指さすもあり、輦についてぞろぞろ指さしながら来る雑人ぞうにんたちの聲音も聞える。

「……………」

常磐は眼をふさいでいた。

その間とても、乳を吸い止まぬつよいきずな継、膝にしがみついている小さい手の継。この輦を六波羅へ引いてゆくのも老母の継であつた。

継の中に、彼女は、まだ生きている身心地を持つていた。

清盛

一

非常なご機嫌である。

かなり悪い事つづきで、一族が眉を曇らしている時でも、およその事は、

「ばかな。何を鬱くよくよ々々」

と、陽気にしてしまう清盛が、わけてもこの頃はご機嫌なのであるから、六波羅一廓かくのことしの正月こそは、寔まことに、初春はるらしい陽気に充みちあふれていた。

それと。

清盛を始めとして、ここに住む平氏の一族たちは、その郎党の端に至るまでが、「われわれの力でなければ、時勢はうごかないのだ」

という自信を新たにした。武家自体の力というものを知って来たのである。

こんどの平治の乱を境としてである。あの戦火の中、主上、上皇の車駕が共にこの六波羅へご避難あつた事なども、いやが上に、

「前例もない誉れだ」

と、六波羅武士の誇りを昂めたものであつた。

源氏といい、平氏といい、今日までは、公卿の下風について、公卿の爪牙につかわれていたに過ぎないが、時代はだんだん変つてきたぞ。——眼に見えずいつとはなく、そうでなくなつた武家同士を、お互いの身振りや眼いろにも、自負に満ちて、見合うようになつて来たこの平治二年であつた。——いや改元して、この正月からは、永暦元年ということに、年号まで革まつた。

その上、同じ弓取の源氏という一派の勢力までが、去年の年暮を限りに一掃されてしまつたのである。

だから武門といえ、地方の辺鄙へんびは知らぬこと、都に於いては、平氏のことだ。
平家の初春はる！

そう云つてもいいこの正月だったのである。

その隆運の気は、この六波羅の地相にも、まるで、絵屏風えびょうぶを展ひろげたように漲みなぎっていた。わずか、十年も前までは、清盛の父の刑部卿忠盛ぎょうぶきょうただもりが住んでいた土堀まわり小一町しかの古邸ふるやしきが、六条の河原へ向つて、寒々とあつたに過ぎなかつたのが——今はどうして平氏の眷族けんぞくたちも皆、近くに土木建築を興したので、ひと口に六波羅とはいえ、その地域の広大さは、一指をさして云える事ではない。

北は、六条松原から。

南は、七条のあたりまで。

そして、東と西は、加茂の河辺から山の尾根までを抱き、小松谷の山ふところには、嫡ち男やくなんの重盛が邸宅を新築し、小松殿とよばれてもいる。

一族の館のほか、時の勢いで、ここはそのまま政治を評議したり、庶民の訴訟を裁いたり、租税を督促とくそくしたり、市中の警備から、諸国諸道の法令を発するところにも成ろうとしてゐる。

いや、一応は、そうしなければ統治がつくまいと、清盛は、もう、肚を決めているかも知れないのである。

なぜならば。

久しい間、藤原氏が政の権を執っていたが、文化的には功績を残しても、その文化はやがて頽廢的な懶惰と爛熟の末期を生んできたばかりか、藤原一門自体が、ただ自己を榮華し、私腹をこやし、この世は、わが為にあるものみたいな、思い上がりから、諸国の辺土に、大乱続出といったような、收拾できない世相をこしらえてしまった。

天慶年間の将門の乱。

藤原純友の乱。

それ以後の、またその他の、無数の私闘や戦乱は、地方自体の原野から生れたのではなく、腐った物から生じたのである。それは、中央に榮華して、歌をよみ、恋に暮し、政の大計は何もなく、ただ地方の百姓や家族へ、米や絹の租税の催促ばかり知っていた藤原氏自身が、ついに醸したものだつた。

清盛は、今年、

「たとえ、自分が権を握っても、藤原氏のような馬鹿なまねは、おれの子孫にはさせんぞ」

と、独り年頭に自肅自戒して、ふかく省かえりみた事であつた。
彼は、明けて四十三歳の、男おとこざかりであつた。

二

その清盛はきようも、朝廷の出仕からたつた今、退さがつて来た。
しきつめた小れ石こはいしのうえを、牛車の厚い轍わだちが、邸内の奥ふかくまで、重々おもおもと軋きしみ巡つて来るまに、

「おさがりです」

「ご帰館」

と、館の侍部屋といわず、奥まった女たちのいる局つぼねといわず、色めき立って、泉殿にせせらぐ水音までが、改まつて来るかのようであつた。

「やあ」

大きな声をして、窮屈さを放つように、清盛は、出迎えの一統にそういうのが癖なのである。

車の簾れんを上げると共に、

「大儀」

ひよっこり降りる。

小柄な体なのである。そのくせ武張ぶばつてみせるのだ。朝ちように上つても、柔軟な公卿を、その小柄で下に見る風があるので、見られる者は何となく、

(威張りおる)

と、反感を挑いどまれる。

けれど決してわざとでない証拠には、館やかたの家人や身近な者は、反対に、

(もちつと鷹揚おうように、重々しゅうお構え遊ばさねば困る)

と、むしろ彼が余り容態に無関心で、威張らないことを時々、啣かこっているのを見ても分ることである。

時には、君子風の嫡子重盛などからも、

(お父上は、どうしてそう軽忽けいこつでいらつしやるか)

と、たしなめられたりするくらいなのである。

しかし、持ったが病というか、清盛は自分で意識しても、むかしの貧乏育ちのくせと、

書生氣のような無造作が直らなかつた。

それも、安芸守あきのかみや播磨守はりまのかみだつた時代の一朝臣あそんの頃には、物かまに関わぬおもしろい殿よ——と似合いもしたがである。

正三位参議という位階は、武人として決して低いものでない。しかも、その勢威の衆望は、実際において、源氏全滅の今日では、彼と対立する何者もないのである。雲上には数多あまたの大臣おとしや高官がいるに違いないが、清盛自身でも眼中に入れていない事は、一門も郎党たちも知つてゐる。——故に、

(もそつと、鷹揚おうように、重々しゆう、お構えなさればよいに)

と、望むのであつた。

がらは小さいが、声は大きい。彼は大股に館の奥へ、歩を運ばせながらも、何かしやべつてゆく。

「後にせい」

とか、

「待たせておけ」

とか、

「追い払え」

とかいう吩咐いひつけけである。

公卿の訪問客が多いのであった。ふしぎな現象である。朝廷へは常に出仕しているので、そこで会えばいいに、私邸を訪ねて来るのが多いのだ。

殊に、先頃の乱に、源氏が一敗地に塗まみれてから、清盛の鼻息に媚こびてくるのがうるさい程だった。

「やれやれ」

清盛は、平服に更かえると、そう云って居室くつろに寛くつろいだ。彼の日課も多忙だった。倦うまない質たちだが、朝廷から退ちがって来た時には、時折、疲れた顔いろを見せる。人にいえない、複雑なものを、いつも朝ちように上ると抱ちいて帰かるらしかった。

上皇の院政を支持する公卿と、天皇を擁ようし奉ほうる公卿との対立が、その煩わづらいの禍根かこんだった。清盛は、その一掃いっそうにかかっているが、根を抜ぬこうとすれば、花を散らす。花を散らすまいとすれば、根は抜けない。

「久しいこと、お帰りをお待ち遊ばしていらっしやいます。これへご案内申しあげましようか」

近侍は、頃を見て、清盛へそう訊ねた。彼の義母にあたる池の禪尼が、何か折入つて会いたいとかで、別室に待っているというのであった。

三

「なに。尼公が」

清盛は、小首をかしげた。

何の用か、思いよりがないらしい。同じ六波羅の池殿に、余生安らかに住んではいるが、めつたに忙せわしない清盛の住居へなどは渡られない禅尼であるのに。

「ま、会おう。これへご案内には及ばぬ。わしの方から出向くのが礼儀だ。……母御前ははごぜだからの」

終りは独り言のように、ちよつと億劫おつくうらしく顔いろを革あらためて出て行つた。

彼は自我のつよい、吾儘ものと他人ひとには云われているが、骨肉には甘いし、わけて親には、孝心が深かつた。

貧乏の味を、骨ほねの髓ずいまで、知っていたからである。

よれよれな布直ぬのひたたれ垂一枚来て、冬のからッ風にふかれながら、父の忠盛の無心手紙を持つては、

(嫌だな嫌だな)

と思ひながら中御門なかみかど殿だの正親町おおぎまち殿だのという公卿へ、わずかな金を借りに行つて、

(またか)

と、顔をしかめられ、

(もう来るな)

と、厄病神のように、粟一袋あわに塩一升ぐらい恵まれて、おまえの親は能がないとか、貧乏家のすが目のと、口汚く云われて帰つて来ても、その粟その塩すら見れば、

(おお、これで今日明日の生命いのちはつなげる——)

と、父も母も、無念とは思わず、かえつて随喜したりした頃の——みじめ極まる家庭にはぐく育まれて、自然、右を見ても不愍ふびん、左を見ても不愍ふびんという愛情が、天性というよりも、境遇と共に濃くされたせいであろう。

で、父忠盛の死後も、自分には継母にあたる池の禅尼であつたが、仕える事は、真まことの母と変りもなかつた。——ああいう所は感心なお人であると、館の召使にいたるまで、その

点は敬服していた。

「清盛です。今帰りました。……どうも近頃は忙しくて」

彼は、禅尼の待っている室へはいると、非常にいいねいな辞儀をした。威容などはちつとも振らない、昔ながらの息子であった。

「お、ほ」

禅尼は、恐縮する。

あまりに手軽いので。

けれど悪い気もちでなかった。義理の子ながら良い子をもった倅せを思うのである。

老いても、なお美しい眼元を細めながら、

「おつかれである」

と、慰めた。

「いや、体の忙しさは、病身な父などとちがいで、清盛は頑健ですから、何ともいたしません。頭が悪くなりそう

で」
「癩かんのお強い参議殿ではあると、いつぞやも誰かいうておりました」

「宮中で嘯鳴りましたからね」

「せぬがよい事でしょう」

「自分でも戒めていますが、時々は」

と、笑って、

「時に、何かご用ですか」

「折入つての」

「……はて。母御前から折入つてと申しますと」

「義朝の子のことじゃが」

「義朝の」

「先つ頃、尾張の頼盛が家人の弥兵衛宗清という侍が、美濃路で捕えてきた可憐しい和子がありましたの」

「ムム。義朝の三男、右兵衛佐頼朝のことですか」

「そうじゃ」

「それを……?」

「斬れとの仰せなそうじゃが、慈悲じゃ、助けてあげて下さるまいか」

清盛は、すぐかぶりを振った。親に遠慮はないという膠にべのなさである。
「嫌です。いけません！」

四

「いけませんか」

「成りません」

「どうしても」

「母御前などが、お口をさし出す事ではありませぬ」

「……………」

「……………」

禅尼と清盛とは、それなり口をつぐんでしまう。気まづげな沈黙がいつまでもつづく。

なかつほ中壺の紅梅が、一、二輪ほころびかけている。眼を反そらしていた禅尼は、ふと、涙ぐ

んで、

「ぜひもない事よ。……故殿こののが世において遊ばさぬ今ではのう」

ため息と共に呟いた。

清盛は、むつと色をなして、

「また、おひがみですか。父の忠盛が生きていたとて同じです。いや清盛としては、父君がすでにご他界だけに、なおさら、あなたのお頼みとあれば、たとえ逆さま事でも、肯いて上げたつもりでいますが、義朝の子の処分などは、由々しい問題です。伏見中納言とか越後中将とか、あんな連中なら何十人助けてくれたからとて大事はありません。——が、総じて、弓取の子というものは、性根の恐いものです」

「和殿も、弓取の子ではなかったか。きょうの人の身、あすのわが身」

「だからです。豹の子には、日が来れば、きつと牙が生えるんです。元来、われわれ武門の血は、ついきのうまで、野放しに育つて来た人間ですから。こうして縋縋縁のうえに坐っていても、野に帰れば、たちまち牙を研ぎ爪をみかく性質の甦えってくる者なのです。——その点、平安朝や天平の文化に育てられて来た公卿たちとは、同じ国土の間でも、血の鍛錬がちがいます」

「そのような事を、尼は嘆くではありません」

「では、なんですか」

「後世ごせの怖ろしさが思われるのじや」

「また。仏法の因果ばなしですか」

「和殿にもはや、沢山なお子があるうに」

「武門の子等ですから、武門のならわしに育てます」

「とはいえ、もし和殿のお子が、今の義朝の子のように成り召されたら、親として、どのように思われるか」

「あはははは」

「笑い事ではおざるまいが。昨日きのうともいえぬ、世の移りを眺めたら」

「母御前よ」

「なんじや」

「あちらの女どもの屋おくへ渡らせて、双六すごろくか扇おうぎ投げでもなされては如何。盛姫もりひめに催馬さいば楽ばらを見しようとして、町より白拍子しらびょうしを呼び集め、賑にぎやかに遊んでおるらしいが」

「お暇いとましましょう」

「そうですか」

先に立って、

「では、南廊なんろうの口まで、お送りしましょう」

遠くの屋に、笙しょうや金鈴つづみや鼓つづみや笛の音が聞える。禅尼は、悄しよんぼりと泉殿の住居へ帰って行った。

禅尼を見送ってから、清盛はひとり橋廊下の角に佇んでいた。東山いつたいの眺めは、ここの館の為にあるようだった。北苑を見やれば、加茂の川岸まで、薔薇園しょうびえんの広芝に明るい陽がほかほかしていた。

ぼーん

ぼーん

うららかな音がする。公達たちがまた、鞆まりを蹴つっているのであろう。小松のあいだから時々高く鞆が揚がる。

三男の宗盛やら、従兄弟の経つね正まさやら、彼の蔓つるに生えているたくさんな一族の子等が、鞆を追って、夢中に転がっているのが見えた。

「——馬鹿あつ！」

正月このかたのご機嫌は、とたんに一変していた。侍側の家臣も、胆をつぶした。恐らく清盛の頭には、池の禅尼のことばでも、思い出されていたのではなからうか。

「弓でも射よツ。馬にでも乗り馴れろつ。わいら、公卿の子か！」

梅月夜

一

宗清^{むねきよ}は、何処^{どこ}からか今、帰つて来た。

乗馬が汗をかいている。

五条松原の末を出端れると、馬場があるから、そこで一鞭当ててきたのであろう。人間ばかりではない、馬もすこし厩^{うまや}に怠^{うま}けさせておくと、どんな名馬でも、いざ合戦となつては、物の役に立たないものである。だから調馬は侍の日課であつた。

「やあ」

「おう……」

行き交^かう者はみな六波羅武士である。馬上会釈のまま過ぎるもあるが宗清は、陪^{ばい}臣^{しん}

なので、清盛一門の人とか、直臣の名だたる衆に出会えば、いちいち下馬の礼を執らなければならぬ。

「藤三」

と、口取の小侍へいう。

「はい」

「きようはまた、わけても多く、ご一門や公卿方が通るの」

「きようには限りませぬ。いやもう世の中は、正直すぎるものです。源氏滅亡と見えたところから、六波羅御門は、牛車、お馬、輿など、千客万来を呈しております。——この大和路の往来が、そのため以前とはがらりとちがって来たほどで」

「横へ曲がれ」

「裏通を参りますか」

「閑寂でよい」

「遠方此方、だいぶ梅も咲き出しました」

徒然草に見える那蘭陀寺あたりの址である。梅ばやしを透いて、六波羅地蔵の蒼古とした堂が見える。

やや行くと、池があつた。

「脚を冷やしてやれ」

宗清は、池の畔ほとりまで来ると、鞍から降りた。心得顔に、

「はっ」

と、藤三はすぐ空馬からうまの口を曳いて、池の汀みぎわへ馬の脚を沈めた。

つよく乗った後では、こうして馬の脛すねを冷やしてやるのがよいのだった。馬場から帰る人々が、そのためよくここへ廻るので、この辺の土民は、「馬冷し池」などと称よんでいる。

一頃は、この池も、源氏の武士と馬で賑にぎわっていた頃もある。宗清は、ふと手をさし伸べ、池に臨んで咲いている梅の一枝を、花を落さぬように、そつと手折たおった。

「藤三、後から曳いて、厩へ入れておけよ。——先へ参るほどに」

宗清は、徒歩かちであるき出した。彼の主人、尾張守おわりのかみ頼盛よりもりのやしきは、遠からぬ所にあつた。頼盛は地方官として、常に尾張に在国している。——でほとんどそこは、空屋敷のていであつた。

——にも拘かからず、先頃からその門は、表にも裏にも、物の具着けた兵が十人くらいずつ立っている。あたりの閑寂に似もやらぬ厳いしきである。素槍のどぎどぎした光が、時を

おいては、土塀の外を三、四人して巡^{めぐ}っているのに、屋敷の中は寺のように森閑として、鶯が啼きぬいている。

「何も、変りはないか」

宗清は、門衛の兵に訊く。

「ありません」

兵の答えにうなずいて、宗清はずっと通つて行つた。中門にも、兵が屯^{たむろ}していた。

「お帰りなされませ」

「むむ」

提^さげている梅の一枝に、兵たちも眼をとめる。心ない者も、よい枝ぶりと見るのである。
う。

奥ふかい一室まで、彼はそれを提^さげて通つた。香^{こう}の薫りが常時^{じょうじ}にしていた。

「佐^{すけ}殿。よろしゅうござるか」

云うと、室の内から、

「弥^や兵衛^{ひょうゑ}か」

と、まだ年少な声^{こゑ}がした。

関ヶ原で捕えられて先頃からここに幽閉ゆうへいされている囚人めしゆうど頼朝であった。

二

頼朝は円座を敷しいて、木彫のように行儀よく坐っていた。

ふつから豊ほうきよう頼らうな面おもてだちであるが、やはり父義朝に似て、長なが面おもてのほうであった。一体に源家の人々は、四肢しつくま逞たくましく、尖とがり骨で顔が長い。ちょうど南部駒のような血すじだと、よく平家方で悪口あくぐちいうが、そんな傾かたきがないでもなかった。

山やま繭まゆの白小袖しろこそでに、藤ふじむらさきの公きん達だち袴ばかまは、ここへ来てから与えられた物であるが、それも朝夕、自分で畳みつけているとみえ、まだ折目もくずれていない。

「ご退屈たいくつでしょう」

弥兵衛宗清は、対むかい合あって、軽かろくなぐさめた。

頼朝は唇くちびる元に、笑えくぼ靨ぼをつくつて、

「いいえ」

静かに、かぶりを振る。

そのふさふさした黒髪が、何とはなく、宗清の眼に沁しみみた。

髪ばかりではない。

きょうの如きさらぎ月の碧あおぞら空を見るような眸ひとみも、朱あかい唇くちも、白珠の齒あたらも、可惜あたら、近日のうちには、土中になる運命のものかと思うと、見るに耐えないのであった。

「なにをしていらつしやいましたか。今日は——」

「お借りした唐の白居易はつきよの詩書だの、司馬遷しばせんの史記だのを読んでいました」

「史記と、詩書と、どちらが面白うございますか、どちらがお好きですか」

「詩文はつまりません」

「では、李白や白居易の詩を読むよりも、支那の治乱興亡の書いてある史記などのほうがお心にかないますか」

「え……」

うなずきかけたが、宗清の眸を見て、急に頼朝は口をにぶした。

「好きといつても、そんなにも好きではありませんが」

「じゃあ、何がいちばん、読んでお心をうごかされますか」

「……………」

しばらくは答えない。

聡明そうな眼を、つぶらに見はったまま、考えているふうである。室内は香のにおいに湿ほのぐらつていて、仄暗ほのぐらいが、頼朝のその眸には、戸外おもての春の天地が、湖のようにいつぱいに映うつつていた。

「——お経きようもん文ぶんです」

やがて、宗清の問いに、あどけない顔して、答えるのであった。

「仮名かみながきのお経文きやうもんがありましたら、こんどお貸かしく下さいまし」

「はて、稚おさないのに、どうしてお経文きやうもんなどをお好み遊あそばすか」

「亡はき母はは者じや人ひとに連れられて、嵯峨ささがの清涼寺せいりやうじへよう詣まりました。中河なかつの上しょう人にんとも、お心こころやすうござります。先頃せんきん、黒谷くろやへ行いつて、法然ほうねん房源ぼうげん空くうという若い坊ぼうさまのはなしも

聴きいたりしました」

「それで……」

「え、それで、いつのまにか、お経文きやうもんを解といたおはなしを聴きくのが、いちばん好きになりました」

と、うつ向きながら——

「わたくし……。もしかして、首斬られずに、生きていられたら、叡山か、清涼寺か、あんなお寺へは行って、仏さまに仕えていたいと思います。住むところなら、お寺がいちばん好きです」

と、云った。

宗清は、室の一隅にある小机に目をとめた。位牌とはないが、一碗の水を供えてある。可憐しくも、囚われの身にありながら、父や兄たちの霊に、朝暮の回向をしているものと見える――

まだ十四歳の童子の言を、いちいち奥底ありげに疑って聞くのは、大人のわるい癖であり人間の邪智じゃちというものであるまいか。宗清は反省してみるのだった。――いや、頼朝のすがたに対していると、いつのまにか、そう考え直させられてしまうのだった。

三

「佐殿。お目なぐさみにと、馬洗い池のそばに咲いていたのを、一枝、携たずえて帰りました。どこぞへ挿さして置かれませ」

宗清は、縁の端から、それを持ち直して来て、枝ぶりを示しながら、頼朝の手へわたした。

「アア」

頼朝は、口を開いて欣よろこんだ。

いかにも、少年らしく、

「もう、咲いているんですね。外には」

「あれに、銅器の瓶へいがあります。水を汲み入れてさしあげましょう」

「自分でやります」

よほど欣うれしかったと見える。自分の手で、古銅の瓶へいにそれを挿いけると、回向えこうの水の供えである小机の傍らに置き、

「いい匂い——」

と、花の香を嗅かいだりして、歓喜していた。

「弥兵衛」

「はい」

「もひとつ、お願い事があるのじゃが」

「何ですか」

「きき入れてくれるか」

「仰つしやつてご覧じませ」

「小刀と木切れを賜わるまいか」

「小刀を」

「さればよ、明日は、父義朝の五七日の忌にあたる。小さい卒塔婆そとうばなど削つてご供養のし
るしとしたいが」

「……ああ。はや左様な日数になりますかな」

宗清は、あわれに思い、

「囚めしゆうど人のおん身なれば、刃ものは参らせるわけにゆきませぬが、お心の届くように計
らいましよう」

と約束した。

そして自分の部屋へ退がってから、郎党の丹波藤三に、小さな卒塔婆百本を調えさせて、
頼朝の牢屋へ持たせてやると、頼朝は非常に満足のていで、

「忘れおかぬぞ」

と、恩に思う由を、藤三の口からまた、伝えてよこした。

「何せい、ご不愍ふびんなことだ。何とかお命を助けておあげ申したいが」

密かに宗清は苦慮くりよしていた。いや、思案ばかりでなく、そのよい相談相手として、自分の主人尾張守頼盛の母ははぎみ公にもあたれば、また清盛の義母にもあたるちようどいい手づるの御方おんかたとして——池いけの禅尼ぜんにへも内密うちひそめに継つがっている。

禅尼は大の仏教信者だし、それに慈悲ぶかいお人とはかねがね聞き及んでいるので、数日前に主人の消息たずさを携たずえがてら伺うかがつて、あれこれと、頼朝のうわさを持ち出すと、禅尼には、

(あわれな者よの)

と、涙なみださえうかべ、

(起臥おきふしの様はどうじゃ。気だてはどうか)

と、それからそれへと聞きたがるので、宗清は自分の思いのまま話すと、

(そうか)

と、深く息しておられた。

するとその翌日、日ごとに詣る寺院の帰り途とかで、ふいに子の頼盛が留守屋敷に立ち

寄った。

元より公おおよけではないが、そつと頼朝をご覧になった。そして頼朝へ菓子など与えて帰られた。

(この尼が、十七年前に亡うした子の右馬助家盛うまのすけいえもりに、頼朝は瓜二つともいいたいほどよう似ておる。右馬助がもし生きてありなばと、そぞろ思い出されて、涙がこぼれてならんだ)

とはその後、宗清が泉殿へ伺った時の禅尼の述懐であつたが、さらに、
(かなわぬまでも、頼朝の命、何とかお救い賜わるよう、清盛どのへ尼よりおすがりしてみましよう)

とまで云われた。

それを頼みに、宗清は、きのうも待ち、きょうも待ち、すでに死罪打首の日どりは、この月の十三日と、日まで内定しているのも——まだ頼朝へは申し渡さず、ひたすら禅尼からの吉報を心待ちにしているのだつた。

四

待ちきれずに、宗清は、そのあくる日、泉殿へ伺つて、禪尼へお目通りをねがった。

禪尼は、宗清が切り出すまでもなく、用向きを察して、

「どうしたもので、尼の力ではもやおすが継りの言葉もないが」

と、打ちしお悄れていう。

そして、頼朝の首斬られる十三日にも、はや間もないが——と、落涙さえして、清盛の無情をかこ啣たれた。

「いやいや」

宗清は、頭こしうべを振つて、禪尼を励まし、

「清盛様が、無情なお人だなどは、世評のことで、実は、涙もろくて情には極くお弱い方にちがいございませぬ。——が、それではご一門をひいて、なお、大きくは天下の政まつり治ごをなされては行けませんから、ご自身で、ご自身の弱いところを知つて、強しいて無情に構えていらつしやるのだと、私などは存じあげておりまする」

「……じゃが、今度ばかりは、尼がどう搔かき口説くどいても、うんとは仰せられぬ」

「ひと筆、御書ごしよをおしるし賜たまわりますまいか」

「文か」

「はい。小松殿へ」

禅尼は、眉をひらいて、

「そなたも、そう思うか。尼もこの上は、小松殿のお力をかりるしかないと考えていたが」
「宗清が、ひと走り、お使いに立ちまする」

禅尼はすぐ手紙をかいだ。

それを携えて宗清は、程近い小松殿——清盛の長子重盛しげもりの館を訪れた。そして禅尼の大慈悲心のあるところを重盛に会ってよく伝えた。いや、宗清自身が胸いッぱい持っている頼朝への同情もみな禅尼のことばとして、重盛には伝えられた。

文を見て、重盛は、

「承知した」

と、云った。

そう難しくない顔に見えた。

「何とぞ、お力もちまして」

と宗清はつい、わが子の生命いのちの瀬戸際のように、懸命ひたに額ひたいをすりつけてすが縋すがった。——が、

自分は末輩の端でも、平家の武士であることに気づくと、余り熱意を表にあらわしては、かえって頼朝の不為ふためだし、この身も妙に疑われてはと、

「もし助命の儀、六波羅様にお聞き入れない時は、この十三日の打首の太刀取は、てまえが望んで、勤める所存でござります」

などと云い紛まぎらわして、門を辞したが、さてまた、小松殿の門を出てからは、

「あんなよけいな事は、云わずもがなであった。頼朝を助けて欲しいと思つてゐるのは、禅尼おひとりで、世間の侍どもや一般は、冷淡らしいとお取りになられたら小松殿のお考えも、自然、冷たくお傾きになろうもしれぬ……」

と悔いたりした。

従者もつれず、駒も持たず、宗清は小松谷こまつだにから歩いて来た。夕月が白かった。薫くんくん々と袖や面に匂う風がある。月明りより白い道ばたの梅の花だった。

「弥兵衛。——まだ歩いておるか」

ふいに、後ろうしから声をかけられて驚き仰ぐと、重盛であった。

重盛は、馬上から云う。

「駒の口を取れ。ちようどよい折。これから父上へ会いに参るが、途中、そちの案内で、

幽所における義朝の子、一目見て参ろう」

宗清は、欣うれしさに、あつと答えながら駒の口輪へ走り寄った。日頃は内気のように籠つてばかりいる重盛が急も急、自分がお暇いとまするとすぐ出て来たらしい早さに驚きもし、有難くも思つて眼がしらが熱くなつた。

五

主あるじはいない邸である。夜はなおさら寂じやくとして、燈火ともしびの影は遠とお侍むらいのいる部屋にし映さしてはいない。

長縁を先に立つて歩みながら、宗清は、

「おことばをかけてお遣つかわしになりますか」

と、後から来る重盛へそつとたずねた。

重盛は、ことば静かに、

「その折の様子で」

と、云う。

頼朝のいる幽室へ案内して来たのである。

元より燈火は置かれていない。

春とはいえまだ夜は寒いのに、蔀障子も開け放されていた。大廂からまだ低い

宵月が映しこんでいるのに、そこを閉め惜しんでいるかとも思われる。

「ここがお室でござる」

宗清にささやかかれても、重盛はその広縁に佇んで、ひと目、室内の人を見やると、凝

然、身を凍らせたまま頷きもしなかつた。

頼朝は坐っていた。

円座に乗せている膝の辺りまで月明りが真つ白にさしている。

きのう宗清に乞うと、宗清に布施してもらうた百枚の小卒塔婆を、傍らにおいて、それ

を左の手に、右に筆を把つて、こよい父義朝の五七忌に、一枚一枚供養の名号をしるし、

指の冷たさも知らぬげな容子であった。

「……?」

ふと。

人の佇んだ気はいに、彼は筆をとめて、つぶらな眼を上げた。

月光へ向けた眸が、らんと光って見えた。けれど広縁に佇んで自分を見ている人は、月を背にしているのので、黒い影法師にしか見えなかった。

「……………」

今に何か、一言ひとことでも、ことばをかけて遣るか遣るかやと、宗清は、重盛の足もとに蹲うづくまつたまま、じつと、唾つばをのんで控えていたが、重盛は化石したように、いつまでも物云わなかつた。

「……………」

頼朝もまた、無言だつた。

無理はない。宗清以外の者の跣音が来れば、自分を殺しに来た人ではないかと思うに違いないのである。

ややあつて。

自分に害を加えに来た者でない事が分つたらしく、頼朝はだまって、重盛のすがたへ、頭こうべを下げた。

それに対つて、重盛も慙いんぎんにかしらを下げ、そして初めて、宗清の方へ云つた。
「夜の具よるものは、お寒うないようにしてあるか」

「はい。寒からぬ程に」

「食膳は」

「魚類は、あがりませぬゆえ、その他は、世の常並に」

「あの瓶の挿梅は、そちが致したか。ゆかしい心入れに思う」

「恐れ入りまする」

「義朝どのの御曹子」

と、こんどは、頼朝へ向ってやさしく、

「おん身、幼いに似ず、よく供養なさるのう。亡き父殿が恋しいか」

「恋しゅうござります」

「死んだら会える。そう思うておられるか。死んで父殿に会いたいと念じられるか」

「そう思いませぬ」

「どう思う?」

「死ぬのは怖うござります。死ぬほど、恐ろしい事はありません」

「でも、おん身は合戦に出たであるが」

「戦の時は、ただ夢中でしたから……」

「生きたら、どうありたいと思うか」

「清涼寺へお弟子入りしたいとぞんじます。お坊さまになれば……」

筆を持ったまま、その肱ひじを曲げて、両眼に当て、しゆくしゆく泣き出してしまった。

「ゆるせ。心ない事を訊ねた。……ゆるせ」

重盛は、顔をそむけた。その頬に一すじ、白いものが流れるのを月に見て、宗清はひそかに心を強くした。この和子わこは助かるといふ気がした。

仏子と凡夫

一

主あるじの帳ちようだい内ないに間ぢかく詰とめている宿直とくいたちはもちろん始終を聞いていたし、対屋たいのやや遠侍の控えにまで、清盛の声はきこえて来た。

「ばかなつ。ばかな」

これは時々聞くことで珍しからぬことばだったが、

「——親むかに対むかつてッ」

という一喝かつは、かりそめにも正三位参議の六波羅殿の館から洩れてよいものではない。
下司げすぞうにん雑人なら知らぬことだ。

寢殿を中央に、左右の対屋から北の母屋もや、奥の局つぼねまでも、為に、夜空の雲に鶴ねえでも現われたように——鳴りしずまって、しんとしてしまった。

夜もふけてゆくし、それがために一層、清盛の声は、耳だつばかりだった。

「重盛。おまえは子だぞ。わしの子だぞ。いくら賢ぶつても」

「はい。弁わきまえています」

「今のことばは何だ。親を無慈悲無情の羅刹らせつとはなんだ。慈悲がなくて、子が育つか」

「羅刹などと父君を誹そしつた覚えはございません」

「耳ががんとしておつた。言葉じりなどとなるな。わしはかつとする性たちだから。——がしかし、云わんばかりに罵ののしつた」

「罵りません」

「面倒だ。枝葉はよせ。口では、そちに敵かなわん。——だが重ねて申すぞ。たとえ母御ははみ前の

尼が、どう仰せであろうと、ならぬ事はならぬ。もつてのほかだ。——頼朝の生命いのちを助けてとらすなどという事は「

「……………」

「和郎わろにわからんか。つもつても見い。——あれは義朝の三男じやぞ。上には次男ともなに朝長あさながあり、長男なが義平よしひらがあるに、その兄弟頭がしちをさしおいて、父の義朝がわざと三男へ伝家の『髻切ひげきり』の一刀に、源太ヶ産衣うぶぎをくれておるところを見ても、頼朝という童わっぱの非凡は知れておるではないか。——子を観ること父にしかずだ」

「が……父君」

「だまれ。待て」

押えてまた、朗吟ろうぎんでもするような嘆をこめて、

「子を観ること父おやにしかずだつ——。重盛、そちもすぐわかつてくる」

「さればこそ、そこを憐れあわれと、禅尼様にも」

「何もかも、尼御前のせいにして云うが、由来、若いくせに仏いじりのみして、仏家の真ま似なまの好きなのは、そう云う和郎自身だ。——輪廻りんねとやら因果とやら、やれ菩提ぼだいの仏心のと、生かじりの智慧と小慈悲を、生きた世間へ、そのまま用いてみたいのが、和郎の本心とわ

しは観る。——過るなよ。世の中はうごいてるぞ、人間は生き物だぞ。戦や政治のあいまには、せいぜい仏者遊びもよい。だが伽藍の中か小松谷の館の中でやれ。——清盛のまえへなど持ち出して参るな」

清盛は赤くなつて云う。云つて云つて云い捲つたつもりでいる。

けれど、熱に渴いた唇をなめて重盛を見直すと、初めから刻経つた今まで、ささ濁りもせぬ水のように澄みきつていたのだつた。

「そうです。父君のお察しのとおり、禅尼様ばかりでなく、それは私も望んでいる事にかがいません。一門の将来と、父君の人望を考えるからです。前に保元の乱の後、敗れた敵方の者を、日頃の悩みにまかせ、老も若きも、敵に有縁の者とみれば、仮借もあわれもなく斬殺した信西どのの終りはどうでしたか。武門に生れ武門に死ぬるさだめの私たちには、きよの敵の身の上も、他人の運命ではありませんぬ」

「何をいう。和郎等を、そうさせたくないばかりに、この父は」

「子への慈悲なら鳥獣にもある天性でしょう。何もお父君のみが」

「談義！ やかましい」

清盛は、最後の一喝を放つと、両手で耳を掩つてしまった。

「わしはその慈悲人情が、あまりありすぎて当惑しておるくらいなのだ。申すなつ。もう申すなつ」

二

他人同士の好き嫌いとは元よりちがうが、わが子にだつて嫌いはある。清盛は長男の重盛はどうも嫌いだった。

真すつ直ぐなことばかり云うからである。世の中の事々は——わけて政まつりごと治ちなどに携たずわれば、重盛がいうようなわけにはゆかない。

また、何かにつけ、仏法や儒じゆがく学など持ち出すのも、清盛は氣にくわない。仏様は崇あがめてもよいし、学問も尊重してよいが、生々しい政争と合戦の巷ちまたにいては、そんなものは心の邪さまたげにこそなれ、多足たしにはならないと決めているのである。政治のために、仏法や儒学を利用するならわかるが、身に奉じて、自分を他人の考えた哲理に蔽はめてしまうなんて、とんでもない事だというのだ。

清盛は清盛の生命いのちと性格を生みづけられて、今の時代に此土このどへ生れて来たのだから、こ

のままに生き通し死に果たす事こそ天の使命を完うするといふものである。孔子が不屈きだというなら云え。釈迦しやくかが外道げどうと嘆くなら嘆け。

おれも天津日子あまつひこの遠い御末みすえのひとりなのだ。たれが此土このどの地獄いのかを禱いのるか。同じ御民みたまの苦しみを計るか。

どうか百姓万民のためにもよかれとやつてゐるのだ。天津日子の弥栄いやさかを祈り奉るまつ心にふたつはない。その為には、邪げとなる物は刈り尽す。外道ともなる、天魔ともなる。――また、それくらいな形ぎようそう相さうを持たなくては今の政争や戦に押しきつて勝てるものではない。隠者いんじやになつて暮したがましというものだが、清盛には、隠者になつて月花をながめてだけでは生きてゆくかかない。隠者にはなれない俺であるからと、彼は正直に、自分の性質を認めていう。

けれど、彼のそういつたふうな我説も、それを一族群臣に云う時には、諸人皆、おそれ入つて聴くばかりであるが、一箇の重盛に向つては、聡明なひとみから冷蔑れいべつの光と微苦笑わいせうとを、無言に酬むくいられるだけだった。

もしその口を開けば。

重盛の叡智えいち、学識は、赤子の手でもひねるように、諄じゆん々じゆんと熱せず迫らず、父の大ぎ

つばで浅い我説を反駁して、完膚なきまで覆してしまふであらう。——あくまで孝行を奉じ、かりそめにも冒すことはしない重盛であるが——親の清盛からみると、そうされそうに感じるのである。自分より優れている点を、親でも認めずにはいられなかつたからである。——が、親より偉い子というものは、得て、親を楽しませない。

まして、清盛はまだ若い、——自分では若いつもりである。

ようやく、貧乏を脱し、人々を見かえし、他人が若い頃に通つた青春を、彼は四十過ぎの今、迎え始めた気もちなのである。燃ゆるばかりの元氣だつた。途方もない大きな設計図を日本中に画いてみたり、そうかと思うと、小さい衣食住などに恋々として、何かにつけ慾というものが旺んである。

物を喰うにもがつがつと飽食はするし、一族や子等の前でも、平気で女のはなしなどをやったりする。——ふと、その中に重盛が、浅ましげに眉を蹙めてでもいると、急に氣づいて話をそらしてしまつたりはするが。

——とにかく。そういう父と子であつたから、頼朝助命の嘆願は、誰が考えても、重盛をおいて他に人はないほど適任らしく思われたが、事實に当ると、かえつて清盛の不機嫌と強情を募らせてしまつた。

重盛もまた、禪尼と同じように、梅寒き夜更よふけを、空しく小松谷の館へ、黙々と帰つて行つた。

その翌々日頃であつた。

九条院のうちへ、三児を抱いて常磐ときわがかくされて、やがて自首の旨を、六波羅へ訴えて出て来たのは。

三

常磐が捕えられて来たと聞いた日から、清盛はしきりと、

「今まで、どこにいたか。どうして遁のがれていたのか」

とか、

「子は連れておるか」

とか、また、

「寔やつれておるか」

などと侍側の家臣や、折々見える問罪所の奉行ぶぎようへ、諄くどいほど訊ねた。

問罪所からは、やがて彼女を取調べたつぶさな口書こうしよに、その処分を仰ぐの旨を添えて、一般の罪囚と同じ形式で、清盛の所へまわしてよこした。

すると、清盛は、奉行の仕方をひどく不機嫌に、

「かりそめにも、義朝の想おもい女もの。乳のみ児すらあるものを、問罪所の牢などにおかず、なぜ侍どもの一部屋なり空けてやらぬか」

と、その無情を詰なつて、

「わしが調べる。西の屋おくで見よう。すぐ曳ひいて来い」

と、意外なことばだった。

奉行は、その前に、頼朝に対する清盛の仮か借やくない気もちをそれとなく聞いていたので、常磐に対しては、なおさら主人の旨むねにかなうように苛烈かれつに扱あつたのであつたが、案に相違さしたので非常に狼狽いたし、やがて彼女を館の下屋しもやまで召よつれて来た折には、客を伴うように宥いたわり慰めた。

「席を与えい」

清盛のことばに、侍が、階下の庭さきへ藺い筵むしろを展のべかけると、

「上へ。上でよい」

と、早口に云った。

——上とは？　と疑うように清盛の顔を仰ぐと、階きざはしの上の広縁あひこを顎あごでさしているので、奉行は、

「はっ」

と、恐縮しながら、

「お上がりなさい」

と、常磐うながを促した。

常磐は、顔を上げ得ない。

乳のみは無心だが、今若と乙若の二兒は、二夜の牢舎ろうや暮らしに怯おびえきつていた。母の膝から寸分も離れないのである。

「仰せじや。上がられて、床の座をいただきなさい」

起たないので、奉行がまた促すと、常磐は二兒をあやしすかして、ようやく、俯向きがちに広縁の端まで上がって坐った。

母子おやこ三人が、巢の中の小鳥のように、小さく縮まり合った。

見も知らない怖い小父さんたちが、厳然と、清盛の左右に見えるので、今若も乙若も、

母の膝へ爪を立てないばかりにしがみついていた。

「……………」

清盛は、その幼い者と、常磐の寡れ果てた顔とを、見くらべていた。

初めて見る常磐ではない。九条院に仕えていて麗名の高かった頃から始終、垣間見ているのである。

死んだ義朝といい清盛といい、お互いが女には眼の早かったものである。どこの局にはどんな女性がいるとか、なにがしの中納言の娘はどうとか、武将たちの話題がそれになると、源氏も平氏もなく喧しく賑わった。

そして人の恋している花を、横から手折つて興がったり、戦の先陣に次ぐ誉れみたいに見よがしにした。常磐の場合でもそうだったのである。その頃、清盛はまだ見る影もない布衣だったし、義朝は得意のさかりであった。

が——今は。

余りな変りようである。清盛も感慨なしにはいられない面持であった。ややしばらくたつてから彼は初めて常磐に云った。

「乳は出るか。……乳はたくさん出るのか」

四

恐い人と噂にも高い六波羅殿である。その清盛の事だから、どんな激越な吟味ぎんみぶりかと思いのほか、

——乳は出るか。

という質問が、最初に出たので、常磐も意外であつたろうし、侍側や問罪所の諸人も、あつけにとられた顔して、黙り返つていた。

「……………」

片手に牛若を抱いているので、片手のみを床につかえたまま、常磐がかすかに顔を横に振ると、清盛はうなずいて、

「出ないか。さもあろう」

と、独り唧かこつようにまた、

「わしの母親も、貧乏の頃は、乳が出ぬので、悩んでおつた。女親とは、愚かなもので、ない食べ物も、あるように見せて、良人おとこへ喰わせ、這う子に与え、自分は喰べぬうえに、

乳呑児に乳をせびられる。堪たまったものではない」

「……………」

「さすがに義朝を、うつつにさせた其女そなたの容色も、あわれや、見るかげもなく窶やつれたなあ」
彼の歎声は真実だった。可惜あたら——と心の底から出たのである。

「常磐」

「……………はい」

「顫おのいておるらしいが、何も恐がるに及ばぬ。そなたに罪はない。合戦は、清盛と義朝のいたした事だ」

「……………」

「女どもが知った事ではないが、そもそもは、義朝の愚が清盛を幸いさせてくれたようなものだった。彼は、一個の武弁に過ぎない男で、清盛ほどの政略もないのに、公卿の政争に組わじたのが禍わざわいの因もととおうか。——何にしても、武門のならいとはいえ、気の毒なのは、一族門葉、それに何も知らないお前どもだ。——がしかし、清盛は、そなたのような者まで斬る気はない。安心するがいい」

「……………も……………もしっ」

常磐は、必死にさげんだ。

「わたくしの生命いのちは、ゆめ、惜しいとはぞんじませぬ。……お慈悲を。どうぞ和子さままたちの一命を」

ことばの終るも待たなかつた。まるで別人がどなったかと思われるような、大喝だいかつで、
「凶めにのるなツつ。女めろう！」

「……………」

「あわれをかければ、すぐつけ上がる。女どもの憎い癖だ。そちは元より氏素姓うじすじょうもない九条院の雑仕女ぞうしめ、義朝の寵をうけたといつても門外の花だ。しかし抱えておる子たちは正しく源氏の血流、ましてみな男の子お。助けておくことは罷りまかならん」

その形相ぎようそうと峻烈しゅんれつな声に、今若がベソをかきはじめた。乙若も泣き出した。

常磐は、ひれ伏したきりとなつている。その黒髪を清盛は睨ねめすえていたが、

「ちいつ、よしない事」

と、何か悔いたように、ぬつくと不意に立ち上がつて、

「下屋しもやへ退しりぞげろ」

役人たちへ命じると、耳でもふさぎたいように、首を振つて、正殿の帳台へかくれてし

まった。

下屋は長い廊を隔てて、裏園のはるか彼方にあつたが、深夜に入るとそこからでも、乳呑みの泣くのが聞えてくる気がした。もつともそれは清盛の耳のせいかも知れなかつた。

なぜならば、彼は夜もすがら眠りつけない容子だつたからである。いつそ世間の底も貧苦も知らない家に生れていたら、こんな悩みもすまいと、清盛は思った。

いつになく、翌る朝、早く起き出でたと思つたと清盛は、

「小松殿を呼んでこい」

と、侍者を走らせて、重盛を迎えにやつた。

五

朝の光の充ち^みている室で、重盛は、父の顔を見た。

「どうかなされましたか」

「むむ……すこし頭が重い」

「おつかれが溜^{たま}つたのでしよう。朝^{ちよう}へ上ると、いろいろ煩^{わづら}わしい事が多いらしいと、禪尼

にも、お案じなされておりました」

「尼どのに、会ったのか」

「はい。いつぞやの儀で——」

「尼どのには、まだあの儀を、歎いておられるか」

「お諦めになりません。亡くなられたご実子の思い出やら、頼朝の事やら、話されたり訊かれたり、よくよくとみえて掻き口説かくだいておられました」

「清盛を、無情者よと、恨んでおいでられたろうな」

「お口には出されませぬが」

「——重盛」

「は」

「前の合戦——保ほう元げんの乱の後では、信西入道には、ずいぶん思いきって、日頃の政敵や残党どもを狩つて、斬り尽したな。……だが、ゆうべも寝ずに考えた事だが——結果はかえつて悪かつたようだな」

「無用にまで人を斬つて、人望のよいはずはありません。信西入道からいつとなく人心が離れたのは余りに果斷剛毅にすぎて、そこに涙というものが少しもなかつたからでしょう」

「うむむ」

「今度の合戦では、信西入道こそと、憎しみの的にされ、西洞院のやしきも真つ先に火を放けられて、逃ぐるを追われ、源光泰のために、田原の野辺で非業な最期をとげてしまいました。苛烈な人斬りをした酬いよと、弔う人もありません。輪廻とや申しましようか。業の廻りといひましようか」

「いや、仏者ばなしは止せ。そんな茶のみばなしではない。深く、ゆうべわしは考えてみたのだ。その信西入道の仕方と、世上の反響やその結果をな。……と、良くないわい。下策だ。人心をつかむ所以でない。これを義朝一族の後始末に照らしてみるとだ」

「ホ……」

重盛は微笑をたたえ、ついうかと——お気づきになりましたか——と云いかけたが、父の性格は、他の忠言でするのを好まない。たとえ他の忠言で行うにも、一応、自分の考慮と意思から出たものとしなければ実行しない——その性癖を知っているので、

「御意のとおりです。まったく、お考えは図に中っております」

と、相槌を打った。

すると、清盛は、

「そうか。和郎にもそう考えるか。大を為さんとすれば、よろしく仁を施さねばならぬ。

——幼い頼朝ごとき者、打首にしても、世上に眉をひそめさせるだけだ。一命は助けてとらそう。流罪申しつけろ」

「……えつ。では」

むしろその恬淡さに、重盛のほうが抜駈けされたような心地だった。父の顔はそれを云つてしまうと、さばさばと朝らしい照りを顔脂に見せているのだった。

「大慈悲心を起されました。禅尼にもそれを聞かれたら、どんなにお欣び遊ばすかしれません。……ではさつそくにも、泉殿へ」

「ひとつ孝行したの」

「ああ、寔によい朝でございました」

重盛も清々しかった。父に対してこんな崇高なものを肉親の情以外に、胸に抱いたことはなかった。

さつそくにと、欣んで起ちかける重盛へ、

「あ。それから」

と、清盛はこれも至つて簡単に云つてのけた。

「ついでに事に問罪所のほうへ自首して出た常磐御前ごげも放してやれ。ただ子たちはみな男だからな、寺入り申しつけるがいい。——乳のみ児は、すぐもぎ離したら泣き死のう。百日ほども母の手に猶予ゆうよを与え、鞍馬の山へでも上げてしまえ」

しゅんぎよう
春 暁

一

ゆうべ頼朝は、宗清からそれとなく、最期の覚悟を諭さとされていた。

「さあという時、恥のないように、いつでも死ぬる心を、お胸にすえておくのが肝腎かんじんです。あなたが世の笑いものとなる事は、源氏の恥のみではありません。侍というもの全体の笑いぐさですからね」

「たいがい、大丈夫に、死ぬると思っております。——こうして掌てさえ合せれば」
常のような素直さで頼朝は云う。思いのほか動揺も見えないので、宗清は、いくらか安

んじた。

頼朝は、今朝も起きると、幽室にぼつねんと坐つて、何やら考えている顔していた。十三日は、その日であつた。

「——今日は首斬られる日」

と、知っていた。

怖いようなまた、何でもないような——であつた。

鶯の聲が、今朝も耳につく。

と——

庭さきの陽の光の中を、その鶯の影が征矢そやみたいかに翔けた。あわただしい跫音が長縁を走つて来たので、驚いたものとみえる。

「……来たか？」

頼朝の顔が、蟬せみみたいのに白くなつた。さすがに眸まぶたも恟々おどおどしはじめていた。

「佐殿」

宗清であつた。それへ見えるなり声を弾はずませて云うのだつた。

「お欣喜なさい。今はまだ申されませんが、きようは、やがて吉よい事ことがございますぞ。——

「吉い事が」

それでもまだ遽にわかには顛ふるえも止まらず、何の意味か解げせなかつたが、やがて今に、これへ小松殿がお見えになられますぞ——と、宗清が、云い残して去つてから、やつと、

「ア。……ことによると？」

頼朝は覺つて、急に、体をそこに置いていられないような氣持になりだした。

恐こわくて恐くて、一刻もはやく、この檻おりを破つてでも逃げたくなつたのは、それからの半日ほどの間だつた。

午ひるの刻こくの頃おい。

小松重盛が見えて、池いけの禪尼ぜんにのおすがりと、清盛の慈悲おんあわれみとに依つて、一命を救つてとらせるとの旨を、頼朝につたえると、頼朝は、嗚咽おえうの声をあげて、幾たびも、

「あ、有難うございます」

と、心から礼をのべた。

心からであつたが、自分でも余りはしたなく泣いた事を、すぐ後では恥はづかしく思い出したとみえ、威儀いぎ改めて、両手をつかえた。

「どこへ、身は流される事か、分りませぬが、禪尼さまへ、何とぞよろしく、おつたえ置

き下さいまし」

「いや、その前に、一度お目もじ申しあげて、お礼をのべられるよう、重盛が計ろうてとらせよう」

重盛が帰ると、その夕、正式の沙汰を携えて、六波羅の役人が見え、

伊豆の国へ配流はいるの事。

三月二十日、京師を立つて、配所の地へ、下され申すべき事。

の二つを申し渡した。

その日の来るのを、頼朝はどんなに待ったかしのれない。幽室から空ばかり見ていた。

日が近づくと、宗清は、

「伊豆へ下られる道中、六波羅からは、追立役の検使、警固の青侍などがついて行きますが、不親切はいうまでもありません。誰か、せめて途中までも、お付添いしてくれそうな、ご縁故の者はありませんか」

と、訊ねた。

頼朝は小首をかしげて、父の知る辺や、家来の名などを、しきりと思ひ出しているようだったが、やがて首を振って、

「ありません。——あつても、六波羅どのを憚はばかつて、誰も従ついて来てくれる者はないでしょう」

二

高札が立った。

すわ、何か。

という眼いろが、それへ寄り集まった。市の中にも、橋のたもとにも、東獄の門前にも、そういう人だかりが随所に見られた。

「はいる配流とある」

「流罪か」

「伊豆の国へ」

「伊豆へ？ …… ほう」

伊豆とは、どんな遠国やら、京の人々には想像もつかないのである。

「——でも、よかった。また加茂川に、おさな稚いわこ和子たちの首斬られるのを見るよりは」

誰もみな、そこでは、ほつとしたような息をついた。六波羅の処断を、

「情けのある仕方」

と、言外に賞めたたえた。

折ふし、民衆の中には、合戦以後、これから自分たちの司権者として臨みかけている清盛という人が、大きく——こっねん忽然と大きく意識にのぼっていたところなので、「こういう情けのある仁者ならばこれからのご政道もいちだんとよくなるう」という安心も交じっていた。

けれど、一面のほうで。

清盛の評ばんは、かえって平家の一族のなかでよくなかった。頼朝の処置などは、もつとも悪評で、

「義朝、義平、そのほかを皆斬つていながら、なぜあの童一人わらわを助けたか」

「平常、何事にも、徹てつしておやりなさるご気性にも似あわぬことだ」

「池の禅尼や小松殿のお口添えによるというが、他からの進言などに、御意ぎよいをうごかすよ
うな殿でもないのに」

などと少壮な武者輩むしやばらの間には、不平の声ふんぶんが紛々とあつた。

武力をかけて、自分等のなした大業に、そういう私情だの、裏面の処置があつては、画龍点睛を欠くものだ。平家のため、将来を思うならば、頼朝は助けおくべきものではない——という強硬な論議がかなり聞えるのだった。

「そればかりではない」

と、一部強硬な仲間ではまた、よりより寄々に云う。

「常磐の罪はどう決まったのか。彼女の抱えている男の子三名のご処分も、高札の面おもてには見えていない。問罪所の沙汰もあれきり聞かぬ。いぶかしい事ではある。闇から闇へのご処置ぶりというべきだ。何かあれにも、裏面があるのではないか」

うわさは、うわさを生む。

その常磐は近頃、獄から下げられて、七条朱雀あたりの小館に、母や子どもらと共に無事にいる。

そして折々、そのの門には、主ぬしの知れぬ輩くるまの着く夜などあつて、口さがない町の凡下ほんげたち、

(六波羅様が忍ばるる)

などと専ら取沙汰しておるぞ——と、それをまた、事々しく、いかにもほんところしく、

取沙汰して伝えて来たりする者がある。

常磐の美しいことは有名であるし、清盛が女性にょしょうに脆い人もろであることも、若い時分の行状からでも、隠れない事実である。

従つて、このばかな噂も、案外ばかりにはされず、

「ふム。そんな事も、あり得ない事とは云えぬな」

一族の中にすら、半ば、信じる者があつたりした。

そうした世間の沙汰や、ようやく、合戦の悪夢を忘れかけて来た巷ちまたのうごきの中に、早くも三月の二十日は来た。

頼朝は、前日の十九日から、池の禅尼の泉殿のほうへ身を移されて、遠い配所へ旅立つ支度に、夜もすがら眠る間もなく、暁あかつきを待っていた。

三

表のほうに馬の嘶いななきが聞えだした。次第にそれは、人声や馬蹄ひつめの音も加えてくる。泉殿の門前から広前へかけて、人の寄つて来る気はいであつた。

「夜が明けたな」

頼朝は臥床ふしどから立った。

彼の起き出た様子に、泉殿の使い女つかめたちは、妻戸をあげ、蔀しとみを上げた。

——が、夜はまだ明けきれてはいないのであった。星さえ見える暁ぎようあん闇である。

「あ。もし」

雑仕女ぞうしめのひとり、頼朝が、自身で臥床ふしどを片づけているのを見て、あわてて寄って来ながら云った。

「ここのお掃除などは、私たちがいたします。それより身支度を遊ばして、禪尼様のお部屋へおいでなされませ」

「禪尼様には、もうお目ざめですか」

「ええ、ゆうべは遅くまで、あなた様とお物語りでしたが、あれからも、ほんの一刻ときほど、お眠り遊ばしたきりでございます」

頼朝は、云わるるままに、身のまわりを整えて、縁つづきの一室うかがを窺い、

「弥兵衛、起きてか」

と、訪れた。

すぐ、宗清が顔を出して、

「おう、すけどの佐殿か」

と、縁に立ち並び、

「お早いお目ざめでしたな。ゆうべは、更ふけるまで、禅尼様とおはなしで、眠る間はなかつたでしょう」

「いや、たくさん寝たよ」

「そうですか。きょうから長いお旅路です。——また、馬の上で居はぐ睡りなど遊ばして、連れにお逸はぐれ遊ばさないように」

「はははは。だいじょうぶだよ、今日は」

頼朝は笑った。

宗清も笑い合った。

馬の上で居はぐねむりしたため、雪の近江路で、父や一族に逸はぐれた時のはなしを——ゆうべ禅尼や重盛や宗清などに囲まれて無邪気に物語ったのを、思い出したからである。

無邪気といえば。

死罪一等を減じられて、伊豆へ流罪ときまつてから、頼朝は、口のききようまで、子ど

もらしくなっていた。きょうまでの毎日毎日を他愛なく暮して、

(待ち遠しい。待ち遠しい。はやく伊豆の国というところを見たい)

と、云っていた。

ゆうべも、禅尼から、

(なんぞ尼からもお餞せんべつ別をあげましょう。何が欲しいとお思いか)

と、訊かれたのに対して、頼朝が、

(双すじやく六が欲しい。伊豆へゆくと淋しいから)

と、答えたので、禅尼はその答えにも、

(あどけないものよ)

と、涙ぐんだりした。

春秋無事に、仏供養のほか、する事もない禅尼には、この善根を施して、きょう頼朝を、東国へ立たせてやることは、人知れぬ大きな楽しみでもあり、生きがいを感じた事でもあった。

「さ……。お待ちかねでしょう。お部屋へ伺うかがってみましょう」

宗清は、そう促うながして、頼朝を連れ、さながら華麗な寺院のような泉殿の廊を渡り、ひろ

い平庭に向つてゐる禪尼の一室へ、別れのあいさつを告げに行つた。

まだ仄暗いので、次の間にも禪尼のそばにも、結び燈台が灯つていた。けれど朝の冷やかな大気は室に満ちていて、灯の色は白々していた。

「おう、佐殿には、もうお立ちか。……お名残り惜しいことよの」

禪尼は、頼朝のほうを向いて、しばしは、その姿を見入つていた。頼朝も、さすがにこの朝は、胸がつまつて、何と喋つていいのかわからないのであろう、いつまでも両手をつかえているだけだった。

四

やがて、頼朝は、

「ご恩によつて、ふしぎな一命を長らえました。生々世々、忘れはしません。伊豆へ下つても禪尼様のお幸を、朝夕祈つております」

さすがに今朝は、大人びて、涙に眼を曇らせながら云つた。

他人の子とは思われぬと、常々云つてゐる禪尼なので、頼朝にそう歎ばれると、酬われ

たここちで、彼女は無性に涙に溺れながら、

「よう仰つしやつた。寔に、そもじのお命は、御仏のお護り、人業ではない。——それにつけ、尼がゆうべも申したよう、仏果をおそれ、菩提に心を染め、行末とも、亡き母者や父御の回向に一生をささげなされよ」

「……はい」

「ゆめ、弓箭の太刀のと、血臭い業は思い絶ち、たとえすすめる者があるうと、耳には入れ給うなよ」

「はい」

「人の口はうるさいもの。二度と憂き縄目などにかかるまいぞ。——伊豆へ下られたら、すぐにもよき導師をたずね、お髪を剃して、この尼が志を無になさらぬようにの……」

「はい」

禅尼は、満足そうに、微笑んで、宗清を顧みた。

「まだ少しは、時刻の猶予があるうか」

「されば、長くは如何かと存じますが、荷駄へ旅行李など積むほどの間は——」

宗清は答えると、気をきかして、その準備にと、先へ出て行った。禅尼は、その後で、

頼朝へそつと促した。

「そもじに一目会いたいという者が、あれなる下屋に待つておる。名残りを告げて行くがよい」

誰か？——と頼朝は、下屋へ行つてみた。するとそこには三名の顔を知つた者がひかえていた。

一人は叔父のすけのり祐範。

もう一名はこうけつげんごもりやす頼頼源吾盛安と名乗る源家の牢人。

それと、ひきつほね比企の局。

——そう三人がいた。

局は、頼朝の乳母うぼで二条院にいた頃は丹後の内侍ないしといわれていた女によしよう性である。去年三月、母とも死に別れてからは、いつそう頼朝には恋しい乳母だった。

「……………」

頼朝は、つき上げる感情を抑えるように、棒立ちに突つ立っていた。比企の局は、その姿もよく仰うぎ得ないで、泣いてばかりいたが、

「和子様。お髪ぐしを上げに参りました。どうか、お名残りに、お髪を上げさせて下さいませ

……」

と、云った。

頼朝が、だまって後ろを向いて坐ると、局は涙ながら彼の髪を梳すいて結び直した。そして耳へ、

「きょうが最後のお別れではございませぬぞ。東国へお下り遊ばした後も、また、何かと乳母がお側へまいりますれば……」

と、ささやいた。

纈こしげつ 纈源吾盛安もすり寄って、早口に、

「和子さま。和子様。——八幡大菩薩のお計らいで、ふしぎに助からせ給うたお生命いのちですぞ。いかなる者に強いられようと、そのお髪を剃おろしてはなりません。一心、お髪をお惜しみなされませよ」

「……うん」

頼朝は頷うなずいた。

禅尼から、出家せよといわれればそれにもはいと答え、源吾盛安から髪を惜しみ給えといわれれば、それにも彼はうんと頷いた。

ことわざ
諺にも、

人を捕る淵ふちおと音もせぬ

という。

彼は素直な子には違いなかった。

五

その時、中門のほとりで、大声でどなる者があつた。

「佐殿には、何を猶ゆうよ予しておられるぞ。はやお出ましなされ。時刻でござる。——急ぎ候え」

護送の検視役、平季たいらのすえみち通の組下であろう。仮借かしゃくをしない声である。

下屋の裡で、髪を上げていた頼朝は、

「乳母、もうよい」

と、比企つぼねの局が、名残り惜しげに、いつまでも梳なでつけている櫛くしの手の下から、やにわに、癩かんを起したように立った。

そして、局や叔父の祐範などが、自分のために泣いている体を見やって、

「なぜ泣く」

と咎めるように云った。

「——常人の配所へ流されるのは、悲しみかも知れぬが、頼朝のきよようの門立ちは、稀代な吉日と、欣んでよいはずではないか」

三名の者は、そう云われて、心に持たない所をふいに打たれでもしたように、ハツと涙の顔を醒ましたが、その時もう頼朝のうしろ姿は、下屋を出て、大股に、彼方の人群れのうちへ入って行つた。

泉殿の殿口、廊門、表門にかけて、一しきり混雑の人渦が巻いた。ちようど花頂山や如意ヶ岳などの東山一带の線が、暁空にくつきり浮き出して、紅の旗みたいな雲の裂け目から、旭光が縦横に走って見えたが、往来へ出て、北山西山のほうをみると、京の町や加茂の水は、まだ仄ぐらい残月の下に眠っていた。

「——叱いッ」

「前の者、進め」

「しィッ、叱っ……」

列は動きかけて動かない。

頼朝を乗せた駒を取囲んで——護送人の青侍たちの駒と駒はさかんに狂い合う。

馬上から——

「では」

と頼朝はもう一度、泉殿から見送る人々のほうへ、頭かしらを下げた。

とたんに馬蹄ひづめの音は、憂かつかつ々とそろい出した。自分の駒も出ているのである。彼は、幾

度も振向いた。黒々と、一群の人影は、いつまでも泉殿の前に見えた。

追立の役人十数騎の中に、特に免ゆるしをうけたものとみえ、叔父の祐範と纈こうけつ纈源吾のふ

たりの顔も交まじって後から従まいて来る。

——吉よい日ひだ。歡よろこびの朝だ。こんなめでたい門出はない。

頼朝は、さつき身寄りの三名に云った自分のことばを、鞍の上で、ふたたび思い出していた。紅色に染めわけられた暁あけぞら空を仰ぐと、何か、からからと笑いたいような——また、大声で歌でもうたいたいような気もちに駆られてならなかった。

——憂かつ、憂、憂、憂

馬蹄ひづめはそろう。

十四の少年の心はおどる。あしたの事など考えていなかった。きのうの事も忘れていた。いや、たった今、禪尼から懇々こんこんと、出家召されよと諭さとされて「はい」と答えて来たことも忘れていた。

鞍つぼには、その禪尼から饑別せんべつにもらった、美しい双六すじろくの筥はこを、大事そうに抱えていた。そして警固の侍をつかまえて、双六のはなしなどしかけたので、検視役人季通すえみちは、
(すこし莫迦ばかかな?)

と疑った。

粟田口あわたぐちへさしかかった。

並木の所々に、路傍の人がたくさん見に出かけていた。白い朝靄あさもやにまぎれて、地上に手をつかえて見送っている僧や牢人や市人たちもあつた。

その中には、世をひそむ源氏の輩ともがらもあつたにちがいない。人知れず、涙をながしていた者も尠すくなくはなからう。——けれどもその朝、ことしの春の歡びを一つに持ったように輝いていたものは、多くの人々から、あどけない子よ、素直すなおな和子よ、と泣かれて行つた頼朝の顔だつた。

砂金

一

年々、雪が解けると、彼は遠い奥州から上つて来た。

大勢の仲間の商人と、それに附随するたくさんな下僕や男どもを連れ、何十騎という馬の背には、厳しい荷^{にこり}梱や岩^{がんじょう}乗^なな箱を結いつけて——駅路の鈴も物々しく、蜿^{えん}蜒^{えん}たる人馬の列を作^なして、この大商隊は、都入りするのだった。

彼は、その商隊の^{さいりようかく}率領格で、奥州栗原郷の吉次という者だった。四十を越えたぐらいな年配で、逞^{あきんど}しい商人^{だまし}魂^いの持主であった。

「吉次が通る——」

「金売吉次が都へ上る」

と、街道すじで聞えれば、東海道はもう四月頃だし、都は桜若葉だった。

ことしも——

仁安の三年。それは、平治の大乱があつてから十年目、頼朝が伊豆へ流されてから九年目である。

彼の商隊は、都へ着いた。

都へはいると、長の旅垢や埃にまみれた人馬は、三条河原の空地にひと先ず屯をして、ここで一行何十人の商人が、各の荷物を分け合い、道中の費用の頭割り勘定やら、つがなく都まで来着いた無事を祝し合ったりした上、

「ではまた、六月に落ち会おうぜ」

と、隊を解いて、思い思いに、市中の旅舎へ、別れるのが例となっている。

道中一つに來ても、商品と販路の目的はまちまちであった。

奥州産の細布や伊達絹。

矢に需用される鷲の羽。

水豹の皮、その他の獣皮類。

漆。金箔。

木地類。

南部駒と都で飲ばれる駿馬。

などが商品の重なる物で、吉次は、多く砂金を扱っていた。奥州の産金は、無限に都で需用された。

もちろんその代価は物品で、中央の物資が、帰りにはまた、馬の背に積まれるのである。奥州の文化は今、おびただ夥しく都の物を求めていた。名匠の仏像とか絵画などの作品から、生きている美女までを、いくら送つても足りないほど輸入していた。

その地には、

「平相国、何者ぞ」

と、遙かに京都の勢力を睥睨へいげいしている藤原秀衡がいた。

藤原氏三代に互わたつて、都から吸引した文化と物資は、京都にも劣らない大都府を、平泉とよぶ地方に築き上げているとは——この商隊の商人あきんどなどから都の人はよく聞かされる事だったが、

「まさか」

と笑つて、信じようとはしなかつた。

東国の武蔵ノ原とか、伊豆の蛭ヶ小島ひるこしまと聞くだけでも、夢のように、遠い未開地としか想像できない都の者には、

「——そこからまだ、何百里」

などと聞く陸奥みちのくに、そんな所があるうわけはないと、頭から嘘にしてしまうのであった。

「——いや、嘘ではございませんよ。まったくです。嘘と思しめすならば、こんど手前が帰国する折、ひとつお供いたしましょうか。いかがですか」

一条大蔵卿朝成いちじょうおおくらきようともなりのやしきで、吉次は初夏のある日、商用をよそに、むきになつて話しこんでいた。

「は、は、は。ははは」

話し相手は、主の大蔵卿であつた。笑いが止まらないといったように笑う。

吉次は、口をつぐんだ。——もう話してもばからしいという顔つきで。

葛布くずの小袴こばかまに、縹はなだい色の小直垂こひたれ、道中用の野太刀ひとこし一腰、次の間ひとこしにおいているだけだつた。いくら黄金の力を内心誇つてみても、都の貴人の前へ出ては、みちのくの一商人あきんどとしか見られないのが、業腹ごうはらでならなかつた。

怒れない。怒ったら商あきんど人は損と極まったものだ。——が、そう自分にいい聞かせなくても、吉次はその道の老巧だった。公卿や武將を相手に、その玩具おもちゃになり、馬鹿になることの名人だった。

「——馬が仔を産みましてな、いやこんどの道中でいきなり途方もない事を云い出して、ひとりで、へらへら笑いだした。

「馬の仔を、ご覧になったことがございますか。産れるとすぐ、歩き出しますんで。——どうして、可愛い奴ですよ」

「何をいうかと思えば、馬の仔のはなしか。やくたいもない」

一条朝ともなり成あぐびは欠伸をして、

「長談義、ちと飽いた。——用がなくば、また来い。まだ当分は、都に逗とまり留ゆうであろう」

「はい、こんども、夏ぐち頃までは……」

「商あきないか」

「左様で。……時に、過日おねがいのご用命は、いかがでございましょう」

「ああ、六波羅殿のご普請ふしんのことか」

「それもございますし、小松殿におかれましても、伽藍のご建立があるそうで。——
何かと、金沙、金泥、金箔など、たくさんにお費用でございませうが」

「あるにはあろう」

「お口添えで、この吉次に、ご用命がねがえれば、こちらのお館へも莫大なお礼物をお頒けすることができませうがな」

ここで吉次は幾ぶん胸の鬱をはらした。見まわせば、いかにも貧しそうだ。豊かな公卿というものは尠ないが、わけてここの邸には、坐つていても貧乏のにおいがする。

見を飾る出仕の牛車にしてからが、さつき上がりがけに見たところでは、五年も塗更えてない貧乏車で、牛部屋の牛は痩せている。主の粗服は、廂のやぶれと同じ程度の古さである。

「さ。……御所のご用品なれば農たちの係りだから、どうなとなるが、六波羅殿には、何のご縁もなし、わけて黄金商人の執りもちなどしたら、他の商人から怨まれもするし、世間の口もうるさかろう」

「いやいや。——他様なら知らぬことですが、こちらのお館と、六波羅様との間がらな

「なんでそのように親密じゃというのか」

「へへへへ。……存じ上げておりますよ。吉次は、以前からずっと、九条院にも伺って、何かとお出入りを仰せつかつとりましたからね」

「九条の女院にょいん」

「へい」

「なんの謎じゃろ？」

「おとぼけ遊ばす事がお上手でいらつしやいますな。……こちらの奥方様のはなしですよ。世間はもうけろりと忘れておりますが、吉次はお目にかかるたび思い出すのでございます。

——九条院にお仕えになっていた頃のお姿を」

「奥のゆかりのことか」

「ゆかり様。——それはご当家に再縁あそばしてからかえなの更名かえなでございましょう。以前はたしか常磐とこむわ様」

「……………」

「——で、ございましてろ」

吉次が、頭をつき出していうと、朝成ともなりは眼を反そらして、

「そんな事、だれが世間へ密かにしていた。隠し事でも何でも無い。六波羅殿のおことばで、儂のみに再嫁したことは、隠れもない公のおおやけの沙汰じゃ。——何を今さら」

朝成は、急に、不機嫌になりきった。話が妻の前身に触れればいつもこうなるのである。世間ずれない公卿の感情を左右することは、吉次のような男には嬰兒あかごをあやすより易やさしかった。

三

しまった。——ちと葉がきき過ぎたあんばいである。

吉次は、そう思うとすぐ、

「ご免を」

と、部屋を退がって、朝成の前から一時、姿を消してしまった。

「……………」

朝成は、まだ不きげんが去らない。苦虫をかみつぶしたように、眩まばゆい初夏の庭面にわもへ、虚うつろに眼を向けていた。

もう九年も前だが――

清盛の口から、不愍ふびんな女があるが、後添のちぞえに娶めとつてやらぬかといわれ、六波羅殿の声がかかりではあるし、自分が迎えてやれば、その不遇な女性も救われる事情にあるとの事に、

(娶めとりましょう)

と、三人の子連れのまま、後妻として迎え容れたのだった。それが、常磐であった。

正室としてからは、彼女の名も更かえ、子供らもそれぞれ、清盛の内意によって、他へ処分をつけたが、世間は、

(もの好きな……)

とか、

(何か深い事情わけがあつてに違いない)

とか、

(何もああまで六波羅どのに媚こびて、出世を計らないでもよかろうに)

などと、何か私慾のためにでもしたように、ひどく陰口を云われたものであった。

もつとも、世間の通念からすれば、源氏に由縁ゆかりのある者でも、極力、平家方へ迎げいごう合するが時勢に沿うというもので、何も特に、複雑な事情にある子連れこぞの女を、いくら後添え

にせよ、持つ要はない。持つからには、何か、それに代る利得があるからに違いない——と、痛くもない腹をさぐるのは、むしろ当り前とも云えるのだった。

一条朝成は、そのために、以前よりも六波羅から足を遠くしてしまった。

たびたび、清盛に近づいて、清盛に好感を得ておくことは、勿論、出世の道であることぐらい、十分に知りぬいていたが、世間が妙な眼で見ると、自分の方からこゝ何年間も疎遠にして来たのである。——現状のひどい貧乏も、官位が進まないのも、友達に寄りつかないのも——原因はそれだけのものだった。

(まあよいわ。貧しくても、妻には慰められている——)

その値あたとして、彼は、御所の一財務官に過ぎない勤めと、十年一日のような平々凡々を、ひとり愛していた。——六波羅殿の息のかかった者は、みな赫かつ々と、榮進したりすばらしい変化を見せている時流の中で、ぼつねんと、妻と貧乏とを正直に持っていた。

その貧乏をつけ目で、金商人かねあきんどの吉次などは、私邸へ近づいて来たものだった。おとし頃から出入りしているのだ。来るたびに、

(奥方へ)

などと云つては、奥州の土産物みやげものなど持つて来た。つい取つておくと翌年も来た。また、

今年もやって来た。そして三年目に、本音をはいた。

(あなた様のお口添えで、六波羅様のご普請のご用をひとつ)

と、虫のよい頼み事だ。それはよいが、常磐の前身など口に出して、暗に、九年前の世間の陰口と同じような口吻くちぶりをもらしている。いくら人のよい一条朝成にしても、不愉快になったのは、当然であった。

「……どうも、失礼を」

吉次はまた、ひよっこりと、彼のいる室へ、戻って来た。そして、朝成の眼のまえに、例年のとおり十匹の伊達絹だてぎぬと、一提げさぎの漆桶うるしおけなどの土産物をならべた。

四

「どうか、お気にかけないで下さいまし。つまらぬ事ばかりしやべりまして。——これは毎年の物で珍しくもございませんが、ほんのごあいさつままでに」

土産物を置くと、吉次は、ふたつ三つ軽口を云って帰ってしまった。

帰った後で、一条朝成が、何げなくその伊達絹や漆桶の土産物を見すると、意外な物

が見出された。

一 囊いちのうの砂金である。片手ではちよつと膝に持上あがらない程の額ぬかだった。

「太ふてぶて々々しい男……」

その時は怒つたが、日のたつほど、怒る愚を考えて来た。

しかも吉次は、とうとうその年はそれきり顔を見せなかった。

年暮くればから初春はるを越すと、砂金のかねは半分以上も手をつけてしまっていた。——また、

雪が解ける。四、五月が近い。黄金かねうり売吉次が京へ出て来る頃となろう。

正直者の朝成は、氣懸きがかりになり出した。ままよ、彼の頼みを取次いでやればすむわけ

ある。六波羅へも、なんぼなんでも余り、足を絶ち過ぎていた。こんな折こそ、口実にも

なる。出向いて、吉次の依頼を、ひとつ懇願してみよう。

年暮くればに塗更ぬりかえた牛車くるまを、彼は久しぶりで六波羅へ向けた。

「六波羅へでござりますか」

付ぞうしきいている雑色は、いぶかしげに主人に念を押した。

「うん……六波羅へじゃよ」

だが、西八条の華麗な門をくぐると、彼はいやな氣持になった。つい保元平治の合戦の

前までは、眇目すかめの子の安芸あきどのか——ぐらいに下に見ていられた清盛が、内大臣からまたたくまに、太政大臣——嘘のような事実である。あたりの豪壮ごうそうに圧されて、彼は急に、貧相なわが身が顧みられるのだった。

「ホ。おめずらしい」

牛車くるまを降りたところで、入道殿の三男宗盛に会った。宗盛が覚えていてくれるくらいなら——と何かほつとして、

「相しやうこく国はおいで遊ばされるか」

「おります」

「あまりごぶさたしたので」

「いや、折角ですが、お訪ね下すつてもむだでしょう。何せい父は忙しくて、きょうも御所のお使いを迎え、一族も大勢集まって、何やら評議のようですから」

「……ははあ」

自分の至つて閑ひまそうな顔が、朝成は手持ちぶさたになった。

「……では。よんどころありませんが、貴方にまで、そつとお願いいたしますが」

「この宗盛でよければ、折を見て父に取次いでおきましょう」

宗盛は、一室へ迎えて、彼のはなしを聞いてみた。

政治上の問題でもあるかと興を持つていたところが、つまらない奥州の一商人の紹介なので、宗盛は見下げたように、途中からそら耳で扱あしらつていたが、

「いや、それどころでない。貴方の顔を見て、思い出した事がある」

と急に、朝成の思いもかけない事を云い出した。

「ほかでもないが、それは貴方の奥方の以前の子——つまり義朝の遺わすれ子がたみのひとりで、

鞍馬へ上のぼせてある末子があつたでござろう。そうそう山では遮那王しやなおうとか名づけられているそうだが……あの牛若うしわかという童じや」

「それが、どうかいたしたか」

「鞍馬寺の僧からも、山役人の方からも、たびたび、よからぬ状じようがき書がきが届きいている」

「……どんな？」

「僧をきらつて、武道にばかり熱中し、ややともすれば、師僧にまで逆さからうという」

「その儀は、かねがね妻も案じておる事で、たびたび意見の手紙をつかわしておりますが」

「意見ならよいが、よも煽せんどう動どうなどではあるまいの。何か、源家の系図書のような物を、

お内方うちかたから山へひそかに送ったお覚えはないか。……何せい父の相国にも激怒しておら

るる折だ。そこへ貴所あなたの顔など見たら、油へ火がつくに極っておる。——まあ当分は、不沙汰にかくれ、それよりも鞍馬の童わっぱを一日もはやく剃てい髪はつさせておしまいなさい。髪を下ろしてしまふにかぎる」

天狗風

一

六条坊門の白拍子翠蛾しらびようすいがかの家は、吉次の定宿じしようやども同じようになっていた。翠蛾の妹は潮音という。彼は潮音の檀那だんなであった。

七日ほど前、都へ着いて、彼は今年も、そこへ落着いていた。——が、まだ潮音うしととと一年せぶりの想いを果しただけで、世間へはどこへも顔出ししていない。

それをいつ知ったか、

「お文使いが見えまして」

と、一条朝成からの手紙が彼の手に届けられた。

「ははあ、おれに出向かれるのを懼れて、先手と来たな」

披いてみると、吉次の想像にはたがわず、まず先年の金の云い訳である。それから依頼の件は、六波羅殿へも運動しかけたが、ちと相国よりご不興を蒙るかどがあつて、当自分の扱いでは見込みもない。いずれ面晤の折にはつぶさに——とある。

吉次は、意地のわるい返辞を書いて、その文使いに持たせてやった。

相国からご不興をうけたかどとは鞍馬の稚子を繞つて、近ごろ諸天狗が出没するという怪聞でしょう。うわさはなかなかあるようですな。てまえも仲間の者から疾く聞き及んでいきます。

従つて、あなたの方も、もうあてにはしておりません。策を凝らして方向を計つているところです。ひとつてまえも諸天狗の仲間入りをして、人界をあつと云わせてみようかなどと商人にあるまじき空想などに耽つておりますよ。

砂金の囊など、そんな物に入りきれぬ夢ではありません。

ご放念、ご放念。

それから彼はひどくさばさばした顔つきで、実は、皮肉や興を交せて、認めた返辞の文句を、もう一ぺん胸に繰返して、

「ほんとにそうだ。……奥州から何百里、年々の往還りも生命がけだ。同じ生命がけなら、でツかい事を目企め」

と、空想から自信へ移しかえて、うむと、大きく腕拱みをしはじめた。

いくらでも空想の中に遊んでいられる男とみえる、陽が暮れたのも知らないで瞑目していた。奥州から都まで、年に二度はきつと脛で通っている男なので、自然学識のない禅坊主みたいな、太つ腹だけは出来ているものとみえる。

「おや、何を鬱ぎこんでいらつしやるんですの」

潮音はそれへ結び燈台を運んで来て、彼の横顔から程よい距離へすえながら、おかしそうに微笑んだ。

「……もう燈りが来たか」

「暗いではございません」

「あ、あアッ」

と、伸びをして、両の拳こぶしを天井へ突き上げながら、

「燈りとなつたら、また飲んで遊ぼう。翠蛾すいがにも来いといえ。ほかにいる妓おんなたちもみんな呼び集めろ」

「お姉さまは、今夜から明日あしたもあさつても、六波羅様へ召され切りです」

「三日も」

「ええ」

「ばかだなあ。何でそんなに身を縛られに。——生きているかがあるのか、それで」

「でも、他ほかならぬお館ですもの。行かなければ、生きてゆかれません」

「じゃあ、おまえと、いるだけの妓おんなたちだけでいい。酒や楽器を取りそろえろ」

「わたしもこれからやがて、化粧を急いで、小松谷の重盛様のお客招きへ伺わなければ…」

…

「なに。おまえも出かけるつて。よせつ、止めちまえ」

「そんな事したら……」

「病氣といえ。いくら都の白拍子しらびょうしは、みんな平家の息子や、一族たちの為にあるようなものだといえ、まさか招きを断つたからといって、白拍子を死罪にはすまい」

「されるかも知れません」

「ばかを云え。なんだ平家が。なんだ侍が。世の中は弓矢ばかりで廻っちやいないぞ。黄^か金の力はだれが廻しているんだと思う。——行くなつ、ここの一軒ぐらい。——いや京都中の妓^{おんな}ぐらい、おれが子指の端でもみんな養つてみせてやる」

二

潮音は泣いてしまった。

「……無理ばかり云つて」

と、わが部屋にかくれると、吉次の部屋へ洩れてくるほど、いつまでも噉^{すす}り泣いていた。「おもしろくない」

吉次は、手枕かつて、寝そべっていたが、耳についてならないとみえ、むくとまた、起き上がった、

「行つて来いっ。そんなに、泣きたいほど行きたいなら」と、どなった。

彼方かなたの部屋の帳の陰で、

「行きません」

と、泣きじやくりながら強く逆さからつて、潮音が云うと、

「行つて来いっ」

と、またどなる。

「行きません」

「行けと云うに」

「知らない……」

「そんなら俺から先に出かけてやるっ」

吉次は、癩かんしやく癩かんしやくまぎれに、翠蛾すいごの家を出て、どこという的あてもなく、大路をぶらぶら歩

いた。

瑤ようよう々と簾れんをゆるがしてゆく貴人の輦くるまがある。夕風のなかを美しい魚のように歩く美女

の群がある。小薙刀こなぎなたを小脇こなでに左の手に数珠じゆずを持つて織屋はたやの門に立ちのぞいている尼さん

がある。

都の繁昌は、洛内九万余戸とひと口にいわれている。保元、平治の乱も十年のむかしと

なつて、近頃は宵でもなかなか賑わしい。しかし吉次は、奥州平泉の藤原氏の都市とくらべて、

「なにが」

と、すべての物へ、負けない気を呼び起しながら見歩いた。

ただ悲しいかな、平泉は都市であつても、皇都でない。また、いかんせん美人となつては、京都の血を輸入してゆくしかない。潮音のような美しいのはいない。

その他は、どんな貴顕きけんの門であろうと官庁おごその厳かを見ようと、驚きはしない。彼の叛骨は、かえつてせせら笑いを催してくる。

「ふん……いつまで続くか」

今宵はわけてもそういう天邪鬼あまのじやくがこみあげている彼だつた。元々彼の郷土の国は、八幡太郎義家このかた密接な関係を血にもひいている藤原秀衡ふじわらひでひら一族によつて固められているものだ。いくら平相国へいしようこくが中央に覇はを唱えようと、奥州の天地では何ともしていない。強しいてその血を源氏か平氏かといえは、源氏の血が濃い。——吉次もその氏子うじこの一人だつた。

いつか河原へ出てしまった。加茂の水明りに吹かれると、すこし業腹ごうはらが宥なだめられたこ

こちである。吉次は堤どての若草に坐りこんだ。膝を抱えて、三十六峰と睨こらめツコをするように黙然としていた。小松谷の灯、六波羅の灯、泉殿の灯、武者屋敷や役所の灯、平家の一門眷族けんぞくの館やかた々やかたの灯、神社仏閣の灯々々々、寶石でも撒まいたようである。——ああ盛んなものだなあと彼の叛骨も、腹の底ではうめくばかりだった。すると、そのうちに。

「……おや？」

と、彼は眼を近く移した。

誰もいないと思っていたすぐ下の河原に、人影が立ったからである。細っこい法師のよううに思われるのは誰か、人待ち顔に見まわしたが、誰も河原へ降りて行く者もなかったのでまた、元のように石ころの間へ、河鹿かしかのように、腰を下ろしてしまった。

「誰を待っているのだろ？」

若い法師だけに、吉次は、好奇心を起して、美しい京女でも、相手に現れれば、これは見ものになるが——などと想像を逞たくましゅうしていた。

彼の期待には反して、河原に待つその法師へ、やがて同じ河原づたいに歩いて来て、小声をひそめ、

「……光厳か」

と、呼びかけた者は、夜目で知る人影だけでもすぐわかる大木刀を横たえた野武士であった。

「ア。——兄さん」

痩せた若僧は、恋人でもあるように、野武士の胸へ抱きついた。荒くれた野武士の手も、やさしく抱いて、何やら云っているところを見ると、これは真の骨肉らしかった。

やがて野武士のほう云う。

「……何か、きょうも常磐様からお託しがあったか」

「はい、お手紙を、いつものように、お預かりして参りました」

僧は、辺りを見まわして、兄の手へそつと渡す。——野武士は、その手紙を、額に押しただいてから懐ふところへ納めた。

「これだけか」

「ええ、きょうはこれだけでした。——が、お言葉の上で、こう仰つしやつてでございまして」

「牛若様へ、お言伝ことづてか」

「いや、牛若様には聞かして賜もるな。ただ貴方や他の方々の心得までに——とのお断りで、鞍馬へ折々にする便りも、これが終りと思うてくれ——との仰せでした」

「……ウム。近頃の風説で、一条殿の身辺へも、六波羅の眼が注意を向けだしたようだとは、わしも聞いている」

「そうです。良人のため、良人の一族のためじゃ。悪あしゆう思うてくれるな。牛若様をはじめ亡き義朝様の遺わすれがたみ子三人の者には、再生のご恩のある今の良人に、禍いをかけては濟まぬ。また再嫁する折かに交わした、良人との約束もやぶる事になる。そう私の前もなく掻口かきくど説いてのお嘆きでした。ほんとに前に坐しているに耐えないようなご苦悶くもんに見えまして。よくよくなお覚悟と思われまします」

「ご無理もない……」

ふたり共、黯あんぜん然と、眼をあげて、星にしばだたいいた。

「光厳、よく分つた。もうわしも鞍馬からお便りをいただきには降りて来ぬ。——が、牛

若様のお身については、われわれ旧臣もおる事、必ずともお案じ遊ばさぬようにと——今度お目にかかった折、そつと申し上げておいてくれ」

「はい。……けれど、私にも、余り館へ足ぶみしてくれぬようと、きようはご念を押されましたから、やがて秋にでもなつて、知恩院の説教の庭へむしろでもお見え遊ばした折にそつとお耳打をいたしておきまする」

「いつでもよい。……が光厳、おまえも気をつけろよ」

「え、注意しています。……でもよく常磐様には、十年前、六波羅へお引かれ遊ばしたあの時、わたくしにかくま匿われた事などを、役人に責められても、お口に出されなかつたものと、今でも時々、あのお方の意志のきつい事には驚かれまする」

「あ。……長話しをしていて人目につくといけない。では光厳」

「山へお戻りになりますか」

「ムム夜のうちに」

「では、いずれまた」

ふたつの影は別れた。

光厳は、堤どてへ上つてからも、ややしばし遠ざかる兄の影を見送っていた。

「……ああ、よく一条朝成のやしきへ、法話に来る若僧だ。道理で、どこか見かけた覚えがあると思つたら……?」

吉次は、老柳の木陰に潜ひそみながら、すぐ側を通つてゆく光嚴のすがたを、それが彼の持つているほんとの物らしい鋭い眼で、じつと、横顔から足のつま先まで見ていた。

光嚴は、何も気づかず、やや下流の仮橋を東へ渡つていた。——その影が渡りきる頃、何思つたか、突つと、吉次も足を早めて、仮橋の躍る板のうえを大股に踏み出していた。

四

産寧坂さんねんざかを上りきつた頃を見すまして、吉次がうしろから声をかけた。

「——光嚴さん」

「え。……どなたです」

「名を云つても、あなたはご存知ないでしょう。奥州上りの金売商あきんど人ですが」

「何ぞ用ですか」

「そのこの観音堂の濡れ縁にでも腰かけましょう。……先程はついどうも、失礼をいたしま

して」

「先程とは」

「つい今し方。加茂河原で」

「えッ、河原で」

「みんな伺ってしまいましたのさ。悪い気じゃありませんが、風下にいたせいか、あなたと鞍馬の使者が、小声で云っているのも、聞くまいとしても聞えて来て——」

「ああ兄上との話を？」

「へい、残らずみんな」

「聞いたと」

「聞きました」

堂の濡れ縁に腰かけこんで、嘯くように顔を見せつけている吉次を、光巖は、怪しみと、恐怖と、殺意と、いろいろな感情に絡まれながら蒼白になって睨めつけた。

密偵か？

強請か？

——天城の悪四郎とかいって、近ごろ寺院ばかり襲い廻る強盗の群があると聞くが、そ

んな者の手下でもあるか？

光厳には、いろいろに取られたが、そんなふうでもないらしいのは、相手の次のことばだった。

「まあ、おかけなさい。奥州かよいの生命知らずが、がらにもないとお笑いでしようが、てまえにも人間なみの悩みはあるんで。——ひとつ善智識のお悟しさとをうけたら胸のもやもやが、いっぺんに解決してしまいはせぬかと、実あ、河原から後を慕って来たわけです。われわれ凡夫の煩惱ぼんのうを救ってくれるのは、あなた方のお勤めと思えますが」

「……？」

「聞いてくれますか」

「云つてごらんさい」

——しかし光厳の返辞は、沙門らしくもなく、声に針をふいていた。その眉間みげんはすこしも開かず、その体は硬直したままだった。

「——辺りに人もいないお山ですから、開けツ放しに申します。実は、てまえの迷っている悩みというのは、どうしたら今よりもっと大きく儲もつかるかっていう事なんです。——お蔑さげすみなすつちや困りますよ。断つておきますが、てまえは武士じやございません。根こそぎ

からの商人あきんどです」

「……………」

「坊さんが法ののりの道に。武士が弓矢に。それぞれ徹てつしてゆくように、てまえも徹してみたいと考えると、そこに苦しみがありました。——今のままじゃあ大した儲けにはならない。世の中を自分の富で動かすっていうようなわけには参りませんからなあ」

「……………」

「じゃあ、どうしたら、てまえなどのような商人が羽ぶりがよくなれるかといえは、こう世間がおツとり静かでは困るんで。もつと騒いで物がどしどし動いてくれなくちやいけませんや。……戦争ですな。それも保元、平治のような都の内の乱ではおもしろくない。天下が二つにも三つにも分れて戦つてくれると、この吉次には、やりたい大仕事山ほど出て来るんでさ。武門同士が、血と血を賭かけて戦い尽した頃、土は百姓侍で持つがよい。てまえは天下の財宝を持ちますから」

「……何をいうかと思えば、おまえは気でも狂っているのじゃないか」

「なぜですか」

「わしは僧侶です。かねの事とか、財物の儲け事とか、戦があるののないの——そんな俗事

は聞いてもわからぬ」

「わからないって？ ……。へエー。 ……知らないと仰つしやるのかな……。ふうむ……。ふふふふ」

吉次は笑いだした。

五

「光厳さん。——何も、そう恐い顔したり、秘し隠しにや及びませんぜ。この吉次だつて、商法の上では平家様々だが、血を洗えば、源氏の氏子の端くれはしですよ。今夜あ一つ、ほんとの事を相談しようじやありませんか」

「何をいう！」

と、かえつて鋭く、

「さつきから黙つて聞いておれば、悩みを解く説法を乞いたいの、金儲けの相談をしようのと……。僧のわしへ向つて、おまえはからか椰揄うのか、肚でもさぐる気か」

「いいじやありませんか、金儲けはあきんど商人の吉次がするんです。あなたは貴方の望みを遂

げればよろしいでしょう」

「わしの望みは、仏弟子になりきる事だ。おまえなどとは、行く道があべこべだ」

「いいや、同じでしょ。……あなたも、平家の世を覆くつがえしたいんでございませよ」

「な、なんだと」

「それでなくて、何でお前さん、常磐御前から頼まれたり、鞍馬の天狗と密会したり、知れたらすぐ首の飛ぶような危ない事を、僧侶の身でなさるんですかねえ。……いけませんよ、吉次だったからよかつたが、あんな謀叛むほんを、河原で話し込んでいちやあ」

「……………」

「それに、近頃のうわさがまた、どうも変だと思いましたよ。奥州だつて見た事もねえ天狗様が都のほとりの鞍馬にはたびたび出るっていう評判だ。奥州者といえば、熊襲くまさそだのえびすだのと、仰あやつしやる都会人みやこびとが、天狗を真まにうけているんだから恐れ入いつちまう」

「……………」

「奥州の土産ばなしに、天狗にお目にかかりてえもんだ——と、こないだうちから念願にかけていたら、ほんとに巡めぐり会あつちまつた。しかも天狗が二人して密々ひそひそばなしだ。やがて、ひとりの天狗が鞍馬へ帰り、ひとりの天狗は今、吉次の眼の前で、しまつたと云わん

ばかりな顔をしていらつしやる。……ね、光厳さん、お前さんも、天狗の仲間の一人でしよ」

指さされた光厳の顔は、青い憤怒ふんぬの仮面めんみたいにさつと変った。——おのれツと、その口が焰を吐いたように叫ぶと、法衣ころもの下から抜いた短い刃が、濡れ縁に腰かけている吉次の胸もとへ、いきなり突いて行つた。

吉次は、地を蹴つて観音堂の縁へとび上がったが、すぐ飛び下りて、光厳のうしろから羽交はがい締めがに抱きすくめ、なお、死力を尽くしてもがき抜く光厳の耳元へ、蚊が啼くような小さい声で云つた。

「同士討は止そうじやありませんか。お味方になりましょう。……てまえも、天狗の仲間へ入れておくんなさい」

六

こうなつては力づくで吉次に敵かなうはずはない。光厳は病身である。吉次は遅たくましい。「刃ものいじりなんざ、およしなさい。それこそ、僧門の人のがらにもない事だ」

光巖の手から刃を挽ぎ取つて、吉次はまた云いかぶせた。

「お心はよく分る。あなたの身一つだけではないからな。ばれたらこいつは一大事だ。六条河原にまたも首塚が出来上がる。——だから貴方としたら死んでもここは口を開けないところに違いない。ましてや何処の馬の骨か知れない奥州者の吉次に、おいそれと打明けられないのはごもつともだが——なぜその前に、常磐様から鞍馬へ文の通う事だの、一条朝成なんてお人好しな者までが謀叛の火だねみたいに物騒がられて、いちいち六波羅へ聞えるのか、それを疑つてみないんですか」

「……………」

「光巖さん。注意ぶかいようだが、お前さんもまだ若いな。法衣ころもにかくれ、法話に行くと呼んで、一条朝成の奥向に出入りしたところは上出来だが、その常磐様には、切つても切れない伏見の鳥羽蔵という伯父がいることをご存じあるまい。自分も一、二度見かけた事があるが、見るからに眼つきのするどい卑しげな男さ。以前、常磐の前を詮議中、伯父のくせに、しかも源家の恩顧を蒙こうむっているくせに、六波羅へ密訴したかどで、その後は取立てられて、四、五十名の侍を飼ひ、肩で風を切つて歩き、いよいよ平家の問罪所へ、忠義立てているという風上にも置けない代物しろものだ。——こいつが肉親の伯父面づらして、今も、一

条朝成の館へ、時折、酒くさい息をして出入りしているだろうが」

「……あ。……ではあれが、常磐様を以前密訴した伯父でしょうか。よく遊びに見えていられる——金田鳥羽藏正武という五十がらみの武者がありますか」

「元は、姓も名乗りもない牛飼うしかいだったが、主君の子と、肉親の姪とを東にして敵へ売りこみ、その功で敵めしげに、そんな名乗りを取っつけている奴なのさ。こいつが臭い。——前からわしはそう見ていたが、ひとつ、天狗の仲間入りする引出物に——また、てまえが二心ない源氏の氏子だという証拠をお見せする為に——その鳥羽藏をかたづけてお見せしましょう」

「かたづけてとは？」

「ま。見ていて下さい。光厳さん、その後でまた、会いましょう。——と云つても、商用の都合でことしはもう来ないかも知れませんがね。……そしたら、来年また」

云うともう吉次の姿は闇の底へ——産寧坂から五条の窪くぼのほうへ風のように立ち去っていった。

それは梅雨つゆをすぎて、急に青葉の濃くなりだした六月初めの蒸暑い晩の出来事だった。佐女牛小路さめうしこうじから火事が出た。

その辺りは、七条坊門やら、塩小路、楊柳小路などの細かい人家が櫛比している所だったが、焼けたのは、六波羅勤めの侍屋敷一軒だった。金田鳥羽蔵正武の屋敷だった。それも不思議だし。

もつと奇怪な事には、鳥羽蔵の一家眷族、みな殺しとなって、すべて灰になっていた事である。——いや、そう思っていたら、六条河原の柳の枝に、焼けていない鳥羽蔵の首だけが、ぶらんと、薬玉みために、葉柳の中から枝垂れていた。

久しぶりの血腥い騒ぎに、閑な公卿の牛車までが見物に来た。そしてその柳のすぐ下に、もう十年の昔となつて、河原蓬につつまれている平治の乱の首塚にも目をとめた。

夜になると、蛍が、塚にも、柳にも、水にも飛んでいた。

奥州商人の大商隊が、例年のように、三条の空地に集合して、蹴上から大津へかかり、遠い故郷へ帰って行ったのも、その騒ぎのあつた頃だった。

山の子

木の芽が紅らみ出した。春は来たのだ。鞍馬をめぐる山々の霞は灰紅い。

ことし承安の二年。

牛若は十四になった。

七ツから山で育った山の子である。血は義朝にうけ、気は山巒にうけた。

しかも。

鞍馬法師も、叡山、南都の荒法師にも劣らない聞えがあつた。山には武器庫さえある。

一山はみな僧兵といつてよい。平常でも薙刀をひっさげて歩いた。その中で、山の子牛

若は、七年間、庇われる者なく存分に虐めつけられて来た。

降り積つても積つても、雪の下から芽を出さずにいない雪割草のように、彼は十四にまでなつた。

体は小粒だつた。しかしいじけた小粒ではない。飽くまでかちつとして肉緊りのいい顔をしている。葡萄みたいな丸こい眼をして、髪の毛など、いくら叱られても叱られても鳥の巣みたいになっている。足は常に裸足だ。袴や小袖はのべつ綻びを切る。まるでむささ

びだと、堂衆たちも持てあましている。

——が、こうなるのは、彼として自然だった。山では誰ひとり、彼の系図に特別な尊敬を払う者もない。生涯、山の飼いごろしとなる宿命の子としか見ていない。ほかにも同じ年頃の稚子ちごはたくさんいるので、その中に交じまっている牛若が、ややほかの童子とくらべてどこか異色が見えたりなどする折に、法師仲間で、

「あれは、義朝の子だそうだ」

などと稀まれに指さす者があつても、

「ふーむ。義朝の胤たねか」

と、頷うなずくだけのものである。

今の平家に対してすら、山の衆徒は、決して腹まで服従はしていないのである。まして亡んだ源氏のごときは、散った桜ほども眺めていない。

また、牛若も、人々から憐れがられるような子でなかった。小つぶのくせに、面つら魂だましを備えているからである。

「あいつ、一度こツぴどく、泣かしてくれねば」

と、憎む法師はあつても、

「あわれなる稚子ちご」

などと可憐いとしがる者はない。

平気なのだ。山には住んでも、僧侶の中には住んでいないと、行動で云っているような牛若の日常であつた。

今日でもある。

朝から遮那王しやなおうのすがたが見えない。遮那王とは、近年、師の東光坊蓮忍が与えた名である。

「よし。こんな時だ」

三、四名の法師が、探しに出て行つた。つかまえて懲こらしてやる気であろう。十王堂の山門で、待つていた。

麓へ下りたものと見てそこにいたが、牛若は、裏山の谷から上つて来た。逸いちはやく一人が見つけて、

「遮那ツ——」

と、呼びとめた。

かぞえ年十四だが、十一、二歳にしかみえない。相変らず裸足はだしで泥まみれだ。鼻を垂たら

さなくなつたのもつい近年である。

「なに……？」

戻つて来る何気ない顔へ、

「何つていう言葉があるかつ。稚子もたくさんいるが、貴さまほど長上に対して、小生意気なやつはないぞ」

ひとりが呶鳴りつけた。

「……………」

牛若は、爪を噛んだ。

鼻の穴まで黒くしているが、その鼻すじは、ちんまりと小隆^{こだか}く、どこか母の常磐を思わせるところもあつた。

二

その牛若を睨みすえて、

「どこへ行つていたか」

法師のひとりが詰問なじると、他の者も寄つて、その小さい体を、頭から覗き下ろして脅おどした。

「こらつ遮那。なぜ黙つておるか。なぜ返事せぬか」

すると牛若は、叱られるかどもないのにと云わぬばかりの不平を、その口に尖らして答えた。

「何処へも行きはしませんよ。ここに居るじゃありませんか」

「嘘をいえ。いなかつた」

「いました」

「こいつ」

右めて手の薙なぎ刀なたを左に持ち代えて、その手を牛若の襟がみへ伸ばそうとすると、牛若は、退がつて、

「ちゃんと、山にいたのに、いないなんて、僧侶が嘘をついてもいいのかい」

あべこべに、喰つてかかつた。

法師たちは憤いきどおつて、

「げんに今、貴さまは裏山の谷から上つて来たじゃないか。朝から中堂にも姿を見せず、

それでもいたと云うか」

「云う……」

「なに」

「山にはいたんだもの」

牛若は肩を昂^あげている。

「……………」

唾然たる法師たちの顔だった。二の句がつけないといったふうな呆^{あき}れ顔だ。

「——この山にさえいれればいいんでしょ。麓から先へ行く事ならんと、常々、お師匠様からも六波羅衆からも固く云われているから出た事はない。こんなにおいしいつけを守っているのに、どこがいけないんですか」

鷹の子は生まれながら鷹の子の叛骨をそなえている。この叛骨は、母胎を出た年に、平治の乱の兵火を見、あらゆる憂^うき目^めと闘った母の強い意志を乳ぶさから吸い、やがて鞍馬の山^{さんらん}巒^{らん}と山法師に揉^もみに揉まれて、いよいよ烈しいものになりかけていた。——そしてまだそれを優雅に被^おい^おかくす社交性もなければ、怖れも知らない年^{とし}齡^{れい}なのである。

知らないといえ、彼はこの山以外の世の中さえよく知らない。世間の人中というもの

は七歳前の淡い記憶しかなかった。だんだんに知って来たのは、

(どうして、わが身は、この山の他へは一足も出て行けないのか)

と、いう疑問だった。

その理由が、うすうす彼自身に解けて来たことは、実は彼自身で自分の生命を、危険な方向へ曝してゆく事だった。きびしい監視はよけい厳しくなつて来た。そして生れながらの不敵なたましいも、その環境に育てられるばかりだった。

「ゆるさんぞッ。今日は」

薙刀の柄をふるつて、法師はいきなり牛若を撲りつけた。

牛若は逃げ損じて、腰のあたりを強かに打たれ、

「痛いっ」

と、さけびながら転んだ。

「ちと、懲りろ」

法師たちの高齒の下駄や木履が彼の背をふんづけた。牛若はくやしがつて、その毛脛へしがみついたが、荒縄で縛りあげられてしまった。

「引っぱつて来い」

一人が一人へ命じて、先へ歩いた。毘沙門堂びしゃもんどうの下まで彼は曳きずられて行つた。泣きもしないので法師たちの気はよけい折檻せつかんに駆られた。

「ここがいい」

鐘しょうろう楼を見上げて一人がいう。担ぎあげて四方柱の一つへ縛りつけた。そして柱の上に板を打って立ち去つた。

彼等が去ると、牛若は、身をねじつて、その板の文字を見上げていた。——いつもの不敵な眼も、すこし悲しげであつた。

許シ無ク繩解クベカラズ。山則ニ依ツテ罰スモノ也

東光坊役僧 了リョウハン 範

と読まれた。

了範たちの法師は、中院へもどると、牛若の師、東光坊へすぐ届け出た。

「六波羅からお預かりの者ですが、遮那王しゃなおうの行跡、目にあまるものがあります。懲らしめのため鐘楼へ縛りつけましたゆえ、おふくみ下さい」

阿闍梨あじやりは聞いて、

「……ふん。そうか」

笑ったきりだった。

この老僧だけは、まだかつて牛若へ叱言こごせとを云ったことがない。

——師の坊が甘やかしておる。

と云う者すらある。

日が暮れてきた。

遮那王が縛られたと聞くと、中院にいるほかの稚子たちは、

「行ってみようか」

と、他人事ひとごとでないように、連れ立って、鐘楼の上を覗きに来た。

牛若は、柱に倚りかかって赤い夕雲をぼんやり見ていた。

「遮那。縛られたの」

「どうしたの」

「今夜もここに居るの」

「なぜ謝らないの」

だんだんに側へ寄つて、彼の友達は、慰め顔に云つたが、牛若は、

「あっちへ行きなよ。——あっちへ行けよ」

自分のすがたを見られるのが嫌らしく、頭を振つて、にわかきつに、強い顔をして見せた。

何処か、遠くで、

「そこへ寄るなッ。遮那へ近寄る者は、共に縛るぞつ。まだ柱が三本空いておるぞ」

法師の呶鳴る声がした。稚子たちは、わらわら逃げ散つた。

彼のまわりにひとけ人氣もなくなると共に陽は落ちて、とつぷり暗くなりだした。

この鞍馬からおよそ三里みやこという京都の灯が、ポチと三つ四つ見えた。

遠く、かすかに、またた瞬いて。

「ああ……。あの灯のついてる所に」

牛若は、ため息をついた。

「会いたい」

と、思い出した。矢も楯もたまらなくなってくる。

母の常磐に——である。

釣鐘つりがねも釣鐘堂も引きずって、そこへと歩いて行きたいように気が逸はやる、体じゅうの血が暴れまわる。

が——会えない宿命にあることを彼はよく知っていた。

ななつ
七歳の時。

それまでも、彼はすでに、鞍馬寺の預け人という表面になっていたが、いよいよ身を鞍馬へ持つて行かれたのは、明けて七歳ななつの春だった。

その時、母から云われた別離のことばは、何分、幼おさなごころ心で、よくも覚えていないが、

悲しさだけは、何となく忘れ得ない。

前の夜から泣きつづけていた母のすがたも、おぼろに記憶している。

迎えに来た鞍馬の役僧と、六波羅の役人の前で、母から、

(これからは、子でないぞ。母でもないぞ)

と云われた言葉一つは、これは生涯たつても忘れ得ないであろう程、深刻に小さい頭脳あたまへ打ちこまれている。——だから母を思うとすぐ、その言葉が、錐きりのように心の下から出

て来るのだった。

(だけど、母上がお悪いのではない。平家が、わしと母上を裂いたのだ)

こう理解されて来た頃から、彼は凡ただの子でなくなつたのだ。同時に、父なる人の死に方をも痛切に知りたがつた。そして遂に知り得た時、彼は、眦まなじりを昂あげて、

「天め！」

と雲に向かつて叫んだ。

その時、彼の幼い胸へ、何かどかんと据すわつたものがあつた。唇くちをかんでぼろぼろ涙をこぼしながら、反対に肚には天をも怖れない心がわいていた。

谷と空

一

枕草子に「近くて遠きもの鞍馬のつづら折——」などと見える。

陽が暮れたら通う者はない。あれば大雑刀おおなぎなたを抱えた山法師か猿ぐらいなもの。

それにまた、麓いちはらのの市原野には、兇猛な野盗が今も出ると信じられている。むかし源頼光が鬼童丸きどうまるを斬ったとか、著聞集ちよもんじゅうに見える追剥おいはぎのはなしなどが、みなこの辺りの事となつて、里の者や旅人の頭に沁みこんでいるからであろう。

表の麓口さえそうである。道とてない裏山裏谷は、ほとんど想像の世界となつている。わけて鞍馬寺から西北へ十町という僧そうじょう正ヶ谷たにには、古くから太郎坊とよぶ天狗が住んでいて、そこから雲間へ光のさしている時は、国々の大天狗小天狗が会合している夜だと、里人は固く怖れ信じている。

近づくな。谷を覗くな。

崇たりをうけるぞ。

そうした里の合言葉さえあるのに、これはまた、どうしたうかつ者だろうか、ただ一人、道もない峰を、闇ならくの奈落へ下りてゆく男がいる。

「叱しつ……。畜生しつ」

男は時々、足もとを探つて、梢へ石を投げた。

猿の群れであろう。梢から梢へ、ぎわぎわと駆け廻る音がひどい。男が、逃げるように

崖を迂り降りると、また追つて来るのである。

「——ちえつ、限りがねえ」

舌打ちして、男は崖の途中で坐つてしまった。被つている黒布を解いて汗をふき、それでまた、面をつつみ直した。

奥州の吉次だった。

草鞋ばきに脛当をしめ、袂もむすび上げている。革柄の野太刀を腰にくくつて、敏活にうごく眼といい四肢といい、まるで夜盗か何ぞのように向う見ずであった。

猿のさけびが掻消えると、ぐわつ——と谷底の鳴るのが逆しまに、顔をふきあげてくる。そそり立っている岩峭に打つかつてくる冷たい風と、溪川のうなりである。

「はてな。宵からお目にかかったのは、まだ猿ばかりだ。やはり光巖が打消したとおり、噂は噂だけのものか」

吉次はつぶやいて星を仰いだ。方角を按じて自分の来た所を確かめているらしい。まぢがいなく、この下は僧正ヶ谷だと考える。

僧正ヶ谷ならもう会いそうなものにまだ会わないのだ。——と云つても、彼の期待して来たのは、天狗ではない。人間である。

もつぱら高い世間の噂と、自分の睨んでいる観察と、どっちが正しいか、それを突きとめる為に、彼はこの春、例年の一行よりも先へ都へ来て、去年もおとしも、
(今年こそは。今年こそは)

と念願しながらつい果さずに過ぎて来た宿題を、解決しようと、勇を鼓こして、ここへやって来たわけだった。

もう三年も前になるが。

知恩院の光厳をつかまえて、すでにある秘密の端たんちよ緒をつかみかけた事もあつたが、その折、光厳が次の夜ここでもう一度落会つた上、一切を打明けるとの事に、うっかり信じて翌晩を待っている、光厳は次の日、知恩院の裏山で、見事に自害していた。

死人に口なしだった。それなり終るしかなかったが、一度抱いた野望と、鞍馬への疑惑とを、光厳の死ぐらいで、思い止まる吉次では元よりなかった。

二

しぶやこんのうまる
渋谷金丸は、鎌田三郎正近とふたりで、巨きな岩に腰をかけていた。

この僧正ヶ谷で、仲間が落会う時は、いつもこの場所は極まっているようだった。四方の峰は太古のままな松杉だった。天狗の祠ほこらという魔王堂はその一峰いっぽうにある。二人の足もとを行く溪流は、奇岩乱石を噛んで、その吠える声でこの谷間は蔽おほわれていた。

「……………」

ふたり共、黙然としていた。金王丸は星を見つめ、三郎は水を見ていた。どっちも多感な境遇にあつた。平治の乱以来、明るい陽の下を大手を振っては歩けない源氏の残党と呼ばるる者だった。

しかし、日陰の蔓つるは、陽なたへ伸びようとする夢に燃えている。悲嘆や慷慨こうがいは、もう遠い過去のことだ。闇の生活も十年の余となれば、自らおのずかそこに生きてゆく道もつき、同じ境遇の人々と連絡もとれ、さらに逆境なればこそ抱き得る、逞たくましい闘志とそして希望があった。

「……………来たらしい」

三郎が囁く。

金王丸も眼を向ける。

向う側の沢の闇から、溪流の星の下へ、猿の群れみたいに連れ立った人影が、岩づたい

に、水を跳んで渡ってくる。

三人——四人——七人と。

多くは土民の姿で、武士も交じっているが、樵夫か獵師かと見えるのが多い。山法師
ていの男もいる。

「遅うなりました」

「根井、荻野など両三名、後より参る由でござります」

先に来てゐる二人を繞つて、大磐石のうゑに車座となり、なおそこの岩へ思い思
いに腰をかけた。

「こよいのお迎えには、誰が参つておりますか」

一人が問うと、三郎正近が、

「自分の参る番であつたが、渋谷殿を誘うて来た道の都合で、箱田の冠者に行つてもろ
うた。もうやがてお連れして見えるだろう」

と云う。

その人を待つもののように、人々は雑談に耽つていた。何を云おうとこの天地では憚
る事はなかつたが、肩をいからして大言壮語する者はない。徒に平家の全盛を誹りちらし

て身をひがむ者もない。至つて気楽な世間ばなしなどである。友だち同士の諧かいぎやく諠けんを云つたり笑い交かわしたりしていた。

ここの谷間の会は、月に何度かこうして集まった。その度たびごとに耳新しい事件だの平家方の情報などがそう頻ひんびん々々とあるわけもない。お互いの無事を見合えばまずよいのだった。それと、鞍馬寺にある亡主義朝の遺わすれ子がたみ牛若を、よそながら護り、よそながら教育し、やがての事は、その牛若の成人の日として待っているのである。

(——この和子様をこそ傳もり育てて)

と、牛若という一粒の胚たね子つちかを培つちかい合あつて、その伸びるのを見ているのが、一同のたのみでもあり、盟約の中心にもなっていた。

月に幾度か、ここに幼い君を迎えて、義朝の旧臣たちは、各々、その長ずる所をもつて牛若へ教導の任にあたった。

古来からの史を講じて、牛若に、武将としての英邁えいまいを養おうとするもあり、軍学を講義したりまた、源家の起りから義朝の代に至るまでを語つて、牛若に、早くから「自分というものは何か」を教え込もうとした。時にはまた、面々木太刀をおつ取つて、わざと幼い君一人をつつみ、それに負けじ魂と肉体的鍛鍊たんれんをも、無理なほど打込んだ。

一同の期待は裏切られなかった。牛若は、厳格な鞍馬の僧院から、人々の寝しずまるのを窺^{うかが}つてここへ来る夜を、楽しみにしているふうであった。

三

「遅いのう」

「何日^{いっ}になく」

ようやく、人々がつぶやき出す程、この溪谷に話も尽きて、時^た経つのを覚えた頃、

「見えた、おいで遊ばした」

と巖^{いわ}に立つて見張^いつていた一人が云った。

牛若を迎えに行つたという箱田の冠者は、やがて此処へ駈けて来た。しかし、人々の待ちぬいていた牛若は伴^つれていなかった。

怪訝^{いぶか}つて三郎正近や金丸丸をはじめ、人々が声をそろえて、

「や。若君は」

と、訊くと、箱田の冠者は、

「さればじや。若君には、日頃から憎まれてゐる法師等のため折檻せつかんをうけられて、今日は懲らしめの為とか申し、鐘樓の柱に縛りつけられておいでになつた。——それ故に、遅くなりました」

「なに、鐘樓に縛られて」

人々は、色を作して、掌しょうちゆう中の珠でも傷つけられたかのような不安を漲みなぎらした。

「もつと、詳しく話せ。それだけではよく分らぬ。落着いて語れ」

金丸はたしなめた。一同のうけた衝撃が大きいので、徒いたずらに騒ぎ立ちそんな空気が見えただからである。

「はい、仔細はこうです」

箱田の冠者は、その鐘樓で牛若自身から聞いて来たという、ありのままなはなしを伝えて、

「それがしがお繩を解いて、ともかくこれへお供いたそうとすると、若君の仰せには、こよいは谷へ行かぬがよい。なぜならば、夜半よなかにも刻ときを計つて、自らを縛いましめた法師どもが、鐘樓を見まわりに来るにちがいない。その時、自分の姿が見えねば、六波羅の預かり人が、山落ちして行方を晦くらましたるぞとばかり、一山の騒ぎとなり、ひいては谷間に集まる日頃

の味方にまで、詮議が及ぼうも計りしれぬ。……わが身だに、一夜の辛抱をしていれば、明日は縄目も解かれよう、生命にかかわるほどの事はない。案じぬように、一同へそう申し伝えてよ。……とのお言葉なのでございます」

「おお、ではご一身の苦痛よりも、一党の発覚こそ、大事なるぞと、仰つしやつてか」

三郎正近も、金王も、感銘に打たれて、一瞬、眸をそこから鞍馬の峰の黒い影へ向けたまま凝然としていた。

大勢の中で、すすり泣く声があった。天与の試煉に会った牛若の偶然に発した言葉が、欣しくもあり、傷ましくもあつた。同時に自分等の丹精にも、ようやく苗から一本立ちにまで育てて来た効を見て、急に、胸迫つて来たのだった。

「ぜひもない儀。では、またの機を待つとして、若君のお身に、万一のないように、誰ぞ二、三」

「お氣づかいに及びませぬ。われわれが、夜もすがらでも、陰身に添うて、お守りしておりますれば」

声を揃えて四、五名がいう。

渋谷、長田などを先に各 《めいめい》は会を解いて別れかけた。すると、唐突に、一

人が嘯鳴った。

「やっ。誰だッ。——誰かいたッ」

「何ッ」

声の起つた所へ、戻りかけた面々も足を回して、真つ黒に寄りたかつた。その岩陰へ、見つけた者が先へ躍つて、猪でも手捕りにするように、一人の男を捉まえて組伏せていた。「引出せ、引出せ」

辺りが狭いので、近寄れない者たちが云う。心得たと、襟がみを掴んだり、手頸を取つて、ずるずると溪流の水明りに近い辺まで、引き摺つて出た。

「六波羅の 諜 者 だな」

一同は取り囲んで、そこにへた這ッている一個の男を、天狗のような眼を揃えて睨めつけた。

四

不覚。逃げ損じた。

吉次は心の奥で、しまったと思ひながら、大地へ顔をすりつけ、出来るだけ身を縮めて、小身を装っていた。

そして飽くまで、

(自分の周りにいる者は、人間でなく、真実の天狗である)

と思おうと努めていた。

人間と思うと、持前の恐いもの知らずな性分が出ないとも限らないからである。奥州から京都を股にかけてみて、吉次は世の中で怖いという人間に出会ったことがないと人にも常に語っている。——けれど今、その面魂を見せたら即座に殺されることは分っていたから、

「わ、わたくしは……た、旅の者で……旅、旅馴れない山を過ぎ……道に、道に……ま、まよいましてございます。……はい、平常は正直にやっている人間でございします」
掌を合せて、拝むまねをした。天狗さま天狗さまを、呪文のように繰返して唱えながら、一人一人の影を拜んで、恐れ顫く振りをした。

金丸や三郎正近の仲間がクスクス笑った。里のうわさが拡まって、旅人までが、自分たちを天狗と信じている容子が可笑しくもありまた、自分等の思うつぼでもあったからで

ある。

「しっ……」

と、笑う者の袖をそつと引いて、人々はすぐ天狗になった。

「六波羅者ではないとな。然らば汝は、どこより来た」

「奥州の……奥州の商人衆に抱えられて来た、荷駄の男でございます」

「それが何としてかかる御山へは」

「貴船神社へ、ご寄進の事がござりまして、主人の供をして参りましたが、その主人に逸れまして」

「主人をさがし求めるとて、方角ちがいへ迷うたのか」

「はい……。へい」

吉次の誇張がいかに滑稽に見えたので、もう恠えきれない天狗が吹き出してしまった。それをまた、繕う為に、ほかの天狗は、

「何と、虫のような、心細げな声を出す人間ではある」

と云って、いちどに声をそろえ、訝するばかりどつと笑った。

「太郎坊、太郎坊。この人間、どうしてくれましょう」

ひとりの天狗が、体の大きな天狗にいう。

大天狗は厳かに、

「取るに足らぬ男とは見えたり。この谷間を犯した罪はゆるし難いが、生命だけは助けて、世間へ抛り返してやれ」

「どう抛り返しますか」

「よいように」

「心得申した」

「いや待った。その前に、裸にして、持物などもよう検めた上で」

「そうだ！」

吉次はたちまち裸にされた。

運よく、怪しまれるような物は、何も持合せていなかった。しかし、誰の携えていた物か、真っ赤な古法衣ふるころもを頭から被せられて、その上からぐるぐる荒縄で縛られたのには、さすがの吉次もどうなる事かと胆を冷やした。

いよいよ生命いのちに関わりそうになった時は、素姓すじょうを打明け、知恩院の光厳とは知っていた間であることを訴えてみる氣でいた。けれどその光厳は、世間に原因の知れない自殺を

しているの、下手に云い出せば、云わないより悪い結果になるかも知れない。

——世間へ抛り返してやれ。

と、ご託宣たくせんの出たからには、痛い思いぐらいはあつても、生命いのちにはかかわるまい。——そう考えて吉次は眼を閉じていた。やがて自分の身は誰かに担たがれ、疾風のごとく、谷川をとび沢を駈け、断崖をのぼり、雲間に漂わされているような心地だった。

翌る朝。——貴船神社の宮守みやもりや里の者は驚いた。鳥居とりいわきの喬木の梢に、緋ひの古法衣につつまれた人間が荒縄で吊り下げられていたのを仰いだのだ。勿論、天狗の怒りにふれた人間として、禰宜ねぎは神殿に駈けこんで御灯みあかしを捧げ、半刻のまつりをしてから大勢して樹からそれを下ろした。

山まつり

その年の秋。——奥州の吉次はもう国元へ帰っていた頃である。

鞍馬谷に異変が起つた。近郷きんごうの者すら何もしらないまに、六波羅の兵が三、四百人も
棧敷さじきヶ岳たけや雲ヶ畑から入りこんで、僧正ヶ谷をつつんだのである。

天狗の鬨ときの声と、人間の鬨ときの声とが、駭こだまして戦い合った。

その後、里の人々は、

（天狗の首がたくさん曝さらされた——）

と、わざわざ遠い加茂の上流まで見に行つた。そして帰って来ての話には、

（人間と似ている）

と、いうことだつた。

この起因おこりは何者かが六波羅へ投文なげぶみで密告したに依るとかで、鞍馬の僧院では、一時い
ろいろ物議ともなり、別当べっとう蓮忍れんにんの引責いんせきまで口にのぼつたが、要は、

（牛若を早く出家させないからいけないのだ）

という所に帰着した。将来、彼の行状を一層きびしく監視して、外部との連絡を絶対に
遮断するかたわら、折を見て、一日も早く牛若を剃髪ていはつさせてしまふに如しくはない。——

そういうことに落着いて、深く六波羅へ謝意と謹慎の意を示し、どうやらそれは不問にすんだのであった。

すまないのは、牛若の得度剃髪とくどていはつの挙式である。本人が熱望してさえ、得度授戒じゅかいには、年齢や修行の資格や、法門の厳則がある。時の政令よりも法門の規律のほうがむしろ重視されがちに自負をもっている僧徒たちの頭では、

(一日でも早いがいい)

とは思つても、実行にはいろいろな困難が伴つた。

そこへもつて来て、当の牛若に出家の心はなく、不勉強極まる行状だし、師の蓮忍は、(まあええ。まあええわ)

という風に相かわらず寛大であるし、外部との交渉こそ、まったく断つて、別当の中院から一步もひとりでは出さない事に以来やかましくはなつていたが、髪を剃おろす問題は、のびのび延々になつていた。

が——それも長い事ではない。二年目の春であつた。別当蓮忍は、彼をよんで告げた。「遮那しゃなよ、お許ことも、はや十六とはなつたぞよ。ことしは髪を剃おろさねばなるまい。出家は嫌いと云いおるそうじやが、生れてより持つて出た宿命、生い立ち、今の時勢など、もう弁わきま

えがついたであろう。観念して仏門に入り、弥陀のお弟子となつて、荒びた心を捨ていよいよか」

「はい……」

「何を泣くか。十六ともなりながら」

「お……お師匠さま」

「どうした」

「わかりました。けれど、悲しゆうございます」

牛若は左の脇を曲げて、顔へ当てがいながら、泣きじやくつた。

「——出家すると、この黒髪にも、こんな美しい袂の着物とも、別れなければなりませんか」

「分りきつたことを。いつまでお許は稚子でいる気か」

「おねがいです。鞍馬の山祭りまで待つてください。五月が過ぎたら出家いたします」

「なぜ、その前は、嫌というか」

「祭りの日には、たくさん参詣人が、お山へ登つて参ります。その時、人に見られるのが辛くてなりません。毎年のように、稚子輪鬘に結うて、もう一度、綺麗な着物を着て

見とうございます。……今年つ限りでかまいません。お名残りにです……お師匠さま。その日の過ぎるまでお待ちくださいませ」

果ては、よよと嗚咽おえつしていた。蓮忍はその体ていをふしぎそうに見ていたが——自分にもあった少年の日の感傷かえりを顧みて、

「では、屹度きつとだぞよ。五月を過ぎたら、否やは云わせぬぞよ」と、念を押した。

二

梅雨つゆがあがって、山には病葉わくらばがしとどに落ちていた。

はつぜみ 初蟬はつせみの声こゑが静かだった。ふだんは詣もつでる人も極めて稀きな貴船山きぶねやまの奥之社おくのやしろに、今し方、誰か柏手かしわでを打って拝殿かみだまのあたりから去って行く気配きはいと思うと、

「神主かみぬしさん」

ひとりの旅人が、社家の入口を覗いて、訪れていた。

「……お留守ですか。誰もいないんですか」

しばらくして、

「どなたかの」

昼寝でもしていたらしい老禰宜ろうねぎが、ゆつたりと出て来て、

「おう、奥州のお商人あきゆうどか」

「ごぶさたいたしました。今年もまた、上洛のぼつて参りましたので」

「ようお越こされた。さあ、おあがり」

「ごめんなさいまし」

足を洗つて、吉次は、一間ひとまに通されてくつろぐと、

「早速でございしますが、荷になる手土産は、お山の事とて、持っても伺えませんで、ぶしつけながら、社殿のご修繕ついでの費つひえの端にでも」

と、一封の金を、寄進にとさし出した。

禰宜は眼を細めて、

「これはどうも。昨年もおとしも、莫大なご寄進をいただいておりますに」

「どういたしまして、自分に取つて、このお社やしろは、生命いのちの守りの神。——思い出してもぞつとしますが、おとし天狗に会いました時は、すんでに一命もなかったところを、お助

けにあずかりましたので、こんな寄進ぐらいは、ご恩の万分の一にも足りはいたしません」

「まったく、あの時は、えらい目にお遭いじやったな」

「半夜ぢかくも、二丈もある樹の空に吊るされていたなんて、まったく生れて初めてでございましたよ」

「誰だつて、あのような覚えはあるものじゃない。……だかの、あの後ですぐ、六波羅衆が天狗狩をやつて、麓の河原に、たくさん打首を梟けて、幾日も曝してあつたが、その中には相貌も變つて、慥とも知れぬほどにはなつていたが、この辺の山に住む炭焼の男や、猟師などの、見たような顔もあつた。誰ともなく、あれは天狗ではない、源家の義朝様の旧臣どもじやなどと沙汰する者もあつたがの……。某許が僧正ヶ谷で出会つたというのは、いったい天狗か、残党か、何であつたのじやろな」

「どうしてどうして、人間ではございせんよ」

吉次は、大げさに打消して、

「第一、思うてもご覧じませ、源家の残党なら、何でてまえ如き取るにも足らぬ人間をつかまえて、こちらの鳥居わきの大木へなど引つ吊るしましょう。……ああいう魔性な事をして欣ぶのは、天狗たちのよくやる事でございますよ」

「わしも、里の人々も、天狗の業と、信じてはいるが」

「六波羅衆としますれば、真まことの天狗は打ち取れなかつたとありましては、時めく太政入たじよう道殿のご威勢にかかわりますから、山樵やまがっや獵師などの、山男にひとしい土民の首を梟かけて天狗じやと触れたものでございましょう」

「なるほどな。お許もとは、奥州人みちのくびとというが、案外な智者ではある。そのとおりにちがいあるまいて」

「時に……神主さま」

「なんじやな」

「このたびは少々、お願いの儀がござりますが、おきき下さいますようか」

「ほ。……わしへ頼みとは」

「京へ参る道中で大勢の仲間の者が、ちと面倒いさかな争いさかい事を起しましてな、うるさくてかないません。半月ほど、ここに避けて、旁 《かたがた》、ちと養ようじよう生しょうしていたいと存じますが、どこか空いている一間をお貸しくださいますか」

三年ごしの計画だった。いつも難しい大きな商法に運を賭けて、それに打克^{うちか}つて来た自分の商才を以てすれば、こんどの計画も、気は長いようだが、そう困難ではないと、彼は信じていた。

それも、念には念を入れてと、十分、後々の問題まで考慮して、おととし奥州平泉へ帰国した後、何かと商法上の用命をうけて、扶持人^{ふちじん}同様に出入りしている藤原秀衡^{ひでひら}の側臣を通じ、ひそかに、自分の計画をはなしてみたところ、

（至極、おもしろかろうとの御意じゃ。しかし、ご当家のさしがねと世上へ聞えてはよくない。——飽くまでそち一名の思い寄りとか、牛若自身が平家の手より遁^{のが}れて、寄るべもなきまま、ご当家を力に頼つて来たという体^{てい}なれば——お館^{やかた}におかれても、ずいぶん庇^{かば}うて遣^{つか}わそうとのお言葉である）

そういう藤原家としての意向であつた。そこまでを、慥^{たし}かめた上の仕事なのだ。

また、そこまで突つこんだ言質^{げんち}を取るには、彼には彼の観^みとおしがあつたからでもある。（——奥州藤原は、表面、自己の勢力範囲のうちで、平静を装っているが、決して、平氏一門の隆昌や、太政入道の独裁ぶりを、欣んではいない。むしろその拡大を惧^{おそ}れている。

と云つて正面衝突も極力避けたい。ひそかに希^{ねが}うところは、源家と平家の勢力が平衡^{へいこう}してくる事にある。中央で両者が相争つていてくれれば、奥州は内容を蓄^{たくわ}え、平和を保ち、なお現状より西へのびてゆくことができる)

これは、藤原一門のみでなく、奥州の天地では、すこし物を考える階級ならば、常識にあることだった。で、吉次の計画は、極めて簡単な一投石で、その目的の波瀾^{はらん}を、中央に捲^{まきおこ}起すことができるものとして——平泉の館^{やかた}から黙約を得ていたのだった。

「吉次どの。毎日、よう退屈なさらぬのう」

彼に、社家の一間を貸し与えてから、もう半月の余は経っていた。

蝉^{せみ}の声を手枕に、吉次は一人ぼっち、横になっていたが、

「ああ、うたた寝をした」

と、伸びをして起き上がり、

「お察しの通り、そろそろ退屈いたしました。けれど、人間稀^{たま}には、退屈という事をしてみるのも、悪くありません。お山へ泊つていて、考えてみますと、常日頃、てまえどものような商人^{あきんど}は、余りに退屈を忘れすぎておりましたよ。寝ても醒めても、賭け事ばかり考えましてな」

「はははは。ここへ来ては、金があつても仕方がありませんからな」

「怖くなりました。ぼつぼつ山からお暇を申さなければ」

「怖いとは、何を思い出されたか」

「今仰つしやつたように、余りに金の事や、俗気ぞくけから離れますと、菩提心ぼだいしんとやらに襲わ

れまして、せつかく持前のあく気が、なくなり過ぎますんで。——それがなくなると、商あ人きんどだまし魂いが弱まりますよ」

「まあ、ごゆるりなさい。そのうちに、鞍馬の祭りもありますから」

「そうそう、あれは幾日でしたっけな」

「この月の二十日ですが」

「ではもう明後日あさつてで」

「一年に一度の人出で、近郷の衆はおろか、都からも、参詣人おびただが夥しゆう見える」

「では、それを見物して、お暇するといたしましょう」

その前にも、彼は時折、ひとり出かけてはいた。先頃も龍りようおう王の滝を見て来ましたと

か、螢石まで行つて参りましたとか、話していたが、禰宜ねぎは、彼の言葉どおりに信じて、

その行先を疑うたがつてみた事もなかつた。

二十日となった。——その日は終日、一間にいたが、祭の中日という朝のこと、「ことに依ると、鞍馬のまつりを見て、そのままお暇申すかも知れませんが」と、挨拶して出て行つた。

四

山の祭りで、無性にはしやいでいるのは、鞍馬の稚子たちであつた。

天上の山が、下界同様、人出に埋まつて、ここの深山も、世間と変わらない色に塗られたからである。牛若も、その中の一人だつた。

「遮那あつ、遮那つ」

大廊下を駈けるひどい足音に、法師のひとりが役僧の部屋から出て来て呶鳴りつけた。「はいっ。何ですか」

暴れ廻つていた稚子は七、八人も一つ所にかたまつて振向いた。稚子輪に結つた髪も、曙染の袂も、金糸の繡も、紫濃の袴も、みんなお揃いであつたが、元より山家の生ればかりなので、その袂で汗は拭く鼻くそはこする、せつかく化粧して貰つた白粉も、黛も、

かえつてお道化どけたものになっていた。

「何ですかじやあないつ。おまえ達は、阿闍梨あじやりさまのお次に大人しく控えていて、ご用を承らなければいけないじやないか」

「阿闍梨さまのお部屋へ今、都のお客さまがお見えになって、わたし達がお次にいたら、うるさいからしばらく遠くへ行つておれと仰つしやいました。それで、みんなして遊んでたんです」

「遮那。貴さまはもう十六ではないか、稚子の中の年がしらなのに、何だそのだらしい恰好は。襟元を直さんか」

「はい」

「阿闍梨さまに、ご内談があつて退つておれと云われたら、お次から遠く隔てた廊へでも出て、控えておればよいのだ。遮那など年上のくせに、心得ぬはずはない。——お山の祭りはおまえ達のためにあるのではないぞ」

「わかりました」

叱言こごとは、云う方も、云われるほうも、馴れ過ぎている。牛若は、稚子の仲間をふり向いて、

「あつちへ行こう」

指さして、どかどかと駈け去ろうとするとまた法師が後ろで、
「駈けたらいかんと云うのに分らんかつ。静かに歩け」

と怒った。

首をちぢめて、稚子達は、そろそろと廻廊を曲がって行った。

そこを曲がると、観音院と僧正坊の伽藍が広庭を抱いていた。

観音院の縁さきには、太い青竹が幾束も積んである。やがてここで、一山の僧衆が法
筵もんを催し、その後で、竹伐たけぎりという行事をするその備えであった。

また、夕方からは、僧正坊の本堂に、里の俗をただ一人坐らせておいて、その人間を呪
り殺し、また、呪り生かすという法力を公開して見せる。——それやこれやの時刻を待つ
群衆と、後から後から登って来る参詣人とで、山はめずらしく人間のにおいに蒸れ返つて
いた。

すると。

その人渦の中で、鳥の啼き真似をしたひょうきんな男があった。牛若はふと、廻廊の角
に立ちどまって、その声をさがすような眼をしていた。

「……?」

鳥の啼き真似をした男は、いちど首をすくめたが、牛若の姿を遠く見ながら、こんどは人浪の上に片手を出した。

吉次の顔がそこに見えた。

牛若は、彼の顔を見つけると、

「——うん。後で」

と、いうふうの一つ頷いて見せた後、他の稚子たちを追って、さっと、おそろしい素迅すばやさで、駈け去ってしまった。

やがて、竹伐たけきりの行事も終り、白い夕星ゆうずつに、昼間の熱ねつ鬧なうもやや冷えてくると、山は無遍の闇の中に、真つ赤な大おお篝かがりの焰をたくさんに揚げはじめた。

五

毘沙門堂びしゃもんどうの本堂に、俗の男がぼつねんと坐らせられていた。その男を、法力で生殺自在じゆうざいにしてみせるという荒法師が、念珠ねんずを揉んで、一心不乱に何やら呪じゆを唱えているほか、

その広い床はがらんとして、微かに燈明のまたたきが、臙に二つの影にゆらいでいるだけだった。

けれど。

一步外の廻廊から広庭にかけては、夜も蒸れるばかり無数の人影が真つ黒につめ合っていた。しかも、ひっそりと、堂内の法力の試しを見物していた。一山の僧も稚子までも、固唾をのんで、この宵は、すべてそこに集まりきっていた。

呪り殺し、呪り生かし——のこの行事、毎年やる事ではあったが、それでも毎年、法力の摩訶不思議に、群集は酔ったように眼をすえていた。

呪りにかかっている荒法師は、法衣のたもとを背に結びあげ、念珠を押しもんで、今や天狗がのりうつつたように、読経の喉を嚔らし、印を切って、何やら声荒らかに、呪り殺しをうける俗の男を叱咤していた。

すると。

——ぎやツツ

生きた鷲の股でも裂いたような叫びがした。

その男ではない。

印を切つた法師でもない。

異様な声のした方角は、正まぎにこの毘沙門堂の屋根か——いや、もっと離れた裏山の峰道かと思われる遠くであつた。

「ア……?」

「……おや?」

せつかく、天狗がのりうつつて来かけた法師も、法力に酔わされていた男も、眼が醒めたように、きよとんと、眸ひとみをうごかした。

——と思うと、

だだだだツと、堂のすぐうしろ辺りで、峰道から人の足音が雪崩なだれて来た。

何とは知らず、ただ、

「やつ?」

「なんだつ」

廻廊の僧衆が、総立ちとなると同時に、広庭いっぱいの群衆が、わつと揺れ返つて躁さわぎ出した。

人間が最も敏に知る血臭ちくさいものが、墨のように、何処とはなくサツと流れた。毘沙門びしゃもん

堂からすぐ上の峰道には、一つの柵がある。麓の沙汰人が、交代で山番に来ていた。祭中はわけても厳しくというので、六波羅の侍が幾十人か山へ来て、各所の柵で目を光らせていたはずだった。

その番人たちが、血まみれになつて、逃げて来たのである。

そして、大声でこう喚わめいた。

「稚子がひとり逃げたぞつ。——水干すいかんを被かぶつた稚子がつ」

稚子と聞くと、

「遮那しやなだ！」

一山の法師は、口をそろえて云つた。常々考えていたところは誰も同じだったのである。けれど、十六にもなつて、まだ駄々つ子そのままな、何の大人げもついで来ない牛若を眼に見ているので、

(いつかはこんな事が)

と予感しながらも、つい彼の腕白ぶりに、余り子供に見過ぎていた。

「それつ、捕まえろ」

騒ぎ立つと傷負ておいの番人たちはまた、

「ひとりではないぞ。腕ぶしの強い男がついている。油断召さるな」と、駈けゆく法師たちの後ろから注意を送った。

もう、法力試しどころではなかった。

山は吠え、谷は呼ぶ。

松明^{たいまつ}の火が、ここかしこの闇を走った。

「……とうとう去ったか」

ひとり。

牛若の師、阿闍梨^{あじやりれんにん}蓮忍^{れんにん}だけは、もう誰もいない堂の中に坐って、そう呟いていた。

去った者の未来を幸^{さち}あれと祈っているのか、また、捕ま^{とら}って帰って来ることを禱^{いの}っているのか、白い眉は、ただ重げに垂れているだけだった。

神隠し

歩くという常識では、歩かれた所ではない。ただ遮しや二無二であった。

断崖、溪流、闇黒と叢そうりん林の天地を峰づたいに、生命いのちがけで逃げて来た。

「牛若さま。ここで一息つきましよう。貴船山きぶねやまです。あれに見えるのが貴船の奥之院おくのやしう。

……ははあ、奴らは麓を走ってゆく」

吉次は、うす笑いをもらした。

松明たいまつの焰が幾つも尾を曳いて、そこから見える闇の底を馳はせて行つた。

「……………」

牛若は、われに返ると、その辺りを見廻してばかりいた。恐怖している眼ではない。檻おりを出た歓びのうろたえであった。

「小父さん」

「おうい。——こつちへおいでなさい。この拝殿きぎはしの階で、一休みしましょう」

「吉次……。はやくお目にかかりたい。ほんとに、お母様に会わせてくれるだろうね」

「きつと、吉次が、お会わせいたします」

「それから奥州へ行こう。——おまえのいう通り、藤原秀衡ひでひらとやらを頼って」

「都を脱^ぬけて、武蔵国あたりまで行けば、もう安心ですが、そこまでがひと骨です。慌^{あわ}てちやいけません。吉次は大人ですからね、任してお置きなさい」

「……うん」

「あ。素足でしたっけね。血が……。牛若さま、お痛くはありませんか」

「痛くなどない。はやく行こう都まで」

「お待ちなさいよ」

吉次は、そこらに落ちている竹竿を取って、堂の床下から何か掻き出した。

苞^{つと}にくるんだ土民の衣裳やら草鞋^{わらじ}などであった。牛若の衣裳はすべて脱がせ、代りにそれを着せて、汚^{むさ}いぼろ布^{きれ}で顔をつつんだ。背には背荷^{せお}い梯子^{ぼしご}とよぶ物^{しよ}を負わせて、短い山刀を腰にさして与えた。

「これでいい」

彼は堂の棟木^{むなぎ}に掲^あげてある古弓^{はず}を外して、小脇^{こわき}に持った。すべてが前から手順がついてるように運ばれてゆく。

もつとも彼とすれば、ここまで来るには二年越しの仕事だというだろう。牛若へ近づくにも、去年今年と何度、鞍馬^{くらま}詣^{まい}りを繰返したかわからない。

また、その牛若を、得心させるまでも、何度、説いた事かも知れないのだ。

いくら牛若が、人を疑わない性質でも、見ず知らずの吉次のいう事を、そう易々^{やすやす}と信じるわけもないが、おとし鞍馬谷へ六波羅の兵が入って、附近に住む怪しげな者を一掃し尽してから、牛若はまったく孤独になっていた。

誰に語るよしもない——その孤独感と絶望の底に沈んでいたところへ、吉次が人目を忍んでは、囁^{ささや}きに來たのである。——少年の気もちは当然、夢に富む方向へうごかされた。

それに、「東国」ということは、幼少から心に刻みこまれている。そこにはまだ源氏の輩^{ともがら}が多くいるという。また、富士山があつて、駿馬^{しゅんめ}が多く産まれて、野は際^{さい}涯^{がい}もなく広いという。

(——今に東国へお迎え申しあげますぞ)

とは、鞍馬谷の人々からも、明け暮れ聞いていた声である。

ひいず
日出る東国!

牛若は日の出るたびに、あこがれていた。——月の落ちる頃には都の母のことを、きつと思ひ出すように。

わぎと遠くを廻つて、西加茂の大悲山^{だいひざん}、満樹峠^{まんじゅとうげ}をこえ、応ヶ峰へ出て、やがて夜

も白みかける頃、吉次と牛若は、京都の北から町へまぎれ入った。

「おい、起きろ、起きないか」

まだ朝霧も暗い六条坊門の白拍子しらびょうしの翠蛾すいがの家の前に立って、吉次は、門をたたいてい
た。

二

この家には、吉次の部屋といつてもよい程、彼が見える時だけ使われる一棟があった。中庭の渡り縁から通うのである。母屋に面したほうは壁囲いになっているので、寝ころんでいようと、飲んでいようと、誰にも顔を見られるおそ惧れもない。

「ここは、てまえの親類の家ですから、安心なもんです」と、吉次は云った。

牛若を連れて、きのうの朝、そこへ隠れ込んだきり、吉次は母屋おもやへも行かなかつた。牛若は、ぼつねんと、坐ったきりであつた。

山は涼しかった。京の町中の暑さはひどい。しかし彼は膝もくずさなかつた。

「お暑いでしょう。楽にしておいでなさいまし。寝ころんだり、脚を投げ出したり、ご自由に遊ばして――」

そう傍らからすすめても、

「うん。……うん」

頷うなずくだけで、牛若は口数さえ余りきかないのである。

大人しい。行儀がよい。山にいた牛若とは人間が変わったようにさえ思われた。

けれど、牛若の身になって考えてみると、また無理もない。――こういう世間の音の中に身を置くのは、生れて初めてであろうし、吉次という人間にもまだまだ多分に警戒を抱いているであろう。それに、母屋のほうではのべつ華はなやかな女たちの笑い声や返辞が聞えたりする。

今いる場所も、これからの行末も、不安と考えたら堪たまらない不安に襲われるに違いなかった。

「吉次」

「はい」

「いつ母上と会うのだい」

「お待ちください。今その工夫をしているところですから」

「はやくお目にかかりたい」

「お察ししております」

「それから、一日も早く、奥州へ下って行こう。こんな所にいても、むだな日を過すようなものだろ」

「いえ」

吉次は強く否定した。

「決してむだな日は費つやしておりません。まだまだ数日は、六波羅の詮せん索さくが厳しいことでしょう。躍起となつて、あなた様を探している最中と思われます」

「そうかい」

「そうかいって——他人事ひとごとみたいに仰つしやつて、吉次の耳や眼は、この壁の中にいても、ちゃんと、それが聞えます。眼に見える程、分つています。……ですから、もう少しご辛抱なすつて下さい。ご窮屈きうくつでしょうが」

「うん」

聞き分けはいい。

生はそう吉次は感心したが、十日も経つと、山の子はまた、山の子に返つて、そろそろ爪をやして来た。

ふと、昼寝から醒めて、

「牛若さま。何をしておいでになりますか」

隣の間をのぞくと、姿が見えないので、驚いて、翠蛾すいがと潮音の姉きょうだい妹いをよんで訊くと、
「いませんか？」

と、これも知らない顔つきである。

「さア事だ」

物に動じない吉次も胆きもを冷やしたらしい。血眼ちまなこで探しに出て行った。——すると灯ともし頃、牛若は、何処からか一人帰つて来て、

「小父さんは？」

と、吉次がいらないのを、かえつて不審顔して、翠蛾と潮音に訊ねた。

姉きょうだい妹いはあきれて、

「まあ、何ていう子だろう。——吉次さんも物好きな子を買つてゆくと、眩くらいた。

姉妹はまだ吉次からほんとの話しは打明けられていなかった。その頃は盛んに都の女や童が、奥州へ買われていったので、吉次がどこからか買って来た奴僕ぬぼくと知っているふうだった。

三

吉次も程なく帰って来たが、先に戻ってけろりとしている牛若のすがたを見て、「なんの事だ」

と、探し疲れた呻うめきの中から、ほっとした顔色やら腹立たしさを一緒に洩らした。

「あれほど、固くお断りしておいたのに、黙って何処へ一体おいでになったんですか」
なかば、咎とがめるように訊くと、

「だって吉次、そんなにいつまで坐っていたら、脚も心も腐ってしまう。町を見物に行つて来ただけだよ」

と、平気で云う。

「いや、それだけじゃないでしょう、何か、お望みがあつて出かけたのでしょうか」

吉次が、かまをかけると、そこはまだ少年らしかった。

「ほんとはね吉次、母上のおいでになるお館は、堀川のあたりと聞いていたから、そつと行つてみた」

「えつ……一条様のお館をさがして」

「人に訊いたらすぐ知れた。——けれど訪ねて行きはしない。遠くから……堀川の柳の木越しに、築土ついでだの、屋根だのを見て帰つただけだよ」

「……ふうむ」

「この牛若が、お訪ねして行つたら、母上のお身がお困りになることは、わしだってよく知っているから」

「……そうですか。……いや、それならまあよかつたけれど」

それさえいけないとは、吉次にも云いきれなかった。しかし、話を聞いているだけでも、吉次は胆が縮まった。

「牛若さま。ではもうそれで、母御様とお会いなされたような気がしたでしょう。もうお気持はすんだでしょ」

「なぜ」

「でもお住居すまいを見れば」

「すむものか!」

唇くちをかんで、きつと、吉次を睨うつむんだのである。——吉次はびくとした。

少年の眼とも思われない。燃える火の如きものがあつた。しかも、そのひとみの炎は、いっばいな涙にうるんでいたのだつた。

「……だがね、吉次」

牛若は、ほろほろと、次には俯うつむ向いて、膝へ涙をこぼしていた。

「わしはあきらめて来たよ。おまえを苦しませても悪い。おまえはわしを山から誘い出すために、つい嘘を云つてしまったのだらう——どう考えても、今の場合は、わしと母上とはお目にかかれるわけもない。……また、それが母上のご不幸になることは知れきつて
いる」

「そ、それまで、牛若さまには、お考えになつておられましたか」

「あたりまえだ」

涙を拭いて、

「自分の事より、この先の事より、いちばん考えるのは母上が、どうしたらお倅せになつ

て行かれるかという事じゃないか。子として当りまえな考えじゃないか。……お会いしたい事も無性むしようにお会いしたいけれど」

「恐れ入りました」

吉次は、思わず両手をついて、額をむしろ庭へすりつけた。心からこんな頭づのひくい辞儀をしたのは、今が初めてだった。

彼は何か自分の荷物ものぶが、急に重たくなり出した心地だった。——折もわるくその時、部屋の戸口へ、妹の潮音が来ていた。佇たたずんでその態ていを見ていたらしいので、彼女へも事情を告げなければ、怪訝いぶかしがられる惧おそれがあった。

「潮音、ちよつと坐つてくれ」

吉次はそこで、あらましの事情を彼女へ打明けた。

四

潮音はそう驚いたふうもなかった。打明けられない前に、牛若とは察していたというのでもない。要するに、男の考えているほど、問題を重大とは思わないのであるらしい。世

情に至つて無関心なのだ。彼女も、上流人の宴樂に侍る白拍子という妓のひとりでしかなかつたのである。

「分つたか、潮音」

「ええ」

「他言するなよ」

「はい」

「もし牛若さまを此家へお匿いしたと知れたら、おまえたち姉妹も同罪だからな」

「誰にも、告げはしません」

「姉にもよう云うておけ」

「すぐ話して来ましようか」

「待て」

吉次は、声を抑えて、

「おれは今夜立つとする」

「え。今夜のうちに」

「町の気はいも観てきたが、だいぶ余燼は冷めたらしい。六波羅の侍自身が、牛若の失踪

は、神隠しだと云っているそうだ。どこまでも天狗が、頭から脱けないらしい」

「わたし達もよく耳にしました」

「どこで」

「諸処のお館で」

「牛若さまのうわさをか」

「ええ。あれが世にいう神隠しというものじやろうと、平家の大将方も、お公卿方も」

「わずか十六歳の牛若さま一人を、六波羅の威勢をもつても捕まらないとなると、これは估券こけんにかかわるからな。——それに鞍馬の僧院でも、当面の役人たちでも、神隠しという事にしてしまえば、誰にも責任は来ないわけだし、すべてに、その方が無難でもあるからな」

「あなたは、とんだ悪いたずら戯たずな神さまですね」

「おれかい。——いやおれはお使い役の木っ葉天狗さ。ご本尊は奥州の平ひらいずみ泉いづみにいらつしやる」

女に心をゆるし過ぎてよかつた例ためしはない。吉次は、自分の口軽い調子を自分で戒めいましながら急に改まって、

「さつそくだが、おまえの衣裳を――揃え貸してくれ」
ひとそろ

「何になさるんですか」

「牛若さまにお着せするのだ。――誰が見ても、女にしか見えないように、翠蛾すいがとふたりして、牛若さまを化粧してうまく装つてくれないか。そのまえにおれはおれの身支度に取りかかるから」

「今、姉さんと呼んで来ます」

やがて、翠蛾も来る。

翠蛾は、妹の檀那だんなが、金にはきれいだが、何となく危険な人物ということ、年上だけに日頃から感じている。その吉次が立つてくれることは、来年の初夏まで、ほっと出来る事だった。

「まあ、今夜お立ちですつて。――お名残り惜しい」

それから翠蛾は、自分たちの衣裳を寄せて、あれこれと牛若に装つてみた。また、牛若の髪を解いて女結びに直したり、白粉おしろいをつけたりした。

「お綺麗な……」

姉きょうだい妹は、自分で作った人形に見られる人形師のように、牛若をながめた。

牛若は、黙つて、身をまかせたきりだった。若い殊に艶あでやかな白拍子の姉きょうだい妹だいに、自由もてあそに弄もばれている間、彼の血は、生れて初めて知る大きな動悸どうきに音を立てていた。女のおいというものが、余りに強すぎて、横を向きたいほど、顔も火照ほてり、胸ぐるしくもなつた。

「もういいよ、いいよ」

しまいには堪たえかねて、姉きょうだい妹だいの手をふり払い、後はひとりで支度した。

吉次の仲間がいつも泊る家へ、馬を一頭取りにやったり、腹はらごしらえや弁当など作らせている間に、夜立ちのつもりが、いつか夜明けの早立ちぐらいな時刻になっていた。

五

まだ町は暗く、霧が深かった。

吉次は、馬の口輪を取り、女装した牛若は、笠や荷物を鞍につけて、馬の背につかまっていた。

振り仰いで、吉次は、

「女らしく、怖々^{こわこわ}と、そう、そういう風に、乗っておいでなさい」と、注意した。

「だいじょうぶだよ、わしは、馬に乗るのは初めてだから、怖そうにしないで怖いよ」牛若は云う。

だが吉次は、ゆうべからもうこの少年の少年らしい言葉には、めったに油断をしないことに肚を決めている。——怖いというのはこつちのことと云いたかつた。

辻を曲がりしなに、出て来た家の方を振向くと、翠蛾と潮音の姉妹^{きょうだい}が門に立って見送っていた。まだ夜も明けず、人目もないからいいようなもの、どこで見ている者がなにも限らない——吉次はあわてて、手を振った。

——引つ込め。引つ込め。

というふうに。

あわてて、姉妹^{きょうだい}の影は、家の中へかくれた。それを牛若は、名残り惜しそうに見ていた。自分の顔についている白粉やら衣裳にしみている止木^{とめぎ}の香りが、何だか、いつまでも姉妹^{きょうだい}の白い手に触れているような心地を揺らがせてならなかった。

「女ですよ、あなたは。——道中は牛若さまとは呼びませんよ」

吉次は何度も注意した。

「うん、うん」

三条へ出る。蹴上^{けあげ}へかかる。

陽が出た。

京の町から朝霧が白々と離れてゆく。

「吉次、待ってくれ」

牛若は、坂の上で、馬を止めた。そして、いつまでもいつまでも、都の町屋根を、じいっと見つめているのだった。

「……………」

吉次も黙って、その顔を下から仰いでいた。べつだん泣いていない。また、去りがてに恋々としている眼でもない。

むしろ、それは、何ものかを睨みつけているようだった。——吉次は、牛若の意中をいろいろに酌^くんでみたが、十六の子どもだという観念がどうしても先になる。なあと、大人の考えるほど複雑でもあるまい。ついそう片づけてしまうのだった。

宿場帳場も幸いに難なく旅は扱^{はかど}った。美濃路をこえ、尾張の野へかかる頃から、女装の

君は、駄々をこね始めた。

「吉次吉次」

「なんですか」

吉次は、道を見まわした。優しげに女を装っているかと思うと、出しぬけに、大人も及ばぬ叱咤しつたを発するので、そのたびに恟ぎよつとさせられた。

「暑いっ。——こんな着物はもう嫌だ。塗ぬり笠がさもうるさい。……ねえ吉次、脱いでもいいだろう」

「脱いで何をお召になりますか」

「そこらの宿場で、何など、裾の短いすずしげな肌着ひとえ一重調ひとええてたも。それでいい。百姓の子の着るのもいい」

「そいつあいけません」

「なげさ!」

「女が……」

「わしは男だ」

「あつ、彼方あっちから旅人が来ましたぞ。変に思われると、すぐ密告されます」

「かまわない」

「かまわない事はありません」

「^{かま}関わないツたら！ そちはわしの云う事をきかないのかっ」

自分の頭から塗笠を^{むし}り取ると、牛若は、吉次の顔へたたきつけた。

「あっ！」

彼の呆れ顔^{あき}を捨てて、牛若はふいに馬の首をぐつと延ばした。馬は疾風を衝いて駈け出した。——驚きあわてて、後ろから追いかける吉次を^{わら}噛いながら、牛若の姿はたちまち遠く距ててしまった。

^{ういこうぶり}
初冠

一

先は、馬の迅さだ。

吉次は息が切れてしまった。へとへとになったがなお駈けた。果ては、肺も心臓も口から吐き出しそうな息をした。

「うっ……もうだめだ」

苦しい。眼に汗が沁みる。

愚を悟ったか、胸をたたいて、道ばたへ坐ってしまった。

後ろに森の宮がある。青葉の日蔭に、蝉しぐれの声が涼しげであった。するとその小

さい御堂の縁から、

「吉次。どうした」

と、牛若が呼びかけた。

駒を繋いで、彼はそこに腰かけていた。見れば、女装の袂や紐は解きすてて、馬の背から荷物を下ろし、自分ひとりで身軽に扮装を着更えてしまった。そしてにこにこ笑っているのである。

吉次は、この時ほど、腹の立ったことはない。小面の憎い童めと、何か仕返しでもしてやりたいくらいに思ったが、そう苦り切っている間にすぐ、

「吉次。わしの脱いだ女の着ものは、持ってゆくのか。捨ててゆくのか」

「そんな物は……」

忌々しさを、唇くちに噛んで、吉次がつぶやくと、

「だつて、これは潮音の着物だろ。潮音はそちの……」

と擲や掬ゆするような笑え靨くぼをつくる。

吉次はまた、肚はらのうちで呷あいた。——あんな事を云やがる。何も知らない蜂の子と思つていたら大間違まちがい、どうして、飛んでもなく、早熟ませている！

「吉次、吉次」

「なんですか」

「不用ならば、その衣服は、この御堂の床下の奥へ、まろめて突つこんでおくがよい」

「へい」

つい返辞へんじはしてしまふが、吉次は業腹ごうはらでならなかつた。いつの間にやら奉公人のようにこの餓鬼がきは人を顎あごで使う。

餌えさをやつたり乳ちを与たまへたりしているうちに、豹ひょうの子こにだんだん爪つめが生うえて来たきような形である。鞍馬くらまという檻おりの中なかや都みやこという柵さくの内うちとちがつて、ここはもう野放のほうしの天地てんちだから始末しまつが悪い——と彼は飼かい難にくく思おもうのだつた。

「ああ、やっと少し汗がおさまった。牛若さま、ひどい目に会わせましたな」

「はははは」

「笑い事じゃありませんぜ。恩人の吉次をそんなに困らせると、行末のご武運にも障りま
すよ」

「怒ったのかい、吉次」

「誰だつて怒りますとも」

「わしはね、そんな悪い気持でしたのじゃない。ちよつと、神隠しの真似してみたんだよ」
「……………」

吉次は呆れて、そう云う彼の顔を見ていた。京を立つ朝、馬には乗った事もないから恐
いなどと云っていた事を考え合せると、愈 《いよいよ》もつて、この豹の子は油断がな
らない。下手をしたら手を噛まれるぞと、警戒を抱きはじめた。

「この宮の裏に、井戸がある。何か、器うつわをさがして、水を一杯汲んで来て飲ませてくれい」
「渋々、吉次が、竹筒に水を汲んで来ると、牛若はそれを飲み乾してから、

「吉次、そちは、わしへ水を持つて来る前に、自分が先に、飲んで来たな。卑いやしいやつだ」
と、叱った。

そしてまた、吉次に二の句を云わせず、次の用をいいつけた。

「馬にも水を飼ってやれよ。暑いのは人間ばかりではない」

もういちいち腹立てているいとま。吉次が黙々と、馬を井戸へ引いてゆくと、後から牛若がついて来て、

「どこかこの地方に、源氏に縁故のある御みやしろ社はあるまいか。——そちは毎年通っている道中だから知っているだろう」

と、訊ねた。

二

だしぬけな質問なので、吉次はまたまごついた。

だが、大人の不用意へ、唐突に質問を出すのは子どもたかの持前というもので、何もふかい根拠があるのではない。吉次は、そう多寡をくくつた顔で、

「さあ？ 存じませぬね。源氏に由縁ゆかりのあるお社やしろも、何処かしらに、尋ねればあるにはあるでしょうが」

と、空うそぶいた。

すると牛若は、

「そちは知らぬのか」

と、かえつて今度は、教えるような口吻くちぶりで云い出した。

「異母兄あに頼朝の母君は、名古屋のほとりとかいう、熱田の宮の大宮司だいぐうじ、藤原季範すえのりむすめが女にお在わしたとか聞いておる。——さすれば亡父ちち義朝とも、源家の一族とも、ご縁は浅からぬお宮ではないか」

「誰に聞きましたか。そんな事まで」

「僧正ヶ谷の天狗どもに習うた」

「へエ。天狗は何でも教えたんですなあ」

むしろ呆あきれて投げやりに云うのを、牛若は、真面目にうなずいて、

「まだ見ぬ異母兄あにじやが、そのの旗屋町とかには、異母兄頼朝が産湯うぶゆの井いどもあるとのこと。異母兄は熱田で生れたとみゆる。——わしも由縁ゆかりの深いそこへ行つて、男になろうと思うのじゃ。吉次、これより熱田路へ参ろうよ」

「え。男になろうとは」

「元服するのじや。——十六、あやうく髪を剃おろされるところであつたが、その髪を男立ちに揚げ、初ういこうぶり冠こないただこうと思う」

「いや。それは」

と、吉次はあわてて、

「もすこし、時を待つて遊ばしませ。これよりあなた様が頼たのつて行く先のお方は、富強とみづか威勢いせい、平相へいしょう相さう国こくにも劣らぬといつてもよい奥州平泉の藤原秀衡ひでひら様さまです。——その秀衡様さまを、烏帽子親えぼしと頼み参らせて、元服なされたがようござりましょう」

「……………」

「お嫌ですか」

「……………」

「元服の事ばかりでなく、何もかも、秀衡様へすが継つるのが一番です。秀衡様のご庇護ひごに依らねば、生きても行かれません。杖とも柱ともおつ継つりいたします。——という風に、あわれを見せかけると、人間というものは、ついほだされるものですからね」

「いやだ」

少し気色も直して調子づいて来た吉次のことばを、牛若はまた、膠にべもなくヘシ折ひつて、

「秀衡を、烏帽子親にして、人となったら、後にわしが源家の一族の上に立っても、秀衡には頭が上がないだろ。わしにつれて異母兄あに頼朝も迷惑なさろうし、源氏の侍たちの弱みにもなる。——だから嫌だ」

「そんな事はありません」

「あるよ」

と、肯きかないのである。そして牛若は、なおも云った。

「それとまた、秀衡だつて、どんな人物か、善悪も知れない人じゃないか。身は寄せても、烏帽子親など、頼まいでもいい。——わしの元服奉ぶぎ行ようは、熱田の宮の神主さんと決めた。そちが来ないならわし一人で行く」

牛若は、馬の背へ移ると、またも彼にかまわず、道を急ぎ出すのだった。

吉次はもう、謝った——と呶鳴りたくなつた。後を追ひ追ひ、彼の機嫌をとるほかなかつた。

宿場で、吉次も馬を雇い、日を重ねて熱田へ入った。——そこへ着くと、すぐ牛若は宮の森へ駒をつないで、真つ直ぐに、夏木立の神さびた奥へ進んで行った。

三

牛若は拝殿の下に立つて、掌てを打鳴らした。いつまでも、合せた掌てを胸にあてて祈念していた。

吉次もうしろで、ぽんぽんと柏かしわ手でを打った。音はいいが拝む真似事に過ぎない。胸に風を入れて、

「こいつは涼しい」
と、つぶやいた。

「吉次」

「はい」

「社家はどこである?」

「さあ、どこでしょう」

「元服いたすには、禰ね宜ぎどのに頼まねばならぬが、社家へ申し入れて来い」

「へ。——何とですか」

「名もなき東国の地侍が小せがれでございますが、神前において、加冠お式をしてたもれ

と」

「変に思いましようが」

「なぜ」

「旅の者が、親どもも付き添わず、元服してくれなどと申し入れたら」

「かまわぬ。孤児みなしごといえよ。——それはまた、ほんとの事だから」

「では、てまえが叔父という事にして、頼んでみましよう」

「そのような云い構えは要らぬことだ。家来といえよ」

吉次はまた、憤むかッ腹はららしい。社家はどこやらと、知らぬような事を云ったくせに、すたすた大股に彼方へ歩いてゆく。

それきり返辞もしに來ない。しかし牛若は平氣である。いてもいないでもいい人間のよ
うに、むしろ拜殿の廻廊に、神主のすがたが見えるのを待ち仰いでいた。

やがて、若い神主が、廊の上にひざまずいて、

「神前で元服して欲しいといわれたのは、お前様か」

と訊ねた。

牛若が、そうですと答えると、生しょう国こくはどこ、父の名は何、また何のために、この社

で加冠したいかなどといろいろ訊く。

「父は東国の武士、わけがあつて、名は申せません。孤児みなしごにひとしい者ゆえ、神垣かみがきに

て元服する分には、仔細あるまじと思ひ寄つて参りました。——なおこの熱田の宮の神さ

まは、日やまとたけるのみこと本武尊をお祀りしたものと聞いていますので、日頃より崇うやまい尊ぶ御神の

御前にて、初冠ういこうぶりないたすこと、男冥加おとこみょうがぞとも思つたりして参りました」

「では、しばらく」

若い神主は、自分の一存ではゆかないらしく、そう云いおいて、奥へかくれた。

ややあつてまた、そこに現れ、

「お上がりあれ」

と、拜殿の床に、青い藺筵いむしろを敷きのべ、牛若を坐らせた。

御神灯みあかしをともし、神酒みきを奉りもう一人の神官と二人して、のりとをあげた。そして牛若

の頭上えぼしに烏帽子えぼしを与えた。その紐も、神官がむすんでくれた。

榊さかさえ枝で、牛若の体をはらつた。颯々さつさつと、白い注連しめと緑の風にはらわれて、牛若は何

かしら体がぞくとした。

奥ふかい御鏡の影を、きつと見つめて、

「われを男となし給ううえは、われに御神のこころと力の影なりともうつし給え」と心に禱いのった。

「ありがとうございます」

土器かわらけの神酒みきをいただいて三方へ返し、いんぎんに礼を云って立ちかけようとした折、ここの大宮司らしい老人は、ひとりに衣服をのせた三方を持たせ、自身は太刀を載のせた三方をささげて、静かに、彼方の渡り廊からこれへ向って歩いて来た。

四

階きざはしを降りかけた牛若を呼びとめて、老宮司ろうぐうじは、太刀と一かさねの衣服とを、

「冠者となられたお祝に参らせる」

と、彼の前へ置いた。

牛若は、両手をつかえて、

「あなたは？」

と、その人の面おもてを、穴のあくほど、じつと見た。

老宮司も、牛若の姿を、飽かずながめていた。

何時いついいつけたものか、他の若い神官たちは皆去っていた。ふたりの前には、榊葉と神み灯あかしと神殿の奥の御鏡しかなかった。

「わしは大宮司藤原季範すえのり。……おん身には何のお覚えもあるまい」

やがて、声をひくめて、季範が云うと、牛若は、わずかに顔を横に振って、

「い、いいえ」

「……あるか。何ぞわしについて聞き覚えでも」

「よそながら存じあげております。あなたと私とは、あかの他人ではございません」

「む、む……」

季範は、ほろりとしかけた。

「弁わきまえておいでたか」

「知らないでどうしましょう。あなた様は、わたくしの亡父ちちにはお舅しゅうとこ御に当られるお方でしよう。異母兄あに頼朝の母御には、父にあたるお人でしょう」

「おお——遮那しゃなどの。おん身が鞍馬から姿を晦くらましたと聞いて以来、よそながら案じておったぞ」

「どうしてお分りになりました」

「社家へ見えた供の男の口うらが不審いぶかしいので、そつと物陰からお汝ことの容子を見たところ、似ておいでるのに驚かされた」

「似ているとは、誰にですか」

「頭こうのどの殿に——お身の父義朝どのにな」

「あつ……。そ、そうですか」

牛若こぶしは、拳で眼をこすつた。藺いむしろ筵にぼろぼろ涙が落ちた。

「無念か」

「いいえ。もう、もうこの頃では……それよりか、父に似た子と云われたのが、何だか、欣うれしくて」

「これより何処いずこへ身を寄せられるお考えじゃな」

「奥州の藤原秀衡どのを頼つて下る途中でござります」

「そこまで行き着けば、後日の策も立とう。しかし途中は心に心をつけて」

「はい。……ではこの賜物たまもの、戴いて参ります」

「召してゆくがよい。そう人目立つほどの衣裳ではない」

旅の小冠者にはふさわしい派手派手しくない狩衣かりぎぬだった。牛若は押しただいて着更きかえ、太刀をも腰につけた。

「む。よい若者振り。亡き頭殿にも見せたいのう。——が、加冠はしたが、名は何と称よばるるか」

「そう。元服すれば、名も改めるのが慣ならいでした。——源氏の遠い先祖は、六孫王つねもと経基つねもとと聞いております。——それから義家、為義、義朝と、いう風に、よく源氏の代々のお方には、義の字が用いられていますから、わたくしは、義——経。——義よしつね経と名乗ろうと思ひます」

「して呼び名は」

「義朝の八男ですから、八郎と称ぶところですが、叔父に鎮西八郎為朝があります。その武名を紛まぎらわしては濟まない気がしますから——九郎、義経と」

「九郎義経か」

「はい」

「よいお名じゃ。吉よい日でもおぎった。では、この辺りは平家の衆も多い事、東国までは、すこしも早く急がるるがよい」

「ありがとうございました。——では」

拝殿を降りると、義経は、吉次吉次と、呼びたててその姿をさがした。

「これにいますよ」

吉次は、拝殿のすぐ下に、膝をかかえて、土台柱の根に倚りかかっていた。抜け目はない。上の話は、もうその耳に残らず入れている顔つきだった。

五

旅は日をかさねて。

真夏の高空に、しかも眉に迫るほど近く、富士の嶺が、頂きからその裾野の線を、大地へ消えこむまで、くつきりと見せていた。

ここは足柄越えの山道だった。

「吉次。休もう」

九郎冠者は、道のべの岩に腰をおろした。頂きに近いので、歩みを止めさえすれば、風は冷たく、全身の汗も、すぐ乾いた。

「九郎様。あなたは存外、何でもお心得ですから、おおかたご存知の事でしょうが、北は碓氷を境に、南は足柄山を境として、これから東が、坂東と申します。いわゆる、東八箇国に入ります」

「ウム。ウム」

九郎は、何度も頷いて、

「とうとう来たな。——吉次、そちにも骨折りであった。忘れはおかぬ」と、いつになく頭を下げて礼を云った。

今日までの間にない事だった。吉次は、かえってあわて気味に、

「ど、どう致しまして。そう仰つしやられては、こっちの不行届きは、どうお詫びしていかかりません」

「いや、礼は礼としていう、恩は恩として長く忘れまい。——けれど吉次」

「はい」

「そちは二度ばかり、人手をかりて、この源九郎を懲らそうとしたな。わしが余りそちの自由にならないし、そちも腹が立つてならないが、自分の手でするわけにゆかないので、宿場の賊の熊坂とかいう男をたのみ、わしの寝ごみを襲わせたり、また、山賊などを唆せ

て、わしを脅してみたりした」

「あつ、もし……九郎様。もう仰つしやつて下さいますな。吉次は、慚愧ざんきいたしておりま
す。……熊坂くまさかちようはん長範などをけしかけたのはまったくまえの悪戯いたづらでございですが、も
う、あなた様には、どう願あがで使われても、吉次は腹も立たなくなりしました」

「立てたら骨折り損ぞんになるからなあ」
「お言葉どおりです」

「が、吉次。平泉へ行き着いても、秀衡ひでひらには、何もいわないでくれ。わしは早く、もう
五、六年ほど一ぺんに大人になりたい。その間、ぼかんとしているつもりだから」

「心得ました。秀衡様へも、館のご一族へも、吉次がよいように申し告げます」

「そのかわり、わしが大きくなったらば、わしの名を用いて、そちも大きな利得をするが
いい。小慾はかかぬがよい」

「吉次はずいぶん大慾のつもりでおりましたし、肯きかない男を以て自分でも任じておりま
したが、あなた様には、どうやら骨抜きにされたようです」

「あ。相模の海が見える。……伊豆の島々も」

九郎はもう吉次の繰くりごと言には答えもせず、虹いろに霞かすんでいる伊豆半島の山を空を、じ

いつと、飽かぬ眸でながめていた。

異母兄頼朝の配所。

伊豆の蛭ヶ小島とは仄かに聞いているが、その蛭ヶ小島とはどのあたりか。

母のちがう異母兄。まだ見ぬ異母兄。

九郎義経なる異母弟があるかないかも、ご存知か、どうか。

「……でも血はひとつだ。わしも亡父義朝の子だ。またおそらく、志もこの九郎とちがうことはあるまい。おなつかしや、兄者人。——きょうこの足柄道を、あなたの異母弟九郎は東へ越えてゆきます。いつかきつとお目にかかりましょう。その機縁は、亡き父や

源家の先祖たちが、きつと導いてくれるに違いありません」

彼は、胸の底で、そう呼んでいた。その思いは宇宙を翔けて、配所の異母兄へ通じるであらうと信じていた。

りんどう

この国の地殻ちかくには、火の脈が燃えている。温泉いでゆのわく所が多い。

山もまた、いつ火を噴くか知れない性質をもっている。富士、愛鷹あしたか、箱根連山など。

——総じて、この半島伊豆の地上では、そうした風土や自然が、人間の容姿や気風にまでよく映うつつていた。

いつたいに、男でも女でも、早熟であった。情熱に富んでもいた。しかし、山地が多く物産ぶつさんが乏とほしいので、一面には質素で、蒙古の風を尊んだ。——また、海に接しているせい、進取的だった。遠い僻地へきちでありながら、常に都の風聞とか中央の政情などにも、関心を持つている者が多かった。

ことはもう安元二年。

安元二年というと、元服した九郎義経が、ここから近い足柄山を越えて、奥州へ下つて行つたその年から二年後である。

時に、右兵衛うひょうえのすけ佐頼朝は。

指を繰つてかぞえてみると、ここの配所へ送られて来てから、ちようど今年で十七年目

になる。

年は二十九歳。

「三十にして立つ」

という古語を、彼もことしは、人知れず心に呟つぶやいていたのであろう。

けれど、彼の十七年の配所生活は、至つて穏やかなもので、むしろ平和に倦うむくらしいなものだった。

その無事と無為の日々は、きょうこの頃も変わらない。

ただ、山河には、花の開落があり、鳥魚の去来がある。流人るにん屋敷の畠には、今年もまた、

茄子なすの花が咲いていた。

「才こわ才、怖こわ！」

瓜畑で瓜をもいでいた女の童めわらべが二人して、云い合せたように、耳をふさいだ。

「雷かみなり鳴さま」

と、山を仰ぐ。

箱根連峰は、見ているまに、疾風雲はやてぐもにつつまれて、すぐ近い函南かんなみの中腹には、かつ

と真まつ蒼あはに陽が映はえていた。

ここは、箱根の南裾野といってよい。小高い畑地で、まわりは崖だった。そして崖の根土は、どつちを見ても、狩野川かのがわの流れに洗われている。——川のなかの藪島やぶしま。それで蛭ひるヶ小島と土着の人は云つて来たのかもしれない。

藪をきり拓ひらいて、宅地と畑地にした所に、配所は建っていた。土塀をまわした総坪はずいぶん広いが、建物は元より粗雑で、空地は畑となっていた。

それでも。

流人の住居としては、ずいぶん整っていると行ってよい。母屋の中心に、持仏堂じぶつどうもあれば、侍部屋もある。寢所かまどの、釜殿めわらべべや、女童部屋ぬぼく、奴僕ぬぼくの小屋、殊に目立つのは、厩うまやのあることである。頼朝の外出も、ある区域に限つては、狩しゆりよう、獵しゆりように出るも、走り湯へ参詣さんけいにゆくも、かなり自由にされているらしい。

——ポツ……ポツリ

雨が斜めに落ちて来た。

ここから一里ほどもない駿河湾の静浦、江の浦のあたりまでも、もう一面な低い雲に蔽おほわれて、たった今まで、陽のあたっていた海面うなもが、一尺の水面も見えなくなっていた。

「あつ、夕立」

と、籠をかかえて女童は近くの厩うまやひさしの廂へ逃げこんだ。白い雨が、一瞬翔かけて行った。どこかに雷鳴かみなりの落ちたような大きな音が近くでした。

「おお、ひどかった」

すぐ霽はれた青い雲間を見て、女童たちはほっとした眼をし合っていた。すると一人が、厩の内を覗のぞいて、頓狂な声を出した。

「おや。お馬がない。殿さまはいらっしゃるのに、龍胆りんとうだけが。龍胆はどこへ行ったんでしよう？」

二

馬を大切にすることは、貨幣以上であった。良い馬は、黄金を以ても、容易に得難いものとして、財宝の一に数えられるほどだった。

殊に、武人は、弓矢太刀などもさる事ながら、名馬を厩に持つことは、心がけの一つだった。けれど、諸国の牧から市へ出る逸いっしゅん駿しゅんも、そう数はないので、すこし名の聞えた馬といえば、みな財力のある都へ買われて行った。

だから平家一門の公達輩きんだちばらは、見みにして、各みな 《めいめい》、名馬を争い持った。名馬を手に入れる事では、屢しばしば 《しばしば》 悶もん着ちやくや喧嘩けんかさえ起った。そういう平家人のあいだでは、こんな事すら云われていた。

(人は都。馬も、田舎に名馬なし)

いかにも、思い上がった言葉である。果たして、田舎に人はないだろうか。田舎に名馬はないだろうか。

頼朝が、自ら、龍胆黒りんだうくろと名づけて、この厩うまやに飼かい、厩舎人うまやとねりの鬼藤次きとうじという小者を付けて、鍾愛しょうあい措おかない黒鹿毛くろしかげは、都にも稀まれな逸物いぶつだといわれているものであった。

しかもその黒は、この西伊豆の豪族でありまた、配所の経済や頼朝の身に就いてなど、六波羅からその世話や監視の役をも命じられている北条時政が、ある折、特に自分の一頭のうちから選んで送つてくれた駒である。

この配所から程近い北条家の館やかたへ招かれた一日、
(馬がないので何かにつけ不自由ふじゆういたしている)

と、頼朝がもらったのを、その折、初めて会った時政のむすめの政子が、

(この頃、お手に入れた黒鹿毛は、悍気かんきがつよいと仰おほつしやって、お乗りにもならず厩

に繋つないであるようですから、あれを差上げてはどうでしょう)

と、暗に父の時政へせがんで、その帰りに、鞍くらまで添えてくれたものであった。

政子の印象もよかつたし、駒を馴らしてみると、案外な逸いっそく足なので、頼朝は厩の物音を聞くと夜半よなかでも、紙燭ししよくをかかけて、

(蚊に喰わすな。——どこか悪いのではないか)

と、いつもそこに、馬と共に暮している鬼藤次へ、注意しに来るほどだった。

それほど、主人が愛している龍胆黒であることは、召使たちも知りぬいている事なので、今忽然こつねんと厩の中にそれが見えないのは、大きな驚きと不審であった。

「鬼藤次さん。鬼藤次さんつ——」

女童めわらべのふたりは、厩番うまやばんの小屋へ教えに行つたが、そこにいつもいる鬼藤次までが

いなかった。

草を喰わせに行くのも、配所の外まで曳ひいて出る例はなかった。朝夕の調馬は、主人の頼朝自身がすることである。

その頼朝は、持仏堂の窓で、きょうも写経にいらしている。その姿は、たった今、瓜畑から見ているので、どうしても不審が去らなかつた。

「盛綱様へ、お告げしておこう。盛綱様はどこにおいでかしら」

「また、河原へ降りて、鮠を釣つていらつしやるかもしれない」

「あ。そうだ。きつと」

駈け出してゆくと、雑木の崖際に行きあたる。下を見下ろすと、夕立にぬれた樹々の間に、狩野川の溪流が白く透いて見える

「盛綱様——。盛綱様アツ」

女童は、口のそばに、手をかこんで呼びたてた。

今の一夕立で、溪流は、すさまじく水音を高めていた。さつきから釣糸をその瀬へ垂れていた百姓の若人みたいな男は陽に焦けた顔を、くるりと向けて、崖の上を振仰ぎながら、

「なんだーっ。用があるなら降りて来うっ」

と、粗野な声で答えた。

夕立が霽あがったばかりである。崖がけつち土はすべる。女童めわらべの二人は、ようやく河原へ降りて行った。

「盛綱さま。厩うまやにお馬が見えなくなっていますよ。鬼藤次も、何処へ行つちまつたか、呼んでも、いませんよ」

口を揃そろえて告げた。

「何。龍胆りんどうがないって？」
鯰はやがかかった。

盛綱は、釣竿つりざおを上げながら振向いた。ピラツと、鯰は彼の手の中へ躍ってきた。鈎はりから魚をはずしながら、

「ほんとか」

「ほんとですもの」

女童めわらべは眼をみはつて云う。

「鬼藤次のやつ。先頃から不審なところが見えた。あつ……それに今日は四の日」
彼はやがて、崖を攀よじて、厩舎うまやとねり人の寝小屋を調べていたが、突然、

「市いちまで行って来る。兄者が訊ねたら、晩までには戻ろうと云うてくれ」

と、釜殿の下僕しもべに云い置いて、飛ぶが如く何処かへ駈けて行つた。

南条、中之条、北条などと庄田の名は称よび分れているが、この辺の町は、北条の端はすれになる四日市を中心にしたて混んでいた。

月の四の日ごとに、市が立つので、そう称よばれていた。三郎盛綱は、今日がその日にあたるのを思い出したのである。

穀物、獣皮じゆうひ、漆うるし、織物などあらゆる物と物が交易されていた。馬市も立っている。鹿か毛げ、栗、月毛、黒などが何十頭も馬うまつな繋ぎに首をならべていた。

その中に、一頭、鼻すじの白い黒鹿毛がいた。鞍もあぶみも外してあるので、ちよつと見違えるが、盛綱の眼が見あやまるわけはなかった。

「あつ、龍胆りんどうだつ」

手をかけると、ひとりの伯樂はくろくが飛んで来て、いきなり咎とがめた。

「何をなさる」

「何をつて。おまえのか」

「きよようの市で、大金を出して求めた馬じゃ」

「それは気の毒なことをした。これはわしのご主人の持馬だ」

「何だと」

「そちは誰から買った」

「誰やら知らぬが、売りに来た若者が、市へ出したので買ったまでじゃ」

「その若者は鬼藤次といひはせぬか」

「名など知らぬが、あれ、あの彼方むこうに見える筵むしろがけ掛けの小屋の中で、市の商人あきんどや馬買ばかいたちの仲間に交じつて、博奕ぼくちしておるわ」

「さては」

と、うなずいて、

「では、この駒は、しばらくそちに預けておこう。だが、ここから動かしたら承知せぬぞ」
盛綱は、そう固く云いおいて、筵小屋むしろがやの方へ歩いて行き、そつと中を覗いてみた。

四

「はて、いないが？」

盛綱は呟いた。

その仲間のうちには、鬼藤次の顔は見えない。彼はまた、他を探した。そういう悪戯に耽っている囲いは、一カ所や二カ所ではなかつた。博奕の流行は、保元、平治の乱以後、平家の繁栄と伴つて、上下共に、ひどい風潮となつた。日々の業務も抛つてそれに耽る者は、庶民ばかりではなかつた。

わが子は二十になりぬらん

博奕してこそありくなれ

国々の博徒に

さすがに子なれば憎からじ

怪我負わせ給ふな

王子の住吉西の宮

孫を負つた媪が、そんなうたを謡っているのも、よく聞くことだつた。

世の風紀が悪くなつたといえ、富士の宿から足柄越えにかかる旅行者のよく云う事にも、あの嶮しい山中にさえ、近頃は、茅の屋根に篠すだれを垂れ、夜見たらむしろ怖ろし

げな遊女の宿が何軒もできているそうである。元より怪鳥走獸けちよう そうじゆうの声ばかりな深山なので、そこに住む遊女といつてはみな年老いたのが多く、旅人たちはそれを「山姥やまうば」などと称よんでいた。

足柄山の関にさえ、あやしげな女の袖を引く世であるから街道の風儀や国々の府の猥わいざ雑つほうじゆう放縱ほうじゆうな有様も思いやるに余りがある。

まして、市いちの日、諸郷の小商人こあきんどやら伯樂ばくろうやら雑多な人々の集まる市で、悪戯わるさの行われるぐらいは、まだまだ近頃の世相のうちでは、それが白昼、人目を恐れるでもなくやっているだけに罪の軽いほうかも知れなかった。

「おつ。いた」

一つの囲いの中に、盛綱はどうとう彼を見つけ出した。

あそびに夢中になっていた鬼藤次は、盛綱の腕が、自分の襟くびへ来て、襟がみを掴まれるまで気づかなかつた。

「不埒者ふらちものつ」

耳元の声に、あつと、びっくりして後ろへ手をやった時は、鬼藤次の背中は、もう地を摺すつて、何十尺もズルズル地上を引つ張られていた。

「おゆるし下さい。——もしつ。謝ります。盛綱様つ」

「やかましい」

「面目もございません。……つい、つい、出来心から」

「やかましい」

足を上げて、盛綱は、その顔へ一つ喰らわせながら、

「お馬と代えたかねをこれへ残らず出せ」

「かねはございません」

「どうした」

「みな、博奕ぼくちして、負けてしまいました」

「おのれっ」

盛綱は、赫怒かくどして、

「よくも、洒しやあ洒あと。あるだけでも出せ」

「もう、まったく、僅かもございません。何とか、取返しますから、どうかしばらくのご猶予ゆうよを」

彼は懸命に、哀訴したつもりだったが、盛綱の怒りはかえって煽あおられたとみえる。怖ろ

しい声で、不届き者つと、叱るや否や腰の太刀をひき抜いて、逃げかける鬼藤次の肩へ、うしろから一太刀あびせた。

鬼藤次は、悲鳴をあげて、転んだが、運よく、周りをかこんでいた人垣の中へたお仆れた。輪なを作して見ていた人々は、驚いて逃げくずれた。鬼藤次もその間を、血まみれのまま走って行った。

「これなる黒鹿毛は、わがご主人の乗馬。盗んだ物を求めたのは、求めた者の買損というもの。ともかく申しうけて参るぞ」

以前の馬つなぎから龍胆を解くと、盛綱はとび乗って、あれよと人々の騒ぐ間に、ひる蛭ヶ小島の配所へ矢のように駈け去ってしまった。

配所の君

まだ山々も霧、野も霧、狩野川も霧の朝まだきからである。

配所の持仏堂では、朗々と、読経の音がする。

十年一日の如く、毎暁、怠ったことのない頼朝の勤行だった。

少年の日、死刑にされるところだったのを、池の禅尼に助けられて、その禅尼から都を立つ日、

(たとえ唆す者があつても、ゆめ、太刀習いなどなざるまいぞ。親兄弟の後生を念じ、髪を下ろして、再び縄目の憂き目など尼に見せてくださるなよ)

と、懇ろに意見されたその折の訓誡を、ふかく心にとめて、今も忘れずに奉じているものの如くであつた。

しかしその禅尼も既にみまかつて、もうこの世の人ではない。——彼のりんりんたる読経の声のうちには、明らかに、今はその人の後生を念じているのが聞き取れる。

とは云え、尼が生前、くれぐれも彼に云つた、髪を下ろす一カ条は、決して守つていなかった。二十九歳の黒髪は、ふっさり束ねて、むしろその艶やかさを誇っている。

また、読経の日課にしても、果たしてそれが、菩提を慕うやみ難い心のあらわれか、単に、非業な最期をとげた父義朝や兄や一族たちへの一片の供養か、それとも、世を欺く音

吐か、依然としてこの人の肚というものは、その端麗なすがたを見ただけでは分らない。彼を観る人、それを聴く人、配所を繞る人々の思うところも、自らまたまちまちである。

が、事實は動かし難い。頼朝の肚はともあれ、こういう配所の生活は、至極神妙なものとして、京都へは報告されていた。

従つて、年々、彼への監視や拘束は、弛やかになつてもいた。給仕の女人として、女性をおくことも黙認されている。——近頃、ひそやかに奥に侍っている亀の前は、彼の二度目の愛人だった。

二度目というのは、今より二年ほど前に、伊東祐親の息女と恋におちて子までもうけた事があり、祐親に知られて、その子は、淵へ捨てられたりなどした事件が、この伊豆では一時、かなり噂に聞え渡つていたからである。

祐親は、伊東の豪族で、北条家とならぶ権門であつたから、その事件では親の祐親に睨まれ、流人ずれがと、ふた口めには云われる頼朝は、ずいぶん辛き目にあつて、懲々しているはずであるのに、いつか彼の側には、変つた女性が侍いて、時には、傍目もない恋を語らい合つている様もまま見かけられた。

亀の前は、伊豆の女に似げなくうち気なほうであつた。その頃、下司げすの戯れ謡うたに、

男怖おとこおそじせぬもの

加茂女かものむすめ、伊よ女、上総女かずさめ

などという詞ことばもあつたが、伊豆の女はなぜその中でないだろうか。——頼朝も時には、そんな煩惱ぼんのうに、頭脳あたまを憑つままれている日もあつた。若い肉体に、無聊ぶりようといつたら実に耐えきれない無聊であつたせいもあるう。

そういう煩惱や頭のにごりを清掃するためにも、朝ごとの勤ごんぎよう行は、彼自身に必要であつた。その声は大きく、彼の声から蛭ひるヶ小島こじまは暁あけるといつてよかつた。

「亀。——水をくれい」

持仏堂を出てくると、彼は汗ばんだ顔をしていた。亀の前の手から一杯の冷水を取って飲みほすとすぐ股立取つて、まだ露の冷たい夏草をふんで厩うまやへ行く。——それも毎朝の事だつた。

馬は厩うまやに無事でいるし、きのうの出来事は、誰も告げていないので、頼朝は、そこへ立つと、

「鬼藤次きとうじ、鬼藤次」

と、彼の寝小屋へ呼んだ。

すると、はいつと答えて、厩の陰から立出たのは、三郎冠者盛綱さぶらうかじやもりつなで、

「ただ今、曳きまする」

と心得顔に、りんどう黒を厩から解いて、前へ曳いて来た。

頼朝は、不審顔に、

「鬼藤次はいかなせしか。今朝はそちが厩の世話をいたしたのか」

と、訊ねた。

盛綱は、何気ない顔して、

「昨夜おそく、急病を発したとやらいうて、南条の里へ帰りました。夜中なれば、お暇も告げずに行つたのでございましょう」

と、答えた。

小者の事なので、頼朝は、そうかと、気にもかけない容子で、いつもの朝の如く、りんどうの鞍へ跨またがって、野へ駒を調ならしに出た。

人も駒も、一汗かいて、野から帰って来る頃に、陽は朝霧を破って山のうえに昇つていた。

「なるほど」

盛綱は、何を感じしたか、その帰るさ、駒の口輪をつかみながら、頼朝のすがたを振仰いで、

「兄者人の定綱が、いつも云わるるには、殿のご大食には驚く、あの華きゃしゃ奢しゃなおからだで、朝などお汁を何杯もあがるなど、いつも驚嘆しています、なるほど、これではご空腹もごむりではない……。盛綱めも今朝は、眩めくらめくほど、すき腹になり申した」

と、云った。

頼朝は、笑って、

「調馬は未まだしもよ、朝と夙とく法華経二部を、腹のそこから声を出して誦よんでみい。五臓六腑、一物もなくなってしまう」

「いや、配所へご給仕に参りましてから、私ども兄弟も、はや十年の余、よい修行に相成りました」

「十年の余にもなるかのう」

「なります。父のいいつけで、初めて上がった頃は、私はまだ漬たれの童わっば、兄の定綱さえ、まだ小冠者でござりました」

露を踏みながら、盛綱は、自分の素裸すはだし足を見た。百姓と変りはない。

盛綱は兄弟四人のうちの三男だった。父の佐々木源三秀義ひでよしは、近江の住であつたが、平家に屈しなかつたので、近江を追われ、武蔵の渋谷庄司重国へ身を寄せた。——そして程近い伊豆にある頼朝へ、音信や贈物を怠らなかつたが、遂には、自分の子の長男定綱と三男盛綱のふたりを、配所の家僕として召使つてくれるようにと、ここへ奉仕によこしたものだつた。

流人るにんとはいえ、まだまだ多分に貴族的な起居をゆるされている頼朝は、配所の家人けにんに対しても、ずいぶん吾儘わがままなふうがあつた。盛綱などは、腹を立てて、何度も渋谷へ逃げ帰つた。その度に、父に諭さとされてはまた帰つて来たりした。——文字どおり艱苦かんくを共にして来た主従である。それだけに、今となつては、切つても切れない君と家人けにんのあいだがらに

もなつていた。

—— 思い出すと、長い間には、こんな事もあつたりした。

兄の定綱は、父秀義にも劣らない、矢を矧ぐ事はの上手であつたが、ある夜兄弟して、夜よ業なべに矢をはいでいるのを、頼朝が見て、

(おまえ達の作る矢を、一体いつになつたら、この手でいっばいに引く日が来るだろうな) と、呟いたので、兄弟は急に胸がせまつて、何も答え得ずに泣いてしまった。主従、燈と火もしびの消え入るばかり、手を取りあつて泣いてしまった。

「……何度、この足の指の生なまつめ爪はが剥げたら、その日が来るか」

盛綱は今朝も——そんな事を考えながら、主人の駒を曳いて帰つて来た。

すると、配所の門前に、何事が起つたのか、大勢の雑ぞうにん人たちが群れて、わいわい騒いでいた。

三

「や。流人の主従が」

「あれへ来た」

「戻つて来おつた」

雑人たちは、露骨な敵意を示しながら、指さしたり、喚わめいたりした。そして頼朝のまわりへ、わつと寄つて来そうな勢いを示した。

「何事ぞ」

頼朝は、盛綱を顧みた。盛綱は、馬前に諸手もろでをひろげながら、

「何事やら分りません。——ただ今、問とい糺ただしてみましよう」

と、答えた。

その間にも、雑人たちは、口汚い悪罵あくばをまわりから放つていた。

「馬盗人よ」

「主従、肚を合せて、馬の代しろを騙かたり取つたぞよ」

「流人根性！」

「配所しやくの殺ころつぶし」

「馬かを返かやせ」

「その馬を渡せ」

何かそんな意味らしい。市の無頼漢なちらずものや伯樂はくろくどもであった。訛なまりのひどい方言で罵ののしることなので、初めは何を云われているのか分らずにいた頼朝も、やや面色を改めた。

「盛綱、どうしたものだ」

「はっ」

「何か、間違い事ではないか」

「はい」

「なぜ、黙っておるか、そちは」

「彼等の勘ちがいもありますなれど、すべてが間違いでもございませぬので」

「覚えがあるのか」

「少々あります。実は、市の伯樂に払う馬代を、忘れ果てておりましたため、ああ申すの
でござりましょう」

「馬の代と？」

「はい」

「どの馬の代？」

「面目もございませぬ。恐れ入りまする」

盛綱は、さし俯向うつむいて、ただ謝るばかりだった。

きのう市で、りんどう黒を求めた男は、仲間の者にケシかけられて、怖々こわこわ前へ進みながら、

「それだ。その馬だ」

と、頼朝の乗っているのを指さした。

「何、この馬の代じやと」

頼朝は、鞍を下りた。そして、伯耆たちの云いならべる文句を、黙って聞き取った。――聞いてみれば、敢えて、盛綱の罪というのでもないのに、何で彼が面目なげに打うち消しれているのか、その愚直さがおかしくなった。

「騒ぐな、馬の代を払うてつかわせばよかろう」

「払うてさえくれば文句はない」

「それに待っておれ」

「おお、待っていてよう」

大勢も、配所の鹿垣ししがきの根や、そこらの草むらに腰を下ろして、まだ疑わしげに、がやがや云っていた。

彼等が疑うのもあながち無理ではなかった。頼朝の貧しい生活くらしぶりは、平常ふだんここの柵かから覗のぞいて見ただけでも知れていた。流人の給与はおよそ穀物何十石、油何斗、布何反たんと決たつた額が渡される他ほか、何の収納もあるわけではないからだつた。

「はて。困つた事が」

盛綱を外に残して、頼朝は内へ入つたが、馬の代しろに相当するような財物は何もなかつた。池の禪尼ぜんにが在世中、年に一度ずつ都から送つてくれた衣裳やら経巻やら高価な数珠じゆずなどはある。折々に、乳母の比企ひきの局つほねから心づけては届けてくれた身まわりの調度や雑器などはある。――が、それらは皆、人手に渡すに忍びない恩人たちの真心の物でもあるし、また、そのすべてを渡しても、馬の価あたいには足りそうもなかつた。

「亀どの、そのの料紙と硯すずりとをこれへ」

縁に腰かけたまま、頼朝は一筆書いて、封の上に、北条どの御内おんうちとし、政子の君へと宛名あてなした。

亀の前は、ちらと、その名宛を見たような顔いろであつたが、頼朝から、

「定綱を呼べ」

と云われて、素直に、侍部屋のほうへ立つて行つた。

四

兄の定綱が、主人のりんどう黒に乗って、あわただしく、配所から出て行く様子に、外にいた三郎盛綱は、

「兄者人どこへ？」

と、声をかけた。

「北条どのまで」

定綱は鞭打って、急いで行つた。

政子に宛てた文を携たずさえて、彼はまもなく北条家の館を訪れていた。元より先は深窓しんそうの息女である。直じかに会えるわけもない。家臣の手を通じて返辞を待つていた。

「これをとのお伝えです」

家臣は政子の返し文と共に、唐綾の小袖一かさねと、唐鏡一面を定綱に渡した。

定綱は、それを持って、また急いで配所へ帰つて来た。

頼朝は、政子の文を読むと、すぐ細かに裂いてしまった。そして外にいる盛綱を呼びよ

せ、

「この二品を、馬の代に、市の雑人どもへ渡してやれ」

と、云つた。

「いや、その伯樂どもは、もう外におりません。兄者人が、北条殿へと、馬を打つて駈けたのを見て、さては役人でも連れて来る事かと思ひ、ちりぢりに逃げ去りました」

盛綱は、おかしがつて語つたが、頼朝は、それは不愼なことだ、下賤の者を虐げたと聞えては、頼朝が生涯の汚名おめいというものである。すぐ市へ行つて、この品を、彼等に与えたり、金に代えて、彼等に託して来いといいつけた。

盛綱が出て行くと、定綱も、

「ご用はすみましたか」

と侍部屋へ退がつて行つた。

思わぬ事件に半日は空しく過ぎた。外の炎天は、草いきれと、蟬の声ばかりに焦やけていた。

「今から行つては、話す間もなし……帰日も暮れよう。明日あすにでも行つてみるか」

頼朝は、廂ひさしごしに、夏の雲を見つめながら、胸のうちで呟つぶやいた。——この頃、箱根の別

当の弟、永実から聞いたはなしに依ると、ここから二里ほど山へ這入った奈古谷という小部落の寺に、高尾の文覚上人という者が、罪を得て都から流されて来ている。

——先も流人、こちらも流人、一度会つてみたら都の消息などもいろいろ知れましょう。そう云つた事が、頼朝の胸に、きようは訪ねようか、明日は行つてみようかと、かなり前から宿題になつていた。

「が。——それも、考えものかな？」

彼の緻密な性分は、考えすぎて迷いに落ちる傾きもあつた。一個の文覚を訪ねる事が将来にも今にもいいか悪いかとなると、深窓の息女へ文を通わすより、彼は、細心になるのだった。

「……？」

頼朝はふと、その眸を、廂ごしの空から自分の傍らへ振向けた。よよと、孤で泣いてゐる者があつたからである。

亀の前であつた。

何で、彼女が泣くか、頼朝にはわかりきつていた。政子へ使いをやつた事からに違いない。もっと彼女の胸に入つて云えば、なぜ、馬の代の調達を、自分へ相談してくれるなり、

自分の父良橋りょうはし 太郎入道へなり申し遣つてくれなかつたか。

それを恨みともしているであろう。また、いくら素直な性格でも、女である以上、嫉妬しつともあろう。それを動作やことばに出せない質たちだけに、泣くだけしか、表現を知らないのがある。頼朝の眼は、そう知りぬいておりながら、やや険けんをふくんで、邪慳じゃけんに云つた。

「何を泣いておるか。……男の胸、女子には汲くめまい。泣きたくば、あちらへ行つて泣け。……暑あついっ。うるさいっ」

五

泣くな、と叱られれば叱られるほど、亀の前は、泣きぬれていた。

頼朝は、舌打ちして、

「この暑さに、蟬が啼くだけでもたくさんだ。……聞きわけのない」と、起ち上がった。

亀の前は、その袂たもとの下へ、初めて小さい声で、咽むせびながら訴えた。

「しばらくの間、里方へ帰らせていただきます」

「……帰る？」

頼朝は、問い返した。わざと冷たい眼まなこを注ぐのであった。

「よいとも、しばらくと云わず、いつまでも、いたい所まなこにいるがよい」

わつと、泣き伏す声がうしろでした。彼は、振向きもせず、長い簀子縁すのこえんを、ずしずし

踏み渡っていた。

屋おくの西に、木につつまれた一棟ひとつむねがある。昼寝でもするつもりか、大股に、つとそこへ

這入ると、

「……おつ」

誰か、小机の前から、びつくりしたように振向いた。

都から流浪して来た藤原邦通くにみちという旅絵師だった。酒など飲むと、舞をよくするし、

剽ひょうげ氣たところがあつて、おもしろい男だということで、頼朝にひき留められ、この配所に、

もう半年の余も懸かかり人ゆうどになつてゐる暢のんき気な男だった。

「——誰方どなたかと思ひましたら、殿でございましたか。びつくり致しました」

「書いておるね」

頼朝は、亀の前に示した顔いろを、すぐ微笑に消して、邦通のうしろに立ち、彼の筆や

絵具のちらかつている机の上を覗きこんだ。

「こんな風に、時々、諸方を歩いて、写しを取って来ては、書いておりますので、なかなか果がゆきません」

邦通は、云い訳した。

そこに書きかけてあるのは、ただの画ではなく、伊豆半国の絵図であつた。山河から道路や宿駅や社寺の所在など、ずいぶん克明に、一部は出来かけている。

「暑いからなあ。歩くにはたいへんだらう。年内にできればよい」

「年内にはできません。雪が降ると、箱根その他の山々は、道も探れませんか、山のほうを今、先に書いております」

「うむ……」

縁の隅へ、昼顔の蔓が這い上がっていた。白い花が一つ、風にふるえている。頼朝は思い出したように、

「邦通。使いしてくれまいか」

「何処へ参りますか」

「亀の前が、里親の許へ帰りたいたいという。彼女を連れて、良橋太郎入道のやしきまで」

「え。お帰りになりますと？」

「ひとり帰すも酷い。送り届けてやってくれぬか」

「それはようござりますが、何かと、お身まわりにも、ご不自由ではございませんか」

「大した事はない」

「なんぞ、争いでも遊ばしましたか。——所詮、女子は女子です。ご気色を直して、晩にまた、一酌なされませ。邦通がまた、猿樂でもお目にかけてみましょう」

「猿樂は、今いたして来た。われながら愚かしき猿樂を」

云い捨てて持仏堂へ籠つてしまった。何かにつけ彼はここへ這入り込んだ。そこにいる間は、写経と読経のほか他念もない彼と成る。鬱勃たる二十九の胆と血しおとは、時折、そうして抹香の氷室へ入れて冷却する必要もあつた。

やがて。また日課の読経がそこから洩れた。亀の前は、暇を告げるべく、室の外に手をつかえたが、ただすすり泣きのみして、悄悄々と去つた。

草の穂に、夕風が立ち初めた。

蝸が啼きぬいている——

異僧

一

山の秋は早い。もう霜を見たような蔦つたや漆うるしの紅さだった。

「兄者人。帰ろう」

「まだ陽が高いのに」

「でも、飽あいた」

狩支度で、葦山にらやまの奥へはいった定綱、盛綱の兄弟だった。

負って来た矢も残り少ないのに、四、五羽の鳥を腰に獲ただけだった。

「何という日だ。せめて猪ししの子でも出て来ねば」

「まだ季節が早い」

ふたりは、疲れた脚を、草に投げた。——谷は暮れかけたが、箱根の頂には、まだ赤い陽が見える。

「弟」

「ウム？」

「きのうもそちは、殿のお文を持って、北条殿の奥向へ、お使いに行ったの」

「行った」

「よく参るのう、しげしげと」

「おいいつけだ」

盛綱は、ぶあいそな顔して云う。俺が行きたくて行くのではないと云いたそうである。すぐ下の山寺で、読経の声が聞える。その経文で思い出したように、

「……困ったものだ」

定綱は、ひとり呟いた。

「何が」

と盛綱は、兄の憂鬱ゆううつに眼を尖らす。その眼を、定綱はじっと見返して、

「そちは、そのように、暢気のんきもの者だから、文使いなどには、ちようどよいのだ。この定綱へ、行けと仰つしやった事はない」

「兄者人。ひがんでいるのか」

「ばかを申せ」

「わしは暢気者かなあ」

「憂うれいがないゆえ」

「憂うれいたつて仕方がない。——あれでいいのかしら？ とはわしも時々考えるが」

「そちでさえ、そう思うのか」

「思わぬ事はない」

「父上は、わしら兄弟を、とんだお方へご奉公につけてくれたものだ。畏おそれ多いが、時々、嘆息が出る」

「源家に運がなく、平家の運がいいのだ。ぜひもない」

「盛綱、わしらふたりの配所奉公も、はや十年の余だぞ。諦めきれるか。わしは諦めきれない。……一度、兄弟ふたりして、ご意見してみようではないか。あのお方の、本心をたたいてみようではないか」

「意見つて。何を」

「前さきには、伊東祐親いとうすけちか入道のむすめとあのような事件を起し、それには、さしもお懲こり遊ばしたろうと思つていると、亀の前をいつか配所へお入れあつた。——それもいい。とこ

ろがまたもやだ。何の科とがもない亀の前を、ちよつとのお怒りで、里方へ帰しておしまいに
なつた上、この夏頃から、しばらく絶えていた北条殿の息女へ、しきりと文使いの取り遣
り。……いったい何たるお行状だ」

「それを申し上げるのか」

「云うのが臣の道だろう」

「わしはいやだ」

「なぜ」

「女のことなど、云えぬ。……誰しものことだもの」

「愚かなやつ。本末ほんまつを聞き誤るな。何もそうしたお行蹟の端のみお責めするのではない。
たとえ、いかに女人には甘かろうと、ご腹中の大事さえお忘れなければよいが、それが、

わしの観るところでは」

「覚束おぼつかないというのか」

「案じられるのじゃ」

「それでもあるまい」

盛綱は、物事をすべて、兄よりも、大づかみに観る方らしく、

「難しいものだとよく人のいう、女に対して才がおありなくらいだから、他の事にも、十分、お考えがあるにちがいない。兄者人のように、そう自分で事を挙げるようなわけに行くものでない」

と、かえつて、兄の焦躁を笑った。

二

夕雲へ眸がゆく、兄弟とも黙りこくつたままである。ひとつ主に仕えても、ふたりの観方は同じではない。

「……分らぬ」

定綱はまだ云い足らぬように、やがて独り呟いた。

「怠惰なご性質かと思えば、朝夕のご規律、武道文学などには、人いちばいご精進もなさる。涙もない冷やかなお生れ性かと思えば、時には優しい、むしろ情痴なほど、溺れ遊ばす質かとも疑われる。——伊東入道の女八重姫に恋なされたかと思えば、亀の前に移り、北条殿の深窓へも文を通わされる。……何たる痴者。……傍目にすら、舌打ちが出る。

……けれどまた、そうした毎日にも、普門品の誦誦は欠かし給わず、日に百遍の念仏は怠らず、月々三島明神の参拝もお忘れなどあられた例はない」

「兄者人、行こうか」

つまらなそうに、盛綱は塵を払いながら、草から起ちかけた。——とたんに、彼は、何を見たか、携たすせている弓を立てて、がつきと、矢をつがえた。

定綱は、矢先を眺めながら、

「弟、何を射る？」

「……………」

盛綱は答えもしない。ひき絞しぼつた絃つるをぶつんと切つて放つた。——矢は、崖下の山寺を蔽おほつている木立の梢こずえを通つて、後に四、五葉ひらひら舞わせていた。

「——落ちた」

矢を負つた鳥影が、山寺の裏あたりへ垂直に降さがって行つた。盛綱が駈け降りたので、どうせ帰り道ではあるし、定綱もやや遅れて、追つて行つた。

下の山寺は観音大悲を本尊とするので観音院とも、奈古谷寺とも称よばれている古刹こせつだった。庫裡くりのわきに近頃建てたらしい一棟の僧舎がある。夕闇の底に、その新木の羽目板や

屋根の白さが目に立っていた。

獲物の鳥と矢を拾って、盛綱が去ろうとした時である。——読経の声がやんだ。——そしてぬツとそこの新木の縁ばたへ出て来た大男が、一喝かつした。

「誰だつ。待て」

盛綱は、振向いた。——坊主だな、と思つただけである。

「なんだ」

すると、大法師は、

「かき牆の内へ無断で這入りこんでおきながら、何だという挨拶があるかつ」

「このや此屋には、牆があつたのか。裏山から降りて来たので知らなんだ」

「なお、許せぬ。小冠者、ひとの庭へ矢を射込んで、詫びもせいで、立去る気か」

「悪かつた」

「——では済まん」

「然らば、どうせいと云うのか」

「両手をついて謝れ」

傲然ごうぜんと、縁の上からいう。

隆々たる筋肉をもち、下腹も肥えているので、わぎと反そっているくらいに見える。硬こわそうな無ぶ性しょう髻ひげと、僧にしては鬪争的な眼光を備えている。——そういう眼に出合つては、元来が、謝りたくても謝れない性分をもつ坂東骨ばんどうほねの盛綱は、

「これ以上は謝らぬ。手について謝らなかつたら如何する」

と、冷笑した。

法師は、毛の生えた鉄拳を、ぬつと突出して、

「小冠者、これが喰くらいたいののか」

と、云つた。

三

「何っ」

盛綱が、太刀へ手をかけて寄ると、大法師は、

「田舎漢いなかもつ。斬れるのか」

と、大口あいて笑つた。

田舎漢つと、彼が弟を罵つた言葉に、彼方で見ていた定綱は、思い当たったものがあるらしく、駈け寄つて、

「ひかえろ」

弟を叱つた。そして法師に向つて訊ねた。

「もしやご僧は、文覚殿ではありませんか」

「文覚はわしだが」

「おお、ではやはり」

「お汝等はどこの者か」

「失礼しました。——盛綱、お詫びせい。高尾の上しやうにん人でいらせられる」

弟へ、そう責めたが、盛綱は下げる頭は持たないといった顔だ。ただ文覚の面を、見まもつていた。

「わかつた」

文覚は急に白い歯を出した。盛綱と聞いたのですぐ察したのであろう。げらげら笑いながら云つた。

「さては、お汝等は、蛭ひるヶ小島こしまにいますかという、頼朝の召使だの」

「お察しの通りの者です。佐々木源三げんぞうが子、太郎定綱、こちらは三郎盛綱というがさつ者でござる」

「端近はしぢかだ、お上がりあれ」

文覚は、炉へ導いて、自分は先に、その前に坐っている。

「弟、どうする？」

小声で計ると盛綱は、上がれと云うのだから上がろうと云う。

「要いらざる強いがりをするのではないぞ」

定綱は弟を、小声でたしなめながら、室へ入った。

文覚は、炉しほへ柴しばを折りくべていた。赤い焰えんが下からその顔へ映さす。この上人すじょうの素性すじょうに就ついてはかねて種々いろいろ聞き及およんでいる事が多い。都でもよく話題の人となり、伊豆へ流されて来てからも、里の人々が何かにつけて噂するからである。

すでにこの人の発ほっしん心しんからして世の常の出家とはちがっている。俗姓を遠藤、名もりとを盛もりと遠おとい、北面の土から、院の武者所となったが、十八の年、袈裟けさという人妻を斬つて、慚愧ざんきの果て、髪かみを削けずつて僧門に入ったのがその動機だったという。

その後の修行ぶりもまた、人なみ超えていて、那智山の荒行の如きも、諸国の名山たいせ大

川に互^{わた}つて、幾度となく体験して来たらしい。人は呼んで、高尾の荒法師といっているが、当人はこの伊豆へ来てから、自分で自分を、

「善相人」

と称している。

善相だろうか。——自分でそういうところなど、人の好^よきはわかる。けれど、炉の中から映^さす赤い火影^{ほかげ}に見える顔は、むしろ怖ろしい。

ここへ流罪となつて来た原因なども、凄^{すさ}まじい事である。神護寺^{じんごじ}の廃毀^{はいき}を修復して、仏法の興隆を喚起し、あわせて父母の冥福^{めいふく}をも祈る、という勧進^{かんじん}をして、都の市民へ呼びかけていたが、一日^{あるひ}、法住寺の法殿に貴紳が多く集まると聞いて、そこへ行つて勧進の喜捨を求めたが、誰も相手にしてくる者が無い。

そこで文覚は、無断に庭へはいつて、大声で、勧進の文を読みだした。その折から、笙^し歌^{うた}に耳を傾けていた殿上殿下の人々は、驚いて彼を、殿庭の外へ、引ずり出そうとしたために、文覚は数名の者を殺傷したというのである。——頭は剃りこぼちても、まだ遠藤盛遠の血は、こんなふう^{しんえん}に深淵^{しんえん}の龍^{りゆう}のごとき本性を喪^{そう}失^{しつ}してないのである。だから彼の自称する「善相人」というのも、そのつもりで観ていないと、いつ牙^{きば}を生じ、焰の舌

を吐くやも知れない。

四

やがて、文覚は、

「伊豆にもはや長い月日となるが、すけどの佐殿には、つつがなくご成人かな」

と、ろ炉の前の佐々木兄弟を見くらべながら訊く。

盛綱は、いと無愛相に、坐っているだけのものなので、定綱はよけいにあるじ主へつか気を遣つて、
いちいちいんぎん慇懃に、

「されば、配所のお住居も、いつか十七年とおなり遊ばし、至つておすこ健やかに、ひととなり為人
もまた尋常でいらつしやいます」

「おいくつ幾歳になつたか」

「二十九歳におなりです」

「もう、三十か」

文覚は、何やらうめ唸いて、

「早いものだのう。然るにても、平家の衆は、その間の順調と、繁榮に狎れて、義朝の子の年を、数えてもおるまい。一人として、伊豆に佐殿のあることすら、今は杞憂きゆうに抱く者がなからう。源家の輩ともがらにとつては、寔まことに、勿怪もつけの幸さいわいともいうべきだ」

「……………」

「そうではないか」

「はい」

「お汝等こと、よい若人どもも、まさか草深い配所に、芋粟いあわを喰らうて、生涯流人の給仕をするために、佐殿に付いておるわけでもあるまいが」

「……………」

どう答えたらよいか。この僧のいうように、そう六波羅ろくはらとて無関心でない。田舎の世間として油断はできない。それにこの奇狂な僧には、専らもっぱ「ことばあれども徳行の添わざる僧」という定評がある。信じていい者か、信じられぬ者か、定綱には見きわめがつかないのであつた。

文覚は、世評を裏切らない——言葉多き僧であつた。——相手の顔いろなどは問うところではなく、云いたい事を云つていた。

「佐殿にも、言伝てて給え。聞けば朝夕、読誦のおつとめ正しく、法華経何巻とか、手
写の立願あるとか、噂にも承るが、つまらぬ仏道あそびは、京都への策か知らぬが、程
々になすつたらどうかと。——年も二十九と聞えてはもうそうしている場合でもあるまい」
独り説法のかたちである。そしていつか自身が頼朝であるかのような口吻や熱をその
中に交ぜこんでしまう。非常な熱力と頑固な信念は感じられるが、よく聞いていると、自
他の立場や、自他の感情を全く混同して、何でも、我観我説を唯一のものとし、人にも説
き、世にも強い、それが意のごとくにならないところからまた、よけい常軌を逸した言動
になったりするふうの見える文覚であつた。

「——いや、日常の行いなどは、いずれでもいいが、佐殿も、この片田舎に、十七年とな
つては、眼界までが、伊豆半国にとどまり世を大処から広く見る眼を、お忘れありはしま
いかな。憂えられる。嘆かれる。——まずよくよく通じておかねばならぬのは都の事情、
ひいて諸国の人心だが、それらの事は誰より聞き、いかなる心懸けで備えておらるるか」
「種々と、有難うございます。立帰りましたれば、よく申し伝えます。……日も暮れま
したゆえ、ではこれにてお暇を」

定綱は、程よく、そう云つて立ちかけたが、盛綱は兄に促されても、すぐ起とうとはし

なかつた。

初めからの眼をそのまま、文覚の顔ばかり不遠慮にながめていた。そして彼の多弁にあられる皮膚の上の熱情を、むしろ冷やかに見て幾分かの苦笑を唇の端に持っていた。

五

何か議論でも仕かけたような弟の眼ざしである。定綱はなおさらに長座を惧れたらしく、文覚へはまたの日の訪問を約して、無理に盛綱を促してそこを出た。

「その柴折しおりを押すと、庫裡くりの横へ出る。山門を通つて降くだられよ」

文覚が後ろから教えていた。

奈古谷寺の境内をぬけて、兄弟は帰りを急いだ。宵空は、星雲にけむっている。野路まで出ると、闇のかぎり、虫の音だった。

「お案じなされて在あらう。思わず晩おそうなつてしまった」

定綱は、用事の多い夕方の怠りを、気にかけている風だったが、盛綱は、

「兄者人、兄者人」

と、呼びかけて、

「どうせもう宵のご用はすんだ頃。夜道に日は暮れぬ。ゆっくり参りましょう」と、落着きこんで云う。

云われてみればそうでもある。配所まで道はまだ一里の余もあつた。定綱もあきらめて、「——しかし、殿へのおみやげばなしはあるな。殿にも、一度、文覚を訪ねてみようかなどと仰っしゃっておられたから」

「兄者人は、また参るといふような事を、帰りがけに云われて来たが、殿をご案内するつもりか」

「お会わせしてもよい上しやうにん人とわしは思う。近頃での傑僧ではあるまいか」

「盛綱は、感服せぬ」

「そちは初めから感情である上人を視ておるからだ」

「それもある」

盛綱は、率直に肯定して、

「けれど、その嫌いを除いても、やはり嫌いだ。あれがわれわれ同様に、太刀を佩はいて、武人なら武人と、身を明らかにしているならよいが、僧侶のくせに、僧らしくもない」

「そこがいいのだ。僧らしくしている今の僧に、よい上人があるかしら」

「ある」

盛綱は、ことばを切つて、

「都の黒谷くろだにには、法然ほうねん上人などがいます。近頃、法然房の念仏の声は、しんしんと田

舎にまで聞えてきた」

「念仏、易行道いぎようどう、他力本願、そんな説法にそちは感心しておるのか。そちらしくもない」

「いや、わし達の行く道とは、まるで西と東ほどちがうが、広い衆生しゆじやうにとって、世の

一方に、ああいう人が出てくれるのは、何か、他人事ひとことながら有難い。——文覚のごときは、

なくもがなだ。われわれ武士でさえ、好んで修羅しゆらを求めているのじやない。血なまぐさい

世は、避けられるだけ避けたい。そこを超こえなければ、次の世に出られない時だけ乗り超

えるのが武士の修羅道だ。それを、あの僧の如きは、持つて生れた痼疾こしつのように、時を選

ばず、所をきらわず、猛々たけだけしいことのみ吠えておる。——覇氣はきがありすぎて好きになれ

ぬ」

「——が、きょうの言葉は、源氏びいきの余りに、ああ気を吐かれたものだろう」

「わし達、武人にとつては、あんな鼻屑ひいきは、かえつて有難迷惑、また、足手纏あしでまといという

ものだ。殿をお会わせするなどという事は、盛綱は、止めたがよいと存ずる。——口に出して、平家を罵るののしような狂僧の所へ、佐殿がひそかに行つたなどと聞えては、殿のお為にもよろしくない」

虫の音の闇に灯が見えた。いつか蛭ヶ小島へ帰り着いていた。——と、配所の門に佇たたずんでいる被衣かつぎの人影が二つ見えた。兄弟が足を竦すくめて見まもっていると、やがて、佐殿の室へやのあたりから、塗りの大笠おもとに面おもてをかくした姫が忍びやかに出て来て、外に待っている二人の侍女らしい影に守られて草ぶかい夜露の道へ消えて行つた。

「……あ。今のお方は？」

定綱は、弟の顔を見て、息をのんだ。

北条殿の女むすめとは、いつも文使ぶんづかいにゆく盛綱にはすぐ分つていたが、何事でもないように、「誰だつていいじゃありませんか——」

笑いながら彼は、兄の先に立つて、配所の門へ入るなり、留守居の家人たちと、もう何か大声で、きょうの狩の獲物のない事を話していた。

政子

初冬である。

田の刈入れも終っている。きょうのように、鮮やかに富士の見える日ほど、風ももう冴々と肌ざむい。

「ことしの田の刈入れは、どんなだったな。例年よりは、よい方か」

北条時政は、馬上から振向いて、嫡男の宗時、義時のふたりを顧みた。

「いや、今年も狩野川の出水があつたり、ひどい暴風雨もありましたので、上作とはゆきませんが、まあ、百姓の困窮するほどでもありません」

宗時の答えだった。

父の時政はうなずいて視野へ面を向けている。その間にも、父子三名に従う人馬の列から、乾いた道の埃が、うすく空へ舞っていた。

時政は五十ぢかい男ざかりで、骨ぐみの頑健なことは、息子たちより勝っていた。眉毛

が濃すぎて、下賤げせんにさえ見えるが、眼のくぼの眸は、一くせあるものを持つている。——それと何といつても屢 《しばしば》、京都へ出て、中央の事情や知識と接しているの、この田舎にその風貌を見れば、どこか垢あかぬ抜けもしているし、武骨な顔にも知性の働きがある。

「もう間近です。お館の森、狩野川の水、宿場の屋根。はやあれに見えて来ました」
宗時は、指さした。

さぞ、父の眼も、それが懐かしかりうと思われたからである。

「むむ。ウむ」

時政は、うなづく。

見えるかぎりの山河は自分の領地だった。遠く、平貞盛からの末裔まつえいとして、伊東の伊東祐親と、北条の北条家とで、その勢力は二分していると云つてよい。子はあり、郎党は強し、一族の不和もまずないし、田の刈入れも年々無事だし、今のところ、京都の清盛入道と、六波羅への覚えさえよければ、家門の安泰は保証されている。——自分からより以上を望んで、他の豪族との境をさえ侵おかさない限りは、彼の不惑ふわくをこえた将来は悠悠と、彼の思ふとおりに送れよう。

彼にも、老後の計はある。そろそろそれに就いても、考えていた。その一端が、長女の政子の縁談となつて、思いがけなく、こんどの旅の途中で、下話したばなしも纏まとまつていた。

彼は、先頃まで京都に在つて、大番おおばんを勤めていた。その任期も終つたので、今は久しぶりに国許くにもとへ歸つて来たところだった。息子たちは、その父を出迎えるために、早朝から三島まで赴おもむき、健やかに歸つて来た父の姿を囲んで、家人や荷駄の行列に交じつて、いそいそ引つ返して来たのである。

「政子は、変りないか」

他のむすめ達もいるのに、時政の口から、特にその名だけが出たのは、旅先で纏まとまつた縁組のはなしが、案じるともなく、それ以来、常に胸にあるからだった。

「はい、元氣です」

宗時がいうと、そのうしろの黒駒の上から次男の義時が、

「元氣すぎますよ。父上がいないので、毎日、奥の局つぼねの賑にぎやかな事といつたらありません。それでなくても、陽気なほうですからね」

と、つけ加えた。

——そうか、そうか。時政はそれで安心なのである。領きながら笑っている。幾歳いくつにな

つても、子どもは皆、子どもに見えるのだった。

けれど、政子にだけは、その観方が少しこんどの下向の途中から変っていた。旅行中に一緒になった山木判官兼隆やまきはんがんかねたかの妻に、彼女をやろうと約束しているからである。

父親がむすめに対して、それを一個の女として見直すのは、誰しも、嫁入りばなしの時からであった。

二

旅装を解いたその日は、わけもなく暮れてしまい、それからの数日も、一族の来訪やら、留守居の用務を訊ねたりなどして、時政はまだ家庭の父らしく寛ぐ暇くつろいとまもなかった。

——が、ようやく、その小閑しょうかんを得た日であった。彼は、息女たちの局つぼねへ来て、京都の土産物の数々を披ひらき、息女たちの喜びをながめて、彼も他愛ない半日をすごしていた。

（北条殿はよいお子持で——）

とよく人にも云わるとおり、時政はまだ五十もこえないのに、妙齡としごろのむすめ達が三人もあつた。

十六、十八の姉妹きょうだいと、それに先妻の子でちょうど二十歳になる長女とがある。そのいちばん姉が政子だった。

容貌きりようは、親の慾目で見ても三人とも、そう人並み優れたほどでもない。ただ政子だけは、幾ぶん亡き先妻の容色を偲しのばせるものがあつた。

貌かおの異なるように、政子は、二人の妹とは、気性も甚だちがっていた。自分だけ母のちがうという事を常に心においているせいもあるうが、よく身近の侍女こしもとたちを操縦そうじゆうし、今の母の機げんを損なわず、妹たちからも、姉君として尊敬をうけている。

しかし、父の時政は、賢さかしくて美しいこの政子を、最も重荷に感じていた。政子の氣もちを汲くめば、嫁ぐなら都の男へと念じているにちがいないと、その知性や日常の好みに照らしても、親の眼から察するに難くないからであつた。

恥ちずかしくない家からで都会の子弟とあつては、伊豆の片田舎からわざわざ妻を娶めとろうなどという聳むしごみ君は、まずないと云つてもよい。豆相ずそうの近国でこそ、北条殿の息女といえば、どんな深窓の名花かと、見ぬすがたを、垣間見かいまみにでもと、あこがれる若殿輩わかとのぼらもあるが、佳麗な容色は、巷ちまたにもこぼれているような京都の公達きんたちなどからいわせれば、

(瓜の花や、豆の花では、どんなに綺麗といつても、土臭かろう)

と、目にもくれる気風ではないのである。殊に、近頃のように爛熟した中央の文化と小役人までが皆、平家の係累をひく者に満たされて、華美に過ぎてむしろ繊細なものを病的に愛する官能には、北条家のむすめ達など、一人としてそれらの都人の好みに適うものはいない。

——と云うて、政子の性情や好みは、伊豆、相模、武蔵あたりの近国の土豪の息子では、嫁ぐ心もないらしいのであった。彼女は、自分の聡明と美貌とを、誰よりも大事に持っていた。また、北条家のむすめであるという名門の誇りも、父の時政以上、ひそかに高く持っているふうもある。

ふた口めには、

「坂東武士ぞ」

と、そのみを剛毅に持って、知性に乏しく、武骨と精悍ばかりで、まるで土から生え出たようなのが多い土豪の間には、彼女の心をひくような殿輩は、そういう点でも、見あたらなかつた。

二十歳といつては、もう女の春は過ぎかけるように、今の世間では怪しみさえするものを、なお、彼女が嫁がずにいるのは、そんな理由からであった。

父の時政が、もつと負担にしているのは、余り容貌きりようのよくない下の妹たちだったが、それらを他家へ嫁入らせるにも、まず一番上の政子を嫁がせるのが、もう急を要するほどな先決問題であつた。

「目代もくだいの山木判官様から、ご書面のお使いでございませうが」

折ふし小侍が、時政の手許へ、書面を齎もたらして来たが、時政は、それを機しおに、

「何。山木殿から。——彼方あちらへ持つてゆけ。いずれご返辞が要ることじやろう」

あわてて息女むすめたちの局つぼねを去つて、自分の居室へ移つた。

三

時政から返書をうけた山木判官の使いが、俗にこの辺の土民が「御所堀内ごしよほりうち」と称してやかたいる館を出て、そのの堀橋を越えて帰つて行つた頃である。——時政は妻の牧まきの方かたへ、

「先からこのように挙式を急いできたが、山木兼隆なら政子の躰むことしても恥かしくはあるまい。もう年明ければ、彼女あれも二十一。自分でもそろそろ焦心あせつてもおろうから、こんどの縁談はなしには、否やはあるまいと思う。……ただ、婚儀の準備だが」

と今、山木兼隆から来た手紙を示し、にわかには、その日取やらまた、妻の意見など、同時に求めていた。

後添のちぞいの牧の方は、当然、義理の仲の政子へ、わが子以上の親心をもって臨のぞもうと努めていた。

「目代の山木様なら、よろしいご縁組とぞんじます。もうそんなにまで、お進みになっているお縁談はなしなのでございますか」

「京都から帰る途中、山木殿と一夜、旅舎で落合った折、何かのはなしから、政子のうわさが出て、山木判官には、前々から密ひそかに政子を妻にと望んでいたという述懐だ。——然らば、妻につかわしてもよいと、即座に、取極めたはなしなのだ」

「……まあ。でははつきりと、お約束なされましたので」

「なにをいう。帰るとすぐ、そちの耳へも入れてある筈」

「けれどもそんな急のおはなしとは、思いも寄りませんでしたから」

「では、どんな事と、思っていたのか」

「折を見て、そつと、政子の胸を聞いておけというような……仰せつけかと存じておりました」

「好きか、嫌いかなどと、彼女の胸を、いちいち訊いていたひには、そのまに、妙齡も過ぎてしまおう。そちは義理の仲とて無理もないが、わしが少し甘えさせ過ぎた嫌いがあ
る。こんどは訊くにも及ばん。父の眼で取極めた聾だと、云い渡せ」

「でも、女子の一生は」

「だから急ぐのだ」

「でも……。人なみ優れて、先の先まで、考えている娘でございますから、無下に好まぬ先へ嫁がせても」

「嫁げば、後から好きになるものだ。——どこへ輿入れしようと、親の許にいななわけにはゆかぬ」

「あなた様から、仰つしやっていただきとうぞんじます。わたくしから申し告げても、もしこんどの縁談も気がすまず、種々と、泣いてなど、処女心を申されると、女は女の気もちに組して強いて嫁げとも云われなくなります」

「なんだ……？」

時政は、すこし怪訝つて、

「そういうお前からして、この縁組には気のすすまぬ容子ではないか」

「そんな事はございません」

「はての？ ……。何か、わしの留守中に、政子の行状に、変ったふしでもあるのではな
いか」

「いいえ」

「では、なぜ不服か」

「決して、不服などと」

「真つ先に、そちなどが、飲んでよいはずなのに……その当惑そうな顔いろは何事だ。…
…いや、何か、わしに秘かくしている事があるな」

「滅めつ相そうもない」

「いいや、そう見える。義理の子ゆえと庇かばいだてなどする事は、かえつて彼女あれの為にもよ
くないぞ。良人のわしへも、それが貞節などと考えたら大間違いだ。……よしよし、お前
にはもう訊ねん。政子の兄を呼べ。宗時をこれへ呼べ」

時政の声は、勢い大きくなつて来た。やがて、総領の宗時は、呼ばれて、父の前に坐つ
た。——そして父の難しい顔いろと、義母ははの容子を見くらへながら、

「何か、ご用ですか」

と、軽く訊ねた。

四

「そちに訊くが——」

「はい」

「わしの留守中に、政子に何ぞ変ったことはなかつたか」

「変った事と云いますと……?」

「たとえばだな」

時政は、父として、言い難そうに、ちよつと口を歪めた。

「——妙齡としごろだからな、もはや彼女あれも」

「あ。妹の行状などで」

「そうだ」

「——義母ははうえ上、その事に就いて、何かあなた様からも、おはなし申し上げたのですか」

宗時は、あつさり云った。

「……い、いいえ」

牧の方は、困った容子で、微かすかに顔を振った。時政は、妻の立場に、同情もしていたし、彼女がいるのは、うるさく感じたので、

「お前はいないがよい。しばらくあちらへ退がっておれ」と、退けた。

総領と二人きりになった。時政はよけい厳格な顔を示して宗時に問とい糺ただした。

「実はな……」

「は」

「今も牧と相談していたところだが、山木判官兼隆から、このたびの下向中、政子を妻にと望まれてな——約束を交わしたわけだが」

「そんなおはなしですな」

「聞いたか」

「義母上ははうえからちよつと」

「それ、その通り、十分わきまに弁えおりながら、よくも聞かぬなどと、曖あいまい昧な答えのみしておる」

「ご無理はありません。義母上にも、政子へは、人知れぬお氣遣いきづかがございますから」

「そちらなら、何なりと、答えられよう。——どうだな、わしの取極めた縁組は」

「ちと、早まりましたな」

「早まったとは」

「妹は、嫌だと申すにちがいありません。——父上のお眼には、どう見えるか知れませんが、そういう点は、政子はふつうの女子おなごと変っているほうです。はつきり云います。私達へは」

「ふうむ」

「山木の目代兼隆などは、妹の気に添わぬ男と極まっております。酒くせの悪いのは通り者です。中央へは受けがよいそうですが、目代を鼻にかけて、偉えらぶる構え方は、われわれでも、鼻もちがなりません。郷民の評判とても、勿論よくないし」

「そう人間の瑕きずばかり数え立てたら、誰にせよ、限きりが無い」

「父上とは、ご気性が合います。才人には才人ですから」

「では、そちもこの縁組には、同意でないのか」

「私より父上よりも、肝腎かんじんな当人が、嫁とつぐ心になりますまい」

「どうして政子の胸を、そちはそのように云い断れるのか」

「では——義母上からも云い難いでしょうし、政子に云わせるのも酷い気がしますから、私から、何もかも申し上げて、同時に、私の意見も聞いていただきましょう。——実はその」

と、宗時が、改まると、時政の顔いろは、蔽いようもない困惑にもう曇っていた。——山木判官に与えた約束を、今さら反故にしようもないからである。

「待て待て、宗時」

あわてて彼は顔をふった。われながら頑迷には思われたが、時政は、嚴父の威を、振りかざさずにいられなかった。

「断っておくが、このたびの縁組は、いつものはなしとは違う。時政が眼鏡をもつて、山木判官兼隆ならば、多少、瑕があるが、家門の為にも、また、政子の行末にもよからうと、婚儀の日まで年内にと、すでに内々の支度も運んでいる事なのだ。——今さら、破談とはわしとして云えぬ。——それらの事も弁えて物を申せよ。政子の吾ままや、お前たちの若い考えを、余り云い張られては困るのだ。よいか、わかったか」

五

語ろうとする前に、父にそう釘を打たれてしまうと、宗時は、何も云えなくなってしまうた。

若い情熱と純潔をもつて、ひそかに誇っている彼は、父の時政が、何をするにも——わが娘の結婚を考えるにさえ——すぐ閥族の勢力扶植へ持つて行ったり、政策の具にしたがるのが、不快でならなかった。そしてその反動は、いつも妹への同情となった。

さつき、山木判官の人物を、俗才に長けた官僚臭の男——といったのは、多少、父へもあてつけて云つたのであるが、時政は、策の多い自己の性格が、自己の人格を少しでも下劣にしているなどとは、毛頭思つてもいないふうであつた。

むしろ、そういう風に、心をくだいでいることが、親の愛であるとしているかの如くに見えた。

「宗時。……口を噤んだまま、何を、気に入らぬ顔しておるか」

「でも、今のおことばは、もはや私が、何を申す余地もありませんから」

「然らば、わしが取結んだ縁談を、そちまでも、不承知というか」

「私が嫁ぐわけではありませんから、私に異存はあろう筈もございません。けれど、政子は、おうけ致しますまい」

「どうして？」

「政子には、政子が秘かに想うている人がありますゆえ——」

宗時は、自分の一言に、父の顔いろがさつと変つたのを見たが、妹の身になって遣るつもりで、云つて退けた。

「——それは、今でこそ、佗しく暮しておられますが、さすがに私たちが見ても、どこか違っている源家の嫡流の佐殿です。——あの頼朝殿へ、妹は、嫁ぎたがっております」

「……………」

ややあつてから、呻くように、時政は息子の宗時へ、

「……………ほんとか？」

と、乾からびた声を密めた。

宗時が、臆面なく、近ごろ頼朝と妹のあいだに、眼につくほど恋文のやり取りや、忍んで会う夜もあるらしいなどと語ると、時政の面色は、何とも名状しようのない昏惑と憤

りに、つつまれた。

宗時は、父の怒りが、そのまま政子や義母ははにかかるとを懼おそれて、後から機嫌をとった。

「——山木殿のほうは、何とか、この宗時から、体ていよく断りましょう。そのほうはご安心下さい。そして、どうか政子の望みをいれて、佐殿へ彼女あねをお遣つかわしくくださるように兄の私からも、この通りおねがいたしまする」

両手をつかえて、宗時が、妹に代つて云うと、とたんに、時政は、ぬつくと立って、

「な、なにを、そちまでが、痴たわけたことを云うかつ。——佐殿とは、そも何者か、弁えてものを申せ。六波羅の罪人、配所の流人、そんなものに、この時政のむすめが嫁やれるか。

——しかも時政は、太政入道殿より、それが監視をさえ仰せつかっているものを……わがむすめ息女を、その流人の妻などに……ば、ばかなつ、どう頭が狂おうが、そんなばかな事ができるものか、できぬものか、そちにも知れておろうが」

唾つばをとばしながら、彼は宗時の頭を睨ねめつけて云った。しかし怒号どごうしただけでは、なお、当惑とは除りのけられなかった。時政は、庭へ出て行った。そして黙々と山林を逍遙しょうようしていたが、やがて、むすめ達の局つぼねへ、小舎人ことねりを走らせて、

「大殿がお召しです。政子様お一方で、あちらまで、お運び下さいますように」

と、迎えによこした。

六

政子は、鏡に向つて、髪を梳くしつけずているところだった。

呼びに来た父の使いへ、

「はい」

と、頷うなずいてからも、なお、落着きこんで、鏡に向つていた。

ふたりの妹は、帳とぼりを隔へだてて、ひそやかに寄り合つていた。ひとりには文机に向い、またひとりには、先頃父が都から土産みやげにと齎もたらして来た絵巻物の絵詞えことばを、頬ほづえついで読み耽ふけつて
いるのだった。

——が、今、小舎人が来て、政子へ告げて行つた声を聞くと、

「……お姉君だけ？」

「そう。……そう聞えたが」

「お叱りではないかしら」

「どうであろう」

急に、不安に襲われて、末の妹は、そつと、帳のすきまから、政子の容子を、のぞき見した。

「お姉君は、どんな顔していらつしやるの……。恐ろしそう？」

黙って、末の妹は、首を振った。そして、姉の耳へ、小さな声で云った。

「平気。——ちつとも」

そのまに、政子は庭へ降りた様子だった。侍女を退けてただひとり、庭園の奥へ笑つてゆく姿が見えた。

母違いの妹たちも、政子とは決して不和ではなかった。

さつき、父の部屋で、総領の宗時から、留守中の政子の行いを聞いて、父が激怒していたことは、もうここへも分っていた。政子も知っていたし、ふたりの妹も知っていた。

「私たちには、お優しい父君が、あのようにお怒りなされたことはない。——それに、わざわざお山やまの方から姉君だけ呼びにおよこしなされた。何か、きついご折せつ檻かんでもなさるおつもりではないかしら？」

妹たちは、廊を走つて、母のすがたをさがし歩いた。

牧まきの方は、総領の宗時と、一室の内に、対むかい合つて何か憂いに沈んでいた。もちろん政子の問題に就いてである事はすぐ分つた。

「姉君が、お山のほうへ、おひとり召されて行きましたが、誰も行ってあげないでいいでしょうか」

妹たちが、そこへ告げると、宗時は起つて、

「父上も、お山か」

「ええ、長いこと、庭の彼方あち、此方こちを、おひとりで歩いていらつしやいましたが、そのうちに、お山の大日堂の縁に、お休みになつてゐるふうでした」

「そうか。わしが行つてみる。義母ははうえ上も、其女そなたたちも案じないがよい」

すぐ宗時も庭へ出たが、牧の方はそのうしろへ、くれぐれも、短気な言を吐かないように、また、父の時政を、あれ以上、怒らせないようにと、頼むばかりな口くちぶり吻で云つた。

「お案じなさいますな。——けれどどうしても、一度は知れずにいない事です。父上のお辛い立場も分りますが、所詮しよせん、こうなつた上は、何もかもお耳へ知れたほうが後の為にもよいでしょう。——すべては、この宗時の科とがですから、宗時が責任を負うつもりです」

彼もやや昂たかぶつてゐる。そう云うと大股に庭を歩いて行つた。後ろから見てもその耳は

紅かつた。

彼にすれば、これは妹の恋愛だけの問題でもないし、家庭の一争議でもなかったのである。宗時の胸には、もつと大きな時代の波が打っていた。それへ乗り出そうとする壮図の纜ともづなが、まだ岸から解かれずに、ただ張りつめていたのであった。

七

大日堂は、御所之内の丘にあつた。時政の父時家の代に、守山の願成がんじょう成就じゆう院いんから、この園内へ移したものである。

何か、重大な考え事でもあると時政はよくここへ黙想に来る。ここに立てば、父祖の遺業の地は一望に見られる。また、大日の像を拝すれば、物事に当って、すぐ赫怒かくどし易い自分の短所が、

——そうではないぞ。

と、宥なだめられる心地がする。

「お父様。お召でございましたか」

そこへ登つて来た政子が、自分の前にあるのも知らずに、彼は、御堂のぬれ縁に腰かけたまま、拱こまぬいて俯向こまぬいていた。

「……才オ」

と、時政は、充血した顔をあげた。素直なむすめのやや恟々おどおどしている眸を見ると、彼は可憐いじらししくもなつて、

「政子か。ここへかけるがよい。……何、べつにこれまで呼ぶ程の用でもないが、誰もおらぬ所のほうが、其女そなたもよかろうと思うてな」

「何か、わたくしへ、お訊たずね事でも……?」

「嫁入りのことだが」

「……はい」

政子は父の下もとへ、そつと腰かけて、足もとの散り紅葉ちもみじを見ていた。

「山木兼隆を知つておろうが。目代もくだいの山木判官を」

「ぞんじ上げておりまする」

「ひとかどの男だ。六波羅のお覚えも至極よい。従つて将来にも富む人物と見こんで、其女をつかわす事にした。異存はなからうな」

「……………」

「なかりうな」

時政の眼には、親の威いと、愛情とが、矛盾したまま、ぎらぎらしていた。むりやりにでも、自分の意志に靡なびかせてしまおうとする男親の姿が、時経つほど、逞たくましく見えて来た。

「返辞は…………どうじゃな…………。父の眼をもつて選ぶむすめの良人、末悪しかれと祈るわけではない。…………嫌ではあるまいな」

「……………」

「異存があるか」

「…………ありません」

吐息と共に、政子は云った。声は微かすかであった。蒼白に近い面おもてをあげて見せた。時政は反対に、その瞬間、慈父の顔を他愛なくくずして、

「お。嫁ゆくか」

と、声を弾はずませ、

「それで、わしも、ほっといたした。嫁とついでくれるか」

「仰せつけならば」

「よう、得心してくれた。そなたも妙齡としごろ。いや後の二妹ふたりを嫁入らせるにも、先ず、そなたから先に定きまらねばなるまいし」

「その事も、悩んでおりました。……については、おねがいがございます」

「むむ。何か」

時政は、膝をすすめた。

案ずるより生むが易いといった体ていで、先刻さつきからの憂うれいが深刻だっただけに、彼は相そうぎよ形うをくずして、子に甘い半面をむき出しに見せていた。

「嫁ぐと、心をきめましたからには、少しも早く嫁ぎとうございます。……それと、わたくしは、きようまでも、なおお父上様にご苦勞ばかりかけて来たように、生れつきの吾儘者ですから、嫁いでも、この吾儘だけは、おゆるし下さいますかどうかを、もう一度、山木判官様へ、念を押して、お訊ねおき下さいますように」

すると、時政は、自分が先の躰たでもあるように、手を振って云い断きった。

「いや、その事は、親として、わしからも幾度も云った。——事実そなたは、吾儘でない方ではないからな。——が山木判官が云うには、そこがむしろ、ご息女のよい所、大まかな明あるいご性質と、わし以上、そなたの短所も承知の上のはなしだ。なお、念はおしてお

くが、気に懸くるには及ばぬ。……ははははは、嫁君とても、生ける観世音ではないからな」

八

時政は、腰を上げた。

さがしても苦勞らしいものはない幸福な父親という顔になって、

「政子。もどろう」

と、歩み出した。

政子は、まだ御堂の縁にあつた。俯向いていたが、

「お後から参りまする」

「風邪ひくな。陽が陰ると、寒うなるぞ」

「はい」

「来ぬか」

「お詣りしてもどります」

時政は、にこと領き、館の屋根と広い庭を下に見ながら小道を降りて行つた。

父のすがたが、樹々の陰へ沈んでゆくと、待ちもうけていたかの如く、御堂の横から総領の宗時が、

「妹つ」

と、駈け寄るなり、政子の手くびを、痛むばかりつかんで云つた。

「お許もとは、お許は一体どうするつもりだ。山木判官へ嫁ぐ気か。ええ、政子つ、おいつ……」

「お静かになさいませ」

政子は、昂たかぶる兄をたしなめて、

「お父上の立場もあります。親のいいつけでもあります。義母はや異母妹いもたちの気持もあります。……こんどは嫁ゆくときめました」

と、涙も見せずに云う。

宗時は、この妹が、こんな問題にぶつかりながら、自分に計りもせず、父へあんな承諾を与えたのが、憤懣ふんまんに堪えなかつた。案外なほど、政子が冷静なのを見、なおさら、その澄んだ顔いろが、妹ながら、憎かつた。

「ふうム、ではお許は、すけどの あざむ佐殿を欺いたのだな。遊女のように恋を弄もてあそんで来たのか。それで心が傷いたまぬのか」

「ちと、お口が過ぎましよう。いかにお兄上なればとて」

「なにつ」

「政子をそんな女子おなごと思し召してか。……口惜しゆうございます」

「口惜しいのは、この兄だ。お許は、父の立場と云つたが、宗時の立場は何となるか。——いや、自分の妹だ、わしなど愚痴ぐちすら云えまい。だが、そなたと佐殿との仲を庇かばつて、行末の大事まで、秘かに語り合うて来た仲間の殿とのぼら輩はどうなるか」

「政子も考えておりまする」

「どう？ ……どう考えてか」

「落着いてください」

「ばか、落着いている」

「そんな癩かんばしつたお声に、わたくしの考えている事は申されません」

「当りまえ。これが癩かんばしらずにいられるか。自分の妹とはいえ、次第に依つては、お許を首にしても、誓いを交かわした殿輩に対して、詫わびをする覚悟であるのだ。すこしは、声

も尖ろう、眼いろも猛々しゆうなるは、むしろ兄の愛情というものだ」

「……ホ、ホ、ホ」

政子は、笑つて、正直な兄を慙れむように見た。

「お兄様。あなた方の遊ばしているお企てを見てみると、お心だけは雄々しくても、為さる事は、稚い者の火悪戯のようです。すぐにそう事を壊すことばかり勇ましがっていらつしやる」

「賢げなこと申すな」

「いいえ、貴方ばかりではありません。ご一味の殿輩は、みな若人なので、若気は常といいながら、それにしても余りに」

「おのれ、ではこの兄や、友達の殿輩は、みな乳くさいと云うのか」

「そう思います」

「云ったな！」

「その通り、ご短気ではありませんか。それでは、政子がおはなししても、むだ事でしょう。——もう一夜、わたくしを、佐殿に会わせて下さい。あのお方に、何もかも、お告げしておきます。お兄上様始め、他のご一味は、佐殿のお口からお聞き下さいませ。それ

までは、たとえご兄きょうだい妹いでも、私の心の底は、誰にも云いませぬ。誰にも明かさませぬ」

わかむれ
若い群

一

いちめんすすき芒ほの穂であった。函南かんなんの裾野すそのは弛ゆるい傾斜を曳ひいて、その果ての遠い町の屋根に、冬日は春うすずきかけていた。

「誰か通るが……?」

ひとりが、芒の中から首をのぼして見まわした。

「樵夫きこりだ」

首が沈む。

銀いろの戦そよぎが渡つてゆく。——風の後を、老おいうずら鶉らが啼ないていた。

「——で。佐殿すけどのには、何とお云いなされたか」

仁田にったの住人四郎忠常、南条の小次郎、天野遠景とおかげ、佐奈田さなだの余一といったような近郷の若人輩わこうどばらであつた。およそ十四、五名もいるだろうか、芒よりも低く、車座になつて、声を密ひそめ合つているのだつた。

「盛長、おぬしから話してくれい。——宗時からは、妹の事、云い難いところもあろうで」
土肥次郎実平とひ さねひらが云う。

その側には、北条の総領宗時。そして、配所の家人で、夫婦して常に頼朝の世話をみている安達藤九郎盛長とが並んでいた。

他の若人輩とは、やや離れて、対むかい合あひの形になつてである。

形の上では、そう三名が、この青年達の会合では、首謀者といつた格に見えた。

——北条殿のむすめと、山木判官とが、近いうちに結婚するといふ噂も、隠れないものとなつて、冬も十一月の半ばといふ頃だつた。

かねて、政子の希望としてもう一度、嫁ぐ前に頼朝に会いたい。そして自分の本心も併せて佐殿まで告げておく。——という事が、ゆうべ実行されたので、今日は、その佐殿が、(彼女と会つて、彼女から何を打明けられたか)

を聞こうとて、こうして集まった腹心の友だちどもであった。

友だちといつても、豆相ずそうの郷土を共にするこの若い友の群むれは、平家の公達きんだちなどのやつている恋の戯たわむれだの歌舞宴遊かぶえんゆうだのという生温なまぬるい青春を倣ならおうとはしなかった。もつと逞たくましい慾望を、その強健な体に持つて、半島以外の天地へ伸び上がろうとしているのだった。

いや、もつと率直に云えば、平家を追つて、自身、平家に代ろうとしているのである。

しかし、それに代つて、それ以上な時代を創り上げてみるだけの抱負や理想は皆持つていた。徒いたずらに乱らんを起こして天下の篡奪さんだつを目企もくろんでいるとは決して思つていない。自分たちの出る事が、百姓万民の幸福となり、朝廷のご宸襟しんきんをも泰やすんじ奉る唯一の道であると固く正義づけての上の信念であつた。

土着の地侍というに過ぎない者もいるが、このうちの北条宗時はいうまでもなく、土肥次郎実平さねひらといい、天野遠景といい、仁田四郎忠常といい、みなこの地方では家系の旧い家がらの子弟だつた。

いつとはなく、この若い群は、若い頼朝を中心に結びついて、

(時しあらば——)

と、世のうごきを、見まもつていたものだつた。

で、佐殿の事とあれば、彼の浮気な恋の後始末まで、この若い群が陰になってした。とりわけ、北条殿のむすめとの関係には、自分たちの目的をも結びつけて、その恋を繞めぐっていた。——なぜなら、ここで旗を挙げる場合、どうしても北条家の勢力は無視できない。時政を抱き込まなければ、手も足も出すことはできない。

その時政をうごかすには、総領の叡智えいちと情熱を以てしてもだめである。郷土の若人輩が東になって説いたところで、若い、と一笑されるに過ぎないであろう。

が、子には甘い時政、わけて政子には目のない親だった。政子と佐殿すけどのとの間に、二世の契ちぎりが生じれば、嫌いや応おうなく、平家へ反そむいて起ち上がりもしようかと、彼の総領宗時を始め若い群は考えて、配所と北条との通い路を、密ひそかに守って来たものだった。

二

二世までもも見えた政子と頼朝との誓紙せいしが破られた。政子は、近いうちに、山木判官に嫁ぐという。

——捨てて置くのか。

当然、騒ぎ出したのは、この若い群だった。問題は、佐殿の恋愛沙汰ではない。佐殿は元より浮気者だ。そんな事を齒牙しがにかけているのではない。

——大事の破綻はたんだ。

——政子どのは、われわれの企てくわだを知つてもいるし。

——目代の妻となれば。

と、当然な杞憂きゆうと憤りいきどおから発した狼狽であつた。

宗時は、個々に訪ねて、今一度、妹と佐殿と会させた上で、真実を闡明せんめいする。もし飽くまで妹の変心であつたなら、必ず妹の首級しるしを以て各へ非を詫びよう。

そう宥め廻なだつて、辛からくも、この数日を事なく過して来た今日の会合であるが——宗時は今、政子の首を持って来てはいなかつた。

「では、わしから話すとするか」

藤九郎盛長は、少し遠慮がちに、こう断つてから、一同へ告げた。

「ゆうべさる場所で、政子どこの望みにまかせ、佐殿と密かにお会わせ申した。——その後で、佐殿から承つた姫の考えとは、次のような仔細でござつた。……お聞きください」

以下は——

藤九郎盛長が、政子と頼朝に代つて、腹心の人々へ向つて打明けた「嫁ぐ本心」なるものである。

*

*

*

自分が、あの縁談に、いやとかぶりを振つたら、父の時政は、嘘をいつた事になる。向後、山木判官から、どう誹そしられても、武士らしい言を吐けない者になる。お苦しいに違ちがない。

それと、義母いははや義妹いもうとたちに対する父の苦衷くちゆうもある。もっと、大きな理由には、目代の山木判官とは、当然、不和になり、ひいては何かと、うるさい風聞ふうわんが京都へ伝わるであらう。

彼女はそういうが、より以上の理由としては、政子自身が一刻もはやく、頼朝のそばへ行きたい事だった。

彼女を知る人たちは、誰もみな彼女の聡明を挙げるが、彼女も恋をすれば闇夜あんやをも忍んで配所の人へ通うだけの盲目にもなり情熱にも燃やされる女性ではあつた。

いや、境遇や年齢からも、政子の生きがいは、今となつては、唯一人の男性へひた向きにかかつていた。しかもその男性は、彼女の理想に最もかなつた高い家門の嫡流ちやくりゆうであ

る。風采も土くさくなくて、貴公子の香りがある。武事ばかりでなくよく風月を解しもあるし、志もまた大きい。

政子の心が囚われたのは、それだけを男が具そなえているばかりでなく、そうした貴人の胤たねが、薄命な境遇にいる——という事だった。彼女は、頼朝の薄命にも恋したのである。そして兄の宗時から、

(あのお方を護り立てて)

と囁ささやかれた大事に対して、事實は、兄以上の情熱を彼女は抱いた。恋のみか、その大きな成功をも、政子は、深窓で考えていたのだった。

——だのに。

何で、山木判官へ嫁ごう。

嫁いで、その夜逃げる。

身を潜める。

父のせいにはならない。

父は、不埒ふらちな娘と、怒つていれば済む。そのうちに、余燼ほとぼりも冷めよう。

その頃、頼朝のそばへ行つて、共に暮す。——当然山木方から挑戦の火の手があがろう。

こちらも戦う。

絶妙な口火だ。

世上へは、恋の紛争と聞えよう。京都も油断があろう。そのまに、大事の第一歩を踏み出して、同時に旗挙げを宣言する。

*

*

*

「叱っ……。人が来る」

盛長の話がちようど終りかけた時である。見張の一名が、彼方の芒すすぎの中から手を振った。

三

「目代の家人だ。山木の郎党が付いてくる」

見張の者から、二度目の声が伝わると、

「なに、山木判官の家人けにんが見えると？」

若人輩は、すぐ険しい目になって、太刀へ手を触れながら起ちかけた。

「起つな。——起つては先へ覚さとられる」

盛長も制し、宗時もあわてて共に制した。

「……………」

黙り合つて、一回はまた、芒の中に蹲り合つた。

夕風の渡る穂すすきの間から、彼方へ眼を送ると、なるほど、山のほうから降りて来る馬と人がある。

馬の上に揺られて来る顔は、夕雲に赤く映えて、その白い齒や無精髻まで明らかに見えた。

奈古谷寺の配所にいた僧の文覚である。その前後について来る武士は、目代の役人らしく、何か、馬上へ話しかけたりしている。

「はてな、何処へ？」

「旅へ立つらしい扮装だが」

宗時や盛長たちは、怪しみながら見まもっていた。その間に、彼方の野路を斜めに、馬と人は過ぎかけた。

——と思うと、馬上の文覚が、ふと此方を見た。馬の背からなので、屈んでいても、若人たちの首や背が眺められたものと見える。

「ちよつと待つてくれ」

文覚は、馬を降りて、馬と役人を置き残して、独りざわざわと歩いて来た。

「やあ」

恟つとするような大声だった。ぜひなく、宗時も盛長も実平も立つた。

「何してござった。北条どのの息子を初め、だいぶ元氣な面々のお揃いだが、よもや女盗みの相談などではなからう。……これだけの猛者があれば、一郡は斬り奪りできる。一郡を得れば、一国の兵は手に唾して呼び起せよう。一国を占めれば、もはや八州を望むも難くない。……はははは、物騒だな」

何を笑うか。おかしくもない——と云わぬばかりな顔をわざと揃えて、若人輩は、文覚を黙殺していた。

日頃から、この若い仲間では、一人も文覚に心服していなかった。会った者から聞き伝えただけでも好きになれなかった。人を見れば豪語を吐く癖がある。地方の武人はみな無能のように誹り、都会人は蛆のように云うのだ。そして青年を鼓舞する事が急で、余りに煽動に走り、青年に諂るかの口吻が強すぎるために、かえって青年は、みな彼の配所の垣へ寄るのを嫌った。

けれど文覚は、それを淋しいとはしない。人を訪わず、独りならば独りで暮しているだけだった。そしてたまたま路傍でも——今のように——人に会えばたちまち寄って来て、相手の気もちなどにこだわらず、云いたい事を云うのだった。

「起つき、起たないでどうするか。自然の循環は廻って来ておる。自分等の細腕をながめたらやれまいが、天の運行を熟視すれば、時は近いということがわかる筈だ。天文を説く予言者の言と同一に思つてはいけない。わしは地上の事を指しているのだ。都の有様を見ておるか。地方の豪族、庶民の声なき声を、よく耳をすまして聞いておるか。やるがい、各は若い」

「……………」

文覚は振向いた。目代の役人が伸び上がって此方を見ている。彼はにわかに、自分の行先を思い出したように、

「では……………おさらば」

いつになく町噺に頭を下げてから、

「実は、この文覚に対して、どう風のふき廻してか、都より赦免のお沙汰が届いたので、長らくお世話になったこの里を離れ、ただ今、都へ帰る途中でおぎる。……遂に、お目に

はかからなんだが、佐殿にも、よろしくお伝えありたい。やがて佐殿とも、広い天が下に、お目にかかる機が必ずあろう。そう文覚が信じておると、お伝えあれよ」

云い終ると、文覚はすたすた去つて、待たせてある馬の側へ戻り、やがて芒野の果てに、その姿は、没してしまつた。

四

落日の赤い靄のなかへ、黒い点のように遠く消え去つた文覚の影を見送っているまに、若人輩の胸には、彼という人間に対する好悪も感情も掻き消えて、彼の残したことばだけが、妙に耳の底に残っていた。

去つてみれば何か淋しく、

「あの僧も一風骨ではあつた」

と皆、惜しむもののように、野の果てを見まもつていた。

それから数日の後である。

この日の一群に、またべつな顔をも加えた若人の一団が守山の西麓、願成就院

の境内に寄りあつていた。

北条家の御所之内の地域とは、狩野川の引き水の濠ほり一重しか隔へだてていなかった。

宗時も、その弟の義時も、その晩は来ていた。

この間の会合に見えなかつた者では、三浦一族の和田小太郎義盛が、先頃、京都へ使いに上つて帰つて来たという三浦大介義明の末子、義連よしつらをつれて見えていた。

「どんな状況ですか、近頃の京都みやこの有様は？」

人々は、その義連を中心に、こよいの座を囲んでいた。

誰にもあれ、京都の消息を齎もたらす者があれば、若い群は耳をすました。蜂が蜜へ寄るように、新しい情勢の聞える周りへ集まつた。

義連は、大勢の問とに答えたり、近年の平家一門の横暴ぶりなどを、何かと例を挙げてはなした後で、こういう注意を一同に与えた。

「こんど父の義明に従ついて上洛した折、ちようど大庭景親おおばかげちかも、上洛中で、あちらで幾度か会い申した——その景親が、そつと父へ告げた事であるが、ある折、景親が東国の侍さむらいぶぎようかずきのすけ奉行上総介忠清のところへ参ると、忠清の手許へ、駿河するがの長田入道おさだから書状が上つていた由です。その書面には、近年、北条時政や、比企掃部介ひきかもんのすけなどの党が、ようやく成

人した頼朝を立てて、謀叛の氣運を醸成じょうせいしているやに見うけられる、六波羅におかれ
ても、ご油断はあるべからず——といったような長文の進言であつたそうな」

「ほ。……長田が」

駿河にまで、そんな事がもう洩れかけていたかと、若人輩は、胆きもを寒くしたり、同時に、
自分等の存在が、六波羅の神経へ触れ出したと知る事に、大きな血ぶるいと、団結の意を
遽にわかに強めた。

「その手紙を、忠清から見せられて来た。こう大庭景親は、父へ云つたそうでござる。――
恐らく東国の侍奉行たる忠清は馬鹿者に組したりして身を過あやまるなよと、暗いに誠まじめて見せ
たものと思わるる。三浦殿もお子持、一族に若氣の殿とのぼら輩もたくさんにおらるるから、ご
帰国の上は、努ゆめゆめ々々、そのような者へ加担せぬよう、お子達へも孫殿へも、篤とくと訓戒して
おかれたがよろしかろう——と、景親は重ねて、父へ忠言いたした由でござる。それやこ
れ思い合せると、われわれの会合も、あまりしばしばは宜よろしくないと考えられる。ここは
一層自重せざるまいと思われ」

義連の意見に、誰もうなずいた。事実、最初のうちは四、五人に過ぎなかつた若い群の
会が、いつか三十人となり五十人となり、寄合には顔を見せなくても、

(お前方がやるならば——)

と、黙約の裡うちに、重きをなしていくれる中年から老人格の土豪もすでに二、三はある。この若い群が、大祖父おおおじ大祖父とよんでいる三浦大介義明など、その一人で、老齡すでに八十をこえていたが、孫たちに負けない元気で、こんどの上洛から帰って来ては、よけい反平氏の意を固めて、孫どもの行動を誠まじめるどころか、

(春は、爛らんまん漫たるもよい。けれど春は春の一瞬で去れ。花園の塵ちりを一掃したら、夏の天下は、青々せいせいと若い者の腕にひきうけて、土も肥やし、樹々も刈り、天地の気を新たにしなければいけない)

などと激励していた。

しぐれ輿こし

昼間、時々、時雨しぐれでいた。

——と思うと、雨の霽はれ間、かあつと、花嫁の部屋まで、明るい冬陽がさしこんだ。十二月だった。

吉日と云おう。きようは政子の嫁とつぐ日であった。凶わるい日を選ぶわけではない。

御所之内の館たちは、祝いに馳はせ参じた人馬で埋うずまつていた。曇くもると、それへまた、ざあつと白い時雨がそそぎかかる。

「よい雨、おめでたい」

「輿こし入れの雨は吉と申す」

時政夫婦の前に出て、礼をのべて退さがる客はみな云った。

夫婦は、さすがに落着かない歓びにつつまれていた。客を客にまかせて、屢しばしば《ば》、花嫁の間を窺うかがいに行った。広やかな三間四間ま、ほとんど、絢爛けんらんな花嫁のしたく物で埋まつていた。柳、桜、山吹、紅梅、萌黄もえぎなどの袷うちぎ、唐衣からぎぬなどから、鏡台のあたりには、釵子さし、紅、白粉など、撩りょうらん乱の様であった。

政子は、その中に立っていた。

侍女、乳母などに囲まれて、白い絹につつまれかけていた。

ちらと、振向いて、室の入口から見てゐる父の顔を見た。

「……………」

時政の顔は、いつか大日の御堂で見た折のように、歡びにばかり溢れていない。さびしい影が見える。

「…………二十年」

政子は、自分の年だけの恩を思った。眼がうるんでくる。

さし俯向うつむいてしまう。

時政も、茫ぼうと佇たんでいた。

すると、何かと手伝つていた下の妹たちが、

「父君は、きようはここにいらつしやつてはいけません。あちらへ行つていてください」

二人して、廊の端まで、背なかを押して行つた。

「ははは。いいじゃないか。はははは、よいではないか」

子どもに甘える気もちで、押されて行つた時政は、独りぽっち、そこへ置かれると、気の弱いものが、ぼろりと、臉からこぼれかけた。

——がすぐ、その眼は、御所之内に満ちている一族、近郷の諸侍などの、馬いきれ人い

きれの上へ移った。何となくさんな若い者がいることだろう。自分の持つ手兵、親類の子等、知己の子弟、伊豆には若者がわけて多い気がする。いや世の一般もその通りだろうが、その若い力の全体を何となく握っている老人というものも不思議に感じられる。——時政はまだ自身老人とは思っていないが、さりとてこの若い者の仲間ではない。いつか彼もそこを出て次の人生の事をしきりと考えるふうにはなっている。

「宗時、宗時」

突然、大声で呼んだ。総領のすがたを彼方の廊に見かけたからである。

細い雨の中を駈けて、宗時は、父のいる棟むねの階下まで来た。

「お召ですか」

「むむ」

と、時政はなぜか口を緘つぐんでしまう。あたりを見ているのである。それから云った。

「葦山にちやまの西之窪にしのかぼへ百、山之木郷やまのきごうの南の丘の林へ八十、北の木無山きなしやまの裏あたりへも五

十ほど、日が暮れたら、早速に兵をかくして置け。——それも、ぽつぽつと、人目立たぬように」

「……………」

「分らぬのか」

「……分りましたが」

「武器は、一纏めに、荷駄として、蔽を着せ、要所へ先へ送っておく。そして人間のみを後から配置すればよからう」

「では、伏勢として」

「武門の嫁入りだ。どんな変がないとも限らぬ。あつては聶殿に申しわけあるまいが。……父親の心添えだ。総領のそちは、婚儀の席に連なるより、陰にあつて、不慮の出来事に備えておれ」

宗時が、頭を上げると、父はもうそこにいなかった。

二

誰も彼も、華やかな忙しさに追われている中に、時政の顔のみは、不機嫌とも見えるほど硬ばっていた。

政子の輿入れに前立つて、父親は父親としての、心遣いに趁われてもいよう。今、

惣領の宗時に、その一つを託し、召使たちの右往左往している廊を真つ直ぐに通つて、わが室の辺りまで来て佇つと、

「牧つ……。牧つ」

と、妻を呼びたてた。

そして、牧の方の姿を見ると、

「後でよいが、政子の支度が終つたなら、広間へ入る前に、これへと申せ」と、いいつけた。

そのまま、時政は、座に着いて、黙然と、守山の雲の去来を、廂ひさしごしに見ていた。

庭面は暮れかけてくる。広縁や欄らんに、木の葉まじりの時雨しぐれが時々ふきかける。

燭を運んでゆく侍女たちは、袖で灯りをかざしていた。

「もし……。先程から政子がおん前に参っておりませんが」

牧の方にそう云われて、時政は初めて眼をひらき、そして自分の前に、両手をつかえたままにいるわが娘この嫁入りすがたに、じつと、目をとめた。

「……………」

沁しみ々と、見入っていたが、やがて吐息のように、

「もう行くか」

と云った。

政子は、それに、何か答えたようであつたが、父の耳へは聞きとれなかつた。泣いてゐるのである。

「この折に、改めて父からいふ何事もない。ただ嫁ぐからには、女子は、良人のほか、何ものも頼るものはない筈である。父は、平貞盛が裔えい。いうまでもなく、都の太政入道殿とは、その流れを一つに汲む平氏の一族には違いない。……だがの」

と、声を含んで、

「女子は、嫁かしてゆく良人に拗よつて、初めて氏うじも族もさだまるものぞ。良人が、藤原氏なれば、そちは藤原家の夫人たれよ。良人が菅家かんげなれば、そなたは菅家の内室であるぞ」

「……はい」

政子は、濡ぬれた眸めをあげた。

父のことばは、ことば通りのものか、それとも、何か謎をこめての仰せなのか？ ——
と。

「はははは」

時政は笑い消した。

「泣いているのか。はてさて、まだ子どもよのう」

と、牧の方を顧みて、

「例たとへを申したのじゃ。何も難しい意味ではない。そなたが嫁ぐ山木判官兼隆は、幸いにも、

平氏の同族。——末長う、貞節かしずに付けよ」

「……………」

政子が、頭かしらを下げるのを見ながら、時政は起ち上がって、

「いそいで、顔よそおの粧よそおいを直せ、広間の方に、立ち祝いわとて、一族大勢やからの輩やからがもう待ちうけて

おる」

牧の方は、彼女を伴ともつて、帳とばりの陰かげで、何かささやいていた。

一ひとしきり広間はしんとしていた。花嫁の立つ式事おしごとが厳おごそかに執とり行いわれた。それがすむと、

にわかの大勢おごその笑い声こゑや、手拍子てぶしや、祝歌ほぎうたなどが聞え、花嫁は、一門の縁者ゆきや達たちに取りか

こまれて輿こしへ移うつった。

花嫁が輿こしへかくれてからも、夕ゆふ篝かがりの明ありの中に、夥おびただしい花嫁の荷にと、人馬ひとまとの混雑こみ

は、容易やすに列りがそろわなかった。そして時折ときとき、夜よに入いって一しお肌寒しづめい時雨ときぐれが、松たいまつ明あり

燎火にわびの焰をうごかした。

三

さすがに彼女も胸がいつぱいで前後もよく分らない程だった。やがてわが輿がかき上げられると、器うつわの水の溢あふるるように、胸は揺れ、涙はとめどなく流れた。

——不孝の子の吾儘をゆるして下さい。

政子は、何度も胸のうちで繰返していた。父の時政へ、というよりも一族全体へ、祖先からの旧い館やかたの門へ。

嫁ぐ花嫁の心には、奇怪な決心が秘められていたのであった。輿をになう者も、列に従う人々も、見送る一族も、当然、彼女は山木判官が邸へ嫁かすものと信じて、疑う者もなかったが、政子の心は、そこへ行くとは思っていないのである。

花嫁の列は、生家の門を出る時から、すでに破鏡はきようを孕はらんでいた。従って政子のなみだは、世の常の花嫁が生家を離れる時のそれとは、まったくちがっていた。

またそれまでの覚悟をするには、女という一身の方向だけではなく、この結果が、どん

な重大事をたちどころに招来するかをも、当然、聡明な彼女の考えていないはずはない——北条家も一族を率いる武門、山木判官も武門。すべてのものを弓矢劍つるぎの修羅場しゆらばへ抛なげうつような事にもなろう。吾儘といえは吾儘にすぎない恋一つのために、九族に戟ほこを把とらせ、百姓を戦禍へ追いやるなど、何という怖ろしい罪ではあるうと——それらの弁わきまえもないほど無智盲目な彼女でもなかった。

(不孝。ひいては不忠の子)

花嫁は恐ろしい自分の大罪をそう知つて戦おのくのだつた。身も世もなく、悲しみもするのだった。——けれどその悲涙のうちには、誰も窺うかがい知れないほど、冷やかな智慧もひそかに働いていた。

(どう逃げようか? ……逃げた後は、どこへ身を隠そうか)

何も知らない輿入れの列につづく人々は、また一しきり祝ほぎうた歌を謡うたいはやししながら、やがて御所之内の唐橋からはしから花嫁の輿は揺りすすめられた。濠の水もまつ赤なほど、夥おびただしい松明はそこを渡つた。満山の木々も染まるほど、館やかたの燎火にわびは燃えていた。——祝歌はながれて行く——町の民家も軒端軒端に、篝かがりをたいていた。祝歌につづく人馬や揺れかがや燦かがやく輿の蓋おおいは、その美しい焰あまの中を流れて行つた。

が、宿場を出端ではすれると、道はまつ暗くだった。ただ護りの侍どもが振りかざす松明たいまつのみがいぶつて行く。

さあつと、野を横よこざまに、一時雨掃しぐれはいて行つた。

道はひどく泥濘ぬかつていた。

晴着を雨にぬらした人々は、寒さにふるえあがつた。

けれど、山之木郷の婚家までは、わずか二里ほどしかなかつた。行く手の夜空に黒々と望まれる葦山いぢやまのすそである。

程なく。

その葦山のすそにも、ちらちらと、たくさんな灯が見え初そめた。山木判官の邸の森である。——そこよりもつと間近に一かたまりの焰るつぼが、垣かきの如く、うごいて見えるのは、出迎への者が、村の口まで出ているものと思われる。

輿は間もなくそこへ着く。迎への灯と、列の灯とが合流して、目代邸もくだいのほうへ押流れた。寺でも神社でも、篝かがりを焚たいていた。どこかで、鈴や笛や鉦しょうこ鼓などの楽がくが遠く聞えていた。わいわいという人声、人影に、輿の中の花嫁は、眩暈めまいを覚えそうなこちであつた。後から急いだ父の時政や一族たちの騎馬も、同時に、山木家の門前に着いたのであつた。

四

岩石の露出した木の少ない山である。石山の多いのは伊豆の特徴でもある。そうした低い山が、幾つも田野から突兀とっこつと聳そびえている。

「——通る、通る」

「あの松明たいまつの列」

「ご息女の御輿みこしだ……」

岩山の岩かどに這いつくばっていた物見の兵が云い合った。二、三人がからからと後ろの谷間へ降りてゆく。

七、八十の兵が、夕方から小雨こさめにぬれたまま、岩の陰や木の下に、じつと、屯たむろしていた。
「宗時様つ。宗時様」

物見の者の声に、

「おう」

と、どこかで答えがする。

篝もないし、星もない雨夜なので、ほとんど、声をたよりに、

「どちらにおいでなされますか」

「ここだ、ここだ。杉の木の下におる」

「才……。ただ今、政子様のお輿と、供の列が、山之木郷へ着きました」

「着いたか」

「すぐ目代邸へお入り遊ばしたように見られます」

「よし。——おまえ達は、以前の所へ戻って、なおもじつと、物見をしておれ。そして山の邸のほうに、何か変った様子が見えたら知らせて来い」

「はっ」

兵はすぐ、岩を攀よじて元の峰へ登って行つた。

父の時政のいいつけで、惣領の宗時は、山之木郷の附近の山々に、七十、五十と兵を分けて宵からじつと武器を伏せて万一の変に備えていたが——いったい婚礼の席をも外させて、何の為に、父がこういう備えに自分をさし向けたか——宗時には、父の肚はらが解わからなかつた。

父の平常の主張からすれば、今夜の婚礼に、万一の変事などを、予測するわけもないの

に、何で、家の子郎党に武装させて、伏兵の手配りなど命じたか、考えても考えてもその矛盾が宗時には解けなかった。

ポタ、ポタと、杉の梢こずえから落ちる時雨のしずくが、宗時の鎧よろいの背から肌着にまでしみてきた。

「……妹は、どんな心地で」

と、宗時は、それをも思い遣りやながら、咳しわぶき声もせぬ兵と共に、雨の小やみになった黒い雲を見つめていた。

「待てっ」

「だっ、だれだッ」

下の狭い溪川たにがわのあたりである。突然歩哨ほしやうしていた兵の大きな声がしたと思うと、間もなく、そこから駈け上がって来る足音がする。

「来たな」

宗時は、先に起っていた。そしてそれへ来た歩哨の兵の言葉も聞かないうちに、
「土肥殿どひや仁田殿にったが見えたのではないか」

と、云った。

「そうです」

「これへご案内しろ」

待ちかねていたものとみえる。すぐ下からその人々の影が登って来た。土肥次郎実平である。

また、仁田四郎忠常である。藤九郎盛長も、天野遠景も一緒に来た。——が、皆、それとも分らないほど具足には蓑みのを着たり顔には黒い布ぬのを巻きつけていた。

「宗時殿か」

「おう、揃そろわれたな」

「こちらはかねての手筈どおり、かく打揃うちそろうたが、宗時殿には、婚儀の席を外して、物々しい人数まで率ひき連れ、何でかような所へ伏せておられるのか。……先刻、使いをうけて驚いたが、訊き合せている違いとまもないし、やむなく道を迂回まわって会いに来た」

この面々は、時政のさしずくに依って動いてもいないし、時政が宗時にいつつけた事も知らないで、まったく不審にたえないものようであった。

五

今夜の出兵は、自分の意思ではなく、父時政のさしずりに依るものであると、宗時から事情を聞くと、一同はなおさら、

「何、北条殿の御意で、これに勢を伏せておらるるか。——さては、われわれの謀みが、疾く先方に洩れているのではあるまいか」

と、土肥実平以下、眼を見あわせて、しばしは、疑いに囚われていた。

自分たち若人輩の秘かな企ては、父もうすうすは感づいている筈と、宗時も警戒はしていた。しかし、それは日頃の事である。今夜の事に限っては、いくら炯眼な父でも、知るわけではない。絶対にないとしか、宗時には思われなかった。

で、しきりと不安がる友へ、

「いや、偶然だ。父はただ近郷の土豪とか、万一とかいう、漠然たる要心のために、兵の配備を命じたにちがいない。さもなくば、誰よりも先に、密謀の張本人たるこの宗時を、監禁なさらなければならぬ筈だから」

信じるまま云った。

宗時はまた、ことばを重ね、

「たとえ山木判官や父が多少感づいておろうとも、この期ごになって、策を変えるわけにはゆかん。飽くまで、所信を押し通すまでのことだ。間違うたにもせよ、そこ此処に、二百余りの兵はある。遮しやにむに二無二、かねての手筈をたがえず事を運んでくれい」

と、激励した。

一同の惧おそるるところは、自分等の危険よりも、宗時と父時政とが、正面を切つて衝しやうと突つとなつた場合にあつたが、宗時の口からそう聞くと、

「よし。宗時殿さえ、そのお覚悟ならば、われわれの躊躇ためろうている理由はない。——では、やがて山木の目代邸に、火の手を見られたら、それと思し召されよ」

土肥実平のことばを機しおに、藤九郎盛長、仁田、天野など、刎ふんけい頸の友の一群は、蓑みのや覆ふ面くめんのしづくに、武者ぶるいを見せながら、また降り出した暗い小雨の中を、どこともなく駈け去つた。

「……………」

宗時は、その人々が、彼方にかくれるまで、黙然と見送っていたが、やがて、われに返つたように、岩山のみねへ攀よじ上のぼつて行つた。

そこから山之木郷の目代邸は明々と見えた。燎にわび火や篝かがりの光が低い雨雲に映うつつて、真つ黒

な天地の中に、そこばかりがぼうと美しい。

もう妹は輿こしを降りたろう。どんな心地で山木家の奥へ通ったろう。彼女は、兄や兄の友達を信じてはいるだろうが、それにしても妹の心には、あの華やかな燎火や部屋部屋の灯が、いかに辛く映っていることか。

「……今に。今に」

宗時は、じつと、齒の根をかみながら、政子を思い遣やっていた。雨は小やみになった。雁が啼いてゆく。

刻、一刻と、宗時の胸には、婚礼の席にいる妹と同じような動悸どうきを加えてきた。短い時間が半夜も過ぎるように思われた。

すると、突然、

「あつ、火つ、火が！」

と、そばにいた物見の兵がどなった。宗時は、

「叱しっ、静かにっ」

と制しながら、眸をこらしていた。そしてわずかに炎の舌が閃ひらめき出した目代邸の火の手を見つめていた。

火は、その釜殿か、納屋あたりから燃え出したらしく思われる。立騒いで、右往左往する人影が、火光の中に蚊みたいに見えた。

六

北条家のふたおや両親をはじめ、一門の縁者と、山木家の一族とが、ふた側に分れて、広い華か燭しよくの間にひそと居ながれていた。

花聳はまだ着坐しない。

花嫁もお輿を降りたまま、どこぞの一室に、ひかえている頃だった。

嫁親の北条時政は、聳の父にあたる老翁ろうおうと、至極、親しげに何かはなしていた。

時政は、社交に長けた口ぶりでその余の一族へも、

「このような欣うれしい夜はござらぬ。ただ彼女あれも思いのほか子どもで、家を立つ折、婦道を守れと、訓おしえを一言申したところ、嬰児あかごのように泣かれたには弱りました。……はははは、てまえも、この後は、がっかりするだろうと存じておる。むすめ一人、二十歳まで生おい育てて来たかと、何やら自分の齡よわいが急に数えられましてな」

そんな雑談をしているうちに、広い邸なので、よほど遠くではあったが、火事、火事つ——と駈けまわる召使たちの足音や大声が突然立ちはじめたのであった。

「なにッ」

「失火だ」と

すべての人が騒然と立った。わけて山木家の人々は狼狽を極めてみな出て行った。ここかしこの短檠たんけいや燈台の灯は煤すすをふいて暗く揺れ、火元の方の烈しい物音と共に、たちまち物凄い家鳴りやながすべてをつつんでしまった。

——花嫁はしずかに四辺あたりを見まわしていた。

その室へやかしずに侍っていた女たちも皆、側を離れてどこかへ走って行った。

「……………」

彼女は、にこと笑えんだ。

そして燭台の灯をふき消し、水のごとく人のいない部屋を歩いて行った。

山木家の侍がふとそれを見つけ、怪しみながら花嫁の後をつけて行った。政子は広間の次へ出たが、そこに明りが見えたので、廊を引返して、白い衣裳のまま、庭面にわもへ走り出した。

「あつ。どこへっ」

組みついた者がある。政子は声もたてなかつた。振向いて、その顔を見ると、山木家の家来なので、

「火を避けに行きます」

と、静かに云つた。

「火は、大勢して、消しとめています。大事には立至りません。不審なご様子、邸外にお出し申すわけには参りませぬ」

「慮りよがし外がしであろう」

「何であろうと」

「お離し……」

「いや。お戻りください」

云い終ると共に、その侍は、いきなり政子の肩を荒々しく押し返した。

痛さに、われを忘れて、政子は悲鳴をあげたが、同時に、その侍の口からも異様な呻うめきが流れた。その侍は、何者かに、刃で脾腹ひばらを刺し貫ぬかれていたのである。

「政子さま。私の背に」

片手に、短刀をひっさげた覆面の男が、彼女に背を向けた。土肥次郎実平であった。釜殿の出火は、元より実平の仲間が放つた火であろう。政子を負って、彼が土堀のほうへ駈けてゆくと、その木陰から、他の人影が幾つもつづいて行つた。

ほとんどが、火に氣をとられて、何を顧みる余裕も持たなかつたので、若人輩は、難なく花嫁を奪つて、土堀の外の濠をも渉つてしまった。

「厩^{うまや}から馬を奪^とつて来た。実^{さね}平^{ひら}実平、そして姫をこれへお乗せしろ」

仁田四郎の声である。手柄手柄と、藤九郎盛長が賞める、実平は、姫をかかえて跳び乗つた。

駒につづいて、面々も駈け出した。そして、山へかかるとまた、実平は政子を負い直して、半島の背ぼねをなしている伊豆山の裏道の嶮^{けん}を迂^{すべ}りながら攀^よじて行つた。

恋の旗

治承二年じしやうになった。

年は変つても、やがて、伊豆の春とはなつても、花嫁の失踪に端を発した去年からの紛争は、この国の空に、険悪な雲ゆきを持越したままであつた。

「北条家で隠したに違いない」

「時政の奸計だ」

「いや、父子おやこな狎れ合いの仕事と見ゆる」

山木方が、赫怒かくどしたのは当然である。また、当夜の事件をもつて、政子の父たる時政へ、責任を問い、

「仕儀によつては」

と、弓矢に賭かけても、聳の判官兼隆の面目を立ててみせると、一族どもが息まいたのも当然であつた。

「必ずお顔を立てる」

時政は誓つた。

そして娘の親として、

「何と、仰せられようとも、お詫びの仕方はない。面目次第もござらぬ。切腹いたしても思うが、死は易し、今この時政が相果てなば、いよいよ一家の者の当惑を加うるばかりで、意味はおざらぬ。——むしろ恥をしのんでも、必ず、憎ツくき吾儘娘を成敗して、髡殿のご面目を立てるに如くはない。……唯、しばらくのご堪忍を」

詫びる一手で押通していた。

その間、双方の親類が寄つて、幾たびか、善後の処置とか、懸合い事とかの席でも、「済まぬ。唯々申しわけない」

の一点張りで、時政は、平謝りに謝り通して来たものだった。

そうこうする間に、月日は過ぎて行くが、時政のいう謝罪の立証は、すこしも事実となつて来ないので、山家側の業を煮やすことは甚だしく、

「政子どのの首は、いつご持参あるのか」

「親として知らぬはずはあるまいが」

「それで、北条家の御館といわれるのか、武門の親としてすむのか」

「大たわけ殿。まだ、老いぼれる年でもあるまいが」

あらゆる辱めと、猛烈な催促が、彼を責め立てたが、

「この方においても、極力、探し索めておりますゆえ」

とか、

「もうしばしのご猶予を」

とか。——そして相かわらず、山木家の親類の前に坐れば、身分も恥もすてて、低頭するばかりだし、懸合いの使者を迎えれば、いんぎん辞を尽して、謝るばかりだった。

時には、

「生きるも辛し、死にもならず、かくまでの苦患に虐まるとは、いかなる悪業のむくいでおざろうか」

と、落涙を見せた事もあつた。

——めつきりと窶れた。

——白髪がふえた。

躍起となつて、北条家の無能無責任を憤つている山木家の人々すら、近頃は彼を見れば、ふと、そんな同情もわくほどだった。

事実、北条家では、以来、箱根伊豆の山々は元より、近国までも、手分けして、政子の行方をさがしてはいた。

十人二十人と、一組ずつにして、のべつ山狩のように、郎党たちを、歩かせてはいた。が、何の手懸りも齎もたらしては来ないのであつた。

「何たる手ぬるさ」

と、山木方でも、勿論、諸所へ手勢を放つて、血眼になっている。わけて、臭いとらんでいひるる蛭こじまケ小島附近には、道々へ昼夜、見張をしのばせて、その人出入りを窺うかがつていた。

すると、三月になつて。

伊東入道祐親すけちかから、山木兼隆へ一書をよこした。それには、政子のかくれた先が、明らかに書いてあつた。

二

伊東入道からそつと報しらせてよこした書面によると、

(政子は、伊豆山権現の一院に匿かくまわれている。元より北条一家も承知のうえと思う。婚礼の当夜働いた狼藉者は、ふだん頼朝の配所にあつまる近郷の不良の徒と考えられる)

と、あり、なおまた、

(頼朝という流人は、困った男である。前には、わが家のむすめも彼にたばかられ、今また、貴家の花嫁を奪う。言語道断である。彼のごときを生かしておいては、伊豆の平和は保たれない。よろしく六波羅へ罪状を訴え、一方、伊豆山権現へ兵を上されよ。日頃の誼みなれば、熱海口は、自分の手でうけ持つて、ふたりを遁さぬように備えておこう) とも誌してあつた。

文面によると、伊豆山には、逃亡した政子ばかりでなく、頼朝もそこへ移つて、同棲しているらしく思われたので、

「おのれ」

と、山木兼隆は、前後の弁えもなく、怒りに燃えた。

「すぐ行け」

とばかり、何百という家の子郎党は、彼の命をうけるや、先を争つて十国峠へよじ登つた。

一方、早打ちをうけて、伊東入道祐親も、手勢をくり出して、網代をこえ、熱海口をふさいだ。

——が、山木勢は、峠づたい、伊豆山へかかろうとすると、途中一隊の軍勢にさえぎられて、そこから先へ進む事ができなかつた。

「通るなら弓矢にかけて通つて見よ。ひとりも生かしては帰さんぞ」

と、生命知らずな面がまえが、高原に列を布しいて喚わめくのだつた。

旗じるしもない、大將らしい者として見えない。まったくの烏合うごうの勢にひとしく、得物や物具ものぐも雑多だつたが、ただ若い肉体は見事に揃つていた。そして凄まじい争闘心すさがどの眼にもぎらついているのには、山木勢も胆を冷やした。

「各 はどこの何者の郎党なのか」

そう訊ねても、

「何者の家人けにんでもない」

と云い、

「何故なにゆえ、道を阻はばむか」

と、糺ただしても、

「通すわけにゆかぬから通さぬまでの事。通りたければ弓矢で来い」

と、いう暴言ぶりである。

山木方でも、血気なのは、

「押通れっ」

などと人数の中から喚いたが、所詮、敵かないそうもなく見えたので、何とか言いくるめて通ろうと、執しつこく懸合くわっていた。

そのうちに、山木方の兵が、

「あの中に、北条家の郎党も交じっておるぞ。日ごと、山を捜さがすと称して歩いている北条の郎党が、暴軍の中に交じって、われらを阻むとは、怪しからぬ沙汰だ」

と、騒ぎだした。

よくよく目を注ぐと、北条家の者ばかりでなく、土肥実平の家来、仁田の縁類、宇佐美、加藤、天野などの家僕や、伊豆の土豪の次男三男などの顔が幾つもその中に見出された。「よし。かく企たくんでの事ならば、こちらも考えがある。退ひいては、山木一族の名折れ、目代の威厳にもさわる、斬り死にするまでも懸れ。ふみ潰つぶして押通れ」

遂に、交渉を見限って、味方を抑えていた山木勢の年老とった侍どもも、こう叫ぶしかなかった時、高原の彼方から一群れの僧兵が、何か、手を打振って大声あげながら駈けて来た。

箱根権現ごんげんの別当ぎょうじつ実と、それに続いてくる十名ほどの法師武者だった。

三

別当行実は、僧兵に囲まれて、両軍の間に立つと、こういった。

「何故の争いかしらぬが、箱根、伊豆の両権現の地域の近くで、みだりに兵をうごかすに
おいては、われらとても、黙視しているわけに参らぬ。——まず、山木殿の云い分ぶんから伺
おう」

すると山木方の人数から、年長としたけた侍が前へ進んで、

「主人兼隆の命により、伊豆山権現かぐまに匿かくわれおると聞く、政子どのを受け取りに参つたの
でござる。——然るに、それなる雑人輩ぞうにんばらの勢が、弓矢をならべて阻はばむので、やむなく一
戦に及およばんとしたまでの事」

と、云い立てると、

「それは近ごろ奇怪な沙汰を聞くものだ。伊豆山権現に、政子どのが潜みおるとは、誰が
云つた。眼に見た事か、証拠でもあることか」

と、事の理非は措いて、全然一方的に加担した口吻で反問した。

そこへまた、誰が告げたか、伊豆山走り湯の僧兵が一群れ、また一群れと何十人も馳せつけて来て、

「われわれが北条殿のむすめを匿うているなどは、聞き捨てにならぬ沙汰だ。あらぬ云い懸りをして、山領を踏み荒さんとなれば、われらにも覚悟がある」

と、息まいた。

時経つほど、山木勢は、不利にもなるし、最初の意気ごみも殺がれて来た。下手をすれば、退路を断たれる惧れもある。それにまた、中央でも地方でも、僧兵を相手に喧嘩して、利のあつた例はない。

「もういちどよく山木判官の肚を慥かめてこい。弓矢にかけてもというならば、いつでも立会うてくれる」

僧兵たちの罵りを浴びて、山木勢はぜひなく引つ返した。——肝腎な山木勢が退いたと聞いては、熱海口まで出張った伊東入道の兵も、いつまでそこに陣している理由もなくなつてしまった。

「——どうしてやろう?」

山木判官は憤怒のやり場がなかった。彼の面目はまったく踏みにじられた形だ。あがけば足搔くほど、恥のうわ塗りを招くに過ぎなかった。

「平家の政道が悪い」

遂には、その恨みを、中央の無能に向けて、独り悶えたりした。

目代という職務からも、彼は何度も中央に訴えを出していた。また、伊豆地方の人心が、何とはなく反平家に傾いて、わけて少壮な土豪の子弟などの思想は極めてよろしくないとも報じてある。

今のうちに、この危険な萌芽を摘んでしまわないと、どんな事態を将来醸すかもしれない。しかし、目代の法令ばかりでは、圧えはきかないし、武力で圧するには兵員が不足である。——何とか火急おさしずを下してもらいたい。

そう矢の如く催促の使者も立ててはあはる。

にもかかわらず、六波羅からは何も沙汰がないのだった。かえって、近国の武将などへ調査を命じたりしていた。殊に、山木判官が不快としたのは、北条家へ向って、六波羅から事情の上申書を求めたりしている事だった。

北条家に、事情を書かせれば、当然、いいように歪曲して書き出すにちがいない、

もうそれは六波羅に提出されているかもしれないのだ。

地方事情にうとい中央の役人は、公平を期するつもりか何かで、山木方の訴えと、北条家の中し分とを、書類のうえで見較べながら、日を過しているらしく察しられるのだった。「何たることか」

と、山木兼隆は、齒がみをして毎日を送っていた。それが募ると、怏々として楽しまない人間になった。復讐の意志さえなくなつて、人に面を見られるのも厭うようなふうに変つて来た。

「今までは、庶民の訴訟や争いも、他人事として、よい加減に扱つて来たが、わが身の上に降りかかつて、初めて吏道の悪弊を知った。これも天罰だろう」

そう反省したりして来ると、彼はもう目代として、権力ばかりで地方民へ臨む六波羅の一吏員という仕事さえも、熱心には勤められなくなつてしまった。

四

世間に何が起ろうと、配所はいつも幽寂な配所であつた。知らぬ顔にしんとしてい

た。

その配所に、変った事が一つ起った。

雲雀が卵を孵かえした。

可愛らしい雛ひなどり鳥が育ちはじめていた。

頼朝は、小禽ことりなど愛さない。配所は閑日かんじつの中にあつても、彼の胸に閑日はなかつた。

その閑日も楽しみ、またよく、天下の事を談じたりもする男は、ここへ食客となつて長な逗がとつりゆう留りゆうしたまま、いつかずるべつたり頼朝の右筆ゆうひつとなつてしまい、また、近郷の

絵図など根気よく描いている画工藤原邦通くにみちであつた。

雲雀も、彼が孵したのである。

「邦通、絵図はまだ出来上がらないのか。——雲雀にばかりかまっておるな」

「そんな事はありませんが」

縁に雲雀の籠をおいて、見惚みとれていた邦通は、頼朝がはいつて来たので、あわてて坐り直した。

「あの通り、やっではおりまする」

「すこし急げ」

「はい。……急にご入用で」

「急ではないが」

「まだ一、両年はよいでしょう」

「いつ要^いるとも限らぬ」

「去年^{こぞ}の暮——例の政子様^{こぞ}の事件から、山木家のまわりには、常に神経の尖^{とが}った眼が見張り歩いてるので、肝腎なあの附近が、今なお手がついておりません」

「もうよかろう……。だいぶ、余^{ほとぼり}燼も冷めたらしい」

「——とは思いますが」

「いちど探つて来い」

「いや、止しましょう。この際、山木家の附近の絵図など写し取りに行つて捕まったら、せつかく下火になったものを、再燃させるようなものです」

「それもそうだな」

「ご退屈でしょう」

邦通は、頼朝の顔を見上げた。廂^{ひさし}ごしに、夏近い雲が見える。が、頼朝の眼は、雲にはなく、山一重の伊豆山権現の空にあつた。

「……いかがです。こよいあたりまた、お忍びあつては」

頼朝の気もちを察して、邦通はそつとすすめた。配所に家人けにんもあり、出入りに人も数あるが、こういう事を平気で頼朝に云えるのは、彼ひとりしかなかった。

だから、頼朝を盟主とし、頼朝を名君としたがる謹嚴な一部では、

(邦通をお側におくのはよくない。彼は、遊芸が巧者ばかりでなく口も巧いほうかんてき幫間的な人物だ)

と、蔑いやしむ者もあつた。

けれど頼朝は、彼が好きであつた。尠すくなくも雲雀ひばりよりは彼のほうを愛した。

「……参りたいが」

頼朝は、彼の誘いに、正直につぶやいた。

自分を繞めぐる一味の若人輩ばらが、政子を奪つて伊豆山権現の一院へかくした後も、周囲の者の計らいで幾たびか会いに通つてはいたが、極めて監視のきびしい中で、恋というには余りに形だけの面談を遂げただけでしかなかった。

「お供しましょう」

気軽な邦通は、すぐにもと支度にかかり始めたが、頼朝はまだ決しきらず、

「盛長や定綱や、家人どもへ、無断で出ることもなるまい。と云うて告げれば、彼等がまた面倒に申すであろうし……」

「お召使の家人たちへ、何のご遠慮がいきりましよう。方々の難しゅう申すのは、途中の変を案じるからの事で、その儀なれば、心配はありません」

と、彼は独りのみこんで、

「山絵図を写しに歩いたおかげで、山には明るいつもりですから、誰の目にもふれずに通える道を、ご案内いたします。——家人衆へは、私からお出ましの由、ちよつと申して来ましょう」

彼は飽くまで物事を手軽に考える楽天家であつた。

五

走り湯の法音比丘尼ほうおんびくには不犯ふぼんの聖尼せいにていであるといわれていた。男禁制の森に住んで、そこには近くの伊豆山権現いずの権現の法師等さえ立ち入れなかつた。

尼院の庭は平たいらかであつたが、東は伊豆山の絶壁であり、南は熱海あたまみの漁村まで、山なり

に海へ傾斜している半島の突角とつかくだった。

風の日は、風がつよい。――が、よく晴れた日は、見はらしが佳よい。

政子は、飽かなかつた。

毎日ぼんやり――一見そう見える姿で――尼院の縁にかけて海を見ていた。

夜も昼も、ここでは海鳴りがやまずに聞える。海鳴りの中に、彼女の心はようやくこの頃、落着きを得たようであつた。

「政姫さま。おさびしゅうあろうな」

法音比丘尼は、彼女のぼつねんとしている姿を見ると、慰める気か、側へ来ては話しかけた。

この尼は、北条家へも前から出入りしていたし、わけて政子には、幼い時から和歌を教えたり、法華経の読解よみを授けたりしていた縁故もあつて、親しい師弟していといったような情愛もあつた。

「いいえ」

政子は、顔を振つた。

寂しかると問われた時、政子は「ええ」と答えたことはなかつた。気丈きじょうなので人に涙

を見せないであろうと、尼はなおさら可憐しがったが、政子は自分を偽ってはいないのである。

正直、彼女は、婚礼の夜、山木家を逃げて来てから、一度でもさびしいなどと無聊な心に囚われたことはない。夜半の海鳴りと共に血の燥ぎの熄まない折はあっても、悲しいとか淋しいとか、今の身を観じたことは一度もなかった。

処女らしい感傷などは、彼女に取って愚かに思われた。彼女の青春は、もつと実際なものに燃えていた。等しく若い夢はあつても、単なる夢に過ぎないことに彼女の血は波も打たないのである。

夢といえば。

いつか妹が、吉い夢を見たというので、政子が戯れに、その夢を買ったことがある。けれど、それは行末の運命を、儂い夢占などに恃んで買ったわけではなく、どこまでも、妹達を遊ばす戯れにした事だった。

今。——こうなっている姉の身を、家にある妹たちは、どう考えているだろう。

（吉いと思つた夢占が、ほんとは凶夢だったのかしれない。それで災難を負うておしまいなされた——）と、そんなふうに、あどけない解釈をして、思い侘びているかもしれない。

幾つも年はちがわない妹たちであったが、政子から見ると、まったく他愛ないお人形に見えた。——家を出て、今ここから、思うと、その感じはなおさらであった。世の中を知らない深窓の処女たちが、憐れに思われた。

肉親の妹ばかりではない。世の多くの良家の女はみなそうである。政略に嫁がせられ、武力に奪われ去って行く者であった。それを時風と見慣れて人も怪しまないのだ。少なくとも、政子は早くから、そういう風習に、反感をもっていた。

(自分だけは)

という理想があつた。嫁すべきものへ嫁す運命をさがしていた。

頼朝の恋文を初めてうけた時、彼女の気もちは、うろたえなかつた。むしろその前から彼女からも頼朝へ志を贈っていたほどだからである。

彼女は、頼朝の貴公子的な人品にも心を寄せていたがまた、頼朝の不遇な——配所の流人という境遇にも恋していた。

——どうしていらつしやるか？

今も、それを独り思い耽つていたところへ、法音比丘尼が話しかけて来たのである。おさびしかると問われて「否」と答えたのは、正直な返辞なのであつた。

六

「姫さま」

「はい」

「余り先の先までは、考え詰めぬがおよろしゅうござりますぞ」

「何も考えておりません」

「おつつみなされても、この頃のお寔れよう、尼も胸が傷うなりまする」

法音比丘尼は、眼をうるませて云う。——幼少から手塩にかけた政子なので、いつまでも子どもと想着ているらしい。

政子は、何かというと、尼が自分をいたわる為に、涙をこぼすので、いつもかえって当惑した。

尼は、彼女のした事を、まったく処女心おとめこころの盲目にした事とも思っているらしい。取返しのつかない過失と、自分が大罪でも犯したように、恐怖しているらしいのである。

政子の心とは遠かった。尼が涙して自分をなぐさめるのを、政子はむしろおかしく眺め

て、

(お師さまもお齡としを老とられた)

と、思うだけだった。

「——お師さま。わたくしの身の事は、どうか、ご心配しないで下さいまし。自分にも、固く思うところがあつてした事ですから」

「きついご気性のう」

尼は、見上げて、

「お小さい頃から、お気性は勝つておいでなされたが、何というても、女子おなごの身は」

と、昔からの口ぐせで自然、誠まことえる口調になるのだった。

「女子おなごほど、弱いものはありませぬ。弓矢を取る男子おのこですら、今の世に生きて、敵の中に立つてゆくのは、生やさしいものではないに、女子の身に、怖ろしい敵を作られ、身を隠さねば、お生命いのちも危あやぶまれるような事になつて——どうして、案あやじもせず貴女を見ておられましようぞ」

「だいじょうぶです」

「どうして大丈夫ですか」

「兄の宗時が、よそながら護っていてくれます。兄の友達どもも、今ですから申しますが、私を庇かばうてくれて、この後とも、兄と力を協あわせてくれる約束ですから」

「相手は誰と違いますか」

悲しみをこえて、尼は、叱るような声になった。

「六波羅の目代でござりますぞ。それに弓をひいたら、天下を敵としなければなりません」
「そうです」

「……そうですとな？」

尼は、疑うように、姫の顔を見すえていた。その眼へかすかな顫おのきが上ってくる。

政子は、もうこの世捨人よすてびとの尼とはなしているのは退屈であった。山は青葉時、海も飽くまで青い、肺のなかまで青嵐に染まりそうな心地を、独りぽつねんと楽しんでいたかった。——やがて、事実となつて来るものへ、静かに前後の考えを纏まとめておきたかった。

「老尼さま。日金ひがねの牧のお萱かやさんが見えましたが」

そこへ一人の尼弟子が告げに来た。法音は、きようは何か、これ以上、政子へ誠まことえる気も挫くじけたように、それを機しおに力なく起つて、

「姫ひいさまへ、お目にかかりに来たのである。庭口からこれへ」

そう云い残して、自分は冷たい尼院の奥へかくれた。

萱は、日金の牧場の主の妻であるが、以前は北条家に仕えていた女だった。三島や五日市などへ出るたびには、その後もよく館へ立寄つて、前の朋輩たちとも親しくしていた。

「萱でござります。おかわりもございませぬか」

やがて畏る畏る庭へ来て屈まった女を見ると、政子は、今までの顔いろとは違つて、待ちかねていたかのように、

「おう萱か。十日余りも見えないので、案じていました。遠慮はない。そこへおかけ」と、縁の端をすすめた。

七

萱は、地に蹲つたまま、

「ここには、姫様のほか、誰もおりませぬかと、見まわした。」

政子も、あたりを見て、

「なんじゃ？」

声をひそめた。

萱は、すばやく近づいて、政子の手へ、何か渡した。そして、

「お館さまからのお文です」

と囁ささやいて、またすぐ、以前のように地へもどつて、手をつかえていた。

政子は、父の文を披ひらいた。

牧場の妻の萱を使いにして、父の時政は、たびたび、ここへ便りをよこした。

表向きは、当然、義絶も同様——あれ以来、父と呼ばせないいきとと、憤いきどおっている体ていにしてあ

るむすめではあるが——時政の愛には、変りなかつた。

いや、むしろよけいに、親としての憐れみで、愛いとしきは強く深く、明け暮れに政子の身を氣づかっているらしいのである。

で、便りのたびに、きつと書いてある事は、

——変りはないか。

そしてまた、

——短慮をすな。じつと、時の到るを待て。

といったような事だった。

もし政子が、絶望を抱いて、自害でもしはせぬか——それをのみを彼女の父は、いつの手紙にでも、ひたすら懼おそれて、時節という事を、書き忘れていなかった。

ところが、きよようの便りには、それがやや具体的に書いてあった。世間のうわさも、だいぶ薄らいできたという事。また、相手方（山木家）の感情も、ひと頃ほどではなく、従つて、自分の考えているように、徐々と、事件の解決も見込みがついて来た——というよ
うな事などが、いつもながら、

（短慮すな。短慮すな）

と、言外に諭さとしながら細こまご々こま認めめてあつた。

政子は読み終るとすぐ、細かに裂いて、掌てのなかで小さい鞆まりとしてしまった。そして、萱かやのまえへそれをぽんと抛なげると、萱はすぐそれを拾つてどこかへ隠してしまった。

「姫さま……」

彼女は起つて、何か抱えて来た土産みやげらしい物を、政子の側に置きながら、

「あまり屋の内にばかり籠ひろつていては、お体によろございませぬ。裏山からわしの牧場の近くまで、お徒歩ひろいなさいませ。お氣がはれます。萱がご案内いたしますで」

とすすめた。

言葉は唯、形式に云っているだけで、彼女の眼は、政子の眼へ、べつな意味を何やら知らせていた。

「……………」

政子は黙ってうなずいた。

その頬に、紅がさしたのを見ると、それだけで、意味を受け取ったものとみえる。

奥の法音比丘尼にも、他の者ほかにも、眼にふれないように、政子はそつと尼院の裏垣から抜け出して行つた。

萱かやは先に立つて、

「——こちらへ」

と手招きしては、かなり急な石の多い山の小道を、登って行つた。

尼院の屋根はすぐ眼の下になつた。走り湯権現の堂閣も下に見えた。岬みさきの断崖の下に搏うつ荒磯の白い浪も下に見えた。

「登れますか、姫さま」

「ええ。これくらいな道」

牧場の妻は当然山馴れてもいる。しかし山馴れない政子はと、時折、氣遣つて振向いたが、政子は、懸命に山やまつばき椿の枝や笹の根にすがって、後から攀よじて来るのだった。

山は深くなつた。

一 叢ひとむらの木立の静寂しじまは、そうして来る政子の息の弾みを、先刻さつきからひそと待つていた。

云うまでもなく、蛭ひるヶ小島こしまの頼朝だった。

八

彼は政子の姿を見た。政子も頼朝のすがたを見出した。無表情とさえ見えるほど、二人は声も放たず近づき合った。

黙つて、その木の根の草むらに腰をおろす。寄り添つて、そうしてからも、しばらくは言葉もない……。

どういふ言葉を以てしても、政子は今の自分の胸を伝えるには足りない気がするからである。

——我とてもそうである。

彼女の沈黙を酌^くんで、頼朝も同じ心もちで黙っていた。

が、ここはもう、日金の牧のすぐ下である。誰もいない。世間の眼もない。頼朝の供をして来た藤原邦通も、牧の妻の萱も側にいなかった。

何でも云える。そして、滅多^{めった}に恵まれない機会でもある。

政子は、唇^{くち}をひらいた。

「お支度はできましたか。毎日そればかりを待ち暮しております。いつ二人の婚儀を挙げて下さいますのか」

「……もう少し先に」

「いつのお言葉も」

と、政子は、彼のにえきらない口吻^{くちぶり}をやや蔑^{さげす}むように、

「もうあれ以来、半年もこえているのに、まだいろいろなご準備ができないのですか」

「婚儀には何の支度もいらぬが、それを挙げるには、同時に、大きな覚悟^いが要る」

「分りきっている事です。それはこれから先に持つ覚悟ではなく、始めからの事ではありませんでしたか。……わたくしと、貴方とが、結ばれる始めからの」

「元よりわしとでも、その肚はすえている」

「それを、今となつてまで、これ以上、何を恐れ憚おそつていらつしやいますか。あれもこれもと、気ばかり遣つうていたら、起つ日は参りますまい。——一念はきつと通るといふ事を、わたくしは去年こぞの暮、山之木郷から逃げのびた時、身をもつて悟りました。そしてここまです事は進んで来ました。後は、貴方のご決心ひとつです。——それとも、何かまだお迷いになつていらつしやるのでございますか」

「迷いはないが、機を計らねばならぬ。生涯のわかれ目——二人の恋とだけは考えおらぬ。——それは天下の大事、男の胸にあることだ」

「でも……機はもう熟しているではございませぬか。父の時政も、初めは、わたくし達の大望には、所詮、与くみしてくれない人と諦めて父へも叛そむく気でおりましたが、今日となつてみれば、その父こそ、誰よりも二人を理解してくれた大きな力でありました。——父は世間へ怒つて見せながら、裏では、わたくしの身を、庇かばつてくれております。山木家へ興こ入れしいの夜から今日まで、こういうふうには、事の運んで来たのも、よく考えると、わたくしの勇氣というより、何だか、父の目企もくろんでいた通りの道を、父に庇かばわれながら歩いて来たような心地のするくらいです。……ですから、貴方のお心さえ定まれば、父もお味方として、いつでも起つにちがいありません」

「それは、宗時から聞いた。……しかし、わしは伊豆一国だけを見ておるのではない」

「……………」

「女子おなごには見えない。時政にも見え限きれまい。この広い天下のうごきを見極めずして頼朝は起てぬ。……お汝ことたちは、何というても伊豆そだちよ、まだ眼が狭いというものじゃ」

ふたりはそれからかなり長い間そこに語り合っていた。けれど、その話には、恋の蜜もなかった。——頼朝にとつても、時政にとつても、恋は第二義であった。ただ政子は女性であるがゆえ、父よりも、頼朝よりも、純粹であった。初めから生命がけであった。

白衣の使者

一

配所の柿は、あらかた配所の者がたたき落しては喰べてしまった。

手も竿さおも届かない梢こずえの先に、真つ赤まっかに熟うれたのが二つ三つ、鴉からすの為にでもあるように残

されていた。——その梢に、今日も伊豆の夕日が、はや寒々と訪れていた。

「お。……ここか」

ひとりの山伏は、杖を止めた。配所の外に立つて、しばし奥の屋根作りの様など窺っていたが、

「ああ、長い年月を、ここに暮しておられたのか」

と、その面は、無量な追憶おもてにつつまれていた。

やがて、山伏は、ずかずか通つて行つた。

柵の内には、畑がある、厩うまやが見える、釜かまどの殿がある。

釜殿からは、夕餉ゆうげのけむりが流れていたが、人影は見えなかった。

「はて？」

玄関をさがして横へ曲がる。

厩の内から、白い人影を見ていた三郎盛綱が、怪しんで駈けて来たのを山伏は知らなかつた。

「たのもうっ」

杖を立てて、玄関から訪れているところへ、

「どなた」

と、盛綱が後ろから声をかけた。

「や」

と、振向いて、

「こちらの家人けいじんでおわすか」

「そうです。——合力ごうりきなれば厨くりやのほうへおまわりなさい」

「いや、合力ではない」

「然らば、何者か」

と、咎とがめる。

山伏は容易にゆるさない眼まなざしを以て、そういう盛綱を見やりながら、

「佐殿すけどのに会えばわかる。お汝こと、こここの家人なれば取次いでくれい」

と、云う。

「用向きも知れぬ者を、お取次するわけにはゆかぬ。ご姓名を承ろう」

「怪しい者ではない。ともあれ佐殿にお目にかかった上で」

「馴なれなれ々しげに云わるるが、近国の衆とも見えず、まして山伏すがたなどして、これへ来

らるる以上、われら家人として、一応疑いを抱くのは当り前でござる。何とお強しいあろうとも、生国姓名を明かさねば、お取次は相成らん」

「お汝ことは誰か」

「佐々木源三が子、三郎盛綱でござる」

「そうか。源三秀義が子か。かねて聞き及んではいたが、佐殿の身内には、なかなかよい若者がおるとは嘘ではなかつた。——然らば、申してもさしつかえはない。儂みは、新宮十郎行家ゆきいえといい、佐殿には、叔父にあたる者だ。都から訪ねて来たと通じてくれい」

盛綱は驚いた。

率爾そつじを謝して、あわてて奥へはいつて行つた。

間もなく、黒光りのしている廊の板敷や柱に、灯の影がゆらいだ。そして端麗なる貴公子といった風采の頼朝が、自身でずかずかと出て来た。

そこに立つて、しばらくは、夕闇の中の人影をすかしていたが、

「陸奥むつの十郎殿か」

と、訊ねた。

山伏は、寄つて来て、これもじいつと、頼朝を見上げていたが、

「……佐殿か」

と、云って、

「そうだ。新宮十郎行家とは、近ごろ改めた名、以前の陸奥十郎義盛でなくてはわからぬ筈だった。その叔父の十郎じゃよ」

「おお、あなたが」

「火急、お目にかかりたい儀があつて、遥々はるばる、かような姿で下つて参つた。上がつてもよいか」

頼朝は、振向いて、

「盛綱、盛綱。叔父上に水を汲んでさしあげい。……さあ、お足を洗そそがれて、お通りください」

と、頼朝は先に立って、行家を奥へ伴つた。

二

「お疲れでしょう」

頼朝は云った。

それは凡^{ただ}の客に対するような挨拶でしかなかった。行家はちと物足りない顔をした。なぜならば、彼には、余りに多くの感^{かん}慨^{がい}があつたからである。

行家は、頼朝がまだ十二、三歳の頃を知っていた。兄弟の義朝が六条に栄えていた時代の家庭に、幼い頼朝をよく見ていたものである。

それから十七、八年。

ひと昔――

実にひと昔である。茫々と年月は過ぎてきた。そして、ここは伊豆の山中、当年の頼朝は、はや三十歳の男ざかりである。父義朝にどこか似て、より以上、気品がある。智的な、温容なふうがある。

「……………」

行家は、感慨なくしてはられないのである。けれど頼朝は、さほどでもない。朝暮の訪客に接するのと、大して変わりもない程度に、

（――ご用談は）

と、促^{うなが}したげな顔である。

しかしよく考えてみると、それは頼朝が情熱に乏しいわけではなく、頼朝には、行家という叔父があつたくらいな事しか少年の記憶にはないからであつた。行家の追憶と、頼朝の回顧とは、その年齢のちがいと共に、当然、大きな差があつた。

「この頃は、都においでですか。それとも、お国元ですか」

余り行家が黙っているの、頼朝は、そんな話題を出したりまた、

「ここには、まったく、世上の事は何も分りません。こよいは悠々、都の近状など、伺わせてください。……ま、湯浴みなどなされて、何の馳走もありませんが、お寛ぎの上で」

と、云つた。

それも至つてお座なりの歓待にしか聞えなかつた。行家は初めのうちは少し不足であつたが、十四歳から伊豆にいる頼朝に、いきなり十七、八年ぶりに訪ねて来て、血縁の情を望んだ自分のほうが無理と覺つて、

「いや。その前に」

と、彼も他人行儀に、改まつて、用向きの口を切つて、

「極く内密におはなししたいが、お召使の出入りなきよう、しばらく人を遠ざけていただ

けまいか」

「お易いことです」

頼朝は、起つて、

「こちらならば、誰も入つて参りません」

と、持仏堂へ案内した。

今し方、彼は、そこで日課の読経どきようをすましたばかりだったので、壇には、まだ燈明がともつていた。

行家は、そこに入つて、義朝や一族の位牌を見ると、すぐ涙なみだを催もよおして、壇に向つて礼拝していたが、ふと、べつな小さい位牌いはいずし厨子ずしの前に、紅と白の打物うちものの干菓子かんかしが供えてあるのを仰いで、

「これは、誰方どなたの？」

と、頼朝を顧みて訊いた。

頼朝も、仰ぎながら、

「私にとつては忘れられない池いけの禪尼ぜんにのお位牌です」

と、答えた。

頼朝が十四の時の恩人を忘れずに、今もなお、その人の霊に、燈火ともしびをあげているのを知ると、行家は、

(やはりこの甥は、義も情も解さない冷薄な人間ではないのだ)

と思つて、急に、自分の情熱よみがえまで甦よみがえつて来た心地になつた。

それかあらぬか、彼は遽にわかに、炯々けいけいたる眼ざしをして、

「——実は、このたび自分が東国へ下つて来たのは、わたくし事ではなく、宮方みやかたの令りよう旨じをおびて、諸州の武人がどんな考えでおるか、密ひそかに東国の動向たうかうを糺ただしに来たわけでおぞる」

と、厳かに云い出した。

三

宮のお使いと聞いて、頼朝も驚いたらしかった。

「お待ちください」

叔父の行家へこう云うと、彼は持仏堂からどこかへ出て行つた。

手を浄め、口を漱そそぎ烏帽子えぼしや衣服も新しく更かえて来てから、やがて戻つてそこに坐り直した。

座も遠く退がつて、

「この配所へ、そも、何事のご令旨にござりましようか、仰せ聞けくださいまし」と、両手をついた。

行家は、肌身に奉じて来た宮の御文おんふみを錦欄きんらんの囊ふくろぐるみ、額に拝んで持ち出し、

「お近う」

と、さしまねいた。

頼朝は、にじり寄つて、両の手に捧げて受けた。

——が、それを開かぬうちに、行家が注意した。

「一通は、其許そこもとへ賜たまわる勅勘のご赦免しやめんじよう状であるが、もう一通は、其許と北条殿の両所へ降したもう令旨でござる。——故に、その方は北条殿とご同席にて拝されたがよいと考えるが」

頼朝は、はつとした。

ご赦免——という一語にも。

それとまた、北条殿と同席でという行家の注意にも。——大きな歓びと、大きな当惑とが、刹那せつな、その面おもてを交叉こうさした。

流人という幽暗な壁は十幾年ぶりで除かれた。けれどその歓びにもまさる当惑は、政子の事件以来、時政とは、未だいまに会っていない事であった。政子のこの頃のことばに依れば、時政は決して、政子をも頼朝をも憎んでいないのみか、むしろ陰にいて、二人の恋まっが、完まっうするように計っている——とは聞かされてもいるが、頼朝としては何となく今以て、甚だその人に会い辛い心地にあるのだった。

で、翌朝。

頼朝は、ゆうべの客が、まだ眼ざめぬうちに、使いを走らせて、時政の総領の宗時をよび、

「どうしたものでらう」

と、何事でも打明けられる彼に計ってみた。

宗時は、若い眼をかがやかし、

「宮のお使いとは、何かわかりませんが、ご赦免と共にあれば、凡事ただごとではありませんまい。時節到来と覚えます。何で小さな感情などに囚とらわれている事があるものですか」

「では頼朝が、突然、北条どのを館に訪ねて行っても、不快はあるまいか」

「何の」

と、自信ありげに、

「私が先に戻つて、父時政へ、この由よしをはなしておきます。宮のご密使ははを阻む理由は父にもありますまい」

「しかし、もしご令旨を拝しても、時政の考えに、異存ある時は、六波羅に通じられるおそ恨おそれはないかな。叔父の行家が、山伏に身を変じて、密かというて下つて来たことから考えても、ご令旨の洩もれてならぬものである事は、ほぼ察しられるが」

「……………」

宗時は、さし俯向いていたが、やがて頼朝を正視して、沈痛な小声で云つた。

「大義親を滅すです。わたくし達の為なそうとする挙は、上は皇室の御おんために、下は万民のためにと——誓まじつて大義を的まじにしておることではありませんか」

「元よりだ」

「……………ならば、ご安心ください。宗時には決する覚悟が持てます。私におまかせおき下さい」

そう云つて、彼は帰つた。悲壯な顔いろはして戻つたが取乱れた容子もない後ろ姿だつた。頼朝は、縁ごしに見送つていたが、彼ひとりあればと思うほど、意を強くした。

四

その晩、行家は頼朝と共に、密かに北条家を訪れた。

館は清掃されていた。主客は奥ふかい室へかくれたまま、侍たちも遠く退けて、室外には、総領の宗時が見張つていた。

その後で、行家を主賓とした小宴がひらかれた。極めて内輪の者だけで。

夜も更ふけ、話もくだけてから、

「どうですか。この際、いつその事、政子どのをすけどの佐殿に下されて、正式に結婚させては」と、行家が叔父として、時政へ云い出した。

「異存はない。もはや時節もよかろうで」と、時政は云つた。

宗時は頼朝の面を見た。頼朝はふと眼を熱くして俯向いた。自分から申し出たい程の事

だったし、恋人の父に、自分たちの恋が正式に認められたのも欣うれしかった。

行家もたらが齎もちした以仁王ちひとおうの令旨りようじの内容については、小宴の席では、頼朝も時政も、一ひと言こともふれなかつた。

畏おそれ多いことでもあるし、またゆるがせに口にすべき性質のものではないからだった。

けれど、ここで察するに難かたくない事は、まだ何事か知れないが、密使もたらの齎もちした重大な問題に対して、時政も同意を示したということである。

その重大な計画に対しては、頼朝の志と、時政の考えとが、少しも喰い違わないで、合致していたという事は、杯のあいだに語らっている相互の容子でも見て取れる。

頼朝には、時政がそんな考えでいたのも意外であったが、もっと案外だったのは、政子と自分との関係も、山木家へ婚約した初めの頃から、時政の胸には、

(断きつても断れない二人)

なる事を、認めていたらしい事であった。

それを承知しながら、なぜ山木判官へむすめをやる約束をしたかは——時政自身は何をも云わないが——

(彼から求められた以上、彼を拒こばんで頼朝に嫁がせては、六波羅からも近国からも、北条

家の意志として怪しまれよう。恋ならばどんな盲目なことも敢えてやって退けるもの、人もゆるし、世も疑うまい。飽くまで、盲目な恋がなせる業としてでなければ、二人を結ばせる方法はない)

と、考えを極めていたらしいのである。つまり最初から結果を見越して、ただその「方法」として、政子を山木家へ輿入れさせたと思われる口吻くちぶりがあつた。

「油断のならない舅だ」

と、頼朝は、彼の遠謀に心では将来を惧おそれたが、この舅を帷幕いぼくに持つて、大事へ臨むとすれば、甚だ心強くもあつた。

「北条どのがそうご承諾なれば、幸い、自分が参つていゝうちに、二人の目出度い姿を見て都へもどりたいたいが」

と、行家が重ねていうと、

「それはよい。ぜひ近日にも」

と、宗時も同意した。

にわかには話は纏まとまつた。いずれ山木家へ知れるにしても、大びらでない方がよい。彼の意気地をこつちから煽動してはまずい。——それに表向きまだ勘当むすめの息女、配所の流人、

どこまでも質素がよい。こつそりと挙げるがよい。

時政の忠告どおりな挙式が、それから十日ほど後に、配所の一室で、華燭というよりは、しめやかに挙げられた。

伊豆山の尼院から密かに移つて来た政子も至つて粗服であつた。花髻の頼朝も何の色彩もない姿である。――が、むしろ精彩のないところに清麗があつた。配所の寒燈がかえつて神々しかつた。

時政も密かに列していた。政子の兄きょうだい妹いまいたちも見えていた。粒々辛苦、長らく仕えて来た配所の家人たちは、ふたりの姿を見て欣し涙を抑えきれなかつた。その夜はまたひさし廂ひさしに霧の降る音が忍びやかに洩れ、なおさら、去年こぞの時雨しぐれの夜が思い出された。

蓬壺ほうこの人

西八条の清盛の別邸も、この秋ばかりは寂としていた。八月、重盛の病が重^{おも}つて、とうとう四十二で死んでから入道相^{しょうこく} 国^{くに}のさしもの元氣も、いたく衰えて来たかに見えた。

「……秋だなあ」

入道は、一室から沁^{しみ}々々と、眼を千種^{ちぐさ}の秋にやっていた。園内に蓬^{よもぎ}を多く植えてあるので、そのの室を蓬^{ほうこ}壺と称^よんでいた。

「わしも六十を二つこえた」

自分の老齡を、こう心弱く、自分で肯定したりするようになったのも、重盛を亡くしてからであった。

常日頃は、何かの弾^{はず}みに、子や一族どもが、

「もはやお年ですから」

とでも口を迂^{すべ}らせると、

「ばかなつ」

と、すぐにわざと若々しげな声を出してみせる入道であったが、この秋は、そんな声も蓬壺に聞かれなかった。

相^ま交^まらず、抹^{まつ}香^{こう}のにおいや読経は嫌いである。重盛の死をこれほど悲しんで力落ちし

ていながらも、持仏堂に籠こもつて一片の読経をしたためしはない。

「よい子だった。わしにとつては片腕であつた」

と、人前もなく、泣いたりはするが、回向えこうはしてやらないのである。

そのくせ、剃髪ていはつして、浄海じょうかい入道となり、身にも法衣を着ているけれど、それも彼

にとれば矛盾むじゆんでも何でもなく、

「白髪しらがを蓄えておるよりも剃り下ろしたほうがきれいである。厳いかめしゆう衣冠して窮屈きうくつにするよりも、老いの身には日常も法衣のほうが手軽くて便宜である」

と、いうのである。

しかし彼の抹まつ香こう嫌けんいは、仏法の根本原理に異論があるわけでも何でもなし。彼の眼に耳にして来た今の仏者の形に對しての反感だった。若い頃から頑固に抱かかっていたそれが、老いてもなお、強くこびりついているのであつた。

(——世に入道相国の御意のままにならぬ事は一つもあるまい)

と、世上の人々は云っているそうだが、入道自身の身になると、

(——世に自分の思う事は一つだに思うように行っていない)

と、嘆なげきたいほどだった。

山と寺がその一例である。叡山と三井寺にかたまっている僧徒の勢力である。彼は明雲僧正などを巧みにあやなして、表面そこをも事なく抱擁ほうようして見せてはいるが、実は事ごとくに、腹の虫をころしているので治まっているだけだった。

入道が、入道としての、面目を発すれば、彼等の伽藍堂塔がらんどうとうは一夕いつせきに焼きつくして、一物の金泥や金欄きんらんも残さない焼け跡の灰の中に、

(これがほんとの仏だ)

と、たつた一つの阿弥陀如来あみだによらいをすえて見せたら、さぞ胸がすぐであろうと常に思っているほど、その勢力と扮装に、内心唾棄だきしたいほどのものを抱いているのだった。

何にせよ、叡山や三井寺の徒は、兵力と財力と、信仰の力とを擁ようしているのです、入道の力を以てしてもどうにもならないものがある。武力や財力にかけては、

「児戯じぎに等しいもの」

と、入道も軽く見ていられたが、信仰の力となると、これは自分の持たないものであることを、入道もよく弁えていた。——信仰どころか、一世の悪評一身にあつまっている現状をも、——入道は決して知らずにいるわけではない。

けれど、彼がそのように忌み嫌った腐敗墮落だらくの末法の世界の他に、ほか、真実の仏教を、草間

がくれの清流のように、年来、黒谷くろだにの吉水禪房でさげんでいる法然ほうねんという僧なども在ることは、入道も知らなかった。

入道はその活眼で、一面実によく世上を観てはいたが、一面やはりどこか抜けている所もあつた。蓬壺ほうこの主人は、やはりもう今は貴族で、庶民のひとりではなかつた。

二

入道に云わせると、

（余は宗教を憎むのではない。誤つた信仰を唾棄だきするのだ。信仰もよく導けばいいが、今のように、一般社会に及ぼす弊風へいふうの大や、朝廷をも動かす悪因習は、これを黙視もくししているわけにゆかない）

入道の仏徒嫌いは、そういう達見から来てもいるが、元来が感情の度の昂たかい、赤裸ひんしゆくの性行の人だけに、それが現れるところのものは、人をして頗すこぶる恐れさせたり、顰ひんしゆく蹙しゆくさせるような形になつた。

たとえば、こんな一例がある。

春の頃からひどく早魃かんぱつの打ちつづいた承安四年の事、清涼殿で雨乞あまごいが執行とりおこなわれ
たが、誰が祈禱きとうにあたつても、一滴の雨も降らなかつた。

すると澄憲ちようけんという山門の僧が、最後の祈禱を勤めたところ大雨が降つた。三日三晩
降り通して、加茂川もあふれるほどだつた。

「まず澄憲ほどのような名僧は近代にあるまい」

「遺さすではある」

万民みな、彼の通力つうりきを賞めたたえ、その名声はいちどに鳴り互わたつた。

「呆あきれたものだ」

ひとり嘲わらつていたのは蓬壺の浄海入道のみであつた。

「さんざん薬や医者でこじらせた病人が、もう駄目といわれると、生死の煩惱ぼんのうも離れて、
諦めの境地に入る。ふと、その心境から病魔が脱する。そこへ薬を盛つた医者は、幸運に
も、起死回生の名医といわれる。——春の頃からのひでりを、もう梅雨頃つゆと、空あいを見
て禱いのり出せば、たいがい雨に間に合つてくる。——それを仏力だの神通力だのと——信じ
る者も信じる者だし、澄憲などという狗鼠坊主くそぼうずもいい加減なものではある」

それが山門に聞えたので、澄憲をはじめ、一山の怒りは、浄海入道にふりかかつて、

「上御一人までが、百姓のため、宸襟をなやませられている事を、彼は、われのみの榮華に驕つて、かくの如く、民衆のためなど念頭にもしていない」

と、誹謗した。

朝廷の臣も、民衆も、たちまちその声に和して、六波羅殿の無情を怨むので、淨海入道は、それに打って返す手もなく沈黙してしまった。云い負かされた形で終ってしまった。死んだ重盛も、よく父の入道を云い負かしたが、清盛はまったく口下手であった。彼はいつも宣伝戦で打負かされる男だった。そのために、ついに、自分の正しさが理論で受けいれられなくなると、

「やつてしまえ」

と、六波羅の精兵をさし向けてもの云わすので、庶民の同情は少ないし、朝廷の百官からも、

「暴虐なる人」

と眉をひそめられ、そのたびに陰口されるのが、彼の私的生活だった。

六波羅いつたいの経営や西八条の別荘の華麗彫大などは、云うにも足りないとしていたが、まず政権の専横ぶりだの、一門を以て高位高官の位置を独占しているのが、何と

いっても、人のそねみを大きく買っていた。

もつとも藤原氏もその全盛期には、思いきった閥族ぼつぞくの独占をやったが、入道は同時に、兵馬の権をも把握していたから、その勢いは到底、

この世をばわが世とぞおもふ望月もちづきの——

と、歌った藤原道長などの比較ではなかつた。

彼の家弟経盛つねもりは参議に、頼盛は権大納言ごんだいなごんに、子重盛は近衛大将までに——云うも煩わづらわしいが、公卿に上つた者十余名、殿上人てんじやうびとと称される人三十名の余をこえ、平氏一門の受領国は三十余カ国。——そして入道自身は、これも藤原氏の悪い外戚政策がいせきせいさくを倣ならつたものと思われるが——わが妻の妹、建春門院けんしゆんもんゐんから出いでました高倉天皇を擁立ようりつし奉つて、その高倉天皇の中宮に、女の徳子とくしよを納いれ、ここに臣下でありながら、天皇の外戚がいせきという関係と、武家でありながら政権も握にぎっているという、まったく特殊な位置とを、身に併せ持つて来たのであつた。

必然に、世の人々のそねみは、平家一門の栄華を見て、

(いつかこの反動が)

と、その来ることを密かに待つようになった。

口に出さないその憎しみはまた、一門の誰彼がした事でも皆、

(入道殿をかさにきて)

と、清盛の罪業に数えられてしまふといった風潮であつた。

かつて——もうだいたい以前の事ではあるけれど。

重盛の子の資盛すけもりが、往来なかでせつしよう摂政の藤原基房もとふさに出会つたところ、資盛が車か

ら降りて礼をしなかつたので、当然、彼より身分の高い摂政家の従者が、

(なぜ、礼をなさらぬか。小松殿のような賢者のご子息でありながら、途上の礼もお弁わきまえ

ない筈はあるまい)

と、咎とがめ立てた。

——それを清盛が聞いて、

(わが孫を往来中で、辱はずかしめたのは怪けしからぬ)

とて、暴兵を向けて、さんざんに摂政家へ仕返しをした——などという事が、どうした

誤りか真まことしやかに巷間こうかんに云い伝えられて、それなども、彼の驕きょう慢まんの一つに今以て云われているが、事實は、甚だ違つていたのであつた。

仕返しをやつたのは、事實であるが、それをさせたのは、入道ではなく、資盛の父の重盛なのである。

入道殿のお子に似あわぬ君子である、賢者であると、院中にも世間にも、平家のうちでは評判の専らよい重盛のした事であつたが、事件の形から見て、

(あれも入道殿の仕業しわざよ)

と、臆測がすぐ真をなして、誰も、君子風な重盛の人品を、疑つてみる者もないのであつた。

そんなふうには、重盛ばかりでなく、宗盛これもりの所行でも、維盛こほんのうの落度でも、悪いことは皆入道のせいになつて、時には耳へも聞えて来たろうが、入道は、子煩悩こぼんのうな上に、総じて骨肉の者には甘いので、

「仕方のないやつ」

と、苦笑するに止まっていた。

身内びいきは、入道の大きな短所にちがいがなかつたが、それは彼が、幼少から余りに飢き

寒を骨身に知って来たせいであろう。貧窮を極めた一家が、世間からひどく虐げられて来た時代に成長した骨肉愛の延長と、彼の人のいちばい強い煩惱の一面とも観られるものであった。

——と云つて、彼の志や慾望が、彼の私生活に見られる如く他へも小乗的なものかといえ、なかなかそんな入道でない事は、彼が前人のやれない政策でも、よいと信ずれば、信念をもつてやり通して来ているのを見ても窺える事である。

彼が政治をやり出してから、支那宋代の文化が活潑に流入して来た。物資ばかりでなく、宋代の歴史経済の書物などもとりよせて、朝廷へ献上したりしている。瀬戸内海の航路を開いたり、兵庫港を築修して、和船宋船を賑わしたのも入道の力であった。

その兵庫港の築港をつくる時も、人柱を沈めなければ、海底の礎石がすわらないという工人たちの愚を笑つて、石に経文を書かせて沈め、経ヶ島を築きあげて、

(どうだ)

と、迷信を打破して時人へ示したのも入道であった。

その筆法で、寺社の領土を没取して、僧兵の勢力を削ろうとするのも、入道の方針だった。

明らかに、それらの事は、国家に貢献こうけんする所のある政策だったが、よい事は、世人からいわれなかった。すべて彼の私生活と、権力のあらわれに対する反感で消されてしまった。損といえは損な人、不徳といえは不徳な人、いずれにしても入道の心事には、寂しいものが一抹まつ常に横たわっていた事は争えなかった。

四

ひとしお寂さびしきの身に沁しみる秋ではあるし、重盛を亡くした後の気落ちも来ているせい
か、入道はいつになく、独りあれやこれと思ひめぐらして、

「ああ——」

彼らしくもない嘆息といきをついた。

そして、われ知らず頬をながれるものを拭ぬぐわずに、蓬壺ほうこの園にすだく昼の虫に心を沈め
ていると、どたどたと廊を早足に渡ってくる蹠あしおと音がした。

入道は、あわてて眼を拭ぬぐい、常よりもかえって恐い顔を作つて、

「誰だつ。静かに歩めつ」

と、叱った。

「わたくしです。早くお知らせしなければと思ったので、つい……」

子息の宗盛と——入道には孫にあたる——資盛すけもりとが、揃そろってそこに両手をつかえた。

「なんだ？ 慌あわただしゆう」

「父上。……ここにおける資盛が、当然うけ継ぐはずの越前の所領が、兄重盛が死んで間もないのに、何のお沙汰もなく、没収と、仰せ出されました。お聞き及びでございますか」

「何、重盛の所領を」

「嘘かと思つたくらいですが、糺ただしてみたところ、誤りのない事なのです」

「……そうか」

努めて冷静であろうとしたが、入道の顔いろは抑えきれないものに変っていた。

「そればかりではありませぬ」

宗盛が、なお凶に乗って、告げ口しかけると、

「うるさいっ」

入道は、吠えるように叱って、

「つべこべ云わんでもよい。また、例の鹿ヶ谷ししがたにだろう。退がれ。退がっておれ。——だが、

帰るなよ、あちらに控えておるのだ」

彼を大胆とか不敵とか世の知らぬ人は云つてゐるが、事實は小心といったほうが當つてゐる。激発しそうな感情が抑えきれなくなると、身を揺るがすのである。——重盛などは生前よくそれをたしなめて、

(太政入道ともお成りあそばしたら、むかしの貧乏ゆすりの癖はおやめなさい)

と、注意したものであるが、彼の持前は死ぬまで止みそうもない。そして額から頭にかけて、膨れた血管が露わに見えてくる程になると、もう坐つてもいられなくなるらしい。褥を立てて室のまわりを歩きはじめた。

もつともその憤りも、落雷のように怒発してしまえば後はさっぱり気も霽れる性であるが、彼とても理性はある。いやその位置の重い人だけに、人いちばい自分の激発が呼ぶ結果もよく弁えていた。

今もそうである。

彼は、面上一杯な憤懣を、紛らわす気か、鎮めるつもりで、廊へ出たり、欄へ立ったりしていたが、次第にその姿は、檻の中をめぐる猛獣にも似て来て、呻いたり、首をあげたり、ぐるぐる廻つたり、傍目にはまるでおかしいような狂態を現わして来た。と思うう

ちに、彼は、

「おらぬかつ。宗盛つ。——宗盛つ」

と、近くの室にいる侍たちは、胆をつぶして度を失うほどな大声で彼方へどなっていた。

五

何事かと驚いて、宗盛や資盛もあわててそれへ見えるし、侍たちも挙こつて、広縁の一方へ畏かしこまった。

すると入道は、

「福原へ赴ゆこう」

性急に云い出したものである。

「——都はおもしろくない。事々に気が滅め入るか焦いら立つか、生命いのちの楽しまぬことばかりだ。福原の荘へ赴おもむいて、遊び船を浮べよう。夜は、宗盛が舞を見、敦盛あつもりに笛をふかせ、資盛の鼓つづみを聞こうよ。——すぐにだぞ。支度支度」

もう入道は、室をすてて、先へ歩み出すのであった。

「答える間もあればこそだ。侍たちは走り出で、右往左往、

「お出ましであるぞ」

「お車の用意」

と、供触れして駈ける。

これから福原へ行くには夜をとおして明日の朝になろう。松明の用意も要る。少なく

も五百人や七百人の武者は従いてゆかねば物騒でもある。——為に、その慌ただしさと云

つたらぬ。

が、入道は斟酌もない。はやくも引出された車の中に移って、揺るぎ出すのを待ち

遠しげに坐っている。そして、

「宗盛も行け、資盛も行け」

と、いったふうには、その他の家族たちをも至極簡単に名ざして、後から思い出すまま云

う。

入道の気もちとしては、誰も行きたかろう、彼も遊びたかろう、孫や女どもへも、歓びを分けてやる気のであつたが、女たちも孫たちも、いや一族の誰でもが、入道と同行するのは余り欣しい事としていかなかった。氣づまりで窮屈で、もしご機嫌でも損じ

れば大変だし——折角、福原へ行つても、身にも皮にもならないと一致して陰でこぼしているのである。

そんな心理は、入道は少しも知らないので、

「みな乗つたか。何……まだ化粧していると。化粧などは、車の中でいたせばよいに」

と、独り上機嫌になつて——いや努めて機嫌よく気を取り直そうとして、簾の内から、従者に任せておけばよいような事まで、自身で世話をやくのであつた。

ようやく支度が揃う。

十輛に余る牛車が西八条の門を出た。侍女や女童の文車だの弓長刀を持つた側臣だのがつづいてゆく、大路へ出ればいつのまにか、前後に騎馬武者と千人近い兵がそれを護る列となつていた。

摂津の福原の別荘は、兵庫の海を園の前に、逆瀬川の水を殿楼の階下にとり入れていた。そこでは、都の白拍子や浪華の名ある遊君をあつめて美船を浮かべ、網を打たせ、夜は万燈を廊につらねて、敦盛が笛をふいたり、宗盛が舞つたりして、ついこの夏頃も、一門の公達はその風流やら芸事などを競いあつて、入道相国に、

——夏の夜は短い。

と、託かこたしめた事もある。

ただひとり、その夜の歓楽にも見えなかつたのは、もうその頃から体も悪かつたが、快よくてもいつでも嫌だと断る——長男の重盛だけであつた。

世間から君子と見られ、また、燈籠とうろうの大臣おとどなどと称よばれている重盛がいますと、入道相

国は誰より煙たがるくせに、その重盛が座にいない時は、やはり何か淋しいとみえて、

「あれは独りで何しているか。また、こよいも、堂籠どうごもりして経でも誦よんでいるかな。そ

れとも、時ほととぎす鳥でも聞いているだろうか。変り者ではあるよ」

などと、宴の半ばにも、自身から問わず語りを洩もらしたりするのであつた。

六

福原へ行くときさえいえば、一門の公達きんだちや女人達は元より、もういい年配の息子たちまで、遊ぶことしか考えていながつたが、入道の肚の内には、兵庫の津からその地方一帯に互わたつての、大規模な港を擁ようした都市計画の設計図が描かれていた。

入道は、以前から、

(もつと海外との交易を盛んにして新しい文化を入れ、自分の栄華を、自分一門のみでなく、庶民の中の繁栄ともさせたい)

と、抱負していた。

宋船との交易を盛んにするには、良い港が必要なので、築港の工事を起し、それと共に、都市の計画にかかったが、彼の設計図には、多分に、政治的な考えも入らずにいなかった。また平家の恒こうきゆう 久的な利益もその中へ織りこまずにいられない入道であった。

(いつその事、福原へ遷都せんとすればすべてにいい)

いい——というのは、自己を中心としての考えであるのだが、入道は、その位置、その権力の上に、いつのまにか自己も公人も混同していた。自分の考えをそのまま政治に移すことの危険をそう人ほど反省してみなかった。だから、政治を執る者には稀まれなほど、彼の政治には、彼の感情までが——何の包装もせず露骨に現れて来たりした。

なぜ入道が、福原へ遷都せんとするのがいいと考えたかといえば、彼にとつて、実に、誰よりも畏こわい——そして苦手でもある、公卿たちが、ややもすれば三井寺や奈良などの僧団の勢力とむすびついて、

(折だにあれば——)

と、平家打倒を画策していることが、多年のいろいろな事件や紛糾ふんきゆうでも分りすぎている程なので、

(それを切離すには、京都という因習の都を捨て、新しい都会と文化の中にすべてを遷すうつのにかざる)

と、立案したのであった。

そしてどしどし実現へうつし始めて、政治機関の一部さえ、今では福原にあるのである。海外との交通を促進したり、誰もが認めている僧徒の武力や政治運動に対して、それを撓ためる工夫をめぐらしたところは大きいによいし、国家的な正しい政策ともいえるが、その創案の根本は、何よりも平家一門の安泰の為にあるという事は、誰でもすぐ観破かんぱできるので、

(福原へ遷都などとは以てのほかである。いったい何の必要があつて——)

と、囂ごうごう々たる反対や不平を招いてしまった。

藤原氏などの遣やり口くちなら、

(一門の栄華を固める為ではない。国富のためまた、庶民のための国策である)

と、政治らしい政治として発表するであろうに、入道は、そんな上手もなく、また彫ぼうだ

大な地域には、桑田そうでんもあり、塩焼く海女あまの小屋もあるうちから、もう宏大な一門の別荘などを建て出したものである。

それもまだいいが。

政治機関の一部を移すのと同時に、孫や子や一門の子女など伴つれて来たり、浪華や都の遊君等のよい出先とするに至つては、いかに入道が、自己の煩惱ぼんのうと、国政とを、混同している頭の持主かがよく分ろう。

いったい入道の頭脳というものは、時の公卿や僧侶には見られない大理想も革新的な考えもいっばいにあつたが、よく窺うかがうと、その大脳と小脳には壁がなかつた。仕切のない大広間みたいな頭らしかつた。

七

「何を思われたか、入道殿には、にわかゆかに福原へ赴かれたそうな」

と、洛中に沙汰されてから、およそ一月余り後の出来事であつた。

それは十一月七日の夜、戌いぬの刻とおぼしき頃だつたとある。

宵から雲の断れ目は昼のように明るく、冬の夜というのに、妙に温い風がふき捲つて、往來の乾いた土ほこりが、戸ごとの燈火へ赤く霞んでいたが——そのうちに乾の方からぐわつと地鳴りが聞えて来たかと思うと——もう大地は発狂したかの如く震れに震れ洛中の人家九万余戸、大地震の惨害に見舞われていた。

幸いに、死者や民家の被害は、思つたほどでもなかつたと分つて、数日の後には、人々もややほつとして、災後の始末に奔命していたが、陰陽師の安倍泰親は、

「占文の示すところ、ただ事とも覚え候わず」

と、例によつて易経をひき、伝奏まで書を上す折にも、ひとり嘆息して涙をながしていたと聞えた。

「まだ、この上にも、これ以上の災害があるとは、いつたいどんな天変地異が起るのか」と、易を信ずる者は色を失い、同じ公卿でも、そう信じない若い人々は、

「怪しからぬ泰親が泣き言かな」

と、笑いとばした。

するとその月の十四日。

「たいへんじゃ」

という声がどこからともなく聞え渡った。何が大変か、よく分らない殿上人たちが専ら先に騒いでいた。

下部しもべの者を町へ見せにやつても、

「何と聞分けた事もござりませんが、ただ町中も凡事ただごとならず上下騒ぎ合っておりまする」
とのみで、真相は皆目かきもく知れなかつた。

しかし、長い間ではない。——やがて大變の実相は続々参内してくる朝臣たちの口から知れた。

わけても、関白基房もとくさなどは、真つ蒼な顔色を持ち、足許も危うげなばかりあたふたと参内あつて、

「福原の入道相国には、何をまた、思ったがえたか、物々しゅう軍馬を呼びあつめて、彼の地じゆらくより入浴あるとの報せしらである」

と、顛わななきながら披露ひろうした。

入道を極度に怖れる者は、百人が百人まであつた。だから入道を忌いみ嫌う者は百人のうち九十の上もあつた。

けれど怖れながらも、ほんの一部には、彼の一面を知つて、嫌いでない者もいた。もつ

と今の位置にいて、陽気な政治を布しいてくれてもいいと考えていた少数の者もいた。

そういう人たちは、かくと聞くより、さつと顔いろを変えて、

「さて、お持病の癩癬かんべきがなせる業わざには違いなからうが、そら恐ろしい事を口にし給うものよ。先頃の地震なえに、心の支柱さしえをとり外し、気でも狂わせ給うたか」

と、惜しみもし、慄おのきもした。

「ゆめ、厭いましい事を目に見ないように」

洛中の庶民まで、神々を念じ合っていたが、ついに、浄海入道の狂暴は、都の中に事実となつて現れ出した。

入道は自分を自分で火の車にのせ、火焰の中から常識の人にはあるまじき指図をした。法皇の近臣三十余名の官職を剥はぎとり、前関白基房をはじめ、藤大納言実国とうだいみなごんさねくにや按察大納言父子おやこなど、次々に都から追い出して、遠国へ流してしまった。

「何たる悪行ぞ」

もう百人中の一人も、入道の支持者ではなくなつた。

老将

一

ひどく咳せきが出る。出始めるとまた、容易におさまらない咳であつた。

「閉しめよ。……誰ぞ、その妻つま戸を閉めぬか」

咳せきの中から苦しげに、源三位頼政げんざんみよりまさは云つた。

小侍が走り出て、

「お閉めいたしますか」

と、念を押したが、訊かれるのさえ、息苦しうに、

「ウむ。……むむ……」

頷うなづきながら、厚紙こうしを唇くちに当てたまま、しばしは口をきき得ない。

もう四月である。邸のすぐ裏を、今年の花も、加茂かもの水は日ごとに流し去つて、若者た

ちは、衣ころも更かえしている。

——もう河風も冷たくはなからう。

冬のように閉じ籠こもっていた頼政は、稀に世間の空も見たくなくて、さつきから庭ごこしに、河原の水や、京の四山の若葉を見ているうちに、もう老骨に風が沁しみて、咳が出る。水みずが出なる。

「ぜひもない。わしももう……」

独り年とし齢を思う。

彼は、七十七になつていた。

年ばかりではない。この住居も古びた。平治の乱から二十年、近衛河原このえがわらのこの邸に、土籠もぐらのように住んで来た。——頼政はそう思う。土籠もぐらのようなど吾ながら思う。

何といつても、義朝が六条に榮えていた時代は、彼も源氏の名門の一として、共々華やかに暮くっていた。

では、なぜ平治の乱に、その義朝へ協力はしを約してあるくせに、合戦が起ると裏切つて、身、源氏でありながら六波羅へ奔はしつて清盛へ味方したか。

そして戦後あんなにも沢山な源氏方が、毎日のように、目のさきの河原で斬られたり、各地で掃滅そうめつされているのを見ながら、のめのめと、自分のみ助かつて来たか。

臆病者よ。

侍にも似げなき人間よ。

禽きんじゆう獣じゆうにもひとしい。

禽獣でも恩は知る。情はある。

人扱ひとあつかいすな。

武門ぶもんの生れ損そこないよ。

あらゆる蔑さげすみの言葉をもつて、源氏を惜しむ人々は云う。いや、平家の武士たちもこぞ挙つて云う。

それから二十年。彼はその中にじつと生きて来た。

何をいわれても黙々として。

が、彼は、自分の胸には独り慰めも持ち、毅然きげんたる信念を抱いていた。

なるほど、平治の乱には、はつきり義朝を捨て、六波羅へ加担した。一族を裏切った。

けれど、それは武門の道を踏み違えた事にはならない。たとえ一族へ弓をひいても、国家の大本へひく弓ではないからである。

義朝を始め一門の不覚は、源氏の興亡にばかり武者ぶるいして、国家の大本に思いを怠っていた事にある。敗北の因もそれと云つてよい。

清盛はそうでなかった。——晩年の行状とは人がちがっているような頭脳だった。——彼は、都の乱と聞くと、熊野の途中から引き返し、わずか五十騎ばかりで六波羅の邸に入ると、すぐ計略はかりごとをめぐらして、兵乱の中から上皇と天皇の御輦みくるまを自分のほうへお迎えし奉って、その上で戦を開始した。

——何であるの時、引く弓があるう。源氏といい平氏というも、私名である。ほんとの弓取の立つところは、私名の中にはない筈だ。

「自分は天地に恥じない」

頼政は、今も、そう思いながら、二十年、無言を通して来たその唇をかむのであった。

二

世の人々はまた。

(——彼が平家に隨身ずいしんしたのは、平家の栄華に隨身したのである。節義を売ったものだ。さもない武将ではある)

という見方から今にも頼政が恩爵おんしゃくにあずかるであろうと、平治の乱後、清盛以下の

六波羅一門が、爛漫らんまんと咲き華やぐ榮進ぶりと共に、彼へのご沙汰をも注目していたものだったが、頼政は心のうちで、

(否とよ。不遇ふぐうは覚悟のまえである。死ぬ以上生きるは辛いと知る身に、何の待つものがあろう)

と、ひとり答えていた。

けれど遠さすに、

(若い仲綱なかつなや兼綱や、またわれに従う家の子等は、不愜ふびんなものだ)

と、息子や郎党たちが、共に肩身を狭く世間の端に住んでいるのを、憐あわれまずにいられなかつた。

恩爵はおろか、邸宅も扶持ふちも、むかしのままだ。入道相国をはじめ平家一門が、その端くれに至るまで、爵位官職を私わたくしして、全盛の余沢に驕おごり、なおまだこの世に不平をさがしている中にも、頼政だけは、忘れられていた。近衛河原の古邸ふるやしきにただ一軒、置き残されたままだった。

稀 《たまたま》、思い出されても、

(裏切者のよい見せしめ)

とのみで、栄華の閥ぼつは一顧こも与えなかつた。そして平家人の頭には、何年たつても、
 (彼は源家の人間だ)

という観念も除かれなかつた。

それくらいだから、長年、禁門の衛府えふにありながら、彼のみは、昇殿もゆるされなかつた。

若年じやくねんから御所の衛まもりに立つ弓取の身として、それだけは頼政も、痛恨事としていたとみえて、ある時、殿上の人に、所懐しよかいの和歌をそつと示したところ、帝みかどのお耳にはいつて、

——あわれな心根、昇殿をゆるしてやれ。

との有難い御諛ごしよに、初めて彼も階きざはしを踏むことができたのであつた。

その時、頼政は一晩じゅう、君恩に感泣して、

(いつかは、この老骨を朝廷の御為おんために——)

と愈々《いよいよ》、大君の防人さきもりたる武士の本道を意志につよめて、同時に、

(犬ともよべ、畜生とも誹そしれ、われはわれの勤むるところを勤めて後の世に問わんと、なお老後を養つていた。

そういう彼に対して、平家一門の中で、ただひとり、ふと同情の眼を寄せた者がある。
（あれも七十にもなつて、まだ下位げいに留とどまつていたのか。さてさて気の毒なした。三位みにでも叙のぼせてやれ）

思い出したようににわかには、そう云つたのは、清盛であつた。

入道相国の恩命も、余りに遅きに失していたが、たとえそれが一片いっぺんの出来心でも、年来不遇な頼政には、欣うれしかつたに違ちがひない。

（入道殿も本来は、近年見るような人物ではない筈だが、余りに恵まれた順調まわと周まわりの一門に誤あやられている。——その誤りが入道殿の一身や一族だけの誤りで済めばよいが）

頼政は今でも、人間としての清盛に一片の愛あい惜せきを感じている。彼を誤らしめたくない気持を抱かかっている。けれど、どうにもならないものが遂に入道を、世間から「物狂おしき人」と呼よばせるところまで持つて来てしまった。しかし頼政から見ると彼をそこまで有頂うじやう天てんにさせたのも、一半いっはんの罪は、非難する世間にあると考かんえられるのであつた。——で、かつては自分に寄せられた一片の気の毒さを、今では頼政から入道へ思おもひ遣やつていいる程であつた。

裏門の戸をたたいて、

「ご子息の仲綱殿にお目にかかりたいが、おられますか」

と訪れた色の黒い——顔半分髻ひげに埋めている山伏があつた。

日陰日なたのそこらの地上に、毛虫が這つていた。——耳をすますと、頼政の咳せわぶきが、庭木の奥の古い棟むねから聞えてくるほど、そこ母屋は近かつた。

「誰だ？」

小舎人ことねりが中で腰をのぼした。紅い桜の実を烏帽子えぼしのなかへ拾っているのだつた。

「新宮しんぐうの山伏が、祈禱きとうに参じたと仰つしやつてくれれば分るが」

「ここは、入口ではありません。ご当家にだつて、表門はちゃんとある。あちらへ行つて、訪うたがよい」

「いや、厩門うまやもんを入れて、南の空地に向いている小門を叩たたけと仰つしやつた。その門は

ここであろう」

「誰が仰つしやつた？」

「仲綱殿が、お手紙の中に仰つしやった」

「あ。では新宮から、わざわざお招きした山伏どのか。……では大殿のご病氣のお加持かじにでも」

「左様でござる」

取澄ましていると、小舎人は、あわただしく駈けて行った。やがて頼政の子息の仲綱なかのが自身でそれへ来ると、

「おう……これは」

とのみで、お互いに多くも云わず、黙々と木戸を開け、木戸を通り、邸の内のどこかに姿をかくした。

それからだいぶ時刻を措おいて、仲綱は父のところへ来て、声密ひそかに、

「新宮十郎行家どのが、旅からお帰りになりました」

と、告げた。

すぐ後から山伏の行家がはいつて来た。

頼政は、顔をながめて、

「黙っておられたら人違いするほど、姿も顔もお変りになったのう。……して、諸国の様

子はどんなふうでござったか。伊豆へも参られたか。配所における頼朝様にもお会いなされた事であろうな」

待ちかねていた人であろう。頼政はもう咳せきもしない。憔悴しょうすいしていた顔色にも、近頃
にない元氣を取りもどして、矢つぎ早に、訊ね出した。

「ここは、何を申しても、おさしつかえない所か」

と、行家は仲綱へ、室外の氣配けはいを糺ただしてから、それに答えた。

「西国は歩きませんが、都から東北はみちのくの近くに至るまで、ほとんど隈くまなく遍歴しました。伊豆をこえて、亡き頭こゝのどの殿の遺子わすれがたみ——この行家には甥にあたる頼朝が成人ぶりも見届けました。宮のご密旨もそつと伝え、同所の北条時政とも語りました。ほぼ彼の地方の下固めはできておるものと見てよからうと存ずる。——その他、坂東、木曾、北陸の諸国にも、事あらばと待つ者が、どれほど、唾を装っているか知れません。……ただその連絡つながらがないだけです。また、頼朝をのぞいては、敢然とひとり真つ先に起つて、旗を挙げるほどの勇氣と力には欠けているだけのものです」

「その人々は」

「申しきれないほどの数です。後で自分の書いた物でお示し申そう。なお、歩き洩れた地

方もあるなれど、昨年来、浄海入道の暴状は日に募り、いよいよ地方の武家どもに、平氏討伐の念を固めさせて来たので、機は今ぞと、立ち帰って来た次第です。頼政殿、もうこれ以上待つものは何もありません。後は、もういちどそれがしが伊豆へ打合せに下ると同時に、あなたが起つまでの事です。——時にあなたのお心構えももうできておりまじょうな」

四

夜霞よがすみがたちこめていた。若葉の陰の月までが濡れている。四月九日の夜半、三条大路に人影もない。

「すこし待て。すこし……」

馬上の影が、先へゆく駒をよびとめた。

——何用かと振向くと、後なる古直衣ふるのうしの老武士は、手綱を抑えたまま鞍かがつぽへ屈かみこんでいる。——ごほん、ごほん、と体じゅうを揉んで咳せき入いっているのである。

「父上、お苦しゅうござるか」

嫡子ちやくしの仲綱が駒を返しかけると、

「行け、行け。……なんの大した事はない」

と、頼政は顔を振る。そして仲綱におくれじとまた急いだ。

三条高倉に、大きな森とも見える一劃があつた。後白河法皇第二の皇子、以仁王もちひとおうの御所であつた。先に来ていた行家は、御所の小門のほうに佇たたずんでいたが、急いで——と手を振つて知らせ、なお四辺あたりを見張つていた。

頼政父子おやこは、御所の内にかくれた。——それからの事は誰知るよしもない。後に思いあわせれば、宮に謁えつを賜わり、平家討伐の事や、諸国の源氏へ参加の令りようじ旨を下さる事など、夜もすがら頼政父子おやこと、諜しめし合せておられたかに思われる。

宮のご不遇にある事は久しかった。平家の専横に依ることはいうまでもない。

不遇な老将頼政の胸と、不遇な宮の御心みこころとは、いつか同じ志にむすばれていた。

「引けない弓矢を捨てて二十年め、今こそ引く弓矢を取れと、天地がわたくしへ命じておられます。——あわれ八十になんなんとする老齡頼政の力では、腐すえ朽くちたる六波羅といえ、覆くつがえすには至りませまいが、わたくしが起てば諸国の源氏が奮ふるい起ちましよう。世よあらた革ための真つ先に、討死せば、この老骨に花が咲くというもの……」

頼政は、そう真情を吐いて、宮のご決意をうごかし奉ったのであった。——ゆめ、令旨をいただこう為の巧言などではないことを、彼自身の心は神へさげんでいた。宮へそう申しあげた折、頼政は、その老骨をふるわせて泣いた。

新宮十郎行家は、紀州新宮の住人であるが、在京中に、頼政と親しくなり、この計画にもあづかったので、まず諸国の動静を視^み、伊豆にある甥^{おい}の周囲なども見届けた上でと、去年からの諸国遊歴となつたわけである。

九日の夜の伺候^{しこう}は、その報告と共に、最後の密議が、固められたものにちがいなからう。次の日、十日の夜。

十郎行家は、ふたたびその山伏すがたを、京の蹴上^{けあげ}から近江路へ急がせていた。

美濃、尾張と出て、伊豆へはいり、頼朝の配所にも、わずか一夜しか泊まらなかつたが、北条時政とも会して、すぐまた、甲斐^{かい}、信濃^{しなの}を駈けまわり、さらに、その時は脚をのぼして、奥州平泉の館^{たち}に、藤原秀衡^{ひでひら}を訪ね、そこに成人している源九郎義経ともひそかに会った。

——が、この旅の間に都では、大きな破綻^{はたん}ができていた。

行家の国元である新宮の武士たちの動きから、以仁王^{もちひとおう}をめぐる計画の全貌^{ぜんぼう}が、すつ

かり平家へ洩れてしまったのである。

浄海入道は、それを知ると嚇怒かくどして福原から京都に入り、以仁王を土佐へ流さんものと、武將に命じて、御所へ向わせたが、何ぞ知らん、命をうけた武將の中に頼政の二男兼綱もいたのである。

彼はまだ、老将頼政が、密謀の張本人とはゆめにも気づかず_にいたのである。——単に、入道はかくの如く半面はお人好しだったというだけでは当らない。彼の頭脳あたまはその行状ぶりの示すが如く、もうその頃から熱病かかに罹かかっていたものとしか考えられない。

夏隣り

一

「政子。——政子」

もう妻として呼び馴れている頼朝の声であった。

配所の晨は相変らず早い。良人が日課の読経をつとめている間、新妻は、居室を清掃し、釜殿にまで出て、いそいそ立ち働いていた。

そこも済み、良人の読経も終る頃と、彼女は、帳の陰にかくれて、朝の身化粧をしていた。

「お召でございますか」

四月の朝の清々しさに、清らかに掃除された室、そこに見る新妻の顔は、頼朝の眼にも、まだ朝ごとにめずらしく、そして美しく思われた。

「——急ではあるが、今日立って、お許はまた、伊豆山の走り湯権現に、しばらくの間、身を潜めていやれ。住居は、法音比丘尼の室がよかるうが、身の警護は、きのう使いに書面をもたせ、すべて阿闍梨覚淵どのに、おたのみ申してある。……よいか」

「はい」

素直な妻である。

——が、いつもその後で、一言がある。この夫人の聡明は、もう時々、頼朝を圧することがある。

「女子は足手まとい、いずれはそうと、先頃、新宮十郎行家様がお立ち寄りの時から、お

はなしを洩れ伺って、あらかじめ身仕舞みじまいはいたしておりました。わたくしの事は、お察じ
くだされますな」

「いや、そうか」

——実は、一時でも別れるといったら、涙でも見せられはしないかと、頼朝は、話し出
すまで、密ひそかに案じていたが、かえって、

(わたくしなどに後ろ髪うしろがみを引かれ遊ばすな)

と、励ますような妻のことばだったので、ほっとしたり、何かまた、心に足りないもの
を覚えたりした。

「それと——これも昨日、書面で伺ったことであるが、この二十年亡き父祖恩人たちの供く
養よのため、法華経千部の転読を立願し、それが今、八百部まで行を積み、残るところ二百
部となっておるが……これも早、大事に迫っては、当然勤めておられなくなった。……と
云うて折角、これまで懈怠けたいなくお勤めもうして参ったものを、後わずか二百部で、断念す
るも遺憾いかなんであると思ひ、覚淵御房におはからい申してみたところ、その志だけで、願意は
立った。わけて、八の文字は吉兆であるから、八百部転読でよかろうではないか——と仰
せられたとある」

政子は黙つて聞いていたが、良人がそんな点にまで気を懸けていたり、吉兆をよろこんだりしているのを、何か微笑ほほえましく見ているという風だった。

修養のひとつとして、彼女も法華経は修めているが、良人の朝暮の転読は、そんな立願からであつたのかと、今初めて聞いて、その信仰心にはすこし驚いた。そして自分の心の中には、常識としてはあるが、まだそれまでの信仰はないのにも気づいた。

「——ついでには」

と、頼朝はなお云いつづけていたのである。

「お許もとが、あちらへ参つたら、覚淵御房にお会いして、伊豆、箱根、三島の三社へ、頼朝の代りに、素懐そかいの大願成就の願文を捧げていただくように、お願いしておいて欲しい。——なおまた、八の吉字ちよなに因んで、米八石、絹八匹、檀紙だんし八束、葉八袋、白布八反、漆うるし八桶わた綿わた八梱こり、砂金八両。——そう八種の物を、それぞれへ頼朝の名を以て寄進の事を、お計らいを仰いでおくように」

「かしこまりました」

「頼んだぞ」

「はい」

と、いいつけを受けてから、

「——では、けさの朝餉あさげが、しばらくの間の、おわかれの膳部ぜんぶでございますね」

さすが、別れを傷いたむ新妻らしい眸が見えた。頼朝は、凜りんとして頷いた。

「そうだ。共にむかい馴れた膳部も、けさが当分のわかれ。……武運つたなくば、最後のものとなるかも知れない。楽しんでいただこう」

二

政子のすがたが、配所に見えなくなつた頃から、配所の人出入りは急に活潑になつた。しかも夜中の往来が多かつた。

例の、北条家の総領の宗時をはじめ、佐奈田余一さなだのよいち、天野遠景とのかげ、仁田忠常にったの、大庭景親兄弟などの若い仲間が、入れ代り立ちかわり、生き生きした面おもてをもつて大股にあるいて出入りする姿が、この附近の道でよく見かけられた。

北条時政も、時折見えた。

もとより、彼の行動は、この地方では大きな目標となるので、いつも微行しのびではあつたが。

わけて、めずらしい客は、渋谷庄司重国などが、老軀ろうくを運んで見えたことである。

——長年、この配所に仕えている佐々木定綱の弟の経高を、こんど養子に入れたので、その挨拶に——という事であつたが、

「いつのまにか、世も移つたのう。何せい、若い者の時勢じやよ。夏が来れば、夏が来るのを、人間の誰が遮さへぎられるものではない。相模さがみももうそろそろ夏が近うてな、生き生きと若い新樹が山野に伸びておる。——佐々木家の冠者かじやばら輩はらといい、わしの孫義清の妻の兄、大庭景義、景親の兄弟といい、みな羨ましいものどもよ。——これからだ。これからだ」
そんな事を云つて歸つた。

月がかわると。

京都にある河辺庄かわべの司行平から早打ちが到着した。

行平は、下総しもとうぎの住人だが、ちようど在京中であつたので、頼朝に、この急を告げることができたのである。

——書面の内容は、

以仁王もちひとおう、源三位頼政等のかねてからの準備も成つて、旗挙げの大事も実現に迫つた
眞際まぎわに、その計画は、平家の知るところとなつてしまつた。

この大蹉だいさつ跌てつに、事態は急転直下、悪化を辿たどって、三条高倉の宮の御所は時を移さず、平氏の軍兵のとり囲むところとなったが、その指揮に向けられた判官兼綱は、倂ぎょうにも、頼政の息子であったので、事前に父のほうへ急を密報しておいたので、頼政は、宮を奉じて、その前に御所をぬけ出し、三井寺へ遁のがれていた。頼政の郎党どもは、近衛河原の主人の邸へ火を放かけた後、宮のお後を慕もって、馳せ参じたが、何分、もう戦は後手ごてとなつて守備が整わないため、そこから南都へ向おうと、僧兵をも加えて宮のお供に立ち、宇治まで来ると、平家の軍勢二万余騎が、地の利をとつて包囲かかり、弓矢のつづく限り悪戦苦闘したが、遂に力及ばず、老将頼政もそこに自刃して果て、宮にも、光明山の鳥居とりいのほとりで、敵の流れ矢あたに中あたつて薨こうぜられてしまわれた。

かくて、せつかくの計画も、一朝に壊滅の惨を見、またしても、平氏輩ばらに「平家に弓をひく者はみなこうぞ」と、いやが上にも思いあがらせてしまう事とはなり終つた――。無念とも何とも申しようがない。洛中はなお戦乱の余波そうしやうに騒擾そうじやうを極めているが、取りあえずお知らせする。くれぐれも、自重してたまわるように――。

といったような報告で、その長文の文字のなかに、宇治川で死んだという頼政の顔や、

幾多の先駆した精霊しやうりようが、目に見えるような気がした。

その夜は。

頼朝から忍んで、北条家の館たちへゆき、時政と会って、夜明け前に、彼は配所へそつと帰つていった。

「……ああ」

終日、彼はものも云わず、眸ひとみにも力を欠いて坐つたきりでした。

それから六月にかけて。

乳母の妹の子にあたる三善康信みよしやすのぶやら、その他の京都にある縁者ほかから、次々と、飛信が来た。

みな、こんどの大變を細々と書いて、そしていい合せたように、

(伊豆とても、安心はなるまいぞ。身を大事に、万一の備えを)

と、それとなく、彼の身辺の危急を注意してよこした。

頼朝自身も、刻々と、自分の生命が、もう草叢くさむらの陰に、無事をゆるされない危うさに来て、自覚していた。

同時に、また。

その危険が、無事の中からはなかなか奮い起せない——乗るかそるかの出発へ——勇気と決断とを、いや応なく抱かせてくれていることにも、大きな感謝をもった。

自分の本質は、誰よりも自分が知っている。もしこういう四囲の状態が生じなかつたら、美しき新妻との生活に、断ちきれない未練も持ち、生来の遊惰ゆうだや閑かんに馴れた癖がつい意志を鈍にぶらせて、遂に、千載せんざいの機を逸してしまうかもしれない。——彼は自分の一面には多分にそういう自墮落じだらくのあることも省みていた。

そう考えると、危険は、生命の外部の事態よりも、生命の内部にあるもののほうが、はるかに危険であつたと思う。

——が、もう彼はその心のうちに、果断をすえていた。政子を伊豆山へ移して、身ひとつになつた心地の朝から、彼はわれながら、何か、日頃の凡夫でなくなつた気がしていた。誰もいない所で、独り坐っているにしても、その「断」を胆において、端巖と威をつくろつていた。

（——あなたは源家の統領でお在せば、いかで平家がこれ以上、見のがしておきましようぞ。一刻もはやく、身をもつて奥州へなりとお遁れあれ）

三善康信から来た二度目ののがみには、もう足元へ火がついたように書いている。

三浦次郎、千葉六郎など、先頃の事変で、京都へ出向いた者たちも、続々と、帰郷して来るにつれ、皆ここへ立寄って、

「頼政の旗挙げに、六波羅の神経は、ひどく過敏になった。頻々と、東国の平家へ、何やら通状を発しておく」

と、告げ、それとなく、

「お心構えを」

と、促して行つた。

勿論、こうした空気は、北条の館へも聞えているにちがいない。時政はどう考えているか。

容易にうごかない頼朝は、また、容易にうごきそうもない北条時政のほうの様子を、じつと、我慢するような気もちで眺めていた。

彼は、自分から北条家のほうへ足を運ぶことを、努めて避けていた。時政の態度にも同

じ気ぶりが見えるからであつた。彼は、口に出してこそ云わないが、
 (わしの加担がなくば、御身おんみの力のみでは何もなし得まい)

と、している風がある。

頼朝もまた、人いちばい鋭い感受性に富んでいるほうなので、暗に、

(余と共に起つのを好まないなら、手を拱こまぬいて見物していよ。また、望みならば、頼朝の
 敵に立つて、一箭せん交わしてみるもよい。妻は妻しゆうと。舅は舅。武門の道に立つては、私情の斟し
 酌んしゃくには及ばぬことぞ)

と、云わぬばかりな襟度きんどをわざと示しているのである。そのくせ、心のうちには、
 (彼なくては)

と、時政の実力や門地を、この際の唯一の力とはしているのであつたが。

すると、ついに、六月ももう末頃、時政のほうから真夜半まよなかに運んで来た。

明け方近くまで、聳、舅は密議をしていた。その席へ家人の藤九郎盛長もりながも、そつと呼
 ばれた。

暗いうちに時政は帰った。

夜が白むと、つづいて藤九郎盛長は、軽装して、どこかへ旅立つた。

——後で分つた事であるが、その藤九郎盛長は、先に山伏すがたの新宮十郎行家が令旨を伝え歩いた国々へ、再度、頼朝の名を以て、

——時節到来、旗下に参ぜよ

との檄をもつて、源氏の武士を狩出しに行つたのであつた。

四

「邦通。何しておるか」

頼朝はまた、奥の棟へ自分から足を運んで、そこに懸人かかりゆうどの藤原邦通へ話しかけた。

「や。殿ですか」

邦通は、女のように針をもつて縫物ぬいものをしていた。

頼朝も、それを眺めて、苦笑した。

「そちは、縫物までするか。はてさて、器用な男ではある」

「針を持つ業も、武者の心得のひとつでございませう。陣中に洗濯物すすぎものをしたり針を持つ女

の群れをつれている場合はようございませうが、それもいない時は、鎧よろいの袖ほこの綻ほころびや、何かの不自由をどう致そしまししょう」

「なるほど。さては其方そちの舞や音曲のたしなみも、陣中の備えか」

「役に立たない物といつては、どんな時でも何一つないかと存じます。ですから、わたくしの如き無能でも、当所にお養い下さるものと存じております」

「いかにも。……時にもう数年前からの絵図面は、出来上がっているだろうな」

「とうに出来ております。——が、まだあれを持ってと、お声のないうちは、あれの要いる時節が参らぬものと、てまえの筐きょう底うていにふかくしまい込んでおきました」

「見せてくれい」

頼朝は、そこへ坐つて、彼の取出した近郷一帯の図面を見て、非常に満足そうであつたが、

「至急、もう一面、図ずを写してもらいたいが」

「これと同じものを」

「いや、これにないものだ。それは山木判官兼隆の邸の内部。明細にとは望まぬが」

「畏かしこまりました。——しかし、ずいぶん難しいこととございますな」

「生命がけの仕事であるの」

「元よりです。けれど幸い、山木家の郎党にも、兼隆の一族にも、てまえば少しも顔を知られておりません。他国者で、身分のないのが僥倖しあわせです。さつそく、取りかかりましょう」

その後、どう手づるを求めて入りこんだものか、邦通は例の人あたりのよい弁舌と、遊芸の才を利用して、山木家へ近づき、目代の判官兼隆の宴席になど現れていた。

すでに、藤九郎盛長が、頼朝の施行状せぎようじようを携たずえて、諸国の源氏を狩りもよおしに立つてからは、時政の夜中の訪れは、頻々とかさなっていた。

今は、もう起ち上がったのも同じことである。——そうなると、たとえ失敗しても、裸の一流人るにんに過ぎない身軽な頼朝よりは、位置もあり財宝もあり、妻も子も一族も多い——そしてこれから余生を安穩あんのんに楽しもうとすれば楽しめる——時政のほうやつきが非常に躍起やつきとなつて来た。

「時政、いざとなつたら、兵はどのくらいできるか。糧食はどれほど続くか。まっ先に襲よせて討つべきものは、山木判官として、その後すぐ、どこへかかるか」

頼朝は、いつのまにか、そんな事を糺ただすにしても、敬称を廃して、

「時政、時政」

と、呼び捨てにした。

舅しゅうととしてでなく、臣下として扱いはじめた。

時政は、内心、

「この若者、若いに似げなく、なかなか駈引に心をつかうな」

と思ったが、もう彼の立場は、対頼朝との地歩などに、心を勞していられなかった。

それに、時政は、伊豆半国に互わたる自分の勢力というものを、かなり大きく自負していたが、実際となつてみると、自分と共に、生死を賭とすものと信ぜられる数は、極めて尠すくなかつた。まだまだこの地方にも、平家崇拜と平家恐怖の観念が、大部分の者の頭に、牢固ろうことして抜き難い力を持っているからであつた。

雨地うち・月天げってん

秋となった。

今朝、邦通はひよっこり帰って来た。釜殿の者や、厩舎人などに、

「永い事、どこへ旅してござった？」

と問われても、にやにや笑ったのみで奥の棟へかくれたが、いつとはなく、頼朝の手許へ、頼朝が待ち望んでいたものを届けていた。

八月七日の朝。

頼朝は、何思ったか、急にその藤原邦通と、住吉昌長のふたりを呼んで、

「わが生涯の門立ちを決する日は、いつが吉日か、謹んで卜いを立てよ」と、いいつけた。

二人は、はつと、大きな衝撃をうけた面持で、頭を下げた。——お答えは後刻にと、すぐ退がった。

ふたりは、水垢離をとって、易をたてた。そして頼朝の前へ出て告げた。

「この月、十七日こそ、何のお障りなき吉日と考えられます」

「十七日」

頼朝は、大きな眸をした。その眸から発したものに、二人は何という事なく驚いた。だ

が、気のせいですう見えたのかも知れない。

「十七日か。よからう」

とまた、口のうちに、ただごと凡事のように頼朝は独り答えていた。

その十三日となると、佐々木定綱、盛綱の兄弟は、頼朝の室へやを退がってから間もなく、

「ちよつと、相模さがみの父の家へ、用たしに行つてくる」

と、厩うまやから馬を曳ひき出して遽にわかに出で行つた。

「郷さとの家に用事ができた」

「叔父貴から手紙が来た」

「三島まで買ひものに行く」

などと、それから続いて、この家人が次々に、配所から暇を告げて出て行つたので、

配所は急に、無人になつた。

けれど、入れ代りに。

どひのじろうさねひら土肥次郎実平、くどうのすけしげみつ工藤介茂光、岡崎四郎義実、宇佐美三郎、天野遠景、加藤次景かげか

ど廉などという人々や、日頃もよく見える面々が、一名ずつ頼朝の室へやへ招かれて、

「異存なあるや?」

と、十七日を旗挙げと決めている——意中の底を打明けられた。

もとより、将来の大計とか、当日の戦略とかいう機密は、頼朝と時政のふたりだけが、胸にたたんでいた事だった。

「この期ごに、何の異存がありませんよう。あなたがお起ちあれば、今が今でも、日頃の誓いを、陣頭で示すだけの用意はいつでもしております」

誰の答えにも、ためらいは見えなかった。むしろ実行に迫ってから、各の意地には、なお強烈なものが加わって来たかを感じられた。——よしと、頼朝も心のうちで、この計画の可能性が、多分に信じられて来た。

彼は、力づいた。

夜の眠りも、その溢あふれる力のうずきに、かえって寝苦しかった。

「こんなことでは困る」

と、自分をたしなめてみても、落着かないで仕方がなかった。配所の二十年間に、実にめずらしく、ここ数日だけ、読経の声もしなかった。

十五日のたそがれから雨が降り出した。十六日も降りつづけた。——かなりの雨量で、富士も箱根連山も見えない。白い霧きりつむじ旋風と雨のみが野を翔かけまわっていた。

「あすは、愈 《いよいよ》、十七日」

無言のうちに、誰の面も硬おもてこわばつていた。その十六日の夕方、頼朝は、蓑笠みのかさに身をつつんで、わずかな従者と共に、密かに配所を出、北条家のほうへ、移つていた。

待ちどおしい——しかしまた、恐ろしい気もする一夜を、彼は、北条家の奥に眠つた。ふと、眼のあくたびに、瀟々しょうしょうと、雨の音ばかり耳についた。そして夜はなかなか明けてこなかつた。

二

チチ、チチと、小禽ことりの音がする。客殿の戸のすきまから灰白ほのしろい光がさす。夜明けだ。頼朝は、声なく、叫びながら衾ふすまを蹴つて起きた。

「——治承四年八月十七日」

衣服をまといながら彼は口のうちで云つた。

この日を、想念に刻んで、心のまん中へ、碑ひとして建てた。

「佐殿すけどのには、はやお目ざめになられましたか」

誰やら早足に来て、戸の外からこう質ただす。頼朝が、それに対して、

「おうつ」

と答えると、また、ばらばらと駈け去つてゆく。

館のうちには、すでに物々しい空気がみちている。夜来の豪雨を冒おかして、馳せ参じている若人輩わこうどばらの顔つきや姿が眼にうかぶ。さてはまた、ここの北条家の家族や郎党、一門の誰彼にとつても、きようこそは、成るか成らぬか、興亡のわかれ目に臨む朝であつた。

「お。……霽はれたな」

頼朝は、欄らんへ出ると、肺にいつぱいの大気を吸つた。まだうす暗いが、空は落着いて、美しい晴空が、天の一角から澄みかけていた。

「館やかたには、どこにおらるるか」

廊を奥へと、歩いて行きながら、ふと見た老女に問うと、

「はや、お山の大日堂へお渡りなされました」

と、云う。

道理で、母屋や客殿は、余りに平常と変りがない。大玄関のほうもひそとしている。頼朝は、時政の用意をうなずきながら、小侍に導かれて、庭つづきの小高い山へ登つて行つ

た。

おとといからの雨に、木々の葉は地をかくしていた。所々に、生木の折れが目につく。こんな小山でも、方々に水が出て、無数の小さい滝音が、館の濠へ落ちていた。

紫ばんだぎようあん 暁 闇の中に、大日堂の屋根が高くあつた。雲を破つた朝陽のまっ赤な光が、その廂ひさし、その大柱——また、その縁からまわりに、ひしと簇むらつている 甲かちゆう 冑ゆうの人影に、
きら 燦と、は 刎ね返つていた。

「やあ。みんな！」

頼朝は、そこに立つと、粗野な大声を出して、呼びかけた。

「早いことだな。わしは、ゆうべに限つて、深々と眠つてしまった。——今朝、起されるまで、何も知らないほどに」

と、云つて笑つた。

実際は、そうでなかつたが、そう云つたのである。それと、平常の謹厳を解いて、今朝は非常に磊らいらく落な、何でもない集まりのように、自身から粗野にくだけて見せた。

反対に、並居なみいる人々は、彼のすがたを仰ぐと、一斉に向き直つて、縁にいた者は大地へ降り、たたず 佇んでいた者は端へ寄つて、地へひざまずき、

「待ちに待つたる日が参りました。おさしずに従つて、かねてさし上げおいた誓紙の如く、各、伝家の一腰を横たえ、身命も擲つて、かくは勢揃いいたしてござります。——わが君にも、疾く疾く、お身じたくを」

と、揃つて礼をした。

頼朝は、武者たちが退き開いた間を通つて、堂の階をのぼり、大日堂の一隅で、鎧をまとつた。

堂の上には、北条時政と、牧の方としかいなかった。縁にいた次男の義時が、母によばれて、母と共に、頼朝が具足をつけるのを、側から共に介添した。

「……………」

時政は、一方にあつて、さつきから黙然と、外の頭数のみかぞえていた。彼の予定していた人数よりも、思いのほか集まりが尠ない——という顔いろに見えた。

三

わけて、今朝の勢揃いには、必ず見えていなければならぬ顔が見えない。時政は、そ

れを密かに憂えていた。

佐々木太郎定綱を頭として、次郎経高、三郎盛綱、四郎高綱の四人の兄弟である。

いや、四人の数はともあれ、彼等の不参は、その父とか、養父とか、姉聳とか、従兄弟とかいう、相模国の一方の勢力が、早くも、旗擧げに先立って、離反を表示しているのではなからうか？

そう時政は懸念されてならないのである。

渋谷庄司重国といい、大庭景親といい、どつちかといえは、源氏方より平家に縁の

濃い者たちである。ただ佐々木兄弟の父秀義だけが、近江源氏の血を今も頑固に誇っている老人だが、これは平治の乱に、近江を追われて相模へ移住して来て以来、ずっと渋谷庄司の世話になつている関係から、その一族には、叛けない義理あいがある。

一族中の大庭景親などは、もつとも平家色の濃厚な人物である。もし、佐々木兄弟の行動から、今朝の勢ぞろいの事でも嗅ぎ知つたら、これは由々しい手ちがいになる。即刻、六波羅に早打ちが飛んでいるものと考えておかなければならない。

「定綱、盛綱などは、見えておらうか」

頼朝も、気にかけていたとみえて、身支度を終ると、堂の縁近くへ坐して、人数の上を

見渡しながら、傍らの義時へたずねた。

「おらぬようだ」

答えたのは、義時でなく、その父の時政であった。

「……はてな」

頼朝も、急に、気色をくもらせた。——時政の考えると同じように、彼もまた、兄弟の不参と聞いて、隣国の大きな一勢力の向背こうはいに心安からぬものを覚えたが、それ以上、

（あれ程、多年、自分へ忠実に仕えてくれた家人が、今朝の真際まにになつて？）

と、何かしら、もう、裏切られたように、主従のあいだの信念を挫ひしがれた心地も加わつていた。

「そういえば、どうしたものであろう」

「見えぬのか。佐々木兄弟は」

「来ておらぬが……」

「はや時刻。朝討ちの機は束の間つかま、やがて陽も高くなろうに」

寄り集つどうた面々は、顧み合つて、口々につぶやいた。

頼朝は、心のうちで、

(不覚……。つい彼等の志にうごかされ、大事を告げたのはわが一生の過りであつたか)と、悔いた。

時政は、やや焦躁をその眉にあらわして、

「いつたい何しに、佐々木の兄弟どもは、相模まで帰つたのでござるか。……帰るのからして怪訝しいではないか。この大事をひかえた数日前などに」

と、苦りきつて訊ねた。

「されば、十二日の夜半、定綱、盛綱のふたりへ、旗拵の事を打明けたところ、勇躍して、家より甲冑を取つて参ると申し——十三日の朝方、相模へ帰つたのであつたが」

頼朝が、悔いを洩らすのを聞くと、時政は、いよいよ氣の腐つた顔して、

「……では、参るまい。いずれ親どもや一族に、問い糺されて、来るにも来られずにいるか、それとも、臆病風にふかれて変心したか、どつちかであろうて——」

暗に、頼朝の不覚を、詰るように云つた。

——が、しかし、庭上にある百人足らずの若い若者輩は、そんな問題など、すこしも意としていないらしく、

「いざ、立ちましよう。あの通り、陽も昇りかけました」

と、意気は軒昂であつた。

四

いつの間にか、頼朝と時政は、そこを立つて、大日像の壇のうしろへ隠れ、二人だけで、ひそひそ協議していた。

「何を猶予ゆうよなされているのだ。かかる間に、朝がけの時刻も逸いつしてしまおうに」
堂の外では、気負い立っている人数が口々に云い合いながら、両将の号令一下を待ち焦こがれているのである。

——が、容易に、時政も立たず、頼朝も出て来なかつた。

そのうちに、ようやく、逸はやりきつた将士は、何か不安と疑いを抱き出した。わけて、若い中にも若い佐奈田余一さなだのよいち、南条小次郎、仁田四郎忠常などは、

「大事は、はや取止めか。この期ごになつて、北条殿にもわが君にも、何のご評議ぞや」
と、聞えよがしに、怒りさえおびて云い放つたのであつた。

わりもない。すでに陽は高くなりかけてゆく。夜討朝がけは敵の虚きよを衝ついてこそ効かいはあ

るのだ。これでは堂々たる白昼戦になってしまう。

「しずまれ」

やがて頼朝の声があった。その姿を堂の縁に見せて、一同へ告げ渡した。

「佐々木兄弟その他、なお遅着の者がだいぶ多い。また、兵略上にも、最初の方針をすこし変更の必要もあるので、今暁の朝がけは延期することに決めた。——次の命令の下るまで、一同は、ここを去らずに、静かに休息いたしおるよう」

云い終ると、頼朝も時政も、そのまま、館のほうへ歩み去ってしまった。

前の夜から眠りもせず、まだ風雨さえひどかった暗いうちに、三里、四里も距てている諸所の在所から馳せつけて来た面々は、そう聞くと、一時は面おもてに色なを作して、頼朝、時政のうしろ姿を見送っていたが——次の一瞬には、気抜けしたように、

「ままよ」

「睡まくなつた」

「その間に、寝ろと御意か」

などとつぶやき合いながら、堂を中心として、思い思いに、自由な姿にくずれてしまった。

頼朝も、時政も、いったん館へもどって、休息していたが、その日の午ひるの頃まで、お互

いに無言のうちに、

(まだか? ……。佐々木の兄弟どもは、まだ来きおらぬか)

と、待ちかねていた。

午ひるも過ぎる。

その佐々木の兄弟はおろか、不参の者も、一人として来なかった。——馳せつけて来るほどの者は、当然、時刻もたがえず、すでに来ていた筈であった。

「どう召さるな」

時政は、頼朝へ、最後の肚を質ただすように云い出した。

「あれへ集まつただけの人数を以て、ともかく、決然とやりますかな。到着の人員は八十五騎という。……たんだ八十五騎じやが」

「元より最初から烏合うごうの数は望まぬところ。一人だに、一念神仏に通じれば、世をも動かそう。鉄石の心をもつ、武士つわものの八十余騎もおれば、何事か貫けぬことやあろう」

「それと、朝がけを取止めたからには、当然、夜討となるが、こよいは三島明みようじん神の祭、明十八日は、観世音の潔斎けつさいび日で、あなたに取つて、殺せつしよう生は好まれますまい。……とすると、十九日にもなるが、そう延引しては、ついに事の洩れる心配もあるが」

——すると、そこへ、

「見えられました。佐々木定綱どの、つねたか経高どの以下、四名のご兄弟方、ただ今、門前にお着きでございます」

と、館の侍一、二名が、あわただしく廊を駈けて来て、二人のいる室へどなった。

五

「なに。佐々木の兄弟どもが、今馳せつけて見えたとか」

よほど欣うれしかったに違いない。頼朝は、聞くとすぐ、告げに来た侍たちと共に、

「どこにおるか。何処に——」

と、大股に廊を急いで駈け出していた。

門内の広間に、疲れきつた二頭の瘦やせうま馬をいたわりながら、四人の兄弟は佇たたずんでいた。

兄の定綱も、次の経高も、三男の盛綱も、末の四郎高綱も、池から這い上がったように、武装した全身、雨と泥にまみれていた。

「オオ」

頼朝が、駈けよると、兄弟たちも等しく、

「おう……」

と、それへひざまずいたまま、しばらくは、ことばもなかった。

（——お前たちのために、大事な今朝の朝討の機を逸したではないか！ 何を愚図愚図していたのだ！）

兄弟が見えたら頭から叱るつもりであったことばも頼朝は、眼がしらに滲み出す熱いもののために、どこへやら喪失していた。

やがて、兄の定綱が、こう云い訳した。

「遅着の罪、いかようとも、お叱り下さいませ。——今朝の東が白まぬうちにと、兄弟ども、夜来の風雨の中を衝いて、必死と急ぎましたなれど、豪雨のため、途々、橋が流されていたり、崖くずれに阻まれたり——それに、いかんせん渋谷殿の一族にも、父にも語らわず、密かに参りましたため、良い馬も持ち合せず、二頭の馬に、四人が交々《こもごも》乗り代つては駈けたりなどして来ましたので、存外、道に手間どりました。……何とお詫びのいたしようもございませぬ」

頼朝は聞いているうちに、滂沱と流れる涙をどうしようもなかった。主従の血はこんな

にも濃いものだったかと改めて知った。一刻でも、この兄弟たちの心事を猜疑さいぎしたのは、濟まない事であつたと思つた。

「よい、よい。……もう云うな。合戦は夜となつた。やすめ、疲れたであろう」

彼も、真情を吐いた。

主君の真情にふれると、兄弟たちはもう疲れもわずれて、

(この君の為には)

と、なおさら、心をかため、

(夜となつたら、この遅着の罪を、働きの上に)

と、償つぐないを心に誓つた。

静かに、十七日の午さがりは過ぎて行つた。伊豆の山々も、田も、町の人々も、やがて何事が今夜を待つてゐるか、知るものはない。ただ暴風雨あらしのあとの夏雲が、やがて真つ赤に、西の空を焦こがして来たのみであつた。

やや残光が淡うすれると、陽は落ちて、山ふところは紫の夕闇をこめて来た。ぽつり、ぽつりと物見の者が、北条家の内へ歸つて来た。たつぷり昼寝した八十何名かの武者輩ばらひぐらひは、蝸かの声がいっぱいに聞える山の大日堂のまわりに、再び、今朝のように影を集めていた。

大きな宵よいづき月が、狩野川かのがわの上流からのぼっていた。木々が光る。時政も頼朝も、やがてそれへ登つて来た。夏なのに、ふしぎに皆、肌寒さが感じられた。毛穴をよだてているような顔いろは、月のせいばかりではなかった。

「いぎ、行こう」

時政は、先に立った。

八十余騎の黒い影はゆるぎ出した。——頼朝は、時政の意見に従つて、後に残ることになつた。——佐々木三郎盛綱、加藤次景廉かげかど、堀藤次親家ほりのとうじちかいえの三人だけを側において。

彼は、堂の縁へ跳び上がつて、駈けてゆく味方の勢を見送っていた。御所内の裏濠うらぼりへ降りて、そのの吊橋つりばしを駈けわたり、宿場へつづく並木道を反対に、山のほうへ向つてゆく一かたまりがやがて見える。遠くから望むとなおさら心細い小人数に思われた。——この少数な人影が、一世を覆す原動力くつがえになり得ようなどとは、考えられない事だった。恐らく、頼朝自身でも、常識としては、そうあつたに違いない。

六

時政は、自分が兵の先に立つて、館を立つ前に、

「あいにく今日は、三島明神の祭日ゆえ、大路を進めば、往来の者の目にふれて、逸いぢはや敵方へ知れよう。——蛭ひるヶ島しまの間道を迂回して襲よせてはどうであろう」

と、案じて、頼朝や子息たちに計ったが、誰もみな、

「大事の一步から、裏道づたいはおもしろくない。大道を堂々行こう」と、いうに一致したので、

「さらば」

と一気に、まだ宵の街道を山之木郷ごうへさして駆けたのであった。

途中、肥田原まで来ると、時政は馬上から定綱をふり向いて、

「山木判官の後見、堤つみごん権守かみ信遠ぶとおは、山木家の北山に居を構えておるが、その信遠は、

勇猛な聞えのある男ではあるし、旁 《かたがた》、この小勢では、一方攻めしているまに包まれる懼おそれもある。御辺の兄弟たちは、力を協せて、その信遠の住居へ向え」

と、いいつけた。

定綱の兄弟たちは、

「心得た」

と、わずかな別軍をひきいて牛鋏うしくわから道を曲まがつた。

時政からつけてよこした源藤太という雑色男ぞうしきおとこは、よく勝手を弁えているというので、堤信遠の邸の裏手へ兵をまわして、そこからふいに矢を射こんだ。

裏の方で、鬨とぎこえの声があがると同時に、佐々木兄弟は、表から躍りこんで、

「信遠やある！」

と、屋内へどなった。

邸の内は、突然の事に、うろたえた人影が、屋鳴りをさせて駈けあわわっていた。その大屋根の上に、八月十七日の月が昼のようにあつた。

「あつ、そこにか」

兄弟たちの影を見て、六、七名の郎党が、思い思いな得物えものを持って躍り出して来た。血とも思えない血しおが月の光に黒々と、そこ此処ここへ無造作に撒まきちらされた。

ひとり組み伏せて、

「くッ」

と、上と下で、白刃を奪り合とっていた次男経高が、深股ふかももへ矢をうけて、

「やられたッ」

と、さげんだ。

その隙に、猛然と、刎ね起きて経高へ迫りかけた敵を見ると定綱は、

「おのれ」

と、飛びついて、うしろから弟の敵を斬り伏した。

矢は滅茶苦茶にどこからともなく飛んで来るが、案外、相手に立って来る敵は少ない。

中にひとり凄まじい働きをして、味方を悩ましている男があつた。それこそ、主あるじの信遠と見て、

「その首を」

と、経高が、傷手いたでもわすれて、よろ這いながら近づいて行くと、信遠の方から、

「何なに奴やつツ」

と、太刀をかぶつて、向つて来た。

経高は、危うく見えた。死力をしぼつて、渡りあっている間に、屋内を駆けまわつて、

「信遠はどこに」

と、血眼ちまなこで当の相手をさがしていた定綱と、高綱のふたりが、

「やつ、あれだ」

縁を跳び降りて、三方から信遠をかこみ、無性に斬り捲つて、ようやく彼を討ち取つた。

——その頃。

本軍の時政以下の者は、山木家の山裾を流れている天満橋を押渡つて、その中腹に見える土塀門へ近づくまでは、正面の石段道を避けて、左右の崖を、徐々と這いのぼつていた。——木の間を洩れる月の斑と、風に降る雫のほか、まだ何の物音も揚がっていなかった。

七

燭はまたたいているだけで仄暗い。さし込む月のほうが明るかった。手枕で横になっている人の足の爪にまで、その白い光は映っていた。

寝ている人の体から酒のにおいが霧のように立っている。ふたりの侍女は、黙然と、側に坐して蚊を追っていた。自墮落な主人のすがたを悲しむかのように、二つの白い顔は、冷たい眉をそろえて沈黙をまもっていた。

「——殿つ。殿つツ」

突然であつた。

登音も、ここの部屋までは来ない間にである。

「狼藉者が」

「夜討つ、夜討つ」

あわただしく聞えて来た。

うつらうつら眠っていた山木兼隆が、愕と、首をもたげて、

「何っ?」

と、酔眼をみはつて見廻したとたん、廂の上を、しゆるしゆるツと、力のない外れ

矢の這う音がした。

「——あつ」

跳び起きて、うしろへ、

「長刀。長刀」

早口に呼んだが、侍女はもういなかった。逃げ転びながら、兼隆の足もとで、きやツと悲鳴を立てたが、兼隆の耳は、もうその声にもうつらであつた。

びゅんっ——

どこかで旺さかんな矢うなりがする。ここへも姿を見せない郎党たちが、はや射返しているのだなど知ると、兼隆は、一族の上にあります。また、六波羅の目代もくだいという職にある自分の重責を胸によび起していた。

同時に、

「ぬかった」

と、悔いもし、その悔いに、総毛立つような怒りに燃えた。

「遂に、自暴自棄となった流人るにんめが、あぶれ者を語らつて襲よせて来たか」

そう思った。——その程度にしか、この咄嗟とつさ、この事態にぶつかつても、彼には判断されなかつたのである。

政子を奪われた事件でも、兼隆が胸をなでて、あのまま紛争の表面化するのを避けていたのは、

(配所の流人ずれと、六波羅の地方官たる自分とが、対等に、喧嘩するのも大人げないと、自分を高く持して、頼朝をあくまで卑いやしんでいたからである。

六波羅の目代という官僚的な気位きぐらいは、庶民の想像以上、彼自身には、高い位置であつ

た。従つて、頼朝をめぐる郷土の青年たちの活動も、まったく知らないではなかったが、
(多寡たかの知れたもの)

としていたし、また、それらの青年をもく目しては、頼朝同様に、
(生意気ざかりな不良の徒)

と、いう程度のご概念で、法規の末節ばかりをやかましく云い、姑息こそくな意地のわるい虐め
方のみをして、肝腎かんじんな頼朝をめぐる若い仲間のうちにあつた大きな意欲が何であるかな
どという点は見のがしていたのである。

平家をたお休す。

たとえそんな事を、こん夜の前に、彼の耳元で大きくどなる者があつても、彼は腹をか
かえて笑つたに違いないのである。

「小癩こしやくなつ——」

と、長刀ながなたを押つ取つて、表の口へ、駈け出して行くまでも、彼はまだ、そんな暴徒の
なかまに、北条時政などというよい年をした分別者が、加担していようなどとは、思いうか泛
んでも来なかつた。

八

ちようどその夜は、三島明神の祭で、山木家の家人も、大半は参詣さんけいに出払っていた。

いつもその帰りには、黄瀬川の宿しゆくなどで遊びに更ふかすのも常だったから、館に居合せた郎党はいくらの数でもなかった。

攻め矢、防ぎ矢、双方から射る矢うなりの一瞬がやむと、ばらばらと石などが投げこまれ、続いて門扉もんびを打ち壊す音やら、土塀をこえて躍り入る兵の影やら、邸のうちにはたちまち死闘の渦に巻きこまれた。

そこへ。

北山の方面から、堤信遠を討ちとめた佐々木定綱や経高の兄弟が、信遠の首を刃の先に刺しつらぬいて、

「討った。討った」

「信遠を討ち取ったっ」

と、口々にさげびながら、ここへ加勢に駆けて来たので、寄手よせての指揮をしていた時政は、「北山は、はや陥ちたぞ。味方の幸先はいいぞ。山木兼隆を討ちもらすな。塀まわりへ気

をくばられよ」

と、声を囁^からしていた。

甲冑の兵に追いつつまれながら、死にももの狂いに、逃げ、踏みとどまり、また逃げ走つては、また戦いして、夜叉^{やしや}の姿になっていた山木判官は、時政のその声音^{こわね}に、愕然^{がくぜん}、血ばしつた眼をさまよわせたが、

「おツつ？ ——その声は」

と、時政のほうへ向つて、まっしぐらに、大長刀をひつ提げて駈けて来た。

そして、刮^{かつ}と、大きな眼^{まなこ}を、そこにいた人影に向けて、

「ああつ。……時政かつ？」

なおも、信じられないように、呻^{うめ}いたが、最期と、観念したものか、

「欺^{あざむ}かれたつ」

と、無念そうに、齒がみをしながら、長刀を振つて、いきなり時政の真つこうへ跳びついて来た。

*

*

*

頼朝は、山の大日堂の縁に、じつと立ったまま身動きもせず、そこから、山之木郷の空

を見ていた。

北条家の館は、しいんとしていた。男という男はあらかた時政について、こよいの人数に加わって行つたので、女たちの局つほねに、微かな灯影ほかげが、おののいて見えるだけだった。

後に残つた者のほうが、戦いくさに出て行つた人々よりも、遥かに、大きな動悸を胸に抱いていた。——一瞬ひととき一瞬、身を刻まれるように、

「軍いくさは、勝ちか負けか」

と、心配していた。

味方の負けた場合は？

当然、頼朝は、考えていた。——一死あるまで、と初めはそう覚悟していたが、こよいになつてから、

(いやそうでない。逃げきれぬまで逃げ退のこう。若い生命いのちだ。あだには)

と、思い直したりしていた。

その場合、館に残っている時政の妻や娘などを、どうして救つて行こうか、そんな事まで案じられたが、どうしても、

「勝ち軍いくさであれ」

と、禱いのる気もちが、いっぱいであった。二十年來の信仰と修養を心の柱に、じつと、静かな面おもてを保っていたが、ひとりでに、齒の根が緊しまつて来るのをどうしようもなかった。

「まだ、火の手は揚あがらぬか。……まだ、煙も見えぬか」

時折、彼が仰向いて、その声をかける空には、新平太という厩舎うまやとねり人が、大木の梢に坐つて、物見をしていた。

九

首尾よく、山木兼隆を討ち取つたら、直ちに目代屋敷から火の手をあげる――

火の手を見たら、味方の勝ち戦いくさと思われようには、時政が立つ前に、つがえて行つた約束なのである。

が、火の手は見えない。

宵の月も高くなつて、時刻はあれからだいぶ経つが、いっこう世間は静かないつもの夏の夜に過ぎない。待ちもせぬ時ほととぎす鳥などが啼なくだけだった。

「はてな」

遂に、頼朝も身をゆるがし、堂の縁を降りると、焦躁しょうそうに駆られたその足を、つかつかと彼方の大木の下まで運んで行つた。

梢こずえの上を見上げて、また、

「新平太」

「はい」

「まだ火の手は見えぬか」

「見えません」

「よく見い、月光で分らぬのではないか」

「いいえ、何の気も」

頼朝は、大樹の下に、沈黙していた。新平太が上で身うごきするたび、梢しずくの雫が彼の鎧よろいの肩へキラキラと落ちた。

「景廉かげかど、景廉。ふたりも来い」

ふいに、後ろを向いて呼ぶ。

堂かたわの傍らにひかえていた加藤次景廉、佐々木盛綱、堀藤次親家——そう三名が、駈け寄つて来て、

「何、ご用で」

と、ひざまずいて、頼朝の面おもてうかがを窺う。

頼朝は手に持っていた長刀ながなたを、景廉に授けながら語気つよく云った。

「まだ火の手の見えぬは、味方の苦戦とみえる。時移しては、大事は去る。ここはよい、わしの身などに護りはいらぬ。そちたちも駈けつけて加勢せよ。——この長刀に、山木兼隆の血を塗つて来い」

「はっ」

三名は、頼朝のことばに、武者ぶるいを覚えながら突つ立った。——さらぬだに、こよいの初の戦に洩れて、疼々うずうずと腕をさすっていた折でもある。

——が、顧かえりみて、

「でも、われわれ三名まで、ここを離れては」

と、頼朝の身を気づかうと、

「何を猶予つ。はやく行けつ」

と、かつて聞かないほどな癩かんだか高い声で一喝かつされ、三名は、あつと云うなり道を駈け降りて、御所内の濠ほりの吊橋を、飛ぶが如く、もう彼方へ急いでいた。

けれど。

三名が、いかに足の限り駆けても、まだ山之木郷までは到底、行き着いてしまいと思われる頃に——青い月空の一方に、炎というよりは、夜明けの美しさに似たあけぼのいろ曙の光がうつすら映し初めていた。

「あつ。火つ、火の手が」

梢の上から新平太が、われを忘れたように叫ぶと、

「——おおう」

頼朝のひとみも、それを見ていた。

「殿つ。火の手が……火の手が……あがりました」

狂喜の余り梢こすえの上の声は泣いているのだった。——いつまでも、降りて来ようともしないのである。

頼朝もまた、石のように、じつと、飽かずに空の火の粉を仰いでいた。けれど彼は、さつきからの焦躁と反対に、至つて無表情に返っていた。ただ次第に烈々と火色を増して空に、その眸は、爛らんとして、同じ光を湛たたえているだけだった。

「……よしっ」

そういうと、彼は、暗い山やまざさ笹こみちの小径をひろって、黙々と、館のほうへ降りて行つた。あわてて木をすべ迂り降りて来た新平太は、その影を後から追つて駈け出していた。

石橋山

一

自分では、かたく自分を、

(落ち着いている。どこも、ふだんと異なること節ふしはない)

と、信じているが、きのうの事を今日かえり顧みても、思い出せない事のみが多いのである。十七日の夜から、ここ七日ばかりというもの、頼朝はそうであつた。

頼朝がようやく、

(われまだ死なず)

と、自分の生命を、自分の中の静かな泉に映して、のぞ覗き見るように、我という身心地を

意識したのは、二十三日の夜から二十四日の明け方に互る真つ暗な洞窟どうくつにじつと坐つていた間のことであつた。

その晩は、敵に襲われる懼おそれもまつたくなかつた。

また味方から敵へかかろうとする能動的な気もちも、起そうとしても起らなかつた。

それほど、人間の存在は、力のない小さいものになつて、唯、伊豆山中をふき暴あれる豪雨と、風の吠える声と、闇ばかりが、天地であつた。

「——十四の時すら死ななかつた。それから二十年も死なずに来た。今、旗挙げをして、山木兼隆をその血まつりに討つてから七夜目、わしはまだ死んでいない」

頼朝は、瞑目めいもくして思う。

「わたしはよほど、運がよいとみえる。いや、神仏の加護に見まもられている生命の持主とみえる。このぶんなら三十三歳の今年も、いや五十までも、七十八の先まで、生きとおして行けるかもしれない」

洞窟の口が、真つ白なしぶきになると、瞬間、洞ほらのなかは真空になる。窒息ちっそくしてしまひそうな風圧おもてを面おもてに感じる。

「——生きている」

こんな自然の暴威の中にも、寂しやくとして、生きているかと思うと、彼は、何ともいえない爽快そうかいを覚えた。——ようやく、日頃の細かい神経や肉体のうちに住んでいる臆病虫が、こよいの暴風雨あらしに、颯然さつぜんと、相模灘さがみなたの彼方へふき飛んで行ってしまった心地がする。「わしの生命いのちは強い。この大自然の中で山野に呼吸いきしている者だ。——平家の生命は、組み立てられた第宅ていたくや人智の機構を力とし、しかもそれは腐すえかけている末期まつごのものだ。——暴風雨あらしの中に立つ殿楼と、大自然の洞窟とのちがいだ。……勝てる！ きつと勝てる。平家のごとき何ものでもない」

彼の意志は、もうこの伊豆界隈かいわいの三千や五千の平家を、敵とも数えていなかった。——幼な心に記憶している都の様を脳裡にえがいていて、その文化、その古い勢力、そこに想い起されるあらゆる宿怨を、敵とみつめた。

「殿……。殿……」

誰か、洞窟の奥から呼ぶ。

が——滝つぼの中にあるような大雨の音である、翔かける風の声である。頼朝の耳には、聞えなかつた。

また。

ふしぎにも、こよいは、頼朝にとって、山之木郷に火の手をあげて以来の心たのしい晩であった。瞑想の快樂けらくも手伝つて、風雨のたけびさえ耳から忘れていたのである。

バチャ、バチャ……と水のなかを四つ這いになって、誰か、奥から這い寄つて来た。佐々木高綱であった。

「水が溜つて参りました。お坐りになつている楯たてが、舟のように浸ひたつております。もつと奥へお潜ひそみなされませ」

「高綱か……」

「はい」

「まだ眠らずにいたのか」

「水に浸されて眼がさめました」

「ほかの者どもは」

「ずっと奥に、臥ふしまろんで、前後も知らずよく眠つていますよ」

「——ならば、ここにしよう。わしが参つて、眼ぎめるといけない。みな疲れたろう。わしはゆうべ快よく眠つた。こん夜はそう眠とうない。ここでよい。ここでよい」

二一

とこうする間に夜が明けた。

白みかけるとすぐ、

「おういつ」

と、谷間で声がする。

「おうーい」

と、峰で答えあう。

頼朝は、洞窟を出た。

暴風雨は、闇と共に去つて、一天雲もなく晴れていた。ただ見る伊豆の海から房総の沖

へかけて、まだ夜来の荒天を偲しのばせる狂瀾きょうらんのしぶきと海鳴りのあるだけだった。

「霽はれたぞ」

「起きろ」

其処此処の岩間の蔭や木蔭から這い出して、身を伸ばした武者どもが、口々に、そう呼び交わすと、どこに昨夜ゆうべを凌しのいでいたかと疑われるほど、見る見る数百の兵と、数十頭の

馬とが、頼朝の身边にむらがつて来た。

「時政は、つつがないか。工藤介茂光も老体。何のさわりもないか」

頼朝が、宥ると、

「何の、戦はまだこれから。お案じくいただきますな」

と、老年の茂光も、また、その傍らにいた北条時政も、顧み合つて一笑した。

時政は、前へ進んで、

「令旨をお濡らしになりはしませぬか」

と、訊ねた。

頼朝は、顔を振つて、肌身にふかく護持している以仁王の令旨を出して拝した。そして、時政の手に授け、

「旗竿の先に結びつけて、軍勢のうえに高々と捧げよ」

と、いいつけた。

時政は、畏まつて、中平四郎惟重を呼び、

「これは、亡き宮の御心のこもっていた令旨であり、また、われわれの魂でもある。心して持つて」

と、捧持ほうじの役をいいつけた。

「身にあまる誉れです。一命をかけて」

平四郎惟重は、ひざまずいて旗を押し戴いた。その父、中頼隆なかのよりたかは、わが子の光榮に涙ぐんで、

「せがれめに過ぎた大役、父子共々、力を協あわせて守護いたそう」

と、鎧よろいの背に、大きな御幣ごへいを負うて、勇み立った。

「物見は帰らぬか」

頼朝の問に、

「物見の者も、あの大暴風雨おおあらしでは、歩むにも歩めず、どこかへ山籠りやまごもいたしたものでしよう。——が、今朝は、見えるに違いない」

時政は、そう云つて、

「その間に、肚はらごしらえをしておいては」

と、頼朝の眸ひとみを見た。

「ム、ム」

頼朝は、荒海のすさまじさを遠くながめていた。飛沫しぶきに旭きよつこう光が映さして、磯は金色こんじき

に煙つていた。

「兵糧を解け」

「馬にも草を飼え」

命令が伝わると、将士は、携えている食糧を解いて、思い思いに場所を取って坐った。

焼米とか、味噌を塗った麦餅の干板ほしいたとかいうような物を除いては、暑さと雨のために、たいがい腐敗していた。

でも、誰も黙って喰っている。頼朝は何とはなく、熱いものが眼に滲にじんで来てならなかった。——大事の成ったあかつきには、何を以て、今日の将士の労に酬むくおうかと、心から思った。

山木攻めの第一夜には、わずか八十余騎の小勢に過ぎなかったが、あれから伊豆を発して、三浦郷をこえ、相模の土肥へかかるまでに、三浦次郎義澄の兄弟や、和田小太郎義盛の一族などが、各 十騎、十五騎と、家の子郎党をひきつれて参加したので、いつかここに見る味方の総勢は、三百余を数えられた。しかも、その三百余は、ただの一人でも、ぜひなく従ついて来たものではない。

三

その朝。

同じように、夜来の大風雨に、旗を伏せて、声も形もなかった平家方の軍勢は、日の出と共に、ぞろぞろ峰の上に姿をあらわして、

「あれに、敵が見える」

「叛軍が、山へ攀じおる」

などと、小手をかざしたり、指さしたりしていた。

それが、源氏のほうからも、豆粒のように、点々と見えた。

吉浜村へ出る谷間道を隔てて、平家方は、星山の峰つづき一帯を陣地として、へんぼん 翩翩と、せいしき 旌旗をたてならべた。遠目にも白く燦くのは、その間を歩く長刀や太刀などである。また、兜の前立だとか鎧の金具なども、朝陽に映えて、は どうかすると、星雲のように煙った。

その陣地は、幾つにもわかかれていて、東国に住む平家方として、名ある大将が、それぞれ一族郎党をひきつれ、ここへ会して、

「叛乱の不平分子ども。何ほどの事があるう」

と、ひかえていた。

まず、相模さがみの住人大庭三郎景親とか、河村三郎義秀、渋谷庄司重国しようち、糟谷かすやの権守盛ごんのかみ久などは、その旗頭はたがしら格かくと云つてよい。

曾我太郎祐信すけのぶ。

滝口三郎経俊つねとし。

長尾新五郎為宗。同じく新六定景——といったような侍たちの中には、俣野またの五郎景久とか、熊谷くまがいの二郎直実なおぎねなどという豪の者も、羽搏はばたく前の鷲わしのように、じつと佇たすんで、谷むこうひとつ彼方の敵を見つめていた。

「大庭景親どのの兄、景義とかは、頼朝との誓い、とりわけ深く、こんども叛軍のうちに
おるそうだが、骨肉同士が、こう谷を隔てて、敵味方むかと対むかいあう心地はどんなであろうか。
——思いやらるる事ではある」

夜明けの大気を吸つたばかりで、まだどこか、戦気は立って来ない。侍たちのうちでは、
こんな話が交わされていた。

「いや、大庭どのばかりか、そういう苦衷くちゆうは、渋谷庄司重国どの辺りでも、同じ思いを

抱いておられよう。敵方にいる佐々木兄弟四人の親、佐々木源三秀義と、重国どのとは、
年来の親密、今では、親戚のあいだから。しかも身は平家の重恩ちようおんをうけているので、
雄々しくも、私情をすてて、老軀をここへ運んで来ておられる」

「それが、当りまえであるに、敵の北条時政のごときは、祖先も平家から出て、代々平家
のご恩にあずかりながら、年がいもなく、血気な若者の火いたずらに乗せられたか、それ
とも、彼が唆そそのかしたか知らぬが、叛軍の指揮に当っているそうだが、気の知れない馬鹿者で
はある」

「七日ばかり存分に暴れまわったから、もう彼等の鬱憤うつぷんもはれたろう。きよう明日あすのう
ちには、この辺の谷間を墓場として、時政も頼朝も、またそれに躍らせられた不運な輩やからも、
みな土中の白骨と、急いで変つてゆくことだろう。——何しても、人騒がせな事をやり出
したものだ」

平家方では、勝敗は問題としていなかった。敵の三百余騎に対して、味方の総勢は、三
千騎をこえ、絶対の優位を占めていたからだった。

また。

きのう今日の山戦やまいくさが、全日本の戦乱へとひろがってゆく先駆の箭風やかせであろうなどと

は、誰ひとり考えてもいなかった。すでに、宇治川で殲滅せんめつされている源三位頼政の人類が蜂起ほうきした事件よりも、はるかに小さい地方的の一騷そうじょう擾じょうと見なしていた。

だから、その首謀しゅぼうに、頼朝があつても、敵を呼ぶに、源氏方などはまだ称よばなかつた。平家方たる自軍と対等に、彼を、源氏の軍として認めるのは、おかしいくらいに考えていた。

ただ、北条時政だけは、彼の門地や年配や日頃の人物からしても、その存在を認めないわけにはゆかなかつた。それだけに、若い不平分子の火いたずらの仲間などに、何で加盟したのか、分らない心理の持主として、平家方の陣地から眺めると、ただ怪訝いぶかられるばかりだつた。

四

そうして、向う山と此こつ方山との対陣は、朝から午うまの刻までつづいた。

戦わぬうちから、勝算歴々なものとして、平家の陣が、いやに落着きこんでいた理由は午うまの刻を過ぎると、ようやく分つた。

それは。

かねて頼朝とは宿怨のある伊豆の伊東祐親入道の到着を待っていたものらしく、伊東二郎祐親の軍勢およそ三百は、ここへさして来ると、わざと、平家の陣地たる星山へ登つて来ずに、頼朝、時政たちの源氏の踏まえている陣地からもう一つ先の山へ登ってしまった。

そして源氏の陣所の山と自分等の占めた高地とで、ちょうど、挟み撃ちにする形態をとった。

「伊東の入道が着いた」

「備えは成った」

「いで、一揉みに」

と星山の頂きから、やや戦気がうごき出した頃、はるか丸子河の下流のもう海辺に近い辺りの森から、むくむくと黒煙の揚がるのが眺められた。

「やつ。あの火の手は？」

「大庭どこの館の辺りではないか」

「そうだ。大庭どこのやしきが焼けている」

立ち騒いでいるところへ、物見の者の駈け上がって来て云うには、三浦一族の者から大祖父と仰がれている三浦^{みうら}大介^{おおすけ}義明^{よしあき}が、八十余歳という高齢の身をひっさげ、先には、子の義澄を頼朝方へ出陣させてあるが、それでもなお、不安として、留守居の身寄りや召使の端まで狩りあつめ、手勢百七、八十の兵を作つて、遽^{にわか}に、海ぞい道を駈けつけて丸子河原に陣し、手はじめに大庭景親どのの館を焼き立て、その勢^{いきお}いなかなか侮^{あなど}り難く見えまする——とのことであつた。

「え。あの老人^{としより}が？」

と、平家方の将は、顔を見合せた事だつた。その煙よりも、八十余歳という白髪^{しらが}の老武者が、それ程まで、頼朝の拳兵に、熱意をもっている点が疑われたのである。

どうして、そのような老齢な一族の長^{おさ}や、時政のような分別者が、「若いものの火悪^{ひいたず}戯^ら」に過ぎないと思われるこんな暴挙に、さまで熱情をもつばかりか、一族の運命を賭^としてまで組するののか？

今。義明の襲来と聞いてもまだ分らないところに、平家方の軍勢三千余騎の美々しさと、愚かな威容^{いよう}があつた。

もつとも中には、

(さもあろう)

と、密かに、むしろ会心の事とまでして、肯定していた人もある。

渋谷庄司や、熊谷直実などは、身を平家方に置いてはいるが、火悪戯と人の視る若い者の精神が、決して暴でなく不逞でもなく、必然、このままではいけない時勢の先に立って、よく天の啓示をつかんでいる男児たちであることを知っていた。

知つていながら、その時代精神をもった信念の敵へ、弓をひかねばならないのも、複雑な世間の性質やら侍で立つ者のむずかしさだった。

飯田五郎という郎党がある。大庭景親の家来だった。その男なども、

(飛んでゆきたい)

と思うほど、実は、頼朝に日頃から志を寄せ、今も、向う山の源氏の陣地を見ていたが、主人景親という者を持つている身で、どうにもならなかった。

なお、三千の平家軍のうちには、そうした者は幾人かあつたろう。——なぜならば、平家は平家の既成勢力しか誇るものはなかったが、頼朝のほうは、誰も頼朝や、一時政の力を恃みとはしていない。

天の味方を力としていた。

天とは、もちろん、時勢のことをいう。大きな時の転回を見とおして、その方向を誤らず、正しく地に立ち上がった姿勢の上に耀く天のことである。

——それはそうと。

谷間は早くも暮れかけた。何か、敵味方大声が飮しあうと、一団また一団、太刀長刀をひっさげた兵が、われがちに薄暮の谷間をのぞんで駈け降りてゆく。

五

合戦は夕方から始まった。

一日中、睨みあっていた両軍が何のきっかけで、どっちから挑みかけて、接戦の口火が切られたか、分らなかった。

それに、きょうの対峙では、双方とも矢を大切に、一本のむだ矢も射交わさなかったのである。

谷を距てている空間が、矢の届かない距離だからであろう。——われこそ、などと、晴々しく立って、もし射た矢が、敵のいる峰にも届かず、徒に谷へ落ちて行ったりなどした

ら、一代物笑いの種となるから、誰も自重していたものとみえる。

それも、睨み合いの原因になつていたが、もう一つの理由は、敵へ挑むには、どうしても谷を降くだらなければならぬ。降つてゆけば、たちまち、岩石の雨や矢うなりを頭へ浴びる。故に、先へ合戦をしかける方が不利という——分りきつた兵法の駈引にもよるものだった。

で、薄暮に谷は紫ばんだ陽かげの底になりながらも、まだ根気よく、両軍、静寂しじまのうちに睨みあつていた時、後で思えば、源氏の勢がかたまつて見える西側の崖が、暴風雨あらしに土を洗われて、岩石をむき出していたので、自然に、凄まじい土砂岩石の音を交ませて、ざざざあつと、ひと雪崩なだれに、一角を谷へ削り落したのだった。

「来たつ」

「襲よせおつたぞつ」

どうつと、その後から、源氏方が駈け降りる、平家方も駈け降りる。——きつかけといえどそれが合戦のきつかけだった。

「ちいッ」

「射止めたつ」

「矢をつ。矢を運べ」

平家方の半数近くはまだ山上に残っていた。手を空しく覗いているのは一部の老将やその幕下に過ぎず、侍たちは弓を立て並べて、またたく間に、背の羽壺うつぼのものは射尽してしまった。

「味方を射るなつ。紛まぎらわしいぞ。危ない危ない」

山の中腹で誰か注意する。谷あいの闇は、だいぶ濃い。両軍はもう眉と眉を接しての混乱となつている。

「それつ、行けつ」

いちどに数百挺の弓が下へ置かれた。それだけの数の侍が新手となつてまた、ひとつ谷へ真つ黒に降りた。

迂すべる者がある。

矢に中あたつて、崖の途中から転げ落ちてゆくのもある。

その矢の幾つかは、向う山の上に立つ頼朝が射た矢である。

頼朝が今朝から踏ふんまえているその山を、石橋山とこの辺の土民は称よんでいる。

石橋山のうえには、一日中、弛ゆるんだ顔は一つもなかった。これこそ天上というのだろう、

何の雑念もなく、今は、迷いもなく、三百余人が一体となって、ただ竿頭かんとうの白旗と、それに結ゆわえつけてある以仁王の令旨りようじとを、時折、無言で見あげ合っていた。

その一体の人数も、今はあらかた谷底で戦っている。頼朝のそばには、加藤次景廉かげかど、大見平太、佐々木高綱、堀藤次などのわずか五、六名の影が見えるに過ぎなかった。

「高綱、高綱」

頼朝は、弓を投げすてるとすぐ、堀藤次の手から、長刀をうけ取って、

「面倒。従ついて来い」

「あつ、しばし」

高綱や景廉も、弓をおくと、慌さわぎてて頼朝を遮さへぎった。

「乱軍です。暗さも暗し」

「眺めておる場合か」

「でも、大事のお身に」

「十四の年も死ななかつた。二十年来死ななかつた。死なば天命、ここにいても死のう。——聞きけ、あの笹こだまを。味方の一兵は敵の十人にも当たっているのだ。——行なむこうつ。南無なむはち八幡大菩薩まんたいぼさつ、頼朝に事を成し遂げさせ給うか、また、ここに生命を召し給うか。今、こ

の谷間へ抛なげうつ身を以て、いずれとも、天意をお示しあれ」
若い肉体は、獅子吼ししうしてそう云うとすぐ、鶉ひよどりのごとく、真まつ逆さかさまに駈かけていた。

碧へきけつ血

一

そこでの戦いは、一瞬で終っていた。源氏方の敗北らしい。

合戦の中に立ち交じると、勝敗は分らなくなる。わけて谷あいくらやみの暗闇である。

駈もける者に揉もまれながら、頼朝も駈もけていた。

「梶山すぎやまへ、梶山へっ」

声で、味方と知り、戦は、敗けだなと覚さとる。

そうかと思うと、鎧よろいと鎧をぶつけ合って、お互いの顔を間近に見るなり、

「こいつッ」

いきなりすぐ側の者を斬ったり、斬られたりする程、敵もこの中に入り交じっているらしい。

そういう中で、さなだの佐奈田余一義忠とか、武藤一郎とか、頼朝に取っても、世の中にとつても、惜しい若者が幾人ともなく討死して行つた。

石ころと雑草ばかりな河原へ出た。西と南に谷口への道がある。味方の大部分は、そのどつちへ行つたか。

頼朝は、幾度かまろ転び、転ぶたびに、

「討死か」

と、ひや冷やかに思う。

なぜか、ふしぎにも、生きようとする執念が稀薄である。はっと、それを危険と気づいた時、極度な肉体の疲労が思い出された。もう一步も耐えられないほど喘あえいでいる疲労が、ややもすると、死の安逸をささやくのである。

「なんの！」

今は、後ろに迫る敵以上の敵が、頼朝自身の中にあつた。歯がみをして、起つ、よろ這う。また転ぶ。

兜も捨てた。具足を解こうとした。——その時である。

「しゃあツ」

と、唳れ声しわがごえが、後ろでした。

振向くと、馬に乗った敵方の一将である。頼朝を見て、駒をとばして来たのだ。そして、大きな口を刮かツと開き、太刀をふりかぶって、何か云ったのだが、彼もさっきからの戦闘に、士卒を励まして喉をつぶし、その声は、ことばの意味をなさず——、しゃあツと、異様な音おんじょう 声を発したのであった。

「あつ。——景親」

頼朝の長刀ながなたは、無意識に縦横の閃光を描いた。その一閃は、敵の馬の鼻づらをかすめたので、馬は愕おどろいて刎はねた。——が、刎はね落されるような敵ではなく、かえって跳躍はやを迅はやめて、ふたたび頼朝のまっ向へ、鞍上からすさまじい力をこめた太刀が落ちかけた。

すると、その平家方の武将の郎党らしい男が、いきなり駆け寄って主人の駒の前脚を刀で撲なぐりつけた。もちろん馬は勢いよく前へのめり込み、鞍上の武将は、石ころの上へもんどり打った。

「得たりっ」

と、頼朝が、その上へ、一撃加えようとすると、彼の郎党は、

「すけどの佐殿つ、助けて下さい。——それも私の主人ですつ」

と叫びながら、頼朝の体を突き飛ばし——そしてすぐ頼朝をたす扶け起して、しやにむに遮二無二、す楯

ぎやま山谷の方へ向つて逃げ出した。

「誰だつ？」

「後で。後でいいいます」

「敵か」

「敵ではありません」

「味方か」

「お味方でもありません」

「では。……何者だ」

「迷っている人間です。——たった今までは、大庭三郎景親様の家人でしたが」

「あつ、飯田五郎か」

「そうです」

「五郎か」

「……そうです」

足を止めて、頼朝は、自分の体を扶けている男の顔を見た。たった一度、大庭景親の兄景義に伴われて、配所に来たことがある。また志を共にする若人の会合でも顔を一、二度見たことがある。あれは臭い、怪しい男だと、人々が注意したので、景義もそれきり伴われて来なくなった男であった。

二

「前々から、心ではお慕い申しましたが、主人や妻子を捨ててまで、御旗の下へ奔る気にもなれず、きょうの戦いにも、平家方の陣におりましたが、深く考えてみると、折角のお旗挙げが、ここで挫折したら、腐ったままの世の中が、まだ十年も二十年も続いてゆきましよう。それだけ国土の損です。民の苦しみます。人心を悪くさせるばかりです。

——となつたら、勿体ない事ですが、朝廷のご存亡まで案じられます」

飯田五郎は、一生懸命で話すのだった。どう云つたら、自分の真心が、頼朝に容れられるかと、おぼつか覚束ない智識をしぼって語る容子があわれでもあった。

「……で。いろいろと、迷ったり悩んだり致しましたが、大義と小義だと、考えつきましたので、源氏方のほうへ、走りこむ隙を窺うかがつておりましたところ、ご危難を見かけたので、われにも非ず、前の主人景親様を、あのような目に遭わせて、お供に従ついて来たわけでございます。——以後、お馬の口取にでも、お召使い下さるなら有難うぞんじまする」

ここまで云うと、飯田五郎は泣き声になつてしまつた。

「この頼朝の敗れを見ながら、敗軍の將に従ついて来たそちこそ、頼朝にとって、真の味方。うれしいぞ」

と、頼朝も涙ぐんで、行末長く主従たることを誓つた。

けれど、源氏系でも平家系でも、縁故などはどうでもよい一士卒に過ぎない飯田五郎が、敵方に身を投じて来たのは、頼朝という人間のみけいこうに景仰けいこうを持ったわけではない。彼が随ず喜いきしたものは、彼が産も家系もない庶民の一人だけに、かえつて正直に理解される現状の世の中の悪さと、将来に渴望かつぼうされるものにあつた。——人よりも、その革新精神の旗じるしにあつた。

「あつ。こうしていると、またさつきのような重圍おもに陥ちそうです。矢が集まって来ました。もう少し、お忪こらえ下さい」

五郎はふたたび頼朝を扶け励ましながら、すぎやま梶山谷ふかく逃げこんだ。
明くれば、二十四日。

追々と、彼の所在を知つて、味方が集まつて来たので、頼朝は、後ろの峰へ上つて、陣を立て直そうと云う。

元より否やはない。

「きようこそ、きのうのせつじよく雪辱を」

と、面々の意気は、すこしも挫くじけていないのみか、むしろ旺さかんだつた。お互いが、暗黙のうち、こころ顔を見合うのも、今の一瞬が最期か、きよう半日の間まかと、散るのをいともさり気なく戦そよいでいる桜の花のように、あつさり心のうちで袂べいべつ別を告げていた。そこに、悲壮というような血臭いものもない程、潔いさぎよかつた。

「登れ」

「登れっ」

天上へでもさして行くように、人は峰の肌につかまって攀よじ出した。
すると、敵の大庭景親以下、三千余騎が喊ときの声をあげて迫つて来た。

まだ、布陣の整わないうちであつたため、またしても、源氏の勢は、個々に力を分散し

て戦うほかなかつた。

それでも、加藤次景廉かげかどや大見平太等は、

「ここは、われらで殿軍しんがりをいたせば、方々は、もつと奥地へ遠く引揚げて、いよいよ足場を占めて備え立てなされ」

と、味方へさげびながら、もう敢然と、敵の白刃を迎えていた。

退くのが賢明——と思ひながら、やはり、そういう味方ほど捨てきれないで、誰しも後ろ髪をひかれるとみえ、頼朝を初めとし、時政父子おやこまでが、山の中段に踏みとどまり、矢数のあるかぎり射つづけていた。

三

景廉の父、加藤五景員かげかずは、子を気づかつて、最後まで踏み止まる。

大見平太の兄政光も、弟に心をひかれ、殿軍しんがりの勢に交じつて、乱軍の中へ駆け入った。そのほか、加藤太光員みつかず、佐々木高綱、堀藤次、同じく四郎、天野遠景、同じく平内など、わき目もふらず、敵へ当つてゆく。

「うぬつ」

「おおうつ」

「かつ」

と、いうような喚おめきと喚おめきが、甲冑の響つるぎきや劍の音に入り交じって、この世のものとも思せわれない凄せい愴そうな劔こたまを呼んだ。そして焦やけつくような谷間河原は、見るまに、そこらの石も夏草も血でない所はなくなつた。

矢だねも尽きると、みな太刀長刀の接戦になつた。平家方は、大庭景親をはじめ、重なる者は騎馬だつたが、石ころの多い谷あいでは、名馬の逸いっそく足も、かえつて敏びんしやう捷しやうな敵にその脚元を躓なぎられたり、蹄ひづめを躓つまずかせないため活躍の自由を欠いたりするので、

「馬上は不利」

と、云い合せたように駒を捨てて戦つた。

源氏方一人に、平家方は十人以上を以て当り得る優位にあつたが、その優位がものいうまでには、かなりな時を費つひやした。死者や負傷ておひの数も敵の十倍以上を出し、このままで斬り立てられると、ついには自身が危あやういぞ——と切羽きりうつまつて来てから初めて、

「くそつ、多寡たかの知れた敵に。ふがないぞ、味方の者。死ねや、退くなつ」

と、俄然、平家方も、咆哮ほうこうを揚げ直して、死にもの狂いになって来た。組む、組んだまま、水へ転げ落ちる。

首を搔いて、

「討ったツ。——敵の」

と、躍りあがって、血のしたたる物を差しあげながら、何か功名をさげんでいると、

「こいつツ」

と、その後ろから、躍りかかって来た太刀の下に、首を持ったまま、首を搔かれかけている武者もある。

「あつ、殿ツ。——滅めつそ相もないつ。あなた様は」

乱軍の中で、名もない敵と、斬りむすんでいる頼朝を見つけて、天野遠景は、腹が立つた。

腹立ちまぎれに、

「木っ葉どもめ」

と、頼朝へ挑んでいる敵の、四、五人を、遠景は大長刀で滅茶苦茶に叩き伏せ、薙なぎとばして、

「おツ、お逃げにならなければいけませんッ」

と、恐い顔のまま叱咤しつたした。

敵の武者の乗りすてた駒が、鞍のまま、放牧されてあるように、彼方かなた此方こなたに駈けまわっていた。合戦をよそに、水をのんでいる馬、草を喰っている馬、すこし気が狂ふれたように嘶いないてばかりいる馬——など沢山見えた。

「殿ッ。これへ」

一頭の鹿毛かげをつかまえて、遠景が頼朝にすすめていると、一かたまり雪崩なだれ合つて来た味方が、

「や。殿には、まだここに」

と、その無事を、奇蹟のように驚きながら、駒の前後を被おおいくるんで、無二無三、山の深くへ索ひきこんで行つた。

景親たち平家勢は、

「逃がすな」

「あれこそ頼朝」

と、後から気づいて、真つ黒に追つて来たが、高綱、景廉などの烈しい矢に、ばたばた

と死者を出したので先鋒はみな身を伏せ、矢風が熄んだと見ると、猛然立って、追いかけた。

四

「時政は。——時政父子は、後から見えぬか」

逃げのびて行く道々も、頼朝は幾たびとなく、左右の者に云った。

「駈けもどつて、殿軍しんがりされているまに、お慕い迷れたとみえまする」

と、供の人々は答えた。

その中に、土肥次郎実平さねひらがいた。実平の健在を見ると、頼朝は、

「いたか」

と、やや力づよい顔をした。

梶山すぎやまの深くまで辿りつくと実平は、戦の帰結に見きりをつけて、こう提議した。

「さて、この大勢では、どこへ隠れ忍ぶにも、すぐ敵の目に見出される懼れがある。これまで、お側を離れずに、尾き従うて参られた各のご忠節は、涙ぐましゅう存ずるが、こ

れでお別れしたほうが、かえつて殿の御為おんためであるまいか」

「……………」

誰も、答える者はなかった。誰の面も、惨おもてとして、上がらなかつた。敗戦の無念を唇に噛んでじつと、熱涙をこらえていた。

ともすれば、嗚咽おえつと変りそうな慄わななき声を、実平は強しいて、励ましながら、言葉をつづけた。

「今のお別れが、誓つて、後日の倅せとなるように、ここは、一先ひとまず袂たもとを別とうではないか。——殿お一人の身ならば、この実平が、たとい一月ふた月の間は、どのように致しても、きつとお匿かくまい申してみせる。——やがて、計を立て直して、会かい稽けいの恥をそそぐ日まで」

誰か、手放しで泣く者があつた。一瞬、みな肱ひじを横にして顔へ当てた。

頼朝は泣きたいよりは、自分の不徳を詫びたかつた。この惨敗の責任がみな自分にあるものと責められていた。

だが、こうなつても、

(これ限りではない！)

という希望は、誰よりも頼朝の信念にあつた。今が初めての荊棘けいきよくの道ではない。これが最後かと思う一歩前が、実は、次への悠久な道へ出るぎょうあん 暁さかい 闇の堺であつたことを、幼年の頃から幾度も身に訓おしえられていたからである。

「ぜひ、最後まででは、御おん 供ともを」

と、それは、ここにいる者のすべての希ねがいだつたが、頼朝も、他日を期して別れてくれと云い渡したので、人々は、やがて散ちりちり々に、思い思いに、落ちて行くしかなかつた。

頼朝、実平だけを残して、あらましは皆、落ちのびて行つた頃、乱軍の中で見失つた飯田五郎が、息喘いきせいて、追いついて来た。

「数珠じゆずを拾いました。このお数珠は、殿ではございませぬか」

見れば、自分の落した物なので、頼朝は、非常に欣よろこんだ。その飯田五郎も、泣いて供を願つたが、

「きょうが最後ではない。ふたたび旗を見たら来い」

と、頼朝は論さとして、無理に追いやつた。なぜか、その五郎を追いやるのが、誰よりも辛い心地がした。

一方、頼朝に迷はぐれた時政父子おやこは、道を違たがえて、箱根路から湯坂を越え、甲斐かいのほうへ落

ちようと志したが、三男三郎は、土肥山から早川へ来る途中、伊東祐親入道の兵に囲まれて討死し、同行の工藤介茂光は、老人なので、精がきれたか、「もうだめだ。これまで」

と、絶叫すると、腹を切つて、最期をいそいでしまった。

峰の背を、実平と共に、逃げのびてゆく頼朝の眼には、遠く、其処彼処で、こうした末路を告げてゆく味方の分散が見えたであろう。

「あの峰だ」

「いや、溪間へ駈けた」

執念ぶかく追いかけて来た敵の大庭景親の兵は、頼朝が、どう晦まそうとしても、においを嗅ぎ知つて、狙け纏つて来た。

「おうーいッ。味方の衆、この山にはいない。それがしの手勢で探し尽した。向うの山だ。彼方の谷や峰ふところが怪しいぞ」

平家方の一将、梶原平三景時は、どういふ思惑があつてだろうか、頼朝の潜んだ木暗がりを見届けながら、岩上に立って味方のほうへ大声あげながら手を振っていた。

船出

一

「こよいも、……赤い？」

政子は、夜空を見つめていた。——ここから幾里もない石橋山、梶山すぎやまの方の空を。雲に映る戦火よりも、彼女の眸に燃えるものの方が、むしろ炎に似ていた。

「どうなされて？ ……」

と、父を思う。兄を思う。——頼朝の身をひしと氣遣きづかう。

先頃の暴風雨あらしの晩には、一夜中、この尼院の仏前に坐ったままで、戦勝を禱いのっていた。あらゆる人手を頼んで軍の様子を見せにやってある。

石橋山の味方の惨敗は、もうつぶさに聞いていた。

「——お生命いのちさえあれば」

と、今はただ、そのみが一縷るの望みであった。

そして、心の底に、

「うかとは、死ぬまい」

と、固く自分を戒めていた。

良人の頼朝が果てたら、父も死ぬであろう、兄も斬死にするであろう。——当然、彼女も、心の支度は、疾く決めている。

それだけに、軽はずみを戒めていた。良人の思慮ふかい性格をよく知っているだけに、良人も最後の最後まで、生きつづけるであろう事を——固く信じていた。

「政子様よ。夜露はからだに毒。もう屋の内へおはいりなされ。こよいは、お寝みなされたがよい」

走り湯の法音比丘尼は、時折、縁に出て来て、声をかけた。

「はい。……はい」

庭垣の隅の方から、政子の返辞は素直に聞えてくる。けれど、室内へ戻って来る様子はなかった。

「……ご無理もない」

と、法音尼は、草むらの中に佇んで、じつと、天の一方を見ている政子のすがたへ、遠

くから掌を合せた。

その人の影へ、掌を合せて念じるしか——老尼には政子を慰めることばもないのである。更けて行つた。

伊豆の海は、戦のせいか、漁火の影もない。先頃の暴風も、嘘のように凧ぎている。

「政子さま。それにおいでなされましたか」

「誰じゃ」

「牧場の於萱でございます」

「萱か。……待っていました。何ぞ変つた事でも聞きましたか」

「はい。ようやくのことで、ご先途がわかりました」

庭口から忍んで来た牧場の妻の於萱は、それへ来て、夜露の中にひざまずいた。

彼女も、政子のために、生命がけで戦の後の情報を聞き蒐めに行っていた一人であつた。

「——頼朝様には、二十四日の戦に、お味方と、ちりぢりにお別れ遊ばした後、実平殿お一人がお供して、梶山から箱根へお越えなされ、そこで都合よく、舅君の北条時政様とめぐり会い、ひと先ず箱根権現の別当の弟永実様のところへお身を隠し遊ばしました。……もうご一命は、大丈夫でございます。永実坊も行実坊も、あのご兄弟とも、前々

から源家に深く心を寄せている衆でもございますから」

政子は、聞いているうちから、涙があふれて——天佑に感謝する気もちと歎びにいつぱいになって——於萱の労を犒ねぎらつてやることばすら出なかつた。

では、良人もこよいは、戦い疲れた身を、久しぶりに、屋根の下に横たえているだろう。

——そう思うと、彼女も遽にわかにそこへ坐つてしまいたくなくなった。

「奥方。佐すけの殿の奥方。走り湯権現の覚かくみょう明でござる。それへはいりかねますので、垣近くまでお顔をおかし下さい。——戦場の模様、その後の人々のご消息、いろいろ、探り聞いて参りました」

折ふし、垣の外からまた、そう小声で告げる者があつた。

二

ゆうべは、牧場の妻や、走り湯権現の覚明からの報告。——またきようも、政子の許もとへは、種いろ々な人たちが出入りして、戦後の模様を、何くれとなく知らせて来た。

それらの帰結は、各、人と場所とを異にするが、今仮に、情報を綜合して並べてみる

と、およそ次のような幾つかの断片的な話となる。

*

有力な源氏の味方と期待されていた三浦義澄の一族は、かんじんな石橋山の戦いに間に合わず、丸子河から由比ヶ浜方面へ出たところ、平家方の畠山重忠の軍と行き遭い、重忠方は郎党五十余人の首を失つて退却し、三浦一族も、多くの負傷ておいや死者を出して退きわかれ、三浦郷へ歸つて、衣笠城きぬがさじょうの孤塁を固めているが、そこへまた、畠山重忠を始め、河越かわごえ太郎重頼、江戸太郎重長などの平家勢が、ふたたび大挙して、包圍に向つていているというから、到底、長くは支えきれそうにも思われない。

*

最初から目のかたきに頼朝を狙うていた大庭景親は、二十五日の夕方、一斉に、布令ふれを発し、

(頼朝を匿かくう者、木戸の警備を怠つた者、等しく断罪に処するであろう)

と辻々に高札を立て、およそ諸国へ通じる宿駅は元より、山伝いの小道から、浜辺の一帯わたに互あひるまで眼を光らせて、詮議せんぎはいよいよ峻しゅん烈れつを極めているとある。

*

戦は、富士山麓さんろくから、甲州方面にまで波及したようである。甲斐の武田、一条などという土豪も、頼朝と呼応して動きかけた形勢が見えたというので、機先を制すべく、駿河するがの目代橘遠茂だの、俣野またの景久などの平家が、二十四日、追討に向つたが、途中、富士山麓で野営した晩にどうした事か、彼等の所持していた弓が百何十張りも、野鼠のため喰い切られてしまった。

折も折。

石橋山へ駆けつけると、この地方を通つた源氏方の安田義定、工藤景光、同じく小次郎などの手勢とばつたり遭遇したので、

(それっ)

と、たちまち戦になつたが、一方は飛び道具がみな役に立たないので散々に射立てられ、逃げるをまた追い捲まくられて、野鼠のおかげで全軍の三分の一しか生きて還らなかつたという噂なども、——半ば、面白げに、宿駅ぼんげの凡下ぼんげたちに沙汰さたされている。

*

一時、箱根の別当の許にかくれた頼朝主従は、急にまた、そこを去つて、土肥方面へ落ちて行つたらしい。

原因は、頼朝に組している別当の弟の良^り暹^{ようせん}というのが、前々から山木判官兼隆の祈^き禱^{とう}の師で、ひそかに、平家へ通じた気はいが見えたからである。

*

三浦一族の衣笠城には、一族の大祖父と仰ぐ八十九歳の大^{おお}介^{すけ}義^{よし}明^{あき}も立て籠^{こも}っていたが、砦^{とりで}の運命も、早これまでと迫った日、子や孫を集めていうには、

（古巣の城は焼け落ちてしまふ。かえつてお前たちの為だ。広い世の中へ、各、力いっばいの巢^ね立ちをせよ。——この義明は、累^{るい}代^{だい}源^{げん}氏の御家人と生れ、八十余歳まで生きのびた効^かいあつて、今、佐殿の旗^{はた}拳^{こぶし}げを見た欣^{うれ}しさ。……これで死んでもいい。落城の火の粉は、孫や子たちの出世の種^{たね}時^{とき}じや。こんなよい往生があるものか）

そして、去りがての孫や子たちが、落ちてゆくのを見届けてから、八十九歳の老将は、華々しく戦死した。

*

佐々木定綱、盛綱、高綱の兄弟三人は、主とわかれて、ひそかに、渋谷庄司重国の館を訪ねてゆくと、重国は、兄弟を庫^{くら}の中に匿^{かく}ま、食事をすすめて、

（なぜここに、次郎経高は見えぬのか。戦死したか）

との質問に、

(いえ、無事ではいますが、仔細あつて、お館には足踏みできぬと、一人どこかへ立ち去りました)

兄弟が答えると、重国は眼をしぼだたいて、

(さてこそ、いつぞや頼朝の加勢に行くとして、暇いとまご乞いに見えた折、わしが諫いさめたが、聞き入れずに駈けつけた。それを恥かしゆう思うて参らぬものとみえる)

と、すぐ郎党を四方へやつて、次郎経高を尋ねさせた。——かくの如く、平家とよばれ、源氏と称えて、戦場では立ち分れても、血はひとつの国民だった。涙はお互いに持っていた。

三

彼女はもう庭にも立たなかつた。二十六、七日の両日は、ほとんど机の前と、御みほとけ仏の前まへにじつと坐まっていた。

その二十七日の宵よいである。

「お傷いたわしや。……さこそ、この幾日の間は」

と、咽むせびながら、彼女の前にひれ伏した老武士があつた。

「おお、あなたは」

彼女は、眼をすえた。それは加藤次景廉の父、景員かげかずであつた。

「せがれどもは、甲斐へ落ちのびましたが、年とし老よりが連れでは、足手纏あしでまといになろうと思
い、別れて、この走り湯権現の房へ、きよ方の明け方隠れこみました」

見れば、そういう景員は、もう髪を剃おろして、法体ほつたいになっている。

この老人は、実戦に参加した一人である。さだめし、きようまでの消息以上、詳しい事
を知つていよう。

彼女は何より先に訊ねた。

「父は？ ……どうしておりましたか」

「時政殿には、首尾よう舟を手に入れられて、海路うなじを安房あわへと、お渡りになりました」

「安房へ」

彼女は、少しも欣しい顔でなかつた。——頼朝と一緒にとは、景員かげかずが云わなかつたか
らである。

顔いろを察して、老人はすぐ口早に、後のことばを続けた。

「——また、すけどの佐殿におかせられましては、明二十八日の未明を期し、一舟後から同じ安房の平北の磯をさして、ご渡海あるはずでござりまする。……が、これは極秘、ゆめ、人にお気どられ遊ばしますなよ」

「……そうか」

初めて彼女の面に、ほつとした容子がただよ漂った。悲痛な別離を知るうちにも、花洩る微かなしよこ曙光のような色も見えた。

景員がそこを辞して、僧房へもどると間もなく、彼女も寝所へかくれた。けれど彼女はふすま衾には入らなかつた。身みこしら拵えもかいがいしく、密かに尼院を出て、真つ暗な伊豆山の上へと、ただ一人で歩いていた。

高原の牧へ出た。

その小屋をほとほと叩き、牧場の妻のおかや於萱を道案内にして、また幾里かを歩きつづけた。

「萱。……ここは何いすこ処」

「湯河原の北山でござりまする。この下が、よしま吉浜、かじやごう鍛冶屋郷」

「では、もう少し」

と、また歩いた。

「政子様。もう行けませぬ。……この先は断り立てたような崖ですから」

「その磯は」

「真鶴まなづるです。土肥郷の真鶴でございます」

「……………」

政子は、黙つてうなずきながら、露や草の実に汚れた身を、そのまま、仆れている朽木へ腰かけて、もう明け近い海面うなづらに向けていた。

磯を打つ波音のほか何の物音も聞えなかった。安房、上総かづさの彼方も、雲か霧か海か、けじめもなかった。

——が、いつとはなく、それが水と空と、雲とにわかれて見えて来た。渺びようとして、ただ霧のみであつた海面にも、チカツと、黄色こんじきの光が匆はねた。

「萱！……………」

政子は立って、にわかに眼をいっばいに働かせた。

「見えぬか。……見えぬか。……殿のお舟が、今朝のお舟立ちが」

「見えませぬ。何も」

「……あれは？」

「磯辺の巖いわです」

遠い一連の山影は、上総かずさ、安房あわの半島である。そのあたりから大いなる太陽の端が真っ赤に昇りかけた。

刻、刻、見ているうちに、陽は半島の上に離れた。海はいちめん燦々さんさんと揺れた。その輝く海波の沖に——ああすでに沖の方だったが、政子の眸に、一点、黒く見えたものがあった。

政子は、その日から、秋戸郷あきのとごうへ身を潜ひそめて、もう尼院へは帰らなかつた。

いちわ
の雁かり

九月の空も、海の碧も、澄みきつた秋の昼だった。

下総しもさきの寒川さむかわべりを、うろついている旅の商人あきゆうどふう風の男がある。橋の口を、幾度か行つたり来たりしていた。

七月頃から、橋口には、交代で見張りの武士が立ち始めている。——伊豆半島とこの地方とは、海を隔てているとはいえ、晴れた日には、鮮あざらに見えもする対岸にある。

当然、伊豆に揚がった波濤はとうは、ここの岸へも搏うつて来た。

下総、上総、安房、それぞれ派別を明らかにし始めた。いや、自身はその何れいすにも偏へんせず、自重しているつもりでも、もう環境がゆるさないのである。

なにがし
(某は、源氏くさい)

(誰と誰は、どうなつても、平家方をうごくまい)

そう人々が色別けを押しつけて観るし、また、頼朝の旗挙げなるものが、ここではその実力以上に思われていたので「源氏方」という言葉が、ここでは平家方と対立して、通り言葉に使われていた。

頼朝の人間の評価も、地元の伊豆よりは、この地方のほうが、より高く買われていた。彼が伊東祐親入道のむすめと恋をしたり、配所へ亀の前をひき入れたり、北条家の政子と

も同様に浮名をながしたり——そんな半面的な些事さじがいちいち伝わっていないだけでも、地元の人々よりは、遥かに、尊敬を持たれていた。

そして、六月末の挙兵が聞えてくると、

(ついに、起つたな……)

と、誰もそれに一応の同情を抱いたし、また、

(さすがは、やはり名門の子である。二十年の臥薪嘗胆がしんしょうたん、よくぞした)

と、彼の系図あちたを革めて思い起し、それに崇拜の念さえ加えて、先頃から寄るとさわると、源氏方、平家方と称よび分けた通り言葉で、うわさに持ちきっている有様だった。

その頼朝が、一敗地にまみれて、行方も知れない——と伝わって来た時、はつきり世間に現れた事は、この地方でも、若い人の層に、一様に濃い落胆が見えたことだった。

間もなく、

(佐殿すけどのは、安房か下総の辺へ、落ちのびて来られたという噂だぞ)

と知れ渡ると、俄然がぜん——といつてもよい程、この房総一帯も、人間の顔いろ、人々の眼、話題、生活の仕様、殊に若い層のうごきが活潑に変わって来た。

が、ここにもある古い勢力や秩序が、それとは反対な衝動から、

「落武者を入れるな」

と、各の地盤を、守り固めて、極力、この颱風から遁れようと努めた。

寒川、五反保を濠として、その郭内に、侍屋敷の門をならべ、丘の猪鼻台に、一族の館を持つている千葉介常胤なども、当然、そうであつた。

宿人町から郭内へ通じる橋口に番兵が立ちだしたのも、その現れの一つと云えよう。長元年中、関東の騒乱に功のあつた平忠常以来、累代平家の御家人であり、この地方の豪族として、現状のままである事が、最も安泰を希うところの家柄であつた。

「はてな、怪しい旅商人だ。これで三度ここを通るが？」

「引ッ捕えてみる」

橋口の守りの武士が、こう指さすと、その指を振向いた旅商人は、急に足を早めて、町の方へ曲つてしまつた。

二

千葉介常胤の次男胤頼は、何処からか歸つて来て、今、濠内へかかろうとすると、橋

口をふさいで番の武士十四、五名が、何か騒いでいる。

「おい、何事だ」

胤頼は、馬上から声をかけた。

すると、武士たちに囲まれて、それへ引据えられていた旅商人は、

「おおっ」

と、彼を振向いて、跳び上がらないばかり欣よろこんだ。

胤頼には、ちよつと思ひ出せなかつたとみえ、

「何者だ」

と、近づいたら鞭で打ちすえそうな姿勢をした。

「それがしです。お忘れか」

「……それがし？」

と、じつと見直してから、初めて姿の変っている事に気づいたらしく、

「やあ、藤九郎盛長どのか」

と、眼をみはった。

かつて、その藤九郎盛長は、頼朝の召状を携えて、此館ここを訪れたことがある。その時、

父の常胤は会わなかったが、胤頼は兄の胤正たねまさと同席で、彼を迎えたことがある。

「無礼すな！」

胤頼は、武士たちを叱つて、

「よく何事もなかったものだ。このお方が本気になって抵抗てむかしたら、其方どもが十人、二十人、かかっても、濠の水を呑んだらうに。——さてさて無事であつたは、寔まことにご堪忍のお情けかたじけな、辱かたじけない」

と駒を降りて、慇懃いんぎんに挨拶をし直している様子に、橋守の武士たちは、この旅商たびあきゆう人、一体何者かしらと、首を傾かしげ合つていた。

「いやいや落度はそれがしにある。取次を願つても、われらの今の境遇では、尋常にお通しあるまいと、あなた様か、胤正様のお出ましを待とうと、うろついていたため、疑われただのでござる」

「何にしても、ここでは、お話しもならぬ。館まで、お越し下さい」

胤頼は、駒を、侍の手にあずけて、旅商人姿の盛長と、肩をならべて歩み出した。

落着いてから訊くべき事と思ひながら、その間も待ちどおしげに、胤頼は、歩きながら言葉短みじかに、もう訊きほじつていた。

「ご無事か。佐殿には」

「は。天佑といいましようか、おつつがもなく」

「して、今は何処？」

盛長は、後ろを見た。供の侍たちは、ずっと後ろから、胤頼の駒を曳いて来るので、

「安房におられまする」

「安房とは、およそ世間も観ているが……安房のどこに」

「安西三郎景益かげますどのの計らいで、その邸に近い寺院を隠れ家に」

「ウム。北条どのは」

「ご一緒です」

「そうか、それ伺って安心いたしました」

「実は、この度も殿のご密書たびを帯びて使いに來たわけでござるが」

「それは」

と、抑えて、

「後で悠々ゆるゆる伺おう。——何よりもお詫びせねばならぬ事は、去年、ことしの春と、二度

までも、令旨りようじのお沙汰と共に、佐殿の召状にも接しながら、何のご返事も回さかえなかつた

われらの無礼のかどです。……お察してください」

「いや、その辺のご事情は、よく分っております。……千葉ご一族にとつても重大な分れ目のござる。ましてや、あなた様や胤正様の上にも、お父上常胤様という者がおありなのですから、左様に、手軽く向背こうはいを決めるわけに参らぬのも、決してご無理とは存じません」

二人の影は、寺院の登り口でもあるような、森の木蔭と青苔あおごけに蔽おほわれた石段を踏んでいた。

三

「とにかく、会うだけでも、お会いになつて下さい」

胤正、胤頼の兄弟は、結束して父にせがんだ。——議論もし、情にも訴え、口を極めて頼んだ。

「それ程に申すならば」

と、父の常胤も、とうとう承知してしまった。

兄弟は、雀躍こわどりせんばかり欣よろこんで、やがて、頼朝の密使、藤九郎盛長を導いて来た。

盛長は、胤頼の館で、すっかり装束を着更えて出た。——意地わるい眼で、その言語動作を見つめていた常胤も、

(よい侍だ)

と、心で呟いたふうだった。

「初めてお目通りを得ます。自分事は、源家の棟梁故義朝様のご嫡男、頼朝様の家人でござりまして、藤九郎盛長と申します者」

と彼の慇懃いんぎんを、

「左様であるか。儂みが、千葉介……」

と、一方は、至つてあつさりと受ける。

藤九郎は、一目見て、千葉介が気さくな老人であることを知った。年は、当年六十四と、さつき胤頼から聞いてもいた。

味方の北条時政などは、まだ老人というほどな老境でもないせいにか、多分に垢あかぬけない所だの、我意我説だの、私慾なども旺盛で、よく若い者と衝突はするし、俗にいうかどの取れない所が多分にあるが——この老人は鶴のようだ。それでいて、頼には赤味をたたえ

ている。にこやかで、感じがいい。

「京都へ参られた事があるかの。京都はよいな」

そんな話からはじめた。

合戦がどうの、源氏がどうの、平家が——とそんな噂は噂にも出さないのである。

藤九郎盛長は、足のしびれるほど、長い間、常胤の世間ばなしを聞かされた。

都の女から、恋歌をもらったりした事のある若い時代の秘め事まで、おもしろげに云い出すのであった。

「時に」

幾度か、改まって、口を切り出そうとしたが、外そらされてしまう。

そのうちに酒肴しゅこが出た。

なおいけない。

宴しがすすむと、孫たちから、家人の某なにがし、某、某——と次々に出て来ては、

「さあ、お寛ゆるやかに」

と杯をすすめた。

盛長は、元来が武骨者である。行儀も長持ちはしないので、もう臍ほそをきめた。ままにな

れと寛くわろいで、大いに飲み出した。

千葉介も、微酔のよい機嫌になつて、

「それでこそ、坂東武者よ。どうも、最前はまだ、佐すけどの殿のお使いとはうけ取れなかつた。

——世も革あらたまつて、新しい泰平となつたらまた、ずいぶん平家衆のみやびもお真似なされじゃが、きのう今日、伊豆を這い出た坂東者や若人が、今から人の顔いろばかり恐れているふうでは、ちと心もとない。……さあ、存分に、こよいは飲んで」

と、鼓つづみなど取寄せて、女たちに打たせた。

老人は、何もかも分つている。——あの言葉の様子では、頼朝様の書面も受け取つてくれる気持にちがいない。

盛長は、そう感じたが、

（待てよ、そうして、自分の為ていたらく体を見、ひいては、源氏の輩ともがらが、どんな土風か、どんな者の寄合か、試みておられるのかもしれない）

とも、密かに警戒した。

警戒しながら、彼は、大胆に飲みつぶれて、そこに眠ってしまった。

海が近いし、しかも夜は秋、丘の上の宏壯な豪族の館なので、寝ねごこちは実に快いい。

「……盛長どの。盛長どの」

もう深夜。胤頼が、ゆり起していた。

「そつと、奥の間で、父がもう一度、誰も交じえず会おうと仰つしやる。お越し下さい」
上首尾と、盛長は、血のおどる思いがしたが、

「しばしご猶予を」

と、庭面へ下りて、流れに嗽いし、髪をなで、衣紋を直してから、従って行つた。

鎌倉へ

一

「いつまでこうして、安房にじつとしていても仕方があるまい」

頼朝は、焦心つている。

いつまで——と云つてもまだ安房に上陸してから、半月程にしかならないのであるが、

頼朝に取つては、永い気がした。

毎日を無為に過しているまに、刻々、眼前の機会が、逃げてゆく気がしてならない。

しかし、その半月の間も、決して手を拱こまねいてはいるわけではなく、下総の千葉介常胤の所へ、藤九郎盛長に密書を持たせて遣やつたように、同様の書面を、八方へ送つて、

——旗きか下に馳かせつけよ。

——志のある輩ともがらは、みな伴れて来い。呼びかけて来い。

と、味方を募つつていた。

小山四郎朝政ともまさ。

下河辺行平しもこうべゆきひら。

豊島権守清元。

葛かさいの西三郎清重——などという顔ぶれの所は、それぞれ源氏にゆかりのある者、脈があらうと期待されていた。

中でも、葛西清重からは、逸いちはやく返辞が来たが、

(江戸、河越なんどの平家方に睨にらまれているので、参るには参るが遅くなる)
と嘆いて来た。

頼朝は、またすぐ返書を送つて、

(陸路がむずかしければ、海路を渡つて来い。時逸しては、千載までの恨事を遺のこそうぞ)と云つて遣やつた。

それほど、彼の胸では、事を急いでいた。——お味方申そうと云つて来た上総かずさ介のすけ広常からも言葉だけで、今以て迎えが来ないのである。

「時政」

「はつ」

「こちらから上総へ出向こうではないか。こんな僻地へきちにいては、馳せ参ずる者どもも不便だ」

「——が、もうしばらく、お待ちなされませ。当所の安西殿が今は旅先にあつて留守でもござれば」

「安西三郎の庇護ひごの下もとに、こうして半月の余を過しながら、無断で去つては悪いが、一日遅ければ一日だけ、味方に利という事はない」

「それにしても、まだ下総へ参つた藤九郎盛長も帰らず、その他、諸豪の動向もよう分らぬうちは」

「お許、何を云う」

軍事を語る時の彼は、時政だからとて舅御と崇めていかなかった。

「諸豪のうごきと、よく云わるるが、今となつては、誰が参らずとも、何者が敵と立とうとも、頼朝の方針に変わりあるう理はない。たとえ身一人となつても、突き進む以外の道を、頼朝は知らぬ」

この頃の彼は、云い出したら肯かなくなつた。旗挙げ以後——殊に石橋山以来、彼の温容な貴公子風は、すっかり強韌な皮膚と信念に固められて、時によると、時政でも土肥実平でも、頭から叱りつけたりする。そうした烈しい叱咤は、以前の彼には、まったくなかつたものである。

「——では、大勢は人目立ちますれば、五、六騎ほどお連れ遊ばして、密かに、お体だけを先にお移しあるおつもりで、上総介の館へお越しあつては如何でしょうか」

時政も、遂に、妥協してそう云い出したので、何分にも蟄伏している退屈にたえない頼朝は、その夜のうち仮住居の寺院を立て、安房から上総路へ向つた。

二日目の晩である。

然るべき家も見当らないので、大きな沼の畔りの百姓家に泊めてもらった。すると真夜

中に喊とぎの声だ。——供についでいた三浦荒次郎義澄は旅装も解かず、裏わらこの藁小屋の柱に倚よりかかったまま、不寝番ねずのばんしていたので、すぐ駈け出して見た。

何者か、およそ六、七十人、中には騎馬の影もある。此家このやを遠巻きにして、わあッわあアと騒いでいる。——そして大した弓勢ゆんぜいではないが、旺んに、矢を送って来た。

二

この辺に住すまう、長狭ながさの六郎という平家の侍が、夕方、頼朝の泊ったのを嗅かぎつけて、
「降って湧いた幸運」

とばかり、頼朝の首を取りに、夜襲して来た者だった。

三浦二郎義澄は、

「殿っ、お目ざめ下さい」

と、家の中へ吠鳴どなったが、物音がしないのでまた、

「各っ、各っ」

と、裏口から起した。

起きて騒ぎ立てているのは、此家の百姓の家族ばかりだった。嬰兒の泣き声やら、老人のわめき声が、外の矢うなりにつつまれて、哀れに聞えた。

「主つ、驚くな。外へ出るな。泣かずともよい。おまえ達は、一間にじつとしておれば怪我はない。——が、殿と侍たちは、どう召された」

義澄が、早口に問うと、

「お客方は、あれに」

と、嬰兒をかかえた女房が、唾のように、舌を吊らせて、わくわくと指さした。

裏の畑の地先は、すぐ沼の汀だった。頼朝はもうその小舟にかくれていた。

「義澄つ、はやく乗れ、捜していたのだ」

「あつ、殿ですか。——そのまま殿こそ早く岸を」

「乗れと申すに」

「いや、殿軍します。対岸の部落でお待ちください。それがしは陸路をまわります」

云い捨てると、義澄はもう敢然と、家の前の往来へ出て、近づく敵と斬りむすんでいた。

「義澄を討たすな」

と、頼朝のそばから、二人立ち、三人立ち、五人まで駆け上がって行くと、

「みんな来いっ」

と、頼朝まで、跳び上がって、遂に敵へ当り始めた。

敵は、六、七倍の人数だが、当ってみると、案外弱かった。いや、こっちの皮膚や精神が、伊豆でさんざん鍛えられて来ているので、そう思われたのかも知れなかった。

「追うな追うな。深入りすな」

五、六町先まで、追い崩して、頼朝は引っ返して来た。

「此家の百姓を宥いたわってやれ」

と、頼朝は、持合せの物など与えて、夜の明けないうち、小舟で沼を越えた。

翌日。

安西三郎景益かげますは、頼朝が立ったと聞いて、近くの旅の途中から、にわかかに道を更かえて

追いかけて来た。そして、

「行く先々、前夜のような狼藉者や、この際、何とか平家の恩賞にあずかろうと、慾にかつてかいる者も無数にある。軽忽けいこつなお旅は、危険極まるものでござる。すぐお引返し遊ばあそびますように」

強たって諫いさめたが、

「前へ行く道のみがどうして危ういと云うか。後ろへ退く道が必ず安全とどうして云えるか。そう考えるのは、まだ平常に囚とらわれておる其方の觀念だけのものだろう」

頼朝は笑つて肯きかない。

ぜびなく、彼も供に加わり、かくなる上は、とその由を、安房へ報じて、北条時政やその他の人々へ、

(途中で待つ。急いでご参加あれ)

と、云い遣やつた。

時政以下の者は、安房を引払つて、追いついて来た。総勢ここに三百余人となった。——もう忍びの旅とはゆかない。公然たる源氏の出動だった。安房に上陸して以来、初めて「軍」としての歩みを開始したものだつた。

武器、武装、元より安全ではない。三百の小勢は、まったく心もとない人数にちがいはなかつた。

しかし、頼朝が肯きかないので仕方がなかつた。時政も晴れない顔であつた。この時ばかりは、彼の老練な思慮も用をなさず、ただ頼朝の強情と若さに引っぱられて、ぜびなく歩いているといった姿であつた。

——ところが。

前に千葉介の所へ使いに行つた藤九郎盛長が、下総から帰る途中、頼朝の出勤を聞いて、これへ尋ねあてて来た。

三

待ちかねていた頼朝は、盛長が帰つたと聞くと、すぐ招いた。

「千葉介が返答はどうであつたか。——応か、否か」

「ご書の趣、承知とのお答えでした。最初は、難しいお気色に窺われましたが、ご子息方が、挙つてお味方あるようと、此方をご支持くださいましたため、さしも常胤殿にも、ついに、ご加担申そうと、お約し下されました」

「そうか」

頼朝の胸は、どつと鳴るほど、歡びに開けたに違いなかつた。しかし、そう一言、唇をむすんで云つただけだつた。

盛長は、なお、復命をつづけて、

「——また、常胤殿が仰せには、安房、上総かずき、何地いすちにしても、佐殿すけどのがおらるるご宿所として要害とは申されぬ。すこしも早く、旗をすすめて、相模の鎌倉にお拠よりあるが上策かと考えらるる……との事でござりました」

「鎌倉へ」

彼は、天来の声でも聞いたように、眸をあげて、

「——鎌倉へ。ムム、鎌倉へとか」

と、何度も呟いた。

それから盛長に、大儀であった、休むがよいと、犒ねぎらつて、自身は、時政やその他の将を集めて評議し始めた。

評議の結果、急に、軍の方向が変った。

ここまでは、

「上総介広常の館へ」

と、それが目標であったし、次の行動にかかる根拠地と目されていたが、頼朝は、その方針を一変して、

「鎌倉へ進もう」

と、ここで云い出したのであった。

「鎌倉は源氏 発祥の地と申してもよい。——後冷泉院の御宇安倍 貞任を討ち鎮められた後、祖先源頼義朝臣は、相模守となつて鎌倉に居を構えられた。——長子の陸奥守義家朝臣もおられた。——鶴ヶ岡八幡宮は、康平の秋、ご父子が奥州征伐のご祈願に、石清水を勧請なされたのがその縁起であるやに聞いておる」

やや迷いの見える諸将の顔色を見まわしたが、頼朝は、自分の熱意を押しつけるように、なおも、説いた。

「頼義公の威徳は、当時、坂東の武夫どもがみな慕うところであつた。民は帰服し、弓馬の門客は、常に諸方より鎌倉に往来して、公に接するのを名誉にしていたという。よく士を愛し、施を好むお方だつた。嫡男の八幡太郎義家公については云うまでもない。——それやこれ鎌倉こそは源氏に由緒の深い第一の地と思う。——要害の点も、この地方とは、比較にならぬ」

口を極めて、彼は、鎌倉を主張した。いや、その何れにするかを、諮っているのではない。自分の信念を、諸将にも、自分と同じ熱意まで信念させるために、云っているのであつた。

鎌倉と聞いて、誰も皆、

「なるほど」

と、そのの有利なことや、源氏にゆかりのあるという点など、異存はなかった。けれど、頼朝の云うのを聞いていると、頼朝は、そこに拠よることの上策であることのみ極めこんでいて、ここからそこまで進軍してゆく事のいかに至難な業わざか——可能か不可能かも、まるで考慮していないように見うけられた。

実際、頼朝は考えていなかった。この際、考えてなどいたら一步も進む地はないからである。彼はただ、良い！と信じ、行こう！と思ひ立った方へ指さした。——そして、

「来る者は、われに従つて来いっ」

と、他を云わず、三百余の兵の真つ先に立った。——鎌倉へ、鎌倉へ。道を更かえて、海沿いに出て進んだ。

隅田川

そのまま頼朝の人数が、下総しもつぎの国府までかかると、千葉介常胤ちばのすけつねたねは、胤正たねしげ、胤成たねしげ、胤道たねみち、胤頼たねよりなどの子息たちを初め、一族郎党三百余を従えて、迎えに出ていた。

「手みやげのしるしに」

と、常胤は、頼朝との見参に、一名の捕虜を曳かせて来た。

「これは、何者か」

頼朝が、訊ねると、

「千田判官代親政ちかまさと申し、当国千田庄の領家でござる。平忠盛が聳にもあたられば、お行先を遮さへぎるは必定と、こちらから機先を制して襲よせかけ、その折、孫の小太郎成胤なりたねが、生捕りました者でござる」

老人は誇らしそうに云った。

「その孫は、いずれに？」

常胤の誇りに花を添えてやるように頼朝が訊ねると、

「小太郎、小太郎」

と老人は、孫の成胤をさしまねいて、頼朝の見参げんさんに入れた。

まだ十六、七の若者だった。頼朝は、平治の乱に、自分たち兄弟が初陣に立った時を思い出すなどと語って、次々に、常胤老人の子息を近くへ招いて、

「みな、あつぱれな面魂つらだまし。競つて家名を揚ぐる事であろう。行末、頼朝も目をかけて進ぜるゆえ、老台にご安堵あんどあるがよい」

と、云つた。

わずか三百の小勢を引き率ひて、まだ扱よる所も持たない漂泊の亡将にしては、その言葉は、ずいぶん大言であつたが、常胤は、むしろその大言を頼母たのもしく見上げて、

「子息も、孫どもも、挙げてお預け申すからには、如何ようとも、お引廻し下されませ」と主従の約をつがえた。

その日、千葉城からは、頼朝の軍勢一同に、弁当を贈つた。

行軍の将士は、それを野外で開きながら、久しぶり飯の味を噛みしめた。——こんな飯を今日ここで味わおうとは、予期しなかつたところである。——ある者は、

(きよう下総へ入つたら、早速に合戦となろうも知れぬぞ)

と、弓弦ゆづるを調べたり、足拵えを確かめて来た程だった。それ程、千葉一族が味方に加わ

るといふ事も、ここへ来てみるまでは、まだ半信半疑だったのである。

将士でさえ、そうであった程だから、顔に出さない頼朝の歓びも、内心はどれほどだったか分るまい。——その歓びの溢れがつい云わせたのであろう、頼朝は、その夜、猪鼻いのな台だいの館の饗宴に臨んだ時、常胤の手を取って、

「何だか、自分までも、あなたの子息の一人かのような心地がする。以後、貴殿を以て、父とも思うぞ」

と、云った。

そう云われた常胤は、頼朝の世辞とは思いながらも、

「よい息子がまた殖えた。日本一の息子どではあるまいか」

と、心からほくほくしたが、頼朝の側にいた北条時政は、何か、嫌な顔をしていた。——同じような巧い言葉を、かつて、頼朝の口から、自分もうけた事があるので、それが思いだされたのである。

城内に、一夜泊つて、十八日の朝、頼朝はここから出発した。

すると、館の出口に、紺村濃こんむらぎの直垂ひたたれに、小具足を附けて、跪ひざまずいている若者がある。常胤の息子でもなし、孫とも見えないので、

「あれにおる者は？」

と、頼朝が訊ねると、常胤は、待つていたように、その若者へ、

「近う。——頼隆殿、近う」

と、さしまねいた。

二

「これは、毛利冠かんじゃ者頼隆と申されて、あなた様の亡父ちち義朝公の伯父君にあたるお方の遺わ子すれがたみでお在わせられる」

と、常胤は紹介ひきあわせた。

亡父ちち義朝の伯父で東国にいた源氏といえは？ ——頼朝はハタと膝を打つて、

「さては、陸奥六郎義隆が子か」

と、思い出して云った。

「はっ」

と、遅たくましい若者は、答えて、頭ずを下げた。

「忘れもせぬ……」

と、頼朝は呟いた。

「平治の合戦に、父義朝は敗れて、都を落ちたが、その折、叡山の北の龍華越えのあたりで、追い来る敵へ駈け戻し、亡父義朝に代つて戦死したは——お汝の亡父、六郎義隆殿でおわした。……その年、ひとりの遺子は、生れてまだ五十余日と聞いていたが、さては、その折の嬰兒が、お汝であつたか」

「永暦元年の二月、私が二歳の春、この下総国へ流されて来ましたが……常胤様のお情けによつて、密かに、きょうまで養われて参りました。——そして今日、源氏の御旗下に、こうして、あなた様のお姿を拝し……欣しくて……何か夢のようで」

と、二十歳ばかりの多感な武夫は、感極つて、後は両手をつかえているだけだった。「常胤。ようぞ長い間、この孤児へ慈悲をかけ賜わつたの。わしからも礼をいうぞ。——いざ立とう。頼隆も従けや」

彼は、館から歩み出した。猪鼻台の丘を大股に下つて行つた。

追いかけて、先立つ武者たちの物の具が、秋の陽に燦々する。城門のほとりや郭内の邸の並んでいる辻々には、たくさんの見送り人が佇んでいた。

武者が、旗を振つて来るうしろから、頼朝を真ん中に、常胤の一族や、北条時政や、諸将の姿が見えて来ると、辻の人影はみな大地にうづくまった。——そして、頼朝の顔を見た者はなく、わずかに、力づくよく運んで行たくさんの武者草鞋わらじの中に、

「あれが、もしかや？」

と、思い寄せて見ただけであつた。

陣貝さかが旺さかんになつてゆく。

頼朝と常胤の兵を併せると、総勢七百からの行軍になつた。ただ一色の源氏の白旗につづいて、千葉家の月輪つきぎのわの紋じるしも幾いくり旒ゆうか翻ひるがえつていた。

この日を、味方の数の殖えはじめとして、半日の間に、千を越えた。

「千葉殿がご加勢あるからには——」

と、五人十人ずつの、小さい仲間も俄にわかに駈にけつけてくるし、その前に、頼朝から召まねきの書状が飛んでいる葛西領、豊島領あたりの僧も二十、三十と郎党を率ひきつれて、途中から加わつた。

——鎌倉へ！

——鎌倉へ！

次第に全軍の足なみは大きくなった。そして、武総の堺、隅田川河原まで来た頃は、その河原で、待ち合せていた者や、海のほうから船で遡さかのぼつて来る人数もあつたりし、一躍、二千余騎の軍隊となつた。

その夜は、河原に陣して、思うさま、人々は、秋の夜空をながめた。

河幅は怖ろしく広がつたが、水は渡と渉しょうできる程だつた。数日、残暑の汗によごれた肌着など洗う兵もあり、魚を漁とつて、篝かがりで焼いて喰つている仲間もある。

——が、こよいにも、武総の地にある平家が、いつ夜襲して来ないとも限らない。水が蕭々しょうしょうとして夜更けを告げるほど、歩哨の兵は眼を光らしていた。

すると、隅田の宿しゆくの先まで、物見に出ていた兵の二、三騎が、

「おういつ」

何事かあつたように、鞭を上げて、此方こなたへ駈けて来た。

三

「大軍が来るぞ」

河原で馬を降りながら、物見の兵は、そこらに立っている歩哨へ云った。

「なにつ、敵かつ」

と愕く声へ、答えもせず、その影はあたふたと、土肥次郎実平の宿営へ駈けこんだ。

実平が、時政を訪れ、時政が常胤を起し、中軍の籌は俄に明々と火の音をはぜ、頼朝の座右には、すでに諸将のすがたが詰め合っていた。

——これへ大兵が来る。

との報らせは、次々に告げて来る者の口から、その装備、兵数、旗じるしなど、すぐつぶさに知れた。

兵数は、およそ二万余と聞えた。

前に、頼朝が安房にいた時、逸早く返書をよこして、

——お迎えに参向する。

と、味方を約し、落魄の頼朝を、第一に歓ばせてくれた上総介広常の軍勢だった。二万。

という兵数を聞いただけでも、諸将の面上には、包みきれない歓喜が漲って、

「ほ、ほう……」

と眼をかがやかした。

「この有力な大軍が、お味方に加わるからには」

と、きょうの 暁ぎょうてん 天てん から、源氏の運勢あたらが革まるような思いを誰も抱いていたのである。

その朝空は、隅田川の水ひとつに、うつすらと白みかけていた。

広常の大軍は、隅田の宿あたりを境に、河原から野へ互わたって、雲のように、止とどまっていった。

そして夜明けの光を見ると、その中軍から、赭あから顔で髪かみの真つ白な老将が、一門の騎馬武者たちに囲まれ、二十名ほどの兵卒を先駆として、ゆるやかに駒をすすめて来るのが見えた。

「オオ。上総介殿が来られる。ごあいさつに見えられる」

頼朝の営外に立っている兵たちは、小手をかざしながら、新しい味方の堂々たる威風いふうを、頼もしげに眺め合っていた。

四、五の将も、そこへ出て、

「道を開け。その駒の群れを、彼方へ移せ」
などと指図していた。

広常は、間もなく、陣所へ近く来て、ゆらりと駒を降りた。——そして士卒を遠く立たせ、嫡男以下の肉親だけを従えて、幕の近くまで進み、

「これは上総介広常でござる。一族、近国の輩ともがらなど狩り催し、二万余の同勢をひきつれ、ただ今あれに到着いたしました。この由、佐殿まで、お披露ひろうなねがいとう存ずる」

朝露に濡ぬれた陣の幕とぼりは、雨に晒さらされたように重たげに垂れていた。——広常のことばをそのまま伝えて、武士は、頼朝のすがたの見える幕の下とぼりもとひざまずに跪ひざまずいていた。

「……………」

いつまでも、頼朝が唇をむすんでいるので、辺りの将たちは、彼の面おもてへ眸まゆをあつめていた。大河の水の前に夜明けの光の白々とした下もとに見ても、その面おもては、配所にいた頃とは、別人のような黒さと強きょうじん鞞じんさを見せていた。

「畏おそれながら、お耳へ達します。ただ今、上総介広常殿には、二万余騎をお味方にひきつれ……………」

再び、取次の武士が云いかけると、石橋山の谷間以来、久しく聞かれなかつた頼朝の大声がいきなり、

「ならぬっ！ 追い返せ」

と、大喝たいかつした。

幾いくすじ条もの幕の彼方に、かなり距へだててはいたが、その声は、上総介のいるあたりへも、十分に届く声量であった。

「頼朝が安房より進軍してから、はや幾日になると思う。その間に、合戦あらば、二万十
万の兵とて、間にあわぬ味方だ。——遅おくれ馳ばせは、武士さむらいの第一に忌いむところである。左様
な者は頼朝と事をするには足らぬ。目通りはならんつ、疾とく帰れと云え！」

四

主従へだの隔へだてはべつとして、頼朝とは一心同体と信じている人々にも、頼朝のことばは、
実に思いもうけぬ事だった。

千葉、土肥、北条など居あわせた諸将は誰もが皆、ハッと顔色を変えずにいられなかつ
た。

第一に恐れた。

上総介広常の耳へも聞えたであろう事を。

第二には憂えた。

せつかく味方に来た二万の軍勢が、為に、離反して行くことを。

第三には、疑った。

頼朝の頭脳あたまを。怒りを。

そして、茫然うちの裡うちに、やや呆れあき気味さえ湛えて、頼朝の怒っている——ほんとに怒りきつている苦々しげな面おもてを——生唾なまつばのんで見すえていた。

正当だ！

これでいいのだ！

大喝を発して、ぽつと熱した耳朶じだをしながら、頼朝は大きく唇くちをむすんだまま、自分の胸へ自分で云っているように黙りこくつていた。

幕とばりの裾すそから倉皇そうこうと退がって行った取次の武士は、陣外たたずに佇んで案内を待っている上総介へ、主君のことばを、そのまま、伝えるしかなかった。

「寔まことに、お気の毒な仕儀でござるが」

云い難にくそうな口吻くちぶりで、そう伝えかけると、広常は、もう聞いていたのであろう、

「ご機嫌がお悪いようでござりますな。ご不興ここうむを蒙ったかどは、幾重にも、広常が落度に

相違ござりませぬ。——自身、御前おんまえに罷り出で、篤とくとお詫びいたさねばなりませぬゆえ、もう一度お目通りのおゆるしを賜わるように、左右の方々へも、お取做とりなしの儀願い入りまする」

と、頭かしらをさげた。

辞色も静かで、丁寧には云っているが、上総介広常も、土のような顔色をしていた。心のうちの穏やかでない事は当然わかる。

二万の兵をつれて、子や孫や一族どもまで語らい、ここへ見参に來ながら、頭から今のように叱りつけられて、何でそのままこの陣門を退がられよう。老将が、この年まで覺えない恥をさえ感じたにちがいない。——身も顫ふるえてくる、侍の面目をじつと噛んで躁さわぐ心を踏み泳こらえているにちがいがなかった。

「……では、暫時ざんじ」

同情にたえないふうである。武士はまた、幕營の奥へもどって行つた。

その姿が、隠れるとすぐ、

「ちツ、父上つ」

「大殿つ」

「広常殿つ。かつ、帰ろうつ」

彼のそばにいた子息や一族の誰彼は、左右から彼の手や鎧よろいの袖を引いて、憤然と促した。「な、なんだつ、千にも足らぬ小勢を引いて——。伊豆に敗れ、辛からくも安房にのがれて、ようやく千葉が組したので、形ばかりの軍勢となつたまでの佐殿ではないか。——ちと、慢じているつ。さ、さつ、広常殿、戻りましょう」

同じ年配に近い同族の老人さえこう云つて齒がみをすると、なおさら、子息や孫の若武者輩ぼらは、もう敵として立つ決意さえ眸とに研ぎたてて、

「佐殿が何じやツ。今の大声を聞けば、思い上がった阿呆に近い。あんな大将に、何で大事がなろう。こんな陣門へ礼を執つて来ただに口惜しい限りじやわツ。——さつ、引つ返そう！ お祖父様じい」

「父上つ」

と、動かぬ広常の体へ寄り集まつて、無理にでも、引き戻そうとした。

「……………」

が。広常は動かない。

そのうちにまた、頼朝の座所から前にも増して烈しい声ながれて来た。

「——ならぬつ。いらざる取^{とり}做^なしをいたすなつ。追い返せと申すに！」

広常の身をつつんでいた一族の輩^{ともがら}は、その声を洩れ聞くと、くわつとなつて、

「うぬつ」

一斉に、陣刀のつかを掴んだ。

「何をするつ。推参な」

広常は、叱りつけると、どう考えたか、それへ坐つて、両手をつかえないばかり身^{つつし}を慎んで見せた。

五

二度、三度まで、取次の役目に立つた者は、広常と頼朝のあいだを往復したが、頼朝の怒りは依然解けなかつた。

三度目には、余り気の毒と思つたか、取次の者と共に、土肥実平も出て来て、「きようは一先ずお引取あつて、他日、再度ご見参に出られては如何でござる。その間に、われわれよりも、ご気色^{うかが}を窺つて、よくお取做しいたして置きましよう程に」

と、慰めた。

しかし、広常もまた、辛抱ぶよく、これほどまでに叱られながら、なおも、大地に坐つたまま起とうともしなかつた。

「いやいや、佐殿のお怒りは重々ご理由のあることでござる。大事な西上のご発向に、馳せ遅れ申したは、広常が一代の不覚と、慚愧ざんきにたえませぬ。一たんここを起つては、殿のお憤りに対し、たとえ一時でも、広常が不平を抱いて去つたかと思わるる懼れもござれば、殿のお怒りが解くるまでは、ここに坐して、謹慎しておる所存でござる。どうぞ眼の外にお置き下されい」

いつか陽は高くなる。

馬には糧くさを飼い、兵は朝の兵站へいたんに忙せわしない。

対岸から伝令が来る。

また、一群ひとむれの騎馬が涉つて来る。

それらも皆、江戸、河越、甲府、秩父などの諸地へ行つた使者の戻りや、或いは、その返書もたらを齎して来る先方の使いなどであつた。

石浜宿の住民が、隅田川で漁とつたという鮮魚を小舟で献上に來た。それから少し後、附

近の神社の神官や土民の長が、連れ立って、拝礼を遂げて帰ってゆく。

陽はいよいよ高くなる。

「聞いたか」

駒寄場の辺りで四、五人の兵が大声ではなしている。

「けさの早打ちによれば、この月の九日に、帯刀たてわきせんじょう先生よし義賢かた様のご次男、木曾義仲どのにも、旗挙げして、等しく、以仁王もちひとおうの令旨をかざし、山道の地方から、都へ都へと、所の平家を打破つて、攻め上つておるといふことだぞ」

「ほ！ それは初耳だ。——だが、こちらにも吉報がある」

「何か」

「伊豆では、平家方に立つて、三浦殿を悩ました秩父の畠山重忠が、一族の衆、数人を使いとして、何やら殿の御前おんまえで謀しめし合せて帰った。——お味方に参会せんとの前触れとおれは見たが」

「武田太郎信義どの以下、甲斐の源氏も、どこかで合流するという。江戸、河越も、きょう明日あすには向背を決めてくるだろう」

兵のうわさは、単にうわさだけのものとも見えない。その半日の間だけでも、三十人四

十人と一隊になつて、舟で海口から溯つて来る者や、騎馬徒士立ちで、対岸から川を越えて参加し、或いは、随身を願ひ出る者が、やや大袈裟にいえば、ひきもきらない有様であつた。

そうして、隨身した兵は、すぐ労役を命じられた。半日の間も遊ばせてはおかないのである。附近の民家を壊したり、小舟を集めて大河を貫く舟橋の架設に向けられたり、軍器の手入れ、兵糧の徴発、あらゆる方面に働いていた。

「……………」

広常は、まだ坐っていた。

つい先頃までの彼は、頼朝の召をうけても、去就に迷っていたのである。が、今暁ここへ来る時には、もう肚は極まつていた。

——味方と見せて、二万の兵をもつて包圍し、一挙に討つてしまふ——であつた。彼の考えは、三度変つた。

——会う要はない追い返せつ。

と、頼朝から案に相違した叱言を聞いたせつなにもまた変つたのである。——これは。この人物は。ときすがに長い生涯を通つて来た老将だけに、初めて頼朝の人間を見直したも

のであった。

六

「誰じゃ。そこにおる爺じいは」

何かの指図に、陣の外へ歩み出て来た頼朝は、まだ、大地にじつと坐っている上総介広常を見かけて、

「あれは、何者か」

と、もう今朝の事など、忘れているような——その実、忘れていないらしくも見える顔をして——傍らの土肥次郎実平に訊ねた。

「上総介どのにござります」

答えると、

「何。広常か」

「はい」

「まだおったのか」

「お怒りの解けぬうちとはと——」

「ああ、それほどまでに」

大きく、頼朝は云いながら、自身つかつかと広常の前へ歩み寄って、

「老人、御足みあしが痛かろう」

と、軽く彼の肩をたたいた。

「——あつ、これは」

あわてて広常が、手をつかえかけると、頼朝は、その手を掬すくい取って、

「挨拶はあちらにて受けよう。さるにてもご堪忍のつよい事ではある。頼朝は今、ここ生

涯の門立ち、死にももの狂いの氣と、秋しゅう霜そうの軍律をもつて臨んでおり申せば、自然おごそ嚴か

に過ぐるとも、微塵みじん、日頃の私情や妥協は持ち合わさぬが——ようその軍律にお伏しあつ

たぞ。味方どもの心もこれでよけいひき緊しまろう。もうよい。——いぎ、こなたへござれ」

と自身、自分の幕営のうちへ、手を取らぬばかり宥いたわりながら導いて行つた。

で、広常はようやく、源氏のお味方たることを許されて、初めて自分の陣所へ歸つた。

けれどもまだ納まらないのは、彼の肉親たち諸將の輩ともがらだった。——その夜、営内に広常

を取囲んで、無念の涙さえたえながら、

「いつたい何故なにゆえあつて、あんな辱めはずかしをうけながら、誰にも出来ぬご堪忍をなされたのですか——それとも飽くまで彼に油断をさせて、後日、頼朝の首をあげて、一度に、ご鬱うっぷ憤んをはらそうというご計略ですか」

と、詰問なじり寄つて彼の真意を打叩いた。

広常は首を振つて、

「いやそうではない。わしは今日という今日ほど胆を潰つぶされた例ためしはこの年までまだ覚えぬことだった。——で、真実、あの殿には、頭が下がったのじゃ。そち達も、以後二心なく、あの殿をもり立てて行つたがいい」

そして彼はなお、次のように自分の観るところと、一つの例を、一族の後進のために説いて聞かせた。

天てんぎよう慶のむかし、この東国で平たい将しらのまきかど門かどが乱を起した時、人のわるい藤原秀郷ひでざとは、わざと彼の人物を視てやろうと、加勢いっわと偽つて会いに行つた。

すると将門は歓びの余り、結びかけていた髪かみのむすびも結びあえず、冠かむりをつけて客座に出て来た。その様子の軽率なのに、秀郷は、愛想をつかして戻つて来たということが云い伝えられている。

それに反して。

頼朝のきょうの態度は、見上げたものと云つていい。今、天下は平相国へいしょうこくの領地でないところはなく、平家の与党の住まぬ地は一郷一村とてない程なのに、一流人るにんから起つて、わずか三十余日、麾下きかの武者とて五、六百の小勢に過ぎぬ微弱を以て、この広常が、二万の大兵をひきつれて加担まかに罷り出たとあれば、将門が秀郷を迎えたよりは、大歎びに歎ぶかと思いのほか、

遅参の条、緩怠かんたい至極。

と怒つたのは、怒られながらも実に快こころよい事だった。将たる器うつわは実にああなければならぬ。おそらく、こちらの肚も観ぬき、その効果をねらつて怒つた事かもしれぬが、それにせよ行末頼もしい大将という資格に変わりはない。

大事はあのお方の手に依つて成し遂げられるにちがいない。そち達も、もはや迷うな。——もつとも誰よりも一番迷つていたのはこのわしじゃが、今日以後、上総介広常はまぎれない頼朝殿の股肱ここうであるぞ。くれぐれ生涯の方向をそち達も過あやまつてくるるなよ——と、広常は、夜更けるまで語りつづけた。

ぼうきよう
忘 驚 の 人々
ひとびと

一

相模の大庭景親から出した注進の早馬が、京都に着いたのは、九月一日ついたちだった。

六波羅では、

「片づいたな」

と、軽く見て、すぐ注進の一通を太政入道の手元へ。べつの一通は役人たちで開封した。それより前に。

ルニシヒヤウエノスケ
流人 兵衛 佐 頼朝謀叛、ハシロハカシハカ 遽二山木ノ館タチヲ囲ミ、

判官兼隆ヲ殺サツリケ戮シ、放火烧失シ終ンヌ。

という飛報はあつたが、

兇徒、ワヅカ二三、四十名ノミ。

とあつたので、

「なんじや、人騒がせな」

と笑った程であつた。

次の早打ちには、

——兇徒、勢ヲ得、三百余人、石橋山ニ立籠ル。タテコモ

と見えたが、その僅少な徒党に対して、伊豆、相模、武蔵の平氏が何千と駈け向つたといふので、

「ても、大おおぎ仰ような……」

と、なお、嘲わらつていた。

今、景親からの三度目の報告を開いてみると、案のじよう、その文には、

二十四日ゲウテン暁天。

頼朝、堪コラへ得ズシテ、遂ニ当所ヲ退キ、不知行方。ユクヘシレズ

或説ニ曰フ。イ穴ヲ掘ホツテ自ラ埋ウツマリタリト。

又、説ヲ為ナス者曰フ。

石ヲ抱イテ水ニ入レリト。

巷説多端、ソノ首ヲ見ザレバ確メ難シト雖モ、滅亡ノ条勿論歟。

「はははは。石を抱いて水に入る——はよかつたな。火へとびこめば夏の虫だった」
 一場の笑いばなしと過ぐる中に、景親に対しては、兇徒というかどで、恩賞の沙汰すら議されていた。

入道相国の身近に出入りする大将のひとりから洩れたはなしでは、頼朝謀叛と聞えた時、入道はひどく不機嫌ないろを示し、

「恩知らずの童めが」

と、口汚く罵つたが、次々の報告などには、一向さしたる関心も持たず、ただ最後の景親の早打ちを見た時は、

「ばか者である——」

と、暑い日に、一杯の冷水でもものんだような顔をしたという事であつた。

福原の海岸へは、ことしの夏も、知盛、維盛、忠度、敦盛など一門の大家族が、各の別荘へ、みな避暑に赴いていたが、秋風と共に、遊び飽きない姫や公達輩も、ようやく、都へもどつて来た頃だつた。

その都はまた、秋は秋とて、やれ月の宴とか、管絃の会とか、詩歌しうかざんまい三昧などはまだ清遊のほうであった。歌えば淫みだらだし、語れば恋とか喰い物の事とか、官職のあばき合いとか、人の陰口とか、そんな範囲でしかなかった。

この世は遊ぶためにあつて、百姓庶民は自分たちを遊び飽かせる為に生きている——そういう公達きんだちの頭には、太政入道が空からすね脛の青年時代に、瀕死ひんしの親の医者を迎えるため医師へ行つても来てくれず、薬価の算段に歩いても何処でもすげなく断られ、垢あかじみた破れ直垂ひたれ一枚で、冬空の下を、

今に見ろ。

今に見ろ。

と、水ツ涙ぼなをすすりながら独り力み泣きに鼻づらを赤くして泣いた事もあつた——などというはなしは、誰も清盛から二度三度は聞かされている筈だが、まるで遠い遠い昔ばなしの事でもあるように、ひとりとして身に思い出してみる者もなかった。

そんな孫どもや子息やまた、それにつながる係けい累いの救われない生活ぶりを眺めていると、太政入道は、時にひとり憤いきどおろしくなつて、

「いつその事、天てん譴けんがあらわれて、こんな痴兒ちじはみな、海嘯つなみに攫さらわれてしまえ」

と、世の為に憂うこともままあったが、時しもあれ、九月下旬、

兵衛佐頼朝、其後モ生存アツテ、武総ムツウノ隅田河原二陣シ、千葉、上総、甲信、武相ノ

諸源氏ヲ語ラヒ、兵員三万余騎ト聞エ、ソノ勢逐イキホセクジツンレツ日熾烈。

と、ある諜状を手にすると、勃ぼつぜん然と怒りを東へ向け変えて、日頃、唾棄だきしている都の現状や一門の繁栄を擁護する権化ごんげとなつて、すぐ討伐の軍議を命じた。

二

嘘みたいに皆思つた。

信じようとしても、信じられないのである。

石橋山から行方知れずになつた頼朝が、わずか一カ月の間に、総勢三万余騎で、隅田川をこえ、大井をこえ、徐々、西上して来る形勢だという。

いや。それどころでない。

次々と、情報のはいるたびに、三万騎が五万騎となり、七万騎に近いといい、果ては、十万余騎の軍勢と伝えてくる。

「ばかな」

「あわて過ぎておる」

「理に合わぬ事ではないか」

理に合わなければ、彼等は得心とくしんしないのだ。しかもその理論は自分たちの観念を基数として立てたものでなければ肯定こうていできない。

いつしかそういう習性を以て最も優すぐれたる階級の上にあるものと自分たちの知識を誇っていた。

——それと。

もうひとつ、彼等の知性のうちには不思議な病症ただよが漾たっていた。

それは。

驚かない！

という奇異な麻痺まひであった。

どんな事が起つても驚かないのである。

たとえば。

ひどい早魘かんぱつがつづいて、諸国窮民きゆうみんにみち、道にあわれな屍臭ししゆうが漂い、都下の穀

物は暴騰し、巷の顔は干からび、御所の穀倉すら貢物なく、人々はどうなるかと嘆息している——と聞いても彼等は驚いた顔もしない。

困る者は困るばかりに追いこまれてゆき、富有な者は、平家一門の風をまねて、世をも人をも恐れない贅沢ばかりして顧みないと聞いても——彼等はべつに驚かない。

日常、事々に、驚くことを忘れ果てた人々は、この春、源三位頼政が、あんな現実的に、血をもつて、世の苦悩を示しても、なお、そう驚きはしなかった。

(それみろ、すぐ片づいてしまったではないか)

と、むしろ騒動の後のいろいろな話題を興がって、しばらくは退屈をなぐさめられたくない顔していた。

あらゆる角度から観て、世の中の大きな意志は、少しずつ方向を更えている。それは、巷に歌われる童歌にも、力のない百姓の顔いろにも、何か倦み飽いた顔している市人の眼にも、明らかに、現れつつある事だったが、そんな大勢などには、当然、驚くわけもない。

華美に驚かず、美食に驚かず、果ては、あらゆる自分等の生活のまわりにさえ、良き驚きを失っている神経は、とうとうこの月、木曾義仲が拳兵の報を北方から聞いても、頼朝

が西上の急を東から聞いても——なお依然として、驚かない評定をつづけていたのであつた。

「近頃、おかしなうわさを耳にしたぞよ」

その評定も、ともすれば、雑談にばかり流れ易かつた。

「また、うわさか、よくいろいろなうわさが飛び出す。頼政にかつがれて、宇治でご最期遂げられた以仁王が、まだ生きていらつしやるといふ巷説ではないか」

「そうじゃ。御身もはや耳にされたか。——生きておられるくらいはまだよろしいが、それが、頼朝の陣中にあつて、指揮に当つておられるというのじゃ。そのため、何十万の源氏が立ちどころに寄つたというのじゃ。……さも、真しやかによ。アハハハ」

「はははは」

一方で軍議しているかと思えば、一方では笑いとよめいているといった体たらくである。そして早くも、この席が終つたら、こよいは何館の池殿へ寄つて酒を飲もうか、管絃して遊ぼうか、そんな事にもう思ひの忙しない顔つきも沢山に見えるのであつた。

そういう驚かない鷹揚な顔ばかりの中で、老いてもなお、驚く神経を持っているのは、太政入道の清盛だけであつた。

彼の側近くまで進み出て、何かしきりと獻言けんげんしている齋藤別当実盛さいとうべつとうさねもりのことばを熱心に聞き取りながら、清盛は、大きく呻うめいたり、首を振ったり、重盛を亡くしてから老来とみに悄沈せうしんしていた彼も、にわかには、驚おどろきに甦よみがえつて、矍鑠かくしやくと持前の生命力をてかてかと顔じゆうに光らせて来たかの如く見うけられた。

三

頼朝頼朝という声が、しきりと喧伝けんでんされてから、一般の民間では初めて、

「そういう人が、まだ東国とやらに生きていたのか」と、気がついたふうだった。

今更のように、彼等は、平治の乱や保元の頃の憶い出おもいでを、新たに語りだして、二十年の歳月をふり顧かえり、邊にわかに、世の中の変貌へんぼうに目をみはり出した。

「そうそう、あの折、六条の頭殿こうのどのの遺子わすれがたみという幼な子が、粟田口あわたぐちから押立おたての役人衆にかこまれて、伊豆の国とやらへ流されて行った——」

「その下の乳呑みは、鞍馬へ追いあげられ、稚子ちごとなっていたそうじゃが、いつの間にや

ら、それも巢立ちして、陸奥^{みちのく}へ逃げ走ってしもうたとか」

「鷹の子は、鷹の子よの」

「何しても、早いもの。もう二十年経ったか」

話題には興を抱いても、庶民たちはまだ他人事^{ひとごと}の気がしていた。それから二年後には、その頼朝の政治下に生活したり、その義経の支配下に京都が守護されたりして、自分等の生活にも今、刻々と変革が近づいているのであるなどは思いもしていなかったのである。それでも、民衆は、いよいよ六波羅の軍勢が、五万余騎も編成されて、

頼朝追討

と称して京都を進発した当日には、辻々へ山のように見物に出て、その物々しさに、意外な顔をしていた。

「こんな大軍で向わなければ討てないほど頼朝も大軍を持っているのか」

と、^{にわか}遽に、頼朝の存在と、事態の重大さを感じて来た顔つきだった。

二十年前、十騎に足らぬ押立^{おっただて}の役人と、五、六人に足らぬ身寄りにかこまれて、配所の伊豆へ送り遣^やられた哀れな一少年のすがたは、まだ記憶している者がたくさんあった。

「その日も、この辻でな……」

と、見物しながら、当年の有様をはなしている人々も多かつた。

道も同じ六波羅の大路から粟田口——蹴上、大津の関へと、華やかな軍馬の列は流れて行つた。

大將は平維盛、忠度のふたりであつた。斎藤別当実盛が、東国の事情にくわしいので、案内として、幕僚の諸將のうちに従つてゆくのが目についた。

その一人一人の扮装だけでも、目のさめるような美々しきであつた。兜、鎧の華やかさは云わずもがな、黄金の太刀、白銀の小貫、矢壺や鞍にいたるまで、時代の名工が意匠の粹を凝らした物づくめであつた。一すじの箭にしても、羽は鷹の石打、塗りは誰、鍔は誰が作と、切銘してその優美を誇るに足るものだつた。——それが坂東武者の粗鉄のかぶとや鎧に射当つて、突き貫るか、刎ね返されるかは、別問題であつた。

海道を下つて、興津の浜あたりに陣した時、維盛、忠度の二人の大將は、案内者の斎藤別当を間近く呼んでから、真面目に質問した。

「いつたい、頼朝の手勢の中には、其方ほどな弓勢の武者が、どれくらいいるのか」
問われた実盛は、世にも情けない顔をした。余りにも認識の足らない大將たちではあると思つたが、その認識不足を補佐することが、多年、恩顧のある入道相国から託された自

分の任務であつたと思ひ直して、

「何を仰せられます。この実盛ごときを、よき者と思し召してか」
と、齒に衣きぬきせず云つた。

「——弓は三人張り、五人張りをふつうに引き、一矢に二人三人を射仆す者はいくらもおります。日頃の稽古けいこにも、鎧の二領三領は射貫いぬき、総じてあだ矢を射る者などはおりません。馬は、牧の内から心まかせに逸物いちもつを選び取り、朝夕、山林や野を駈けて、鍛きたえに鍛えた駒こまぞろいです。——また、坂東武者の習いとして、父が死ねばとて、子は退ひかず、子が斃たおれればとて、親も退かず、一族肉親の屍かばねを踏みこえ踏みこえするほど、一念を固め、いやが上にも強くなるのが持ち前つばであります」

維盛も忠度も、半信半疑に、唾つばをのんで聞いていた。

鶴ヶ岡

鎌倉へ。

鎌倉へ。

一兵卒にいたるまでこの目標は持つていた。分りのよい相言葉だった。

たちまち、それは時の声となり、揃う足なみともなった。軍隊の中だけではない。庶民の生活目標までが、何んとなく、

鎌倉へ。鎌倉へ。

と、意志づけられた。その足なみから外れると、時代の流れに置き去られる気がした。

——京都へ。六波羅へ。

頼朝がそう云つたら、或いは、危なげを抱いて、一斉に従って来なかつたかも知れなかつた。——けれど、鎌倉と聞けば、源氏発祥の地——坂東武士の心の故郷——天嶮の地勢——民心はかえってその新鮮な土の香と、次の建設を逞しく想像した。

どの顔も、どの顔も、秋の陽に焦けて真つ黒である。眼ばかりが光っている。甲冑も粗末なのが多い。弓も箭も手拵えのただ頑丈なのが多い。——そういう将兵が何万何千か知れないほど通つた。

細谷川の水も草間の小川も、すべてを抱擁ほうようしてゆく大河のそのように、頼朝の軍は、行く行く投降者を収めたり、迎え出る郷軍などを加えて、十月の六日、鎌倉へ着いた時は、人家もまばらなその漁村や農土を、いちどに人と馬で埋めてしまう程だった。

土地の郡司や村の長など、一かたまりになって迎えに出ていた。頼朝は馬上から一瞥べつを与え、

「亀ヶ谷とはどこか」

と、いきなり訊ねた。

北条、千葉、土肥、その他の諸将も、そんな地名を聞くのは今初めてだったから、ふと不審な顔をした。

「遠くではござりませぬ。ならばご案内いたしましょうか」

「そうだ……ともあれその、亀ヶ谷まで参りたい。先に立て」

そこは侘わびしい稲田と松並木の南にあった。扇ヶ谷おうぎがやつ、泉ヶ谷いづみがやつなどと呼ぶ山間やまあいの湿地と同じだった。頼朝は甚だ自分の想像と違っていたらしい面持おももちで、

「あ。狭いなあ！」

駒を降りるなり、傍らの北条時政、土肥次郎、千葉常胤などを顧みて、いかにも惜しそ

うに云つた。

「お狭いとは……。ご陣地のことで？」

「いや何。わしはこの亀ヶ谷へ、わしの居館を建てようかと、道々も、その殿楼や門造りなど、頭に図を描いて来たのじや。……が、来てみれば、案外の狭さに、失望したのだ」

「お住いの地相をお選びなれば、この広い鎌倉中、御意のままでございましょうに」

「いやいや。亀ヶ谷には、亡父義朝ちちが在世の頃、しばし住んでいたと聞いておる。それ故に、住まばここと思うたまでよ……。何ぞ、その頃の遺物かたみらしき土台石でも残っていないか」

「あれに、古い堂宇どううが見えまするが」

「さてこそ。父の歿後、岡崎義実よしざねが建てた一梵宇ぼんうとはこれであろう」

頼朝は、つかつか歩み寄つて前に立つた。——無言のままだった。掌てを合せるとすぐ退がつて来た。

鎌倉の第一夜を、彼は民家に泊つて明かした。翌日は彼自身、鎌倉中の地を視歩みいて、大倉郷の地を選定した。決めるとすぐその日から崖を切り崩し、小川を埋め、たちまちどこからか巨石や用材を運ばせて、建設の礎いしずえをすえていた。

二

頼朝の口から出る命令には、すべてに互^{わた}つて、

——息をもつかせじ。

とする気合が見えた。

安房を立ち、隅田川を発し、鎌倉へ着いてからでも、何事にまれ、明日^{あした}を待つて、という事はなかつた。

前進。前進。前進！ 踏^ふみ揃^{そろ}つている打破と建設の足なみを、一步も弛^{ゆる}ませまいとするものようであつた。

もちろん彼自身の生活が、その足なみの先頭にある事はいうまでもない。彼自身^{かん}が、閑^{かん}を偷^{ぬす}んでいたり、ほつと息をついていたりしていながら、全体の足ぶみだけがある理由はなかつた。——鎌倉の府ができ上がった後は知らず、今の彼は、創^{そうぎ}業^{ぎょう}の人だつた。革^{かく}新^{しん}の潮^{うしお}の先頭に置かれた時代志向の権化でなければならなかつた。

ただの民家を一時の居館として鎌倉の第一夜を明かした頼朝は、早^{そうぎ}暁^{ぎょう}に、十万の軍

を閲し、諸將の口から、昨夜来、ここへ馳せつけて加わった新しい兵数の報告を聞き、その部將たちに目通りを与え、また、老將千葉介常胤や上総介広常には、
「土民には、安心して生業にいそしむよう。兵には、軍律を遵守して、よく住民をいたわるよう、令を布き、札を建てよ」と、命じた。

その足ですぐ、彼は、

「鶴ヶ岡へ参拜にゆく」

と、云い出した。

この事は、きよう明日には、必ずあろうと予測していたので、列伍は立ちどころに整った。畠山次郎重忠を先に、千葉介常胤の隊が後ろに、頼朝のすがたを護つて、肅々、道を進んだ。

道は、山之内村の耕地からやがて杉並木につつまれた木蔭にはいった。巨福呂坂の下あたりから水の涸れた谷川に沿ってゆくと、程なく、鄙びた板橋に丸木の欄をつけて赤く塗つてあるのが目についた。

「鶴ヶ岡か」

「さようでございます」

左右の答えを聞きながら、頼朝は駒を降りて、もう大股にその赤橋を渡っていた。が。すぐ足を止めて、

「……此処か」

と、前なる山の鬱蒼うっそうや、木の間に澄む秋空をしばらく仰いでいた。

「静かだのう」

諸将を顧みながらまた呟いた。そして地上に眼をうつした。山清水のにじみ出している其処此処に、小さな池が幾カ所かできていた。池には蓮の葉が破れ、赤い沢蟹さわがにが戯たわむれていた。

「——祖先、頼義公も、義家公も、また亡父義朝も、この道を何度かおひろいなされた事であろう。わけて義家公には、この宮の祠前しぜんで元服なされたので、八幡太郎と名のられた。今頼朝また、ここに詣もつでて平家を亡ぼさん畢ひつせい生の願をかけ奉るとは」

心あるもののように、全山の樹靈じゆれいは青々と喊とぎの声をあげて揺れていた。黄いろ葉くれな、紅の葉は梢を離れて舞ってくる。——頼朝は、歩を移して、池から池へながれて行く小川に寄きよって手を浄めた。

そこへ、急な使いが来た。

伊豆の秋戸郷あきのとこうから来た侍だとある。頼朝は秋戸と聞くと、

「ここへ呼べ」

と、そのまま待った。

使いの侍は、余りの晴れがましさに遠く平伏したきりだった。御台所のご書面を携たずさえて参りました者ですと云う。眼くばせして、頼朝は、畠山重忠の手を経てそれを受け取った。

——なつかしや妻の文

と、顔にもそれは現れていたが封はひらかず、肌はだに納めてただ一言、

「政子は無事か」

と、たずねた。

「近ごろはわけてもお健すこやかでいらせられまする」

と、使者が答えると、

「いづれ沙汰いたせば、それまで待つておれと伝えよ」

そう云うと、頼朝は、出迎えの神官を先に立てて、鶴ヶ岡の社前へ、静々、登って行った。

三

その夜、頼朝は手紙をかいて、伊豆へ急使を立てた。

妻の政子へである。

女というものの身になれば、この二月ほどがいかに長いものであったか。いかに辛い日ごとであつたらうか。——頼朝は、その夜にわかにかが恋しくなつた。女の身を可憐いじろしいものと思ひやつた。

一日、措いて、

「地じぎよう形は早できたかな」

と、大倉郷の地ならしを検分に出向いた。

わずか四日目にしかならなかつたが、その広い宅地はあらまし整理されていた。

「早かつた」

作事の奉行大庭景義は賞ほめられた。同時に、また、矢つぎ早に次の作事をいいつけられ
そうだった。

「景義。あとはもはや石を礎え、屋を建てるばかりだの」

「されば、門石垣の粧いなどいたせば限りもござりませぬが」

「まだ庭を見、出入りの門を飾る遣はない。住むに足ればよいのだ。——左様に急を申したところ、当所の知事兼道の邸を、そのまま山内から移して組めば早かろうと皆が云う。兼道も、あの家は正暦年間より一度も火災に遭うたこともないめでたい家、住み古したれど、当座のご用に献じたいと申し立ておるとか。……そう致したら工事は幾日で出来あがるな」

「七日は要しましょう」

「七日」

頼朝は、そこへ自分がすぐ住もうとは考えていないのである。一日もはやく妻の政子に、自分の手で造った家と安心を与えてやりたかった。

「続いて、そちへ作事を申しつけておく。速やかにせよ」

その日の黄昏から夜にかけて、もう夥しい馬、牛、車などが徴発され、千人をこえるであろう人夫や兵卒が松明をかざし、材木や石の綱を曳き、山内と大倉郷との道すじは、さながら戦場のような喧騒と赤い光でいぶっていた。

「道をひらけ。下におれ」

そこへ、騎馬徒歩かちで三十人ほどの侍が、ひとりの婦人を乗せた輿こしを護って、さしかかつて来た。

「何じゃ。何者じゃ」

「どこの女にょしやう性か」

人夫を指揮している将のひとりが咎とがめると、

「無礼すな。これに在おわすは、御台所の政子の方様である。伊豆の秋戸の里よりお渡りあつて、今この鎌倉へお着きなされたところだ」

「……あつ、御台所で」

人々は驚いて牛を退のけ、馬を曳いて、わらわらと土下座した。

輿のうちには、美しい人の気はいが窺うかがわれる。簾みすのうちには、在る政子の目には、松明の赤々といぶる中に、無数の武士が列を正し、土民は地に坐つて、自分を迎えている有様が、何か、涙なしに見ていられなかつた。

そのすべてが、良人の権威に見えた。良人の偉さに見えた。それにしても、わずか数名つわものの兵を連れたのみで、房州へ落ちて行つたあの一孤舟の良人が、ふた月の間に、こんなに

も大きな勢力を持つて自分を迎えてくれようとは、夢のような気もしてならなかった。

その夜、ふつうの民屋の何ひとつ飾りとてない一室に、政子は、良人を見た。頼朝は、妻のすがたを見た。

夜はやや寒い一室には、白い燭ひのみがまたたいていた。この夜は、二人にとって、結婚の夜よりも、もつと清浄な情愛と、厳かなものを胸にうけた。

その清らかな魂と魂とを抱いて、ふたりは翌朝、また改めて鶴ヶ岡へ詣もつでた。——頼朝はこの妻を、亡き父と祖先たちへ見参に入れた心であった。

七日と日限した大倉郷の居館は、一日早く竣しゅんこう工して、その月十五日には、政子も頼朝も初めて——実に、頼朝にとつても二十年來初めての「わが家」に移り住んだ。

しかし、頼朝が、そこにいたのは、たった一日でしかなかった。

みずとり
水禽

維盛、忠度を大将とする平家の大軍は、頼朝が、政子のため大急ぎで建築した飯の館へ移った二日前の十三日に、駿河国の手越の宿に着いていた。

その早打ちを受けとりながら、頼朝が、たった一夜でも、その飯館に妻と共に送ったのは、

——そなたの為に。

と彼は妻に云ったが、男たる者の胸には、べつな計りがあつての事であつた。

石橋山から遁れて、甲州その他の方面へ遁れていた味方はかなり多い。加藤次景員、同じく景廉、伊沢五郎、逸見冠者光長などが、甲斐源氏の武田一族や、安田義定などと団結して、これが駿河方面へ出、鎌倉の本軍と合流することになっている。

それと、こんどの京勢との対陣は、今までの部分的な戦とちがって、彼の主体と味方の主体とが初めて相まみえる大事な合戦と思われたので——頼朝も軽忽にはうごき出さない肚らしく見えた。

「二千の兵は、鎌倉に残しておく。三百の兵は、この館の護りに付けて参る。今までのような憂き目はもう見せまい。またしばし、留守をしていよ」

立つ日の朝。——それは十六日であった。頼朝は、妻へこう云いのこして、大倉郷の館を出た。

令は、すでに発しられていた。

鶴ヶ岡を中心として、数万の兵馬は、彼の発進を待っていた。

頼朝は、三度、鶴ヶ岡に上つて社前に拝跪はいきした。

この日の出陣の祈願は、この山初めての盛儀だった。

走り湯権現の良りょうせん暹せは、大勢の僧をつれて会し、法華ほっけ、仁王、軍勝の三部妙典ごんぎを勤

行ようして、鎮護国家の禱いのりをあげた。

その日。

鎌倉の海は、波が高かった。しかし、初冬の空はすみ風は冴えて、山下の数万の兵も、

その間、肅しゆくとひそまり返つて、禱りの心をひとつにしていた。

やがて——

進発の貝の音がながれた。

旗なぎなたが、長刀ながなたが、うねうねと、山伝いに遠のいてゆく。けれど、後から後から続く兵馬

は容易に絶えなかつた。

別働隊の加藤次景廉や甲斐源氏の輩は、駿河国で出会い、いよいよ奔河の勢いを加えた。二十日。——全軍は駿河国の加島についた。

「おお、見える」

武者たちは、物珍しげに手をかざした。陣地となったすぐ前には、富士川の大河が横たわっている。けれど眼に大河はない。彼方の岸边にひめられている無数の幕と、そして楯や防材を組んだ罫や、また、遠方此方の森や民家の陰にいたるまで、およそその見えぬ所はないほど赤い旗の翩翻と植え並べてある盛観に、

「あな、目ざまし」

と、思わず眼をみはったのであった。

けれど、その感嘆は、坂東武者たちには、すぐ反対な苦笑になった。

「さすがに、派手やか」

「うわさに聞く、福原の船遊びと、間違えているのではないか」

「一矢、挨拶いたそうか」

「待て待て。まだ射よと命令の出ぬうちに、徒らな、弓自慢は、蔑まれようぞ」

その日は、陣の備えに、源氏方は暮れた。

「はて、虚きよについて襲よせかけて来る様子もないが」

夜になると、陣の囲いを出て、兵つわものどもは、河原へ出て、敵方の陣地のうえに、ぼうっと赤く映さしている篝かがりを眺めていた。

二

オーイと呼べば、敵の陣からもオーイと答えそうな気がする。

この十数日は、大雨もなかったので、富士川の水は、星明りでも底がすいて見えそうなほどきれいだった。河の中ほどにも、所々、洲肌すはだが現われているのを見れば、流れのふかい所でも駒の脚で越え渡るに難くはなさそうに思われる。

「おい。……風のあいまに、笛の音がしてくるぞ」

「どこから」

「対岸から」

「嘘をいえ、この合戦に」

「いや、鼓つづみの音らしいものも聞えてくる」

「気のせいだ」

「そうかな？」

そう思えば、そういう気もして、何より明らかに聞えるのは、やはり水の音と、葭よしの騒さわめきであつた。

そのうちに、何処かで、大きな人声がした。水の中である。馬が陸おかへ跳ね上がつて来た。驚いて駈けてゆくと、早い流れに浮き沈みして、人間が流れてくる。

「ばかつ、どうした」

綱を投げて、救い上げてやると、それは馬を洗いに下りた雑ぞうひよう兵で、余り流れが静かに見えるし、浅いとばかり思つていたので、つい深みへ墮おちて溺れかけたのだという。

「あははは。まだ敵へ、矢一すじも射ぬうちに、水に溺れたりなどしたら、故郷ふるさとの親兄弟も、世間へ顔向けがなりはしないぞ。あわて者めが」

笑い声が高いので、陣地の陰から一人の侍が出て来て、叱りつけた。

「何をしておるつ。身をかくせつ。馬を後ろへ曳き込めろ。この薄月夜に、いい的まとを出しておくようなものだ」

兵たちは、あわてて陣地へ駈けこんだ。楯や物陰には、むっとする程、汗くさい人いき

れがしていた。

「いつ来るか？」

と、敵の夜襲に備えて、夕方、兵糧ひょうろうをつかつた後は、身じろぎもせず、弓をにぎり、太刀をつかみ、一刻一刻、息をこらして、更けゆく富士川の水を睨んでいるのだった。

夜が明けた。

敵は来ない。——いや一矢の矢うなりも切つて来ないのだ。稀 《たまたま》、征矢そやのごとく水をかすめるのは、羽の青い小禽ことりだった。禽とりといえは、ゆうべ喰べこぼした兵糧の米つぶへ、無数の小禽が群れ下りて、刃の光も、武者たちの登音にも恐がらないすがたが、又なく愛らしい。

危険を冒して、河の深さを偵察に行った者が帰つて来ての報告によると、中なかの洲すから西方の主流の一脈が、最も激流で、また最も水深がある。その水幅は五十間足らずであるが、人馬の背丈せたいけであるから押し渡るとすれば、ぜひともそこでは、多数の犠牲者を出さねば渡河は難しかろうという。

「なんのそれしきの激流。海ならば知らぬこと、馬を乗り入れて、一度に越えれば」

と、その日のうちにも、渡河戦を決行しようとの議もあつたが、数日前に着いている敵

でさえ容易に越えて来ないところを見ると、想像以上、流れは早いのかも知れない。――
また、それを利して、敵にも計はかりごとのあることは明らかでもある。

「あつ、来たつ」

夕方、源氏方は、自分たちの頭の上を越えて行く矢の快こころよい羽うなりに、眼をあげて、どよめき出した。

楯まで届かない矢が二、三十本河原に落ちた。さらばと、源氏方からも、五、六騎河べりへ乗り出して、鞍上からキリキリと満を引きしぼって返し矢を送った。

その弓勢ゆんぜいに恐れてか、日没と共に、平家の陣はひそとしてしまった。――今夜も淡い月が出ていた。すこし雨曇りの空ではあるが、雲は断きれていて、時折、雁の影がよぎって行った。

三

その夜、源氏方では、

「河を越え渡るには、未明を計つて、敵の寝込みを襲うしかあるまい」

と、朝討の評議がきまつて、部将たちは、夜おそく、各の陣地へ支度にもどつて行つた。

武田太郎信義は、次郎忠頼、三郎兼信の二人を連れて、そこから帰る途中、

「あすこそは、甲斐源氏の名に恥じぬよう、人に負れぬ先陣を取りたいものだが」と、洩らした。

すると二郎忠頼が、

「お味方のうちには、われこそと、腕をさすつて、あすの一番乗りを期している面々が余りに多すぎますゆえ、尋常一様なことでは衆に優れた功名を揚げることはできませんまい」

「いや、どうしても、あすの名誉は、甲斐源氏のわれわれが克ち取らねばならぬ。——伊豆、下総、上総、相模、武蔵の味方たちは、年来お側にご奉公を遂げた者や、各地で戦つて来た人々だが、われらにとつては、あすこそ初の戦場だ。……こんな時こそ、生涯人の下風につくか上に立つかの、分れ目というものだ」

「では、こうしては如何です。……こよいのうちに、そつと、陣所を払つて」

「抜け駆けか」

「ずつと上流へ行けば、浅瀬があります。迂回して、平家方の後ろにひそみ、お味方が一

齊に、河を渡りかかるや否、同時に、平家の陣中へ突き入るのです。——さすれば、何なんび人ひとよりも負おれる氣きづかいはありません」

「よく氣づいた。よしつ——すぐに立とう」

武田兄弟は、走り帰ると、にわかに兵をまとめ、駒ばいに枚ふくを衝つませて、味方にも氣づかれぬように、富士川の真夜半まよなかを、肅々と岸に沿って上流へ移動しはじめた。

すると、すでに一群の騎馬が、河を渡つて、彼方の岸へ、忍び忍び上がってゆくのが見える。すばやいやつ、そも何者かと追いついてみると、それはやはり同郷逸見冠者へみの光長、安田三郎義定などの味方だった。

「待たれよ」

と、太郎信義は、安田三郎へ声をかけた。

「抜け駈けのまた抜け駈けは、同士討はに似る。逸はり合あつては事を破ろう。われも甲斐源氏なり御辺たちも甲斐源氏の一党。ひとりひとりの手功てからを捨てても、甲斐源氏の名において名誉をあげたら、それで本望ではないか」

と、云った。

義定、光長も、

「元よりの事」

と、武田勢に合体した。——陣所が近かったので逸早く太郎信義たちの行動を知って、彼等も、置き捨てられじと、先へ急いで来たものだった。

夜半よなかも過ぎたろう。渡りきった千余騎は、なおさら行軍をひそかにして、平家の陣のうしろへ迂回まわった。低い雨雲にも、ふかい夜霧にも、篝火かがりが赤く映えていた。その辺りいちめんが、平家五万余騎の夢をつつんでいる陣地とながめられた。

大きな沼にさしかかった。北方にこの富士沼があるため、平家方では、上流の守りを安心しきっていたのである。もちろん武田太郎信義たちは、葭よしや葦あしを踏んで越えられそうな湿地を探つて、ざわざわとそこをも渡りかけた。

すると、何千羽とも知れない水禽みずとりが、いちどに翼を搏うつて飛び立った。面々の駒おしころは愕おどろいて、幾頭かは沼水の深いところへ跳ねこんだ。

「すわ、敵の大軍が」

と、あわてたのか、その時、平家の陣所の方で、海嘯つなみに追われた人間の悲鳴を思わずような喊こゑの聲があがった。

どんな事が世上に起つても、驚くことを忘れていた平家の人々は気も萎なえ、腰もぬかす

ほど、今、一斉に驚きを知った。

四

頼朝は、侍臣に、呼び起された。

「何事が起つたやら分りませぬが、平家勢が、にわか邊になだれ合つて、逃げ行く様子でござり
ますか？ ……」

夜明け前に、渡河を決行する予定なので、彼は、よろい鎧も解かず、身を横たえていただけだ
った。

「なに。敵が遽にひきあげて行くと？」

いぶかしげに、外へ出て見ると千葉介常胤も、かすきのすけ上総介広常も、おやこ北条父子も、とぼりみな幕を
払つて、闇の中に佇んでいた。

「さては誰か、軍令を犯して、先駆けた味方があるとみゆる。ともあれ、すでに合戦と
なつたからには、ゆうよ猶予すな」

頼朝は、全軍へ向つて、進撃の令を下した。

「誰だ、味方を出しぬいて、先へ渡った者は」

憤激した人々は、争いあつて、駒の群れを富士川の流れに駈け入った。

しぶきの列を破つて、洲へ躍りあがる。また、流れへ突き入つて、真つ白なしぶきを浴び合う。

本流へかかると、元より駒の脚も届かなかつた。

一団、また一団。馬は黒々と、先を競つて、白波を揉みながら泳ぎ渡つてゆく。

「ふしぎだぞ！」

流れの中で、武者たちは、話していた。

「——一筋の防ぎ矢だに來ない」

「彼方の岸边にも、敵の影が見えぬのは何故か」

「張合いもない事だ」

しかし、それだからとて、他の戦友におくれていいとは誰も思っていないらしい。一騎が先へ出れば、すぐ一騎が追い抜く。また他の二、三騎がその先を取る。余りに急いで、鞍から身を浮かし、激流に攫さらわれかける者もある。すると、すぐ、誰かが弓か長なが刀なたの柄をさしのべて、

「つかまれつかまれ」

と、扶たすけ合う。

二、三百騎、いちどに水を切つて上陸あがつた。誰が先、誰が後とも見えなかった。たちまち、千騎、二千騎、なおも後からひきもきらず平家の陣地へ駈けこんだ。

「おうーいっ」

と、呼べば、

「おおういっ」

と答えてくる。どこを駈けている者も味方ばかりだった。平家の旗や幕とぼりはあるが、敵らしい者には誰も出会わなかった。

「何で、かくも素速すばやく、あれだけの大軍が逃げ去つたのか」

源氏方には、ただ不思議でならなかった。そのうちに、

「いたわ、いたわ！」

と、味方の若い一組が、大声で騒いでいた。何がいたかと、駈け集まってみると、平家方の大将の陣所らしい幕舎まくやの隅に、一かたまりの妓おんなの群れが、おののき縮まって、地に伏したり、幕とぼりにかくれたり、抱き合つたりして——中でも稚おさない十二、三の妓おんなは、シクシク泣

いていた。

「なんだ、敵ではないのか」

「この近くの宿駅から狩りあつめて来た傾城けいせいどもだ。……いや、民家の娘らしい女子おなごもみえる」

「あきれたものだ。——陣中へ」

「ここばかりでない。どこの陣所にも残っているのは女ばかり。——都そだちの平家人は、女子にまで、かくも無情よ。日頃の軽薄は、あたりまえであつた」

「あはははは」

「わははは」

遊女たちの話で、平家方の大将たちが先になつて、水禽の羽音と共に逃げ出したという始末がわかつた。

また、大地を見まわせば、種々さまざまな食器やら、樂器やら、化粧道具たぐいの類まで、およそ贅ぜ沢いたくな日常用品で落ちていない物はないほどであつた。

兄と弟

一

その日、黄瀬川の宿駅には、何万という兵馬が屯した。もちろん宿中にそんな人員が泊りきれぬわけではない。頼朝の宿舎を中心として、畑にも野にも河原にも、それぞれ陣を分つていたのである。

富士川の帰りであった。

一戦も交じえずに、京へさして敗退した平維盛、忠度などを追撃して、

「このまま攻め上ろう！」

とは、その折の当然な頼朝の意気ぐみであったが、

「いや、ここが大事でしょう。まだ東国は源氏一色となったわけではありません。まず、一応お味方も鎌倉へ退いて、徐ろに、地盤を固める必要がある」

と、説いたのは、さすがに東国の事情に精通している広常や常胤などの老巧であった。

「……そうか」

頼朝は、自身へ考慮の間を与えて、口をつぐんだ。

彼は老人の言にはいつも一応の考慮は払う。常に、老人の意志など無視して若い意力のまま前進しているかのようなのであるが、

——これは。

と、耳にとめた事は、老人の意見とて、決して聞き流してはいなかった。

鎌倉に。

という着想も、常胤の云い出した事であつたし、今、富士川から退軍するのが利だという説も、その常胤と広常の諫めであつた。

だが、いくら東国の事情にくわしい二人の説でも、鵜のみに、そうかと信じないところも、頼朝の性質だつた。

「なぜ、退くのがいいか」

そう質問した。

広常は、それに答えて、

「——されば。常陸の志太義広とか、佐竹一族とか下野の足利忠綱など、まだまだ平家に属する豪族は、五指を折るも足らぬほどある上に……です」

と、そればかりではない理由を——味方の弱点を広常は指摘した。

要するに、いかに士気は昂たかくとも、強きょう 韌じんな軍勢でも、内部の組織は、一夜仕立てである。縦糸は太いが、横糸は極めて粗あらい。

平家は一見、その組織も士気も早、末期のものとは見えるが——と云って、一挙になどと見縊みくびつたら、存外な惨敗を喫きつするかもしれない。尠すくなくも彼には数十年の集積がある。

また、頼朝以上の逆境から立つて——今日の平家を築きあげた入道相国がなお健在である。「うむ。そうか」

頼朝は、釈然として、すぐ総軍にひき揚げを令した。——そして今日、黄瀬川に駐屯して、明日は足柄あしがらをこえ、鎌倉へ帰って行く途中であった。

彼の宿舎は、土地の旧家であった。鄙ひなびた民屋だが、その門は頑丈であった。日頃から土賊の来襲へ備えが出来ているのである。

「止まるなつ。旅人」

「——通れつ。ご門前で、駒を止めてはならぬ。馬の腹帯など、彼方むこうへ行つて直せ」

門を守り固めている番の武士が往来へ向つてどなった。——その往来の人影は、夕闇を織つて一通りな混雑ではない。

その中に。

今、馬の背から降りて、何やらまごついている主従七、八名の者がある。番の武士にどなられると、二十歳ばかりの小づくりな冠者が、

「はいっ」

と、振向いて、番の武士たちへニコと微笑をもつて答えた。そして、乗って来た駒を路傍へ片寄せよと供の者にいいつけ、二人の郎党を従れて、門の正面へ、真っ直ぐに歩み出して来た。

二

二十歳ばかりのその冠者は、旅垢にまみれた狩衣の下に、具足を着こんでいた。背は五尺一、二寸ぐらいしかあるまい。肩幅もきやしゃであるし、総じて小がらな若者だった。

でも。どこか凜として。

左の手を、太刀のあたりに、右の手を握って提げ、ずかずかと、胸を正して門へかかっ

て来たので、警固の武者たちは、

「はて。何者か」

と、眼をこらしていると、

「鎌倉殿のお陣屋はここでござるか」

と、問う。

武者たちは、声をそろえて、

「いかにも」

領きを与えながらも、眼は、油断なく、冠者のうえに注いでいると、

「——お取次ぎを賜われ。たま遙々、はるばる奥州より駈け下つて参つた弟の九郎です。兄頼朝へ、

九郎が参つたと、お伝え下されませ」

「……なに？」

皆耳を疑った。

聞きちがいでないかというような顔つきを示した。

冠者の語音には、なるほど、奥州らしい訛りなまがあつた。しかし、それも聞きづらい程ではない。ただ、冠者のことばが、余りに感情に満ちていて、平静でないので、役目上、番

の武者たちは、すぐ危険視したのであった。

——それとまた。

兄頼朝と云ったのが解げせなかつた。九郎などという弟御のある事など、話のはしにも聞いたことがない。武者たちは、よけい不審な眼をかがやかした。

「おねがい致しまする」

九郎義経は、ことばを重ねたのみならず、武者たちの眼いろを察して、ていねいにその頭かしらを下げ直して、

「不審の者ではありません。年久しく鞍馬にあり、その後、奥みちのく州にかくれて、生い育つた九郎義経です。——と、お伝えたまわれれば、兄頼朝はご存知のはずです。過ぐる頃、伊豆のご配所より、旗上げの御状をひそかにいただいており、懸命、四圍さまたの妨さまたげを突き破つて、夜を日についで、これまで駆けつけて来たのでござる。……一刻もはやく、兄君のお顔を拝したいのです。……どうか、おはやく、この由を」

義経には冷静に云いつづけられなかつた。ともすれば、こここの門前で、もう涙が先立ちそうでならなかつた。彼の胸には鞍馬以来の——いやそれよりもずっと前の——雪のふる日までが胸を往來していた。その雪の日や平治の戦乱は、記憶にあるはずもなかつたが、

幼な心に聞いていたくさぐさの事が、後には皆、幼少の体験をそのまま記憶しているように、今でも胸に甦よみがえつて来るのであった。

「ならぬッ」

番の武者は、水でも浴びせるように、いきなり叱つた。

「鎌倉殿に対して、兄の弟のと、馴なれなれ々々しいことば遣つかい、聞き捨てにならぬ無礼であるが、多分、人違いであろう。さもなくば狂人か」

と、義経のうしろに立っている二名の郎党へ向つて、

「これは、其方そのほうどもの主人か。はや召連れて、ご門前を退どけ。ぐずぐずいたしおると、用捨せぬぞ」

「あいや！」

ふたりの郎党は、義経の前へ出て、さらに大声で何か云おうとした。——その骨柄まなや眼まなざしが、一くせある者と見えたので、番の武者たちは、気押されて、

「狼藉ろうぜきいたすかつ」

と、威圧した。

「いや、狼藉はしません！」

騒然と、ふた言三言、それから双方で烈しく云い争っていた。——折ふし、門のうちを通りかけた土肥次郎実平は、何事かと、外へ出て来てみると、この体ていなので、

「鎮しづまれ。鎮らぬか」

と、引わけて、さて、一方に毅然として佇んでいる小がらな冠者に眼をとめた。

「おん身は、誰か」

と、彼も不審そうな顔して、その前へ寄った。

三

土肥次郎実平は背が高い。

小づくりな義経は、上から見下ろされた姿であった。

「……………」

義経は、答える代りに、眼まなこを以て、自分より高いところに在る彼の眼を見つめていた。

実平は、もう一遍、同じことを訊ねた。

「鎌倉殿へお目通りしたいという事だが、あなたは一体、どこの何者だ」

すると、義経は、

「そういうお前は？」

と、訊ね返した。

番の武者には至極でいいいで腰低かったが、実平に対してから彼の態度はまるでちがつていた。

たたみかけて、

「兄の家臣であろうが、姓は何という？ 人の氏うじ素姓すじょうを糺ただしながらわが名も告げないのは、礼儀に欠けているではないか」

と、咎とがめた。

実平は、異様な気もちに襲われた。見も知らない小男から、こんな横柄おうへいに臨まれたのは初めてだった。けれど、不思議にも冷笑できない威圧をうけた。——兄の家臣。そう頭から云われた一言に、何か、抑えられてしまった気持なのである。

「申し遅れました」

実平は、思わず頭こしうべを下げ、改めて姓名を告げたが、その上で、さらに厳しく、

「して、貴方あなたは」

と、問いつめた。

かりそめにも疑わしいふしがあつたら免さぬぞという眼ざしが、こんどは明らかに、実平の眸から燃えていた。

「儂は亡き義朝が末子、幼名を牛若といい、兄頼朝とは平治の乱にわかれ、鞍馬に育ち、奥州の秀衡が許にて人となり、今、源九郎義経と名のる者。——時来つて、兄上の旗挙げと聞き、夜を日についで馳せ下つて来たのです。……常磐が腹の末の異母弟牛若と披露あれば、必ず兄上にも思い出して下さるであろう」

と、義経は、篤と相手の胸に落ちるよう、一語一語に、心を勞つて述べた。

「よく分りました」

実平は、前よりも低く頭を下げたから、しばらくお待ちを——と云い残して門のうちへかくれた。

ちようどその時頼朝は、奥の間で夕餉の膳にむかっていた。この家の長者の娘が盛装して給仕に侍っているのが目についた。北条、千葉、その他の群臣が、居ながれて皆、杯を手にしていた。

「お食事中ではありませんが、ちよつとお耳まで」

実平は、席のすそへ坐つて、こう取次いだ。彼は、自分で取次ぎに出た事柄に、自分でもまだ慥しかと信がが持てない容子であつた。

四

「なに九郎が。……あの奥州みちのくの九郎が訪ねて見えたとか」

頼朝は、口のうちに咄はなくように云いながら、茫然と、その眼は、二十年前の思い出をあわただしく心の奥で索さがつていた。

「……はい」

実平は、遠くから、その気色うかがを窺うかがつていた。並居る人々も、思いがけない事をふと耳にして、一様に、頼朝の面おもてを見まもつていた。

「……オオ」

頼朝は、声と共に、ハタと膝へ手を落して、

「さては、正まさしく血縁おとうとの異母弟、九郎義経にちがいあるまい。——なつかしや、すぐ通せ。すぐこれへ」

と、声を弾はずませて云った。

土肥実平は、はつと起つと、顔いろを変えて退がった。——さては、やはり骨肉の弟君であつたのかと、うろたえと、緊張とに、蹙音も大きく、駈けて行つた。

「一同はしばらくここを退がっておれ。——そうだ、別間へ宴を移して、寛くつろぐがよい」

頼朝は、左右の人々へ、そう告げて、膳も酒器も、片づけさせた。

一穗すいの灯とも火びのほか、そこには何もなくなつた。清しやうじやう 浄じやうな灯かげだけが静かにゆらい

でいた。——そうした気持で、彼は、二十年ぶりの、いや、生れて初めて会う骨肉を迎えたかつた。

やがて、広縁の外で、

「どうぞ、此方こなたへ」

と、案内に立つ実平の声がきこえた。つづいて、静かに、縁を踏んでくる蹙音がする。

——その気配にさえ、頼朝は、あやしく胸が顫ふるえて来た。

どんな弟であろうか。

会つて、まず、何といおうか。

ふしぎな血がしきりと胸に鼓動してくる。この音こそ、争えない血しおのつながりを証

拠だてるものではあるまいか。きょうまでの二十年間、胸をさびしく閉とぎしていた孤独の扉とを、ふいに叩かれた驚きと歎なげびには、幾分の狼狽ろうたいさえ交まじりついていた。

「兄君でございますか」

——と、見ればその義経は、実平いしづなに誘いざなわれた、燭あかりから遠い下座げざに着いて、ひたと、自分の方へ向むかってひれ伏ひたすしていた。

「……………」

頼朝は、義経の云いった最初さいしょのことばを、よく聞き取とっていなかった。

義経の声こゑも、おのおのののいて、情なさけの昂たかぶりのみか、ことばの上うへに噎かすれていたし、頼朝の耳みみも、徒いたずらに熱あつしていた。

「お会い申すのは、今初めてでござりますが、物心ものごころつき初めてから、人と成なるまで、一日いちにちだに、世よに、一人の兄あに上じやうありと、伊豆いずの空そらを憶おもわぬ日ひとはありませんでした。——兄上あにじやうにも、お心の隅すみに、奥州みちのくに九郎くわじやうという一人の弟あにありと、他よそながらもお覚えでござりましょう。その弟義経あにぎ経にござりまする。源九郎義経げんくわじやうぎ経にござりまする！ ……」

「覚おぼえている」

頼朝は、云いうと、われを忘れて、手をあげた。

「なぜ、そのように、遠くにおるぞ。他人のように隔へだてておるか。——もそつと、間近う寄おもてつて、面を見せよ」

義経は、なお遠慮して、側にいる実平の顔をそつと窺うかがつた。実平は、その意こころを酌くんで、「おことばですから、ずつとお近くへ行つて、ご悠ゆるりと、お物語りなされませ。——実平は、次に退がつておりますゆえ、ご用の時は、お呼びくださいませよう」

と、小声で云つた。

義経は、一人となると、なお、生れて初めて会つた兄に対して、処女おとめのような羞恥はじらいと、遠慮を抱いた。

五

——よい骨柄こつがらの若者。これが、自分の弟おとうとだつたか。

頼朝は眼をほそめた。

自分も席をすすませた。義経もすり寄つて出た。

「おなつかしゅうございました」

相寄ると、そこには、もう身分の隔ても、権力の相違もなかった。家臣や儀礼の形式もなかった。おたがいが親なき子であった。また、逆境から芽生えて、ふしぎにもここまで、無事に成人して来たと思うばかりな——運命の子と運命の子であった。

「よくぞ、訪ねて参られた」

頼朝は、手をさしのべて、義経の手をつかんだ。義経は、欣うれしさに、顫おのいていた。この温ぬくみ。

この骨肉の手。

それは、生れて初めて知ったものである。母こそちがえ、血は正ましくひとつの父からうけている。

「夢にまで。——夢にまで。……幾たび兄君のことを夢みたか知れませぬ。……会いとうござりました」

「わしとでも」

頼朝は、はふり落つる涙を、拭ぬぐいもせず、義経の背をかかえた。

「風のたよりに、遠いうわさに、そちの消息を聞く折々、いつ会う日があるうか、どんな健けな気に成人しているやらと——」

「同じように、私も、年十六の頃、鞍馬をのがれ、奥州みちのくへ落ちて行く途中……ついその足柄山を越えながら……すぐ眼のさきに見える伊豆の海を、配所のあたりを、どんなに、恋しく思いながら、振り向き振り向きして通った事か知れませんでした」

義経の声も、甘い鳴咽なげつと、うれし涙と、遠い追憶ついでに、途切れ途切れであった。

「——またこのたびも、兄君のお旗上げと伝え聞くなり、矢も楯たてもなく馳せ参らんものと、秀衡殿に計りましたが、秀衡殿には、まだ時が早かろう、今しばし形勢を見よとばかりで、どうしてもお許し下さらぬため、馬一匹に、供の者四、五名連れたのみで、密ひそかに、平泉を脱け、途中まで急いで来ると——秀衡殿にも、それまでの決心なればと、佐藤継信、忠信のふたりを、後ろより追いかけて、私の郎党にと、付き添えてくれました」

義経は、そう綿々と話しかけたが、前後のつながりも欠いて、余りに欣しまぎれになっている自分の話し方に気づいて、

「つい、取乱しました。女々めめしい弟よと、お笑いくださいますな」

と涙をふいて、少し身を退けながら、礼を保った。

頼朝も、茫然ぼうぜんたるここちから自分に返って、

「こよいは、悠ゆるりと、語り明かしてもよいが、何せい陣中、いずれ鎌倉へ帰ってから、落

着いて話すとしよう。——そちも定めし疲れておろう。こよいは旅の垢あかでもそそいで寝やすんだがよかろう」

「はい」

素直な弟の返辞までが、頼朝には、又なく欣しく見えた。これからの家庭に、ひとりの賑にぎわいと、一族のうちに、大きな力を加えた気がすぐにしていた。

「実平、実平」

呼ぶと、次の間で、

「はっ」

答えがした。そして最前の土肥次郎のすがたが、縁の端にうずくまって見えた。

「弟を、どこぞ一室へ案内してつかわせ。——そして、何かと鎌倉までは、面倒を見てやつてくれい」

「畏かしこまりました」

実平も、次の間で、貰い泣きしていたとみえて、すこし瞼まぶたが腫はれていた。——その眼で義経を招きながら、無言のまま、紙燭をかかげて先に立って行った。

六

鎌倉の秋は色濃くなっていた。

頼朝は、師をかえし、十月二十三日に、鎌倉へ帰った。

こんどの富士川は——戦わざる凱旋であった。

が、石橋山以来の論功行賞が初めて発表された。

北条時政父子。

何といつても、功劳では、この人の筆頭であることに、誰も異存はなかった。

次いで、

千葉介常胤、武田一族。

和田、三浦、土肥などの人々。

佐々木定綱、経高、盛綱、高綱。

などの兄弟や、同じように、配所に長年仕えてきた天野遠景、加藤次景廉など、ほとんど洩れなく、新しい領地をうけ、或いは本領安堵、その他の恩賞にあずかった。

四日措いて、その月の二十七日には、ふたたび常陸へ軍をすすめた。

常陸の佐竹一族を討ちに。

この方面は、地理情勢の明るい上総介広常がもつぱら先鋒せんほうに立つて奮戦した。十二月常陸平定の業は終った。

師走しわすの十二日。

風のない冬日びより和だった。

頼朝はその日、大倉郷の新邸へ移転した。富士川へ出陣のまえに手斧ちようなぞ初めをあげたあの館がもう落成していたのである。

その移転わたましの式の日、頼朝のいでたちは水干すいかんに騎馬で、前後左右、おびただしい武者を従え、新館の寢殿（正殿）にはいると、美しき御台所とならんで、出仕の武士三百余人に、謁えつを与えた。

政子は、終始、良人と共に、交 《こもごも》祝いをのべる武士に、ほんのわずか、黙礼を施しているだけであつた。

「きついお性質さがらしい」

と、初めて謁した老将たちは、その態度に、そつと囁ささやきあつた。

館は、頼朝夫妻の館ばかりではなく、そこの政庁、侍さむらいどころ所などを中心に、大路小路

の邸町やしきも建ち並んだのである。——どこは誰その館の辻、どこは某なにがしやつの谷と、そのまま地名として、その日から呼び慣ならわされた。

三日にわたつて、祝いが挙げられた。宛えんとして、祭日まつりのようであつた。たくさんに酒をのむ事もゆるされた。

その間にも、庶民に対して、次々と法令が出、また、武士たちに対しては、特に厳かに「武士たるの道」と「吏道りじどう」を遵じゆん奉ぽうすべき令が発せられた。

「お忙しくはあらせられませうが、九郎様にも、折を見てお目通りを賜たまわりますように。……黄瀬川の夜以来、御曹子おんぞうしにも、悠りとおはなしの折を、毎日、待ちこがれておられますようです」

頼朝の左右のすきを見て土肥次郎は、義経に代つて、こう願ひ出た。

義経はその後、九郎御曹子と称よばれて、家族の一員となり、また、幕將の端に隨身して、明け暮れ、兄の側近くいるようではあつたが、あれ以来、兄とも弟とも、親しく呼び交わしたこともなかつた。むしろ政治や戦略上のことで近づく將たちの方が、彼よりはよほど頼朝と近かつた。

で、それとなく、土肥次郎に、頼んでおいたのであろう。実平が今、よい折と見て、頼

朝に告げると、

「そうそう。九郎にはまだ鎌倉へ来てから落着いて会う折もなかったの。政子にも、ひき会わせておかねばなるまい。これへ呼べ」

と、早速、ゆるした。

義経は、召されて、程なく兄と嫂あによめの前へ来た。——しかし、黄瀬川の夜とはちがって、

「九郎か。その後は侍勤めにも馴れたか。奥州みちのくとは事ちがい、坂東武者はみな気があらじゆうきい。豪毅勇壮で目ざましかりうが。——そちも人々に負れをとるなよ」

と、あつさりして、妻の政子に向つては、

「これが、いつぞや其女そなたにもはなした九郎じや。目をかけてやれよ」

とのみ云つて、義経がひそかに胸に湛たえていた骨肉らしい親しみや、嫂らしいことばには甘えることができなかつた。

乳母の子

するとまた、実平がそれへ来て頼朝の方へ手をつかえながら訊ねた。

「滝口の老母へすでにお目通りの儀を、おゆるしなされましたか。……唯今、訪れて見えましたが」

「お。囚人経俊めしゅうど つねとしの母か。……会うてやると云つて、庭へ通せ」

頼朝は、目の前にいる義経よりも、むしろその方へ遽にわかに心を惹ひかれたふうであった。

実平が退がると、彼も立つて、席を更え、庭へ曳かれて来る者を待ちかまえた。それを機しおに政子は奥へ入つてしまふし、手持不沙汰になつた義経は、兄の傍らに坐つて、侍臣のごとく控ひかえていた。

「……おう、佐殿すけどの」

よろめくように庭先へ来て、へたと坐りくずれた老母があつた。それは頼朝が幼い頃の乳母であつた。

しかし、頼朝はなつかしそうな顔も見せず、かえつて、はたと厳しい眼をして、老母が昔のごとく自分へ馴々しくものを云うのを防ぐかのような威厳を示した。

「……あ、あ」

その容子に、とりつく島もなくなつて、老母は階下に泣き伏した。

老母の子は、滝口三郎経俊つねとしといつて、山内やまのうちノ庄を領していたが、頼朝が旗上げの

際に、藤九郎盛長を使いとして招いたところ、経俊は一笑に附して、拒絶したばかりでなく、さんざんに悪口あつこうをついたあげく、平家の大庭景親に加勢して、飽くまで頼朝に楯たてついで来た者であつた。

ところが。

その景親は、石橋山の合戦では、大いに意気を上げていたが、その後、頼朝の捲土けんどじゆう重来らうらいに遭つて、諸所に敗れ、果ては、身の置き場もなくなつたため、とうとう先頃わずかの部下をつれて降参して出た。

景親をはじめ、降人どもは、それぞれ諸将の手に分けて預けられたが、その中に、滝口三郎も交じていたのであつた。

彼の所領は取上げとなり、身がらは土肥次郎の邸へ預けられていた。そして評議の末、近いうちに斬罪と極まっていた者であるが——その母は、かつての頼朝の乳母で縁故があるので、

「どうぞ、彼子あれが先祖の功にめんじて、このたびの不心得は、お助けおき下さるようにと、子の可愛さに、これへ嘆願に出たものであった。

——が、彼女はここへ来ると、泣いてばかりいてそれも云えなかつた。しかし、嘆願の事はいくたびも頼朝に通じてあつたし、傷いたいた々しい姿を見、泣きじやくる声を聞いただけでも、十分、老母の心は、頼朝には分つていた。

「……………」

然るに頼朝は冷然と見ていただけで、何を問うてやろうともしない。——側にいた義経は、いるにも堪えないこちがして、何とか兄に取りなしてやりたい程に思ったが、頼朝の面おもてには、むしろ何か心地よげな苦笑すらあるのではないかと疑われるほど無情を誇示していた。

「……遠い、遠いことではございますが、滝口家の祖は、八幡様（義家）にも、廷尉ていゐぜんし禅室つ様（為義）にも、人なみの忠勤は励んだものでございます。——彼子あれが、このたび、大庭景親に徒党して、殿へ、抵抗てむかいいたしたのは、まったく、一時の魔がさしたのでござりまする。……ほん気な仕様しわざとは、彼子あれを生んだこの母にも信じられませぬ。……どうぞ、お慈悲に——お情けに助けて賜わります。こ、この通りでござりまする」

老母は、懸命に、涙と闘いながらしやべり出した。——その声は、上わずツたり、かすれたり、顫ふるえたり、人の子の母でなければさけび得ない真実のものであった。

「実平」

頼朝は眼を反そらして、老母の横にうずくまっている彼へ、至極、平静なことばで吩咐いいつけた。

「いつぞや、そちの手許へ預けおいた鎧よろいがあつたな。あの鎧を、これへ持って参れ。……いや、石橋山でわしが着て戦つたあの破れ鎧のことよ。早く持参せい」

二

やがて、実平がもどると、一領りょうの鎧が、彼女の前に、どざりと置かれた。

「滝口の老母」

頼朝は、そう呼び直して、改まった調子で云つた。

「それは石橋山の合戦に、この頼朝が身につけていた物じゃが、後日の証拠にと、残しておいた。——というわけは、その鎧の袖を縫ぬうている箭やを見るがよい。たしかに、そちの

碎せがれ 滝口経俊が射た箭やであるまいか」

老母はぎくとしたように、顔かお蒼あおざめておののいた。

「見よ」

「……………」

「手にとつて見よ」

頼朝のことばこそ、箭のように鋭かった。

「——鏃やしりだけは取りのけて置いたなれど、箭の口巻をあらた検めて見るがよい。何としるしてある。滝口三郎藤原経俊と——明らかに読まれるであろうが」

「……………」

老母は、鎧のうえに、泣き伏してしまった。

後日の証拠に——

と云つた頼朝の意中をうかが窺えば、もういかにわが子の助命をすがつても、云いわけをしてもむだと思いつめたのであろう。痩せ細つた頸うなじのあたりの白髪が、鎧にしがみついたまま、ただいつまでも泣きふるえるのみだった。

見るに忍びなくなつたのであろう。実平はいつの間にか庭にいなかった。さつきから兄

の側にじつと控えていた義経も、許されるものなら座を立ててしまいたかった。

老母はまだよよと泣きじやくっている。起てないのもむりはない——義経は面をそむけながら思い遣った。

いつのまにか義経の胸は、兄に対する嫌厭けんえんでいっぱいになっていた。黄瀬川の宿で初めて会った時とは正反対な兄を見るこちがした。

兄と思うべきではない。鎌倉殿のなさる人事の処置に対して、そんな心を抱いてはならないと思つてみても、どうしようもない嫌厭だった。

骨肉である以上、血はひとつである。兄の血は自分にもある血にちがいない。義経は自分を憎むと同じように兄のそうした冷酷れいこくな裁きを憎悪せずにいられなかった。

「……申しわけも……申しわけもござりませぬ」

ややあつて——である。

経俊の母は、脱殻ぬけがらのようになって力なく立った。そして両手で面を蔽おもてつたまますごすごと退がりかけた。

十歩。十五歩。

地も見ずに、老母は中門のほうへ、しよぼしよぼと歩きかけた。——義経は、もうそれ

を、そのまま見送れなくなつた。老母に代つて、助命をとりなしてやろうという気が、胸をつきあげたが、ベタと、両手をつかえて、何か兄へ向つて云おうとした。

その容子を、頼朝は、じろと冷たい眼で見ながら、義経へは何も問わずに、

「乳母。待て」

と、呼びとめた。

乳母——と初めてその時呼んだのである。そして、あらかじ予め肚の中では、最初からそういうつもりであつたかのように、

「こらえられぬところではあるが、先祖の功に免じて、このたびだけは、経俊の一命、助けおいてとらせる。……せがれ倅めに、そなたからもよくよく云い聞かせておくがよからうぞ」と、云つた。

腰がぬけたように、老母は、大地に平たくなって、座を立つ頼朝のすがたを拝んでいた。義経も手をついたままであった。しかし義経の感情はなお感情のまま胸のすみよどに澱んでいた。

新府繁昌記

一

その年の鎌倉は、石曳いしびき謡うたや手斧ちようなの音に暮れ、初春も手斧のひびきや石工いしくの謡から明け初そめた。——鎌倉へ、鎌倉へ。

この相言葉は、もう軍の用語から転じて、民間のものになっていた。
「鎌倉へ行けば仕事がある」

東国から北のほうまで、国々の往来で、旅の者が、旅の者に、

「何処へ？」

と行く先をたずねれば、

「鎌倉へ」

と、極まつていう。

妻子を連れたり、弟子たちを従えたり、道具を担になつたりした鍛冶かじ、漆工しつこう、指物師、大工、屋根葺き、機織はたおりめ娘、彫刻師、染工などから、馬の群れを曳いた牧の者、僧の群れをつれた寺院の徒、女の群れをつれてゆく何商売か知れない人間たちまでが——相模の新府

をさしてみな将来の生計を植えつけるべく流れて行く。

「ふしぎな現象だ」

ある者は、懷疑した。

理由が見出せないからである。

なるほど、鎌倉では目下、さかんに土木を起している。おびただ夥しい鎌倉殿の御家人が各居館を新築し、それにふすい附随している将士もみな、集団的に住居を建て始めているから、その景気よさはすさまじかろうとは誰にでも想像がつく。

けれど、よく考えてみれば、危うい事にも思われる。なぜならば、天下はまだ巖然として平家のものである。

東国から常陸ひたち、信濃あたりまでは、ともかく頼朝の武力になびいたが、奥州の藤原秀衡は、まだ源氏に与くみすとは宣言していない。

まして、相模から西はまだ、全面的の平家色である。東国を失っても、京より西にはなお中国、九州があり四国や伊勢方面の地盤もある。

総じて、平家の富力と勢力とは根を東国には置いてない。西国こそ平相国が多年にわたって扶植ふしよくしてきた地盤である。

——こう観る者は、

「鎌倉鎌倉と、みな浮いてゆくが、鎌倉殿の力はまだ知れぬ。うっかり移住して、またぞろ兵火に焼き立てられて、路頭に迷うよりは動かぬがましじやろう」

と、危うげな眼で、傍観まなこしていた。

それは多く、庶民のうちでも、知性に優れた人々だった。知識に照らしては、割りきれない現象だからである。

割りきれないといえば、第一、半年やそこらで、地方的な合戦には勝ったところで、鎌倉殿のふところに、そう財力があるわけがない。——京都へでも攻め上って、然るべく、中枢の政権でも取ったうえなら知らない事だがと、説をなす者もある。

知識顔したそれらの人々のいう事はいちいち尤もで道理が立っていたが——にも関わらず民衆の足は、夜が明けても、夜が明けても、鎌倉へ鎌倉へと向いて行った。一日ましに殖ふえていった。

それとまた。

鎌倉へ住んだが最後、彼等は各々の職につくなりむやみに元気に働いた。ここへ来て鬱うつ陶つとしい顔をしている人間はなかった。こここの地上に遊んでいる人間はなかった。馬も牛

も——犬までが働いているように見えた。

なぜだろう？

そんな事を考えている閑ひまじん人はここにはないが、とにかく働かずにはいられないのだ。働くことが愉快にされるのだ。どこの国府よりは明るいのである。——そして、

「これからさー！」

「世の中はこれからだよ！」

みな云うのである。

要するに、人間は建設を好むからである。建設を終って、腐蝕期ふしょくきに入っている平家の地盤で、不安なあくびをしているよりは、粗食と汗と土まみれな中にしようと、これからだと云い合える天地に生きたいのである。

だが、そう一つに、人心をひっぱっている力は鎌倉そのものではない。やはり人である。しかも一人の人であった。

その頃、鎌倉への聞えに対し、げんぴ厳秘にされていたが、平家方の内部には、致命的な憂い
が起つていた。

太政入道の重い病である。

「近ごろきげんがた貴顕方の馬、車の往き交いが、何だか、ただ事ではないが？」

とは、京都の庶民たちも、うすうす変には感じていたが、ただごと凡事でない騒ぎは、去年か
ら年の暮までもつづいていた——

「また、何かあるんだろう」

鎌倉の民衆とちがつて、ここでは庶民と上流の層とが、完全にかけて離れていた。

「驚き忘れた一門」の無反省が反映して、庶民たちも何が起ろうと、驚かない習性にだ墮
れていた。

東国には頼朝が。木曾方面からは義仲が。

九州では肥後の菊池。豊後、肥前なども源氏に呼応して大宰府へ攻めかけたという。

——四国の伊予にも、吉野、奈良にも、近江にも畿内にも、騒乱さわらんが起つた。みな平家に
そむ反いて起つた。

等、等、等——、今にも天地くつがえが覆るようという者もあるが、多くは平然。

「ホウ。またですか」

上層の驚かないのと、彼等の驚かないのとは、質はちがうが、いずれにしても、京都のもつている爛熟らんじゆく、懶惰らんだ、軽桃けいちようの空気はすこしも革あらたまらない。

しかし。そうした中でも、去年こぞの暮、南都の大衆に、不穩ふおんのきざしありとかで、清盛入道は、重衡朝臣しげひらあそんをして三万余騎をさしむけ、またたくまに奈良の東大寺、興福寺をはじめ、伽藍堂塔がらんどうとうを焼きはらい、大乘小乗の聖教やら、国内第一の大仏秘仏こつとかいじんなど悉く灰燼かいじんにしたばかりか、手抗てむかう僧兵一万余を斬り殺し焼き殺したという――

あの事件の時ばかりは、さすがに心なき人々までも、

「南無――」

と、思わず唱えて、その数日は、朝夕の飯も不味まずい思いがするなどと語り合っていたことだった。

その生々しい記憶のある矢さきなので、明けて今年、養和元年の閏二月うるう、

「入道には、もはや今日か明日あすのお命じやそうな」

と、誰からともなく、清盛の危篤がもれ伝わると、みな一函に、

「それ見たか。仏罰はおそろしい」

と、すべてをその罪業ざいごうのむくいとして、ある事かない事かの判断もなく、入道の病について、たちまち、奇々怪々な浮説が云い囃された。

深く秘せられている入道の容体が、そう下々にすぐ分るはずもないのに、大熱に苦しむ呻うめく入道の声が侍所まで聞えるとか、百人の人夫じんしゆいんに千手院の冷水をくませて石の船に湛たぎえては冷やしているが、水はたちまち湯となつて沸たぎりたつてしまふとか、ゆうべも、八葉の車を曳いた閻王えんおうの使いが、焰たぎをあげて夜空から翔かけ下り、

(われは、閻王だつこん奪魂だつこんの使いなり。一門の弓矢も、金銀珠玉も、冥途めいど無常の迎えには塵ちりぞかし。疾とう疾とう立ち候え)

と、云うのが大殿の棟に燃えつかんばかり聞えたが、二位殿の看護の真心や、加持かじき祈祷とらうの衆僧が、諸声あわせて唱なうる誦經ずきように、やがて夜明けと共に消え去つた——とか紛々たる取沙汰なのである。

だが、そんな噂が京中に拡がつていた頃には、実は、すでに清盛は死んでいた。

二月四日の夕だった。

遺言は、何もない。

ただ、臨終の日、こう云つたという。

「みんなおるか。……わしは悔いしない事をただひとつ仕残した。頼朝を助けた。おまえたちは、頼朝に亡ぼされるなよ。わしのために、月々の供養くようなどよしてくれ。頼朝と戦え。それがおまえ達の再生だ。また、わしへの供養だ。……頼朝の首をわしの墓前に供えろ。……頼朝の首をだ……」

三

清盛の死は、さすがに日本中を震しんが駭がいさせた。

よく云う人々も、悪くいう人々も、共々に、大きな感慨に打たれて、

人間。

それを考えさせられた。

鎌倉の海には夏が来た。

河口には、奥州船も、京船も、西国船もついていた。建設まだ半年というのに、ここから陸揚げされた荷おびただは夥おびただしいものだった。

「早いなあ。……一船ごとに見違えるばかりな繁はんじょう昌じょうだ」

滑川なめりがわの河口に横づけになつてゐる奥州通いの船に立つて、こうつぶやいてゐる男がある。

「おうい、行つてくるぞ。おれは鶴ヶ岡へ海上の祈願にだが、おまえ達は、いずれ化粧けわいざ坂かだろう。悪酒をすこすなよ」

五十をこえていよう。身なりばかりでなく、人間としてもでき上がつてゐるという感じのする人物である。

金売の吉次だった。

吉次は、その日、頼朝が納涼のために、三浦義連よしつらのやしきへ招かれてゆくという事を聞いたので、急に、その行列を見るといふよりは——頼朝に随身の諸将のうちに、きつと九郎義経もいるであろうと思ひ、

「よそながら一目」

と、思い立つて出かけたのであつた。

稲瀬いなせの松並木まで来て待つてゐると、毛利冠者頼隆が先に、その後から頼朝が騎馬で大勢の武者につつまれて来た。——所詮しよせん、その威勢は、路傍になど佇んで見ていられるものではなかつたから、吉次はあわてて佐賀山へ上つてしまった。

佐賀山の下の海辺道まで頼朝が来かかると、それを出迎えに出ていた郎従五十人ばかりは、一斉に馬を下りて、砂上に平伏した。

「ご老人、ご老人ツ」

突然、三浦義連が、こう誰にも聞えるような大声で、注意をした。

「わしの事か」

上総介広常は、馬の上から見まわした。

すべての将士が、下馬して、砂上に平伏しているのに、彼のみは馬を下りずに胸も反らしていた。

「お年のせいか。なぜ下馬なさらん。ご前でござるぞ」

義連が重ねてたしなめると、老人は、彼の叱咤しつたにも負けない声を出して、

「広常、まだ年を老らねばこそ、かように致しておるのでござる。三浦殿とは、家風がちがい、われらに於いては、父子三代のあいだ、東国の武門として、まだ下馬の礼はいたした例ためしがござらぬ。——馬上の武士は馬上のまま礼をいたすが、わが家においては、最上の礼儀でござる」

そう云つて、彼のみはとうとう馬を下りなかつた。

頼朝は、苦笑して通った。

こういう一徹な曲げない風は、老人ばかりでなく、彼の擁す兵ばらには皆あった。坂東の原野と山川が人間のなかに育んだ太い骨というものであろう。鎌倉の新府には今、その骨太い性格の持主ばかりが、何万となくひとつに住んで、事ごとに搏撃しあっていた。喧嘩を気にかけては、一兵卒でも、今の鎌倉には、一日も住んでいられないほど、剛毅と剛健のよりあいなのである。

「ここは、和殿の父、大介義明のやしきであつたか」

義連の亭にくつろぐと、頼朝は機嫌よく、酒を酌みながら、当日の主にたずねた。

岡崎四郎義実は、ひどく酔っていた。酔うて若者のようにはしゃぐ老人で、

「殿の召されてお在す水干を、義実に賜わりませ」
などと云い出した。

頼朝は、笑つて、

「これが欲しいか」

と、脱いで、投げ与えた。

「かたじけのうごぎる。どうじゃ、どうじゃ、身の面目は」

義実は、子どものように、すぐそれを着て、威張いばつて見せた。

四

岡崎四郎義実は、さつそく拝領の水干を、上に着こんで、

「あら冥みよう加。——どうだ方々。どんなものだ」

と、子どものように、左右の袖をひろげて、吾儘のかなった身の面目を、座中へ向つて自慢した。

するとまた、上総介広常が、その口真似をするように、

「あら勿体なや。——いかに各。殿の水干を彼に下さるほどならば、この上総介にこそ賜わるべきであるまいか」

と、云つた。

四郎義実は、なお戯たわむれて、

「やあ、そねむな老人。どれほどな手柄があつて」

「なんじゃ、手柄くらべなら、和殿ごときに、おくれはとらぬ」

老人も、負けずに云う。

酔ってはいるし、聞えた荒武者である。四郎義実は、顔を燃やして、

「なにを」

つめ寄ると、老人は、

「所存しよぞんあらば、後日を待て」

と、云い放った。

「後日とな。笑止笑止。すぐにとは、なぜ云わん。老ぼれ、海へ出よ」

君前でもこの始末である。

頼朝も、笑って見ているほかなかつた。

すると、こよいの亭主、三浦義連が、ひきわけて、

「どっちが平家か」

と、双方を見くらべながら詰問した。

双方とも、それで黙りこんでしまうと、

「せっかく、涼しゅうご酒興をと、殿のおいでを仰いで、義連が設けた席で、私闘は何事
でござるか。おふたり共、少し自分のお年を弁えたがいい」

と、たしなめた。

頼朝は、この日から、わけて義連に目をかけた。さすが三浦大介おおすけが子であると思った。そうかと云つて、頼朝は、岡崎四郎や広常老人を、

「年がいもない者」

とも思わなかつた。

また、そういう傍若無人ぶりを、咎とがめだてもしなかつた。

むしろ、老人の中にさえ、そういう老人らしくない粗暴、率直、豪放、無邪気といったような性情が、精練されない鉷石のように、善悪ともありのままにあることが、愛すべきものとさえ眺められた。

武士。——鎌倉武士！

訓おしえたものでもなし、云い合せたものでもない、ひとつの自負心——いや己れを持す氣概かほがこういう新しい社会のうちに今、沸々と醸かもしかけられていた。

武士——武士の道。

それを、武士道などと、口やさしくは云わずに、各が、極めて自然な行為のうちに行い示し出していた。

そのひとつとして。

酔っぱらって頼朝の水干をねだったりした岡崎四郎にも、近ごろこんな佳話がある。

彼は、石橋山で戦死した佐奈田余一の実父であるところから、先頃、その余一を討った長尾新六が捕虜となつて来ると、

「子の怨みをはらせ」

と、いわぬばかり頼朝はその囚人を彼の家に下げわたした。

ところが、捕虜の新六は、よほど仏教信者とみえ、牢舎のうちで、夜も昼も、法華経ばかり誦んでいた。

「こよいこそは」

と、余一の父たる彼は、毎夜のように、太刀のつかをしめして、牢舎の戸口まで忍び寄つたが、いつも心静かに法華経を唱える声について聞き入って、

「いや……?」

と、思い直しては、幾月かを、過してしまった。

そのあげく、ついに、頼朝の前に出て、彼はこう願い出したというのである。

「討ちました。——子の讐にはあらで、わが心の浅慮な怨念を刺しとめてござる。——

願わくば長尾新六のなきがらには、法衣を与えてご追放下されたくぞんじます」
 頼朝が、それをゆるした事はいうまでもない。実に、一面には、こういう涙もある鎌倉
 の人々だった。

五

奥州船は近ごろ京方面の輸送をほとんど怠って、大部分の物資を、京より近い鎌倉で荷
 上げしていた。

金銀、鉄砂、織物、漆、紙など、ここで揚陸された量はおびただしい額にのぼろう。
 時には浅黄いろの同じ小旗を舳に立てた奥州船ばかりで、滑川の河口をうずめている
 ような盛観も見られた。

それらの物資も船舶も、すべて吉次の胸ひとつで動くものだった。彼にとって今こそ待
 ちもうけていた絶好の「時」であった。一躍、天下の富を積むべき汐どきが、頼朝の旗挙
 げと同時に、彼にも、商法の旗挙げを促した。

鎌倉には金がない。

坂東武者がいくら寄ったところで、武力だけで大兵を養う経済力といたら甚だ心細いものでしかない。

由来、東国そのものに、財力はなかった。長年にわたる平家文化の絢爛けんらんは、それだけ地方の疲弊ひへいと枯渴こかつを意味している。

「鎌倉殿も、金をもって立ったのではないからなあ。武者たちの弓にしろ矢にしろ、手作りが多いのを見てもわかる。長刀ながなた、太刀でも目につくほどな物を持っているのは大将たちぐらいなもの。……さすがに馬だけは、逸物いちもつがあるが」

とは、誰もいうことで、すこし商才のある者なら、鎌倉の創業景気が経済的には、いかに不安なものかは、すぐ考えさせられるに違いなかった。

商人たちの見解もそうだし、平家でも勿論、ここへの輸送路には手配をして禁絶きんぜつに努めている。

当初、経済方面の奉行にあたった北条時政も、これにはひどく困惑していると聞いたが、吉次は、自分の手にうごかし得るだけの物資を、去年以来、すでに、三、四度も鎌倉へ廻送しているばかりか、まだ一度も、

「あたい、あたいを賜たまわりたい」

とも、何が欲しいとも、申し出ていなかった。奉行の北条時政から召されて用のある時でも、彼自身はまだ出向いたこともない。いつも股肱ここうの者を代人に向けて、時政と会ったこともないのである。

そのくせ彼は、船が鎌倉についているうちは、ほとんど船にいなかった。物売りや職人たちをつかまえては、巷ちまたのうわさを拾って歩いたり、下級の兵と親しくなつて、化粧坂けわいざかへ遊びに行つて大振舞をしたり、何という事はなく、暢氣のんきそうに過していた。

三浦義連よしつらの亭で納涼の折、誰と誰とが喧嘩したとか、佐奈田余一の父の岡崎四郎は涙のある武士で、子の讐かたきの長尾新六に、情けをかけて逃がしてやったとか——そういう上層の消息も、鎌倉ではすぐ知れわたるのであつた。まず緊密な社会組織がないせいであるよりも、鎌倉の家人階級には、まだそんな事を秘し隠しにしようなどという気もちがないのである。

私行上、面目ない事は、面目ないとし、不覚だつた事は不覚だとして、恥を責められることは当然な制裁をうけることとしていた。卑屈な隠しだては、恥以上の恥とした。ふた口目には、

「恥を知れ」

とか、恥をそそげとか、生命いのちの次のものとして、各 《めいめい》がそれを珠のごとく尊んだ。

法令などよりも、吉次は、そんなところから自然にできかけている新秩序に対して信用を賭けた。彼はすでに夥おびただしい物資を、鎌倉殿へ貸したが、その手形は、時政の証文でもなし、鎌倉殿の墨すみ付つきでもなかった。

六

吉次は、どこかで義経に会いたいものと、念じていた。

「ご無事か。どうか」

案じられたのである。

子のように、彼の将来が、吉次には憂えられてならない。

鞍馬から奥州へと、かつて、彼の大きな運命の手綱をひいて奔はしった吉次は、その以後も、当然、常に義経の成長をよそながら見まもっていた。

彼は、伊豆の頼朝よりも、木曾の義仲よりも、

「この人こそ」

と、将来の大計を、義経しよくに囑まかしていた。いや、彼にいわせれば、

「九郎殿を措はいては」

とさえ思つていよう。

今にして、彼はそれを自分の誤算とも眼まなこちがいとも思つていない。

「鎌倉殿が先に立たれたのは、地の理、ご身分、年齢からいっても当りまえだ。……だが、要するに、反平家の人々は、鎌倉殿のその好条件を、旗として、持ち上げているのだ。真に、頼朝という人間に尊敬して盛りあがっている衆望ではない」

彼はそんなふうふうに観る。

そして、どう現状を見ても、

「九郎殿こそ」

と、やがて一世の上にぬき出る実力の人は、彼であるという見込みを変えなかつた。

「——けれど、その九郎殿の真価を誰が知ろう？」

と、考えると彼の理想の実現も甚だ遠い気がするのだった。

たとえば、彼と会いたさに、それとなく、行き交かう武者などに、

「鎌倉殿の弟君、九郎御曹子様のお住居はどこでしょうか。それとも、やはり大倉郷のお館のうちに、兄君とご一しよにお住いでしょうか」

などと訊ねても、

「鎌倉殿のご舎弟と？」

そんな人がいるのかと云わぬばかり怪訝けげんな顔をした。ほとんど云ってよい程、義経の存在などは、下のほうには知られていない。

「大倉郷の内にいらつしやる」

その後、北条家へ出入りする自分の代人から、それだけの消息はさぐり得たが、近づくことはできなかつた。何分にも、大倉郷一郭は、鎌倉殿の住居であるばかりではなく、東国軍の本営ともなっているのです、家人以外の者が立ち入ることは望めなかつた。

——で、今日も。

頼朝が三浦義連の亭へ招かれて外出すると聞いたので、その行列の中に、

「もしや、九郎殿が」

と、期待して遠くから見まもっていたのであるが、義経のすがたは、頼朝の前後にも、たくさんの将士のうちにも、ついに見出されなかつた。

それから幾日か後だった。

いつも彼がよく立ち寄る雪之下村の餅などひさぐおうな媼の店に腰かけて休んでいると、由比ヶ浜のほうから馬を躍らして八幡道へ駈けてゆく二人の若者があつた。

「兄者人。兄者人」

後の若者が、先へゆく若者を呼びとめた。そして急に、駒を止めながら、

「餅がある。この家で、餅を売っておりますぞ」

と、軒を指した。

「なんじや忠信。子どものように」

兄らしい先の若者は、笑いながら振向いた。忠信と呼ばれた若い武士は、

「ひもじくてなりません。泳いだ後は、餓鬼がきのように腹がへる。それに汐水をのんだせい
か喉のども渴かわいた。——兄者人、休んで行きましょう」

と云いながら、もう鞍からとび降りていた。

七

兄弟ふたりのことばには、どこか奥州訛なまりがある。吉次の耳にはよく聞き分けられた。なつかしくもあり、不審でもある。

「いったい何処けにんの家人？」

と、眼をみはつていた。

由比ヶ浜へ水泳ぎに行った帰りとみえる。兄弟とも漆うるしをひいたような顔色である。何の屈託くつたくもないように、餅を喰い、湯をのみ、笑い興じていたが、

「やれ、腹もできた。弟、参ろうか」

と、軒ばの杭くいにつないである駒の手綱を解いて跨またがりかけた。

「——あ。もし」

吉次は立ち上がって、初めて兄弟ふたりへことばをかけた。

「……なにか？」

と、すでに兄弟は馬上にある。

「失礼ですが、もしやあなた方は、九郎義経様について、奥州より下られた方達ではございませぬか」

「なに。……どうして、左様な事がわかるか」

「てまえも奥州ですから。……おはなしの様子で」

「そういえば、そちも奥州ことば。——奥州はどこだ」

「栗原郷でござりまする。多くは平泉の国府に住んでおりますが」

「ふうむ。……この鎌倉へ商いにでも参つておるか」

「お察しのとおりです」

「名は？」

「ちと、ここでははばか憚ります。お供をいたしてもさしつかえごぎいますまいか」

「どこまで」

と、兄弟は顔を見あわせて、やや迷惑そうに云う。

「いえ、そこらの、人なき所までで」

「駈けるぞ」

「結構です」

「行こう、兄者人」

駒をならべて、兄弟はふたり炎天へ馳け出した。畦の豆の葉にあせ白い埃がほこり舞う。——吉次は、おうな媼に代を与えて後から走った。

馬上と馬上とで、兄弟は何か談合しているふうだったが、吉次を撒まいてしまつてもないらしい。やがて、雪之下をすぎ、八幡の下まで来ると、駒を下りて、杉並木の陰に待っていた。

「さき程は、失礼いたしました。実は、てまえは金売吉次と申す者で」

それへ来て、吉次が改めて名を告げると、ふたりは驚きの目をみはった。京、鎌倉でこそ、吉次の名は小さいものだったが、奥州の国府では知らぬ者はなかった。

「吉次とは、和殿のことか」

その名に比して、何と素朴そぼくな男だろうと、兄弟は、しげしげ彼の風采を見直していたが、疑うらしい眼ではなかった。

「して、その吉次が、われらに何の用があつて、呼びとめたのか」

「御曹子の九郎様に、ぜひお目にかかりたい事があるので……実は、お手引をお願い申したいのです」

「然るべきご用があるなら、大倉郷のお館へ、願ひ出たらよろしかろう」

「公でなく、そつとお目にかかった方が、九郎様のお為にも、てまえの為にも、双方によろしいので……。てまえの名を称うたつて、公然と、会つて会えないはずはございませんが、

そこをわざとさし控えて、きようまで、よい折を待っていた次第です」

「御意を伺った上でなければ、応とも否ともいえないことだ。——がしかし、同国の誼み、よし和殿のことばだけはお伝えしよう」

「明日も、あす由比ヶ浜へ泳ぎにおいでになりますか」

「分らぬが、暇があれば行くかもしれない」

「浜で、ご返辞を、お待ちしております。……ついでの事に、ご姓名をお聞かせ下さいませんか」

「それがしは、佐藤つぐのぶ継信。これにおけるは弟の忠信だ」

ふたたび馬上の人となると、兄弟ふたりの影は蝉せみしぐれの彼方へたちまち駈け去っていた。

駒

吉次は次の日、由比ヶ浜へ来てみた。

約束の人は見えなかった。

翌日、彼はまた、同じところで待っていた。佐藤継信、忠信の兄弟のすがたはその日もついに見当らない。

五日も七日も通った。

「はて。あれきりだが？」

——月もかわつて七月に入ってしまった。はや船の荷あげも商用も終つたので、彼の手代は奥州へ帰る日どりを彼に諮った。

「そうだなあ、ついでの事に、この月の中旬には、八幡宮のお棟上げがあるそうだから、それを見物してから帰ろうではないか」

吉次の云つた鶴ヶ岡の上棟式には、頼朝夫妻から家人の主なる人々が臨んで、ずいぶん盛大に執り行われるであろうと、近郷の噂もなかなかであった。

「その事は北条殿からも伺いました。せっかくだから、ぜひ当日のご盛儀を、よそながら拝観してゆけ。国への土産ばなしにせよと、時政様からおすすり下さいました」

「そうか。では、北条殿におねがいすれば当日、どこぞお目障りにならぬ場所で、ご式の

模様が拝めようか」

「いとお易いことで。拜殿のお間近は如何か存じませぬが、鳥居内の広場うちでなら、さしつかえあるまいとおことばでしたから」

「では、その日にはぜひ、わしも伴つれて行つてもらおう。吉次と告げずに、船の者ということだ」

吉次は、待ちかねた。

そういう折なら義経も必ず参列するにちがいない。継信、忠信の兄弟が、あれきり浜にも来ないところを見ると、義経のほうにも、四圍の事情、ままにならないものがあるのであろう。そう思いやられた。

庶民は祭がすきである。鎌倉じゆうがその日を待ちかねていた。新しい宮の屋根が、百年もまつりの絶えていた山の木々を透いて仰がれるのも歎びだった。そして大鳥居から由比ヶ浜のほうへ一条の大路が拓ひらけ、また、町屋を縫むつて山内の方面へも新しい道路ができて、きれいに砂がしきつめられ終つた朝、棟むね上げの式は厳かに執り行われた。

吉次は、鳥居わきの駒つなぎ場に近いところに土下座していた。ここの一かたまりは、特に拝観をゆるされた武家以外の者ばかりだった。吉次は、前の列に、早くから坐つてい

た。

頼朝夫妻が、群臣にかこまれて、眼のまえを通つて行つた。新しく築かれた高い石段を踏み登つてゆく姿は神々しくさえあつた。眼もくらむばかりとは、その一人一人の装いであつた。——が吉次の眼には、その金銀の飾りも絢爛けんらんな織物も、太刀の鞘さやや沓くつに光つてゐる漆うるしも、みな自分の生産した物を、自分で拝んでゐるような気がした。

あたりの人々を見れば皆、なみだを流さぬばかり心から平伏している。自分のような考え方は不幸であると思つてみても、にわか随喜のなみだも出なかつたが、そのうちに、「……あつ?」

あやうく声を嚙のみながら、ばつと面おもてに血のいろをうごかした。

すぐ前を、九郎御曹子が——久しく見ないので見違えるばかり成人したその人が——いつぞやの継信、忠信のふたりをつれて通つた。

二

義経はちらと、吉次のほうを見たようであつた。

慥たしかに、自分へそがれたと思つた眼に、吉次が、はつとしてゐるまに、もうその人は背を見せて、彼方へ歩いていた。

「……ああ、お立派になつた」

彼は、眼がしらに、熱いものをたたえた。

——何か、安心した気もちと、自分から遠くなつたと思ふさびしさにつつまれた。

「物」と「金」しか頭にないかのような彼も、義経にだけは、愚かしいほど、情に揺りうごかされた。——子のないせいかとも思つてゐる。いや、子のような気持を寄せるには怖ろしい対象なのにと、自分の情を疑つてもいた。

しかし何れいずにせよ、慾と敬愛と、折合わない二つのものを、一つ対象に抱くなどという例は他ほかになかつた。義経だけが例外であつた。

「……どこかで？」

彼はなおも義経のすがたを見ていたくてならない容子であつた。

いつのまにか、彼のすがたは、そこを去つて、鶴ヶ岡の山林へ立入つていた。

深い木の間に身を埋めてながめてゐると、東側の仮屋に、頼朝夫妻のすがたが眺められた。夥おびただしい家人衆は、社域の南北に居ながれてゐる。

以前の瑞籬みずがきは、由比郷しゅうに面した南の山にあつたのだが、頼朝の入国と同時に、ここへ造営を開始され、おとといの八日までに、棟上げまでに運びができた。

きのうは、治承の年号が、養和と改元された日であつた。

で、改元の第二日目に、きよの棟上げの式は行われたわけである。

式が終ると頼朝は、作事に功労のあつた二人の工匠たくみに、賞として、馬を与えようと云い、座右を見まわして、

「九郎。——九郎はいずれにおるか」

と、呼んだ。

「はい」

義経は、東側の列の幾人目かに伍していたが、すぐ起つて、

「御前おんまえに——」

と、兄の座を拝した。

小兵こひょうな義経のからだだが、いとど小さく見えた。頼朝は、見下ろして、

「九郎か。——大工棟梁あしげに、葦毛あしげの吹雪ふぶきと、栗毛あしげの星額ほしびたいとを取らせる。そちが行つて、

その馬を、これへ引いて来い。——馬を引いて、棟梁どもに与えよ」

と、いいつけた。

「……………」

義経は、俯向いたまま、いつまでも返辞をしなかった。

土肥、北条、千葉、畠山など並居る人々の顔こそかえってはつと変った。

馬を引けとは。

しかも、大工棟梁へ、馬を引けとは。

「なんでそんな卑しい役目を、他に仰せつける人もあるのに、御曹子へは？」

人々は、頼朝の心を、押し量りかねた。——また、義経の返辞が、どうか、穏やかであ

るように——きょうのこの盛大な吉日が難なく終るようにと——手に汗して、念じないで
はいられなかった。

「……………」

「嫌か」

頼朝の眼は小兵な弟の平伏ひれふしている姿へ、きびしく注そそがれたままであった。

「……………」

義経も、無言のままである。

一瞬、せつかくの曠はれの日が、険けわしい雲に蔽おほわれてきたように、誰もが胸を暗くした。義経の襟の毛も微かに、わなないているかに思われた。

「九郎。なぜ起たぬか」

二度目の声は、さらにきびしい。

頼朝もまた、その言を吐くために、心のうちでは、非常な努力をしているらしい顔いろであつた。

「……はい」

義経は、ようやく起ち上がった。——けれど、曠はればれ々しい衆人の中である。恥かしさに面おもては上げられなかつた。

三

若宮の辻や、寿福寺の並木道あたり、いや鎌倉じゆうが、うすい埃ほこりの下に、夥おびただしい人の流れを描いていた。

頼朝の帰館を、今しがた見送つた路傍の人々が、行列の通過と共に、静肅をくずして散

らかり出した埃である。

「あぶないっ」

「端へ寄れっ」

行列が終つてからも、後から後から二騎、三騎と絶えない蹄ひづめの音が、油断している往来を脅かした。

潤葉樹かつようじゆの大木が道の空あきまで茂り合っている辻の曲り角までその一騎が来かつた時、つと木陰から往来へ躍り出て、

「しばらく」

と、その駒の口輪をつかんだ男があつた。

「誰だっ？」

馬上の人は源九郎義経だつた。ふたりの従者は云うまでもない継信、忠信の兄弟で、

「やつ、和殿はいつぞやの男よな」

「吉次ではないか、何をするか」

共に、馬前から吉次を押し隔へだてようとしたが、吉次は、耳もかさず、

「しばらく、しばらく」

云いつづけながら遮二無二、森の小道へと馬を引き込んでしまい、往来の目から離れると、ようやく草むらにうづくまって手をつかえた。

「おゆるし下さい。おなつかしさの余りです。御曹子様、わたしめでござります」

「才、吉次か」

義経は、馬を降りて、手綱を継信にあずけ、

「会いたいと思っていた」

と、云った。

そのことばだけで、吉次は胸につかえていたものすべてを宥なだめられてしまった気がして、なにも云えなくなつた。

義経は、継信、忠信のふたりへ、ここで待っているようにと云いつけ、森の奥へと、先に歩き出しながらまだ手をつかえている彼を、

「吉次。来ないか」

と、振向いた。

吉次は起つて、従ついて行つた。人目を避けて恋人とかくれに入るような秘密と似たものが五十過ぎた男の胸をそつと揺する。秋に近い森の奥は、黒いほど緑がかさなり合つて、

蝉の声も喧しいほどではなく、所々、これこそ泉ともいふべき水溜りに、もう秋草の花が鏡の縁の唐草模様のように乱れ咲いていた。

「ここは、寿福寺の森かな？」

「さようでございます」

「ここなら誰も来まい。——吉次、そこらの石へでも腰かけるがよい。そう礼儀を執らなくてもよい」

義経は、木の切株に腰かけて、足もとから泉へ注いでゆく水を見ていた。

「奥州における間も、めつたに会う折もなかったが、いつも達者でよいな」

「あなた様にも」

「む、む。……」と、義経は口のあたりで微笑しながら、

「わしなどはまだ乳くさい子どもだからな。育つばかりだよ。どうだ、大きくなつたらう」

「お見ちがえ申す程でございます。しかしお恨みにぞんじます」

「何をの……」

「平泉のお館を脱けて、一匁にお急ぎ遊ばしたお心はよくわかっておりますが、なぜ一言、吉次にお洩らし下さいませでしたか。吉次如きは、鞍馬の後は、もはやお役に立

たぬ人間と、お見限りをうけたのかと、後では、ひがんでおりました」

「はははは。そうか」

とのみで、義経は、べつに云いわけもしなかった。

「愚痴ぐちでした。年は老とらないつもりでも、つい、いけませんな。お聞きながしを。……いや、そんなつまらぬ事に時をうつしては勿もつ体たいない。きょうこそは、ぜひ一つ、あなたのお胸むねに、入れておいていただきたいことがございますので」

吉次は、鳥の羽音はねねに、眼まなこをそらした。寿福寺の丹塗にぬりの伽藍がらんが、木々の彼方かたに紅葉もみぢのように見えた。

四

吉次は、すり寄って、じつと、相手の面おもてを見つめたが、その義経は、

「……何か？」

とも訊ねてくれない。

むしろ放心したように前の泉を見つめていた。

吉次は、その様子を見て、ふと臉を熱くした。

義経の胸には、今なお、澄みきれないものがある。その小濁りが、吉次には、泉の底よりもよく透いて見える。

きょうの棟上げの式に、兄の頼朝から、大工の棟梁に馬を引けと——あの曠々しい人なかで——酷い命をうけた時の気もちはどんなであったろうか。

(よくも、お怍えなされた)

と、無事に式の終った後で、多くの家人衆はうわさしていたが、吉次は、そんな傍観者のことばをわざわざ重ねてこの人に告げようなどとは思っていない。

むしろ彼の云おうとするのは、

(あなたは世間知らずだ。あなたは純情すぎる。あなたは余りにお人よしだ。云いかえれば愚人ともいえる。そしてご自分を余り粗末になさりすぎる！)

とまで、齒に衣きせず、直言したのであった。

「……………」

が、云えなくなつた。

云おうとする矢さき、ふと見れば義経の頬に涙がながれていたからである。

突然、吉次も不覺な嗚咽おえつをもらしてしまった。がぼと、肱ひじを顔にあてたまま、草のなかへ俯うつ伏ぶした。

「吉次。何を泣く」

泣いている人が、冷然と、彼にたずねた。吉次は面をあげて、

「泣かずにおられましようか。——あなた様とて、あなた様とて、きよこの事は、さぞご無念でございましたらうに」

「兄のことばだ。いや鎌倉殿のおいにつけだ。心外なことはない」

「嘘を仰つしやいませ」

「なに」

「あなた様が、そんな柔にゆうじやく弱じやくなご氣質か否か、誰よりも、吉次はよく知っています。それだけに、吉次でさえも、身がふるえました。かりそめにも、源九郎御曹子には、亡き義朝様の血をうけつがれたお一方ではありませんか」

「鎌倉殿は嫡流でおわす」

「とはいえ、いかに何でも、平侍のするような卑いやしい役目を、しかも御家人たちの打揃はれつている晴はれの中で、わざわざ骨肉のあなた様へお命じなさらなくても」

「もう、その事は、云うてくれるな」

「申しますまい。けれどこれだけはお分りになっておいて下さい。——鎌倉殿のなされた事はつきりと、故意でございますぞ。……これ見よ家人ども、わしは自分の弟に対してすら、かようにする。骨肉の情愛などにはひかれておらぬぞと、そう故意に、あなたの目を犠牲にして、大勢へしてお見せになったのです」

「……………」

「一面にまた、あなたへも、兄弟とはいえ、わが命令には、平御家人同様、絶対ひらに服従するのだぞ——と、暗に大勢のなかで誓わせたことにもなりましょう。まったく政治のために、あなた様という者を」

「云うなと申すに」

「……………で、でも」

「政治には、私心を交じえず、人事には、一点の私情もゆるさぬというお示し。……いいことではないか。有難いお心だ」

「ではなぜ、あなた様は、あの時平御家人のように、歡び勇んで、大工棟梁へ馬が引けませんでしたのか。——二頭まで、馬を引きに、お起ちなされましたが、誰が目にも、あな

たのお顔は蒼かった。惨さんとして、泣かぬばかりなご様子であつた」

「それはな吉次……」

云いかけて、義経は渴かわいた唇の顫ふるえを齒でむすんだ。ともすれば今でもまた、あふれかけそうな瞼こらのものをそつと怵こらえて。

五

義経は、自分と兄とのあいだに抱きあつている珠のごときものを、傷つけたくない。――他人から壊こわされたくない。

珠とは。

兄弟のつよい愛である。骨肉の情である。

(この世に一人の兄あり！)

とは、鞍馬にいた頃から、また、足柄山あしがらやまを奥州みちのくへ越えてゆく頃から――それからの長い年月のあいだも、義経の胸にたえず醸かもされていた血液的な思慕だつた。尊い珠玉だつた。

「吉次」

「へい」

「おまえは、他人の眼で、また他人の感情で、ひとり無念がつているが、鎌倉殿と義経のあいだは、切れない血と愛情でつながっている兄弟はらからだぞ」

「それ故に、なお」

「だまれ。——兄の鎌倉殿は、愛すればこそ、この義経を、公然とお叱りになったのだ。愚かなわしは、その大愛が、すぐ胸に溶とけなかつたために、酷むじいお仕打！ 衆人の中で、恥辱をお与えなさるか、咄とつさ嗟には、むつといたしたが……よう考えてみれば、罪はわしにある」

「な、なんの科とがが」

「誰にも云わなかつたが、おまえはわしの巢立ちの親だ。おまえにだけは云う。……聞いてくれ」

「はいっ」

「わしは常々兄の鎌倉殿へ、よい顔を見せたことがない。——黄瀬川の宿で、初めてお会いして、手を取り合つて泣いた時以来は」

「どういわけで」

「まあ聞け。……兄はすでに群臣の上にある顕然たる時の盟主。兄の一指一眇は、世をうごかすものだ。たとえ兄弟なればとて、ゆめ狎れてはならぬ。私の情愛をもつて、兄の大志を紊してはならない。……と、戒めながらも、人間は愚か、つい、骨肉のお方と思う。日常の礼儀、形は慎んでも、心のどこかでは、つい、甘えたり、不平を思いやすいのだ。——臣下の如くにはなりきれぬために」

「ぜひない事でございましょう。——が、ご不平とは、いったいどういうご不平ですか」
「なぜ一日も早く、平家を掃滅し給わぬか。平家をうち亡ぼして、父義朝をはじめ亡き源家の人々のうらみを雪いで下さらぬか。また、一鎌倉の繁栄や祭り事などさし措いて、旗挙げの初めにひろく云い触らされたように、この国土全体の為に、旗を中原にすすめ、民みなが望んでいる新しい世態をお築きにならないのか。……それを思い、それを憂いたりなどしながら、兄や嫂の近頃のお生活方だの、御家人どもが争つて、宏壯な居館を建てたり、飲んだり遊び明したり、私闘に日を暮したりしている有様をながめると、わし的心は楽しまぬ。怏々と胸が鬱いでくる。——為に、つい兄へも嫂へも、ここ半年余り、嫌な顔しかお見せしないようであつた」

「仰つしやつた事がございますか。鎌倉殿へ直じきじき々に」

「そういうお話をする折はない。昼は昼で、公務にお忙しいし、夜は夜で」

「御台所の政子様におひかれでございましょうな」

うっかり吉次が口をすべにらすと、義経はいやな顔して口をつぐんだ。

——と、いうのは、つい先頃のこと、頼朝がまだ配所にいた時分、側近くおいていたかめ亀の前まえという女性を、その後、家臣なにかしの某の家へそつと隠しておいた事を、政子の母、牧の方が知ってしまった。

牧の方は、娘可愛さに、ついそれを政子の耳へ入れたので、ふたりの愛には、当然、大きな亀裂がはいった。政子は、聡明なので、世のつねの妻女のように、徒らいたずに泣き狂ったり醜しつとい嫉妬は口走らなかつたが、一応、夫婦のあいだにはかなり派手な口論が交わされ、さしもの頼朝も彼女の正論には抗し難く、以後、彼の進退は甚だしく、御台所の監視下にあるという——下々にまで隠れないうわさを吉次も聞いていたからであつた。

六

林の外に、駒のいななきが聞えた。義経は、にわかになんて立って、

「吉次。また会おう」

と、去りかけた。

吉次はあわてた。徒らに時をうつしたが、彼はまだ、云おうとする何も云っていない気がした。

「あつ。もうしばし……」

「きようは忙しい。折も折、わしの姿が見えぬなどと、義経の心を知らぬ人々は、立ち騒いでおろうも知れぬ」

「では、たった一言ひとこと」

と、吉次は彼の袖をとらえて、よほど思いきった顔をして云った。

「あなた様は、いつまでも、鎌倉殿の下について、そうしておいで遊ばすおつもりですか」

「……そうしてとは？」

「でも、ご不平でしょう。この鎌倉の現状には」

「わしの不平は、世のうごきに対する大きな不平なのだ。……兄鎌倉殿への不平ではない、そちは混同している」

「いません！」

「うるさい。そちは義経に、なにを云おうとするのだ」

「あなた様は、世間をごぞんじない。人間の複雑な心を見るにお目が若い」

「——だから？」

「失礼ながら、鎌倉殿に利用されるだけでしよう。きょうの棟上げの式でのように」

「飲んで利用していただく。それが、世のためになる事なら」

「鎌倉殿が栄華をなさるお為でしかないとしたら、如何なされます」

「兄が、平家の二の舞をするというのか」

「なさらぬお方と、誰が保証できましよう」

「吉次！」

「……お気に触りましたか」

「そちは義経に、謀叛をすすめるのか。せつかく兄が建てられた新しい陣営に、もう仲間割れが起るようにと希^{ねが}っているのか」

「希わなくとも、そういう事実はまだ起きていますから避けられません。——木曾殿と鎌倉殿との不和はかくれもない事です。おふたりの生^おい立ちを洗えば、そこに深い旧怨もあ

ります。また、平家という当面の敵をひかえながらも、木曾殿は鎌倉の勢力が伸びてゆくのをよろこばず、鎌倉殿も木曾殿が 旭 日昇天のような勢いで京都へ迫ってゆくのをながめて、内心お快く思っていないことは争えませぬ」

「……………」

「旗あげの初めに、以仁王の令旨をいただき、伊豆の配所をはじめ、諸国を駈けずりまわっていた叔父君の新宮十郎行家様とも、鎌倉殿には、近ごろ何か仲たがいを生じているとか聞きました。論功行賞の折、行家様へは領地をやらなかつたとかで、鎌倉殿を見かぎって、木曾殿のほうへ奔つてしまつたとやら」

「……………何でもない！ そんな小さい私事はみな塵芥だ。世を建直す大きな波へ浮び沈む塵芥よ。……………目をくれている要もない」

「まだ仰つしやるか、九郎様。——あなたも今に、その塵芥のひとつと見なされませぬぞよ」

「……………」

「悪いことは申しませぬ。臍を固めてお置きなさい。元々、諸国の源氏は、鎌倉殿を中心に、一体として起つたかというに、決してそうではありません。——ただ春が来たので大地が芽を出しただけです。源三位頼政殿も、十郎行家殿も、木曾殿も、鎌倉殿とは根はべ

つに生はえたもので、何の一致もありますまい」

「離せつ」

義経は、いきなり彼の手を袂たもとから払つて、

「根はひとつだ！ そちのようあきゆうどな商人には、武士ものふの心根はわからぬ。義経は鎌倉へ、利を占めに駈けつけて来たのではない。死に場所をこそ求めに来たのだ。いかに、この身をよく死なばやと……」

云いすてると、義経は、蟬のごとく、木の間の小道を駈け去っていた。

栄華散落

一

それから、わずか二年め。

養和の年号は、一年で更かわつたので、寿永二年になる。

秋も近い七月二十五日の事である。昼からひどい暑さであつたし、雨のすくない後なので、都の屋根は、乾ききつていた。

前の夜の夜半よなかごろからすでに、

「木曾、北陸の怖ろしげな猪武者ししむしやの大軍が、もう叡山を占領し、大津山科やましなにも満ち満ちて、今にも洛中へ攻め入つて来よう」

と、まるで地震なえの地鳴りの次々に聞えてくるように、京都じゆうを揺りかえしていたので、きよようの明け方からはもう全市に庶民の影は見えなかつた。

逃げたのではない。

近郷きんごうへ避難してゆく、病人や年よりや女子どもの、続いて行つたのは、もう三日も前の京都で、今は、そんな光景すらなく、刻々と、気味わるい静寂しじまのうちに、ここの死相は迫りかけていた。

「な、なんじやろ？」

床下の坑あなへかくれたり、小屋の戸をたて籠めて、息をこらしている庶民は、何か、大路の方に、物の轟とどろきを聞くと、唾つばをのみ、眼と眼ばかり見あわせた。

往来まで、恐々こわこわと、様子を見に行つてもどつて来た若い男は、町屋の裏へかけこんで、

手つき物まねで、しゃべっていた。

「——途方もない敗け軍だよ。今朝から逃げて来るのはみな平家の兵ばかりじゃ。今もな、新中納言知盛様、それと重衡様なんだが、みじめな姿で、八条のほうへ逃げて行ったぞよ」

「総大将のおふたりを見たのかよ」

「なんの、どれが知盛様やら、重衡様やら、分るものではない。四、五百ほどの人数が、ごつちやになって、馬も徒士も、押しあい、揉みあい、われ勝ちにな——」

「三位中将資盛さまも、宇治のほうが支えきれず、午ごろであつたか、夥しゆう逃げ帰つて来たままじゃ」

「もう防げまい。叡山の衆も、木曾殿と合体して、谷々から、太刀弓矢をとり出し、はや加茂川の上に、喊の声をあげているとやら」

「……どうなるのじゃ」

床下からも、小屋の中の闇からも、悲しげなうめきが洩れた。

すると、裏店の井のわきに聳えている大きな櫨の木の間から、

「どうもなりはしない！ どうなろうが、京都は京都じゃ。案じなさるなよ！」

と、どなった男がある。

驚いて、首をのぼした人々が、木の洞を指さして、一層、恐怖にかられていると、やがて男は、そこから這い出して来て、空地のまん中へ立った。

「誰じやろ。この近所で、見たこともない人だが？」

怪しみながら、その男を見まもっていると、男は、

「平家が追われれば木曾殿が京都に入る。木曾殿がよい まつりごと 政事をなさらなければ、また、

鎌倉殿が来て代ろう。——その鎌倉殿もいけなければなお、次の軍勢が来て治めよう。こしばらくの討ちつ討たれつは仕方がない。そのうちに、平家でない次の世は、こう行くのだと、方向を教えてください。——お前がたは、その善い人をよいと称え、悪い代り手だつたら正直に悪いといい、ここの土と一緒にいればよい。何が起つても、どう上のものが革あちたまつても、京都の土に変わりは来ないのだから——」

どこか、奥州訛なまりのあることばだった。

乳のみを抱いて、小屋の中に交じっていた職人の妻らしい年増としまの女が、

「あ……。あの人は、見たことがある。白拍子の翠蛾すいがさんの旦那さまや。奥州の吉次とかいう人によく似ているがの」

と、そばの人達へ囁いた。

二

「ホ、翠蛾さんの？」

「翠蛾さんではなから、妹の潮音さんの旦那である」

「どちらにしても、あの白拍子の家に五、六年前までは、時折見えたことのある奥州の大お商あきゆうど人とやらにちがいない」

しきりと、自分のすがたへ眼をそそぎ、指さし合つて、密々ひそひそいう辺りの声に、吉次も気がついたか、急に間がわるそうにして、

「いや、わたしは旅の者で、どっちみち京都に長居はしていないが、まあ、今の世の大きな変りようは京都だけの事ではない。日本じゅうは地つづきだからの」

そう云つて遽にわかに、家と家のあいだの細路地を出て行きかけたが、またふと、引つ返して来て、誰へとはなく訊ねた。

「お前がたのうちで、誰か、知っている者はないか。この表の通りに住んでいた白拍子の

翠蛾と潮音の姉妹きょうだいは、どこへ逃げて行つたろうか」

「……………」

「実はここ六、七年も、あの姉妹ふたりの家を訪ねていないので、近頃の様子は知らぬが、姉も妹ももうかなりな年配。しかるべき男でも迎えて、身をかためていれば結構だが、この騒ぎに、どうしているかと、実は案じて立ち寄つたわけだが、住居は空家、猫の子もいない」

「……………」

知らないのか、知つていても、他人事ひとごとどころではないといふのか、誰も皆、黙りこくつて、どこかでけたたましく聞える野良犬の声に気をとられていた。すると、人々の頭の上で、

「あつ？ 煙が」

と大声がした。

屋根に上がつて這つていた職人らしい男が下へ向つてどなつたのである。

「たいへんだぞ。七条、八条、池殿、小松殿、泉殿、東は二条三条のここかしこからも、いちどに黒煙が揚がりはじめた」

「えつ、煙が？」

人々は、どよめき出した。

床下にも小屋の内にもいたたまれなくなつて、どやどや空地へ群れ立った。嬰兒あかごが泣く、女たちが呼び交わす。——そして見るまに、その人々の上には、疾風雲はやてぐものような黒煙が、太陽を赤くいぶして、空いちめん拡がつてゆく。

「いよいよ、木曾勢がなだれこんだか」

老人たちが、唇くちをふるわせた。後から屋根へ上がつて行つた三、四名の男たちは、

「まだ、木曾勢は加茂を渡りもせぬに、大路は、平家衆の馬や車がなだれ打つて、西へ西へと落ちて行かれる」

と、手をかざし、

「あれよ、六波羅も火、西八条からも、大きな火の手が立ちのぼつた。——平家衆は都を焼きすてて逃げたのじゃ、わしらも、ここにいたら焼け死ぬぞ！」

もう片々と、黒い火の塵が降つて来た。

経きようもんぎれ文切の灰。

燃えちぎれた錦欄。

火の鳥のように、火を曳いて飛んでゆく無数の黒点が、どこへその火を移そうかと、煙

の空を、翔けめぐっている。

「死ぬぞっ」

「焼け死ぬぞ」

諸 《もろもろ》の路地からあふれ出た庶民の群れは、悲鳴と号泣をあげながら、大路の辻へ押しあつた。

陽の光も煙につつまれたまま、七月二十五日の夕べは、夕方のあいりも措おかず、いきなり阿鼻あびき叫喚しょうかんの夜に入った。

一門の第宅ていたく十六カ所をはじめ、六波羅の相府しょうふ、西八条の一郭、そのほか繁昌と権勢をきわめた幾多の栄花の殻に、平家は自ら火を放つて、その夜、西国へ立ち退いたのであつた。

三

こうも早く、自分たちの没落が迫つて来ようとは、平家の誰も思わなかつた。ことしの四月頃には、まだまだわが世の春と、うららかに、酔つていた。

義仲征伐に、北陸へ向けた維盛これもりや忠度ただのりからは、

「戦えば、勝つのみ」

と、いつも連戦連勝が報じられて来るし、鎌倉の頼朝は、あれきり東国にいてうごく様子もないし——と。

それが、礪波山となみやまの一戦で、義仲の奇計に、いちど敗地にまみれてから、形勢は急転直下、変つてしまった。

逃げ足立つた平家軍を、追いに追つて、木曾勢は、加賀、越前を突破して長駆、近江まで追撃をゆるめずに来てしまった。

——と、思うまに、この月二十二日には、もう湖水を渡つて、叡山よに抛り、平家一門の屋根を、眼の下に見て、

「もう、いつでも」

と、攻略の手配を完全にととのえて、それから二、三日の余裕すら示している敵であつた。

維盛これもり、通盛みちもり、忠度ただのり、資盛すけもりなどの諸大将も、今はすべて洛中へ逃げもどつて、

「どうすればよいか」

を、宗盛以下の一門へ諮^{はか}ることしか知らなかった。

——知らなんだ！

今となつて、彼等は、ため息ついて、後悔の臍^{ほそ}ばかりかみ合つた。

つい目と鼻のさきに、朝夕榮華の日の手枕にも眺めていた叡山の大衆までが、

「木曾に味方しようとは」

と、怨みがましく、彼方の嶺を見つめるのだつた。

平家の敗色が明瞭になると、丹波^{たんば}辺りでも、吉野でも、いちど平定した畿内の反平家分

子も、また一斉に、騒ぎ出した。

いや、それらの事々よりも、平家一門の驚^{きょうがく}愕と、大きな失意は、院のお行方が、ゆ

うべ二十四日の夜半ごろから、まったく知れない一事であつた。

宗盛以下、評議の末、

「このうえは、京都を捨てて大宰府へ立ちのき、あの地にある一族の家貞や貞^{さだ}能^{よし}等をも

併せて後事を図ろう。——瀬戸内海一円には、故入道殿の扶^ふ植^{しょく}されたご恩徳も浅からず、

平家に加担の豪族も多いから、われらの第二の地盤として、勢いをもり返すことも至難で

はあるまい」

と、いうのに意見の一致を見て二十五日はもう洛中から総退去と決していたのであるが、今朝になつて、

「法皇には、昨夜おそく、ひそかに院を忍び出られ、鞍馬より横川よかわを経て、義仲の陣営にあてられている延曆寺えんりやくじへ御幸みゆきあそばされてしもうたらしい」

との事実が分つた。

これも寝耳に水であつた。

元より宗盛たちは、自分たち一門の退却と共に、後白河法皇のお供をしてゆく予定でいたことは云うまでもない。

「何たる不覚を」

と今さら、自分たちの不用意に気づいたり、天をうらむが如く呟いてみたが、何もかも後のまつりである。

そこで、この上はと、恐れ多くも建礼門院が手に、まだお幼いいとけな主上を抱きまいらせて、ご同輿どうよの出御を仰ぎ、内大臣宗盛父子おやこや平大納言時忠など、重なる人々は衣冠、そのほか、武臣はもとより、公卿殿上人から端はしたづか仕えの人々まで、すべて、弓矢 甲かちゅう 冑ゆうを帶し、きょう卯うの刻こく、七条朱雀すしやくを西へお供申して行つたのであつた。

その後は。

平家は、平家自身の栄華の寢床を各　の手で焼きはらって、立ち退くだけとなっていた。

四

——　　こういえば平家の退却は、予定のもとに、秩序整然と行われたようにもあるが、それは御幸みゆきのあつた時刻の前後だけでいよいよ残る一門が、各　の第宅ていたくに火を放つて、

「それ、お後をしたえ」

と、わが身わが身の始末と、取り残されまいとする先を争う最後になると、

「これが、きのうまで、わが世の春を誇っていた貴顕きけんか」

「これが、きのうまでの都か」

と、怪しまれるばかり、浅ましい喧騒と混雑が、火焰と煙のちまたに描きだされた。

「落ちゆく先とて定かでない。いたずらに家具じゆうき什器をたずさえても荷になることぞ。何も持つな。ただ弓矢と駒のみを大事に持て」

こういう令は、きびしく達しられていたにかかわらず、いざとなると、馬、車に積める

だけの財宝を積もうと焦心あせつてみたり、遽にわかに坑あなを掘って、土中へ金銀をかくしてみたり、井の底へ、家宝を投げ入れて、また京へもどる日もあればと、儂はかない先はなのたのみをつないでみたり——為に、刻々と迫っている生命の危険も忘れて、一門の退京は、思い思いに遅れていた。

早くも、素ばやい盗兎は、焰をくぐって、空巢をあらし廻っている。

宵になると、洛中数十町のあいだは、焰々と、軒をつらねて、火をふいていた。

そのため、辻の口から押し返す者と、後から押ししてくる馬、車の人なみとが、殺し合うような混乱を起していた。

「——お館やかたさま？」

「中将様っ」

「どこにお在わしますか。いかがなされましたか」

「時移している間に、退のき口もみな、焰につつまれますぞ」

「先なるご一門が、お姿が見えぬとて、いたくお案じです。——いずれにお渡りあそばしますにや」

ここは三位中将維盛の第宅であったが、明りもなく人気もない館のうちを、土足の郎党

らしい者七、八名が、交《こもごも》に声をからして呼び廻っていた。

察するところ、主上に供奉ぐぶして先発した宗盛の一行が、維盛の安否を憂えて、侍たちを見届けによこしたのであろう。

「ここじや。ここにおいでられる——」

暗い寝殿のあたりで、人声がした。近づいてみると、広縁きざはしから階の下まで、大勢の人影が、寂せきとして、うずくまっている。

赤い夜空には、いちめん火の粉が舞っている、天体が大きくうごいているように見える。じつと、うつろな眼を上げたまま誰も彼もだまっていた。一つとして、生きているような顔はない。

さがしに来た侍どもは、その気はいに、何かハツとしたように、あわてて庭へ下りた。そして畏る畏る一族の左少将有盛、侍従忠房その他の公きん達や郎党のかたまっているそばへ這いすすんで、そつと訊ねた。

「いかがなされましたか。もう洛中も、あのとおりで、残っているお館もありませんが」
すると、ひとりの公達が、寝殿の奥を指さして、

「……お名残りがつきぬのじや」

と、囁いた。

維盛きしょう卿の北の方は、故中御門大納言のお女むすめで、美人の聞えたかい麗人であつた。まだ幼い和子たちもあつた。そのため一しお別離のかなしみは深く、北の方のすすり泣く声が、さつきから綿々と洩れ聞えて、人々の腸はらわたをかきむしっていたのである。

また維盛も、断ちきれない煩惱ぼんのうにもだえて、女々めめしいことばを繰返していた。

「かくては」

と、卿の弟新三位資盛や備中守師盛もろもりたちは、泣きまどう北の方や、幼な子たちを引き離して、ようやく、維盛を擁してそこを立ち出いでたが、こうした別離はひとりここの館だけにあつた事ではなかつた。

野性

法皇を奉じて、義仲は京都へ入った。

彼は、昇殿をゆるされた。

勿論、政治に参与した。

のみならず、法皇の御意をさえ歪めがちで、もつぱら我意をふるった。

彼の我意が、政治のうえに現われてくる。

期待していた民衆は失望した。――が、旭将軍の権力と威風の下に、暗い顔の唾

になつていた。

「平家は朝敵である」

義仲は、西国へ落ちた平家の官爵を奪りあげた。

――天下一日も主なるべからずと、九条兼実の議によつて、高倉天皇の第四皇子後

鳥羽天皇がご踐祚になった。

「事々に、おれの意見は、朝に用いられない」

義仲は、粗暴をあらわしはじめた。

彼は以仁王のご遺志となえて、王の御子北陸宮をお立てしようとする主張していたの

である。

幾日か、参殿もしなかつた。

彼の部下たちも、それぞれ任官していたが、いずれも粗野な北国そだちである。文化に對する理解が浅い。

平家の治下に、これはまた、余りに逸^{いつらく}樂^{らく}すぎる末期的な生活と制度に狎^なれていた民衆と——武骨一点ばりで、民心の作用も、文化の本質も、よく咀^{そしやく}嚼^{かく}しない我武者の吏^りとのあいだに、のべつ喰いちがいが起つた。反目が醸^{かも}された。——平家から置き去られた民衆は、源氏へすがつてみたが、たちまち、源氏からも望みを失つてしまった。そればかりか。

洛中に充ちている北国兵は、やがて糧食や物資の不足から、暴を働きだした。

守護するはずの兵が、民家に押入つて、酒を掠^{かす}め、女をいじめ、食物を奪りあげて、「何を」

ふた言めには、権力で脅^{おど}しつけた。

——一方。

平家はひとたび九州へ落ちたが、この人々も、多年の生活がまだ身にしみている。ややもすれば、都が恋しい。

殊には、建礼門院をはじめ、婦人たちは一しお嘆く。

大宰府を、第二の根拠地に、とは宗盛以下の最初の決心だったが、徐々、勢力を挽回してくるにつれて、ふたたび、都へ都へと、移動して来た。——その時期の余りに早かったことはいうまでもないが、ぜひもない勢いであった。

南海、山陽の大兵を募つて、本営を讃岐にうつし、屋島に安徳天皇の行宮をたて、やがて都へ攻め上ろうとしている——

平家の動静は、刻々、義仲の耳へはいる。義仲は、

「すておけない」

と、遽に軍備して、平家討伐のため、山陽へ下つた。

ところが、先鋒の足利義清が、備中の水島で、平家のため、惨敗してしまった。

それに気の腐つているところへまた、京都方面の情報によると、

(法皇には、鎌倉の頼朝をお召になつて、ひそかに、何かお諮りになる御意らしい)

と聞いたので、彼は、

(この義仲をさし措いて)

と即日、戦を抛つて、都へひつ返してしまった。

帰ってみると、自分の腹心と思っていた新宮行家も、法皇のご信任に誇って、自分へ反目しているようである。

彼の不安は、狂躁を加えてきた——彼が、法住寺殿を焼いたり、公卿の官爵を思いのまま剥ぎ奪つたり、自ら院の厩うまやの別当と称したり、さながら清盛入道の悪いところだけを真似たような、小さな暴王となり出したのは、その頃からであった。

………

それが十月末頃の京都の実状であったが、以来、鎌倉の頼朝は、何が伝えられて来ても動かなかつた。義経もその下にいるのかいないのか、世間に消息も聞えなかつた。

二

いつのまにか、時代の勢力は、三つに分れている。

京都を中心とする義仲と。

山陽、四国にある平家のまだ侮あなどれない旧勢力と。

それと、ここ鎌倉——と。

京都も中国方面も、外交に、政争に、軍備のかくじゆう拡充に、物々しく動いているが、鎌倉の静かなことは、

「どうしたものか？」

一頃の頼朝の迅速ぶりと思いくらべて、怪しまれるばかりであった。

「近ごろは、御台所との御おんなか仲も、至極、ご円満そうに見える」

と、いう噂は、その問題を気にしたがる家人衆のあいだでも一致した観測であり、それと共に、

「あのほうのご手腕にかけても、人すぐれた所がおありとみえる」

などという——悪い意味ではない陰口が——臣下のなかでほほ笑ましくささや囁かれたりしていた。

が、そういう無事と見えるなかに、鎌倉そのものは、実は大きなものを生みかけていたのである。

平家が行つておこな徹しなかつた武家政治に、頼朝は、自分の理想を加え、民衆の力も盛つて、施政のうえに、今までなかつた新しい方法を見出そうと腐心ふしんしていた。

その一つ二つの現われとして、公問所くもんじよとか、問注所などという役所を設けた。

そこでは、政治をきき、司法上の裁きをし、役人には、大江広元とか、三善康信などを
おいた。

広元も康信も、長く京都にあつて、政務には熟練している文官の逸材である。

彼は、自分には難しいと思う部門には、旧勢力のなかからでも、人材を抜いて、重用し
た。

しかし、彼の信念は、

「野性を失つてはならない。新鮮とか、革新とかいうものは、健全な野性のもつ生活力だ
から。——と云つて、反省も洗練も持たない野性では、義仲のようなものになるし——余
りに野性を失えばまた、平家になつてしまう」

その中、庸ちゆうように彼の理想はあつた。——だから彼は、軍務、警察をかねた侍所などには
和田義盛といったような、もつとも剛骨な武人を別当として、

「まず、武士から先に、庶民への模範を、その実生活で示すように」
と、云いわたした。

頼朝は、武士たちへ、武士道を求めた。それを誇り磨きあうように仕向けた。
一面にまた、

「いかに民心を得るか」
を、大江広元にたえず諮^{はか}つた。

だが彼は、この創業期において、大きな見のがしをただ一つしていた。——それは彼自ら東国の一方に拠^よつていたせいもあるが、歴史の極りない転変と地上の変^{へん}貌^{ぼう}のみを思つて、この国土が、いかに乱に遭つても、いつか帰一し、いかに紊^{みだ}れても、たちまち不滅の体にかえるか——それを政治の力に過信しすぎたことである。

だから、やがて彼の創^{はじ}めた体制は、大いに土風や民心を一時^{あたら}革めて、いわゆる幕府政治としての新味も出し、鎌倉文化なるものをも生みだしたが、その以後、北条、足利などの先例をも作つてしまった。

——といつて頼朝という一臣民が、他の国民にくらべて、決して、朝廷に奉ずる念がうすかつたわけではない。彼もまた、朝廷への忠勤には、心を傾けた武将といえるひとりである。しかし人間は往々、余りに大きなものは、かえつて、うかとし易いものである。

たとえば、人はよく空を仰ぐが、仰ぐたびに、太陽と自己の生命との關係を考えたりはしないように。

「はて。誰がよいか」

頼朝は、考えていた。

彼にとって今、彼自身がいうところの健全な野性が、にわかにならなくてはならぬ。来たのである。

京都、中国、鎌倉と、三分されている天下の勢力を、

「わが手に」

と、考える時、それが容易な事でないにつけ、誰をして、その難事業に当らせるか——
見まわすところ多くの武将のうちにも、そう人はなかった。

後白河法皇からひそかなお招きもあったが、彼は、義仲のいる京都へ上る気はなかった。
彼の身はもう鎌倉からたやすく動けないものになっている。

鎌倉を空けて、彼自身が、義仲と平家の二勢力を、一掃しにゆくなどという事は、いかに望んでみても、夢にすぎない。

「……人はないもの」

と、頼朝はつくづく思った。

大軍をまかして、安心できるような老将には、義仲を討つはりよく 覇力が足りない。元氣に富む若武者ばかりでは、軍令が行われまい。議論倒れになりやすい。旁 《かたがた》、京都へ入ってから、義仲の二の舞をやられても困る。

「義経なら……」

頼朝は、知っている、見ぬいている。——あの弟の素質を。

久しく鞍馬や奥みらのく州つちかに培われてきた健全な野性と、また、血には、自分と同じ父をもつて、よく野性と叡智えいちとを一身に調和している彼の性情を。

「彼ならば、自分の代官として、大軍の上に立たせても、みな服従するだろう」

その点もうなずいていた。

けれど、頼朝もまた、義経を考える時、どうしても義経を一臣下として、考えきれなかった。

わけの分らない感情がからむのである。——あまり義経への衆望が、高まりすぎても困ると思う。彼への服従が、彼への忠誠になったりすると、今、ようやく緒ちよについたばかりの鎌倉に分裂の下地を招くようなものと憂えられてもくる。

そうだけでなく東国の武士は感情にうごきやすく激しやすい。単純な所がある。征馬遠せいばく東国から離れて、長い年月、戦場で艱苦かんくを共にし合っているうちには、どうしても、

——死なば共に。

と、骨肉以上な、つよい情愛にもむすばれてくるものである。

「どうしたものだろう」

頼朝は、迷っていた。

——が、その事ばかりは、妻の政子へも、舅しゅうとの時政へも語らなかつた。そこにも彼の用意があつた。妻の一族の誰彼をふり顧つて考えると、

「やはり誰よりも、義経こそ、信頼のできる自分の弟だ」

と、血は水よりも濃いということばに、気がつくのだった。

その義経は今、鎌倉にはいなかった。使いの途中、近江の佐々木ノ庄に逗とまり留りゆうしていた。
た。

「そうだ。やはり弟に命じるべきだ。思い迷っているも愚か……」

頼朝は、心を決めた。

決意は短時日に迫られていたのだった。なぜならば、彼の手許には、後白河法皇の密みつち

勅よくが、それより幾日か前に人知れず届いていた筈であるから。

途中の人

一

義経は、それより少し前に、

(——東国の年貢を朝廷たてまつに上るの使し)

として、貢みつぎの荷駄に、五百騎ほどの従者をつれ、兄の命をうけて、京都へ向っていた。尾張の熱田の宮前で休息していると、

「源九郎御曹子ではないか」

と、声をかけた旅人がある。

「あ、これは」

義経は近づいて、先の礼儀に、急いで会釈した。

供も二、三しか連れていないし、姿も見ちがえられたが、それは後白河院の北面の下臈げろう公朝きんともであった。

「いずれへお旅立ちですか」

「東国へ」

「東国は？」

「鎌倉のあたりまで」

と、公朝は、何か意味ありげに、にことして見せた。

振向いて、宮の森を指さし、

「ご参詣は」

「ただ今、参拝をすまして、これに休息しておるところですが」

「では、そこまで、お顔をかして給わらぬか」

公朝は、供の者をそこへ残して、もう先へ歩いてゆく。

問いたい事は、義経にもある。

義経は、忠信、継信の兄弟へ、何かささやいていたが、すぐ一人で公朝の後を追った。

十月末の空は澄んでいるが日蔭はいとど寒い。杉木立のふかい中に、蔦つたもみじだけが赤

く眼に映る。

神前に坐つて公朝は、長いあいだ礼拝していた。

義経は、つい今し方、先に参拝をすましていたが、ここに立つとまた、きつきも想い耽つた多感な追憶にふたたびつつまされた。

十六歳であつた――

ここで貧しい加冠の式をして、吉次と共に、奥州へ下つて行つたのである。

吉次といえは。

どこかそこらの物陰から、今にも彼の男がひよいと出て来そうな気がする。

「いや、お待たせした」

公朝は、膝の塵を払つて、義経に近づいて来た。そしてあたりを見廻しながら、相手の耳近くへ、

「御曹子、近日のうちに、きつと、あなたのお身の上にも、大きな使命が下りますぞ。：

…こう申せば、もうお分りでしよう」

「……では、鎌倉へのご用は」

「私事の用向きではありません。……院のお使いとして、それも極く密かに」

と、いよいよ声を落して、

「人になおもらしあるな。実は鎌倉殿へ、御院宣をお伝え申すために下る途中なのです。義仲の暴状は、もはや一日も捨ておかれないうまでになつてゐる」

「そうですか」

静かな面おもてでうなずいた。——が義経のそれには、ほの明るい血がさし上つていた。

「貢ぎのお使いにお上りですか」

「そうです」

「ご入洛は待たれたがよい。危険です。——それに、それがしが鎌倉殿へ着く日もまもなく」

「……………」

義経の眼は、何か、迷つてゐるように見られた。

「いつそ、それがしと共に、一応鎌倉へお引返しあつては如何ですな」

「そうはなりません」

「——さもなくば、早々、海道の源氏に、用意を命じ、お手勢とあわせて、京へ迫るお支度をひそかに進めておかれるもよい」

「いえ、何事も、兄のいいつけが下らぬうちは出来ません。……やはり貢ぎの荷駄を曳いて、京都へ参るといたしましょう」

云い断ると、義経は、その事にはむしろ触れたくないように、

「——それよりも、あなたにお伺いしたい事は」と、話を反らした。

二

「それがしに、お訊きになりたい事とは？」

公朝きんとちが問い返すと、義経は、やや面ぶせに、しばらく云い出しかねていたが、

「兄の円濟えんさいには、無事でおられますようか」

「オオ、八条宮の坊官円濟どのか。お変りもなくお過しのように聞いておるが」

公朝は、答えながら、義経の眸をとおして、この人の血につながる人々をふと思いうかべた。

後白河法皇の皇子八条宮に坊官として仕えている卿きよらのきみ公円濟というのはそのむかし、

平治の乱の雪の日、常磐ときわの手にひかれて生死をさまよい歩いた幼子おきなごたち三人のうちの一
人なのである。

あの時——五歳いっつであった乙若がその坊官円済で、今では八条の法親王に仕えていた。
いちばん上で、当時七歳ななつであった今若は、その後、醍醐寺だいごに入つて、これも出家し、禅
師全成と名のつていたが、気が荒いので、悪禅師といわれ、今は醍醐にもいず、消息もよ
くわからない。

(——やはりそうした兄弟はらからたちが、幾歳いくつになつても、恋しいのであろうな?)

公朝は、思いやつた。そして、義経の何か怖れ憚はばかっているような眸へ、もう一步、立ち
入つてこう云つてみた。

「御曹子……。あなたが、お訊きになりたいのは、円済どののお便りもさる事ながら、も
つと他ほかのお方のことではありませんか。あなたの生みの母御前常磐どののその後のご消息
を知りたいのでしょうか」

「……………」

常磐——という一言ひとことを聞くだけでも、彼の血、皮膚、髪は恋しさにおののき疼うずいた。
その胸の中のを公朝に指されたとたんに、彼は何の見得みえもない一個の痴児ちじとなつて、

「……そ、そうです。お察しのとおりです。何ぞ、母の身についてご存知なればお聞かせ下さい。兄円濟へもよそながら、書状にて、問い合せてはみましたが——出家の身、世事何事も弁えぬ。とのみ、素気ないご返事を一度下されただけでした」

「素気ないのではご置きますまい。宮のおそば近う仕える身、ご無理はありません。——それにまた事実、常磐どのお身の上とて、京都の大きな変りようと共に、何もかも押流されて、今では平家方について行かれた多くの公卿衆のうちに在るやら、誰ぞの領所を頼つて田舎へお引籠りやら、恐らく知る人はありますまい」

「この世に生きておいであることは、慥かでしょうか」

「さあ、それとても、如何なものでしょうか。お互いにいつ知れぬ身ですから」

「嘆きはしません。もし、ご病氣か何ぞで、もはや世に亡いものなれば、世を果てたと、お教えください」

「そういう事がないにしても、なお世にあるお方と、あなたがそう恋慕われるのは、お察しはできるが、おまちがいでしょう」

「……まちがい？」

「牛若どの、乙若どの、今若どの——そう三人の和子が生命を守り終って、母としてなき

れる苦患くげんも務めをも成し果たされた日から——常磐どのは恐らくご自身でも、すでに世にない身ぞと思ひ極めておいでではなかつたでしようか」

「……………」

「世間はみなそうお察しして、陰ながらわれわれまでも、美しき前世のお方よ、と密かに称たえているのです。——その後、誰の妻になつたであろうとか、幾人の子を生なしたであろうとか、そんな噂はあつても、別人の事としか聞かれませぬ。他人ですらそう思つておりますのに。……御曹子、それでもなお、あなたは強たつて、もう一度、生ける人にひき戻して、敢あえないお苦しみをそのお方にかけたいと思ひますか」

三

測らぬ人に行会つて、測らぬ想ひは義経の胸に増していた。

その公朝きんともと熱田で別れ、彼は京都へと上貢の旅をつづけていた。

雨の日が多く関ヶ原あたりの河川は氾濫はんらんし、旅程は、おくれがちだった。ようやく、不破ふわの関へかかつて、湖畔をたどっていた日である。彼の一行を、早馬が追いかけて来た。

鎌倉殿のお使いという。

「何事か」

と、書状を披ひらいてみると、極めて簡略に、

入浴の儀はしばし見あわせ、佐々木ノ庄に滞留あつて、再度の沙汰を待つようにとある。

思うに、院の密使公朝が、鎌倉へ着いたその夜か翌朝にでも、すぐ出した早馬にちがいない。

義経は、心のうちで、

「……時が来た！」

それをどんなに彼は待つていたことか。

彼は小さいもう一つの悩みを——公朝にも打明けた乳児のような心の奥の泣き声——切り捨てなければいけないと思つてゐる。

大乗をもつて、小乗を。

大志をもつて小我の迷いを。

まだ見ぬ母を一目でもと恋いわずらう過去への儂はかない痴児ちごのこの悩みを。

「お目にかかる事が倅せか。お目にかからぬほうが倅せか。——愚かよ。公朝が云つたとおりだ」

義経は湖のうえを行く片雲を見た。道の辺の冬草を見まわした。——在りやなしや。母はそこはかとなく居もする。すでに亡ない気もする。

「この世におわすとも、おわさずとも、義経が、人として、為なす事を為さば、いずこかでご覧あろう。亡父ちち義朝も……」

近江路は、源氏のものふに取つて、恨み多く、胸傷む思い出の道である。

ここらの草木、ここらの水の辺——何を見ても平治の乱に崩れ去つた義朝や一族の当時のすがたを偲おもはせぬものはない。

「——が、こんどは」

義経は、身のうちに、血ぶるいをおぼえた。

佐々木ノ庄は、湖畔の安土老蘇あづちのおいそ、金田あたりの一帯をいう。佐々木源三秀義の旧領で、かの定綱、盛綱、高綱など兄弟たちの故郷ふるさとでもある。

その本郷山に、以前のままた古館ふるやかたがある。義経は貢ぎの荷駄や五百騎と共に駐とどまつて、ひたすら鎌倉から二度目の急使が訪れるのを待っていた。

十一月になった。

まだ来ない。

月も中旬ななかばに近づいたが、何の沙汰もないのである。

この間の彼の焦躁は、はた目にも窺やっれの見えるほどだった。すぐ目と鼻の先の京都では、法住寺殿の焼打ちとか、その他、限りない義仲の狼藉ろうぜきやら秩序の乱脈さが手にとる如く聞えてくるのに、鎌倉の方からの風のたよりには、

「院宣を奉じて、いよいよ鎌倉殿にも、軍勢を催されておらるるが、義仲追討の総大将には、やはり北条殿がお立ちになるらしい」

とか、また、

「いや、千葉ちばのすけ介殿か誰か、御家人のうち優すぐれた老将をさしそえて、御弟の蒲冠かばのかんじゃのり者り頼よりどのお立てになるそうだ」

などと真まことしやかなうわさが頻々ひんぴんとして伝えられ、その噂のうちに義経の事は、義経という名さえ語られていなかった。

鎌倉殿の弟君といえ、誰もすぐ蒲かばの殿とのかと合点する。その範頼のあることを知っても、義経という弟もあることは、まだ世間に知る者は稀まれだった。

名馬

一

あれほど義経に対しては、思慮をめぐらし過ぎるほど気をつかう頼朝も、同じ弟でありながら、範頼に対しては、さほどでもない。

「心して参れよ。陣中は、何よりも軍律をげんに。賞罰をあきらかに」
「はい」

「このたびの一戦こそ、大事なうちでも大事ないくさぞ。ひとり源家の興亡だけにとどまらない。天下はここで分れてゆく」

「よう心得ております」

「その心得顔が、まちがいのもと因だ。常々のごとき心構えではならぬ」

「はい」

「義仲もさる者ぞ。侮るな。あなど——木曾、北陸の猛者もさが相手であるぞ」

「張合いがあります。死にばえがございます。決してお名はげがしません」

いよいよ義仲討伐の軍勢が出発という朝方である。

頼朝は、華やかに扮装いでたした範頼を側近く招いて、門出の神酒みきをくみかわし、その後で、こんな事を云いきかせていた。

「そちを瀬田口の総大将に、義経を宇治川のほうの攻め口の大將に命じたのも、頼朝の心のあるところ、不覚をとるなよ」

この弟へは、何をいうにも気の措けおない姿である。

範頼もまた、何事にも兄への服従と慎みを怠らない。

故義朝の第六子にあたり、母は池田の宿の遊女とかいう。藤原範季の手に養われてきたが、頼朝の旗上げと聞いて、その翼下よっかに馳せ参じたのである。

「……不覚をとるなよ」

今、頼朝がそう云ったのは、義経に負れおくをとるな、という意味のものと、範頼はうけ取ったので、

「弟には負けません」

と、温順な彼も、いささか心外なような顔色を示して答えた。

すると頼朝は、そんな顔色を見てもやらず、頭から云った。

「——戦の駈引は、そちより、遙かに、義経の機略がたち優まさつておる。京に攻入る二つの攻め口では、瀬田より、宇治川のほうが難しい。それ故に、義経をさし向けたのである。不覚をとるなどは、その上にも、名折れをすなと申したのだ」

「はい。……分りました」

範頼は二言もない。

その他、細々と、注意をうけて、彼は出発した。——とはいえ、馬上、大軍の上に立てば、自ら威おのずかもある。彼は、将として弱いのではない。氣負けというか、兄の前に坐ると弱いただけだった。

義経のところへも、早、飛状が着いている頃である。

範頼と途中で会え。

攻略の軍議して、ふた手にわかれよ。

何事も、仲よく謀はかり合つてせよ。兄弟の不和は、敗れの因もとぞ。

——二人の兄として、頼朝はそういう点まで書き添えた。

範頼の立つた後から、なお、続々、関東の大名小名は、令をうけて、西へ上つてゆく。

——上る途中にはまた、必ず鎌倉へ立ちよつて、頼朝に謁し、各、
「生きて、再び帰らん心も候わず」

と、名残りを告げたり、

「屍は何地へ捨て候とも、名こそ惜しく候え。あわれ、口ほどに、よき死に方をしつると、必ず沙汰されてお見せ申さん」

などと、去る者、去る者の姿、悲壮でもあり潔くもあつた。

そのうちにも、梶原景季は、頼朝の前へ、別辞をのべに出たついでに、大胆な無心を申し出た。

「ご秘蔵の名馬生いけずきを、それがしに拝領させて下さい。このたび、宇治川の先陣をいたすに、この景季を措いて誰がありませんよう。——それには、生が手ごろの乗料とぞんじますので」

頼朝は、やや呆れ顔した。

生いけずきは、誰も知る頼朝が秘蔵の愛馬である。御家人の面々は、みな目をつけているが、

どんな功があつて望まれても、それだけは惜しんでやらなかった。

「胆太い無心をいうやつ」

呆れ顔が、やがて苦笑になる。

景季は、そこを押して、

「何とぞ。何とぞ」

と、頭かしらを下げた。

馬を乞うために、頭かしらを下げるのは、どんなに下げても、武士の恥でも卑屈でもなかった。

同時に、馬を惜しんでやらない大將も、決して物惜しみとは笑われなかった。

当時の武風である。その頃の戦には、馬の偉力は唯一の器械力であった。心ある武士ほど良馬を持つとうとした。世に聞えるほどな名馬とあれば争つて自分の料にしたがった。

わけて、こんど義経の手について、宇治川の渡河戦に当るものは、まずあの激流とあらゆる障しょうがい碍がいに耐え得るほどな馬をと、心懸けていない者はない。

奥州、東国は名馬の産地だし、坂東武者はみな馬術に熟練している。その中に伍して先

陣の名のりを克ち取るのは容易なことではない。

「おれを措いて誰が？」

と、景季の抱いているような自信は、それに加わる五千騎はみな持っているであろう。

人も人だが、馬も馬だ。

「いかがでしょう」

景季は、押強く、面おもてをあげて頼朝へ眉で迫った。

「生いけずき はいけない」

頼朝は、笑いだした。

「八カ国の大小名みな眼をつけおるが、あれのみは許さぬ。

蒲冠かばのかんじや者にすら与えずにあ

るのだ」

「さればこそ、たつて景季が望みでござる」

「いや、頼朝みずから出陣の日までは、厩うまやにおく」

「可あた惜！」

景季は舌打ちして、

「合戦中は、夜ごと、名馬が厩で悲しみましよう。この千載せうざい一遇ぐうの秋ときにつながれて置かれ

ては」

「云うわ、憎態にくていを」

頼朝は、愉快になつた。彼の押太さに負けてやりたい気がした。

「つかわそう」

「えっ、賜わりますか」

「——が、生 ではないぞ。生 にまさるとも劣らぬ磨墨するすみのほうを遣わそう」

「ありがとう存じます」

景季は、満足した。

誇らしかった。

「——宇治川の先陣は、おれのもの」

もう十分な自信があつた。

聞くならく、こんどの合戦に、鎌倉殿のお厩から曳き出された逸物には、義経の料にと

て薄墨うすずみ——乗更駒のりかえに青海波。

範頼には——霞いちかすみと月輪つきのお。

御家人たちのうちでは、熊谷二郎直実の権太栗毛は自慢の駿足であるから、こんども彼

を曳いたであろう。畠山重忠にも、秩父鹿毛かげとか、大黒人おおくろひととか、妻高山鹿毛めたかとか、評判な名馬があるので、さだめし選よりに選つて、競い立つて行ったにちがいない。

「だが、磨墨には、どれも及ぶべくもない」

箱根、足柄あしがらと、各 郎党や駒をひきつれて西へ急ぐ他の部隊をながめても、磨墨ほどな逸物は見あたらない。

景季は、途中、駿河の浮島ヶ原に、軍勢を休めて、磨墨に草を飼いながら、自分も草に脚を投げていた。

——すると彼方の道を、何者の部下か、三、四人して、生を曳いて通つてゆく。自分の眼のせいではないかと、ぬつくと起ち上がつて、

「……はてな？」

眸をこらして見たが、どう見ても紛れの無い、名馬生にちがいがなかった。

三

何か、景季からいいつかつて、駈け出して行った郎党は、彼方の道を、生いけずきを曳いて

通つてゆく者をつかまえて、訊きただしていたが、程なく、景季の前へ、駈け戻つて来た。

「やはり生 であらうが」

「左様でした」

「して、誰の部下だ、あの者たちは」

「佐々木家の御家人と承りました」

「佐々木……佐々木の誰」

「高綱ので」

「馬も高綱のものか」

「鎌倉殿から拝領なされたとかで、この毛艶けつやはどうじや、馬品の美しさよ、などと舍人とねりどもまで誇らしげに自慢しておりました」

「高綱はまだ通らぬな」

「やがて後より見えられましょう」

「……よし」

顎を振つて、また草のなかへ坐りこんだ。

景季の顔いろは穩おだやかでなかつた。

「あれ程、自分の所望したものを。……賜わらぬはぜひないにしても、佐々木の末弟などにおやりなされるは、当てつけがましい。ご偏頗へんぱなお仕打でもある」

死場所へゆく途中である。さなきだに血は荒ぶる。激し易くなっている。

「人の口端くちばにも笑われぐさだ。恥ある侍ふたり刺し交ちがえて、鎌倉殿へ、ご偏頗なお仕打のお返しをして見しようか。……いや待て。それとも高綱めが、生の事を知って、殿を巧みに泣き落したのかもしれない。とすれば、殿をお恨みしては相すまぬ。高綱をこそ」

諸将の部隊が過ぎてゆく。

景季は、待ちかまえていた。

そのうちに、佐々木隊が通った。高綱のすがたも馬上に見えた。

「おううい。佐々木殿」

景季が呼びとめた。

高綱は、列を脱けて、歩み寄つて来た。

「やあ、其許そこもとにも、このたびは源九郎様の手について、宇治川へ懸られるそうな。ひとつご陣じや、よろしく頼む」

「むむむ」

先の顔いろが明るすぎるので、景季は、自分の不快な眉や唇くちを一応処理して、笑いをにじみ出しながら云った。

「おたがいだ。ところで、佐々木殿、先にここを曳かせて通ったのは、生と見たが、お上から拝領なされたのか」

「あ。あれか」

高綱は、にっと景季のひとみを見つめながら、自分の頬のあたりを、右の掌で一つ打った。

「見つかつては是非もない。実を吐くが、他言して給わるな」

「戴いたのではないのか」

「どうして、あれを下さろうぞ。——出陣の真際、恥ずかしいが、良い馬に事を欠き、思案にくれたあげく、お厩うまやの御料一匹おねだり申そうかと考えたが、もし、下された馬がさほどの逸物でなかつたら、合戦に臨まぬうちから、我のみ負おれをとる。……ままよ、後でご勘当うけたら、功名と差引。討死いたしたら、香華の代りと、おあきらめ下さろう。……そう考えてな、盗み出して来たのだ。暗夜、ひそかにお厩うまやの内から」

「えっ、盗んで来たと」

「所詮、われわれ風情ふぜいでは、正直では名馬は得られぬからな。あははは」

「盗みおつたとは。——いや、押太さにも、上には上のあるものよ、アハハハ」
高綱は笑う。

景季も笑つてしまう。

手をたたいて、二人は笑つた。

もうそこには何のわだかまりもない。

「ご免。——また戦場で」

高綱は先に行つてしまった。すこし彼の方が人が悪い。

実のところ生 は盗んだのではない。やはり頼朝からもらつたのである。けれど頼朝に口止めされていたので、咄嗟とつさに出たらめを云つたのだつた。

隙すきのないように見える頼朝にも、相手の接し方に依つては、あれほど惜しんでいた名馬でも、つい与えてしまうぐらいな甘さもあつた。

木曾殿

一

ひとりの女性は、衣きぬを打被うちかついだまま、燈火ともしびから遠く離れて、泣き伏していた。黒髪のなかに埋うずめられている横顔の白さが、この薄暗くてまたどこことなく殺気のみなきつている殿中には、余りに白くおののいている。

「だまれつ。——妖怪のように細々と泣くなつ。泣くなら大声で喚わめけ」
義仲は、酒を仰飲あおつていた。

燈火のせいか、どす赤い顔に、眼が大きく光る。

年は三十一。巨軀きよくを持つている。

決して醜悪な容貌の部類ではないが、公卿や宮中の女房たちが恐れることは甚だしい。

「やめないか」

「……………」

そこに泣き伏しているのは、彼の妻というのも、気の毒な——前関さきのかん白基房はくもとふきのむすめであった。

義仲に懸想けそうされて、強奪されて来た妻である。ここへ来てからは泣いてばかり暮していた。——泣くもよしと、雨中の花を見るように眺めていた義仲も、やや、あぐねて来た眼いろである。

「どうしたな、使者は。……きようは昼にも立帰るはずだが」
つぶやいて、後ろうしろを見た。

三名の侍が、木像のように、固く坐っていた。

義仲の焦躁から出る——どうしたな——の嘆息とも眩きともつかない問は、夕方からの連発である。

答えようがなく、

「……されば、もはや」

と侍たちも、同じことを繰返すしかない。

「枕。……枕をもて」

ごろりと横になる。

「はっ」

と、侍のうちから一人が起ちかけると、義仲は、強く手を振って、

「いい！ 起つな！ そちにいいつけたのではない」

と、泣き伏している人の黒髪を指さして、

「おいつ、枕を取つて来い」

「……………」

「関白むすめの女こしもとだから侍こしもと女のするような業わざはせぬというのか」

癩癖かんぺきの半分は酒の声である。

こう怒つてばかりいる彼ではないのであるが、きのう今日はわけて、彼の性格の良いところは少しも出さなかつた。

いやもう少しさかのぼ遡つて彼を観ると、この夏七月、兵を擁ようして、堂々と、平家が退去した後へ入浴じゆらくして来た時は、得意でもあつたろうが、もつと落着きもみえ、こんな魁異かいいな大将には思われなかつた。

それが、日の経つにつれて、狂暴になつた。義仲の性格にも、もちろん悪い血があればこそだが、ひとつにはこの京都に平家が、残して行つた文化の残滓ざんしやら人心の悪気流あくきりゅうやら政治の組織そくしやらも、義仲の神経をひどく翻ほんろう弄ろうしたり疲つからせもしたのである。

たとえば、院の女房たちにしても、彼が衣冠した姿を見れば、おかしくもないのに笑う。

笑いこけて隠れこむ。

公卿堂上人の冷たい目も、彼の前には立たないで、薄暗い物陰からのみ隙見している。「いかにして笑われまいか」

だけでも、木曾殿の神経は疲れたにちがいない。

それを通り越したので、

「笑わば笑え」

彼は、^{はばか}憚らなくなつた。木曾山中の飛鳥走獸がそのまま院中をも洛中をも横行した。

為に、都の文化も秩序も乱脈に陥つたが、実は、義仲もうろたえに囲まれていた。彼は渴望していた都の文化や中央の府が、こんな厄介なところとは予期していなかつたのである。

「こんな厄介ものを、平家も恣々とし、頼朝も欲しがりぬいておる。ばかなやつら」

もう抛り出してしまいたい。ほんとに彼はそう思っている。彼には割あいには偽りはない。

だが、頼朝の権力を入れる事は意地でもできない。平家に負けて押出されるのもなお嫌である。頑^{がん}としておれは頑張る。——それが彼の肚だったが、刻々、周囲の形勢はゆるし
そうもない。それも彼は自覚していた。

二一

夜も更けた。

どこかで馬の嘶いななきがする。

宿直の登あしおと音が、つづいて聞えた。宵から、うたた寝のまま横たわっていた義仲は、

「なに、覚かくみよう明が帰ったとか」

がぼと起きて、坐り直した。

「ただ今、戻りました」

大夫房覚明は、旅装も解かず、そこへ来て、燭から遠く坐りかけた。

「寄れ。もそつと近う」

待ちかねていた義仲は、さしまねいてすぐ訊いた。

「どうだった、平家方の意向は——。和議は調ととのったか」

「調べて参りました」

覚明の答えに、

「そうか」

と義仲は、まずほつとしたと云わぬばかりの顔いろだった。

義仲は今、窮地にあつた。

東軍は大挙して、瀬田口や宇治方面から迫ると聞えてくるし、平家も水島のたいしやう大捷に勢いをもり返して、京都奪回を目標に、潮のうしおごとく、山陽を北上して、先鋒の一部はすでに、兵庫に上陸して一ノ谷あたりに集結しているという。

この険悪な象のなかに、義仲は年暮くれから初春はるを迎え、何の策もなく、わずかの酒の勢いで、

「なんの、頼朝ずれが」

とか、

「範頼、義経ごときが」

とか気焰のみ上げていたが、朝夕、彼の呶号が多くなつて来たのは、もう酒では誤魔化しきれない現実が、ようやく、彼の目にも、さし迫つて観みえて来たからであつた。

——で、義仲は、腹心の大夫房覚明を使者として、平家方へ、和睦わぼくを申し込んだのである。

「背後の憂いさえなければ」

と彼は、この苦しい体制で、今の窮地が、打開されるものと信じていた。

われながら、窮余の一策、とは思ったが、武門の醜態とは考えなかった。

彼の擁している北陸や木曾の猛兵のあいだには、まだ新しい「武士の道」が昂揚されていなかった。鎌倉に集まった新時代の若武者たちが、早くも、次の時代をうけもつ資格を自覚して、互いに、節義を磨き、恥を尊び、文化の建設と歩調を一にしているのと較べると、彼等はただ強いばかりを能として、そのくせ、その勇猛をも弱める美衣飽食や女色には、まるで脆い弱点を、余りに多く持つていた。

義仲をはじめ、その部下は、多分に人間的で、赤裸ではあつたが、武士としては、匹夫の勇にすぎなかった。軍としては、当然、この京都を維持しきるだけの性能はなかった。

「——やすめ。大儀だった。細かい評議は明日としよう」

覚明の報告をきくと、義仲は、寝所へはいった。

翌る日。——それは元暦元年の正月十日、義仲は、後白河法皇を奉じて、北陸道へ落ちようと企てたが、それは、失敗に終つて、その日も、彼の身边は、酒と、区々な軍議に暮れてしまった。

すると、夜に入つて、近江へ入れておいた物見から報らせがあつて、

「宇治口へまわつた義経の軍勢は、わずか一千余騎にすぎない」

と、いう事が聞えてきた。

次の日の朝、また、

「近江に集結した東軍も、思ったほどの大軍ではなく、士気も至つて奮つていない」

との報らせだつた。

義仲は、日のたつほど、

「思ったほどでもないらしいな」

と、樂觀して来た。

三

こういう際にまた義仲は、不自然な榮進をした。征夷大將軍の宣下せんげをこうむつたのである。

今にもと気づかわれた東軍のうごきも、その後は、思いのほか緩慢である。

「宇治川の急流や瀬田の要害を見ては、坂東武者も、さすがに二の足をふんだにちがいない」

義仲は、その天嶮を恃たのみにしていた。洛中の情勢も平穩だし、院のお覚えもよいし、すべてが好転しているかのように、自分の位置を、ひとまず、安心しきって来た。

その心理が、

「河内かわちを先へ討て」

となつた。

河内にも、自分の敵が、蜂起ほうきしていたのである。

その主謀者は、頼朝を離れていちど自分につき、また、不平を抱いて自分から離反した新宮十郎行家だつた。

兵七百を割さいて、樋口兼光ひぐちかねみつを、その方へさし向けたのである。

——後に思えば。

この七百の兵力を割いたのは、彼にとって重大な用兵の失策であつた。なぜならば今、洛中にある彼の兵力は、三千に足らなかつた。

今井兼平を将として約九百の軍勢を瀬田の防備に向け、また根井行親ゆきちかを大将に、約千

二百の兵を宇治のふせぎに繰出した後は、わずか三百ほどの兵しか京都には残っていないなかつた。

その三百の兵をひいて、義仲自身は、院の御所を守護していた。

心ある者の眼には、

「あの將軍の心には、一体、何を恃たのむものがあるのか？」

と、怪しまれるほどだった。

また、時の人々は、彼が平家へ和睦わぼくを申し入れた心理をいぶかしい事として、義仲の心をいろいろに忖そんたく度した。

平家こそは、源氏にとつて、石にかじりついても屈くだしられない累代るいだいの仇敵ではないか。何のために源氏の兵は、きようまで臥薪がしんしてきたのか？

そう問といたしたのであつた。

けれどそれは、血縁というものの特殊な感情を解とさない人のことばであるという者もある。

血は濃いものであるが故に、その血の近い同族が争うことになる、他人と他人の憎悪よりは、烈はげしいのが常である。傍はたからは窺うかがい知れない血液と血液とが搏はく撃げきする。利害に

かかわらず共倒れも怖れないところまで行く。

だから、同族中で、その主体たらんとする一人があれば、自分の腕と知りながらも切つて取捨てる。自分の指と知りながらも断つて、患を除こうとする。——古来、主体の人が、冷血といわれるのは、そういう思いきつた事をも敢然となしうる強力な精神が、その覇業のうえでは認められても、民衆の道徳や人情には、受けいれられないためであろう。

そんな公卿たちの評も聞かれるほど、院の御所も平穩であつた。洛中の庶民も、戦争に馴れて来たのか、こんどは平常とそう変りなく、商いもしていた。

けれど、眼を転じて。

瀬田口の前線を見れば、その水路も道もまったく遮断されて、湖をよぎる鳥影もなかった。

さらに、宇治川方面の防禦のきびしさはいうまでもない。きのうの朝も今日の朝も、雲は低く、ひょうひょうと寒風をふき落して、橋板の引かれた橋杭に、白いものさえ積つて、陽が高くなると消えた。

一

義経は、河辺に立つて、

「水練の達人なものは名のり出いでよ。河底へ潜もぐつて、逆茂木さかもぎへ縦横に張りめぐらしてある荒縄たを断ち切れ。——われと思わんものはないか」

と、味方を顧みて云った。

そのことばも終らないうちに、彼方あち此方こちで、

「おうっ」

「おお！」

と、兵つわものばらの奮ふるいたつ答こたえが聞えた。

渋谷右馬允うまのじょうのそばにいた一家臣などは、具足を脱ぐのに誰よりも迅速だった。真つ裸になったかと思うと、義経の前を駈けぬけて、もう眼の前の奔流へ跳び込もうとしかけた。

「待て待て」

義経は、手をあげて、後からつづく者へも、注意した。

「春とはいえ、水は冷たい。雪のある山々にも近いゆえ、恐らくこの流れは身を切るほどだろう。そち達、水練には巧者でも、素肌では、寒烈な水底で、長い働きはできまいぞ。肌着のみは、着けてはいれ」

宇治川も変遷へんせんしている。

当時の宇治川は後の世のそのように、悠々と穏やかな相すがたをもった大河ではない。河幅もずつと広く、河原は年ごとの洪水にまかせ、流れの迅き深き峻しき、さながら、原始時代のままだった。

ただ幾分か、人工が加えられてある所は、今、義経が立っているここ平等院の北の辺り——土民が富家ふけの渡しと称よんでいる岸だけであった。

ここには、往來のため長い橋が架かけられてある。

しかし橋板はもちろん対岸の敵がのこらず引いてしまった。また、渡河の攻め口としては、地形や水勢から見ても、この附近しかない事は分っている。敵は、この橋杭はしくいを中心として、上流下流の数町にわたって、あらゆる障しょうが碍がいを水底に設けていた。

「なんの、これしきの河」

坂東武者はみな氣負いたつて、義経の令をむしろもどかしげに待ち焦^{こが}れていたが、義経は、

「いや、難しい」

と、正直に自然を怖れ、先に、馬を降りてしまったのであった。

兄の範頼を瀬田にのこし、彼の軍は、伊賀路から笠置^{かさぎ}を経て、宇治に屯^{たむろ}し、きよう正月の二十日、いよいよ渡河を決意して、この富家の渡しまで押出して来たのである。戦略上、兄の範頼のほうでは、

「両軍、合せて四万」

と、称^とえているが、実数はその十分の一、四千余りの兵数でしかなかった。

それを義経が、正直に、

「瀬田口に二千五百を向け、宇治川へは一千五百をひいて行く」

と、誰にも、ありのまま実数を云いふらしたというので、範頼は腹を立てて、

「九郎殿は、余りにも兵法の弁えがなさすぎる。あんな事で、宇治川の備えを破れようかと、陰で怒つたというくらいである。」

実際兵力の不足は範頼も義経も苦心していたところだった。

木曾方も、寡兵^{かへい}であるが、守備よりも攻撃する側のほうが、それに数倍の兵力を要することは戦の原則である。

それなのに、義経はなぜ、敵方の士気をよろこばせるような味方の弱点を、わざと云いふらしたのだろうか。

彼の答えは簡明であった。

「——義仲を、都のうちに、繋ぎ止めておくための流言にすぎぬ。兵法は嘘のみと思うは誤り、正直もまた兵法であるのだ」

二

水中にはいった半裸体の兵^{つわもの}ぼらの使命は、生死を超越しなければできない作業だった。ひろい奔流の諸所には、うかとすれば、すぐ生命^{いのち}を捲きこんでしまう恐ろしい死の渦が巻いている。

その水はまた氷の如く冷たくて手足の知覚もたちまち失われてしまう。

彼等は、その寒さや危険を冒^{おか}しながら、身を沈めては、河底に張りめぐらしてある無数

の縄を断ち切った。乱杭を抜いて押し流したり、割竹の堰せきを破って、柴の束や材木の障しょう碍がいなどを取り除いたり、浮きつ沈みつ、さながら神のような姿で働いていた。

「あれよ、下流しものほうへ、また一名流されたぞ。誰ぞ、救ってやれ」

義経は、それらの名もない雑兵の必死な働きを見ていると、眼が熱くなった。

対岸の敵は、

「すわこそ」

と、射手いてをそろえて、河中の兵へ、箭やをあげせかけた。そのために、作業は一しお困難を極め、最初にはいった工兵の半数はもう死体となって流されていた。

もちろん義経の身をも、矢うなりは絶えまなく掠かすめてゆく。

「楯たてのお内へ」

と、しきりに、周りの武将たちが、さつきから諫いさめていたが、耳もかさず、河中の兵に、熱い目をそそいでいた。

「——御大将が見ている」

死も生も考えない決死の兵ではあるが、義経がそこにあることは、勇気を百倍にさせた。同じ死ぬにも、飲んで死ねるのであった。

孫子そんしの曰う、

用兵の極致は、兵をして、

歛んで死なしむにあり。

意識的でなく、將としての義経の言動には、そのことばと合致するものがあつた。

戦いくさに立つ運命はひとつである。ここに立つからには、死は、怯きょうゆう勇無差別に向つてくる。

歛んで死ねる兵は、末代、そのたましいに生きがいの歛びをつないでゆくだろう。

義経は、ひとつひとつ、矢に中あたつて、浮いては流れてゆく死骸に、

「おまえ達のいのちを、この後とも、あだにはせぬぞ」

と、胸に念じた。

「重忠、重忠。——陸おかからでは手ぬるい。あれまで射手をすすめて、敵の足搔あがきせぬまで、射て射て、圧倒してしまえ」

矢風の中からいう彼の声は、自分も身を挺ていして、すでに敵前で戦っているような悲調とあらい語気をおびていた。

「抜かりましたっ」

畠山重忠は、そう云われて、初めて味方の掩護えんごが、まだ手ぬるいものであつた事に気がついた。

「橋はし桁げたへ立て。あれなる橋桁の上を進んで近々と射よ」

と、自分の隊へ、大声で命じながら、手を打振った。

すると、熊谷直実の部隊も、渋谷右馬允うまのじようの隊も、平山武者所の手の者も、いつせいに弓を持ったまま、橋板のない橋桁の上を、先を争つて駆けて行つた。

弦音つるおとをそろえて、そこから対岸の敵へ、猛烈に射返した。

そこからの掩護は的確にききめがあつた。たちまち、敵の矢数は減つて来た。飛んでくる矢にも最初ほどな弓勢ゆんぜいはなくなつた。

河中の兵つわものたちは、ほとんど、目的を達して、瀬や淵の水深まで測つたうえ、紫いろの顔をおかして、やがて続々陸へ這いあがつて来た。

三

その機しおに、対岸でも、布陣あつたを革あらめているらしく、しきりに兵馬の移動がながめられたが、

やがての事、前にもまして弓勢が、河面も晦くなるばかり箭を射かけて来た。

「箭道に立つな。上流へ寄れ。一樣に各 駒の列を、もそつと、上流へ並べ立てい」

義経は、馬上から指揮に声をからしていた。われこそ一番にと、流れを前に、河原へむらがり立つた各部隊の騎馬武者たちは、ひとしく鎧からのび上がって、彼の高く振る手を横にながめた。

「上流へ寄れ」

「もそつと寄れ」

千余騎の横列は、馬首をそろえたまま、順に横へ横へ押しあつた。そして約半町ほど陣列が移ると、

「それつ、押渡れ」

と、各隊の将が、義経の手を遠く見て、一斉に令を下した。

ざんぶと、一列にしぶきが上がった。

大きなうねりの波が河面を岸から拡げてゆく。味方の鎧と鎧、鎧の袖と袖とが揉み合い、もつれ合い、真つ黒に、激流を埋めて行つた。

「——今だ！」

平等院の小島ヶ崎から、一騎、鞭を打って駈けて来た侍があつた。

するとまた、一方の森陰からも、征矢そやのごとく河原へ向つて駈け出した一騎がある。二騎は近づいて、駒足をそろえた。そして、顔を見あわせた。

「やあ、梶原どのか」

「才才、佐々木どのよな」

さすがに、今日のみは、にこと笑えみあう余裕も持たない。

景季は、ひそかに、

「高綱におくれてなろうか」

と、思っているし、高綱も、

「彼に名はなさしめぬ」

と、この宇治川へかかる前から固く自分に誓っているのである。

わざと、部隊を離れて、ほかに渡る戦友の影もない下流の水路を選んだのも、約束したように、ふたりの考えが暗あん合ごうした。

馬の力が弱ければ、勢いこの激流では、河のまん中まで進むうちにも、かなり下流しもへ流される。それ故に、障害物を取り除いた水路よりもだいぶ上流かみへ移動して大勢一かたまり

に渡河にかかったものであるが、佐々木高綱と梶原景季のふたりは、十分、馬の力に自信があつた。

——で、むしろ味方同士の邪よこしまげがない下流しもを選んで、自分一騎ひとだけとはと、やにわに丘の陰から駈け出したのであつたが、何ぞ計らん、そう考えた者は、自分だけではなかつた。

「景季もやりおる」

「高綱もぬからぬ男」

無言のうちに、ふたりは負おくれを誠まことめた。もつとその感想を露骨ろこつにいうならば、お互いに自分の相手を、さすがと尊敬し、小癩こしやくなど憎み、そして油断ゆだんならじと怖れ合つた。

悍かんき気の立つた生いけずきも磨す墨すみも、水面みのもから立つ狂風きやうふうに吹かれると、たてがみを強く振つて、いななきぬいた。

生 は、水をきらつて、どうしても河へはいらないのである。

景季の磨墨は、駈け足をもつたまま無造作に浅瀬あさせを蹴けだててもうぎんぶと平首へいすいのあたりまで流れに沈んでいた。

「しめた」

景季は、巧みに、水馬の技術をこらして、楽々と馬を泳がせながら、後ろの岸をふりか

えつた。

高綱はまだ、焦れ狂う生の鞍あんじょう上に、齒がみをしながら手綱をさまざまつかいわけていた。

四

強く、一鞭加えると、生は勢いよく水へ向つて駈けこみ、高綱は、真つ白に飛沫しぶきをかぶつた。

——が、すでに景季の磨墨は、数十間先をとつて、あざやかに泳ぎ渡つてゆく。

「不覚。おくれでは」

と、高綱はあせつた。

「あれほど、広言吐いて、ご愛馬を賜わつておきながら、先陣は景季に取られたりと聞えては、一代の名折れ」

と、恥を思つた。

兜かぶとの眉庇まびきしを俯向けて、高綱は必死の唇くちをむすんでいた。

河波は、横ぎまに搏つてくる。岸を離れるほど流れは激してくる。怖ろしいのは、渦ま
くそれよりも、寸断された障碍の縄が、なお藻のように浮游しているの、それが馬の四
肢に搦みつくことであつた。

「おおうい」

「えええい」

「おおうい」

その時、上流から乗り入れた千余騎は、一団また一団、乱れ合つて、波濤とたたかう無
数の筏のように、河面を埋めて、次第に下流へ下流へと流されて来た。

景季、高綱の二騎も、やがてその馬群のなかに巻き込まれていた。もうこの大河の一番
乗りは景季ひとりが相手ではなかつた。高綱ひとりが目標ではなかつた。——三浦、熊
谷、畠山、足立、平山などの諸将をはじめ、その部下にいたるまでが、われ負けじと、
競つていた。

義経もその中であつた。

畠山庄司重忠は、自分の功名は捨てて義経のそばへ、ひたと駒をよせ、義経の司令と共
に、声を援けて、渡河中の全軍へ、始終、水馬戦の注意をさげんでいた。

「——馬と馬とは、寄りおうて、馬うまい筏かだを組み渡せよ。健つよき馬は上流かみて手に泳がせ、弱よき馬はゆるやかに、その尾について、無理むじさすな」

矢うなりは、風をきる。波しぶきは、声を消してゆく。

義経と重忠とは、時折、渦まく濁流のなかに駒を止めて、全軍を見まわした。一兵でも惜しむように、溺れる者や、矢に斃たおれ去る者を、眼に傷いたみながら、なお声をふりしぼって、水馬に馴れない兵たちに教えた。

「——馬の足の届くまでは、手綱をゆるめて泳がせよ。手綱強めて、誤あやちすな。尾口沈まば、前輪まえわにすがれ、水あし急に塞ふさがれなば、馬の三頭さんずに乗下がり、鞍つぼ去つて水を通せ」
重忠が声を疲らせてしまうと、義経がまた云つた。

「——敵は射るとも、河中にて、弓は射返すな。うち俯ふしすぎて、兜かぶとの頂辺てつべんを射られるな。水のうえにて身づくろいすな。物の具すきまに透間すきまあらすな。——弓と弓とを持合うて、前なる馬の尻輪しりわに、うしろの馬の頭を持たせて、息をつがせよ、息つぎ合えよ。——人の馬にからみて二人ながら押流されるな。逆さかうず渦のながれに溺れかけたる友を見れば、弓を差伸べて救すくい合えや！」

こたえる諸声もろこゑは、雲くもに飢うし、いななく馬の声は、宇治川の瀬々に、白い波がしらを寄

せに寄せて行く。

先だつ群れ、後れてゆく群れ、たくさんな馬筏は、はやくも河のなかほどまで押し襲せた。

敵は射る。

まるで驟雨のような矢であつた。

——と見れば、一騎は、すでに馬筏の先鋒を離れて、はや、敵の顔もあざやかに見える岸近くまで進んでいた。

梶原景季の磨墨である。

「オオイっ。梶原っ」

高綱は、そのうしろに迫りながら、呼びとめた。

五

うしろの高綱は、また、

「やあ、危ういぞ梶原。この大事な河渡しに、鞍踏み返して溺れたら、敵味方の笑われぐ

さ。——腹帯を締め直さぬか。御辺の馬の腹帯が弛ゆるんで見ゆるに」

それには景季も、ためらわずにいられなかった。

彼は、弓を口にくわえて、鐙あぶみに足を踏んばった。そして鞍腰くらこしを上げながら、腹帯の結びめを詰め直していたが、その間に高綱は、先を取って、河を打渡ってしまった。

生いけずきは、水を切つて、対岸へおどり上がった。

「——佐々木四郎高綱先陣。——この宇治川の先陣、佐々木四郎高綱っ」
呼ばわる声と共に、そのすがたは敵の中に没していた。

「してやられた!」

景季は、歯がみをしながら、二番目に匆はね上がつて、そのまま敵の中に突入した。

三番四番はもう誰とも分らないほどだった。鼻さきを揃そろえた悍馬かんばの群むれは、すさまじい武者声に乗せて敵の正面へぶつかつてゆく。

これまでのあいだ、敵もむなしく見ていたわけではない。主将は、木曾方でも聞えのあ
る根井行親ゆきちかだし、部下にも強者つわものは少なくなかつた。

けれど時代の黎明れいめいを意識した新鋭の若さと、木曾軍の強さとは、比較にならない違いをこの実戦で見せた。

戦う上に全体的な信念を持つ兵と、戦うにただ個々の猛勇と個々の結果しか考えられない兵との相違である。

決死の渡河を行つて来た敵を見ながら、前線に射手をならべて、矢ばかり射ていたのも不覚の一つであつた。

それに反して、義経の兵は、人馬共、濡れねずみのまま、
「息をつかさな」

とばかり追撃また追撃して——一部は木幡こぼたから醍醐路たいごじへと追いまくし京の阿弥陀ヶ峰の東に出で、また他の一部隊は、小野から勧修寺かんじゆじを追いかけて七条へ突入した。

深草や伏見辺へ、少数で迷い出た兵もある。何しても、逃げる敵は道を選ばないので、急追した義経のほうも、八方へ分裂して、京都へはいつた。

宇治川の敗報を知ると、義仲は、

「すわ」

と、今さらのようにあわて出した。彼の面上には、すさまじい自暴自棄のいろが漲みなぎっていた。

その血相をもつて、彼は、院の御所へ駆けつけ、法皇に対し奉つて臨幸きようせいを強請きやうせいしていた。

けれど法皇には、お肯きき入れがない。とやかく立ち騒いでいるうちに、

「はや、敵の先鋒が、六条河原のあたりまで来ています」

との声に、

「これまで」

と、義仲は大きく喚わめいて、手勢しゆぜいわずか四、五百騎ばかりで、河原へ向って行った。

そこで散々に敗れた彼は、粟田あわたぐち口から近江へ落ちて行った。瀬田の自軍と合流する考

えであった。——けれどももう自分の運命は分っていたものとみえて、蹴上けあげの坂に立った時、

洛中を振りかえって、

「幾月あれにいたろうな」

と、側の者にたずねた。いつになく余り素直な義仲の顔いろだったので、侍臣はふと涙を催したそうである。

一路通天

その日、院の御所はかたく門をとじて、ただ戦の成行きを、戦を外にひそと見まもつていた。

すると門外に、どかどかと蹄の音が聞えたので、近侍の公卿たちは、

「さては、暴兵が？」

と、はや顔いろを失つて、法皇のお座近くにかたまりあい、息をこらしていると、何やら外では高声に呼ばわっているのを、耳をすましてみると、

「これは、鎌倉殿の代官として、御院宣をかしこみ、洛中守護のため、宇治川より木曾勢を破つて、ただ今馳せ参じた頼朝が舍弟源九郎義経です。——洛中諸所もはや平穩に復し、火災もこれなく、庶民もみな戸をひらき、町の往来も常のごとく見えますれば、何とぞ、御心やすらかに思し召されますよう——右の趣、奏聞の儀、願わしゅう存じまする」と。

誰とはなく、院に仕える者の下々にいたるまでが、一斉に、わあつという声をあげた。闇の底へ陽の光がさしたような歓声であつた。

法皇にも御眉おんまゆをひらかれた。うるわしい御気色みけしきのうちに、御座を立たれた。院のご門はひらかれ、

「――通れ」

と、ゆるされた。

主従は六騎だった。

義経以下、あわただしく、門外に下馬して、畏る畏る通ってゆく。

中門おんの外の御車宿おんの前に、肅として、立ち並んでいた。

法皇は、その骨がらをご覧の上、一同の年齢や姓名、住国などをご下問になって、

「みな若いのう。どれも雄々しき面だましい。恃たのもしげな益良夫ますらおではある」

と、近側へ仰せになった。

義経主従は、面目をほどこして退出した。そして、当座の兵舎まで戻って来ると、辻々に立ちむらがつた民衆は、手をふり声をあげて、彼を歓迎した。

その頃もう、瀬田、石山方面の捷報しょうほうも洛中に伝わっていた。

義仲の死が、確報されて来たのは、二十三日の晩であった。粟津ヶ原で、今井兼平とわずか二騎となって、あわれな討死をとげたと聞えた時は、何とはなく、戦捷せんしょうの将士も、

儂^{はかな}いものを思わせられた。

宇治川以来、ここ三日二晩というもの、義経以下の将士みな、ほとんど一睡もしていなかった。——で、一夜の眠りは、何よりも大切な急務だった。

ところが、二十五日の朝となると、誰の口からともなく、

「平軍が大挙して来る」

と云いふらされた。

義経は、仮の兵舎に一夜をやすんだが、起きぬけに、ぎくとした。

彼が、心ひそかに、惧^{おそ}れていたものは、味方の兵力に十数倍する彼の一挙に、入^{じゅらく}洛を図

つて来ることだった。

元より平家の大軍も、彼の武勇も恐れはしないが、義経は、その時機と、攻守の立場の逆になるのをかねてから惧れていたのである。

義経は、どこまでも、

「攻めるに利」

と、信念していた。

またそれが、兵法の原則でもある。この攻勢が、取れない場合、あらゆる味方の不利と

苦戦は避けられないものと考えていた。

しかし、周囲の政治的事情は、義経が逸るはやように、この際、迅速も果断も必要としていないかのようになり、緩慢であった。

二

義経は思う。

もし宇治川で手間どって、ここ三日も入洛が遅れていたなら、平家の先鋒が自分等より先に都へはいつていたかも知れない。

その惧れは、今も決して解除されていなかった。屋島から兵庫港に上陸した西軍は、一ノ谷に城廓をかまえて、虎視眈眈こしたんたんたるものがある。

きのう今日の、微妙な政治的のうごきは、そこまで移動して来た颱風の余波ともいえる。朝廷におかれては、連夜のご評議と洩れ聞えているが、容易に、範頼と義経に対して、今後の方向をお明示にならなかった。

今なお、勅使を平家につかわして、何とか、両軍の和議の方法を見出しては、と唱える

公卿たちすらあるらしかった。

義経は、氣を揉んだ。

範頼のりよりに諮はかつてみても、範頼は煮えきらない性たちだし、何よりは、政治的な機微きびがわからない。

「鎌倉どのへ、早打ちを立て、そつと兵をのぼせ給わるように、わしから申し上げてあるから、たとえ平家が襲よせて来ようと、ここ半月も固めていさえすれば、そのうちに援軍が着くであろう」

などと云っている。

何たる悠長さ！

義経は、なおさら、東軍の危うさを思わずにいられない。

「いや、今こそ、ここ一日か二日が、源氏全体の興亡のわかれ目だ。時代の峠だ」と痛切に思う。

こんな急激な転換期を見ながら、十日も半月も、悠々と、空しく待っていられようか。いや、何事にも大事をとる筈の頼朝は、中央の政治的な雲行きいかんの如何いかんによっては、

（——そう面倒ならば、一応軍を退ひいて、鎌倉へひきあげろ）

と、云つて来ない限りもない。

それやこれや、気ばかり焦心あせつているところへ、平軍が大挙たいきよ入洛じゆらくして来るといふ今夜のうわさである。

「そうだ！」

彼の座所へ、侍が、燭ともしびを運んで来た頃には、彼の面おもてに、何か、悲壮な決意がすわつていた。

「——まだ鞍馬にあつた幼年の頃、夜ごと鞍馬谷へわしを誘い出して、わしの幼い魂へ、兵学を教えこんでくれた父義朝の遺臣たちがよく云つていた」

燭ともしびの白い灯を見つめながら彼は純白な幼な心に返つてそれを憶おもい出していた。

（——悪い世をよい世の中に革あらためる。それが源氏の再興しやにむでなければなりません。けれど、新しい世をうち建てるには、必然、旧い勢力と、遮しや二無二戦むにむにつて、それを打破してゆく人が出なければできない。それは時の潮の真まつ先に立つ人だ。その人に降くだつた天の使命だ。打破しては創たて、壊しては建て、その人は右顧うごさへん左眊さめしてはならない。一点の私もなければ民衆はついてゆく。そうしてただ、一名の者がほんとに国の人柱となる気ですすめば、それについてゆく民衆のあとに、自おのら新すしい世の相すがたも組織もできてゆく。……が、これは賢

い人にはできない。なぜならば、いずれにせよ、旧勢力からふるい落される無数の人々から恨みをかう。……故に、英雄の末路はおよそ悲運ときまつたものです。けれどもそういう人も出なければ真の建設はできない……。あなたは、生涯の無事をお祈りなさるよりも、甘んじて、人のなし得ない天の使命をうける人とおなりなさい」

三

ふと、めいもく 瞑目からさ 醒めると、彼は不意に立ちあがって、

「高綱はおらぬか」

と、妻戸口を出て、辺りへ呼んだ。

ここの仮の兵舎は、かつて平家のなにかしが住んでいた館やかたとみえ、邸内はかなりの兵を入れるに足り、厩うまやの棟むねも豊かにとつてあつた。

「お召ですか」

高綱が駈けてくる。暗い地上にうずくまって彼の姿を見あげながら云う。

「景季もおるか」

「おりまする」

「四、五名供をして来い」

「どちらへ」

「蒲殿かほどのの陣所まで」

義経は自身、厩の前まで歩いて行って、馬を出させ、もう二条の方へ急いでいた。景季、高綱たち五、六名が、後から徒歩かちで追ってゆく。

するとまた一騎、追いかけて来た。畠山重忠であった。

「取急いで、お耳にまで」

と、重忠が駒を降りようとすると、

「下馬に及ばん。何か」

義経から駒を寄せた。

「うわさの実否を確かめんものと、洛外遠くまで出向いて参りましたが、平軍入洛じゅうらくの事は、虚報あすにござりまする。明日とも知れませぬが、こよいはまだ……」

「そうか」

義経は、少し眉をひらいて、

「いずれにせよ、わしはこれから蒲殿へお目にかかりに参る。そちは陣所へ帰つてよい」
別れて、また急いだ。

かばの蒲冠者の本陣を義経が訪れると、範頼は、

「またか」

と、云わぬばかり、かたわ傍らの梶原景時の顔を見た。

義経はもう通つて来た。

範頼に対しても、義経は異母弟おとうとであるし、こんどの軍の編制でも範頼は総大将であり、

彼は一方の指揮官でしかない。

当然、義経は、何をいうにも、そういう礼と格から云わなければならなかった。

「平家方の軍勢が、入洛の姿勢をもつて、こよいにも、動きかけているという情報は、もうお聞き及びとぞんじますか」

義経が云いかけると、

「風説にすぎない」

と、範頼はすぐ打消した。

「うわさは、虚報だそうです。しかし、それで安心はなりません」

「備えはできている」

「守備は不利です。ましてこの洛中にあつて、この小勢では」

「九郎殿にはまた、ここを出て、攻勢に向えと、短気をすすめに見えられたか」

「これで三度、くどいとお思いになりましようが」

と義経は、自分の主張を、耳の熱するまで説き出した。

けれど範頼は、

「院のお沙汰のないうちは」

と、彼と一致する容子もなかった。そのうちに鎌倉殿のご返事もあろうなどと、依然として、悠長なものだった。

その悠長にかまえている事のいかに危険であるかを、義経は泣いて説破した。ついには、ことばも激越になってくると、範頼は、

「九郎殿。ではお許は、院のお沙汰も待つに及ばぬ。鎌倉殿のご意向にもかかわるなど云うのか。この範頼に、強^しいて、不逞^{ふてい}な行動をとれとすすめるのか」

と、云った。

義経は、口をつぐんだ。

そして悄然と、二条から戻つて来る頃、夜は白みかけていた。

四

この日の朝。

義仲以下の首を、六条の河原に梟^かけるため、檢非違使^{けびいし}等の役人は、まだ暗いうちから獄門の場所へ来て、指図をしていた。

その人声を振向きながら、義経の馬は、七条松並木のほうへ曲つた。すると、河原の下から、

「九郎様。九郎様つ」

と、にわかにな声をあげて、追い慕つて来た男がある。

義経はふり向いて、

「やつ、吉次ではないか」

と、眼をみはった。

吉次は、馬前に両手をついて、

「お出ましと窺うかがい知つて、昨夜からお帰りの途中を待っていました。何かと、その後の事どもお耳に入れとう存じます。ご陣所まで、お供仰せつけ下さいませ」

前後には、人がいる。義経にも憚られた。

「むむ。参るがよい」

そのまま吉次をつれて、駒は急いだ。——と云つても、七条の陣所はもうそこに見えていた。

人を払つて、義経は、戻るとすぐ一室へ吉次を通した。吉次もきようは十分、義経の立場を察しているらしく、相手にとつて無用らしい言は費やさないように慎んでいた。

「ここ数日が、大事な山、何かとご苦衷くちゆうのほど、陰ながらお察しいたしております」

「そちは、以来、京都にいたのか」

「いえ、ずっと、奥州へ帰つておりましたが、去年、木曾殿の攻め入った頃、ちようど都へ上る用があつて、あの兵燹へいせんにめぐり会い、思わず足をとめているうち、軍勢をひきいて、あなた様にも、鎌倉をお発向たちむきと聞き、再度のお目どおりを楽しみに、お待ち申していたわけで」

と、吉次はいつも変わらない自分の誠意をまず相手に示してから、

「時に、ゆうべ蒲殿とご談合の末、平家の機先を制して、一ノ谷のご進軍の議は、ご意見一致なさいましたか」

と、訊ねた。

義経は、おどろ愕いて、

「どうしてそちは、左様な機密を知っておるのか。わしと蒲殿との内容は、極く少数な者しか知らぬはずだが」

と、疑った。

吉次は笑って、

「鎌倉ではそうも参りませんが、この洛中の事ならどんな事でも、吉次の耳にはいらぬ事はありません。公卿堂上方のうごきでも、町々の出来事でも、誰かが吉次に聞かせてくれますから。……けれどゆうべは、そういう手づるもなかったので、実は今朝お目にかかつて、お顔いろを拝してから、さてはまたも蒲殿とのご意見が合わずにお帰りだな——と、かようにてまえの胸のうちで、お察し申しあげた次第です」

「でも、わしの胸に今、そうした苦しみのある事は、どうして読めたか」

「お公卿方の一部で、お噂しているのを聞きました」

「はて、誰が、義経の胸を左様に申ししていたか」

「九条兼実卿かねざね。また、院のご近侍たる朝方卿ともかたや親信卿なども……」

と、吉次は答えながらすり寄って、声をひそめた。

「今日中に、内々、その方面の方々へ、院宣いんせん即降そつこうの嘆願をなさいませ。あなたは余りにも、政治のうらを衝くすべをご存知なさ過ぎる。お手引は、吉次がいたします。まず九条殿から先へお説きつけておしまいなさい」

五

ふしぎな男である。庶民層のなかに住みながら、上層の事情や政局のうごきなどにも実に詳しい。

(どうして知るのか)

と疑うよりも、

(吉次如きが、聞き知るはずはない)

と、義経も初めは、頭から信を措おかなかつたが、深く考えてみると、彼が、奥州の金かねあ

商人きゆうどとして、過去の文化に携たずさわっていた力は大きい。

多年の事である。その間に彼は自然、多くの貴紳から知遇を得、また特べつな交まじわりと
いうものもあつたに違いない。

そう考えると、義経はまた、

「嘘とも思えぬ」

と、彼の言に、耳をひかれた。

吉次としては嘘どころではない。彼は、義経に対してだけは、敬愛の心をもって、奴ぬぼく僕
の如く、身を粉こにしても仕える気であつた。その誠意は、義経の多感な胸には、ありのま
ま映うつらずにいなかった。

「そちのことに従つて、九条殿へお願いに出てみよう」

ついに、義経が云うと、

「いえ、いきなり九条殿へ、あなたがお訪ね遊ばしては、人目立ちましよう。てまえにお
任まかせくだされば、よいように運びますが」

吉次は自信をもつて云う。

彼はその朝、そこを辞して、一日姿を見せなかつたが、夜に入ると、約束の時刻もたが

えず迎えに来て、

「お身なりを変え、おしのび微行のつもりで、てまえに従ついてお越こしてください」と、迎えに来た。

そして何処ともなく、彼の駒を導いて行つた。

後に、人は種いろ々に云う。

その晩、義経は、九条どのをこつそり訪れたのだとも、また、いや、さる寺院の奥ふかくで、院のお側近く仕える朝方卿や親信卿など反平家の、そして特に義経に好意をもつ一派の人々と会つていたのだとも、取沙汰は区まち々であったが、誰も、実相は知るわけもなかった。

その翌日、朝議は一変して平家追討となつた。紛ふん論は排されて、最初の方針が、ふたたび明示されたわけである。

義経の出発は早かつた。

余り早いので、範頼は、

「院宣もこうむらぬうちに、私に兵をすすめ、万一、朝議のご決定にそむくようになったら、何とする心であつたか」

と、後に義経をなじった。

しかしその範頼も、院宣をうけては、義経のあとを追って、義経の軍に合流しなければならなかった。

先鋒の義経は、丹波路をとって亀岡から園部、篠山と通過し——篠山から西南の三草越えをさして急ぎに急いでいた。

三草山をこえて、播磨境にはいり、印南野を南へ南へと下がってゆくと、やがて、馬蹄の下に、一ノ谷がのぞかれる。

もちろんこういう大迂回は、大軍ではできない。彼の腹心とその手勢だけである。範頼の本軍は、行動をべつにとつて、一ノ谷の東の城戸口、生田方面へ進んでいた。

「一ノ谷へ総攻めは、二月三日ぞ。——三日を期して、総がかりに攻めつぶすのだ」
義経は、そう揚言した。

二日の道を一日に歩くほどな強行軍をつづけながら、道々そう云って、士卒を励ました。けれど、その三日には、総攻撃もなかった。四日も、何事もなかった。

「——四日は、清盛の忌日である。敵もさだめし仏事供養をしてあろうに」
と、思いやって猶予したかの如くであったが、五日になるとまた、

「きょうは、悪日であるから」

などと云いふらし、幾日かをわざと過して、一ノ谷に楯籠たてこもっている平家方の全神経を、まず不安と迷いに疲らせた。

讒者ざんしゃ

一

「梶原どのが見廻っておいでになりました」

義経は、そう聞いて、

「景時か」

と、いやな顔をした。

中軍の陣幕は、冬木立のなかに張りめぐらされてある。

その日も、何の行動も起さず、こここの林に駐屯していたので、焚火の煙の立ちのぼる空

に、鴟もずや鶉ひよの啼くのも静かであった。

「おつつがもなくて、まずは祝着」

と、景時は、義経のすがたを見ると、皮肉な語気でまず云った。頭を下げるにも、武骨というよりは、ぞんざいなふうがあった。

景時は、軍監として、こんどの西上には、総軍のうえに、重きをなしていた。

彼は、自分の口から常に、

(蒲殿も、九郎殿も、何分大将としてはお若いので、そちがよく奉行ぶぎようせよと、特に鎌倉殿から仰せつけられて参った)

と、人にも語っていた。

そのことばの裏には、暗に、鎌倉殿の寵ちようを誇っているふうも見える。

そういった人ながら、義経は好かなかつた。また、宇治、瀬田と分れて戦う前からも、景時とはよく評議のうえで意見の相違を来した。

義経は、義経の信念で押し通して来た。そうしなければ勝てない戦いくさであった。けれど景時は、

(九郎殿には、事々に、軍監たる此方へ楯たてをつく)

と、範頼などに向つては、その感情を口に出して云つた。

範頼と彼とはよく気が合う。

いや、範頼なら景時の意のままにもなるからと云つたほうが正しい。

だから彼は、あたかも範頼の後見のように、多くは範頼の陣にいた。そして、義経の陣地のほうはほとんど顧みなかった。

先頃も義経が、一ノ谷にある平家の攻勢に対して、

——一日も早く。

と、味方の積極的な行動をいそいで範頼を説いていた折も、いつも範頼のそばには、景時が、黙つてついていた。

口に出して、反駁はんぱくはしないが、範頼が何のかのと、言を左右にして、動かなかつたの

も、彼の優柔不断ばかりでなく、その意志は、実は黙っている景時の表現だった。

義経も察していた。

義経はまた、その感情を巧みにつつんでいられない性情である。きらいな人間に対しては、きらいだという顔をする。わけて景時に向うと濃厚にそれが出る。

(自分は、鎌倉殿の弟だ)

というような自尊心から出る威張りかたなどは誰にもした例のない義経であったが、景時に対する時は、意識的にも、

(下臣かしん)

と、いう態度で見た。

それが、景時には、小癩こしやくに見えてならなかった。

年齢、経歴、手腕、いろいろな誇りが彼にも募つる。主君の異母弟おとうととはいえ、景時には、何の好感も義経にもてなかった。人が義経を尊敬するのさえ不快だった。

「ご老台。この山中まで、わざわざ大儀なことだの。何か、蒲殿のほうに、手違いでも起ったか」

ことばの端にさえ、義経の云うことは、気にさわる。自分をさして、ご老台とよぶのは、義経の揶揄やゆである。景時はもうそんな感情をゆり動かしながら膠にべもなく云い返した。

「蒲殿のほうには何の誤算もない。いぶかしいのはこの方面だ。あれほど急ぎながら、何で悠々とここへ来て戦いくさもせず日を過しておられるか。——蒲殿にはすでに糺附近ただすふきんの敵を破り、一ノ谷の東の城戸きどを目ざして、着々進んでおられるのに」

義経は笑つて答えた。

「戦うとは、ただ敵に会えばよい事ではない。必勝の機をつかんで当らねばならぬ。また緩急は軍の呼吸で、急に利があれば急に變じ、緩をよしとすれば緩に従う——こうして馬を遊ばせ、兵を眠らせておくのも、兵法のひとつである」

軍監たる梶原景時は、元よりこんな軍事の初歩を義経から講義されようなどとは思ひも依らない。心外な顔いろを露骨に示して、

「あいや」

と、遮つた。

——自分が云おうとするのはそんな乳くさい論議ではない。實際問題である。すでに京を発足する時から、総攻撃は三日に決行すると揚言している。故に、糺方面では、息もつかず合戦を開始しているのに、それと一致して行動すべきこの陣地が、幾日も空しく送っているという法はなからう。

三日もすぎ、四日もすぎ、五日も経つて、きようはすでに六日ではないか。

「ご所存がわからん。いったい、戦はお見合せのつもりか。それとも、ここまでは来たが、これから先の難所に恐れをなして臆病かぜに襲われ召されたか」

景時は、自分のことばは、鎌倉殿のおことばも同様であるぞと云わぬばかり、かきにかかって叱咤した。

その威猛高を、義経は、わぎと笑くぼで眺めて、

「総がかりを三日と云いふらしたは、敵に攻勢を取らせぬ為の策。四日は、亡き清盛入道の忌日とて、武士のなさけに、わぎと過した。五日は暦のうえの悪日、これも避けたがよいと思うて」

「ば、ばかな！」

景時は、唾するように、

「敵が仏事をいとなむ日まで遠慮していたら、攻め入る日などありはしまい。まして、清盛入道など、源氏にとつては、その墳墓をあばいても飽きたらぬ仇敵だ」

「仇敵ながら、あの入道にも、人なみの涙はあつたればこそ、幼時この義経も、ふしぎに生命を助けられた。——また鎌倉殿とても、同じように、すでになきはすの一命を、救われたのではあるまいか」

「むむ。なるほど」

厭味いやみいっぱいな領うなずき方をして、景時は横を向いて云った。

「そういえば、御曹子の生みの母、常磐どのとやらも、入道のお世話になられたそうな。

……無理もない」

義経の顔いろがさつと変った。ちらとそれを見ると、景時は、座を起つて、

「いや、つまらぬ事のみつい申し上げた。余事はさて措おき、要するに、ご進撃はいつの事か。東の城戸きどへ襲よせるにも、手心を合せねばならぬが」

と、云い直した。

それに対して義経はしばし答えもしなかった。彼の血は明らかにかき乱されていた。しかし水の澄むような落着きに帰ると、もとの笑くぼがその面おもてにさびしげに残っていた。

「あすの夜明けまでには」

「え。あすの夜明け」

「蒲殿と一ノ谷で会おう。見事それまでに、東の城戸を打破つて、お入りあるよう伝えてくれい」

景時は、無言で去った。

林の外に待たせてある一隊の従者を従え、ひどく急いで駒を飛ばして行つた。義経は、その後で、軍議をひらき、静かに、人々の意見を徴していた。

「一ノ谷へかかるには、その前に、平資盛すけもりがかためておる三草山の砦とりでがある。——
 暁あかつきに襲わせたがよいか、夜討がよいか」

義経は、一同をながめて、そのいづれが上策かを、訊ねた。

三

夜討か。明方か。

この問題は、

(奇襲がよいか、正攻法に依るがよいか)
 ということになる。

義経はこの問題を、ひどく重大に扱つて、衆議にかけて、一同の意見をただしたが、考
 える余地もない事として、誰もみな、

「夜討」

「無論、夜討」

と、異口同音だった。

世間の称えとなには、平家方の総軍十万余騎、源氏は約三、四万騎であろうといっている。が、実数は甚だしく違う。

平軍は少なくとも二万はあろう。けれど源軍は、宇治川以来の傷負ておいや病兵をのぞくと、範頼、義経の両方あわせても、三千騎に足らなかった。その後、鎌倉からは、一兵も補充されてはおらない。

しかも義経がこれへ率いて来た兵は、初めから荷駄も後続部隊もなく、軽敏な性格を隊伍にそなえて来たので、多くを範頼の指揮下にのこし、およそ七百ばかりの兵しか持たなかった。

それで敵の中核へと。

三草山の塁をふみ破つて、一挙に、一ノ谷へ衝き入ろうというのである。

寡かと衆。また、天嶮よに拠よっている守備の強味。——正攻法で勝てないことは、常識でも知れていることであつた。

——それをなぜ？

土肥実平は、ひそかに怪しんで、評議も終つて人なき後、そつと、義経にきいてみた。

「きよの事は、ご評議までにも及ばぬ儀と思われますのに、なお、あのような分りきつた問題を、何故、物々しゅう一同の意見へおただしにはなられましたか」

義経は、うなずいて、

「そちなどは、そうも思おう。しかし諸将には諸将の自負心がある。義経の所存は極まっているが、一義二義、わざと問題を出して、皆のものに、味わわせ、また氣負い立たせて、一決を執るも、軍の故実ぞ」

と、教えた。

実平は舌をまいて懼れた。

この御曹子は、いつたい、いつのまに、こう兵学の真髓を究めていたのだろう。いや兵学を読み習うということは誰もするが、書物や口授から得たことを機に依じて用いることはむずかしい。実にむずかしい。かなり実戦を体験してきた老将でもみな嘆じることである。

よほど感じたとみえて、彼はこの事を畠山重忠に、ありのまま囁いた。すると重忠は、さもあろうと云わぬばかりに、

「われわれが、進んであの君の旗下きかに従したがってきたのは、目ちがいではなかつたな」と、おたがいに本望らしくほほ笑みを見交わした。

重忠も実平も、初めは範頼の指揮をうけていた將たちであつた。ふたり共、感じることがあつて、途中から義経の陣へ転じたのである。常に、義経のほうは、難攻の敵に向うので、志望者の少ないのを幸いに、進んで義経について来た者どもであつた。

物見はたえず放つているが、その日も、黄昏たそがれ近くに、かなり深入りして来たのが、帰つて来て報告した。

「敵は、新三位中将資盛すけもりを大将として、およそ二千五、六百の兵を擁ようし、この三草山に向う側——西の麓ふもとにもものしく壘とりでを築たいています。山路や沢に柵さくをゆい廻し、守兵の配備など、きのうと変りは見えませんが」

夜に入ると、星影ほしかげの下もと、義経たち七百の兵馬は、黒々と前面の山を越えて行つた。

断崖だんがい

平家方でも怠おこたらず物見を出していた。物見の報告を聞くたびに、

「さもあろう」

と、資盛以下、三草山の東麓にある将士は、義経の動かぬ様子を肯定していた。

「義経ごとき黄口児が、わずかな手勢をもつて、この搦からめて手へかかって来たとして、何ができよう」

と、侮あなどりきつていた。

そこへ山上から急雨のような夜襲だった。闇のなかに狼狽をきわめた平軍は、われがちに潰かいそ走し、ほとんど一矢も射なかつた程である。

「討ちもらすな」

「ひとりも城戸の内へ生かして帰すな」

急追して熄やまない源氏の人々は口々にそう云い合った。逃げるを追って、須磨の方へ駆け下り、そのまま敵の本拠たる西の城戸へ、直ちに迫ってゆく気であった。

「長追いすな。みな集まれ。みな集まって一息いれよ」

義経は、逸る人々を呼びもどして、敵の捨て去った砦の一角所にまとまった。もう夜半に近い。あすは晴天であろう、星の空は冴え返っている。時は二月初旬、こちらの高地は海風がぶつけてくる、山風もふきおろす。すこし立っていると体がわなないてくるほど寒い。

「篝火を焚け。篝火を」

この数日は戒めていた焚火をゆるした。思いきった焔が数カ所から揚がる。将士の顔はみな赤々と照らされた。

その間に義経は、重忠、実平などの重なる将たちと何ごとか手短に議していた。

ここに立つて義経が、改めて一同に云うには、

「敵の逃げ足が早かったのは、あながち敵が弱いたためばかりとは思えぬ。ここで戦うよりは、一ノ谷の要害に拠つて、存分、戦ったほうが利と考えたからであろう。——地形をみれば、ここを降つて須磨に出で、西の城戸を攻めるしか攻め口はないので、先に逃げた敵も一ノ谷の全軍も、ござんなれとばかり、手具脛ひいて、われらの寄せるを待ちうけるであろう」

彼は、そう前提してから、

「この小勢、この地形、味方に勝目のない事はいうまでもない」

と、絶対に尋常では陥おちない敵の要害をまず認め、その難攻の突破にあたっているのだという覚悟を人々にも持たせた。

「——が、いつの世、いかなる場合でも、見た眼からして、易やす々と陥入やすやすりそうな砦とりではない。戦いくさばかりか、こういう世に亡んでゆくあらゆるもの皆、一瞬の前までは、難攻不落と見えるものだ。……至難、不可能、それは物の象かたちにとらわれた観念かんねんの惑い、一心を賭として成らぬことはない。……ましてやわれらの兵馬は単なる勝負かちまけの兵馬ではない。世に求められて時代の潮と共にさきがけている兵馬ぞ」

篝火は、義経の横顔を燃やしていた。人のなし得ない役割をも甘んじてやりのける人とおなりなさい——鞍馬谷で打ちこまれた信念がその眸にはすわっていた。そこには、私心がなく、小さな功名心とはちがうものである。何か、崇すう厳ごんな感じすら人々はうけた。

「実平」

「はっ」

「ここよりは、全軍をお身の手にあずけるぞ。心して、西の城戸へ駆け向え」

「はっ。……して」

「わしは、なお、山路を深くはいって、鶯越ひよどりごえから敵を真下にのぞみ——」
云いかけた時、うしろの兵のなかで、何か急に立ち騒ぐ声がした。

二

ひと所にかためておいた七、八名の捕虜が、隙をうかがって縛いましめを断きり、見張の兵を刺してやにわに逃げかけたのであった。

「やつ、どこへ」

たちまち、追いかぶさって、逃げた捕虜もめった斬りにされたり突き伏せられたりして、一瞬ではあつたが、血なまぐさい絶叫がそこに聞えた。

「斬るなっ」

義経はあわてて制した。しかし間にあわなかつた。無傷にまだ生きていた捕虜はひとりしかなかった。

「大事にせよ。その者を、これへ曳いて来い」
やがて遅たくましい男が、彼の前へすえられた。

その捕虜は、播磨安田の庄の下司多賀菅六という者だった。

生国姓名だけ聞きとると、義経はすぐ諸将に向き直つて、

「では」

と、袂別の眼を与えた。

ここで軍を二分し、そのあらましを土肥実平にゆだね、義経自身は少数の一部隊をひつさげて、鴨越えの嶮へまわるなどという事は、平家方はもとよりの事、彼の帷幕者でさえ、誰も予想していなかった。

「——ちと、無謀だ」

と云いたげな色が、そのせつな諸将の顔にうごいたが、義経の眉を仰ぐと、なぜか諫止することも、それを敢行するだけの成算があるのかないのか、細い事なども、訊ね出せない気もちに打たれてしまった。

それは義経の面に、すでに死を決していることが、明らかに見られたからであつた。

——成らねば死ぬまで。

鎌倉武士の心はそこへ飛躍すると華やかなこちになる。理はすてて、信念の究極へ、一気に行つてしまうのである。

それまでは、各理念にも惑つてみるが、智も働かしてみるのが、死という点に到ると、もう途中の妄智もうちや煩雜はんざつな是非はもたない。

さわやかに、潔いさぎよく、そして誰もみなかいがいしくなる。笑い声のうちに行動へかかる。

「蒲殿が東門へ寄するも、あすの夜明けを期してかかろう。——それにおくるな。呼応して、明け方までに、西の城戸へおめき寄せよ。義経も、播磨はりまの海の彼方に、陽の昇りきらぬまに、かならず敵のまつただ中に駈け入つておろうぞ」

別れにのぞんで馬上から彼はもう一度こう本軍を励ました。

実平について須磨へ下つた本軍のほうはおよそ六百余騎、——義経の手について、そこからなおも、山また山の道もない闇へ分け入つて行った数は、七、八十騎にすぎなかった。

「道案内をせよ。一ノ谷のうしろまで出たら生命いのちを助け、放してもくれよう」

捕虜の多賀菅六を馬の先に歩かせて、義経主従は、遮二無二馬をすすめた。

「獣けもののかよわぬ山はあるまい。獣の通う山ならば、馬とてもすすめぬわけではない」

義経は、うしろに続く人々へ、そう云つた。笑い声が答えてくる。誰か、とたんに落馬したらしい。また笑う。

密林の沢をこえると、徒歩でも困難な石山の嶮しい胸に行きあたる。星明りにも光るほ

ど馬は汗にぬれていた。時折、鞍を下りて、駒を休ませた。

「もう、敵地の中」

誰も笑わなくなつた。

また進む。いよいよ道はかすかだ。遅れる者、姿の見えない者などができてくる。

「あすは屍^{かばね}か、生身^{いきみ}か」

さすがの武者ばらも、名残りのように時々星を見た。しかし義経は、死中に活路の希望も持った。死中の道を避けて、必勝の道はないと信じていた。

三

「はて。迷つたかな」

そのうちに、人々は、駒をとめて眩^{つぶや}き合つた。

「方角が違う気がするが」

「そうだ、いくら行つても、山深くなるばかり」

畠山重忠は、道案内の多賀菅六へ向つて糺^{ただ}した。

「菅六とやら、この方角に間違いないか」

「はい。たぶん、間違いは、ないつもりでございませうが」

今になって、捕虜の菅六はあいまいな口吻くちぶりで、おどおど答えた。

「さては故意に、われらを道に迷わせたな」

三浦義連よしつらは、菅六のすぐ側にいたので、馬上から襟がみをつかんで引寄せ、縊しめ殺しかねない顔をした。

「待て義連。悪意ではあるまい。生命惜しさに、道案内には立ったが、常には人も通わぬ難所、その男とて、詳しい道はわからぬのがほんとだろう。——誰ぞ、身軽に駈けあいて、この附近に樵夫きしりの小屋などないか、炭焼、獵師の住居でもないか、手わけして、探してみよ」

人数は少ない。義経の素晴らしいつける声は一隊の端まで聞えた。

たちまち、馬をつないでわらわらと幾人かが駈け去ってゆく、その間を、義経も鞍から降りて休んでいた。

すると程なく、熊谷直実くまがいなおざねの子息の小二郎直家が、まるで猿か山男のようなひとりの若者を引つ張つて来た。

若者はそこまで来ると、恐れたものか、どうしても歩かないので、小二郎は腕うでづくで、義経の前へひきすえた。

「あの山のうしろの沢に、小屋の灯が見えましたゆえ、近づいてみると、年老いた猟師とこの件がおりましたので、親を承知させて借受けて参りました。このあたりの山の事なら知らない事はない息子だと親は自慢でござりました」

直家が云うと、大勢のなかに引きすえられたその若者は、眼くまが眩みでもするようには、ペたと、顔を地につけたまま、身を縮めていた。

「……ホ。左様か」

と、義経は、やさしく、

「名は、何という」

まず訊ねた。

若者はかぶりを振った。名はないのかと訊くと、頭をたてに振つてうなずく。

まわりの人々が笑うので、若者はよけいに固くなるばかりだった。——年はと訊けば、十七と答える。

十七にもなつて、名のない者はあるまい。親たちは何と呼ぶかと訊ねると、せがれとし

か呼んだことはないという。

「では、世間の人は」

と、訊くと、自分の小屋のある辺が、鷺尾わしのおという地名なので、鷺尾とよばれていると、ようやく心も落着いたか、すらすらと答え出した。

「そうか」

最前からの彼の容子に、義経は始終ほほ笑まれた。愛らしくさえ思われた。武士になるかときけば率直に、なりたいと云う。そして初めて、強烈な眸をして義経のすがたを仰ぎ、幾たびも頭を下げた。

「姓は、鷺尾でよかろう。時は春、わが一字を添えて、経つねはる春と名のれ鷺尾の経春と」

義経のことばに、若者は、身のおき場も知らぬばかりな体ていだった。人々から、

「鶺鴒ひよどり越えのうえに出る道を知っておるか」

と、案内を促されると、彼は勇躍して、一同の先に立ち、

「そう遠くはない」

と、無造作に歩きだした。

四

急に、大地は眼のまえで断きれている。暗い空に岩角の線がうつすら蜿うねっている。そこから岨のぞけば絶壁であろうことは疑うまでもない。

「一ノ谷」

「一ノ谷だ」

口々に思わず云う。その面おもてへふきつける風には潮の香がいつぱいにふくまれていた。人よりも勘のするどい馬は、早、前肢ぜんしを突つぱつて、後ずさりした。

「崖へのぞんで、岩を崩すな。馬を締めて、嘶いななかすな」

義経は、戒めながら全軍を後ろの木の間にかためた。

そして四、五騎の者だけで、能あしうかぎり断崖の際の近くまで馬を歩ませてみた。

「お、お」

のぞき下ろすと、敵の本拠はあまりにも眼に近いのではととした。眼もくらむほど深さは深いが、平家の中枢と、自分等との距離としては、最小限度の近さである。

しかも平家方では、夜来の情勢に緊張して、寝もやらず諸所かがりに篝火を焚き明かしている。

陣所陣所の仮屋、はためく幕、城戸、逆茂木など、美しいばかり明滅して見える。

そのあたりをひとすじ一条、白い波の線が走っている。沖にも点々と、兵船の箒が数えられた。耳をすますと、風のまに、波の音、櫓の音、人声とおぼしいものすらかす微かに聞えてくる。

「どうしてここを降くだるか」

重忠も、また日頃我武者をもつて任じる三浦義連も——凝然と下を見ているだけだった。義経の馬の口輪をしかと握っていた佐藤つぐのぶ継信と忠信の兄弟も、

「これは」

と、五、六歩駒をうしろへひいて、

「如何召さるお心？」

と、主の面を仰いだ。

義経は、しきりと唇くちをかんでいた。彼もかくまで嶮けんしい所と考えていなかったかもしれない。元より彼は、一ノ谷のうしろの嶮けん峻しゅんは覚悟していた。そこへ向う非常識も弁えていた。けれど彼は、敢えて、常識を無視して、非常識へ突進してきた。

平常の常識の程度は、敵にもある常識である。

人の眼と智がみな、

不可能！

と、極めているなかに可能を見出すことこそ、非常な時の常識というものではあるまいか。

「……………」

義経はしきりとまだ唇くちをかんでいる。ともすれば、平常の常識から不可能としてしまい易い自己の観念に対して、強く唇を噛むのであった。

「鷲尾。鷲尾」

案内して来た例の若者をかえりみて訊ねた。

「この山を鹿は通わぬか」

「鹿？ ……。ああ鹿ですか。冬近くなると丹波の鹿が、よく一ノ谷へ越えます。春暖かになるとまた、一ノ谷から丹波へ帰って行くので」

「そうか。鹿の攀よじ登れる所なら、馬とて駈け落せぬことはあるまい」

「いえ、鹿なればこそで、馬や人では」

鷲尾の若者さえ危ぶんでいるのに、義経は耳にもかけない眉して云った。

「忠信、継信、空馬を二頭これへ曳いて来い」

五

「はつ。馬をですか」

——心得て、継信、忠信の兄弟は味方の七、八十騎がひそんでいる後方の林へ駈けて行つた。

そのあいだ、義経は鞍のうえに静かな姿を見せていた。今は、もう何も雑念のない姿に見える。海も空も一色のまま未だ明けない宇宙にむかつて、駒を佇たたずませていた。

「九郎様」

誰か、馬のわきに、ひざまずいたようである。義経は、地を見て、

「まだおつたか」

と、不興気に云つた。

「へい」

吉次は、頭かしらを下げ直した。京都から強たつて軍に従ついて来て、三草山のでまえでも、ここ

から戻れど、厳しく叱られたが、なお別れかねて、遂にここまで、慕って来た彼であった。
「……へい。もうここで、帰らせていただきます。あきゆうど商人の中では、随一の大胆者といわれた私ですが、なるほど、戦いくさの場所とは、こうしたものか、すさまじさに胆もちぢみしました。……てまえにはもう残念ながら、これから先のお供はできかねます」

「帰るがいい。気をつけて。……そうだ鷲尾の若者と一しよに戻れ」

「ありがとうございます。……が、後へもどるてまえの身よりも、あなた様こそ、どうか、どうか、ご武運よく、戦いぬいて、またお目にかかれますよう、吉次は祈っております」
「何をいう」

声なく笑つて、

「吉次、あてにもならぬ事、祈らぬがましぞ。祈れば後がくやまれる」

「くやまれますよう。もしもの事があつた場合は。……もうそうなつたら、吉次は望みもございません。僧門にでもはいります」

「鞍馬以来、そちにはずいぶん世話をやかせたな。わがままをしたな。礼をいおう。吉次、そちにも一つの恩はある」

「もつたいない」

吉次が、あわてて手をふりながら、馬上を仰いだ時である。義経の横顔に、燦と、紅い微光が映した。

東の天が一変していた。水と空とは父母のように、真つ赤な日輪を孕んでいた。

義経の眼も心も、しばしその崇巖な光に溶かされていた。吉次も凝視していた。うしろの木々の蔭を立ち出た将士も、面を焦かしながら肅として見まもっていた。

「あ、吉次。まだいたか」

「はいっ」

「よかった。そちには、そちならでは出来ぬ大役の頼みがあった」

「な、なんでございますか」

「——それも、この断崖の下へ行きつくまで、義経のいのちが無事であつたらば——だが」

「ともあれ、仰せ下さい。伺っておきましょう」

六

「難波あたりに、そちの手持の船は今、どれほどあるか」

「奥州船は、いかほども参つておりませぬが」

「ともあれ、難波へ急ぎ、そちの力で集められるだけの船を、淀の口、渡辺あたりへ寄せおいてくれ。——船底には悉^{しつかい}皆、兵糧をつみ入れ、世上には、四国へ渡る商^{あきな}い船といふらして」

「船数は」

「多いほどよい。いかに多くても余るほどは寄るまい。源氏の兵馬がみな乗るには」

「わかりました」

吉次は、辞儀をして起つた。もう義経の胸にできている次の作戦が彼にもおぼろながら読めた。

「たのむぞ。はやく行け」

「では——」

と、吉次は、万一これが最期の別れとなるかも知れないと思うので、なお、すぐには立去りもせず、すこし後へ退がると、待ちかねていた佐藤兄弟が、

「馬を引きました。これでよろしゅうございませうか」

二頭の口輪をとつて、その裸馬を、義経の左右へ寄せた。

義経は打ちうなずいて、

「その二頭を、絶壁の真下へ、落してみよ」

と、命じた。

継信も忠信も、彼の心をはかりかねたように、念を押した。

「落せとは」

「追い落すのだ」

「はっ」

ふたりは、断崖の際へ、馬の首を引っ張った。しかしやや近づくと、馬は恐れてそれ以上は動かなかった。

「誰ぞ、駒のしりを打て」

あわてて兄弟が云うと、おうと、他の者が馬のうしろへ廻って、

「打つぞ」

鞭を鳴らした。

とたんに、継信も忠信も、馬の口から手を離れた。あやうく、宙へたてがみを振り立てた馬諸共、人も一しよに落ち込んだかと思えた。

二頭の裸馬は、断崖からまっ逆さまに落ちて行つた。下まで、深さは何百尺か眼づもりもつかない。

「……………」

義経以下、大勢の顔が、息もせず、その一瞬をのぞき下ろしていた。白っぽい小石まじりの土砂に、所々、大きな岩石が露出している。土層の段ごとに、雑草や小松がまばらに生おい、そしてその土層は、下の地盤から五、六段上に近づいてまた、七、八段の横縞を見せている。

元よりその一つの縞にも、馬は立ちどまらなかつた。ひと段ごとに、土砂を蹴りくずし、下まで勢いよく落ちて、一頭は脚を折つたらしくそのまま斃たおれ、一頭は這い起きると身ぶるいして、そこらの草を喰つていた。

この試みからみると、危険率はちようど相なかばしている。

「見たか、各」

義経は早、断崖にのぞんで、駒を立てならべた人々をかえりみながら云つた。

「馬と人一体に、心して駈け落せば、七十の兵のうち、三十五騎は生きのころうぞ。――まず義経が先駈けして見せ申さん。義経が馬の立てようを見習い候え」

彼は、云い終ると、すぐ自身の馬の後脚を折敷かせ、手綱を搔くり、激流へ筏を下ろしてゆくように、ざつと絶壁を落して行つた。

「おうっ」

「——おうっッ」

「それっ」

おくれじと、劣らじと、鎌倉武士のたましいは、白熱して搏ち合つた。その絶壁いちめんを砂けむりにして、山くずれとばかり、下の磯を埋めた。すぐ躍り立つもあり、そのまま起たない馬、起たない犠牲者もすであつた。

独愁

一

彼のやしきは新たに六条室町にさだめられた。義経が一部の手勢を引いて、そこへ凱がいせ

旋んしたのは九日だった。

市中は、まるで祭のような騒ぎだった。その中で、平家のために、

「変れば変わるもの」

と、泣いている女もあるし、

「いよいよ時代は革あらたまった」

と、興奮している若者もあり、念仏をとなえて、捕虜ほりよのすがたや首桶に眼をそむける尼もある。

一ノ谷で討たれたと聞いた平家の将は、重なる人々だけでも夥おびただしい数にのぼった。

平敦盛あつもり、忠度ただのり、通盛みちもり、経俊つねとし、経正つねまさ、知章ともあきら——など十指を折つても折りきれない。

首は十三日の頃、巷ちまたをわたして、六条河原に梟かけられた。

奏聞の儀もすみ、鎌倉へはもちろん次々に早打ちで報告もした。居ながらに、合戦の状況と処理のよく分るよう、義経は特に兄頼朝へ心をつかった。いや鎌倉どのの代官として遺漏いろうのないよう万全を尽した。

——が、その兄からは、

「よくいたした」

という一片の返事もない。

範頼のほうへは、それが来ているらしいと聞くが、義経には沙汰もなかった。しかし義経は、兄から恩賞の沙汰を聞こうなどと期待しているのではない。彼の帰京は、朝廷、鎌倉への報告と共に、平家方の打首や擒人とりこの処分、その他の軍務を果たすためで、心は、一日もはやく再び西下して、今のうちに、平家の全勢力を掃滅そうめつしておかなければ後日の大患と考えていたのである。

彼の惧おそれているのは、瀬戸内海を中心とする平家の水軍の力だった。清盛が生前に宋船との交易をはかるため、各地に扶植ふしよくしておいた造船力とか水路の開拓とかいう遺業いぎようが、今、入道の子孫の没落にあたって大きくものを云って、内海から九州まで、制海権せいかいけんを擁ようしている。

駿馬しゅんまの快足をほこって、野戦や山岳戦には自信のある源軍も、水上の戦いくさには、ほとんど訓練もないし兵船も持たない。

「いかにして、屋島を？」

彼は、一ノ谷を陥おとす前から、平家の水軍と、その本営を繞めぐる地形を察して、人知れず苦

念していた。

一ノ谷から潰かいそう走した大半の敵は、彼の予想どおり、多くは船で水路を逃げのび、屋島附近へ集合している。

しかも、九州をひかえ、中国に接し、日一日、その勢力は増強するに極まっていた。

鴨ひよどり越えの岩頭から眼の下の敵へかけ下りるまえに、

——もし生あらば。

と、彼が次の作戦のため、吉次にいいつけておいた船の準備も、あの男の事である、もう手配もついて難波なにわの淀の口に、舳みよしをならべて待ちぬいでいるであろう。

それやこれ。

彼の胸はせわしかつたが、鎌倉の指令は、いっこうに急でなく、朝臣のうちにはまた、政治的なうごきが再燃しだした。

源氏に生虜いけどられて都へ帰った平重衡しげひらに手紙を書かせて、屋島の宗盛の許へ、

「源氏と和議を講ぜよ」

と、云い送つてあるというようなうわさも聞えた。

とこうするうち、半年の余、むなしく過ぎてしまった。義経は、むなしい日々をどうす

る事もできなかつた。

二

「——近ごろ心外に存じまする」

と、拳こぶしを膝において、ある折、ついに、彼の前で云つた者がある。

佐藤継信、忠信の兄弟だつた。

義経は、面おもても静かに、

「心外とは、何を」

と、さりげなく訊ねた。

継信は、いつになく激して、その義経の面を見つめながら、

「おつくろい遊ばしますな。おそらく、われら以上、殿のお胸には、ご無念が抑えられて
おありでしょう」

「はての……。なぜ？」

「くちおしゆうございます」

兄弟とも、両手と共に、それへ面を伏せてしまった。

「わからぬ。何の事やら」

「……鎌倉殿のお仕打しうちです。疾とくに、鎌倉殿のご推挙によって、あの無能な蒲殿かぼどのさえ、参河守みかわのかみに任官され従五位下に叙じよせられておるではございせんか」

「よいではないか。——それが何で心外か」

「——にも関わらず殿へ対しては、その後も何のお沙汰もないそうです。露骨へんぼなご偏頗へんぱ——無慈悲なお仕打」

「何をいう。義経は、恩賞をのぞんで戦ったものと、そち達まで思うか」

「いや。……決して左様な心根とはぞんじません。しかし事実上、京都ご守護のお役を奉じながら、何の官職もなくは、朝廷のご用が勤まりません。無位無官では、いかに忠勤をおはげみ遊ばそうとしても」

「そんな事はない。鎌倉殿の代官とし、京都にある身ゆえ、この三月には、高野の僧衆と寂楽寺じやくらくじとの紛争を裁き、また五月には、祇園神社の訴訟を聴き、そのほか都下の秩序も、禁門のお護りも、まず落度なく勤めておる」

「それは人々が殿へ帰服を示しているからで、その実績に対しても、鎌倉殿から何らかの

おことばがあつて然るべきでしょう。ましてや宇治川以来、一ノ谷のあのように迅く陥ちた功績は、いったい誰にあると思し召しておらるるのか。おこころの程が解げせませぬ」

云うなど叱つても、二人は云い熄やまないものである。また、佐藤兄弟が無念としている事は、この六条の邸に住む義経の麾下きかが今、挙こぞつて不満としていることだった。

で、義経の直臣たちは、先ごろ諮はかり合つて、鎌倉殿へ嘆願書をさし出していた。義経に對して何とぞ一日もはやく官途のご推挙を給たまはるようにと。

ところが、その願いはかえりみられず、嘆願書は問注所から突つ返され、かえつて義経に對して、頼朝の不興と疑いは深まつているという噂さえ鎌倉から聞いたのである。

嘆願書に名を連ねた面々は、自分らの盲動が、予期に反して、主君をより以上の苦境に立たせたという点から、

「申しわけない」

と、悲涙を押しぬぐつて、

「——この上はどうする」

という策もなかつたが、佐藤兄弟のみは、かねて奥州を去る折、藤原秀衡から云いふくめられていた事もあるので、今は都にとどまつて何のかがありましよう、はや、ご加勢

の事は断念して、いさぎよくこの地を去り、ふたたび奥州へさしてお帰りあれと——そう義経のために、真心をもって、諫いさめに出たのであった。

——と、義経は、ふたりの諫言を、瞑めい目もくして聞いていたが、やがて、

「義経は、死しても帰らぬ。そち達、故郷ふるさとが恋しくなったのなら、二人だけで帰れ。きようかぎり暇をくれる」

と、きつぱり云った。

三

平家退去の時、大半、焼払われもしたが、京都の町や、途ゆく人の粧かいは、わずかなまに著いちじしく變つて来ている。

べつに、法令をもつて、

(平家風は相ならぬ)

と、律したわけではないが、一頃のこれ見よがしな華奢な音階や色調は去つて、どことなく実質を内容にもとうとする風が見えだして来た。

——と云つても、庶民の心には今、言わず語らず、次の時勢にかけている希望がある。大きな行くてを望んで理想する民衆は、必然、明るい色を好んだ。高い足なみに合う音楽を欲した。地味よりも派手を求めた。

だが。

派手も明るさも、平家の人々が纏まとつた浮薄ふはくとはちがう。織せん弱じやくではない。いたずらに贅ぜいでもない。

剛健な明るさである。われこそ奉公の道にかけては人に負おくれじとする派手。——しかも無駄なく、毅然と、清潔を主とした姿をもつた、焼跡の新しい町を行く武士を見ると、

(鎌倉風よ)

と、人々はささやいた。

多くは義経の部下だった。その人々から一つの風が興おこつたともいえる。いつか庶民の風俗もそれに倣ならう。たちまち、風ふうは風を興おこして新しい世せ粧しようとなった。

「ここだな、弟」

「むむ。この寺」

六条坊門から北山のほうへ曲がつて、もう農家しか見えない辺りに、一ひと叢むらの木立と山

門が見える。

佐藤兄弟は、そこを通つて、寺僧へ何かいうと、僧は顔見知りと見え、すぐ二人を案内して奥の客室へ導いた。

「おう、これは」

腹這いになつて、頼杖つきながら、蟻あひを眺めていた退屈そうな男がいた。あわてて起き直つて礼儀をする。

「どうなさいました。おふたり共、いつになくお元気がないが」

寺の食客は、奥州の吉次であつた。白拍子の家で幾月もこうしていた彼の都ぐらしも一時代前となつた。洛中大火の時、翠蛾すいが、潮音しおねの家も焼けて、どうしたか、あの姉妹ふたりの消息もそれきり知れなかつた。

「いや吉次。実は、こう両名ふたりとも、ご主君からご勘当をうけてしまったのだ」

「ほ。お暇を出されましたか」

「奥州へ帰るがよいと、きついご不興をうけ、お詫びいたしたが、お聞入れもない。……で、悄悄すこすこ、そちに相談に来たわけだが」

「いけません」

吉次は、手を振った。

「この吉次も、一ノ谷でお別れしたきり、ずっと、お目にかからずにいるところです。難波の淀の口に、たくさんの船を借りあつめ、今か今かと、ご出軍を待っていたが、とうとうお沙汰なしで、えらい手違いをやってしまった。……しかし、その私が、お目にかかりに参上したら、お辛いに相違ない。……手前もまた、あの君の、ご無念なお顔を見てもしかたがない。そのうちには、風のふき廻しも変わるだろう——そう気永に考えて、きょうも半日、蟻の争いを眺めていたところです。——せっかくですが、お取りなしの事なら、どなたか、余人にお頼みください。手前はまだ当分、源九郎様へお目通りしたくございませ
ん」

「そう出ばなを取られては」

と、継信と忠信は、当惑そうに顔を見あわせて、

「でもまあ、はなしだけでも聞いてくれい」

「おはなしだけなら伺ってみましょう。……が、たいがい分っています。きつとあなた方お兄弟も、むきになって、何か、お諫め言を仰つしやつたのじゃございませんか」

「そうだ。——だが、申し上げたが無理だろうか。わし達は、残念でたまらぬのだ。吉次、

そちはどう思う。鎌倉殿のお仕打を」

四

義経を思う余りに、ふたりの抱いている不平は、元より吉次も抱いている不平だった。従つて、継信と忠信が、泣かぬばかり憤慨して云うところは、いちいち同感であつた。共に、貰い泣きしてしまわぬばかりその可憐いじろしい気もちは分る。

だが、吉次は、

「もう、やめましょう」

と、顔を振つた。

今は、何も語りたくない、また聞きたくもないと、興のない体ていなのである。

「それよりは、ご勘当をうけたあなた方は、これからどう召さるお心か。——故郷の奥州へお立帰りなさいますか」

と、訊ねた。

「なんでこのまま、帰られるものか。秀衡ひでひら様に対しても」

弟の忠信は、兄以上、感情にさし迫っていた。

このうちは関東へ下って、問注所の人々をうごかすか、鎌倉殿へ直訴じきそしてもとまでの決心ほのを仄めかした。

「いけません。むだですよ」

吉次はまた、手を振った。

「なぜ鎌倉殿が、あのように、源九郎様に無情つれないか。原因もとをよく考えてごらんなさい。——手前の観るところ、お二人のご性質は水と火です。元々合わないものでした。鎌倉殿は単に九郎様を打ツてつけない使い途に利用しているに過ぎません」

「それでいいものか。上かみに立つお方が、そのような、利己主義の範を示して」

「覇業はぎよのためにはぜひもないと——鎌倉殿ご自身に心のうちで冷やかにいいわけしてい
らっしゃいますよう」

「わし達の心情こころでは、ゆるせない冷酷だ。世人一般に、骨肉の愛というものを疑わせよう。血と血とのつながりに醸かもされる美うるわしい愛情を、人の上に立たれる御方おんかたからして認めぬ
ようなご行為をなされたら、世上人心に、どういう影響を及ぼすか、恐ろしいことだ」

「いや、鎌倉殿とて、まるで血の気のないわけでもございませぬ。人しれず、そこは悩

んでおられましょう。……が、そうした心の機微きびへつけ入って、ある事、ない事、努めてご兄弟が離反してゆくように、耳こすりする讒者ざんしゃもあるから薪まきに油です」

「讒者。……ムム、梶原景時の類たぐいか。とはいえ、あれほどご聡明な鎌倉殿が、小人輩ぼらの讒言ざんげんなどに動かされてとは考えられぬ」

「聡明なお方に似あわず、猜疑さいぎはおふかいと聞いています。偉おおきな人物にも、小さい愚は誰も持つているものだ」

「——とあればなおさら、死を賭としても、わし達は、鎌倉殿へ直接お訴えしてみるのが、残されたただ一つの道ではあるまいか」

「それも、讒者に悪用されるだけでしよう。鎌倉殿のお憎しみは、九郎様へ深まるとも、薄らぐはずはありません。——それ程、あなた方が、ご主君を思うならば」

と、吉次の眼はそこで急に燃えつきそうに二人へ迫って来た。彼は、からだまでのり出して、声をひそめ、思い入れをしてから云った。

「どうです、いつその事、源九郎様を立てて鎌倉殿の手から離れるように謀はかっては。——次の時代に鎌倉殿をいただくがよいか、義経様をいただく方が世の為によいか。……そこですよ、手前はひとり考えているので」

「では、鎌倉殿へ弓をひけとそちは、云うのか」

「ま。そういうわけです」

平然と、吉次は答えた。

五

吉次の謀叛むほんぎ気にも組せない。

そうかといつて、鎌倉殿へ直訴のことも、効果は疑われる。

佐藤兄弟は、迷った。

奥州へ帰る気は元よりない。吉次のいる寺に、ふたりもつい幾月かをなす術すべもなく暮していた。

——が、毎日巷ちまたへ出て、主君義経の身边や源氏の動静は心にかけて聞きさぐっていた。政治的に、軍事的に、義経をめぐつて、事情はよほど変ってきた。

秋、十月の半なかばごろ。

六条室町の義経のやしきから美々しい八葉の車がひき出された。

衛府三名、供侍二十騎が、それに扈從して行つた。

「判官どのが出られる」

「大夫判官様が、初のご参内じゃそうな」

辻々に人が駈け出て、車のうちなる人を見ようとした。

八葉の車のうちには、平和な装いをした義経が駕つていた。その折、目撃した人々のうわさとして書かれた物にも、

容貌優雅にして、進退のやさしき、義仲などの類にはあらず。

ことのほか京馴れてこそ見えたれ。

と、あるほど、それは端麗でもの静かな人がらと群衆の眼にも映つた。

鎌倉殿との、複雑ないきさつなどは、群衆のあたまにはない。ただ当然なこととして見送つていたのである。

「だが、これは、一体、どうした事？」

と、佐藤継信と忠信は、ひそかに六条のやしきに残つた旧友に訊ねてみると、鎌倉と義経とのあいだは、以前にもまして良くないが、特に、後白河法皇の優渥な思召しから、院旨を以て、叙位官職を賜つたものと聞かされた。

いずれその前から、法皇のお耳にも入っていたにちがいない。義経の人間、義経の功勞に対して、先に、檢非違使けびいしへ補任との恩命があつたが、義経は、

(兄のゆるしを待たずには)

と、固辞して、ただ恩命のありがたさに涙していた。

が、たつての院旨を、そんな私の理由で、再三拝辞することの畏れおそ多さに、遂に、任官の由を、鎌倉へ報じると、頼朝は、

(恐らく、義経が内々の所望によつて、宣下せんげせられたのであろう。義経が、この頼朝を疎略にいたす事、このたびばかりではない)

と、ひどく不興であつたという。

そしてその返辞には、

(頼朝の代官として、平家追討使たるの役目は、今日以後、その任を解く)

と、いう沙汰だつた。

義経は、兄の心を知るに苦しんだ。そしてその苦しみを、兄の怒りを解くほうへ向けようとう心をくだいた。

そういう心境のままに、この十月、かさねて今度の恩命に接したのであつた。——従五

位下、大夫判官とよばれることとなり、同時に、院内ならびに参殿をもさし許されたのである。

八葉の車は今日、お礼のため、曠はれの殿上へと、その人を駕のせて行つたのである。

「そういえば、あのお顔に、お欣しそうな影もなかった。秋日の下もとに、ぽつねんと一本咲いている白菊のように淋しげであった。——独り、あのお胸に、どんなお気もちを抱いて」

継信と忠信は、そう語りあつて、断腸の思いがした。

法皇の恩寵と、鎌倉との板ばさみになつて、この吉よい日を、歡ぶにも歡べない立場が、宇治川や一ノ谷の働きに対する骨肉の人の答えとは。

「——忠信」

「はい」

「わしたち兄弟ふたりは、そうあるまいぞ。たとえ行末、どんな事があるうとも」

「あたりまえです！」

吉次のいる寺へと、その日も帰つてゆく途々みちみち、兄弟は改まって、兄弟のあいだで交かわした例のないことを云いあつた。

同根相剋どうこんそうこく

一

——転じて、屋島を中心に、瀬戸内海を抱く国々の動静を見るに、一ノ谷敗退後の平家は、まったく勢いをもり返して、その陣容からでは、

「いったい戦は、源氏が勝ったのか、平家が勝っているのか」

と、疑われるような形を呈ていしていた。

範のりより頼は、いちど鎌倉へ帰っていたが、頼朝の命で八月鎌倉を立ち、

「義経なくとも」

と、中国から九州へまで、源軍の大將として下ったが、むしろ彼を、手に唾つばして待っていた平家方の謀將知盛とももりのために翻ほんろう弄されて、その年の末頃には、

「船がありません。兵糧ひょうろうもつづきかねます。兵力も不足で——」

と、鎌倉へあてて、頻々ひんぴんと、窮状ばかり訴えてくるという始末。

義経にはきびしい頼朝も、範頼には甘すぎるほど寛大だった。自身で仮名消息こまごま認めて、誡めたり、励ましたり、泣く子をあやすように督戦し、そのための評議も度々ひらいて、東国の船をあつめ、兵糧をつみ込ませ、範頼の助けに送ろうと用意していた。

正月となる。文治元年。

周防にいた範頼は、平家の圧力に居たたまれず、赤間ヶ関へ移動した。

ここを基地として、平家を攻めるつもりだったが、ここでも兵船が手に入らない。また、糧食もつづかない。

「何たる拙！」

部下さえ感じ出した。範頼の作戦は根本から過っていた。というよりも無方針に近い。

屋島を本拠に、平家は、瀬戸内海の制海権を占めている。それに対して、いたずらに沿岸各地をさまよい、敵の誘導戦術にのって、九州まで南下してしまい、気がついた時は、京都との連絡を、うしろの中国路で敵に見事遮断されていたのである。

「無能」

という衆評が、誰いうとなく源軍のあいだに漲った。

「故郷がこいしい」

大びらに云う者がある。和田義盛すら、鎌倉へ帰ろうとした。兵の脱軍が続出する。辛からくも、そんな状態の折、豊後ぶんごへわたる八十余艘の兵船と、一時しのぎの糧米が手に入った。――だが、乗りきれない者のうちには、身に着けている甲かちちゆう冑ゆうを売払って、小舟を買入れ、それへ部下の兵と共に乗って、後を追った将さえあった。

鎌倉でもさすがに見ていられなくなった。頼朝は急使を向けて、

「九州攻めはよさぬか、敵の本拠は九州ではない。四国を討て」

と命じたが、間にあいそうもない。遠隔えんかくの征討軍はすでに全滅のほかはない運命にあった。

京都にある義経に対して、

「急遽、出動せよ」

と、兄頼朝の書状がとどいたのはこの際であった。

義経は、それを見て、

(身勝手な兄)

と思う違いとまもなかった。いきなり欣うれしさが先にこみあげて来たのである。

「これで、兄の怒りも解けた。この天下大事とぎの秋ときに、この身も、死に場所を得たというも

の

眞実、彼の考えはとたんに死ぬ事であった。死を誓わずしての今度の出陣などは、彼には、思いもよらなかつた。

その日、勢揃いして、院の御所を拝し、いよいよ戦地へ出発という際、彼は、国々の武者どもへ向つてこういい渡した。

「義経、このたび罷り下るうえは、断じて、平家を掃滅しつくさねば、生きて還らぬ所存である。万一にも戦場にて、うしろ足を踏み、命惜しなど思う懸念のある者は、遠慮はない。この場から帰れ。打連れてはかえつて源氏の名折れ。——また、かたじけなくも、われらに降しおかれた勅宣ちよくせんに対して畏れ多い。一步退くは、一步、勅宣にそむき奉ることである」

二

隣の部屋の物音に、吉次は寢どこの内で眼をさましていた。

朝、眼をさますと、

「おれの持船も、ことし中には百艘になろう。国もとで抗ほらせている鉾かなやま山も、来年からは黄金を生むだろう。夜が明けて、鳥が啼けば、金が殖ふえる——」

と、全財産を計ってみたり、貨幣の運転を考えてみたりするのが、彼の習性であり、楽しみであり、またその日の生活の始まりだった。

——が、その朝は、隣の部屋のひそひそ声や、微かな音が、妙に気になって、侍というものは、底の知れないばかな者だ」

と、冷淡にはしていても、自分の夢だけに楽しんででもいられなかった。

隣には、寺に乞うて去年から佐藤兄弟が住まっていた。その継信、忠信のふたりは、昨夜、

「もう生きてお目にかかる折もあるまい」

と、改まって、吉次に別れをのべ、酒を酌くみ交かわして寝たのであった。

今日、義経の出軍に、何と主君から叱られようが、追いついて戦いくさに参加するのだというのである。

「……それを、あんなに？」

吉次には、不可解であった。侍の心理にあきれ果てた。

「死に行くのが、あんなに欣しいものか」

ゆうべはまだ疑っていたが、今朝は暗いうちに起き、いそいそと、時折、笑いさぎめいたりして、この半年、憂鬱ゆううつそのものだった兄弟が、まるで今日大空へ誕生でもするよう嬉々ききとしている気配なのである。

余り楽しげなので、吉次は小癩こしやくにさわつて、自分も寢床をあげ、妻戸をひらいて、縁へ立出で、

「いよいよお立ちですかな」

と、そこをさし覗いた。

若い者たちの血気の愚を、もう匙さじを投げて観ているといったような、彼の容子だった。

「おう吉次か、今、声をかけようかと思つていたところ」

兄弟はすでに鎧よろいを着こみ、太刀を横たえた、清々すがすがしげな顔をならべていた。

すぐ起つて、

「さらば。そちも健固けんこに」

と、方丈ほうじょうへも挨拶をし、駈け出すように、山門から出て行った。

陽が高くなる。

吉次はいつもの如く朝飯の膳についた。まずそうに箸をおく。少しぼんやりした顔つきである。

「……………」

小半日、陽なたの縁で、膝をくんでいた。

北側の藪のむこうに、乱立している卒塔婆や墓石が見える。冷たい陽かげの静寂が、妙に彼の心をひく。陽なたの彼は生物だし、彼方の墓石は永遠の死の群像だからであろう。

初めのうちは、死者と自分は、区別がついていたが、いつのまにか分らなくなってきた。

「…………どつちが生きているんだろう？ いつまでも」

そんな気がしだして来た。

なぜなら、白骨となっても、生きているものが無数にある。形はないが、文化の流れに、国土のうえに、その仕事や精神を、不朽ふきゆうにのこしている人々の生命力は、過去とはいえ、死滅しないものである。

「…………おれは？」

どう生きてても十年か二十年にすぎない自己の肉体をながめまわした時、吉次の心は、生きる力とも信じ、歎びともしていた国元の莫大な財産が、そこらの日陰に積もっている落

葉の山に思われて来た。

「……変だぞ、今日は」

気を持直すつもりで、起つて、本堂のほうへ歩いて行つた。すると、わずかな野辺の送り人にまもられて、一つの柩ひつぎが、お堂へ担にないあげられて来た。

「——喃のう。潮音のうさんも、ひと頃は、平家の公達衆きんだちにもえろうさわ噪がれたほど、美しい白拍子はかなじゃつたが、儂はかないものよの」

会葬者の一群は、寺の縁にかたまつて、鐘の鳴りだすまでの間を、のどかに語りあつていた。

三

その日、四月十二日、頼朝夫妻は、亡父義朝の新しんびよう廟——南御堂の柱はしらだて立たての式に臨場していた。

式事もすむ頃——

そこへ、義経からの、壇ノ浦大捷たいしやうの報もたらを齎もちして、急使きゅうしが着いた。

「折も折、この快報！」

居あわせた群臣は、万歳のどよめきを揚げた。

藤判官邦通は、注進の状を、高らかに読みあげた。——海戦の状況、相互の死傷、

生擒いけどつた平家方の諸大将の名までつぶさであった。

「……………」

終ると、頼朝は額ぬかずいて、鶴ヶ岡八幡のほうを伏拝ふしおがんだ。

政子の睫毛まつげに涙が光った。頼朝の頬にも一すじ白いものがながれた。

「遂に平家も、亡び去った」

扈從こしゅうの臣も、万感を抱いて、帰館のあとにしたがった。

老鶯おいうぐいすが啼きぬいている。花は落ちて泥土でいどに白い。鎌倉の春も更けたかと想わせる——

日を経て。

頼朝は営中の一室に、梶原景時を近づけていた。

「……義経が行状、その後もやはりそうした体ていか、鎌倉の威力あつての奇功と思わず、すべてを、自力と思ひあがつて、我儘を振舞いおるよな」

頼朝は怒っていた。

聰明なる覇者はしやも、佞奸ねいかんの眼から見れば甘い。覇者なるが故の弱点がある。

「幼少生死にさまよい、二十年を配所にひそみ、臥薪嘗胆がしんじやうたん、ようやくここに至った覇業を、彼一人のため、私情に紊みだし、禍根を長くのこしてなろうや。主体を保たん為には、手脚も断たつ」

だが、こうした言を、彼もまったく苦悶くもんなしには吐けなかつた。自身の矛盾に気づかぬほどその理性も偏頗へんぱではない。

世の衆望は今、にわかには、義経を称たえているが、まだ二十七歳にしてあの才略ある異母弟うとの偉さを、誰より早くまたふかく見抜いていたのは頼朝であつた。

——が、感嘆は、恐怖にまで変つてきた。たえず自分との比較の対象にした。小心など、反省もしてみるが、無視するには、義経の天質が偉おほきすぎる。

わけて法皇の寵ちやうぐう遇はいよいよ厚く、義経をご信用と聞く。頼朝の心は穏やかであり得ない。

ところへ、讒者ざんしやの画策も手伝うように、両者のあいだには種々いろいろな事件が頻発ひんぱつした。宿命といおうか不測に起つてくる。

でも、義経は、なお兄を信じて疑わず、

「やがて、よいご消息も」

と、便りを待ちぬいていたのである。

それにこたえた頼朝の沙汰は、同月二十九日に発せられた彼への「勘当」であつた。

「おまちがいだ！ 何者かの讒言だ」

義経は、火となつた。情に悶え泣いた。直接、兄に会つて云い解けばと——関東へ急ぎ下つた。

が、頼朝は、彼の鎌倉に入るを許さない。

義経は酒匂さかわで止められた。

世にいう「腰越状」——あの言々句々、心血にそめた一書を、兄の吏大江りおおえのひろもと広元に

に託して、悄然、京へ引つ返した。

その後——

吉野の雪霏ゆきひ々々、奥州の秋啾あきしゅう々々、巷ちまたにも、義経詮議の声の喧かしましく聞えてきた頃、誰や

ら、義朝の廟、南御堂の壁へ、こんな落書をしたものがある。

七歩しちほ隔せんまんり千里とへだつ

と、題して、

豆ヲ煮ルニ豆ノ箕ヲ燃ク
マメガラタ

豆ハ釜中ニアツテ泣ク
フチユウ

本是レ同根ヨリ生ズ
モト

相煮ル何ゾ太ダ急ナル
ハナハ

有名な魏ぎの曹そう植しよくの「七歩詩」である。山僧の業わざでもあろうか、書体にも写経風があ

った。が、壁の墨痕すみあともいつか春秋の雨や風にうすれてゆく。

幕府鎌倉。

それも遂に、長くなかった。この時代、ひとり頼朝のみではないが、自己の手脚の主体を知りながら、同根億おくしやう生の主体たる国土には深く思い至らなかつた憾うらみみがある。

作者はいつも、覇者頼朝に、その一点を惜しみ、人間頼朝に、「豆の詩」を思いたうて傷む。

青空文庫情報

底本：「源頼朝（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年2月11日第1刷発行

2012（平成24）年3月5日第20刷発行

「源頼朝（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年2月11日第1刷発行

2012（平成24）年3月5日第19刷発行

初出：「朝日新聞」

1940（昭和15）年1月～10月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2016年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源頼朝

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>